熊本県文化財調査報告　第88集

下山西遺跡（しもやまにし）

1987. 3

熊本県教育委員会

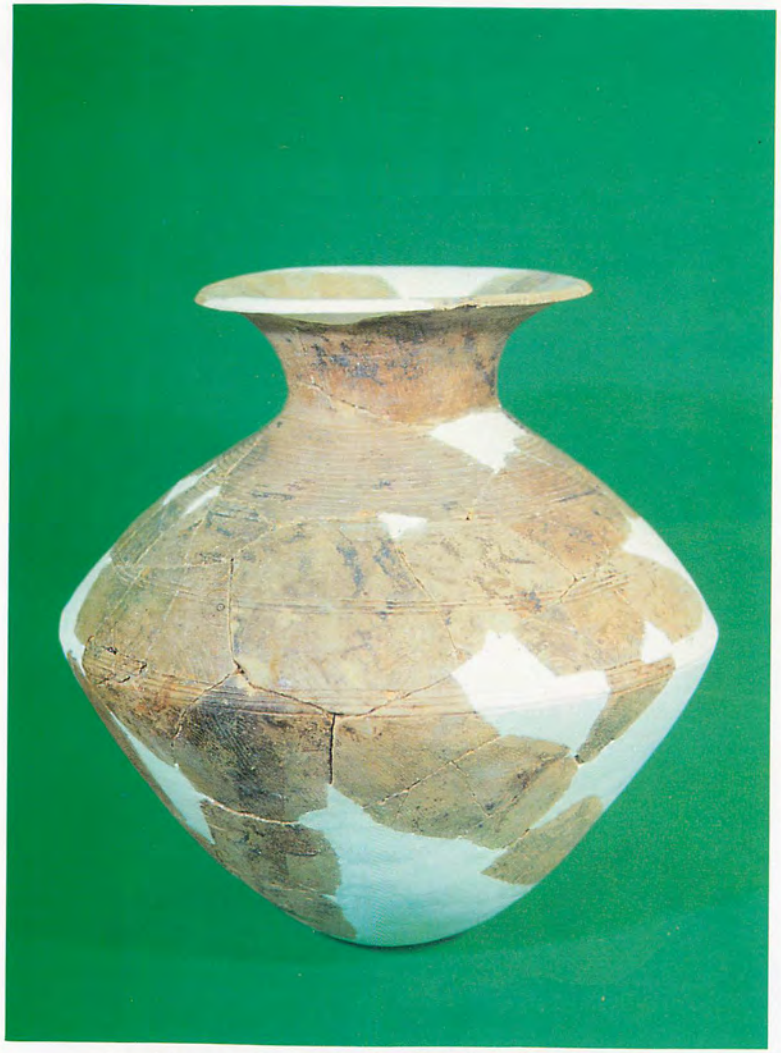
1．下山西遺跡遠景
南側から遺跡及び外輪山を望む。

2．Ⅱ—A区
石棺配置状態

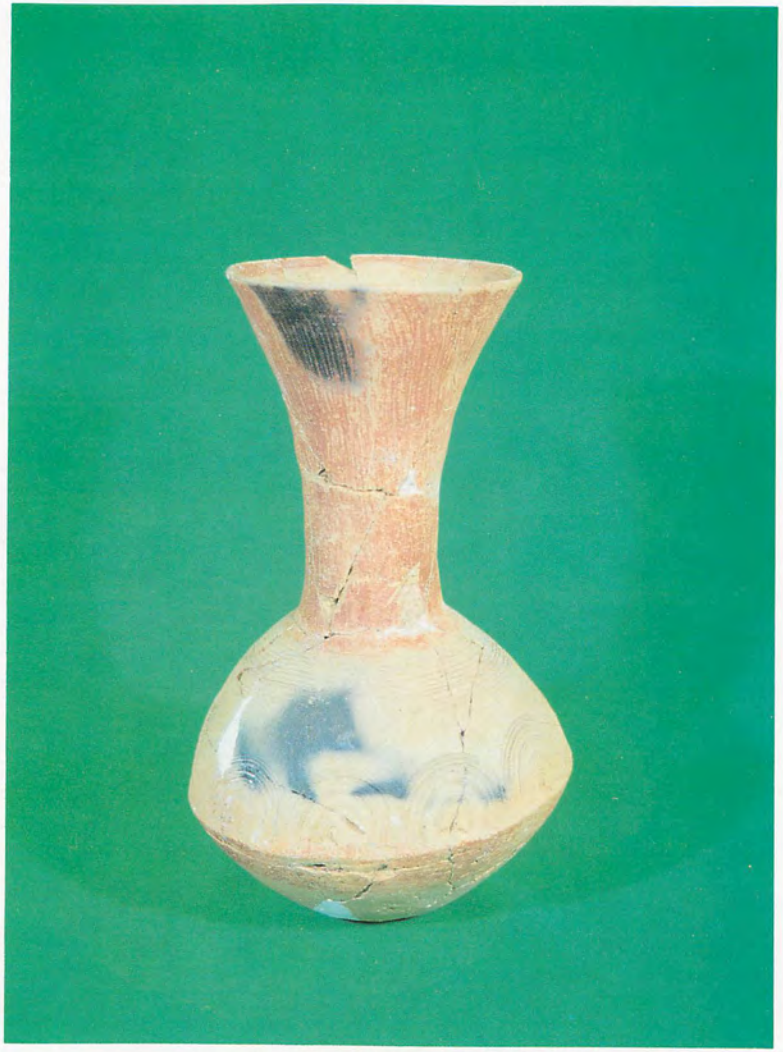
3．3号石棺
内部状況

4．Ⅳ・Ⅴ－C～E区出土遺物

5．Ⅱ－A区石棺内出土鉄剣



7．Ⅲ—C・D区　1号住居址内出土免田式土器(79)

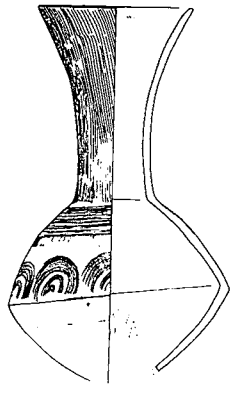


6．Ⅱ—A区出土免田式土器 (25)

熊本県文化財調査報告　第88号

下山西遺跡

― 熊本県阿蘇郡阿蘇町乙姫字下山西所在の遺跡 ―



1987．3

熊本県教育委員会

序　　文

日本有数のカルデラとして知られる阿蘇地方は，古くから文化財の宝庫として知られております。

中通古墳群，上御倉・下御倉古墳，阿蘇神社，民俗芸能の虎舞など，熊本の歴史を知るうえでかかせない文化財と言えます。

ここに報告する下山西遺跡は，阿蘇カルデラの中央部に位置し県営圃場整備事業に伴なって，昭和57，58年に発掘調査を実施したものです。

調査の結果，弥生時代の集落址であることがわかり，34軒の住居址及び4基の石棺が確認されました。なかでも出土したガラス製勾玉，小型仿製鏡をはじめ，とくに鉄器は実に163点にも及びました。まさに弥生時代の阿蘇谷を考えなおす調査であったと言えましょう。

この報告書が広く県民の皆様に利用され，郷土や文化財の理解，愛護に活用されることを期待いたします。

最後に調査を進めるにあたり，阿蘇町，県農政部をはじめ多くの方々から御指導御協力を賜りました。特に遺跡の保存運動に尽力していただいた地元の方々に対して，ここに厚く御礼申し上げます。

昭和62年3月31日

熊本県教育長　　伴　正善

例　　言

1．本書は熊本県阿蘇郡阿蘇町乙姫字下山西に所在する下山西遺跡の調査報告書である。

2．調査は県営圃場整備事業に伴う事前調査として，熊本県農政部の依頼により熊本県教育庁文化課が実施し，調査は昭和57年10月の１次調査，昭和58年５月～10月までの２次調査と２期にわけて実施した。

3．整理執筆作業は昭和58年～61年まで断続的ではあるが，３年費やした。

4．遺構の実測，製図者は挿図目次の各項目ごとに氏名を記した。また遺物の実測，製図も同様に記した。なお現地の写真撮影は高谷和生および島津義昭が行ない,遺物の写真撮影は白石厳が行った。

5．本書の執筆者は本文目次の各項目ごとに担当者名を記した。

6．本書の編集は熊本県教育庁文化課で行い，高谷が担当した。

7．本書の校正は熊本県教育庁文化課で行い，瀬丸・飯銅の協力を得て，島津・藤崎・六田が担当した。

8．表紙題字は米村保齢氏の揮毫である。

凡　　例

1．現地での実測図は遺構配置関係図を50分の１で，石棺は10分の１，各住居址を20分の１で行なった。本書に掲載した石棺の実測図は20分の１，各住居址のそれは60分の１に統一した。

2．住居址の平面図中には，炉集辺のマット状炭化物の範囲を網目で表現した。なお炭化材については残存状態をそのまま表現し，一部顕著なものについては二色表現とした。

3．遺物の出土状況については平面図中に示し，遺物実測番号との照会が容易なように，実線にて指示した。また各遺物の出土層位については，番号取り上げのものについては断面図層位を，それでないものについては一括層位を示した。

4．出土した遺物中で本文に掲載したものについては調査員協議のうえで選択した。出土遺物は全通し番号とし，縮尺は土器を３分の１に統一し，鉄器２分の１，石器２分の１，３分の１，６分の１とし，特殊遺物については原寸とした。土器のなかで彩色がなされているものについては網目で表現した。

5．出土遺物の解説は本文中に記したが，法量，及び出土層位等については，出土計測表中に一括して掲載した。

目　次

序　章

第１節　調査に至る経過 ……（隈　昭志）…… 1

第２節　調査関係者・調査組織……（高谷和生）…… 2

第３節　本報告書作成に至る経過……（高谷）…… 3

第４節　調査日誌抄……（平岡勝昭・高谷）…… 4

第１章　位置と歴史的環境

第１節　遺跡の位置……（高谷）…… 9

第２節　遺跡の立地及び周辺の地形……（高谷）…… 9

第３節　周辺の遺跡……（島津義昭）……10

第４節　遺跡周辺の地質及び遺跡の層位……（高谷）……17

第２章　調　査　結　果

第１節　１次調査

１．試掘トレンチについて……（平岡・高谷）……18

２．石棺の調査について……（平岡・高谷）……25

３．Ⅱ・Ⅲ－Ｂ区内壺埋納土壙 ……（高谷）……26

第２節　２次調査

１．調査の方法……（高谷）……29

２．Ⅱ－Ａ区の調査……（島津）……29

第３節　Ⅲ－Ｃ・Ｄ区の調査

１．Ⅲ－Ｃ・Ｄ区の調査概要について……（高谷）……44

(1)　１号住居址……45

(2)　１号土壙……56

(3)　１号溝……56

(4)　１号住居址西側地点……57

第４節　Ⅳ・Ⅴ－Ｃ～Ｅ区の調査

１．Ⅳ・Ⅴ－Ｃ～Ｅ区の調査概要について……（高谷）……57

2．弥生時代について……(高谷)… 60
(1) 2号住居址…… 61
(2) 3号住居址…… 63
(3) 4号住居址…… 65
(4) 5号住居址…… 70
(5) 6号住居址…… 77
(6) 7号住居址…… 87
(7) 8号住居址…… 93
(8) 9号住居址…… 99
(9) 10号住居址……101
(10) 11号住居址……104
(11) 12号住居址……110
(12) 13号住居址……111
(13) 14号住居址……112
(14) 15号住居址……121
(15) 16号住居址……127
(16) 17号住居址……131
(17) 18号住居址……139
(18) 19号住居址……142
(19) 21号住居址……142
(20) 22号住居址……146
(21) 23号住居址……149
(22) 24号住居址……154
(23) 25号住居址……165
(24) 26号住居址……170
(25) 27号住居址……180
(26) 28号住居址……186
(27) 29号住居址……191
(28) 30号住居址……198
(29) 31号住居址……202
(30) 32号住居址……203
(31) 33号住居址……207
(32) 34号住居址……208

(33) 2号土壙……214
(34) 3号土壙……214
(35) 4号土壙……215
(36) 3号溝……215
(37) 4号溝……215
(38) 5号・6号・7号溝……216
(39) ②—ⓓ区内包含層……222
(40) ②—ⓓ・ⓔ区内包含層……228
(41) ③—ⓓ区内柱穴……229
3．古墳時代について……(高谷)…231
(1) 20号住居址……231
(2) 柵列について……234
(3) 柱穴群について……235
4．試掘トレンチについて……(高谷)…235
5．Ⅳ・Ⅴ—C～E区周辺部出土資料……(高谷)…236
第5節 Ⅵ—F区の調査……(高谷)…240
第6節 Ⅳ・Ⅴ—C～E区内出土石器類追加資料……(高谷)…240

第3章 考　　察

第1節 下山西遺跡出土の土器の編年(案)について……(島津・高谷)…251
第2節 下山西遺跡出土の鉄器について……(高谷)…270
第3節 下山西遺跡出土の石器について……(高谷)…281
第4節 下山西遺跡出土の青銅器及びガラス製品について……(高谷)…290
第5節 住居址の構造とその変遷について……(高谷)…297
第6節 遺跡の年代……(島津・高谷)…311

第4章 付　　論

1．下山西遺跡出土のガラス製勾玉の化学成分と鉛同位体比……(山崎一雄)…314
2．下山西遺跡発掘出土石棺内のベンガラ(赤色顔料)分析報告……(堀　一夫)…318

3．下山西遺跡出土の弥生時代鉄器と明神山鉱石の金属学的調査……(大澤正己)… 326
4．下山西遺跡25号住居址出土の木炭について……(大迫靖雄)… 345
5．阿蘇鉱山出土の木器……(乙益重隆)… 355

挿 図 目 次

第１図　下山西遺跡周辺地形図（高谷作成，六田整図）…… 11・12
第２図　阿蘇谷縄文遺跡分布図（島津作成）…… 14
第３図　阿蘇谷弥生遺跡分布図（島津作成）…… 15
第４図　阿蘇谷石棺・古墳分布図（島津作成）…… 16
第５図　下山西遺跡層位概略図（高谷作成、六田整図）…… 17
第６図　Ⅲ・Ⅴ－Ｃ～Ｅ区内調査グリッド配置及び試掘トレンチ設定図
（安達・高谷作成，六田整図）…… 19・20
第７図　１次調査出土土器実測図（高谷実測，永目整図）…… 22
第８図　Ⅳ・Ⅴ－Ｃ～Ｅ区試掘トレンチ内出土土器実測図（高谷実測，永目整図）…… 23
第９図　試掘トレンチ内出土石器実測図（最上実測、六田整図）…… 24
第10図　石棺地区配置関係図（１次調査時）（森山測量，六田整図）…… 25
第11図　Ⅱ・Ⅲ－Ｂ区内壺埋納土壙実測図（森山実測，六田整図）…… 26
第12図　Ⅱ・Ⅲ－Ｂ区内出土土器実測図（最上実測，六田整図）…… 27
第13図　Ⅱ－Ａ区石棺配置図（森山・島津測量、六田整図）…… 30
第14図　トレンチ配置図（島津測量，六田整図）…… 31
第15図　１号石棺実測図（森山実測、島津整図）…… 32
第16図　２・３号石棺実測図（島津実測，六田整図）…… 32
第17図　２・３号石棺床石・土壙実測図（島津実測，六田整図）…… 33
第18図　１号石棺実測図（森山実測，六田整図）…… 34
第19図　２・３号石棺断面図（島津実測，六田整図）…… 34
第20図　２号石棺遺物出土状態実測図（島津実測，六田整図）…… 35
第21図　３号石棺遺物出土状態実測図（島津実測，六田整図）…… 35
第22図　３号石棺蓋石実測図（島津実測，六田整図）…… 35
第23図　３号石棺実測図（島津実測，六田整図）…… 36
第24図　４号石棺床石・土壙実測図（島津実測，六田整図）…… 37

第25図　4号石棺実測図（島津実測，六田整図）…… 38
第26図　4号石棺布痕付着部実測図（島津実測，六田整図）…… 39
第27図　4号石棺遺物出土状態実測図（島津実測，六田整図）…… 39
第28図　石棺内出土鉄剣(左2号・中3号・右4号出土)実測図(高谷実測，六田整図)…… 40
第29図　3号石棺北側出土土器実測図(その1)(最上実測，整図)…… 41
第30図　3号石棺北側出土土器実測図(その2)(高谷実測，永目整図)…… 42
第31図　1号石棺ガラス玉実測図（高谷実測，六田整図）…… 42
第32図　Ⅲ－C・D区内遺構配置図（高谷測量，六田整図）…… 44
第33図　1号住居址実測図及び遺物出土状況図（安達実測，六田整図）…… 47・48
第34図　1号住居址内出土土器実測図（その1）（高谷実測，永目整図）…… 49
第35図　1号住居址内出土土器実測図（その2）（高谷実測，永目整図）…… 50
第36図　1号住居址内出土土器実測図（その3）（高谷実測，永目整図）…… 51
第37図　1号住居址内出土土器実測図（その4）（高谷実測，永目整図）…… 52
第38図　1号住居址内出土免田式土器実測図（平岡・高谷実測，高谷整図）…… 54
第39図　1号住居址内出土石器実測図（最上実測，六田整図）…… 55
第40図　1号住居址西側地区内出土石器実測図（高谷実測，瀬丸整図）…… 56
第41図　Ⅳ・Ⅴ－C～E区弥生時代遺構配置図（島津・安達測量，六田整図）…… 58
第42図　Ⅲ～Ⅴ－C～E区調査区内エレベーション図（島津・安達作成，六田整図）…… 59
第43図　Ⅳ・Ⅴ－C～E区内壁面断面図（島津・安達作成，松原整図）…… 60
第44図　2号住居址実測図（実達実測，松原整図）…… 61
第45図　2号住居址内出土土器実測図（高谷実測，永目整図）…… 62
第46図　2号住居址内出土石器実測図（最上実測，六田整図）…… 63
第47図　3号・31号住居址実測図（島津・安達実測，松原整図）…… 64
第48図　3号住居址内出土土器実測図（高谷実測，永目整図）…… 65
第49図　4号住居址実測図（島津・安達実測，松原整図）…… 67・68
第50図　4号住居址内出土土器実測図（高谷・神宮・最上実測，永目整図）…… 69
第51図　4号住居址内出土鉄器・石器実測図（最上・高谷実測，六田整図）…… 71
第52図　5号住居址実測図（島津・安達実測，松原整図）…… 72
第53図　5号住居址内出土土器実測図（その1）
(神宮・最上・坂口・高谷実測，永目整図)…… 74
第54図　5号住居址内出土土器実測図（その2）
(神宮・最上・坂口・高谷実測，永目整図)…… 75

第55図　5号住居址内出土土器実測図（その３）
（神宮・最上・坂口・高谷実測，永目整図）…… 76
第56図　5号住居址内出土鉄器・石器実測図（最上・高谷実測，六田整図）…… 77
第57図　5号住居址内出土石器実測図（高谷実測，瀬丸整図）…… 78
第58図　6号住居址実測図（島津・安達実測，松原整図）…… 79
第59図　6号住居址内出土土器実測図（その１）（高谷実測，永目整図）…… 80
第60図　6号住居址内出土土器実測図（その２）（高谷実測，永目整図）…… 81
第61図　6号住居址内出土鉄器・石器実測図（高谷・最上実測，六田整図）…… 82
第62図　7号住居址実測図（島津・安達実測，松原整図）…… 85・86
第63図　7号住居址内出土土器実測図（その１）（最上・高谷実測，永目整図）…… 88
第64図　7号住居址内出土土器実測図（その２）（最上・高谷実測，永目整図）…… 89
第65図　7号住居址内出土鉄器・石器実測図（廣田・最上・高谷実測，六田整図）…… 89
第66図　8号住居址実測図（島津・安達実測，松原整図）…… 91・92
第67図　8号住居址内出土土器実測図（最上実測，永目整図）…… 94
第68図　8号住居址内出土鉄器・石器実測図(その１)(最上・廣田・高谷実測，六田整図) 95
第69図　8号住居址内出土石器実測図（その２)(廣田実測，六田整図）…… 96
第70図　8号住居址内出土石器実測図（その３)(高谷実測，瀬丸整図）…… 96
第71図　9号住居址実測図（島津・安達実測，松原整図）…… 97
第72図　9号住居址内出土土器実測図（高谷・最上実測，永目整図）…… 98
第73図　9号住居址内出土鉄器・石器実測図（最上・高谷実測，六田整図）…… 99
第74図　10号住居址実測図（安達実測，松原整図）……100
第75図　10号住居址内出土石器実測図（最上実測，六田整図）……100
第76図　11号住居址実測図（島津・安達実測，松原整図）……102
第77図　11号住居址内出土土器実測図（その１）（最上実測，永目整図）……103
第78図　11号住居址内出土土器実測図（その２）（最上実測，永目整図）……104
第79図　11号住居址内出土鉄器・石器実測図（廣田・最上・高谷実測，六田整図）……106
第80図　11号住居址内出土石器実測図（高谷実測，瀬丸整図）……107
第81図　12号住居址内出土土器実測図（（最上実測，永目整図）……109
第82図　12号住居址内出土石器実測図（最上実測，六田整図）……109
第83図　13号住居址実測図（島津・安達実測，松原整図）……110
第84図　13号住居址内出土土器実測図（高谷実測，永目整図）……111
第85図　13号住居址内出土石器実測図（最上・高谷実測，六田整図）……111
第86図　14号・15号住居址実測図（島津・安達実測，松原整図）……115・116

第87図　14号住居址内出土土器実測図（最上・高谷実測，永目整図）……117
第88図　14号・15号住居址内出土土器実測図（最上・高谷実測，永目整図）……118
第89図　14号住居址内出土鉄器・石器実測図（最上・高谷実測，六田整図）……120
第90図　14号住居址内出土勾玉実測図（高谷実測，六田整図）……121
第91図　15号住居址内出土鉄器・石器実測図（最上・高谷実測，六田整図）……122
第92図　15号住居址内出土小玉実測図（高谷実測，六田整図）……123
第93図　16号住居址実測図（島津・安達実測，松原整図）……125・126
第94図　16号住居址内出土土器実測図（最上実測，永目整図）……127
第95図　16号住居址内出土石器実測図（最上・高谷実測，六田・瀬丸整図）……128
第96図　17号住居址実測図（高谷実測，松原整図）……129・130
第97図　17号住居址内出土土器実測図（その１）(高谷実測，永目整図）……132
第98図　17号住居址内出土土器実測図（その２）(高谷実測，永目整図）……133
第99図　17号住居址内出土鉄器･石器実測図(その１)(最上･高谷実測,六田整図）……134
第100図 17号住居址内出土鉄器･石器実測図(その２)(最上･高谷実測,六田整図）……135
第101図 18号住居址実測図（高谷実測，松原整図）……137
第102図 18号住居址内出土土器実測図（最上実測，永目整図）……138
第103図 18号住居址内出土石器実測図（最上実測，六田整図）……139
第104図 19号住居址実測図（高谷実測，松原整図）……141
第105図 21号住居址実測図（高谷実測，松原整図）……142
第106図 21号住居址内出土土器実測図（最上・高谷実測，永目整図）……143
第107図 21号住居址内出土石器実測図（最上・高谷実測，六田・瀬丸整図）……144
第108図 21号住居址内出土管玉実測図（高谷実測，六田整図）……145
第109図 22号住居址・３号土壙実測図（安達実測，松原整図）……146
第110図 23号住居址実測図（安達実測，松原整図）……147・148
第111図 23号住居址内出土土器実測図（最上実測，永目整図）……150
第112図 23号住居址内出土鉄器・石器実測図（高谷・最上実測，六田整図）……152
第113図 23号住居址内出土石器実測図（高谷実測，瀬丸整図）……153
第114図 24号住居址実測図（高谷実測，松原整図）……155・156
第115図 24号住居址内出土土器実測図（その１）(高谷･最上･神宮実測,永目整図）……158
第116図 24号住居址内出土土器実測図(その２)(高谷･最上･神宮実測,永目整図）……159
第117図 24号住居址内出土鉄器･石器実測図(高谷･最上･廣田実測，六田整図）……160
第118図 24号住居址内出土石器実測図（廣田･高谷実測,六田･瀬丸整図）……161
第119図 25号住居址実測図(島津･安達･高谷実測,松原･六田整図）……163・164

第120図 25号住居址内出土土器実測図(その1)(高谷・最上実測,永目整図) …… 167
第121図 25号住居址内出土土器実測図(その2)(高谷・最上実測,永目整図) …… 168
第122図 25号住居址内出土鉄器・石器実測図(最上・高谷実測,六田整図) ……169
第123図 26号住居址実測図 (高谷実測, 松原整図) ……171・172
第124図 26号住居址内出土土器実測図(その1)(友口・最上・高谷実測,永目整図) ……174
第125図 26号住居址内出土土器実測図(その2)(友口・最上・高谷実測,永目整図) ……175
第126図 26号住居址内出土土器実測図(その3)(友口・最上・高谷実測,永目整図)……177
第127図 26号住居址内出土鉄器・石器実測図(最上・高谷実測,六田整図) ……178
第128図 27号住居址実測図 (高谷実測, 松原整図) ……179
第129図 27号住居址内出土土器実測図 (その1)(神宮・最上・高谷実測,永目整図) ……181
第130図 27号住居址内出土土器実測図 (そ、つ2)(神宮・最上・高谷実測,永目整図) ……182
第131図 27号住居址内出土石器実測図 (最上・高谷実測,六田・瀬丸整図) ……185
第132図 28号住居址実測図 (安達実測, 松原整図) …… 186
第133図 28号住居址内出土土器実測図 (友口実測, 永目整図) …… 188
第134図 28号住居址内出土鉄器・石器実測図(その1)(最上・高谷実測,六田整図) ……189
第135図 28号住居址内出土石器実測図(その2)(最上・高谷実測,六田整図)…… 190
第136図 29号・30号住居址実測図 (高谷実測, 松原整図) …… 193・194
第137図 29号住居址内出土土器実測図 (その1)(神宮実測, 永目整図) ……195
第138図 29号住居址内出土土器実測図(その2)(神宮実測,永目整図)…… 196
第139図 29号住居址内出土石器実測図 (最上実測,六田整図) …… 197
第140図 30号住居址内出土土器実測図 (友口・高谷実測,永目整図) …… 199
第141図 30号住居址内出土鉄器・石器実測図(最上・高谷実測, 六田整図) …… 200
第142図 30号住居址内出土勾玉実測図 (高谷実測, 六田整図) ……201
第143図 31号住居址内出土土器実測図 (高谷実測, 永目整図) ……202
第144図 31号住居址内出土鉄器実測図 (高谷実測, 六田整図) ……203
第145図 32号・12号住居址実測図 (高谷実測, 松原整図) ……204
第146図 32号住居址内出土土器実測図 (最上実測, 永目整図) ……205
第147図 32号住居址内出土青銅鏡実測図 (高谷実測, 六田整図) ……206
第148図 33号住居址実測図 (高谷実測, 松原整図) …… 207
第149図 34号住居址, 5号・6号・7号溝実測図 (高谷実測・松原整図) …… 209
第150図 34号住居址内出土土器実測図(その1)(坂口・高谷実測,永目整図) ……210
第151図 34号住居址内出土土器実測図(その2)(坂口・高谷実測,永目整図) ……211
第152図 34号住号址内出土鉄器・石器実測図(最上・高谷実測,六田整図) …… 213

第153図　2号土壙実測図（高谷実測，六田整図）……214
第154図　3号土壙内出土土器実測図（高谷実測，永目整図）……214
第155図　3号溝内出土土器実測図（高谷実測，永目整図）……216
第156図　4号溝・③—ⓓ区内柱穴実測図（高谷実測，六田整図）……217
第157図　4号・7号溝内出土鉄器・石器実測図(高谷・最上実測,六田・瀬丸整図)……218
第158図　5号・6号溝内出土土器実測図（最上実測，永目整図）……219
第159図　7号溝内出土土器実測図(その1)(最上実測，永目整図)……220
第160図　7号溝内出土土器実測図(その2)(最上実測，永目整図)……221
第161図　②—ⓓ区包含層内遺物出土状況実測図（安達・高谷実測,六田整図）……223
第162図　②—ⓓ区内一括出土土器実測図(その1)(坂口実測，永目整図)……224
第163図　②—ⓓ区内一括出土土器実測図(その2)(坂口実測，永目整図)……225
第164図　②—ⓓ区内一括出土鉄器・石器実測図（最上・高谷実測・六田整図）……226
第165図　②—ⓓ・ⓔ区内一括出土土器実測図（高谷実測，永目整図）……227
第166図　②—ⓓ・ⓔ区内出土銅鏃実測図（高谷実測，六田整図）……228
第167図　③— ⓓ区内出土石器実測図（最上実測，六田整図）……229
第168図　③— ⓓ区内出土土器実測図（高谷実測，永目整図）……229
第169図　20号住居址実測図（高谷実測，松原整図）……231
第170図　Ⅳ・Ⅴ－Ｃ～Ｅ区古墳時代遺構配置図（島津・安達測量,六田整図）……232
第171図　20号住居址内出土土器実測図（友口実測,永目整図）……233
第172図　20号住居址内出土石器実測図（廣田実測，六田整図）……234
第173図　Ⅳ・Ⅴ－Ｃ～Ｅ区内出土石器実測図　(その1)(高谷実測,瀬丸整図)……237
第174図　Ⅳ・Ⅴ－Ｃ～Ｅ区内出土石器実測図(その2)(最上実測,六田整図)……238
第175図　Ⅳ・Ⅴ－Ｃ～Ｅ区周辺部表採土器実測図（高谷実測，永目整図）……238
第176図　1号住居址内出土石器実測図（藤崎伸子・藤崎周太郎・木島実測,木島・六田整図）241
第177図　4号・5号・15号住居址内出土石器実測図(藤崎伸・木島・廣田実測,六田・中原・木島整図)……242
第178図　16号住居址内出土石器実測図（木島・藤崎伸実測,六田・木島整図）……243
第179図　17号住居址内出土石器実測図（その1)(藤崎伸・藤崎周・木島実測,木島・中原・六田整図)……244
第180図　17号住居址内出土石器実測図（その2）（廣田・藤崎周・藤崎伸実測,六田整図）…245
第181図　17号・18号住居址内出土石器実測図（藤崎伸実測,木島・六田整図）……246
第182図　23号・25号・26号住居址内出土石器実測図（藤崎伸・藤崎周・木島実測，六田・木島・中原整図)……247

第183図 27号・32号住居址内出土石器実測図（木島・藤崎伸実測，六田・木島整図）……248
第184図 4号・7号溝，34号住居址内出土石器実測図（木島・藤崎周・藤崎伸実測，木島・六田整図）……249
第185図 7号溝，③一ⓓ区内出土石器実測図（木島・藤崎伸実測，木島・六田整図）……250
第186図 下山西遺跡出土鉄鏃形態分類 ……271
第187図 24号・28号住居址内鉄器・石器出土状況図 ……272
第188図 下山西遺跡における石器・鉄器系統図 ……279・280
第189図 下山西遺跡出土磨製石鏃・石包丁形態分類 ……282
第190図 熊本県内出土銅鏃実測図 ……291
第191図 炉配置関係図 ……300
第192図 7号住居址ピット半截状況写真 ……301
第193図 住居址構造図 ……302
第194図 下山西遺跡住居址変遷図 ……309・310

表　目　次

第1表 下山西遺跡出土土器編年表 ……255・256
第2表 下山西遺跡出土土器法量表 ……257～269
第3表 下山西遺跡出土鉄製品総数一覧 ……270
第4表 下山西遺跡出土鉄製品一覧 ……275～277
第5表 下山西遺跡出土石製品総数一覧 ……281
第6表 磨製石鏃法量比較表 ……283
第7表 下山西遺跡出土石製品一覧 ……284～289
第8表 熊本県内出土青銅鏡一覧 ……295・296
第9表 住居址の規模と平面形態分類 ……297
第10表 住居址の主柱穴数と配置関係 ……298
第11表 住居址内柱穴数と床面積 ……299
第12表 下山西遺跡住居址概要一覧 ……305・306
第13表 下山西遺跡遺構編年表 ……309・310

図 版 目 次

図版１　１．カルデラを望む　２．Ⅳ・Ⅴ－Ｃ～Ｅ区検出状況　３．Ⅳ・Ⅴ－Ｃ～Ｅ区全景（発掘前）　４．発掘完了写真（空撮）北側から

図版２　１．石棺配置状況トレンチ配置　２．石棺配置状況トレンチ配置　３．免田式土器出土状況

図版３　１号石棺　１．土壙切り込み　２．石棺清掃　２号石棺　３．床面清掃、頭蓋骨出土状況　４．床面清掃、頭蓋骨出土状況　５．遺物出土状況

図版４　２号石棺　１．敷石出土状況　３号石棺　２．蓋石被覆状態　３．蓋石除去直後　４．蓋石粘土を除去した状態　５．内部状況　６．土壙切り込み

図版５　３号石棺　１．蓋石を除いた状態　２号石棺　２．敷石出土状況　３号石棺　３．蓋石粘土を除去した状況　２号石棺　４．遺物出土状況

図版６　３号石棺　１．土壙切り込み　２号石棺　２．土壙切り込み　３．２号・３号石棺　切り合い状態　２号石棺　４．内部出土状況

図版７　４号石棺　１．復元状況　２．敷石状況　３．蓋石を除去した状態　４．遺物出土状況

図版８　３号石棺　１．白色粘土目どめ状態　４号石棺　２．壁上面・布痕付着状況　３．ベンガラ塗布状況

図版９　１号住居址　１．出土状況　２．風景　３．検出状況

図版10　１号住居址　１．検出状況　２．仕上げ　３．免田式土器下層炭化物

図版11　１号住居址　１．遺物出土状況　２．最下層土器(石鏃)　３．遺物出土状況

図版12　１．２号・３号・４号・５号住居址　５号住居址　２．Ａ区出土状況　３．Ａ区出土状況　４．Ａ区出土状況

図版13　６号住居址　１．仕上げ　２．出土状況　３．炉付近土器出土状況

図版14　７号住居址　１．出土状況　２．仕上げ　３．出土状況

図版15　１．６号・９号住居址（完掘）　９号住居址　２．仕上げ　３．ＰＩＴ.1半截　４．ＰＩＴ.2半截

図版16　11号住居址　１．東西断面　２．仕上げ　13号住居址　３．出土状況

図版17　14号・15号・16号住居址　１．切り合い関係　２．重複地区仕上げ　14号住居址　３．ガラス製勾玉出土状況　４．勾玉出土状況(拡大)　５．勾玉出土状況

図版18　16号住居址　１．出土状況（第１回目）　２．仕上げ　３．炉半截

図版19　17号住居址　１．出土状況　２．出土状況　３．調査完了全体写真　４．遺物出土状況　５．遺物出土状況　６．ＰＩＴ.１（根石状況）

図版20　18号住居址　１．中央部出土状況　２．仕上げ　３．ＰＩＴ.１仕上げ

図版21　Ⅳ・Ⅴ－Ｃ～Ｅ区中央部　１．全景発掘前　20号住居址　２．出土状況　３．仕上げ　４．須恵器出土状況

図版22　21号住居址　１．出土状況　２．完掘　３．遺物出土状況　４．遺物拡大

図版23　23号住居址　１．出土状況　２．仕上げ　３．管玉出土状況　４．ＰＩＴ.１出土状況　５．ＰＩＴ.３半截

図版24　24号住居址　１．出土状況　２．仕上げ　３．ＰＩＴ. １半截　４．出土状況（鉄鏃）　５．出土状況(手鎌)　６．出土状況（甕）

図版25　24号住居址　１．炉仕上げ　２．ＰＩＴ.３検出状況　３．遺物出土状況　４．ＰＩＴ.４検出状況　５．ＰＩＴ.２検出状況

図版26　25号住居址　１．出土状況　２．仕上げ　３．ＰＩＴ. ２　４．ＰＩＴ. １　５．炭化材出土状況

図版27　26号住居址　１．検出状況　２．仕上げ　３．出土状況　４．PIT.2検出状況　５．出土状況　６．出土状況

図版28　27号住居址　１．出土状況　２．仕上げ　３．№59(壺)出土状況　４．ＰＩＴ. １柱根状況　５．ＰＩＴ.１検出状況

図版29　28号住居址　1．出土状況　2．仕上げ　3．ＰＩＴ.1 仕上げ　4．貯蔵穴　5．ＰＩＴ.2 仕上げ
図版30　30号．35号住居址　1．30号．35号住居址仕上げ　2．30号住居址仕上げ　3．35号住居址出土状況　4．30号住居址出土状況　5．30号住居址勾玉出土状況
図版31　32号住居址　1．出土状況　2．出土状況　3．鏡出土状況　4．鏡出土状況　5．鏡出土状況　6．鏡出土状況
図版32　1．33号住居址出土状況　2．35号住居址検出状況　3．25号住居址内出土根石
図版33　1．10号住居址検出状況　2．22号住居址検出状況　3．4号土壙検出状況
図版34　5号～7号溝　1．出土状況　2．出土状況　3．仕上げ
図版35　②—ⓓ・ⓔ区　1．出土状況　2．仕上げ　3．青銅製品出土状況　4．青銅製品出土状況(拡大)
図版36　Ⅳ・Ⅴ—Ｃ～Ｅ区　1．調査完了全体図(南側から)　2．調査完了全体図(南側から)　3．調査完了全体図（西側から)
図版37　Ⅱ—Ａ区トレンチ内出土遺物
図版38　出土免田式土器拡大
図版39　1号住居址内出土遺物(その1)
図版40　1号住居址内出土遺物(その2)
図版41　4号・5号住居址内出土遺物(その1)
図版42　4号・5号住居址内出土遺物(その2)
図版43　6号住居址内出土遺物
図版44　7号住居址内出土遺物
図版45　8号・9号住居址内出土遺物
図版46　11号住居址内出土遺物
図版47　14号住居址内出土遺物
図版48　17号住居址内出土遺物
図版49　18号住居址内出土遺物
図版50　21号住居址内出土遺物
図版51　23号住居址内出土遺物
図版52　24号住居址内出土遺物
図版53　25号住居址内出土遺物
図版54　26号住居址内出土遺物(その1)
図版55　26号住居址内出土遺物(その2)
図版56　26号住居址内出土遺物(その3)
図版57　27号住居址内出土遺物
図版58　28号住居址内出土遺物(その1)
図版59　28号住居址内出土遺物(その2)
図版60　29号・30号住居址内出土遺物
図版61　32号住居址内出土遺物
図版62　34号住居址内出土遺物
図版63　7号溝内出土遺物(その1)
図版64　7号溝内出土遺物(その2)
図版65　表採・試掘トレンチ②—ⓓ・ⓔ区．Ⅱ・Ⅲ—Ｂ区内出土遺物
図版66　20号住居址内出土遺物
図版67　出土鉄製品(その1)
図版68　出土鉄製品(その2)
図版69　出土鉄製品(その3)
図版70　出土鉄製品(その4)
図版71　出土鉄製品(その5)
図版72　出土石製品(その1)
図版73　出土石製品(その2)
図版74　出土石製品(その3)
図版75　出土石製品(その4)
図版76　出土石製品(その5)
図版77　出土石製品(その6)
図版78　出土石製品(その7)
図版79　出土石製品(その8)
図版80　出土鏡・玉類

口　絵　目　次

1　下山西遺跡遠景（南側から遺跡及び外輪山を望む）
2　Ⅱ—Ａ区石棺配置状態
3　3号石棺内部状況
4　Ⅵ・Ⅴ—Ｃ～Ｅ区出土遺物
5　Ⅱ—Ａ区石棺内出土鉄剣
6　Ⅱ—Ａ区出土免田式土器(25)
7　Ⅲ—Ｃ・Ｄ区　1号住居址内出土免田式土器(79)

序　　章

第1節　調査に至る経過

下山西遺跡の発掘調査に着手するまでには，次のような経過をたどっている。昭和57年９月16日熊本県阿蘇事務所耕地課から，阿蘇町湯浦の圃場整備現場（阿蘇谷地区圃場整備事業13工区）で，古墓が見つかったとの電話連絡があり，参事平岡勝昭，嘱託清田純一の両氏が現地踏査を行った。その結果，昭和57年９月14日，阿蘇町教育委員会立合いのもとに移転したものとわかった。その際に今後の整備計画地について踏査の依頼があり，下山西遺跡周辺（阿蘇谷地区圃場整備事業16工区）を踏査した。現地は，国鉄豊肥線市の川駅と内牧駅のほぼ中間地点から北方へ約800ｍのところで，水田内に溶岩塊によって形成された小丘陵が数ヵ所点在する一帯で，約4500㎡の広さにわたって弥生式土器等が散布していた。なお，この踏査には圃場整備事業現場事務所岡村氏，阿蘇町教育委員会渡辺照義氏が同行された。その後，９月27日遺物散布地について平岡・清田両氏により試掘調査を行った。その結果，約2600㎡の範囲に弥生時代後期の住居址が存在することが確認された。10月14日，平岡・清田両氏が現地踏査を行い，前回の試掘地に隣接する露岩上に箱式石棺（２基）を確認した。計画では，この露岩を爆破して圃場にする予定であった。翌10月15日阿蘇町教育委員会から関屋良雄氏ほか２名が文化課に来られ，早急に調査して欲しい旨の陳情があった。しかし，当年度の調査スケジュールはすでに飽和状態にあり，翌年度に繰越さざるをえなかった。その後，阿蘇町では文化課の苦境を理解していただき，地元説得に当たられ，町費による休耕補償を計上して翌年度発掘調査ということになった。

この間，阿蘇事務所耕地課では試掘地以外の遺物散布地に盛土をして保存する方針をとり，その採土地の選定中であった。ところがその候補地の一つが阿蘇町内牧の松ガ鼻遺跡に隣接することがわかった。57年11月24日，平岡氏が現地を踏査し，阿蘇町教育長佐藤成一氏，教育委員会渡辺照義氏，県阿蘇事務所山木氏が同行された。その結果，候補地はすでに半分が採土されており，遺物等も確認できなかったため，工事に際して文化財等が発見された場合はただちに工事を中止し，県文化課へ連絡することで結着した。

一方，下山西遺跡周辺の圃場整備事業は進行中で，年度末のヤマ場に来ていた。翌58年１月11日現場での立合を行い，県阿蘇事務所耕地課岡村信男氏，阿蘇町教育委員会関屋・渡辺氏，工事請負の清永組と文化課（平岡氏）で協議した。阿蘇町教育委員会から，作付補償の関係上調査面積を縮小して欲しいとの要望が出された。しかし，試掘調査によって最低限の面積にし

ていることだし，これ以上にしぼることは調査前に遺跡を破壊することになり,当初予定の2,600㎡を曲げるわけにはいかない旨説明し，了解して貰った。なお，暫定的に水路を設けて排水するルートについては立合いによって施工することを了解した。

昭和58年度，国庫補助事業として農林水産省と文化庁の協定書により，農家負担分を文化課で負担し，他は県農政部の予算により発掘調査を実施した。

第2節　調査関係者・調査組織

調査主体　熊本県教育委員会

調査責任者　岩崎辰喜（昭和58年度　文化課長）
米村嘉人（昭和58・59年度　文化課長）
森　一則（昭和59・60年度　文化課長）
丸木保賢（文化課長）

調査総括　隈　昭志（文化課課長補佐・文化財調査係長）

調査事務局　林田茂一（昭和58年度　課長補佐）
佐々木正典（昭和59・60年度　課長補佐）
林田敏嗣（課長補佐）
大塚正信（昭和58年度　文化課主幹・経理課長）
柴田和馬（昭和59～61年度　〃　）
松崎厚生（昭和58年度　文化課参事）
花田隆二（昭和58・59年度　〃　）
森　貴史（文化課参事）
谷　喜美子（文化課主任主事）

調査員　〔1次調査〕
平岡勝昭（昭和57・61年度　参事）
森山栄一（昭和57年度　嘱託）
清田純一（　〃　）

〔2次調査〕
島津義昭（昭和58年度　学芸員　昭和61年度　主任学芸員）
高谷和生（昭和58・59年度　技師　昭和60・61年度　文化財保護主事）
安達武敏（臨時調査員）

調査指導助言者

乙益　重隆（国学院大学教授）

森　貞次郎（九州産業大学名誉教授）

山崎　一雄（名古屋大学名誉教授）

白木原　和美（熊本大学教授）

甲元　眞之（熊本大学助教授）

大迫　靖雄（熊本大学教授）

大澤　正己（新日鉄八幡製鉄所　たたら研究会会員）

堀　一夫（熊本大学教授）

高橋　俊正（熊本大学教授）

整理指導　松本健郎（昭和58・59年度　技師　昭和60・61年度　文化財保護主事）

発掘作業員　発掘調査には地元乙姫地区を中心として永草・尾ノ石地区の皆様の協力を得た。以下その氏名を記して，謝意を表する。

（順不同，敬称略）

山本キミ子	上島むつ子	山本さわ子	後藤チリ子	白石　すよ	中島　久子
古島サダメ	松永かず子	河瀬　フヨ	阿部　文江	山本チヅ子	宮本　輝代
藤田キミ子	斉藤ふみ子	宇都宮リツ	山口かつ子	郷　たみ子	河瀬　弘子
津田とし子	古島サダ子	松本つつむ			

整理作業員（熊本県文化財収蔵庫）

興梠木幸子	渡辺和歌子	滝本智鶴子	村上　法子	荒川　裕子	江島　園子
重永　照代	笠間いつ子	塩田喜美子	西村美津恵	永友　和子	吉本　清子
米倉　五月	竹富百合子				

第3節　本報告書作成に至る経過

調査終了後，発掘調査によって出土した遺物は熊本県文化財収蔵庫に搬入し，水洗，註記などの作業に入った。遺物の総量はコンテナ108箱程度であるが，ほぼ昭和58年度内に水洗，註記作業は完了した。並行して1月より拓本，実測作業に安達武敏（文化課．臨時職員）、高谷和生，熊本大学生　友口恵子，神宮美保，奈良大学生　坂口圭太郎が，遺構の製図作業には熊本大学卒業生　松原明美（後に県文化課嘱託）があたった。年度がかわり昭和59年4月からは，

土器・鉄器の実測を高谷が，土器・石器を最上　敏（文化課嘱託）が担当した。また遺物（土器類）の製図を永目尚子（文化課　臨時職員）があたった。

昭和58年12月の九州史学会では「熊本県阿蘇町下山西遺跡の調査」について遺跡の概要の発表を，翌年８月の埋蔵文化財研究会第16回集会では「下山西遺跡出土の鉄器について」というテーマで，出土した鉄器・石器の紹介を行なった。また昭和59年10月肥後考古学会，鹿児島県考古学会連合学会資料集に「下山西遺跡出土の免田式土器」として，１号住居址ならび石棺地区出土の完形の免田式土器他の図面を掲載した。年が変わり昭和60年３月に「1983年度版の日本考古学年報36」で，あらためて下山西遺跡の概要について整理途中の成果をまとめた。一方では昭和58年12月には，名古屋大学　山崎一雄氏からガラス製匂玉の化学分析の中間報告で，材質は「中国産の璧などと同様の成分で分析値は，須玖岡本遺跡出土の管玉と近似する。」という所見を得た。

２ヶ年におよぶ作業中断の後，昭和61年の12月より，整理・執筆作業を再開する。残りの遺物類の実測については廣田静学（文化課嘱託）と高谷があたり，製図作業（鉄・石器他）は六田育子（文化課 臨時職員）が担当した。また資料整理には中村絹子・瀬丸延子・前田志磨江・古賀ゆみ子(文化課 臨時職員)、写真については白石　厳の協力を得た。なお２章　６　石器類の追加資料については，藤崎伸子（文化課嘱託)、木島慎治・藤崎周太郎（熊本大学卒業生）が実測及び製図を行なった。

本報告書執筆にあたり，諸先生方より多くの玉稿をいただいた。熊本大学，堀　一夫氏からは石棺内のベンガラの分析を，たたら研究会　大澤正己氏からは出土鉄器ならびに鉱石の調査を、熊本大学　大迫靖雄氏からは炭化木の分析、名古屋大学　山崎一雄氏からはガラス製勾玉の化学分析等の専門的立場からの調査報告をお願いした。また熊本大学　高橋俊正氏よりは石器の石材の鑑定を，東京博物館　西田守夫氏には出土の小型仿製鏡の分析を依頼した。

なお本報告書刊行に至る間，先生方の原稿を受け取りながら２年もの間お待ちいただき，誠に恐縮致しております。

第４節　調査日誌抄

発掘調査は昭和57年10月の１次調査と昭和58年５月～11月までの本格的な２次調査とに分かれる。

第１次調査日誌抄（昭和57年度）

昭和57年９月18日(土)

阿蘇町教育委員会より湯浦地区の中世墓が圃場整備にかかるので事前調査をしてくれないかとの連絡を受けた。文化課から平岡及び清田純一が参加し、町からは中村耕作教育長が立ち合われた。墓は近世墓であり調査の対象外にしたと記憶している。

このとき，乙姫地区も工事にかかるとのことで現地をみた。区画地は鏡山下遺跡の隣接地区でかって宮山遺跡のこともあり踏査したが、畑地に円墳状の高地があり外観は古墳に似ているが，古墳とは断定できなかったので，工事の特に縦横にトレンチを入れるので，立ち合せてくれと指示しておいた。清田君は学生時代にこの地区を踏査していた。

昭和57年10月２日

阿蘇町乙姫地区の立ち合い県文化課より平岡，清田，阿蘇谷土地改良事務所から岡村信男氏，西氏，阿蘇町教委が現地に集合した。

円墳状の高みについてブルを入れることになった。いずれも溶岩で，私が阿蘇町竹原にある殿さん塚で経験したような溶岩の山であることがわかった。また，じんが塚も同じで，もう引き上げようかという頃に，地区内にある岩盤の山から石棺が出土したという情報が作業員から伝えられた。岩盤と道路予定地は作業工程上早くとりかかっていた。石棺はブルに引きかけられており，作業員が掘りかえしていたが，作業を中止させ石棺の調査について打ち合せをする。

別途日時，予算等の積算を約束して帰える。

昭和57年10月上旬

石棺の調査がはじまり，まわりから処女石棺も発見され，保存はできないか。

幸にも現地が岩盤でもあり，計画道路とも隣接しているのでということで,改良区に相談して貰うことにする。

また，並行して工事が進んでいるため,石棺の出た西側地区がブルで削平されたことにより土器の出土をみた。又，この地特有のベンガラ（褐鉄鉱）が見られたのも異様な光景であった。道路によってカットされた部分に土器があり，幸にも削られていない地区およそ２*ha*について試掘を実施し,調査範囲をしぼることにした。調査結果は弥生の住居跡であること，現時点では調査員がいないこと，冬に向っての調査であり１～２月は寒さのため調査不能であること，一作伸ばすことに対する保障など困難な問題はあったが町・住民・改良事務所・県耕地課等の協力をえて，次年度から調査を実施することになった。（平岡）

第２次調査日誌抄（昭和58年度）

４月25日　発掘調査地点におもむき，阿蘇谷土地改良区事務所工事担当係長，佐藤技師らとともに本格調査のための下打ち合わせを行なう。文化課からは松本，島津，高谷が同席する。

５月９日　調査器材の搬入を行ない，本日より現地での調査を開始する。

５月10～12日　Ⅲ～C・D地区に１号，２号のトレンチを設定し遺構の検出に努める。

5月13日　本日よりⅢ－C・D区の調査に入る。各石棺の内部を清掃し，現況を確認する。2号石棺からは人骨（頭部）と共に鉄製短剣が出土する。

5月17～19日　3号石棺の調査に入る。石棺内部には白色粘土を塗り，棺材内側は郭状を呈する。また人骨は肉眼的には1体と考えられ鉄剣を1点副葬する。また並行してⅣ・Ⅴ－C～E区内に3号～5号の試掘トレンチを入れて遺構の状況を確認する。

5月20～24日　4号石棺の上蓋を開放する。床面より鉄剣が出土する。また側壁上面の白色粘土に平織様の圧痕が付着しているのが確認される。

5月25～30日　各石棺の実測と並行して石棺周辺部に試掘トレンチを設定する。3号石棺北側トレンチより多数の弥生土器とともに免田式土器（完形の長頸壺）が出土するが，石棺群との関係は不明。

5月31～6月7日　各石棺の実測作業を順次行なう。Ⅲ－C・D区の1号住居址は，遺物の取り上げが250点を越えるが床面まで達していない。一方Ⅳ・Ⅴ－C～E区の表土剝ぎ作業を実施する。

6月8日～10日　各石棺の復元を行なう。石棺の内側には白色粘土やベンガラを塗り，旧状に復元する。図面関係の最終点検を行ない，石棺地区の調査をほぼ終了する。

6月10～15日　1号住居址の調査が終了する。柱穴は2個，良好な状況で炉跡も検出される。遺物の取り上げは実に500点にも達する。またⅣ・Ⅴ－C～E区では遺構の検出作業を進め，この段階でほぼ28軒を確認するが，住居址が相互に重復し，切り合いが不明な箇所も多い。

6月16～28日　25号住居址・20号住居址の順番で掘り方に入る。25号住居址では多くの焼土・炭化材が出土し，外皮はそのままの状態で検出される。また熊本大学の大迫靖雄助教授に来訪いただき材質の鑑定をお願いする。20号住居址からは古墳時代の須恵器等が出土する。古墳時代の遺構はほぼ削平を受け，この住居址と点在する小ピット群のみと考えられる。

6月29～7月8日　13号・16号・9号・7号等の単独の住居址群から掘り方を始める。以下隣接する4号・6号住居址へと作業を進める。

7月11～19日　調査区北側の2号～5号等の重復箇所の調査に入る。一方中央部の平面形最大規模の17号住居址の掘り方を始める。

7月20日　14号住居址のベッド状遺構の肩の落ち部より「ガラス製匂玉」が出土する。出土時は鮮明な青色を呈し，穿孔部の肩はシャープに残り，鋳上がりのままのようであった。しかしながら，日時が経つにしたがって風化が始まり，部分的に白色に変化してきた。

7月22日　現地において阿蘇谷土地改良区事務所と調査の打ち合わせを行なう。当初予定の3ヵ月の調査期間を6ヵ月間に延長することとなった。なお当日のガラス製匂玉出土の記事は熊日新聞の朝刊に掲載され，大きな問題点を提起した。

7月25～8月3日　8号・16号・24号住居址の掘り方へと進む。特に24号住居址は平面規模

も大型で，鉄器は形態の判明するものだけでも16点にも及ぶ。本遺跡でも中核となる住居址であろう。

8月9～30日　実測作業と並行して，西側及び南側の重復地区の調査に入る。遺構どうしの切り合いがはげしく，1軒ずつ調査が完了しなければ次の遺構へ移れない状況である。また調査区東側では下方へ流れるように遺物が集積し，所謂包含層を形成している。この期間中，国学院大学の乙益重隆教授が現地を見学される。出土のガラス製匂玉を実見し頭部に「丁字頭」を有している点を指摘され，従来の形式分類と異なる状況であると説明を受ける。

9月2～13日　主に28号住居址の掘り方及び8号・13～16号住居址の実測及び切り合いの確認作業を行なう。ガラス製匂玉の出土した14号住居址は8号及び16号の住居址に切られている事が判明する。また周辺地形の測量を実施するが，調査着手時点ですでに旧地形が大幅に変わっている為に状況把握が困難である。

9月14日　30号住居址内より軟玉製の勾玉が出土する。両面及び頭部に刻みを何条も有する。

9月16～21日　新らしく確認された7号住居址の掘り下げを行なう。なお北側に小試掘坑を設け遺構の有無を確認する。

9月22日　熊本大学の白木原和美教授，甲元眞之助教授に専門調査を依頼，2号石棺から出土の鉄剣が弥生的様相を持つものであろうと指導を受ける。

9月23～29日　調査区南側の重復地区を中心として作業を進める。ここでは5軒の切り合いが見られるが，柱穴の数では2本柱から4本柱へ単純に移行するものではないことが判明した。

9月30日　9号住居址では4本柱から2本柱へと建て替えた跡が確認される。廃棄された2個のピットの上面には鉄分の集積層が形成され，上面のみからでは検出は不可能な状況である。

10月1～13日　実測作業ならびに8号・14号住居址の柱穴等の確認作業を行なう。

10月14日　調査区の東西断面図作製の為に試掘坑を設定した所，新たに11号住居址が確認された。本遺跡中，最も確認面より床面までの深さがあり，約1.2m を測る。他の住居址についても本来はこの程度の深さを保っていたものと思われる。

10月17日　32号住居址より小型仿製鏡出土。径 6.3cmで完形。文様は不鮮明ながらも内行花文鏡である事が確認される。この鏡の出土で本遺跡では所謂「三種の神器」全てがそろったことになる。作業員の意気大いにあがる。

10月18日　②－ⓓ・ⓔ区間（包含層）中より銅鏃の出土を見る。調査員ともども遺跡の重要性を改めて痛感する。

10月19～31日　実測及び平板測量を中心に作業を進める。このような中，阿蘇北中学校から全校生徒による遺跡見学会が催される。また10月28日の文化財保護大会では本遺跡出土の鏡，勾玉，鉄器，石器等を展示し，好評を得る。

11月1～3日　空中写真撮影のための準備を行ない，撮影を実施する。480m を起える高所

でする為に気流の状況が不安定で撮影に3日を要した。この後調査は図面の補足作業等へと移る。

11月4日　「乙姫下山西遺跡保存についての要望書」が阿蘇町内の全小・中学校9校の校長連名で，阿蘇町，阿蘇町教育委員会，阿蘇谷土地改良区事務所へ提出される。

11月8日　阿蘇町文化財保護委員会が開催される。島津，高谷，安達で遺跡の状況を説明する。この席上で本遺跡を町指定の遺跡とし，遺跡全ての買い上げを前提とした保存案が決定される。町文化財保護委員会は，本遺跡の工事着工を11月中延期するように，土地改良区ならびに阿蘇事務所へ要望書を提出する。また仮換地の地権者に対しての買収交渉が始まる。

11月9日　「阿蘇地区報道関係者連絡会」を現場で開催し，本遺跡の概要について総括を行ない，調査の終了を告げた。

なおその後買収交渉は難航し最終的には石棺の出土したⅡ－Aの買い上げ，保存となり，昭和61年3月には阿蘇町の指定史跡となった。発掘調査に際しては，阿蘇町教育委員会ならびに同文化財保護委員長　中村耕作氏から有形無形の御援助をいただいた。また遺跡の保存問題についての町内の全先生方の保存要望書は，誠に心打たれる思いがした。また発掘調査にたずさわって下さった地元の方々に，そして辛抱強く調査の終了をまっていただいた地権者のみなさんに厚く感謝の意を表わしたい。

（高谷）

調査風景

第１章　位置と歴史的環境

第１節　遺跡の位置

下山西遺跡は熊本県阿蘇郡阿蘇町大字乙姫字下山西（くまもとけんあそぐんあそまちおおあざおとひめあざしもやまにし）に所在し，座標上は北緯131°20′33″，東経32°56′21″に位置する。阿蘇町は「阿蘇カルデラ」のほぼ中央部の通称「阿蘇谷」と呼ばれている地区に一の宮町と町境を接し，平野部に位置している。旧市街地は基本的には黒川の自然提防上に形成されており，一部現況では氾濫原にまで市街地は延びている。一方各集落は阿蘇谷の北西側の湾入部，通称「なべづる線」沿いに点在し，その内側から黒川方面に向かって大小の水田が形成されている。一方大正４年の豊肥線開通後は，中央火口丘側から北側への道路網が広がり，新らしい村落が形成されている。本遺跡の位置する位置は行政区画上は大字乙姫ではあるが，集落の位置関係からでは，永草・乙姫地区の中間地点に位置している。

第２節　遺跡の立地及び周辺の地形

遺跡は阿蘇町の中心地から南西方向約６kmに位置する。阿蘇カルデラの中央火口丘から北側に向かって緩やかに傾斜する丘陵上（標高 485m 前後）に位置している。このような形状の丘陵は，旧湖沼の中心部に向かって，小河川でおのおの寸断されてはいるものの随所に見うけられる。本丘陵に隣接する南側の丘陵には現在乙姫の集落が営まれ，そして突端部には乙姫神社が所在する。またこの丘陵の基部には豊富な水量をもつ湧水池があり，銅戈出土の鏡山下遺跡はこの湧水池に隣接する。さらに北側の隣接丘陵にも土器散布地を見ることができる。

本遺跡の位置する丘陵は第１図の通り南西側から北東側へと大きく張り出している。この丘陵は細分すれば２つの地形に分けることができ，それは住居址群が確認される平坦な広い地区と，石棺が突端部から検出された岩盤（熔岩）が一部露頭する長さ 150m，幅30m 弱の細長い箇所との２地区である。

遺跡からの遠望は南側には阿蘇五岳がひかえ，北側には旧湖沼地帯を通し北外輪山を直接見ることができる。特に石棺の出土した岩盤帯に立つと，下段の水田との比高差は５～７m もあり，まさに丘陵突端部より阿蘇谷を眺望するが如きである。

遺跡の位置する丘陵の旧地目は，ほとんどが水田であり，一部山側部分では畑地，さらに針

葉樹林（杉林）となる。水田は不整形をなしており，規格も小型である。しかしながら，調査区中央部の4筆は規模も大きくそろっており，調査地区西側ではかなり強く（約1m前後）削平を受けていたため，この箇所では開墾等が行なわれていた可能性もある。遺跡の境界については，三方は自然の地形が平垣から落差を持って急傾斜する箇所であろうと思われる。しかし残りの西側については，山地側と接しており丘陵基部に人工的な施設（堀・溝他）の有無は，作付等の関係上確認できなかった。本丘陵には湧水地が丘陵つけねの最深部にあり，現在でも一部利用されている。丘陵の間にはその湧水がカルデラ中央部に向かって流れこみ谷水田が当時形成されていたものと思われる。

第3節　周辺の遺跡

下山西遺跡を中心とする，阿蘇谷の先土器時代～弥生時代の遺跡について概観する。阿蘇谷は，阿蘇地方の中心域をなし，カルデラ平坦面，中央火口丘および周辺の外輪山の内壁面よりなる。外輪山の内側の地域を指す広義の阿蘇谷は，さらにカルデラ中央に東西に連なる火口丘（五岳）を境として，北側の狭義の阿蘇谷および南側の南郷谷にわけられる。ここでは下山西遺跡の存する阿蘇谷の北側，すなわち狭義の阿蘇谷の遺跡分布を通じて，阿蘇谷の開発の跡を追ってみたい。

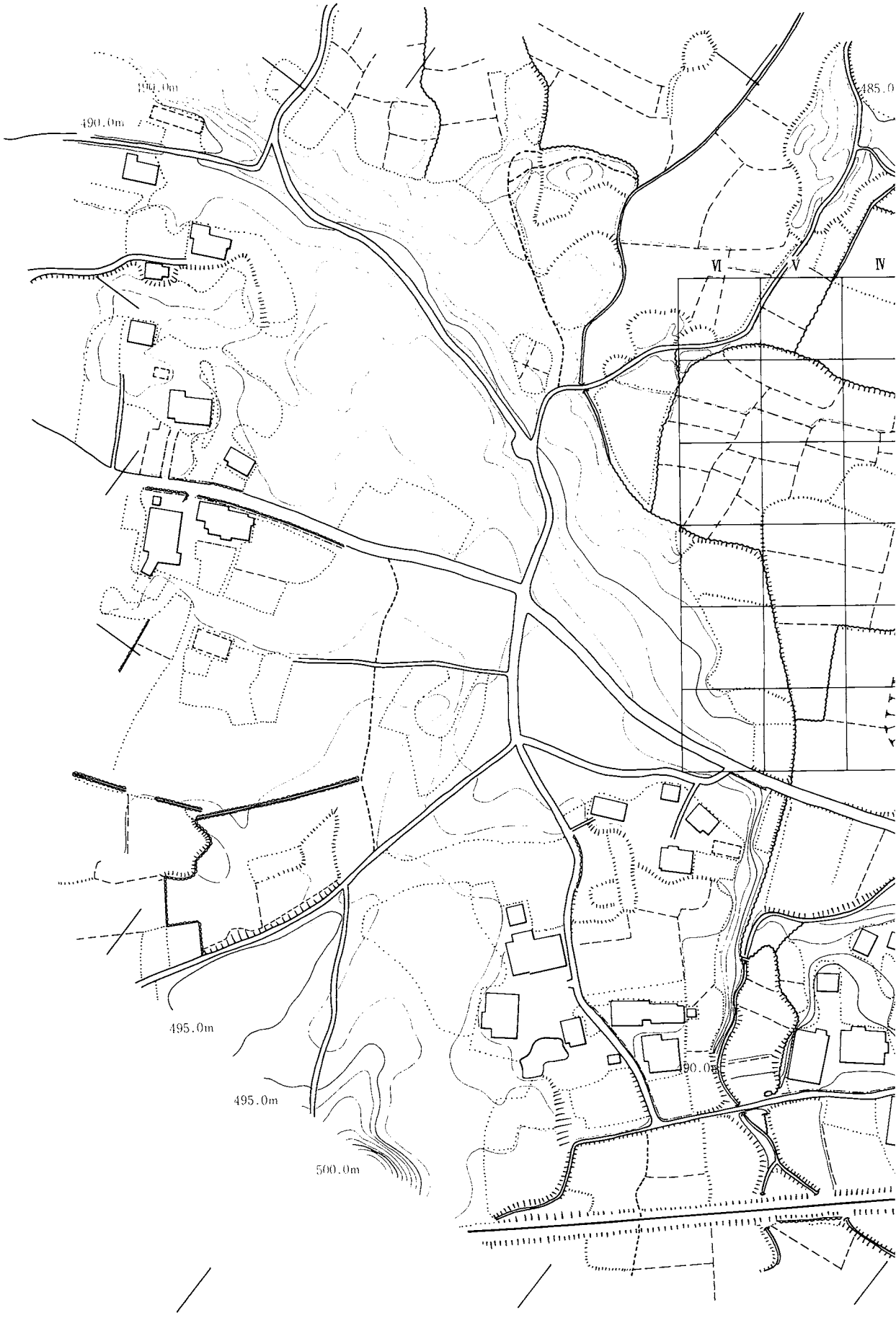
先土器時代　外輪山の尾根部に点々とこの期の遺跡が存する。大観峯遺跡は，外輪山の突出部，遠見ヶ鼻の基部に位置する。標高約900mの高所で，ＡＴ火山灰の直上から剝片尖頭器，エンドスクレーパー，サイドスクレーパーなどが出土している。またナイフ形石器，台形石器なども採集されていて，ＡＴ火山灰降下直後の石器組成を示している。ここから東に約3.5kmに同様の内容を示す象ヶ鼻遺跡がある。

カルデラ平坦面から，この期の遺物の発見はないが，外輪山内壁の下端部にあたる阿蘇町湯浦では1個の細石核が出土しており，火山活動が比較的安定した，1万数千年前には人々の生活の場が下降してきた事を示している。

縄文時代　外輪山内壁斜面に多くみられる。早期から晩期までの遺物が出土している。遺跡のあり方に2種がある。Aは，小地域の中に，全期間の遺物が継続してみられる遺跡で，阿蘇町六本松遺跡などが典型である。カルデラ平坦面との地形変換点に近い丘陵の先端部約10,000㎡の間に押型文期から晩期までの，全形式の土器が出土している。

Bは，これと反対に，1時期の土器しか出土していない遺跡。この類には，土器の出土はなく，石鏃のみ出土する遺跡が数ヵ所ある。

この2つの遺跡のあり方は，常にセンター的役割りをもった拠点集落（A）およびキャ



第１図　下山西遺跡周辺地形図（縮尺

20000分の1)

ンプ地（B）という縄文期の2様の生活形態を反映しているとみられる。とくにBのうち石鏃単独出土地が，外輪山内壁の標高550～600の高さに並ぶ点に留意される。恐らく，山麓から獲物を追いあげてきて，この地点で補獲するような，狩猟方法と関連するのではなかろうか。

弥生時代　縄文晩期から弥生前期とみられる，突帯文甕形土器が3ヵ所から出土しているが，突帯文の正確な時期比定が出来ないので，縄文時代から弥生時代の遺構は判然としない。弥生時代遺跡は下山西遺跡を除いては，3ヵ所で発掘が実施されている。

陣内遺跡（阿蘇町西湯浦）　カルデラ平坦面の北湾入部の中央に位置する。現状は水田の下であったが，外輪山内麓から南に延びる微高地の上にのる。1981年，調査が実施され，弥生時代から中世にかけての遺構・遺物が出土した。弥生期のものとしては，終末の方形竪穴22が検出され，少量であるが刀子・鏃・鎌などの鉄器も登場している。

宮山遺跡（阿蘇町的石）　中央火口丘から北西に延びる丘陵先端にあり，2基の方形竪穴を検出した。1号住居址にはカマド様の遺構があり，焼土内からは米粒が検出され，この期の米作りを直接証明するものとなった。

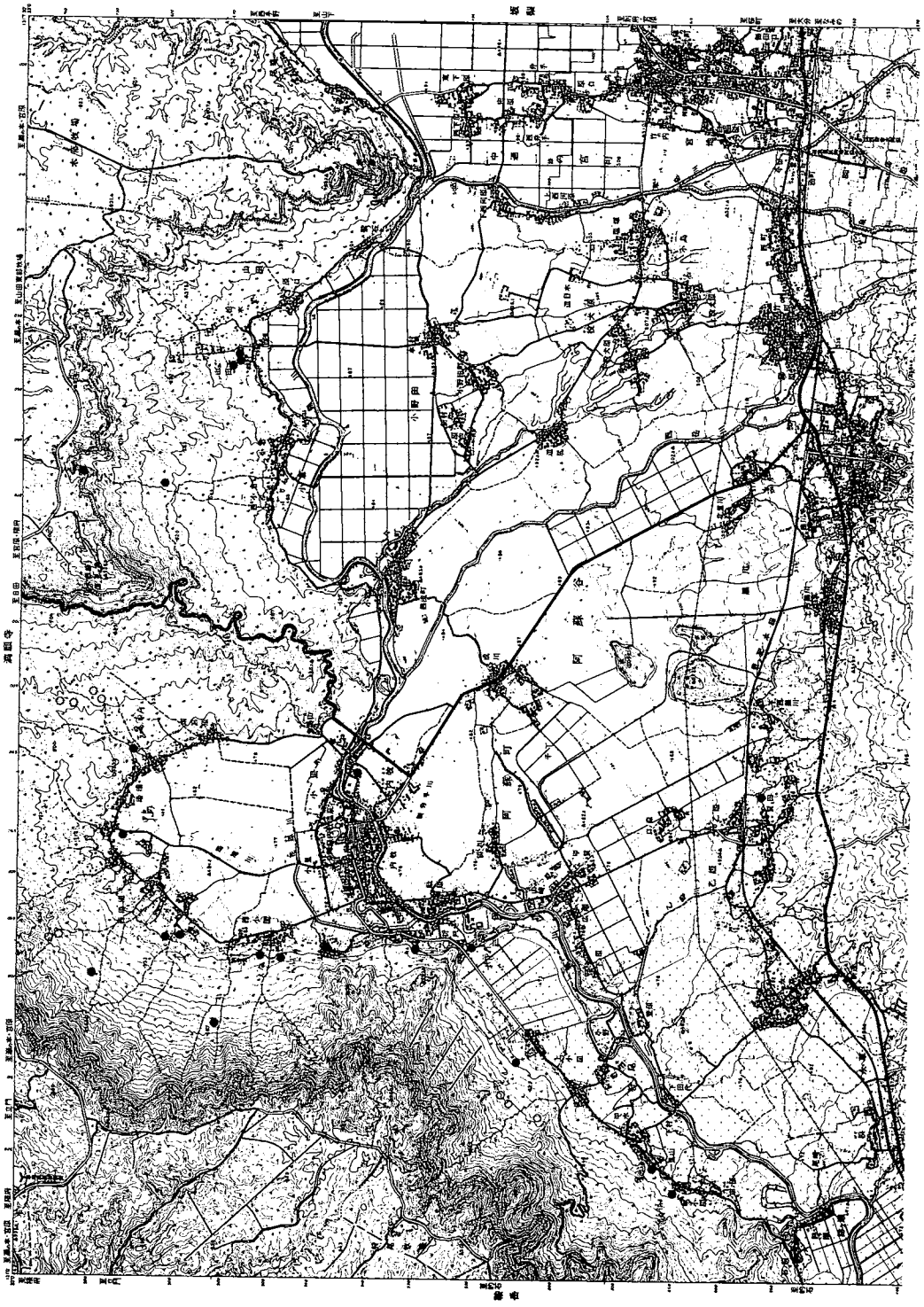
前田遺跡（阿蘇町小園）　中期の黒髪式を出土する住居址1基を検出した。床面から石庖丁も出土した。小破片であるが，北部九州に出自をもつ珠玖系の彩色土器も，黒髪式とともに出土した。稲作に関係ある置物としては，ここのものが阿蘇谷では最古の資料である。

以上の発掘を通して知られることは，阿蘇谷では弥生中期には確実に稲作が開始されていることである。標高400～600mに及ぶ高冷地での米作りは，平地に比して大巾に遅れるのではないかと予測されていたが，そうではなかった。熊本平野の弥生遺跡と比較すれば，後出はするものの，その内容においては基本的な相異はないと思われる。

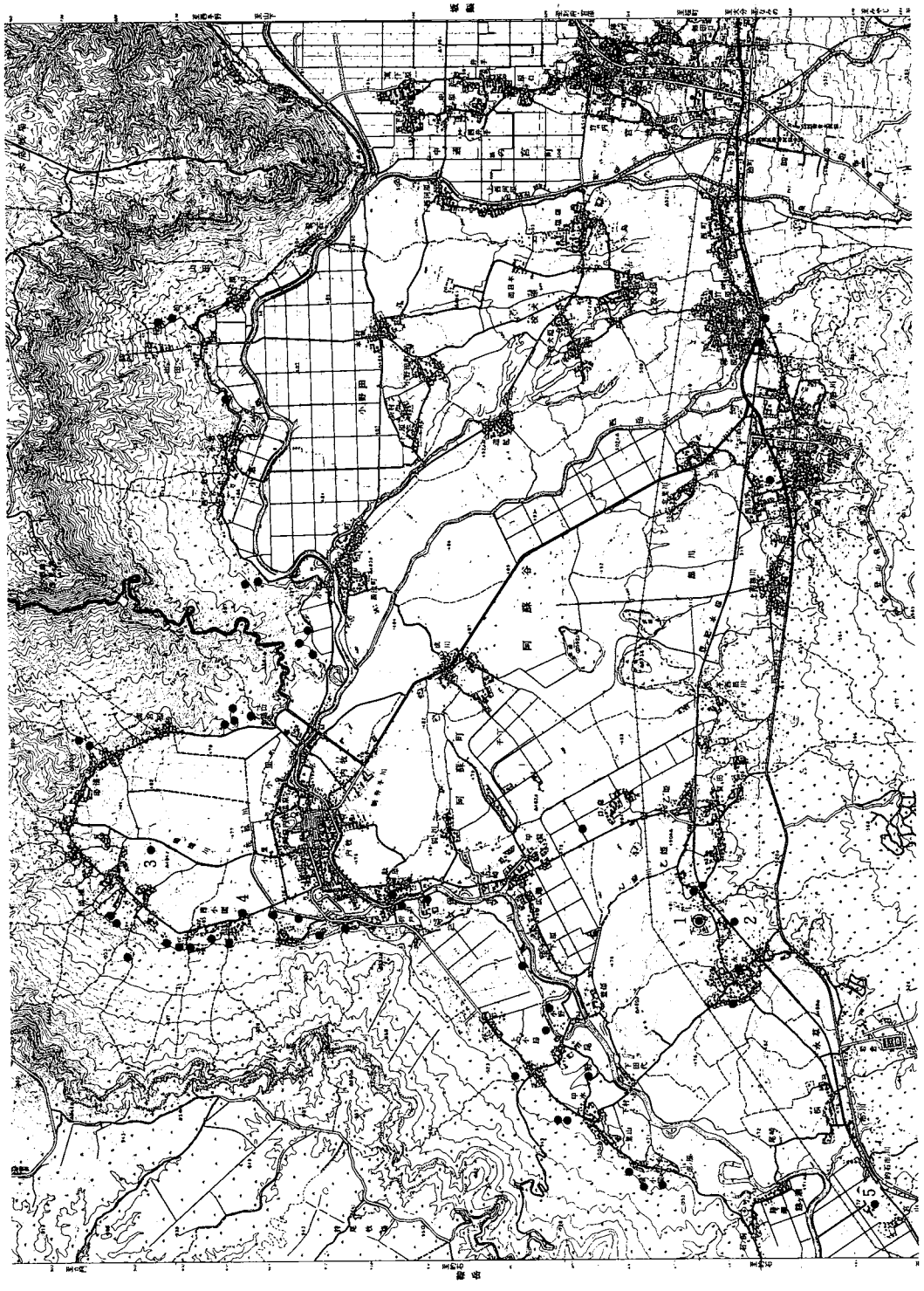
しかし，これはカルデラ平坦面，すなわち稲作可耕地の現象であり，カルデラを形造る山魂および中央火口丘の高地の稲作不可耕地帯にあっては，別の状況である。この地域では，縄文時代の生活の延長として，磨石鏃の生産が多くおこなわれ，カルデラ内の水田開始に対応する如く，石庖丁の生産に始まっている。この場合，石庖丁は水田地帯へ搬出されるべく生産されたとみられる。

縄文時代のモノラルな生活が，稲作の開始により水田開発の可・不可によって水田民と非水田民に分解し，それぞれ生活形態を異にしながら，相互補完的な社会的分業をになったことが看知される。

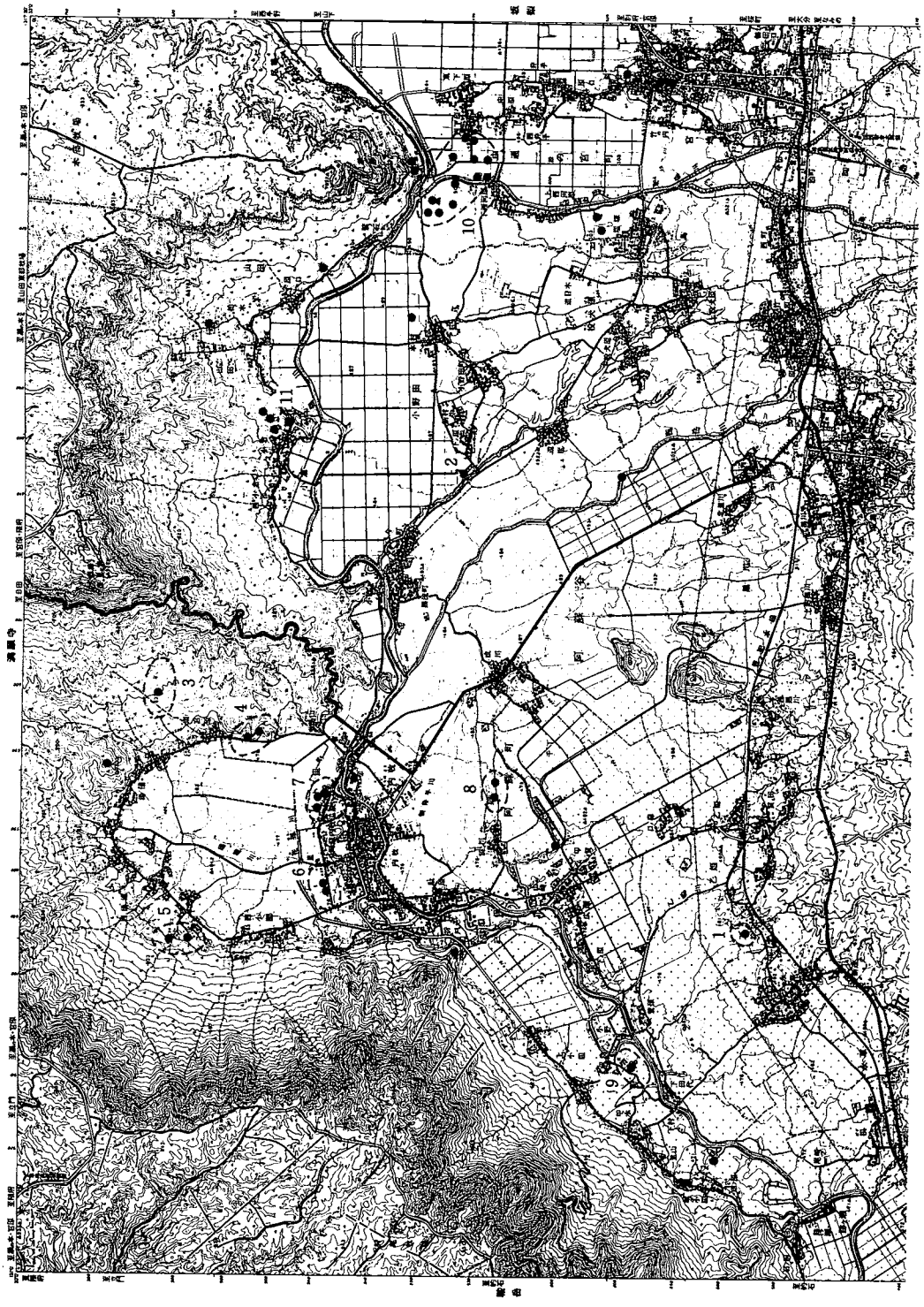
下山西遺跡によりカルデラ平坦面の水田民の村落の実体を明らかにすることが出来るのである。



第２図　阿蘇谷縄文遺跡分布図(白丸はキャンプ遺跡とみられるもの)



第３図　阿蘇谷弥生遺跡分布図　（１．下山西　２．鏡山下　３．陣内　４．前田　５．宮山）



第４図　阿蘇谷石棺・古墳分布図

１．下山西石棺　２．大角町盤棺　３．源田ヶ塚古墳群　４．御塚古墳群　５．二本松古墳群
６．小里古墳群　７．塔の木古墳群　８．浜川古墳群　９．古園古墳群　10．中通古墳群

第４節　遺跡周辺の地質及び遺跡の層位

下山西遺跡は阿蘇カルデラ底の南部に位置している。北方及び西方にはカルデラ壁が連なり，南方には阿蘇中央火口丘群があり，遺跡は沖積平野を眺望する緩丘陵上を占める。

４基の石棺が位置する丘陵は，細長く南西方向から北東方向にのびる熔岩塊の間に堆積した土のなかに掘りこまれている。クラカトア型の陥没カルデラである阿蘇火山の基本的な形成層は火砕流堆積物であり，熔結した熔岩である。遺跡周辺部にはこのような熔岩塊が自然に露出したものがいたる所に見られ，この「阿蘇熔岩」が遺跡周辺の基底面を形成している。また前面に拡がる現在の水田面である沖積平野は，元来はカルデラ形成後，しばらくの間火口原に雨水がたまった湖沼であり，その期間は約１万年以上とも言われている。沖積世に入ると断層あるいは侵蝕によって立野(註１)の火口瀬ができ，湖沼の水が流出したものの，弥生時代にいたるまで小規模ながらも湖が存在していたと考えられる。そのため水田面にはいたる所，鉄分が湖沼内で植物等とからんで集結した黄土が検出され，鉄分の非常に多い酸性土壌である。

遺跡の層位は(註２)，各試掘坑で確認すると基本的には次の如くなる。

Ⅰ－ａ層　草根を含む耕作土である。

Ⅰ－ｂ層　元地目は水田であり，そのため長年水稲耕作により鉄分が集積し，水田床土を形成している。明黄褐色の鉄分集積層

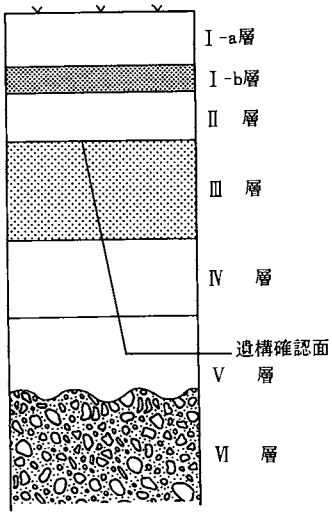
Ⅱ層　遺物全体をうすく覆う腐植土。黒色土層

Ⅲ層　ややローム化が進んだ火山灰層。褐色土層

Ⅳ層　ローム化のさらに進んだ火山灰層。遺跡の北半分では黄褐色を，南半分では黒色を呈しているが，これは腐触土の多少により色調が少々ことなるが，基本は同一層である。

Ⅴ層　ローム化した粘土層。部分的に白灰色，黄色を呈する。

Ⅵ層　凝灰角礫岩及び熔岩塊の所謂岩盤層。



第５図　下山西遺跡層位概略図

註(1)　松本征夫・松本幡郎編『阿蘇火山』東海大学出版会　1981

註(2)　次の報告を参照し，現地で調査員が比較検討して層位への確認及び同定を行なった。
高橋俊正著「陣内遺跡およびその周辺の地質的所見」『陣内遺跡・阿蘇町文化財調査報告第２集』阿蘇町教育委員会　1982

第2章　調査結果

第1節　1次調査

昭和57年10月　上旬，石棺地区の調査を主目的として1次調査が実施された。この期間中，石棺位置から南西方向の地点で重機による削平中，多量の弥生土器が出土したことから，重機(バックフォー)による試掘を実施した。また露出した岩盤の間から壺を埋納した土壙が検出された。順次項目別に説明を加えたい。

1．試掘トレンチについて（第6図）

1次調査の試掘調査においては，合計1号～5号まで5本の試掘トレンチを設定した。調査期間の関係上，重機（バックフォー）により別図の位置を設定し，掘削しながら遺構の有無を確認した。以下各試掘トレンチの概要を述べる。

1号トレンチ

Ⅲ－C・D区内に設定した南北長22.6mの試掘トレンチである。本トレンチの中央部より住居址1軒が検出された。なおトレンチの壁面より第38図の免田式土器(壺)の上部半分が出土した。

2号トレンチ

Ⅲ－C・D区内南北に走る幅4.5mの農業道路に並行して設定した，南北方向14.7mを測る試掘トレンチである。この地点は完全に地山面まで削平されており，遺構は残存していないが，1号トレンチ内検出の住居址の状況を確定するために要調査地とした。

3号トレンチ（第6図）

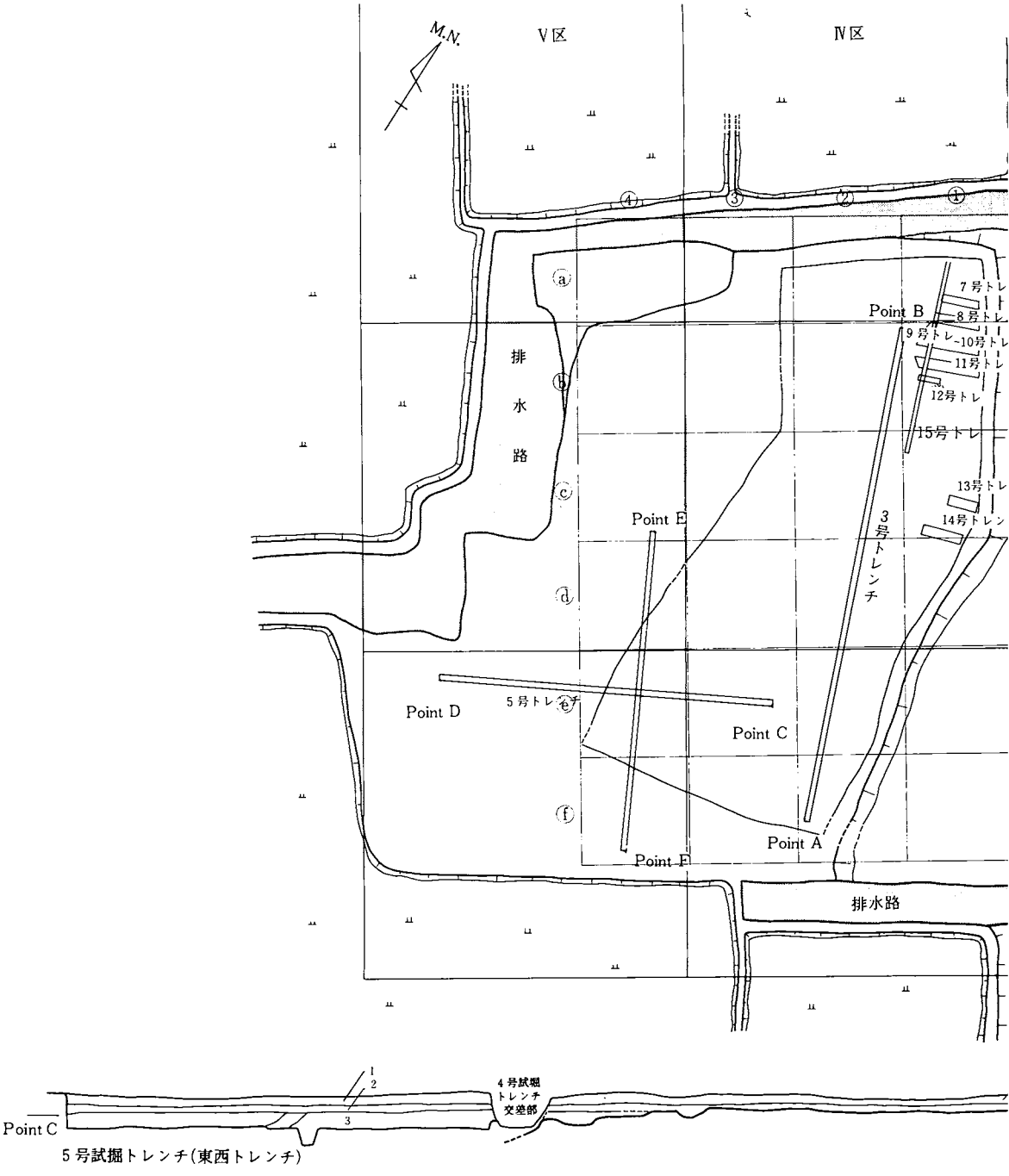
Ⅳ－D・E区内で遺物の散布が見られる地点に南北方向に長さ49.5mを測るトレンチを設定した。トレンチの最南端及び途中数ヵ所に地山が見られるものの，ほとんどは遺構の切り合いによる埋土である。この地点が本遺跡の中心地区になるものと想定される。

4号トレンチ（第6図）

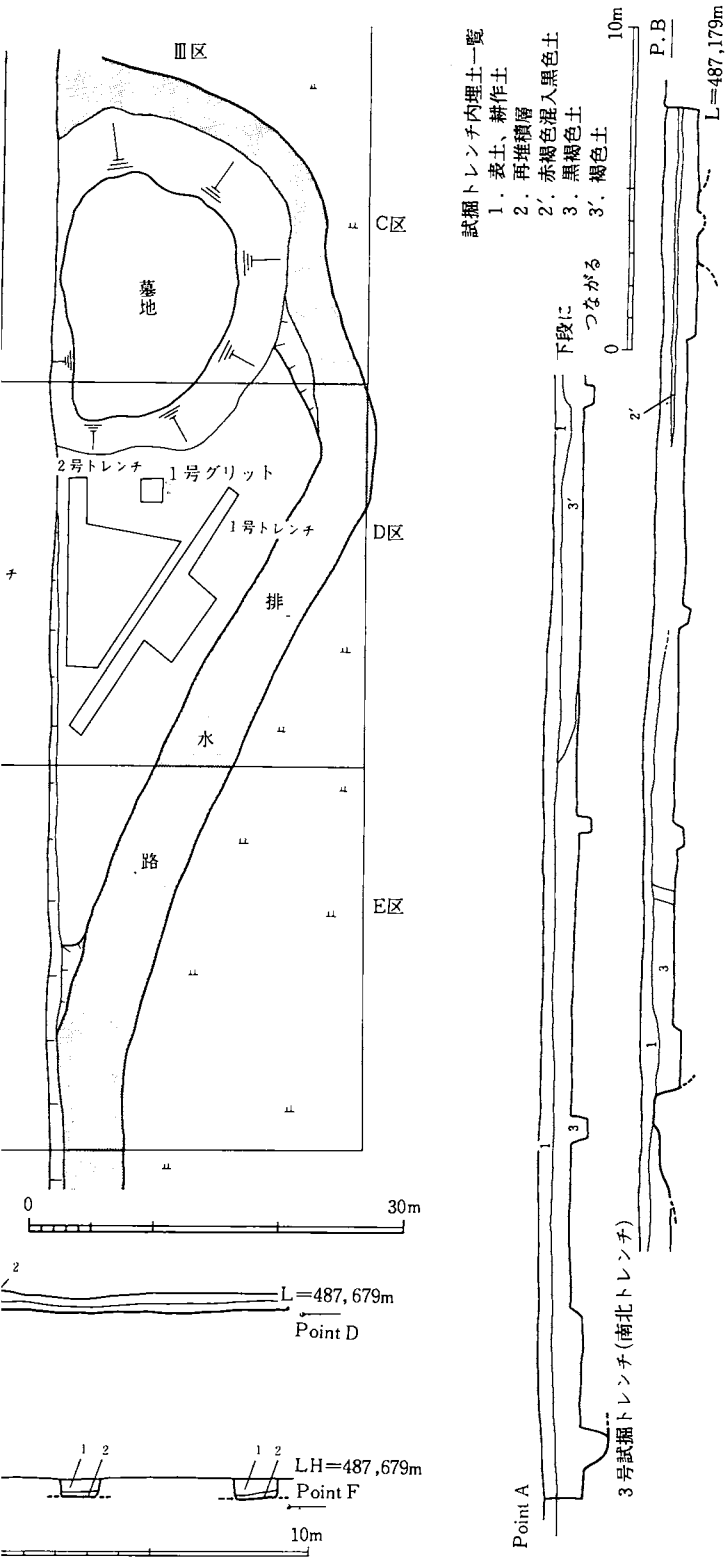
Ⅴ－D・E区内，3号トレンチに並行させて南北方向29.3mのトレンチを設定した。トレンチ北側半分については地山まで削平されているが，東西トレンチの交差部付近より南側には遺構の残存が見られた。

5号トレンチ（第6図）

散布地点を東西方向に延びる全長30.7mのトレンチである。4号トレンチとの交差部より西



第6図　Ⅲ・Ⅴ－C～E区内調査グリッド配置及び試掘


Ⅲ区
C区
D区
E区
墓地
2号トレンチ
1号グリット
1号トレンチ
排
水
路
0
30m
L=487,679m
Point D
LH=487,679m
Point F
10m
試掘トレンチ内埋土一覧
1．表土、耕作土
2．再堆積層
2′．赤褐色混入黒色土
3．黒褐色土
3′．褐色土
下段につながる
0
10m
P.B
L=487,179m
Point A
3号試掘トレンチ(南北トレンチ)

レンチ設定図

側は削平を受け遺構は残存していない。東側については3号トレンチの所見同様，遺構の切り合いが確認される。

以上試掘トレンチの所見により，農業道路をはさんで2ヵ所の地区約2haについては，要調査地区として，工事を中断して2次調査を待つこととなった。

各試掘トレンチ内の埋土について

1次調査の際は，3号～5号の試掘トレンチの土層断面図は時間的な制約から作成されなかった。2次調査では，Ⅳ・Ⅴ－C～E区内の土層の確認及び遺構の重復状況を見るために再度掘り上げ，断面図を作成した。地区の南側，西側については1層耕作土，2層再堆積土となり，鉄分の集積層が2層の下部に赤色を呈して形成されている。3層には黒褐色土が見られるが，これは遺物を包含する層であり，同色で類似する層が下層へと続く。遺構が重復して，トレンチの短い幅分では明瞭に境界部が確認できない。地区の北側及び中央部では，1層耕作土の下は鉄分集積層が部分的に見られるが，すぐ遺構内の埋土を含む3層ないし3′層となる。ここでも遺構の重復が著しく，境界は判明しない。なお北側には一部分2′層赤褐色混入黒色土が流入したと見られる。

1次調査出土土器（第7図）

1次調査に際して，試掘トレンチ以外からの出土資料をここでまとめてみた。

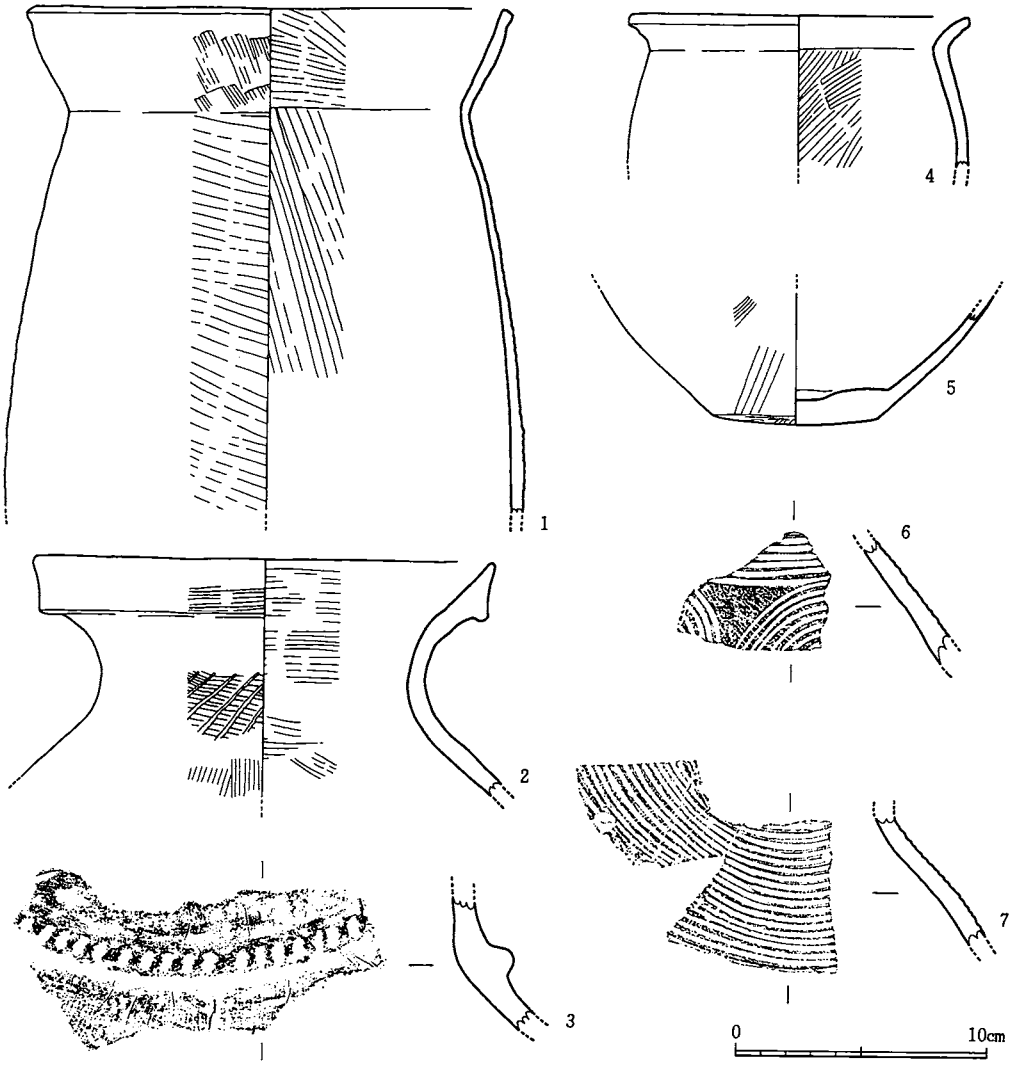
1は調査区全体から出土した甕である。口径19.2cm，胴部最大径20.5cm，残存高19.7cmを測る。胴部の中位以下に最大径を有す。外面では斜方向の刷毛目を胴部に，頸部には1.0cm単位の刷毛目調整を重ねる。内面ではナデ調整及び斜方向の刷毛目調整を施す。**2**は調査区の西南部一括出土の壺である。口径18.3cm，頸部径12.8cm，残存高9.4cmを測る。外面は全体的に刷毛目及びナデ調整を行なうが，頸部には斜方向の強い刻みを施す。最初の刻みから次の刻みへは継続させており，その際板状工具の刷毛が残る。内面はヨコ及び斜方向の刷毛目調整を施す。**3**は調査全区出土の壺片である。頸部に突帯を有する壺片であり，残存長は14.3cmと大型である。突帯の刻み目は，幅0.5cmでその間隔は0.9cm内外を測る。外面の調整は刷毛目である。内面はヨコ方向のナデ調整を施す。**4**は石棺周辺部一括の甕である。口径13.5cm，残存高5.9cmを測る。外面はヨコ方向のナデ調整を基調とするが，胴部は壁面が荒れていて観察できない。内面は幅1.2cmの刷毛目調整を施す。なお外面には部分的ではあるが，煤が付着する。**5**は調査全区出土の壺片である。底部径6.5cm，残存高5.2cmを測る。底部はやや丸みを有するが，平底であり，不定方向の刷毛による強い調整を受ける。外面は上方に向って刷毛目調整が残るが，大部分は不定方向のナデにより消されている。内面は不定方向のナデ調整と指圧によって仕上げる。**6**は調査全区出土の壺片である。壺の胴部片で残存長6.4cmを測る，所謂免田式土器である。上方はヨコ方向の刻みの条線が6本まで数えられ，下位の同心円文は8本で2連まで確認

される。色調は明赤褐色，焼成は良好である。**7**も調査全区内出土の壺片である。壺の胴部片で残存長13.0cmを測る免田式土器である。ヨコ方向の条線は19本まで数えることができる。色調は暗褐色で，焼成は良好である。

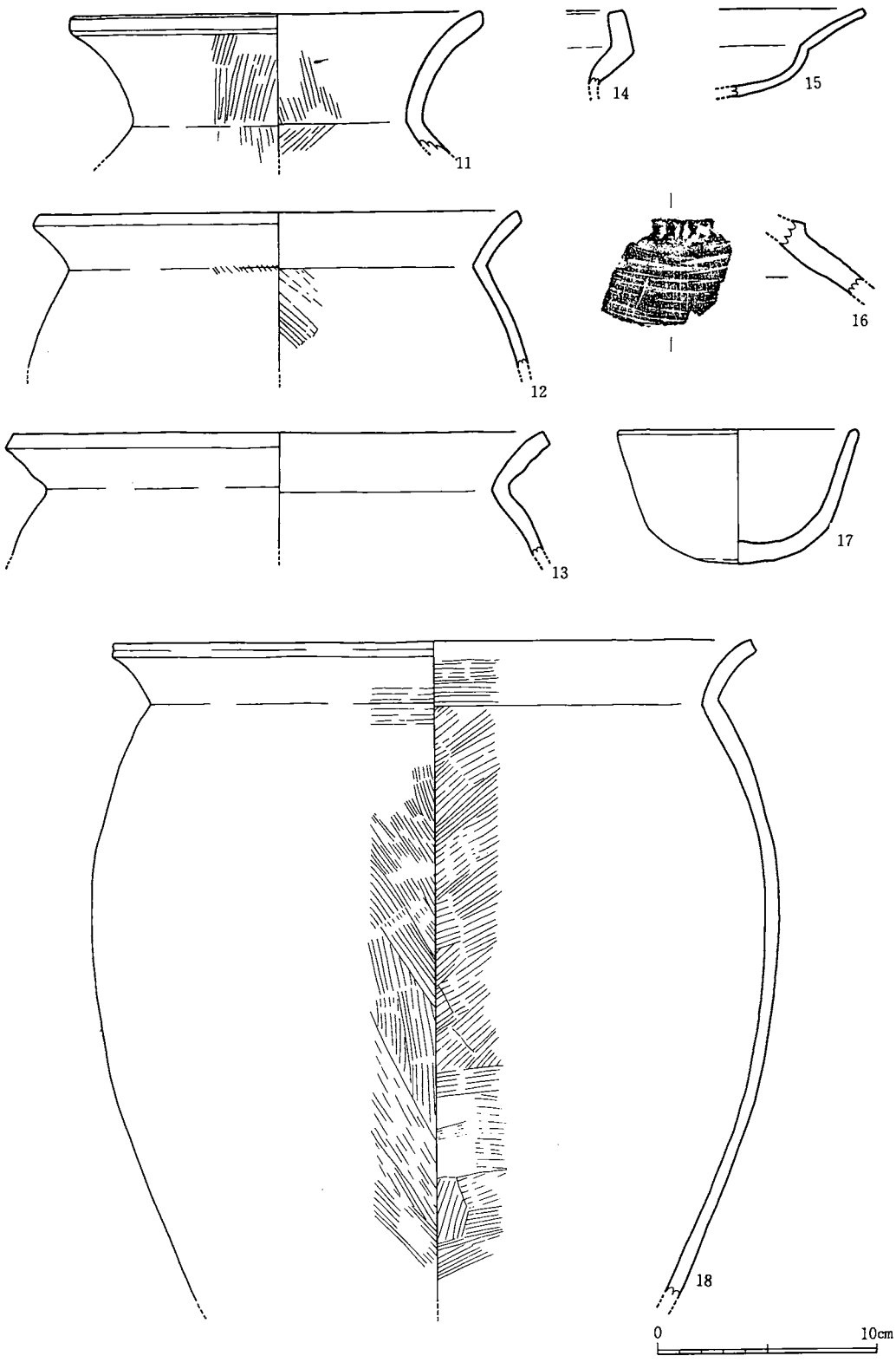
試掘トレンチ内出土土器（第８図）

ここでは１次調査の試掘トレンチ１号～５号までの資料を概観する。

14は壺の口縁部で，２号トレンチ内の出土である。頸部から口縁部に向って立ち上がり，口縁部付近でくの字形に強く屈曲し，内傾して立ち上がる。**15**は高杯片で，３号トレンチ内出土である。坏部の破片であり，丸く坏部が内曲して口縁部へと続く。口縁部は外湾気味に立ち上



第７図　１次調査出土土器実測図



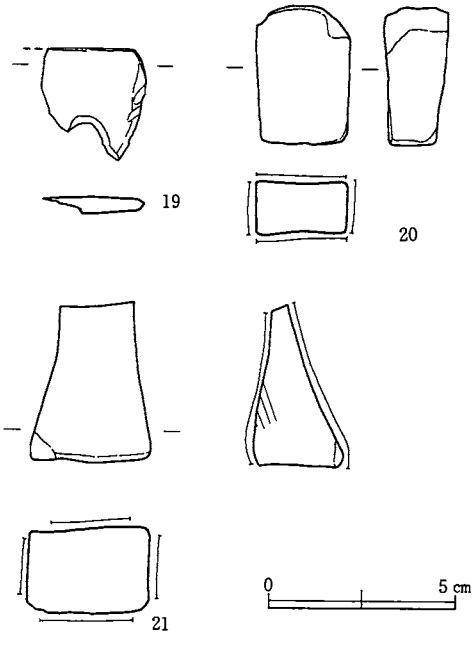
第8図　Ⅳ・Ⅴ－C～E区試掘トレンチ内出土土器実測図

がり広がる。**17**は弥生土器の手づくね土器であり，１号トレンチ内の出土である。口径11.0cm器高 6.1cmの鉢形となる。底部は丸底となり，体部から口縁部にかけてはストレートに立ち上がり外傾する。**18**は弥生土器の甕であり，１号トレンチ内の出土である。口径29.5cm，残存高30.0cmの大型の甕となる。胴部の最大径は31.6cmを測り，胴部の中位より上側に位置する。外面では口縁部付近はヨコ方向の刷毛目調整を，体部の上位は左上より右下に向って強い刷毛目調整を加える。下位は左上から右下へ弱い刷毛目調整である。内面については，下位は中心部より外縁部に向っての刷毛目調整を，中位ではヨコ方向，上位では左下より右上に向っての刷毛目調整を重ねる。刷毛の単位は1.3～2.0cmを測る。

試掘トレンチ内出土石器（第９図）

ここでは１次調査の試掘トレンチ内から出土した石器を概観する。

20は３号トレンチ内出土の砥石である。石材は凝灰岩製で,全長3.5cmの小型のものである。よく使用されており，４面とも研磨されている。**21**は１号トレンチ内出土の砥石である。直方形を呈し，全長は4.1cm，石材は頁岩である。一部欠損するが６面使用されている。

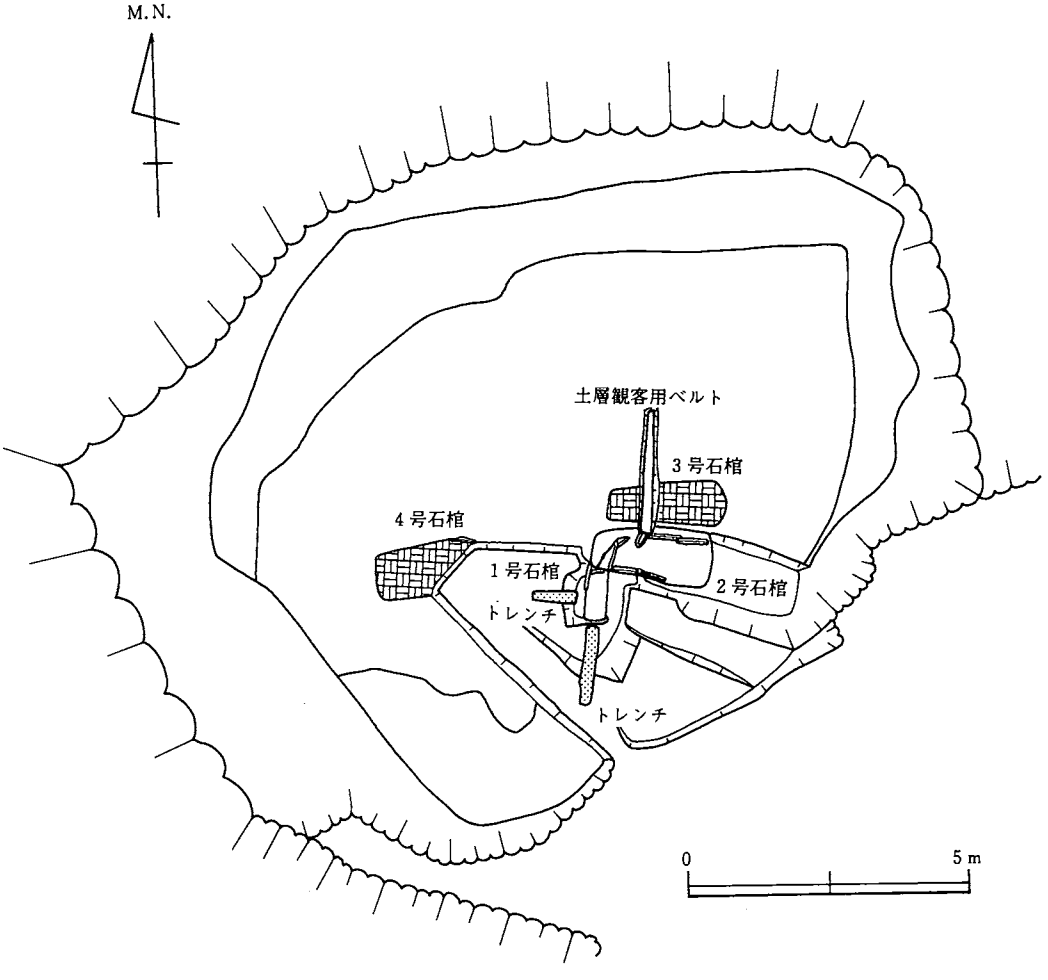


第９図　試掘トレンチ内出土石器実測図

2．石棺の調査について

昭和57年10月2日の立合いの際，重機により小型の1号石棺及び2号石棺の上蓋が破損した。このため本地区では1，2号石棺の調査ならびに周辺部に未確認の石棺等の有無を主目的として実施した。

石棺の位置する地区は地元で通称「オサキ」と呼ばれている。この凝灰石が露出している丘陵先端部で,土が埋まっている箇所を一部浅く掘り下げ，さらにボーリング棒で定間隔に突きさしながら他の石棺の有無を確認した。その結果2号石棺に隣接し3号石棺が，また東側に約3m離れた地点から4号石棺があいついで検出された。これら新発見の石棺の規模は2号石棺と同一規格で全長170～180cm，幅50cm程である。なお3号石棺の上場には土層観察用に幅30cmのベルトを残し，全容を露出させた。一方4号石棺は西側半分を1号石棺が埋めてある黒褐色土（約30cm）に被われたままとした。今回の調査で新発見の2基の石棺については，現況のままとし，次回の調査を待つこととなった。



第10図　石棺地区配置関係図（1次調査時）

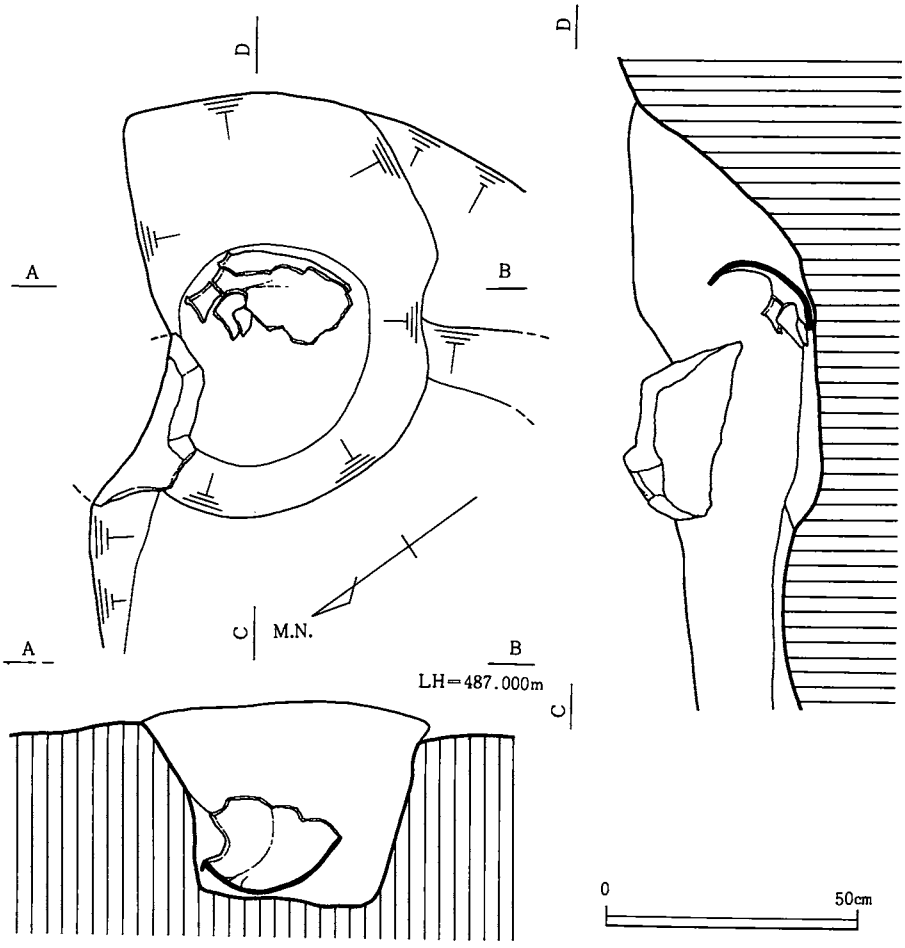
１号石棺は北側と西側の２枚の石材を残して大半は破損していたが，石棺の掘り方の確認のため南側及び西側に２本のトレンチを設定した。１号石棺の実測を行なうとともに，重機（バックフォー）のバケットの爪先に付いて出土したガラス製小玉を確認した。

２号石棺は上蓋の石材の大半が既に除去してあったため現況の確認のため図化作業に入った。一方内部の土をとりのぞき，清掃作業を実施した所，頭骸骨の一部と鉄剣（刀）らしき遺物が１本出土した。このため専門指導員による人骨の取り上げ等の方法が必要になったため，いったん作業は中断した。

一方，４基の石棺の配置状況を知るために1/100縮尺で平板測量を実施する。（第10図）本石棺が位置する丘陵はすでに重機によって大半が旧形を失している為，地形測量図は作成しなかった。

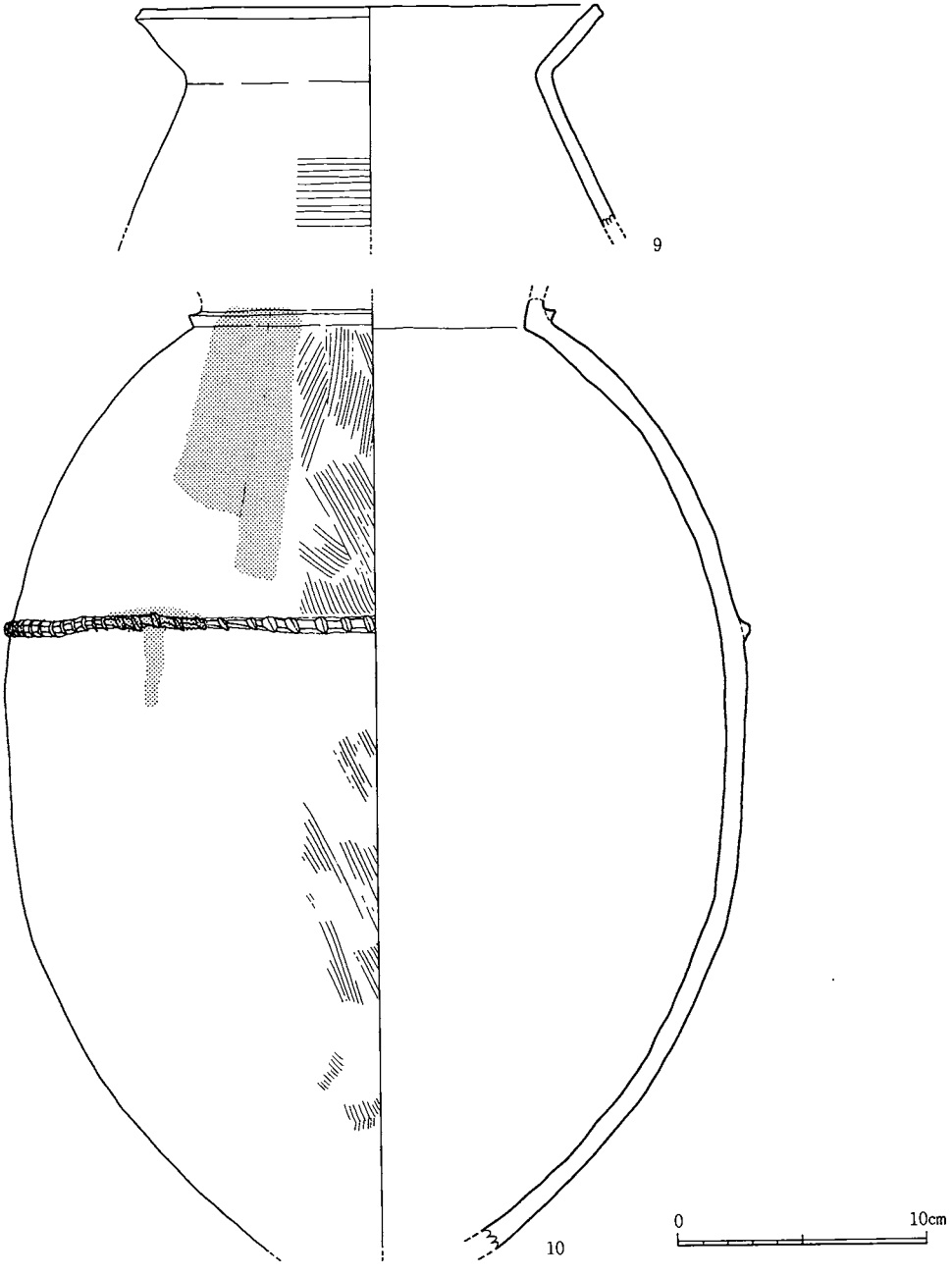
３．Ⅱ・Ⅲ－Ｂ区内壺埋納土壙（第11図）

Ⅲ－Ｃ・Ｄ区の１号住居址北側より，４基の石棺が所在するⅡ－Ａ区に向かって「熔岩岩盤」の細長い丘陵が延びる。この丘陵には岩盤の窪地に土が堆積する所が点々としており，本遺構



第11図　Ⅱ・Ⅲ－Ｂ区内壺埋納土壙実測図

もⅡ－A区から41.6m離れた窪地に所在する。土壙の平面形は不整形であり，北側が開放する。落ち込み部分のみの規模は南北方向85cm，東西方向60cm，深さ35cmを測る。土壙周辺の熔岩にも多少手が加えられた感も伺える。埋土は暗茶褐色土を呈し，若干焼土粒を含む強粘性土であった。



第12図　Ⅱ・Ⅲ－B区内出土土器実測図

Ⅱ・Ⅲ－Ｂ区内出土土器（第12図）

この地区は石棺地区から南西方向に46m 離れた地点であり，ここから２点の遺物が出土する。**9**は壺埋納土壙周辺部で一括して出土した甕である。口径18.9cm，残存高8.9cmを測る。体部から頸部に向って弱く膨らみ，屈曲後は外傾して口縁部に達する。外面はヨコ方向の刷毛目調整を施すが，その後ナデ消す。内面は弱い刷毛目調整後ナデ調整で仕上げる。焼成はややあまい。**10**は壺埋納土壙内出土の壺である。頸部径14.9cm，胴部最大径30.2cm，残存高37.8cmを測る。発掘当時は破片にはなっていたものの，ほぼ完形であり，上部（頸部から口縁部）及び底部は欠損していた。外形状はほぼ卵形をしており，最大胴部位置よりも上位に突帯を有する。また胴部と頸部の境の屈曲部にも断面三角形の突帯を持つ。胴部の刻み目突帯は左斜方向から下方に向ってヘラ状工具により，0.6～1.2cm間隔で全周施す。外面はタテないし斜方向の刷毛目調整で，その後胴部ではナデ消す。なお頸部より突帯に向って，幅２～３cmで赤色顔料を塗布した痕跡がみられ，一部は突帯部分まで流れ落ちる。（図中スクリントーンで表示）内面は器壁が荒れて観察しづらいが，刷毛目調整の後にヨコナデ調整を施す。胎土は 0.1cm程度の砂粒を多く含み，色調は内外面とも赤黄橙色で，焼成はあまい。

発掘調査風景

第2節　2次調査

1．調査の方法

第2次調査においては，昨年度点的に分散し調査した3地点をさらに継続して調査することになる。この3地点は即ち(1) 4基の石棺からなる石棺地区。(2) 試掘トレンチにより免田式土器の大型の甕が出土した地点。(3) 多数の弥生式土器が出土する本遺跡の中心となる地点である。以上の地点は，第2次調査を着手する段階では，おのおの道路，用水路等で完全に寸断されていた。そこで旧地形の判明する地形図を参照して，30m 方眼のグリッドを上述の3地点の他，さらに遺物の残存が予想される西側丘陵部にも図面上かぶせた。東西方向を東から西へⅠ～Ⅷまでとし，南西方向を北からA～Fまでの番号標記とし大グリッドを設定した。次にこのグリッド標記を現地形に転記するために，調査地区中央部の南北に延びる道路側溝センターを利用して，これを南北方向の軸線と一致させた。一致させる中軸線はⅢ区とⅣ区の境の軸線とし，これにより分散した3地点では例えば，石棺地区はⅡ－A区，住居址地区はⅢ－C・D区及びⅣ・Ⅴ－C～E区という，大標示で標記することになる。

さらに多数の住居址出土が予想されるⅣ・Ⅴ－C～E区内は，方眼の単位をさらにせばめて10m 単位とし，新たに方眼を組んだ。方眼は部分的に使用し，東西方向を東から順番に①～⑤区とし，南北方向を北から⓪～ⓕ区へと標記した。これにより住居址地区は2種類の表示となる。例えば全地区での遺物の取り上げ等では，「Ⅳ・Ⅴ－C～E区」という大標記を，各遺構にともなわない小地点での遺物取り上げ等では，「②－ⓓ区内」という小標記を使いわける事となる。(第6図参照)

次に調査区への遺構確認のための方法であるが，Ⅲ－C・D区にはすでに設定されている1・2号の試掘トレンチを拡張し，遺構の確認を行なった。またⅣ・Ⅴ－C～E区間3,500㎡内での遺構の状況を確認する為に，重機により掘削し，設定された3号～5号の試掘トレンチを再確認した。これにより，遺跡の残存は地区の東側部分の約1,300㎡となり，遺跡はかなりの密度で重復していることが判明した。また他の地区は排土場所として利用することとなった。なお第6図内の7号～15号までの試掘トレンチについては，残存箇所での住居址の存在有無を確認するためのものであり，これにより調査区東側の上面の大部分が，遺物の流れ込む包含層であることが判明した。

2．Ⅱ－A区の調査（第13・14図）

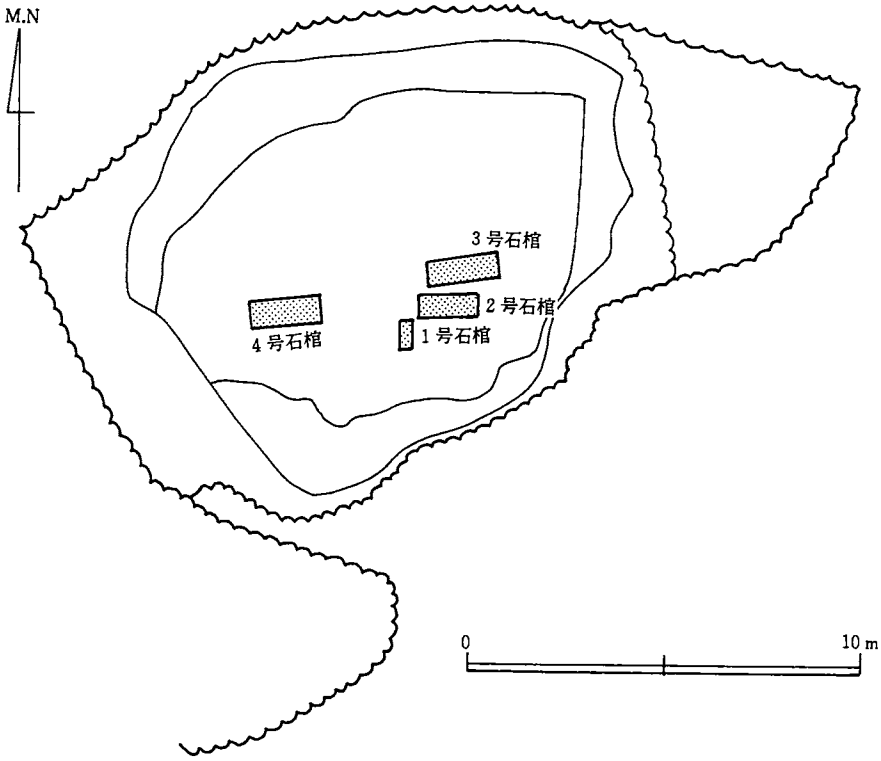
石棺の位置と現状　調査区の北部に位置する。集落の存する丘陵の先端部で，一帯は通称「オサキ」と呼ばれている。集落地区の最北部から北東に約100m の地点である。

先端部の高所には硬質の凝灰岩が露出していてやや小高く，最高所で標高 486,881m をはか

る。そこから北側の鞍部を埋めるように約150㎡のゆるやかな傾斜面があり，その部分は黒褐色土の密な土壌となっている。石棺は，あたかも岩場を避けるがごとくそこに構築されている。４基の石棺のうち，２基（１・２号）は圃場整備工事実施中，重機が棺材を引っ掛けた。１号石棺の大部分は壊わされ，２号も上蓋および南壁を欠失していたが，旧状を知ることはできた。残りの２基（３・４号）はボーリング棒の検索により石棺を確認し調査を実施した。隈なく全域をボーリング棒での石棺確認を実施した。また，溝の有無を知る為それぞれの石棺の周辺にトレンチを設定した。４基の石棺のうち４号はやや離れ約２m 西側に位置する。以下，石棺ごとにその構造および出土品を記述する。

１号石棺（第15・18図）

最高所にある小形の石棺。調査前に破壊され，北側小口石とこれに接して西側の側石１枚が残っていた。全長0.8m，幅0.3m と復元される。主軸はＮ－5°－Ｅのほぼ南北を示す。床面には赤色顔料が残っており，小口部では，小口石の上端から約19cmの深さをはかる。残存する北

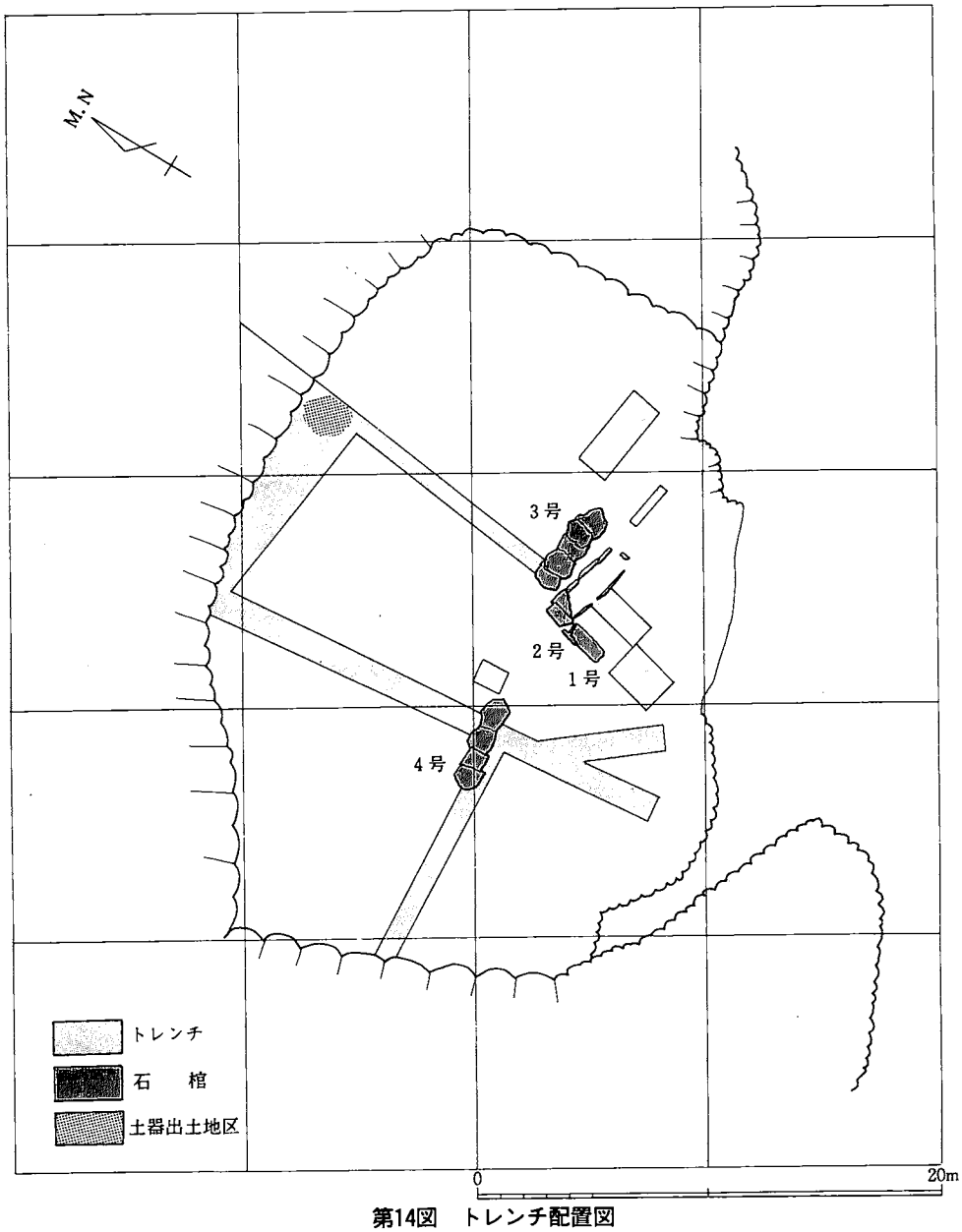


第13図　Ⅱ－Ａ区石棺配置図

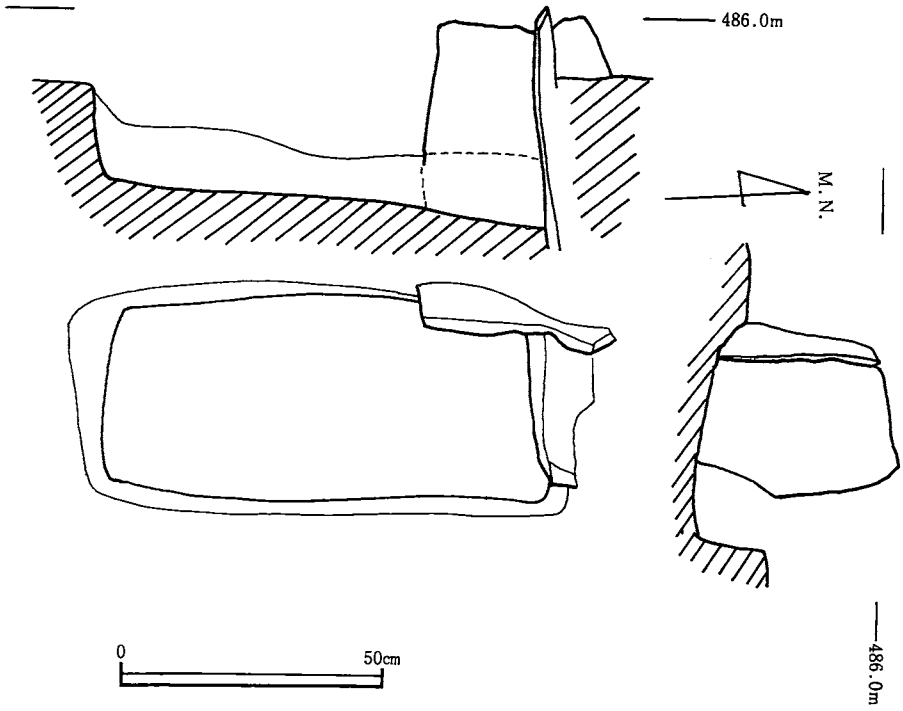
側の小口部の石の東側は丸く加工してある。土壙の大きさは周辺が破損していてはっきりしないが，北奥の左側（西方）では，石棺側から外に30cmの土壙が観察出来た（図版3）。副葬品としては，ガラス小玉1個（第19図）が重機（ユンボ）のバケット先端部に付着して出土した。1号石棺の副葬品であるのは確実であるが，原位置は不明である。

2号石棺（第16・17・19・20図）

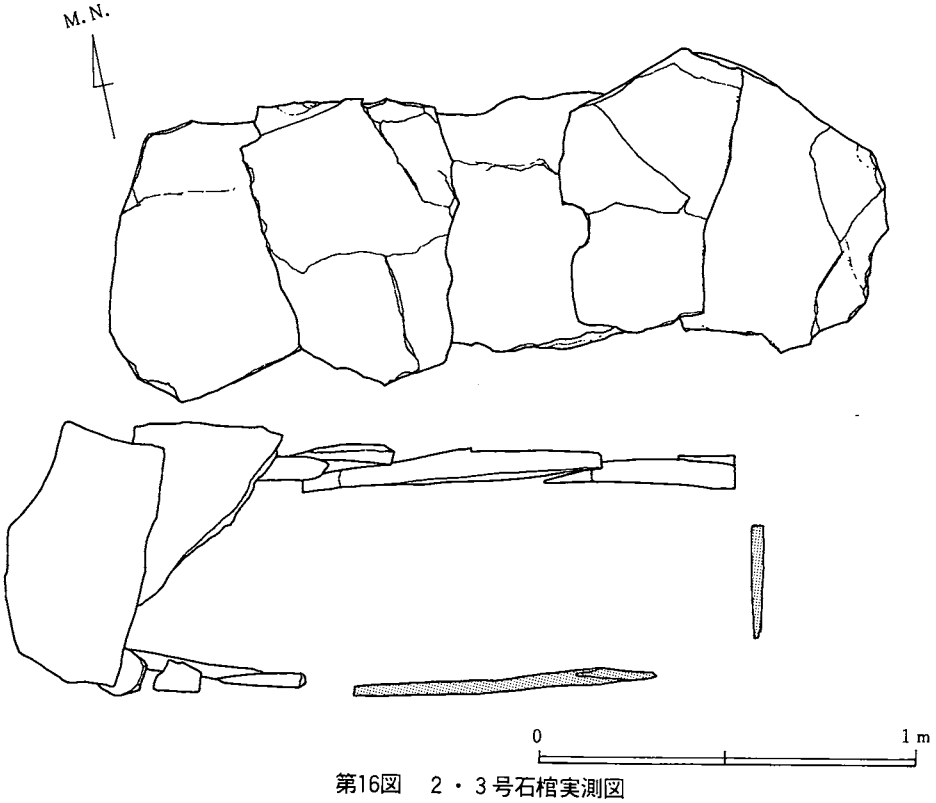
石棺発見時の状態　蓋石は西側小口上の2枚を除いて，重機により大部分を欠失していた。すなわち南側壁の東側および東小口石のうえ半分および蓋石の大部分は破損されており，しか



第14図　トレンチ配置図



第15図　１号石棺実測図



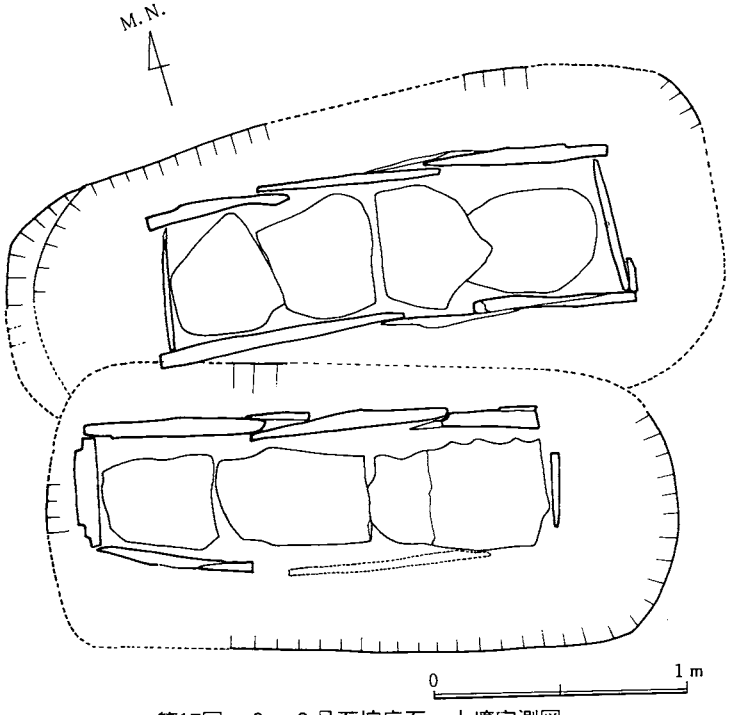
第16図　２・３号石棺実測図

も棺内には表土の黒色土が流入していた。しかし第一次調査時，床直上にビニールを敷き保護していた為，床の状態は良好であった。

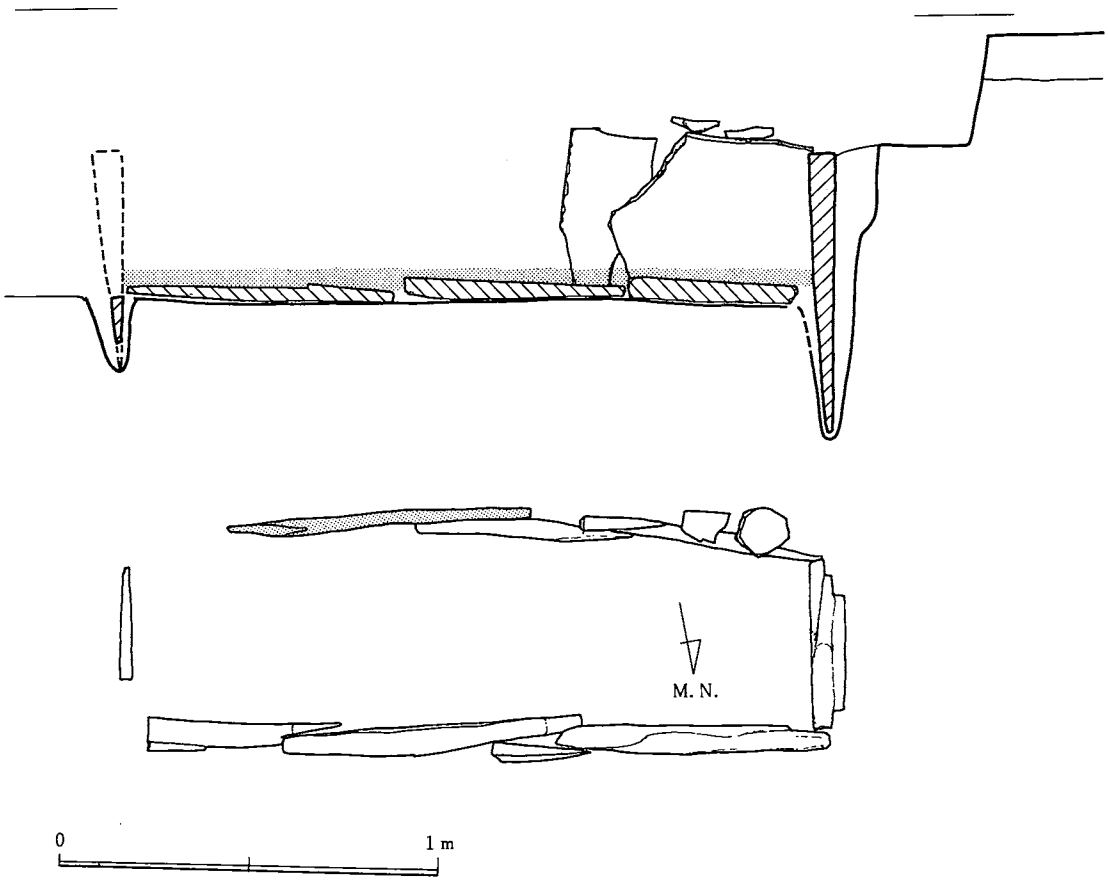
棺材の組み方　棺材は全て安山岩の平石を用いている。北側壁4枚，南側壁は推定4枚を用い，組合式石棺となす。全長1.81m，巾45～50cmをはかる。主軸はN－74°－Wをはかり，大略東西を示す。石材の組み方の順序は，北側壁では3枚の平石を西から東に並べていったようである。

石棺を裾えるための土壙は楕円形をなすが，石棺はやや南側に構築されている。これは2号石棺を築くとき，既に北側に3号石棺があったので，それをよけて構築したためである。土壙は東西2.5m×南北1.1mをはかる。棺を組み合わせるにあたり，東西小口と北側壁の石材の下部を溝状に掘りくぼめて，板石を安定ならしめているが，南側壁下には溝はなく，棺床面と同レベルである。北側壁下部の溝との間隔は，黒色粘土をもって固めてある。南側の土壙の埋土は褐色土，黒褐色土，黒色粘土の厚さ5～10cmの互層であるが，中位の黒色粘土中に，おびただしくベンガラを含んでいる。これは石棺内ばかりでなく土壙にも意識的にベンガラを散布した事を示している。石棺の床には3枚の四辺形の平石を，小口部を合わせて並らべ敷く。側石と平石のすきまは黒色の粘土で埋め，平石上面と同じ高さとする。

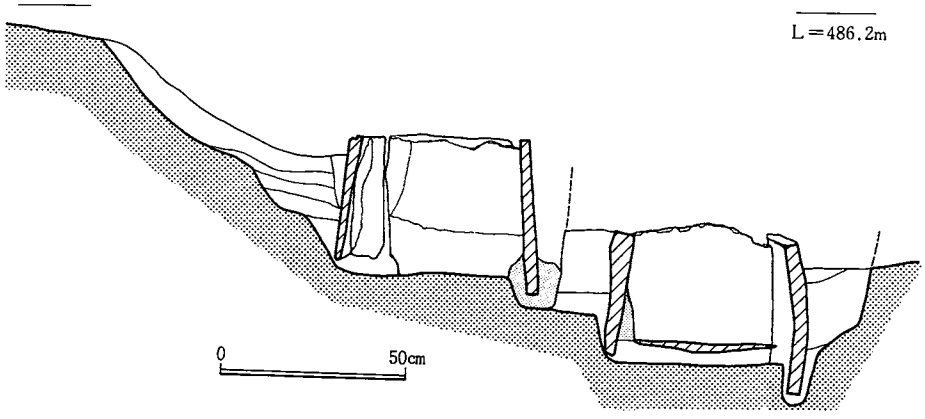
ベンガラ　現状では石棺内壁の一部を除いて，ベンガラの付着はあまりみられなかったが，他の石棺の状態からみるならば，元来あったものが剝落したと思われた。南側の西側壁には，ベンガラの塗布痕が明瞭に残っている部分がある。右下りに巾2.5～3cmの単位のものが4条観



第17図　2・3号石棺床石・土壙実測図



第18図　１号石棺実測図



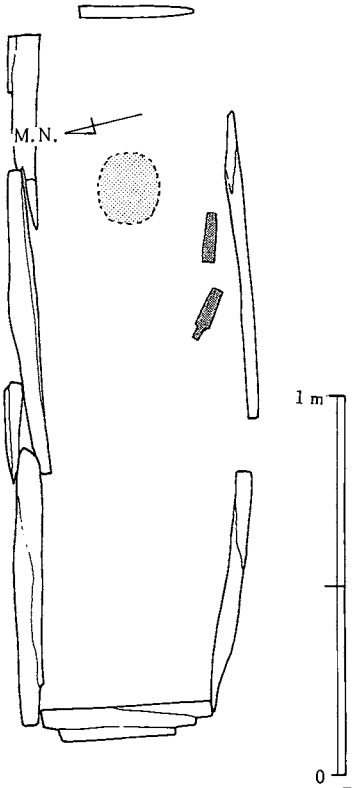
第19図　２・３号石棺断面図

察できた。1条の中には小さな条痕が多くみられ，小さな刷毛を思わせた。床面には平石の上に約2cmの厚さで白色粘土を置き，その上にcmのベンガラが敷いてあった。ベンガラの重量kgを計る。また天井石の裏面にもベンガラが付着していた。

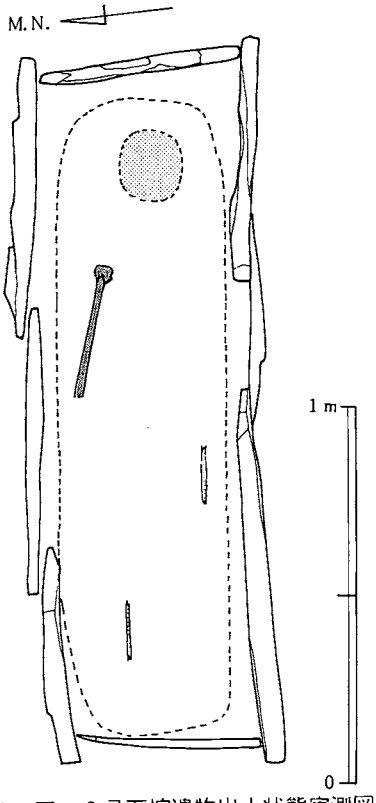
人骨と副葬品　人骨は風化が著しく，チョークの粉状となり，取り上げは不可能であった。東を頭位と推定される骨の残存状態が観察できた。南壁に把を西にして，短剣が2片に割れ出土した。

3号石棺（第17・19・21～23図）

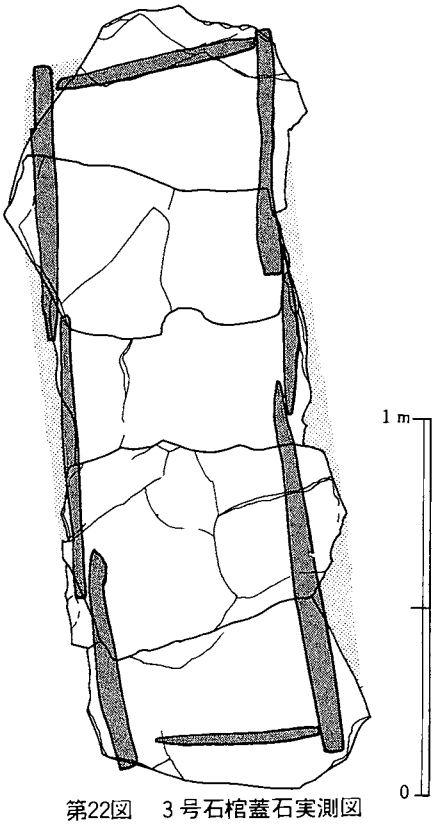
棺材の組み方　安山岩の組合式石棺で，全長1.76m，巾50～55cmをはかる。主軸方向はN－83°－Wである。5枚の蓋石のうち，まず大きな平石3枚を石棺の上部に並べるが，それらの間



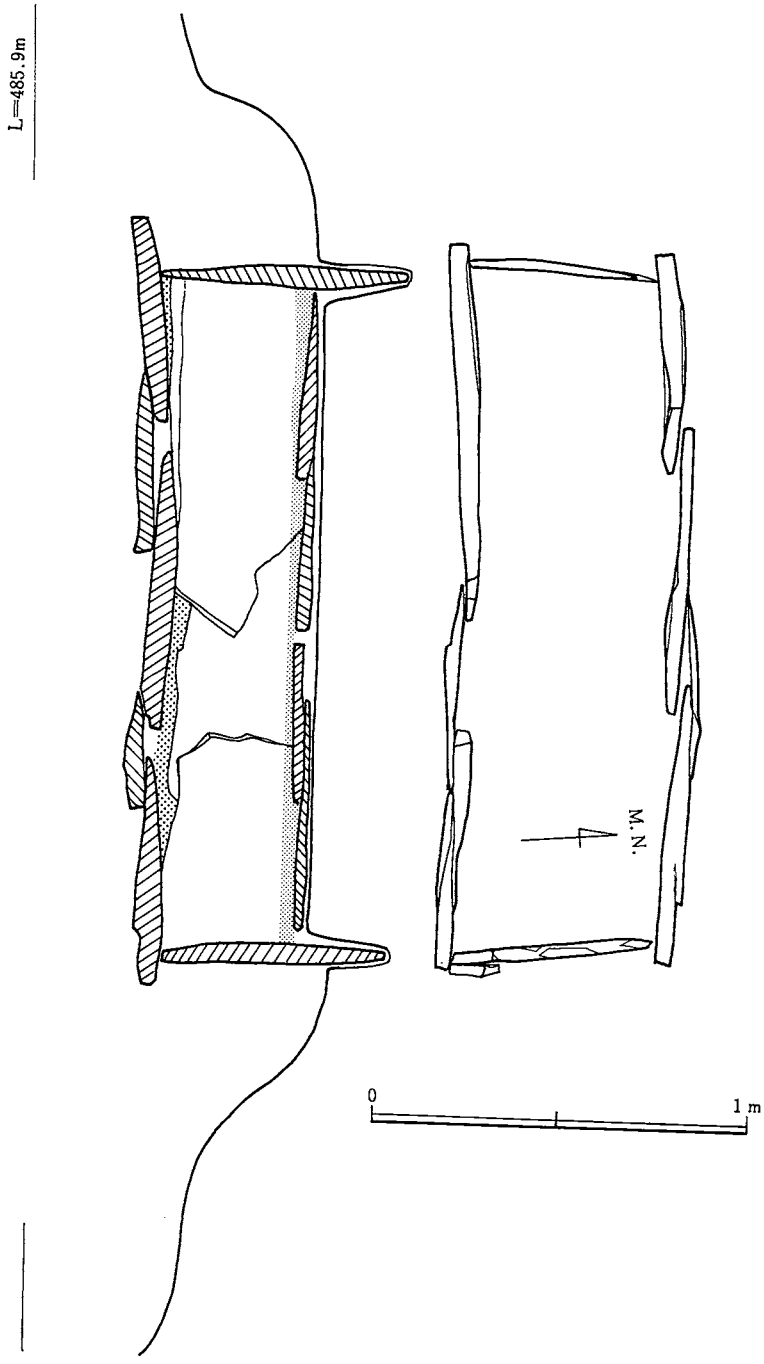
第20図　2号石棺遺物出土状態実測図



第21図　3号石棺遺物出土状態実測図



第22図　3号石棺蓋石実測図



第23図　３号石棺実測図

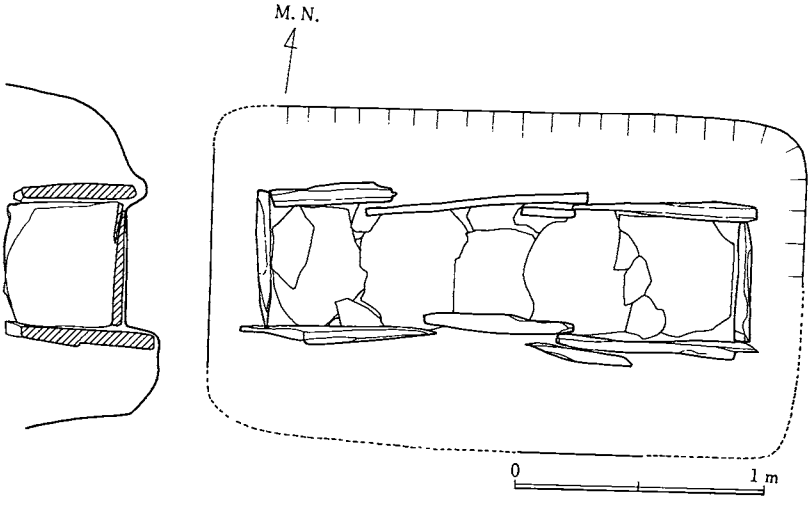
には空隔が生じるため，さらに2枚のやや小さな平石を置きすきまを密封する。蓋石の並べ方をみると，北側をそろえているため，北の蓋石側辺は直線となり，南側では不ぞろいとなっている。

蓋石を除去すると，棺内には半分迄黒色土が流入していた。側壁の上部および側壁石の継目は，白色粘土で目ばりがしてあった。

側壁は北側4石，南側3石であるが，北側の4石のうち1石は裏込めの役割をなすもので，小さめの板石が使用してあり，北側壁も実質的には3石である。南側壁の西側には，石棺長の約半分に達する平石を用いている。南側壁は，東西の小口と接する部分の側壁をまず置き，最後に中央の側壁を外側（南側）に置いている。一方南側石をみると，西側から順次東の方へ置いていったようにみえる。左側壁の中央の石は，高さが両側の2石より低いので，それを補うため白粘土を積んで高さを揃えている。石棺の全体形は上方から見ると，石棺長軸に対して西側がやや南に湾曲している。床面の下部には平石4枚を配列している。

ベンガラ　石棺の床には厚さ15cmのベンガラが敷いてあり，重量は30kgをはかった。棺内の四周にもベンガラが塗られていたが，この場合直接ベンガラを石面に塗布するのではなく，まず白粘土を側壁にぶ厚く塗り，その上にベンガラを塗っている。したがって，当初の石棺内部の状態は，一種の粘土槨のごとき様子であったと思われる。しかし，粘土と壁面との密着は長く保たれず，白粘土はベンガラを付着させたまま剝落しているのが多くみられた。ベンガラは棺の内壁ばかりでなく，側壁の上端および棺蓋にも付着している。

人骨と副葬品　人骨は風化が著しく，チョークの粉状となっていたが，頭位は東と判断された。また，両側壁に大腿骨とみられる骨粉が存したが，取り上げられる状態ではなかった。北側壁に並行に鋒を東にした剣1振があった。

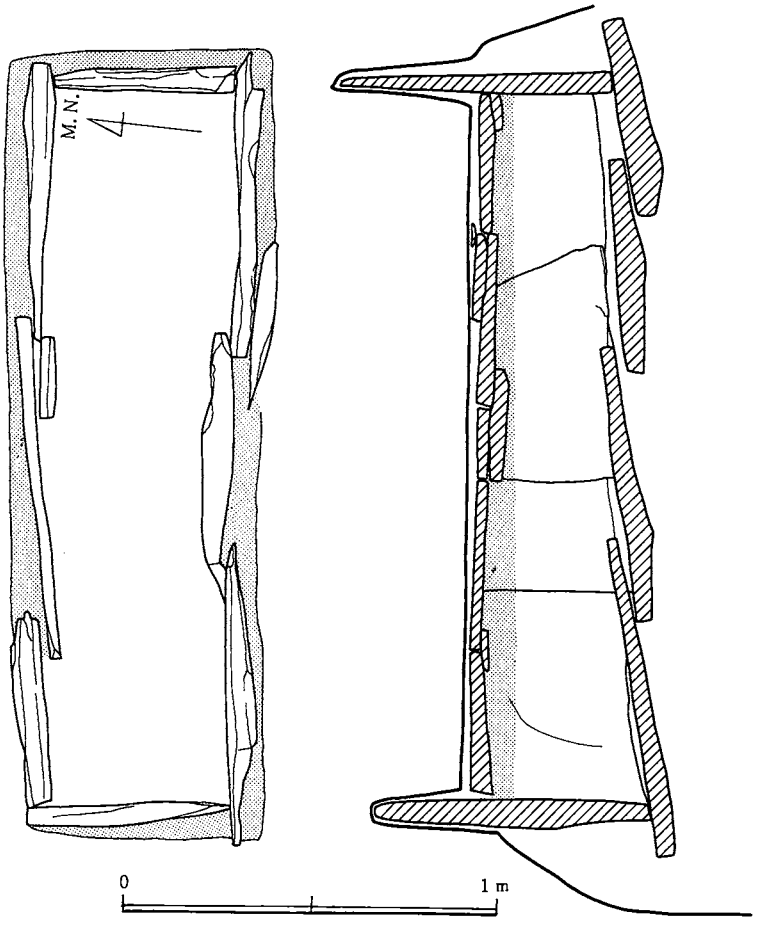


第24図　4号石棺床石・土壙 実測図

４号石棺（第24～27図）

棺材の組み方　安山岩の組合式石棺で，全長1.88m，巾50cmをはかる。主軸方向はＮ－85°－Ｅである。４枚の蓋石を東小口部から西の方へ順に覆せている。棺身の長側壁は４枚で作られている。このうち１枚は小型で大きな平石３枚の補足として用いられているので，基本的には３枚の側壁であるとみることができる。北長側壁は，１方から配列していったがごとく，石の一端が重なっている。南長側壁では両小口部に平石を置き，最後に中央の平石で連続する。

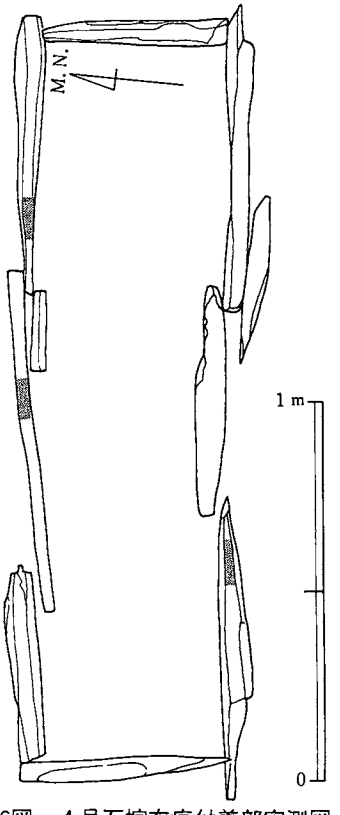
床面にも平石を置く。大振りの４校の平石を並べて，その上に小石を置く。４号石棺の床石は，２・３号と違い，かならずしも上面が平坦にそろっていない。石棺を裾える為の土壙は，平面形が長方形をなし，東西2.40m，南北1.35m をはかる。側壁を裾える部分は，床面と比して約30～40cm深く掘り下げている。石棺側壁外面は白色粘土を５～10cmの厚さで補充して，密封する。



第25図　４号石棺実測図

ベンガラ　石棺内には上部まで黒色土が流れ込んでいたが，それを除くと粘土混りの黒色土があり，その下にベンガラ面（床面）があった。ベンガラは，内部だけでなく壁面の上端，すなわち蓋石と接する小口部にもみられた。側壁石の上端には，他の石棺と同じように白色粘土が置かれていたが，南北の3ヶ所で白色粘土の上面に布圧痕が観察できた。この圧痕の織り目は細く平織とみられる。

人骨と副葬品　人骨は残っていなかったが，東側に骨粉がみられた。頭骨だと思われる。石棺の中央部近く，ベンガラ床面上から鋒を西南方に向けて剣が出土した。



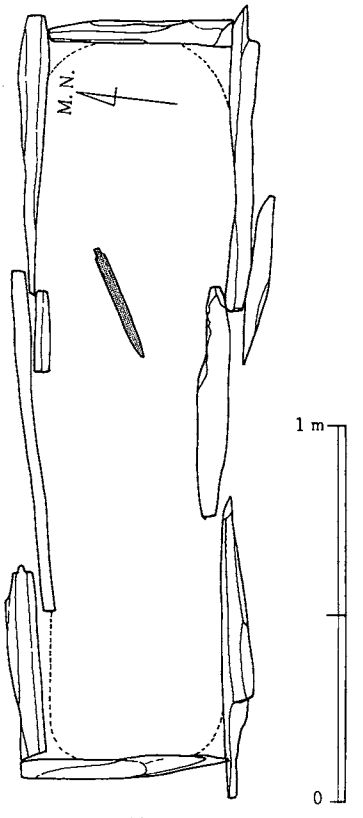
第26図　4号石棺布痕付着部実測図

石棺および石棺周辺出土品（第28～31図）

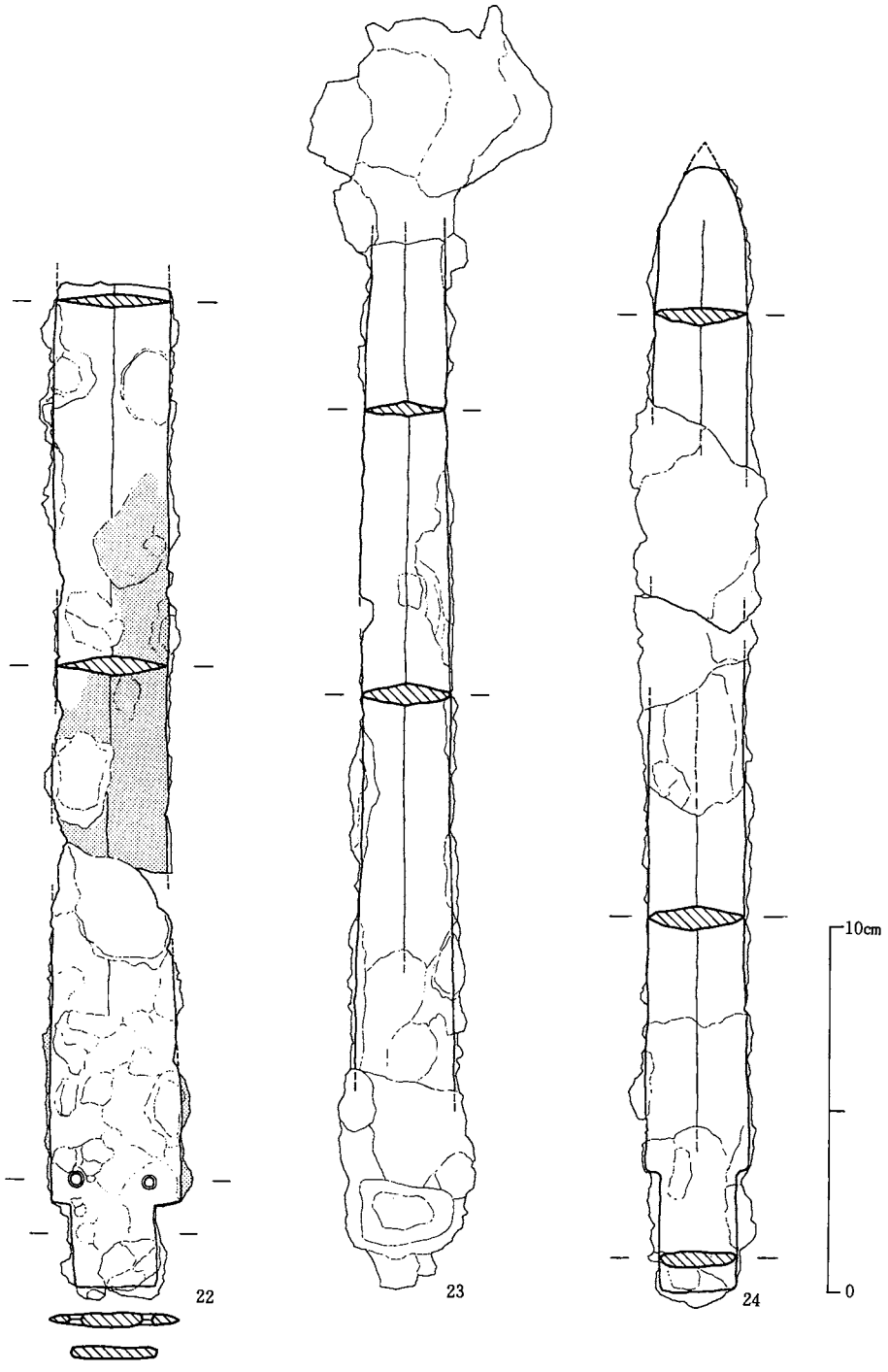
鉄剣　2～4号石棺から1本づつ剣が出土した。2号石棺の剣は，2つに折れ離れた状態で出土した。先端と莖の先を欠失している。全長27.2cm，幅は莖 2.3cm，身の基部で 3.6cm，先端部で3cmをはかる。身の基部に2穴を持つ。身部に布痕の付着がみられる。3号石棺の剣は先端と莖部は錆により形状不明。全長30cm前後。細身の剣で，基部で幅 2.7cm，先端近くで2cmをはかる。一部に布痕が残っている。4号石棺出土剣は全長31cm。全体錆が多く付着している。身部幅は基部近くで 2.8cm，先端で2.6cmをはかり，ほぼ一定。莖長3.2cm，幅2.1cm。布の有無は錆のためよくわからない。

玉　青色をなすガラス小玉。形は完全な球形ではなく，やや台形状にひずんでいる。全長0.5cm，穴径0.25cmをはかる。重量は0.15gである。

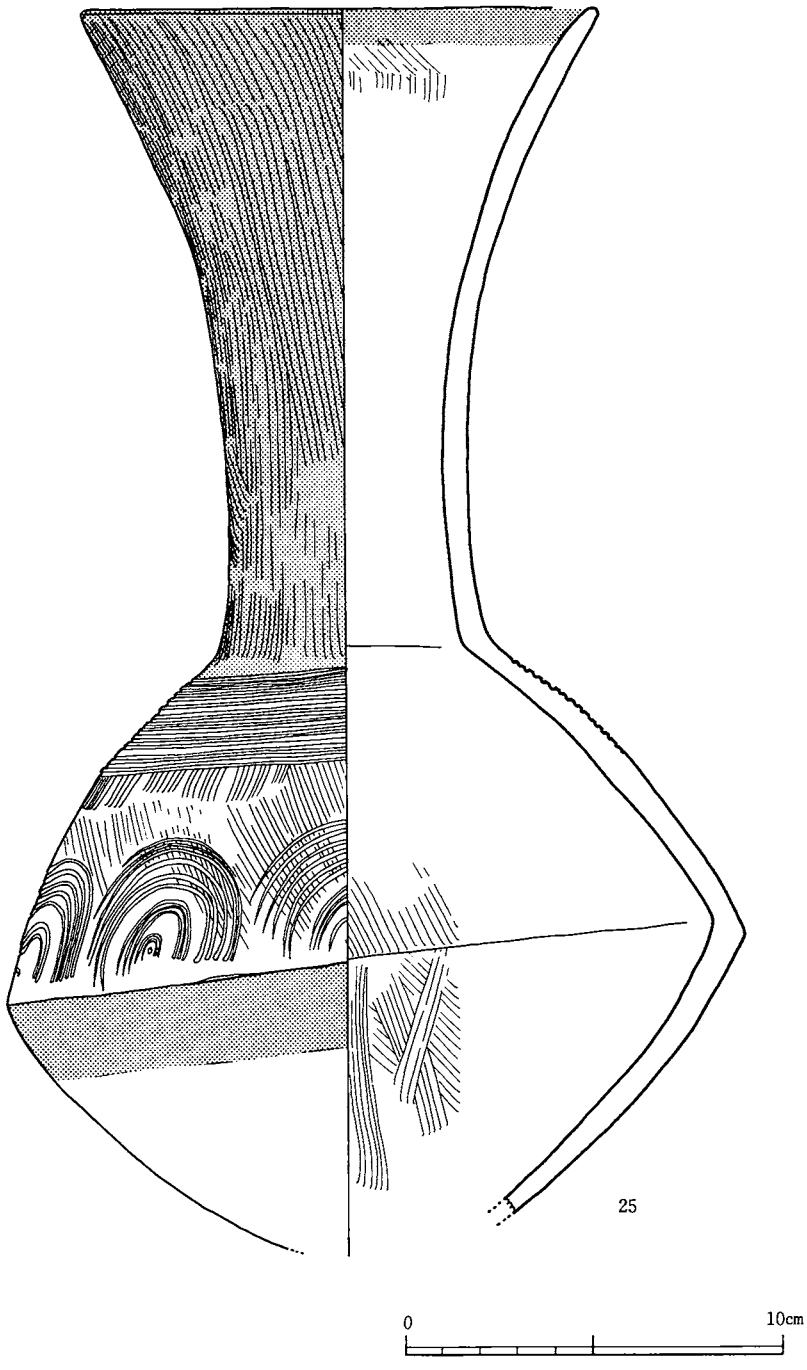
土器　石棺の周辺にトレンチを入れて，遺構の有無などの確認作業をしたが，その折，3号石棺の北側24mのところから出土した。**25**は重弧文をもつ長頸壺で底部を欠失。意識的に穿孔したかどうかはわからない。ラッパ状に開く頸部はタテ方向の研磨状のナデ，そろばん球



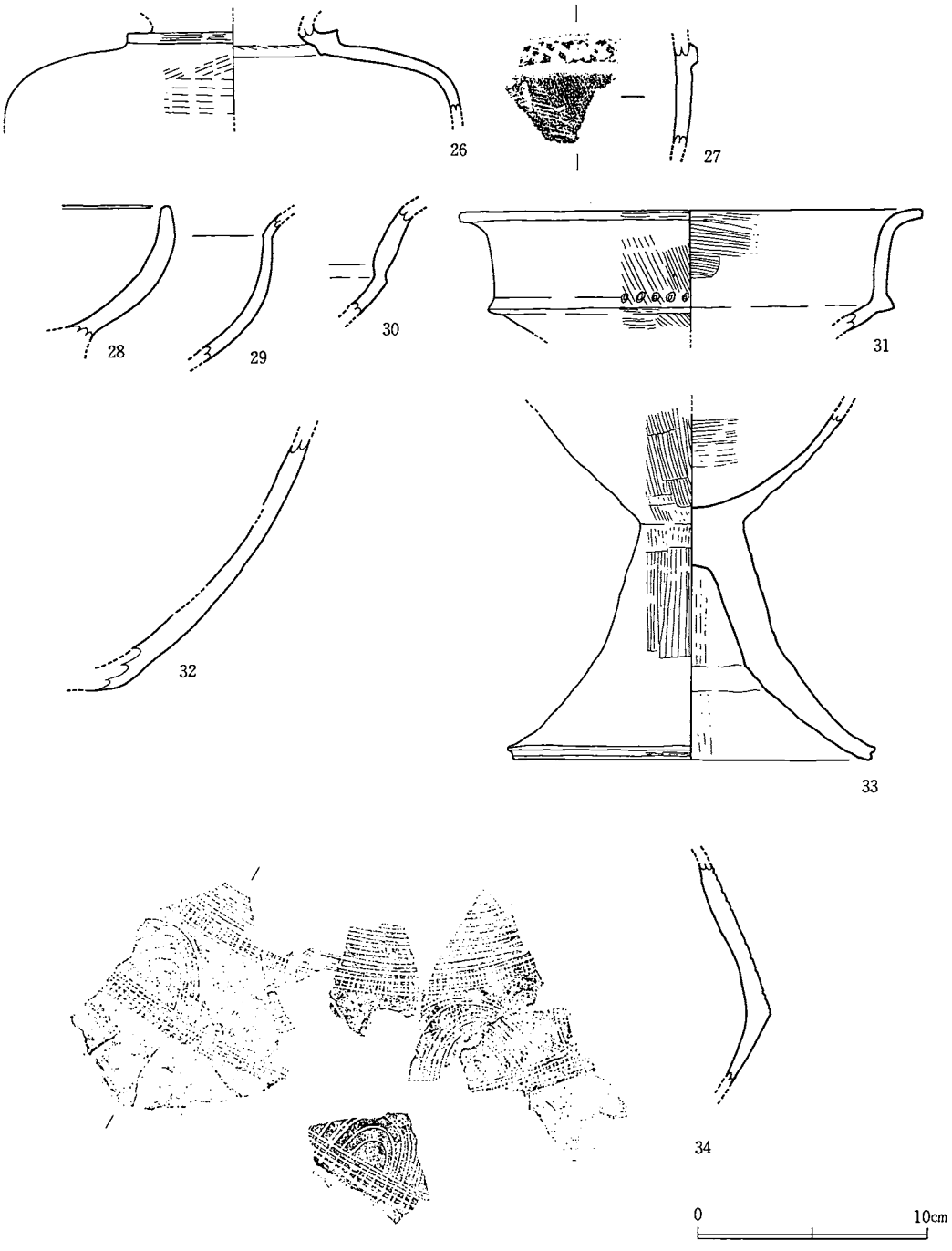
第27図　4号石棺遺物出土状態実測図



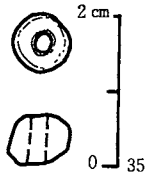
第28図　石棺内出土鉄剣（左２号・中３号・右４号出土）実測図



第29図　3号石棺北側出土土器実測図（その1）



第30図　３号石棺北側出土土器実測図（その２）



第31図　１号石棺ガラス玉実測図

状の胴部の上半には，ハケ目調整の上に上下に文様を持つ。上部は連続した15本の沈線文，下部は10個の重弧文をもつ。胴部下半はよく調整されていて平滑である。頸部および胴部の屈曲部のすぐ下に彩色をもつ。**26**は表面はハケ目調整をヨコ方向ならびに斜に行ったあとミガキを施す。一見うるしの如き黒色をなす。内面はヨコ方向のナデ調整。**27**は胴部の破片で突帯の部分。突帯上には交互する沈線をもつ。**28**は台付の鉢。**29・30**は高坏の坏部破片。**31**は壺の口縁部。口縁部の下半に円穴状の刺突がある。**32**は壺胴部。**33**は高坏の脚部。表面に荒いハケをもつ。**34**は重弧文土器の胴部破片。重弧文は1本づつ刻む。

まとめ

①下山西遺跡の集落の存する丘陵の北東に，4基の安山岩の板石を使用した組合式石棺が存した。

②1号～4号の築造の順序は，切り合い関係より3号→2号→1号となるが，4号については，他のものと比較する手懸りを欠き，築造順番を明らかに出来ない。

③被葬者については2号～4号は一体埋葬と推定され，2号は小型棺であるので幼児の墓か再葬墓と考えられる。

④2号～3号墳からは，副葬品として各1本づつ鉄剣が出土した。1号墳からガラス小玉1個が採集されている。

⑤3号石棺の北方から，特異な形の壺，高坏が出土し，これを石棺に対する祭祀用の土器とみる事が可能である。

⑥石棺内にはベンガラが多量に用いられていた。これは近くに産出地をもつためであろうと考えられる。なお，各石棺のベンガラ重量は2号・40kg，3号・30kg，4号・35.5kgであった。

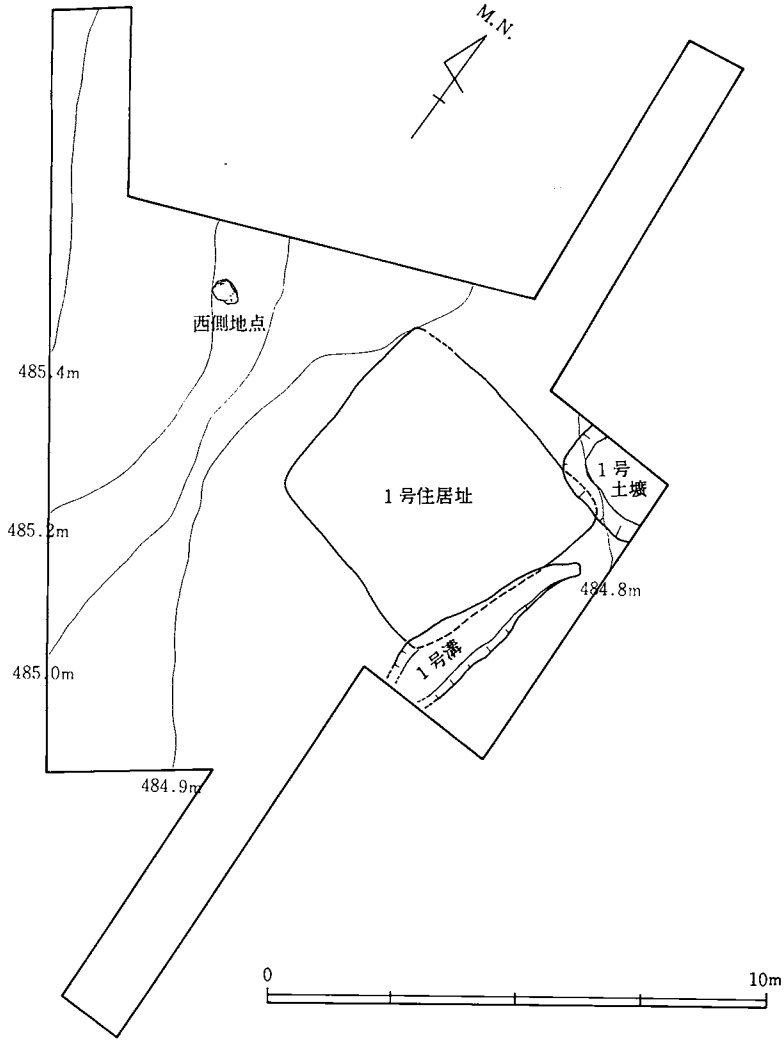
⑦3号石棺のように，石棺内に粘土を厚く塗布する例は，通有の組合式石棺と様相を異にしている。

第３節　Ⅲ—Ｃ・Ｄ区の調査

１．Ⅲ—Ｃ・Ｄ区の調査概要について　（第32図）

１号，２号試掘トレンチにより，この地区では住居址のラインが一部確認されたために，次の方法で調査区を拡張した。まず１号，２号トレンチの間をつなげて，遺跡を面的に確認するように努めた。これにより１号トレンチ西側に住居址の遺構ラインが検出されたため，トレンチ東側部分をさらに拡張した。なお近世墓地（北）側にも，試掘のグリッド（1.8m ×1.5m）を設定したが，直下では熔岩の岩盤が現われ，遺構は確認されていない。

Ⅲ—Ｃ・Ｄ地区では住居址１軒，土壙１基，溝状遺構１基が検出された。以下順次説明を加えたい。



第32図　Ⅲ－Ｃ・Ｄ区内遺構配置図

(1)　1号住居址（第33図）

Ⅲ－C・D区内に位置し，試掘1号トレンチが南北方向に本住居址の中央部を走っている。1号溝遺構，1号土壙が，住居址東側を切っている。本住居址は単独に検出されたものであり平面形態は直方形である。主軸の方向は東西であり，その方位はN－72°－Wを測る。平面規模は長軸方向5.2m，短軸方向4.6m，床面積20.1㎡となる。壁高は西側が55cm，東側が50cmであり，試掘トレンチの断面観察によれば，殆んど上面は削平されていないことになる。主柱穴は2本である。PIT．2は平面径65cm，PIT．1は平面径50cmとやや小型になるが，柱穴内には盤石を持たない。炉は中央部より南側に偏って1基確認される。炭化物の散布は微量である。ベッド状遺構及び貯蔵穴は検出されていない。

住居址の覆土は別図の通り全5層となる。1層の黒色土は住居址が最終的に埋没した段階に住居址中央部付近の凹地に堆積した土層である。最下層の5層黒褐色土は泥炭に近い黒色土であり，床直上に薄く埋積する。

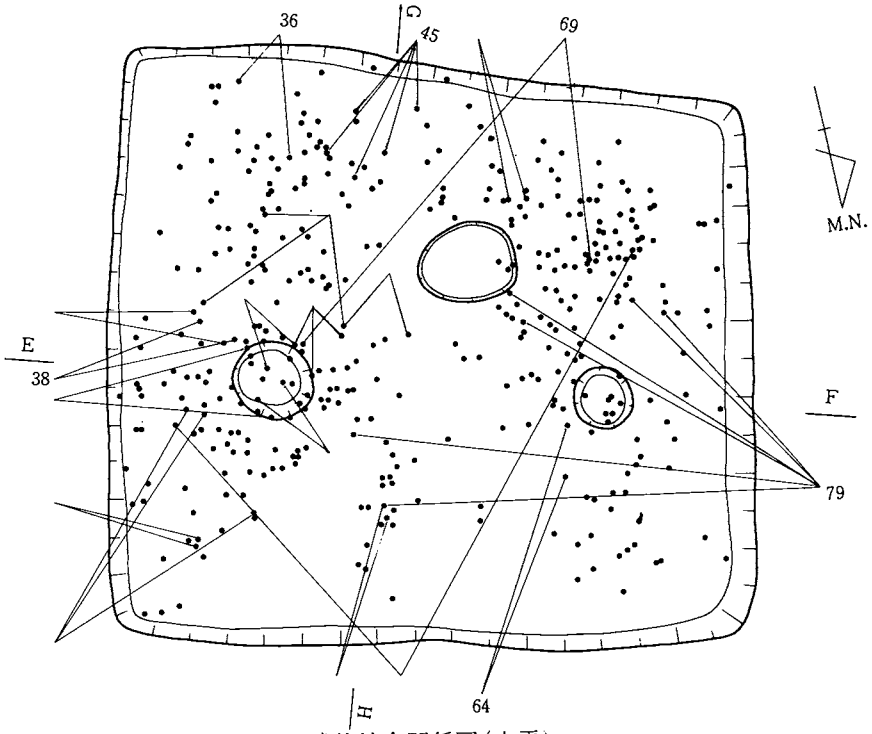
遺物の出土状況は次の通りである。住居址中央部の試掘トレンチにより，完全にこの箇所が消失しているが，周辺部より多量の土器類が出土する。第33図左側は上，中層からの遺物の出土実測図であり，右側は下層及びベルト部分からの出土実測図である。上，中層からは330点にもおよぶ多量の土器が出土する。小破片以外にも大型の破片が多く36～38，46，48，54，55の甕64，65の壺及び79である。多量の土器類を廃棄したものと思われる。中でも特異な例として79の完形の免田式土器の出土例があげられる。1次調査の際にトレンチ内より，この壺の上半分が出土した。今回の2次調査で出土状態が確定されたのは底部の資料であり，これらは復元で完形となる。底部資料の出土状況として部分的に散逸し，西から東へ流れるが，一箇所に集中する傾向が見られる。断面観察では住居址の埋設の最終段階に，住居址中央部が窪み，そこに破片が集中する。下層には厚さ5cm弱の炭化層が見られる。このことから，火を燃やした後に免田式土器を置くかもしくは，その面に投棄したとも考えられる。下層からも多くの資料が出土する。ほぼ形状の判明する資料として45，47，49，61，62の甕及び，63，76の壺があげられる。ほとんどが床直上の資料であり時期一括資料として取り上げができよう。番号を付して取り上げた遺物は総数470点に及び，その内図化した資料は86点である。ここでは44点を掲載した，内訳は甕27点，壺16点，高坏1点である。

第33図上段には本住居址内での遺物数の出土状況及び接合関係を示した。番号を付して取り上げた資料1点を，1ドットで示す。さらに垂直分布において，位置関係は一致するように示した。水平分布における接合関係では，多くの資料の場合，遠地点での接合は少なく，流れ込みの状況は伺えない。ただし79の資料のみは，本来の位置（最下部がカーボン層の上に乗る形で検出された地点）からやや離れた地点での接合も見うけられ，特異な状況である。一方垂直分布では2面で分布図を作成したが，ほとんどは各層ごとの接合関係となる。ただし，ここでは

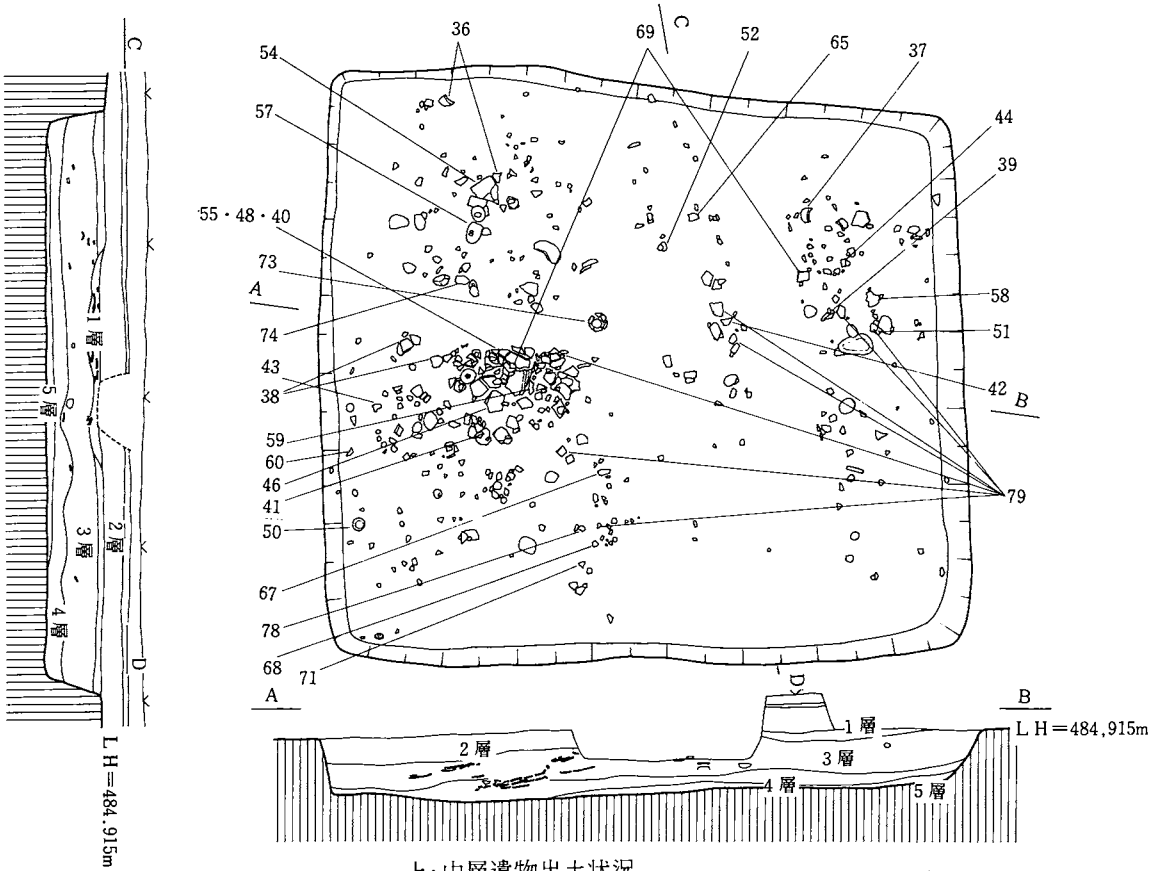
79については，器形が大型であったためかやや離れたレベルでの接合関係も見られ，特異な状況と言えよう。本住居址においての廃棄状況では，最下層の資料については住居址本来の時期のものと考えられ，その後，埋没と共に定期的に遺物類が投棄されたものと考えられる。そして，住居址中央部がわずかに窪んだ段階で，免田式土器が祭祀的状況（？）で投棄されたと考えられる。

1号住居址内出土土器（第34～38図）

36は甕である。残存½での復元。口径18.8cm,残存高9.2cmを測る。外面上位はヨコ方向の刷毛目調整を，下位はタテ方向の刷毛目調整を施す。口縁部内面は斜方向の刷毛目の後に，部分的にナデ消しを行なう。胴部内面は斜方向の刷毛目の後にヨコナデで部分的に消す。**37**は甕である。口縁部外面のヨコ方向のナデ調整を施すが，その下位は器壁があれて調整不明。口縁部内面はヨコ方向のナデ調整，胴部内面はタテ方向の刷毛目調整を施す。**38**は甕である。残存½での復元。胴部が強くふくらみ，胴部最大径位置は下位になる。口縁部内外面はヨコ方向の丁寧なナデ調整を施す。胴部外面は鉄分の付着により観察不能である。内面は斜方向の大柄の刷毛目調整を施す。**39**は甕口縁部である。外面はヨコ方向のナデ調整を，内面は全面にヨコ方向のナデ調整を行なう。**40**は甕の口縁部片である。口縁部外面はナデ調整を，胴部はタテ方向の刷毛目調整を施す。**41**は甕の口縁部である。外面はヨコ方向の丁寧なナデ調整を，内面上位はヨコ方向のナデ調整，下位は斜方向の刷毛目調整を施す。**42**は屈曲の強い甕の口縁部である。口縁部外面はヨコ方向のナデ調整，下位は刷毛目調整を施す。口縁部内面はヨコ方向のナデ調整を，下位はナデで仕上げる。**43**は甕の口縁部である。口縁部内外面はヨコ方向のナデ調整を行なう。外面はタテ方向の刷毛目調整がかすかに確認できる。内面や斜方向の刷毛目調整を施す。**44**は甕の口縁部片である。口縁部外面はヨコ方向のナデ調整，胴部外面はタテ方向の刷毛目調整,内面は鉄分付着のための観察が不能である。**45**は甕である。口径26.1cm,胴部最大径30.4cm,残存高29.4cmを測る。胴部最大径が中位に位置する。口縁部の内外面はヨコ方向のナデ調整を施す。胴部上位は斜方向の刷毛目を行ない,部分的にナデ調整で仕上げる。内面やヨコ方向 ないし斜方向の刷毛目調整を行なう。**46**は甕である。胴部の張りが弱く，器壁は８～10mmとぶ厚い。口縁部外面は丁寧なヨコ方向のナデ調整を，胴部外面はタテ方向の細かい刷毛目調整を施す。内面上位には鉄分付着のため観察不能である。下位は斜方向の刷毛目の後，タテ方向の刷毛目を重ねる。**48**は甕である。口縁部外面はヨコ方向のナデ調整を，胴部外面には単位は不明であるが，刷毛目調整を行なう。胴部内面は斜方向の刷毛目調整を行なう。**49**は甕である。口縁部が強く外湾する。残存⅒での復元。口縁部外面はヨコ方向のナデ調整を胴部外面はタテ方向の刷毛目調整を施す。内面は全面にわたり鉄分が付着し観察不能である。**50**は甕の脚台部である。外面は丁寧なヨコナデ調整を施す。底部内面は不定方向のナデ調整，脚内面には砂粒が付着す

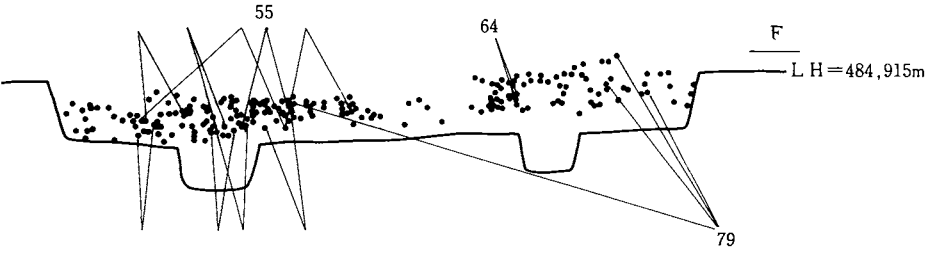


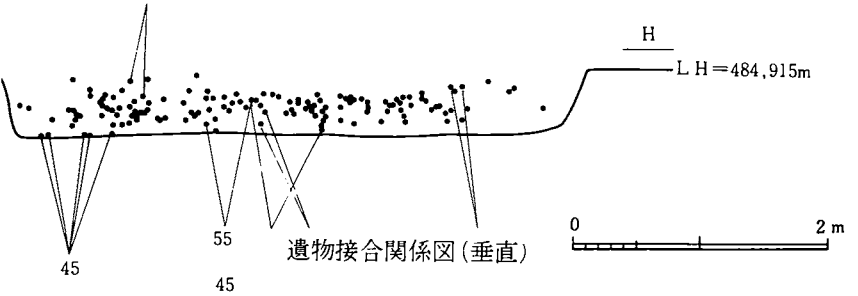
遺物接合関係図(水平)



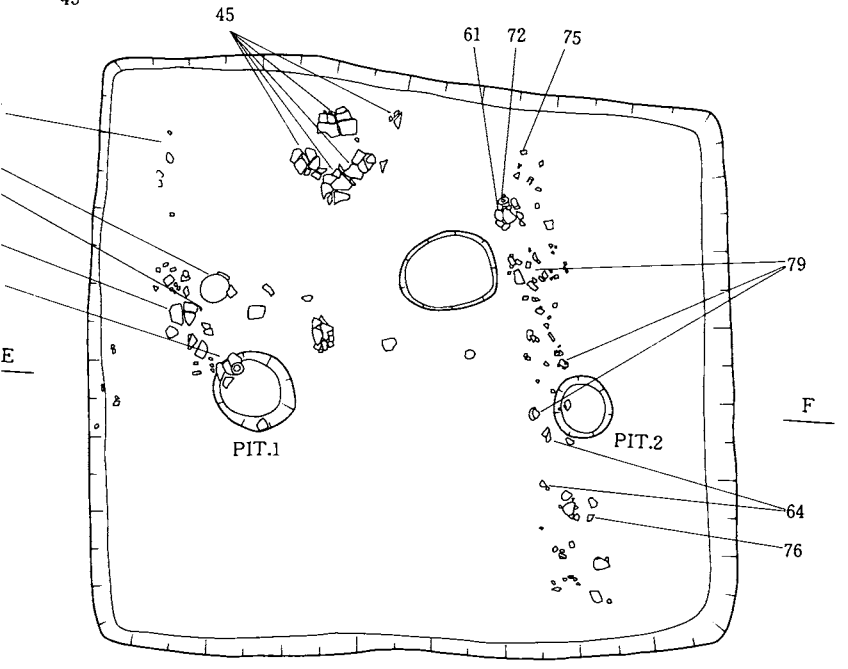
上・中層遺物出土状況

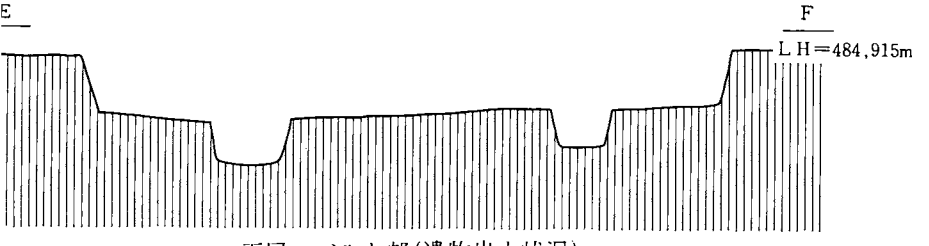
第33図　1号住居址実測図及び遺物出土





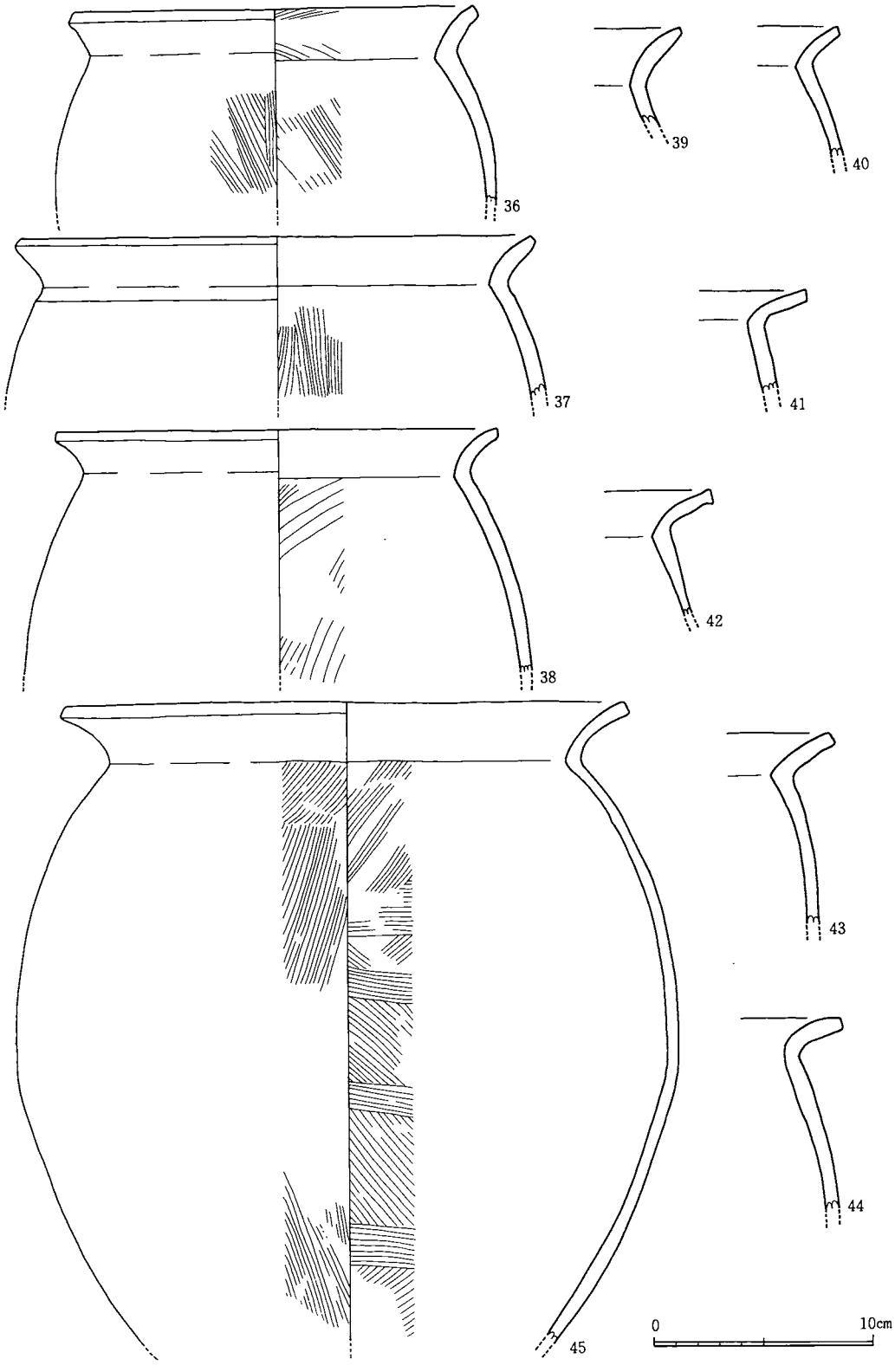
遺物接合関係図(垂直)



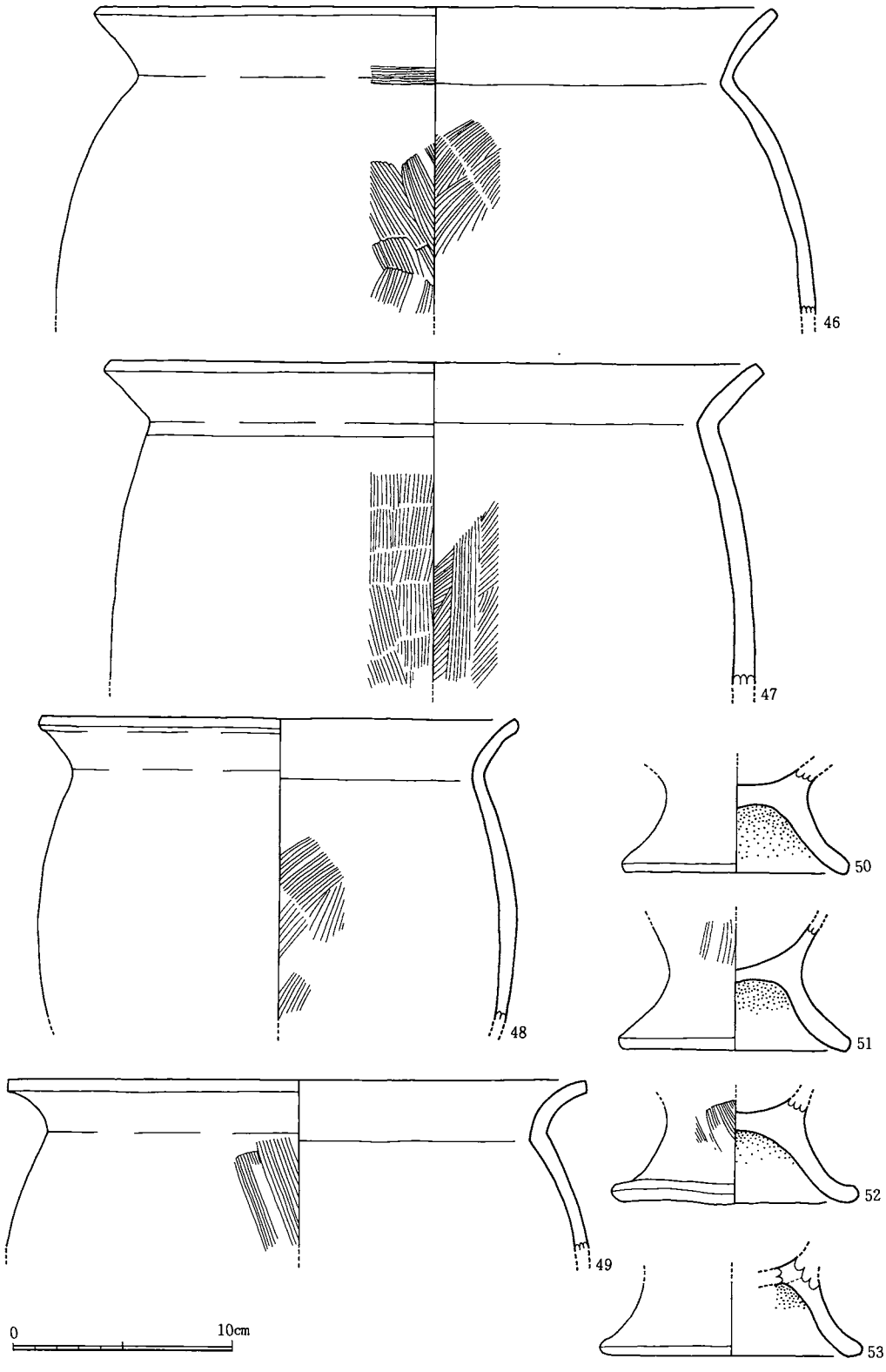


下層　ベルト部(遺物出土状況)

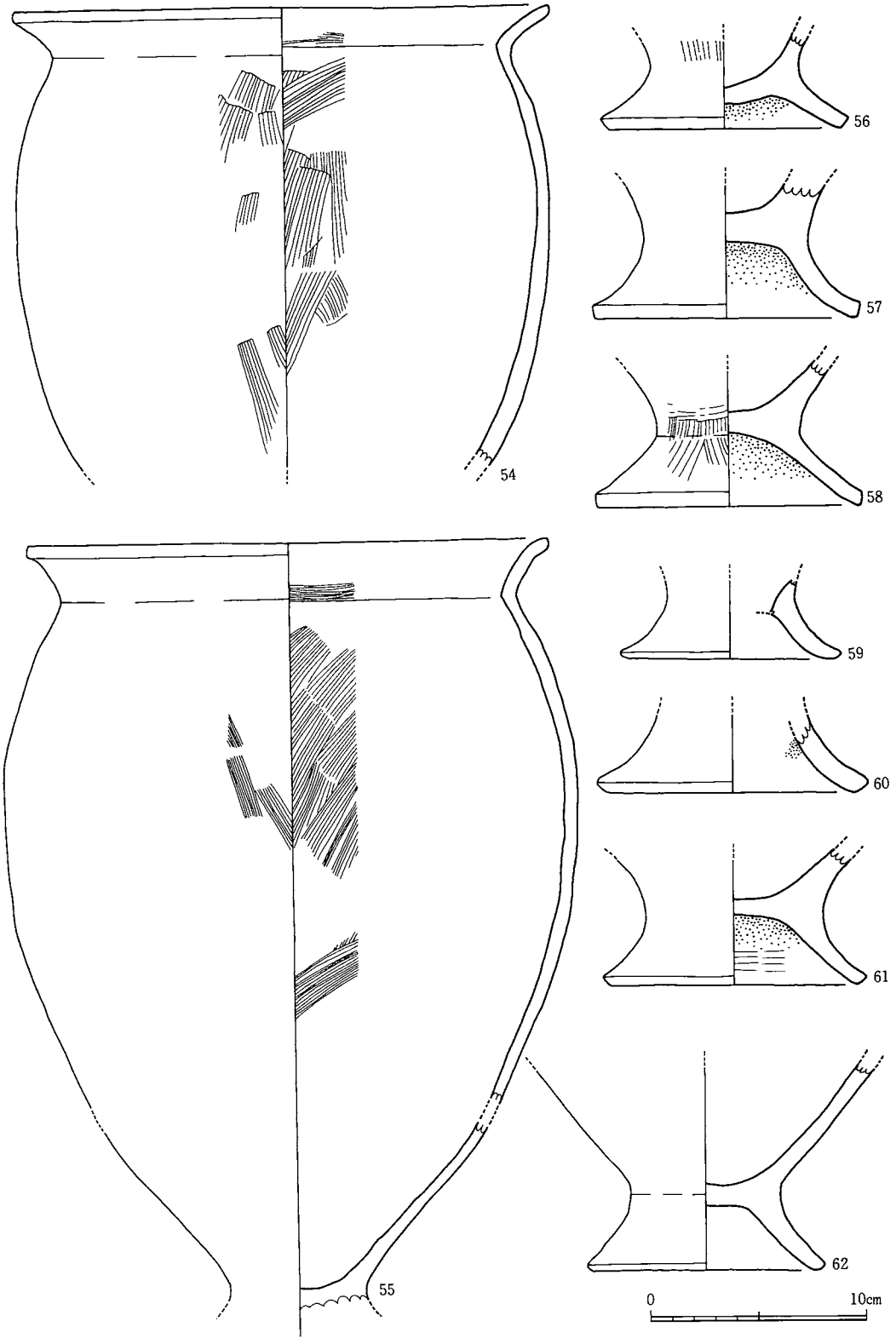
状況図



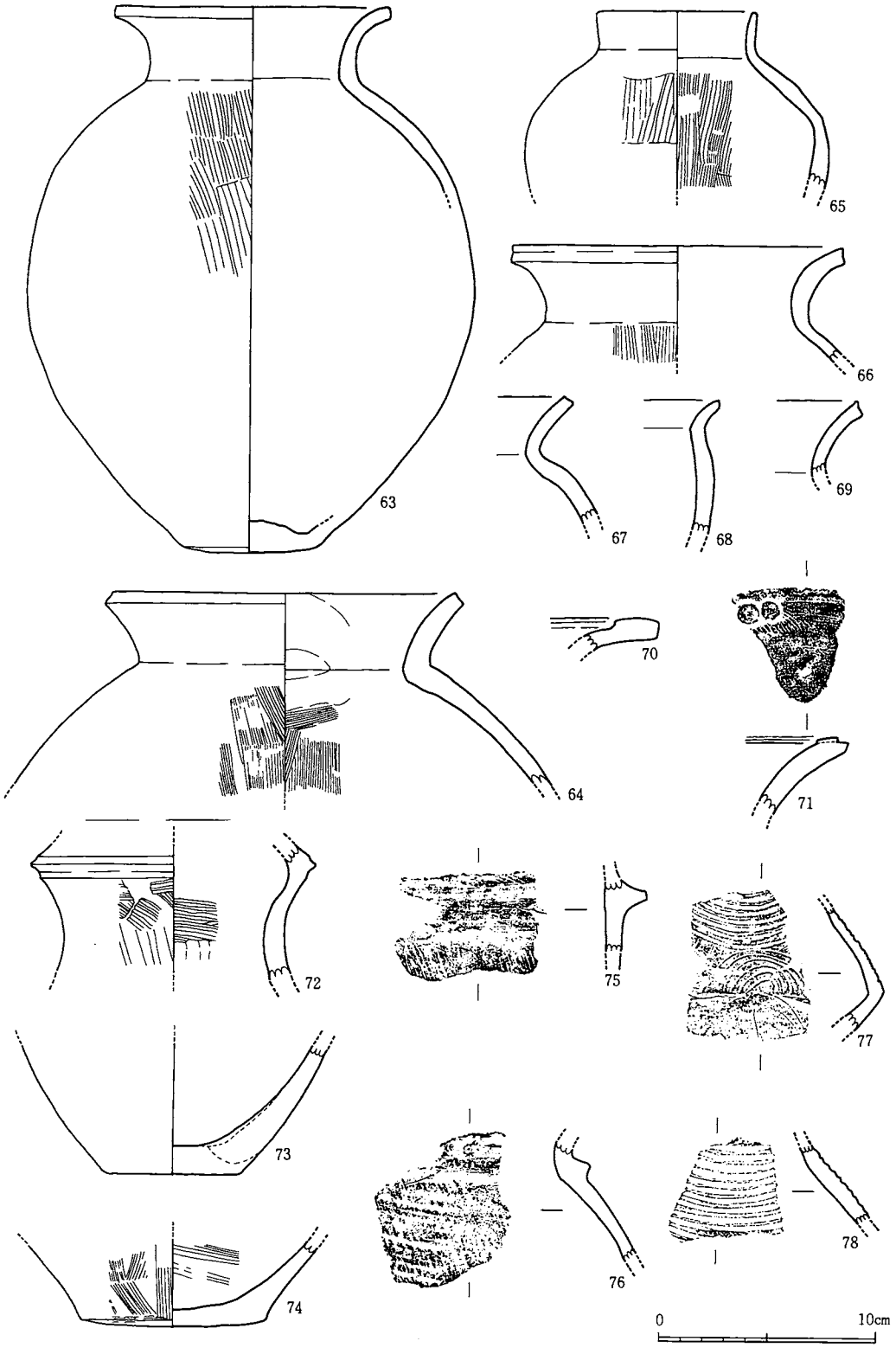
第34図　1号住居址内出土土器実測図（その1）



第35図　１号住居址内出土土器実測図（その２）



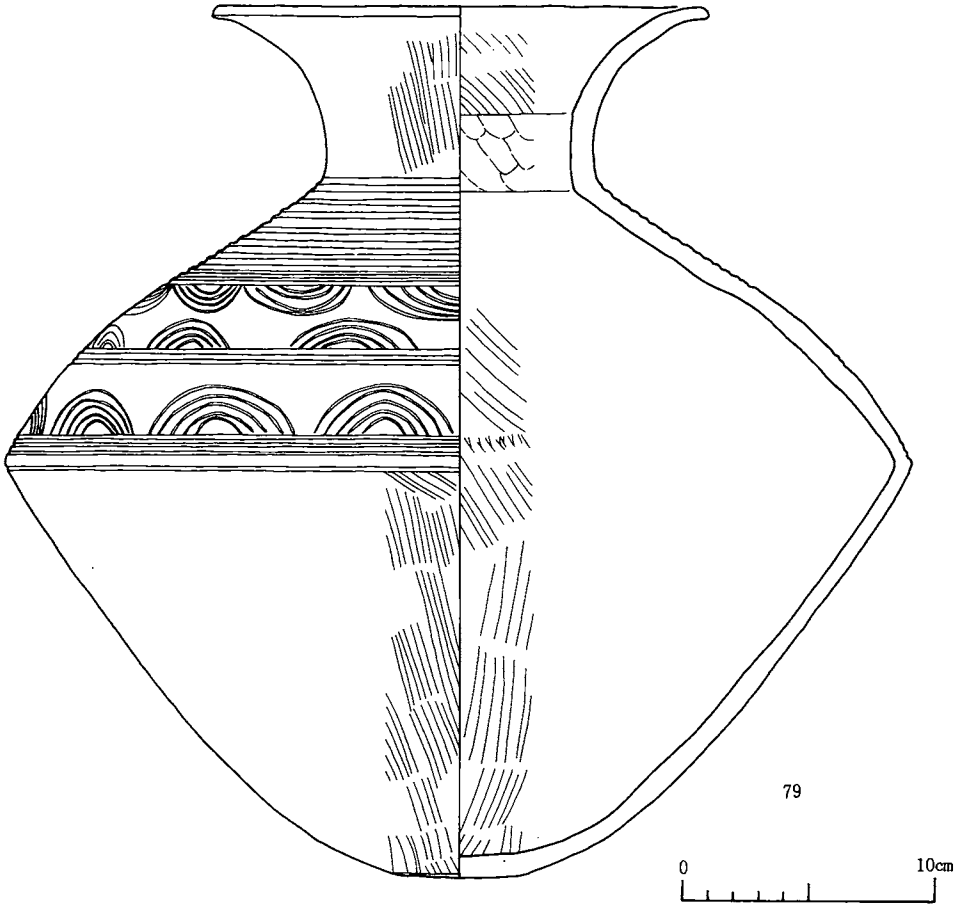
第36図　1号住居址内出土土器実測図（その3）



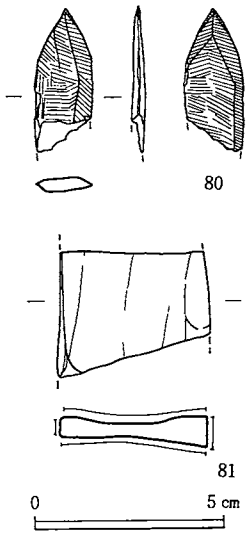
第37図　１号住居址内出土土器実測図（その４）

する。**51**は甕の脚台片である。器壁は薄く端部が肥厚する。外面上位はタテ方向の刷毛目調整，下位はヨコ方向のナデ調整を施す。脚台内面にはヨコナデの他小砂粒を多量に含む。**52**は甕の脚台である。焼成の際ゆがみが生じる。外面はタテ方向の刷毛目調整の後にナデ消しを行なう。脚内面には多量の砂粒が付着する。**53**は甕の脚台である。外面はヨコ方向のナデ調整，内面は砂粒が付着しており，ヨコ方向刷毛目調整を一部施す。**54**は甕である。頸部のくびれは強く窪む。外面はタテ方向の刷毛目調整を重ねるが，鉄分の付着により詳細な観察はできない。口縁部内面はヨコ方向のナデ調整，胴部内面は斜方向及びタテ方向の刷毛目調整を重ねる。**55**は大型の甕である。脚部及び胴部の一部が欠損し接点は見られないが，同一個体と判断される。口径24.4cm，胴部最大径26.8cm，残存高35.6cmを測る。口縁部は強く外反し，胴部の最大径位置は中位置である。口径部は内外面ともヨコ方向のナデ調整であり，胴部には全面に鉄分が付着し，刷毛目調整がかろうじて観察できる。内面の斜方向の刷毛目調整を施すが，一部ナデ消す。接合資料である。**56**は甕の脚台である。外面上位はタテ方向の刷毛目調整，下位はヨコ方向のナデ調整を施す。底部内面は不定方向のナデ調整，脚台内面には砂粒が付着し，ヨコ方向のナデ調整を行なう。**57**は甕の脚台である。接合部分の器壁が1.8cmと厚い。外面はヨコ方向のナデ調整で仕上げる。底部内面は不定方向のナデ調整，脚台内面には砂粒が付着しており，ヨコ方向のナデ調整を加える。鉄分が多量に付着。**58**は甕の脚台である。外面上位はヨコ及びタテ方向の刷毛目調整を施す。底部内面には不定方向のナデ調整，脚台内面はヨコ方向のナデ及び不定方向のナデ調整を行なう。内面には砂粒が付着する。**59**は甕の脚台部である。甕底部への貼り付け状況が判明する資料である。外面はヨコ方向のナデ調整を，内面はヨコ方向のナデ調整及び指圧による支持を行なう。鉄分が付着する。**60**は甕の脚台である。外面はヨコ方向のナデ調整を，内面は少量の砂粒が付着するが，不定方向のナデ調整を施す。**61**は甕の脚台である。外面には多量の鉄分が付着して観察不能，底部内面はナデ調整，脚台内面はヨコ方向の刷毛目の後ナデ調整を施す，なお脚内面には砂粒が付着している。**62**は甕の脚台である。外面はヨコナデ調整と考えられるが器壁が粗れ，観察しづらい。底部内面の鉄分付着のため観察不能である。脚台内面はヨコ方向のナデ調整が基本となるが一部斜方向の刷毛目調整が残る。**63**は完形の壺である。口径12.7cm，器高24.8cm，胴部最大径20.6cmを測る。口縁部内外面はヨコ方向のナデ調整を施す。胴部外面は多量の鉄分の付着で観察しづらいが，基本的にはタテ方向の刷毛目調整と考えられる。底部外面には斜方向の刷毛目調整が見られる。壺内面は完形のため調整の記載はできないが，下方中心より外縁側に向かってタテ方向の刷毛目調整が見られる。内底面は粗い面を残す。**64**は壺である。頸部が強くくびれ，胴部はふくらむ。外面上位はヨコ方向のナデ調整を，下位はタテ方向の刷毛目調整を施す。内面上位はヨコ方向のナデ調整，内面はタテ方向の刷毛目の後斜方向の刷毛目調整を重ねる。**65**は壺である。口径7.4cm，胴部最大径14.0cm，残存高8.1cmを測る。口縁部外面はナデ調整，胴部外面はタテ方向の刷毛目を，さら

に下位は一部不定方向の刷毛目調整を施す。口縁部内面はヨコ方向のナデ調整を，内面はタテ方向の刷毛目調整を行なう。**66**は壺である。外面上位はヨコ方向のナデ調整を下位はタテ方向の刷毛目調整を施す。内面上位はヨコ方向のナデ調整，下位は不定方向のナデ調整を行なう。鉄分が多量に付着する。**67**は壺の口縁部片である。外面上位はヨコ方向のナデ調整，下位はタテ方向の刷毛目調整を行なう。内面上位はヨコ方向のナデ調整，下位はタテ方向の刷毛目調整である。**68**は壺の口縁部片である。口縁部は短く外湾する。外面上位はヨコ方向のナデ調整を，下位は斜方向の不規則な刷毛目調整を行なう。内面上位はヨコ方向のナデ調整，下位は不定方向のナデ調整を行なう。**69**は壺の口縁部片と考えられる。外面はヨコ方向の刷毛目の後ナデ仕上げ，内面はヨコ方向のナデ調整である。**70**は高坏の口縁部片と考える。口唇部が肥厚する。外面はヨコ方向の丁寧なナデ調整，内面はヨコ方向のナデ調整及び，坏側に斜方向の刷毛目が見られる。**71**は壺の口縁部片である。外面は丁寧なヨコナデ調整の他，下位はタテ方向の



第38図　1号住居址内出土免田式土器実測図



第39図　1号住居址内出土石器実測図

刷毛目調整を行なう。内面はヨコ方向のナデ調整を施し，端部付近には径9㎜のボタン状の突起が2個一組で貼り付けられている。**72**は壺の頸部であると考えられる。外面上位には強いくびれを有しており，その下位には斜方向の刷毛目調整とタテ方向のヘラ調整を施す。なお内面上位はヨコ方向のナデ調整，中位はヨコ方向の刷毛目，下位はタテ方向のヘラ痕跡が見られる。表面に多量の鉄分が付着する。**73**は壺の底部である。この資料は接合形成過程がわかる。まず底部の円盤状の粘土板に，胴部を直接貼り付ける。さらに内側に補強のための支持土をつめ，最終的には全体を成形し仕上げる。外面の調整は一部タテ方向のナデも見られるが，不定方向のナデで仕上げる。底部外面は不定方向のナデ調整。内面上位は斜方向の刷毛目調整，下位はナデ調整のみである。**74**は壺の底部である。外面はタテ方向の刷毛目及び斜方向の刷毛目調整を施す。内面は斜方向の刷毛目の後ナデ調整で仕上げる。**75**は壺の胴部片である。断面台形状の大型の突帯を有しており，外面下位には斜方向の刷毛目調整が見られる。内面や斜方面の刷毛目が見られる。**76**は壺の胴部片である。頸部付近に断面三角形の突端を貼り付けている。外面下位はタテ方向の叩き目の後，刷毛目調整を重ねる。内面上位はヨコ方向のナデ調整，下位は斜方向の刷毛目調整を施す。**77**は免田式土器の壺片である。外面上位にはヨコ方向の8条の沈線を，中位には6条の不揃いな手書きの重弧文が見られる。下位はヘラで研磨し，その後不定方向で一部ナデる。内面は指圧による調整を行なう。**78**は免田式土器の壺の胴部片である。外面には11本の連続した沈線が重ねられる。内面は指圧による調整である。**79**は大型の免田式土器の壺である。口径19.8cm，器高34.4cm，胴部最大径36.1cmを測る。頸部より上位はタテ方向の刷毛目調整，胴部下位はタテ方向の刷毛目調整を施す。胴部上位は全面にわたり研磨した後に沈線及び重弧文を施す。その施文は上段より次の通りとなる。18本のヨコ方向の沈線。4条の沈線を1組として9組の重弧文を下向きに配置。4条の沈線を1セットとして12組を上向きに配置。3条のヨコ方向の沈線。5条の沈線を1セットとして，17組を上向きに配置。5条のヨコ方向の沈線を配し，さらに下位に1条の沈線を施す。口縁部内面は斜方向の刷毛目及びヘラによる削り調整を加える。胴部内面は刷毛目によるタテ及び斜方向の調整となる。胎土は密で，色調は明茶褐色である。

1号住居址内出土石器（第40図）

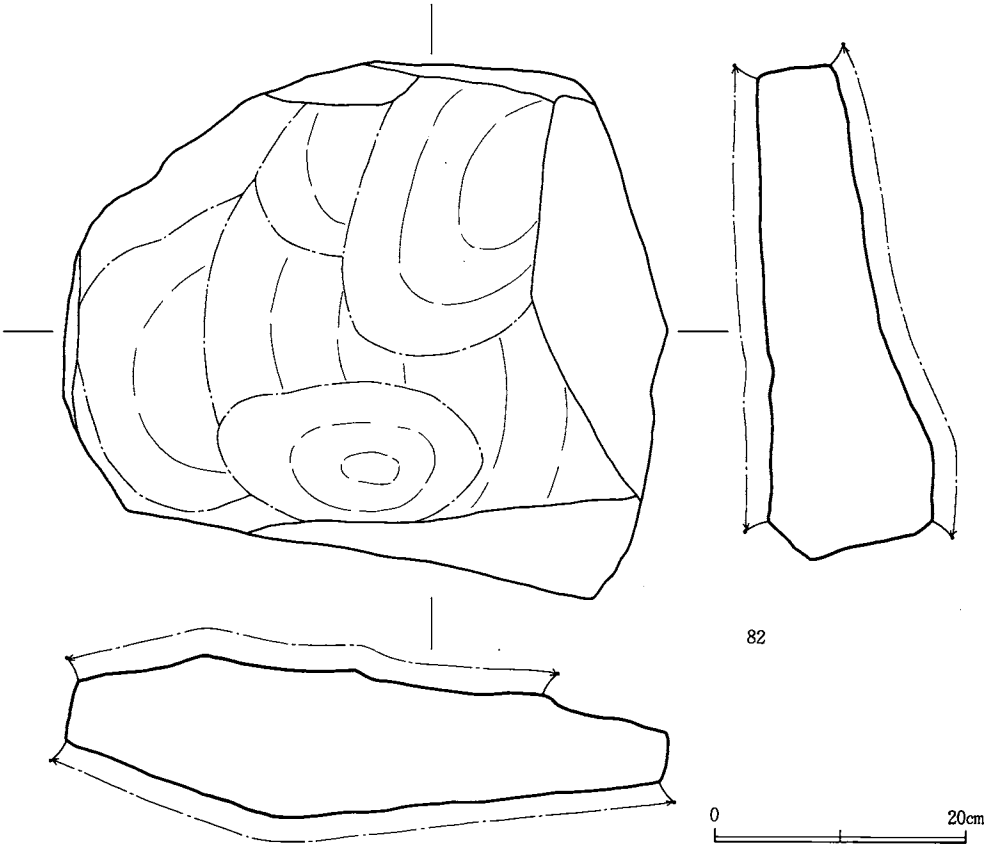
80は磨製石鏃である。基部が完全に欠損し，縁辺部も一部破披捏する。残存長2.80cm，幅1.58cm，厚さ3.8㎜を測る。**81**は凝灰岩製の砥石である。上，下側が欠損するが，残存長3.30cm，幅4.05cmを測る。研磨面は4面である。

(2)　１号土壙（第32図）

試掘１号トレンチの東側の拡張区に位置している。隣接の１号住居址を切っている。残存の土壙の規模は東西方向80cm，南北方向60cm，深さ25cmを測る。埋土は１号溝同様の黄褐色土混入黒褐色土であり，ここからは出土遺物は見られない。時期は弥生時代に属するものと思われる。

(3)　１号溝（第32図）

試掘１号トレンチの東側の拡張区に位置する。隣接する１号住居址を切っている。主軸は南北方向であり，その流向方位はＮ－32°－Ｅを測る。溝の残存規模は長軸方向1.7m，短軸方向0.5m，深さは最大50cmを測る。埋土は黄褐色土混入黒褐色土であり，出土遺物はまったくなかった。時期は弥生時代に属するものと思われる。



第40図　１号住居址西側地区内出土石器実測図

(4)　1号住居址西側の地点

1号住居址の西側地点は，試掘トレンチの観察では遺構は全く残存していない。しかしながらこの地点を拡張した所，安山岩質の平石が1基及び炭化物が集中して分布していた。炭化物は厚さ3cmであり南北方向2.1m，東西方向0.9mの範囲に分布し，微妙な土器片が共伴して出土した。この確認面は住居址の最下面（床面）と考えられるが，調査地区内には主柱穴は確認されていないため，即断はできない。

1号住居址西側地区内出土石器（第40図）

この地区からカーボン層に混って弥生土器の細片が出土するが図化できるものはなく，この台石のみ図化し，掲載した。**82**は安山岩製の台石であり，長方向48cm，短方向39cm，最大厚12cmを測る。2面は使用されており，特に1面には，強く使用したと思われる窪みの痕跡が2ヶ所見られる。重量は35kgである。

第4節　Ⅳ・Ⅴ—C～E区の調査

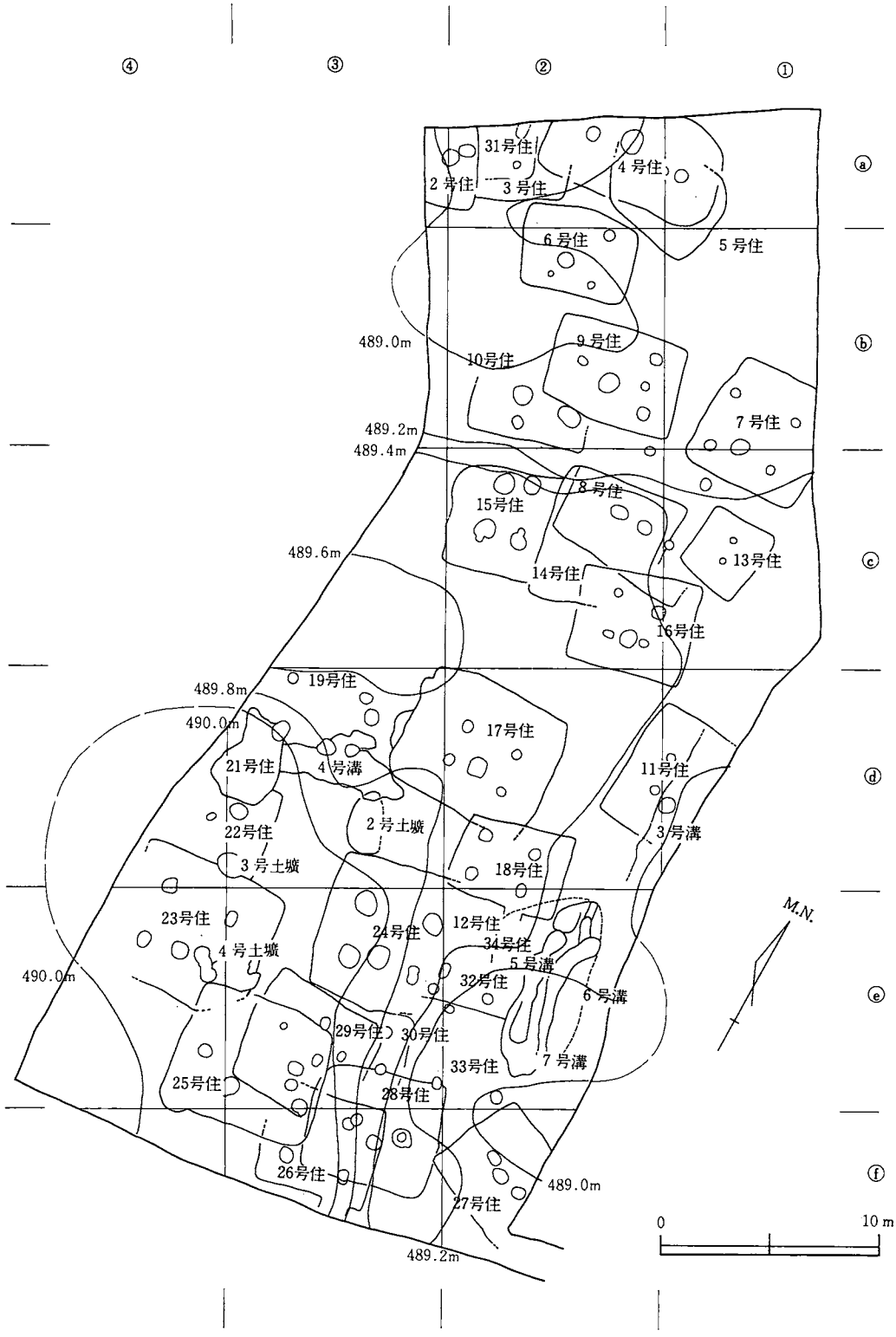
1．Ⅳ・Ⅴ—C～E区の調査概要について

2次調査を実施する際の当該地区の現況は次の通りである。2次調査を次年度に再開する事となっていた為に，周辺部はすでに整地され，一部作付がなされていた。また本調査区の中央部に大型の排水路の取付けが予定されていたことから，周囲二方には仮排水路が便宜的に設置されていた。このような周囲の状況に対し，表土剝ぎ作業を実施する前に排土場所の確保及び遺構の深度を確認するために，1次調査で設定した3本の試掘トレンチを再度掘り上げた。トレンチの断面観察により，仮排水路で囲まれていた当地区3,000㎡の内，西側及び北西側には削平のため，遺構が残存していないことが判明した。これにより，排土場所は主に西側地区とし，調査地区は1,300㎡に減少した。面積は減少したものの遺構は重復し切り合うため，確認に手まどり，遺物量が膨大であることなど調査は難航した。

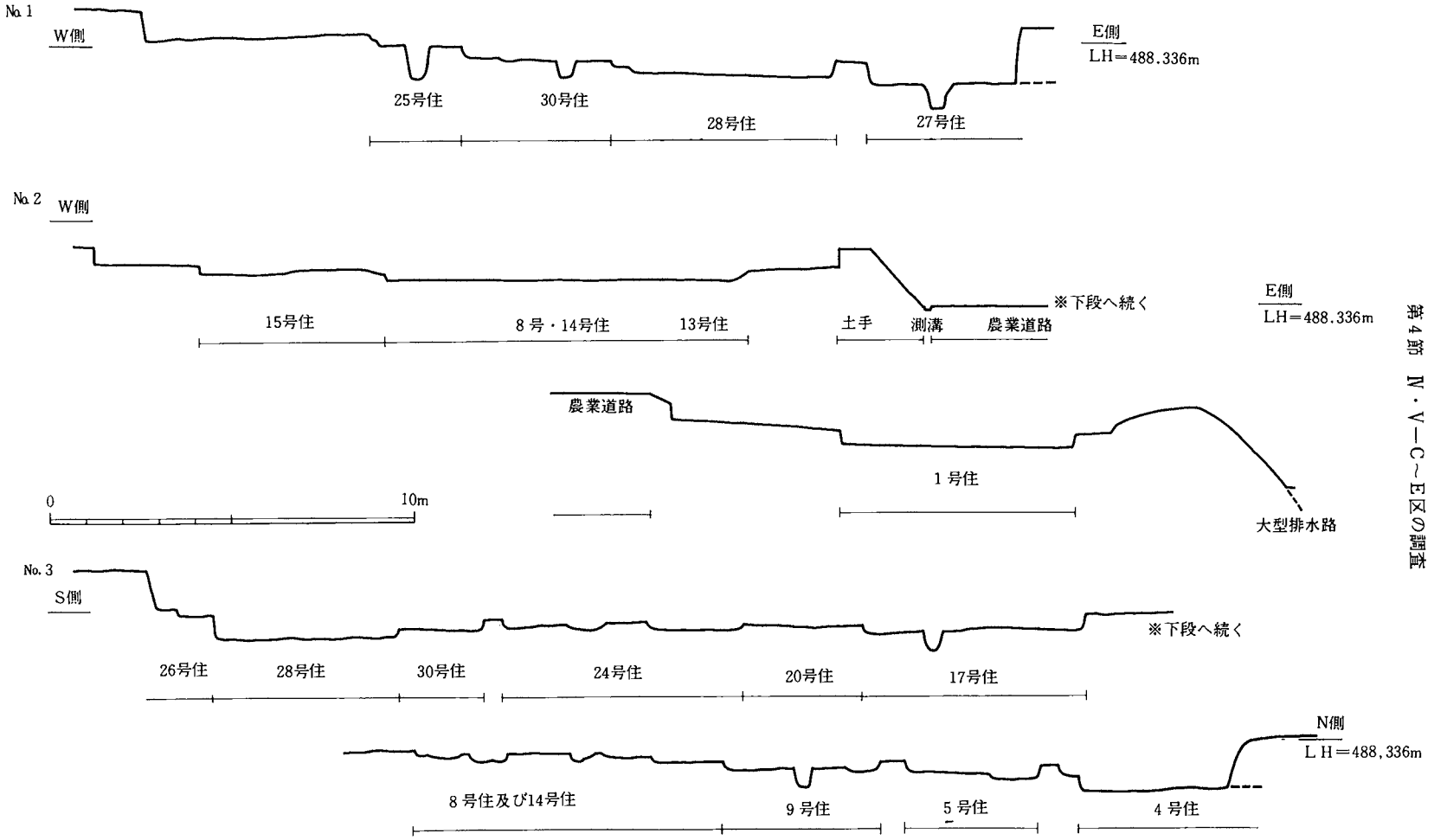
調査の結果，当地区の遺構の時代は弥生時代終末期と古墳時代中頃の2時期であることが判明した。以下の各部では時代別に出土遺構の説明を加えていきたい。

Ⅲ～Ⅴ—C～E区のエレベーション図について　（第43図）

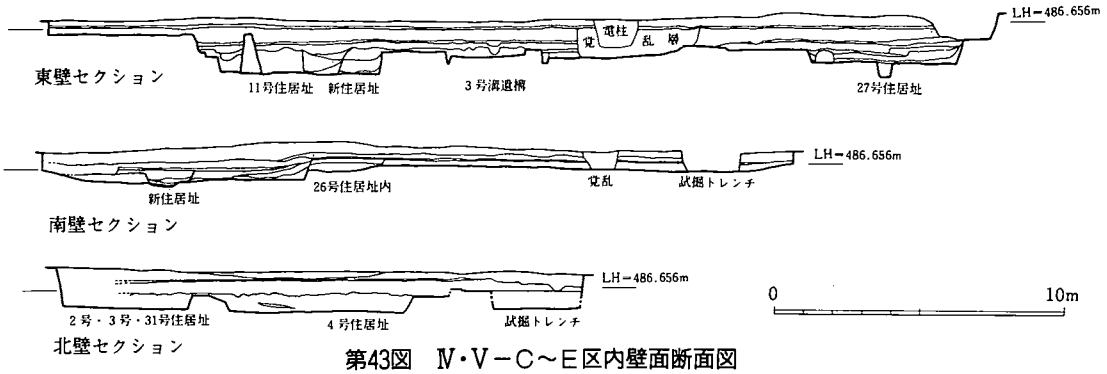
調査地区内で，住居址の掘り下げが完了後，遺構ラインのエレベーション図を作製した。No.1は④—ⓔ区側から東西方向に延びて②—ⓕ区で完結する。25号住居址の西側は削平によって平坦となっている。また27号住居址の東側は調査区の土手で終結する。この地点での傾斜角度



第41図　Ⅳ・Ⅴ－Ｃ～Ｅ区　弥生時代遺構配置図



第42図　Ⅲ～Ⅴ－C～E区調査区内エレベーション図



第43図　Ⅳ・Ⅴ－C～E区内壁面断面図

は3度である。No.2は③—ⓒ区側から東西方向に延びⅢ－C・D区内の1号住居址東側に達するエレベーション図である。15号住居址の西側は削平され遺構は残存していない。13号住居址の東側の土手及び農業道路によって遺跡が強く削平されていることが伺える。1号住居址西側も削平され，その東側は排水路へと急激に落ちる。No.3は③—ⓕ区調査区南側から②—ⓐ区の北側にまで延びるエレベーション図である。26号住居址から17号住居址に達するまでは6軒の住居址が切り合う。17号住居址の北側は，通路的な用途と考えられる空間地帯が位置する。北側は4号住居址で最北端となり，調査区の土手に達する。

本調査区では西側（W）から東側へ向かって4度傾斜で落ちてゆき，1号住居址のある突端部まで進む。一方南北方向では調査区掘り下げ前に記載した等高線上では，北側から南側へ向かって約1.5m落ちるが，住居址掘り下げ後のエレベーションではそれほどの落差は生じない。南北方向はほぼ平坦面である。

Ⅳ・Ⅴ－C～E区の壁面の状況について

住居址の掘り下げが完了後，Ⅳ・Ⅴ－C～E区内の壁面の断面図を作成した。東壁断面図はⓒ区からⓕ区までの地区であり，11号，27号住居址ならびに3号溝遺構が入る。さらに11号住居址内には新住居址の埋土が一部見られる。地山の傾斜はなくほぼ平坦である。南壁断面図では④区内に遺構はなく①，②区で26号住居址内の溝遺構及び新住居址の埋土が見られる。④区（西）側から①区（東）側へと地山が傾斜する。北壁断面図は，2号～4号，31号住居址が連続して連なっておりほぼ平坦である。

2．弥生時代について（第41図）

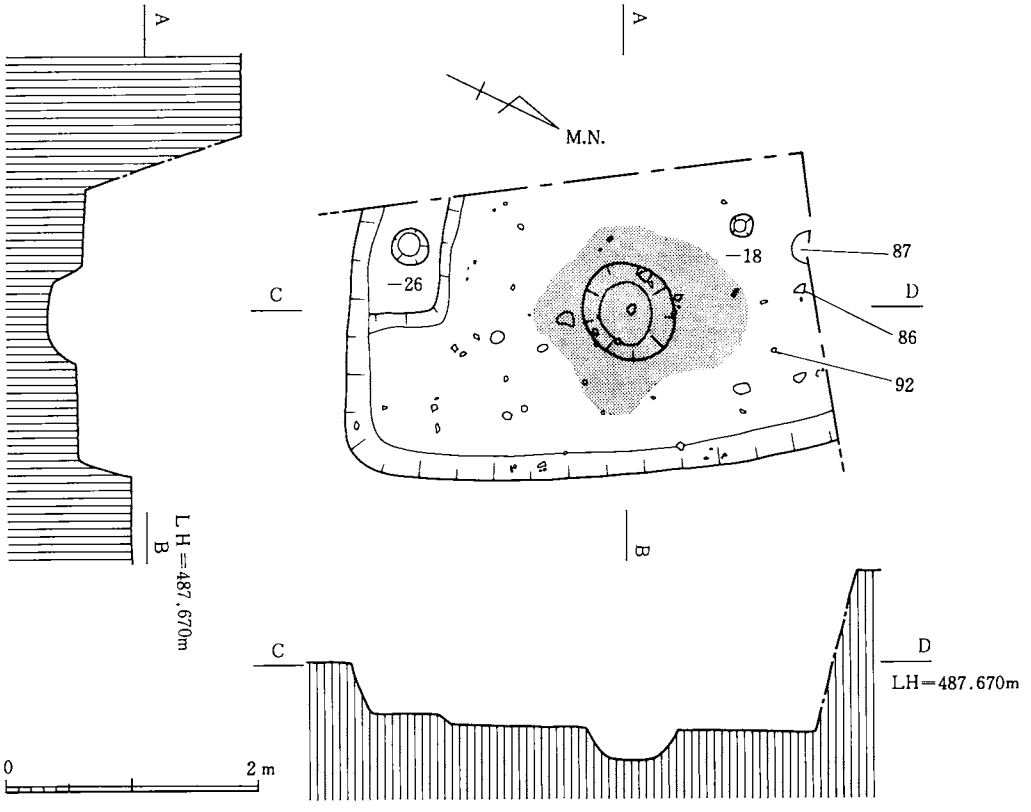
当該地区内で弥生時代に属すると思われる遺構は次の通りである。その内訳は住居址32軒，土壙3基，溝遺構5本であり，別第41図に示すとおりである。細分した時期は別章に記す通りであるが，ほぼ弥生時代後期～終末時期に属するものと考えられる。以下項目に別けて，住居址，土壙，溝遺構の順に説明を加えたい。

(1)　2号住居址（第44図）

調査区最北端の②・③－ⓐ区内に位置している。本住居址は3号，31号住居址を切る。住居址は一部調査区外へ延びる為に，完全ではないが残存で，長軸方向3.7m，短軸方向で2.4mを測る。主軸は東西方向であり，その方向はN－32°－Eとなる。壁高の東側で40cm，南側で50cmであるが，旧地表面からは1.3mを測る。ベッド状遺構は南側に1基確認されるが，これは段差10cmの低いものである。炉は1基確認され，その周辺にはマット状にぶ厚く炭化物が散布する。本住居址の主柱穴は確認されていない。

住居址の覆土は親指大の炭化物を多く含む黒褐色土を中心とする3層であり，一部黄褐色土の地山類似層が最下層に位置する。

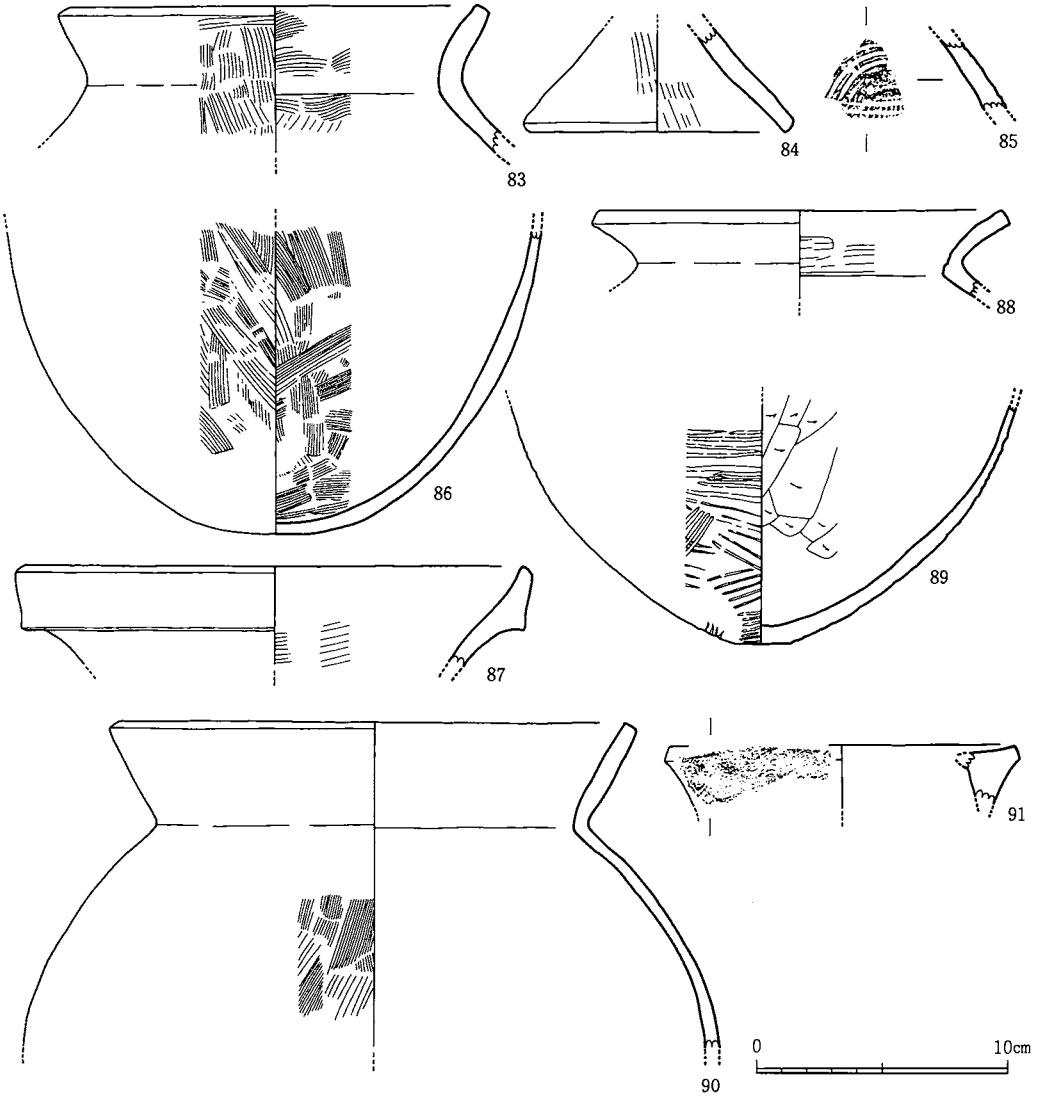
出土状況では上，中層から大型の土器片が出土する。番号を付して取り上げた資料28点中図化できた資料は16点であり，これらの内9点を掲載した。出土遺物の内訳は土器類では甕5点，壺4点であり，砥石も1点出土する。遺物の出土層位では86は3層から91は床面直上の資料であり，これらが住居址の時期判定の資料となろう。住居址の廃絶に際しては不明である。



第44図　2号住居址実測図

2号住居址内出土土器（第45図）

83は甕の口縁部である。器壁はやや厚く，体部から口縁部へ向かってゆるく湾曲する。外面はタテ方向の刷毛目調整，内面はヨコ方向の刷毛目調整を施す。**84**は甕の脚台である。径は10.8cmと小ぶりである。外面はタテ方向の刷毛目の後，ヨコナデ調整を行なう。内面の上位はヨコナデ調整を，下位は斜方向の刷毛目の後ヨコナデで仕上げる。**85**は免田式土器の壺胴部片である。外面の上位には同心状の円弧が5条まで見られ，下位にはヨコ方向に3条の沈線及びタテ方向の刻みが施される。**86**は壺である。底部から胴部にかけての残存であり，残存高は11.9cmを測る。外面の上位はタテ方向の刷毛目調整を，下位はナデで仕上げる。底部は丸底である。内面はタテ方向の刷毛目を施すが，底部は不定方向となる。**87**は壺の口縁部である。口縁部の

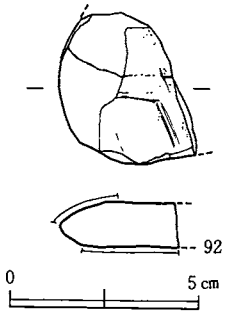


第45図　2号住居址内出土土器実測図

残存1/10での復元となる。外面はヨコナデ調整を，内面はヨコ方向の刷毛目の後にナデ消す。**88**は壺の口縁部である。口縁部の残存1/6での復元である。胴部からの屈曲は強い。外面はヨコ方向のナデ調整を，内面はヨコ方向の刷毛目調整の後にナデ消す。**89**は甕の底部である。底部はやや平底となるが，残存高 9.5cmを測る。外面の上位にはヨコ方向の叩き目を施し下位は斜方向の叩きの後にナデ消す。内面は底を除きヘラ削りを施す。器壁は薄い。**90**は甕の口縁部である。胴部は大きく張り，口縁部との境界には指圧によるへこみが見られる。外面上位はヨコ方向の刷毛目調整，下位は斜方向の刷毛目調整を施す。内面上位はヨコ方向の刷毛目を行なった後にヨコナデで仕上げる。下位は指圧のみで無調整となる。**91**は壺の口縁部である。残存1/8での復元で残存高はわずか2.3cmである。外面は幅1.5cmの単位で流水文が描かれており，他はヨコナデ調整で仕上げられる。色調は内外面とも明黄褐色で，焼成は良，胎土は粗であり砂粒を多く含む。

2号住居址内出土石器（第46図）

92は砂岩製の小型の砥石片である。欠損しているものの残存 4.1cmを測る。全面にわたって研磨されており良く使用されている。



第46図　2号住居址内出土石器実測図

(2)　3号住居址（第47図）

②—ⓐ区内，調査区北側に位置する。本住居址は2号，4号住居址から切られ，さらに下層には31号住居址が検出される。住居址の南東側の隅が残るのみで，残存規模は南北3.3m，東西4.1mである。壁高は南側で40cmを測る。南東側に高さ13cmのベッド状遺構が2段残る。炉，主柱穴は確認されていない。

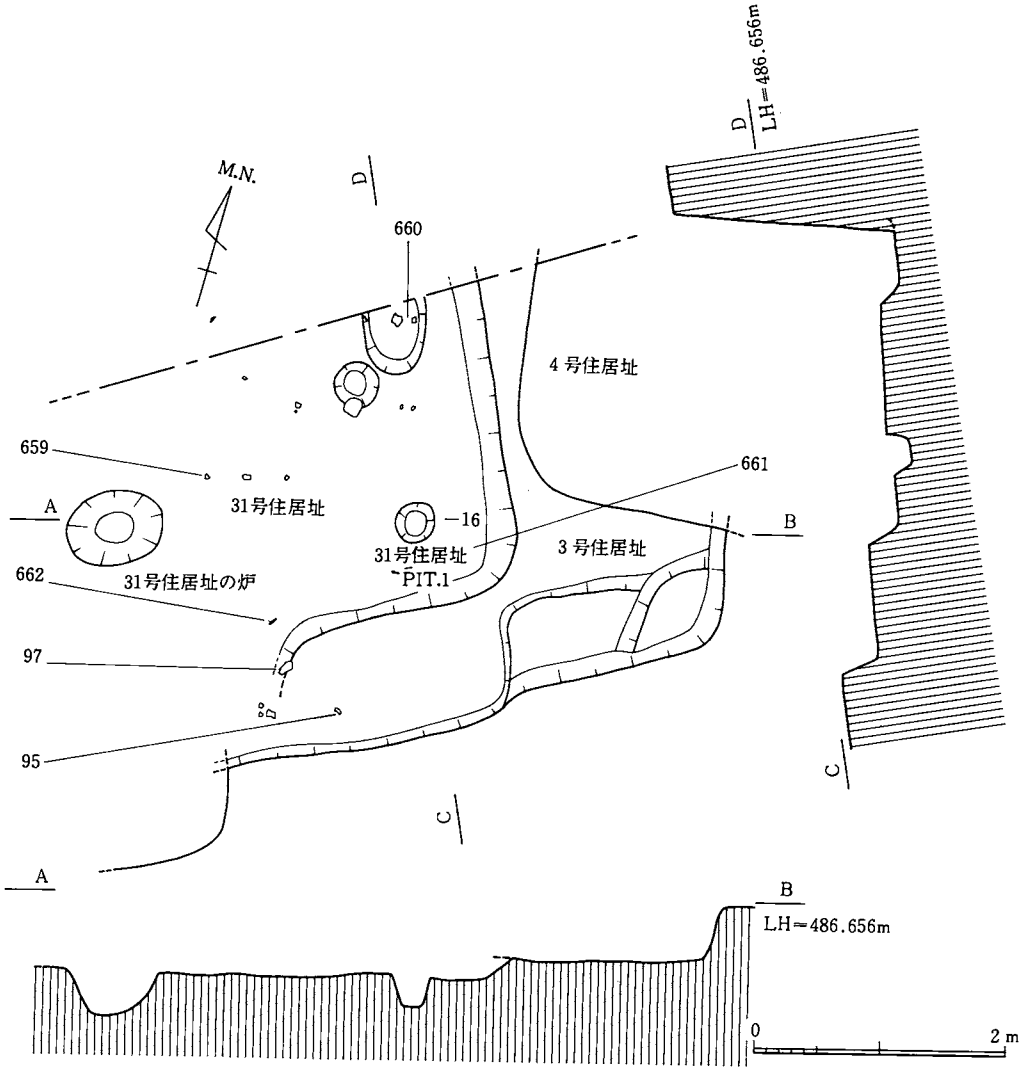
住居址の覆土は黒褐色土を呈しており，31号住居址の部分については貼り床の痕跡が若干見うけられる。

出土状況は少量の弥生土器が上層より主に出土する。番号を付して取り上げた資料12点内，図化できた資料は5点でありここでは全ての資料を掲載した。出土遺物の内訳は土器類では甕3点，壺2点となる。出土遺物の層位では95を除いて他の

４点は上層からの出土，95は31号住居址との境界部床上面からの出土となる。住居址の廃絶の状況は不明である。

３号住居址内出土土器（第48図）

93は甕の口縁部片である。外面は叩き目の後ナデ調整で仕上げる。内面にはヨコ方向の刷毛目及び斜方向の刷毛目調整を施す。**94**は甕の口縁部である。外面は全面にわたりヨコナデ調整を施し，内面上位は斜方向の刷毛目の後，ヨコナデ調整で仕上げる。下位は斜方向の刷毛目の後ナデを施す。**95**は壺の口縁部片である。外面はヨコ方向の刷毛目及びヨコナデ調整を行なうが，下位に強いヨコ方向の刷毛目が残る。内面は一部剝離が見られるが，ヨコ方向の刷毛目の後にナデで仕上げる。**96**は壺の底部である。底部はやや丸みを持ち，底部径は 4.1cm，残存高



第47図　３号・31号住居址実測図

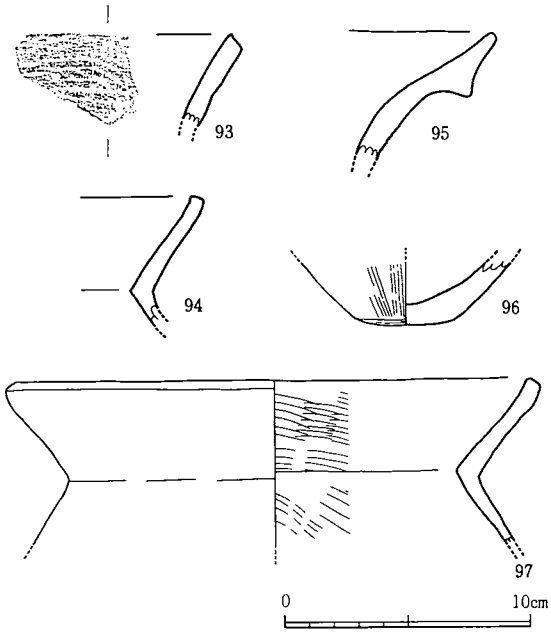
2.5cmを測る。外面はタテ方向に刷毛目を行ない，底部は不定方向の刷毛目の後に，ナデ消しが見られる。内面は不定方向のナデである。**97**は甕の口縁部である。残存⅙を復元し，残存高6.7cmを測る。器壁は薄く，頸部で強く屈曲し，口縁部はストレートに外傾する。胴部外面は叩き目を施すが，磨耗し観察できない。口縁部外面はヨコナデ調整を，内面は斜方向の刷毛目を施す。胴部の内面は斜方向の刷毛目調整で仕上げを行なう。

(3)　4号住居址（第49図）

①・②—ⓐ区内，調査区最北端に位置している。5号住居址に切られ，一方では3号住居址を切る。平面形態はほぼ直方形を成すものと思われるが，コーナー部は他の住居址と異なり，丸みを持つ箇所も見うけられる。残存規模は長軸方向8.4m，短軸方向4.5m，想定床面32.7㎡を測る。主軸方向は東西で，その方位はN—82°—Eとなる。壁高は，最も残りの良い南側では70cm，北側の旧耕作面からは1.2mを測る。炉は住居址のほぼ中心部に径1.0mの大型のものが1基作られている。主柱穴は盤石を持たない2本柱であり，ともに径60cmと大型で深さも深い。住居址の床面には地山に掘り込む状態で，大小13個の柱穴が確認されるが用途は判明しない。ベッド状遺構，貯蔵穴は確認されていない。

住居址の覆土は全部で10層となる。別図一覧に示す通りであるが，埋土上位の黒褐色土と下位の暗黒褐色土の間層として，炭化物や黄色ブロックが混入して層を形成する。

遺物の出土状況では調査区の東側半分が5号住居址によって切られているため，その部分は中層からの出土となる。住居址の残存が良好であることから多数の遺物が出土する。番号を付して取り上げた156点の資料中，図化できたものは31点である。ここでは13点を掲載した。内訳は土器類では甕が8点，壺が3点，高坏，鉢各1点となる。鉄器では鏃が2点，石器では石鏃，石斧，石包丁，各1点，砥石3点となる。上層からの遺物は小破片が多く，中，下層に大型の図化できる遺物が集中する。土器では99,103,105,108が中層からの出土であり，下層及び床直上，密着の資料も多い。それは100～102,104,106,107の資料であり，特に110は4層及び床直上面に散布した遺物の接合資料である。

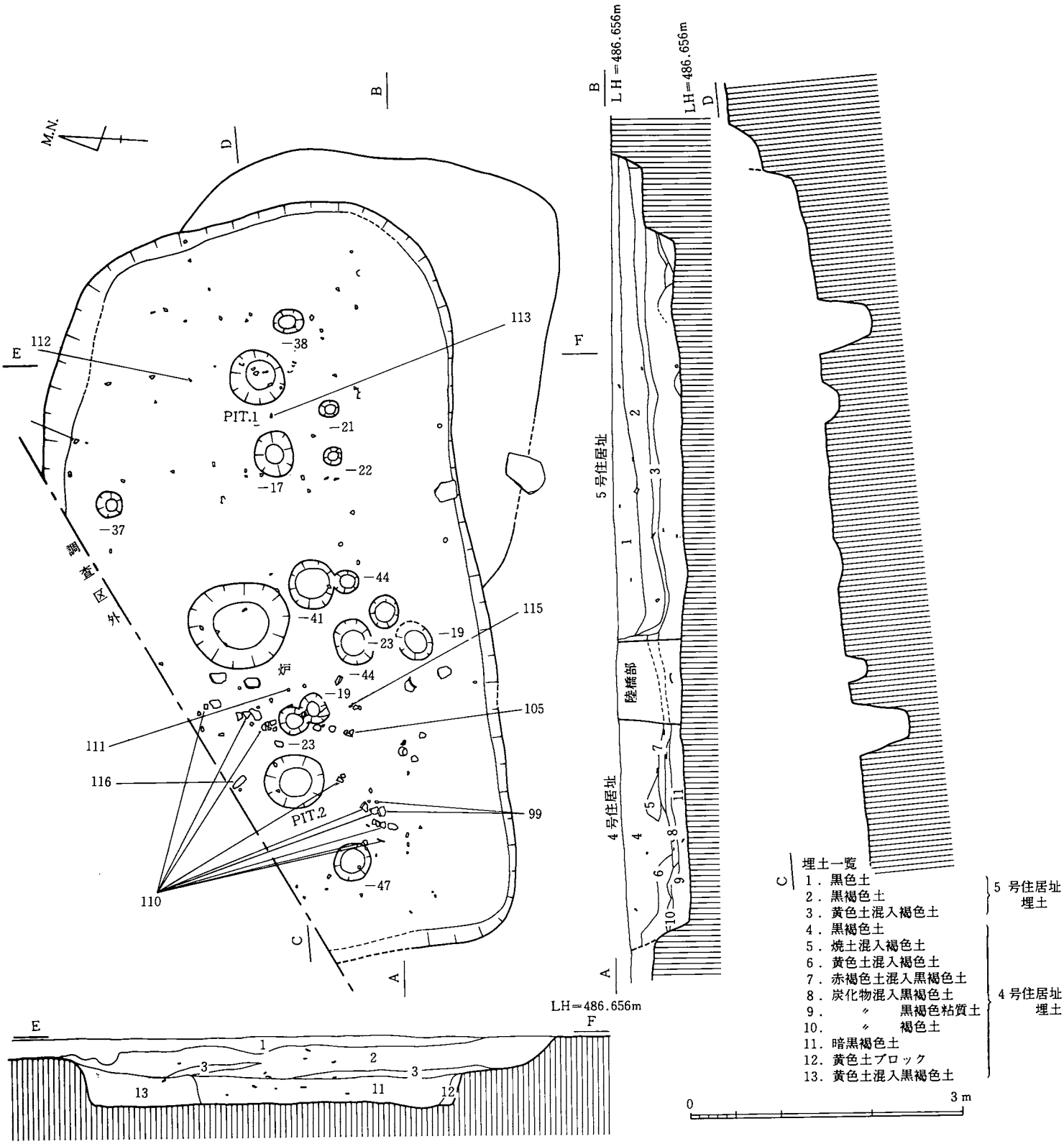


第48図　3号住居址内出土土器実測図

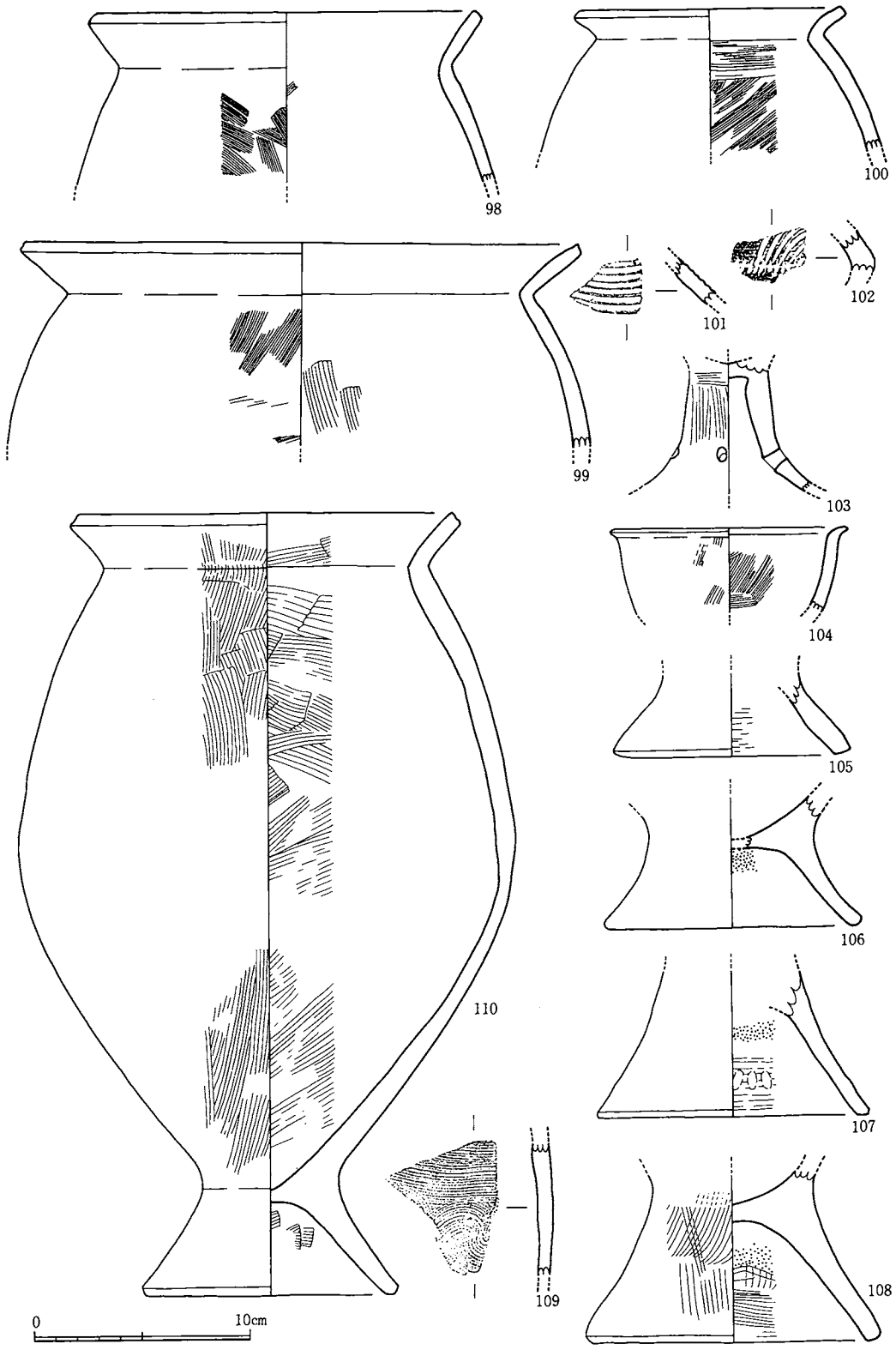
111，112の両鉄器は中層流れ込みのものであり，一方113，116の石器は床直上面に位置するものである。上層からは114，117が，中層からは115，118，119が出土する。本住居址の廃絶に際しては完形の 110の資料を投棄し，他の資料はその後順次流れ込んだものと判断される。本住居址の時期を 110の使用された時代と考えたい。

4号住居址内出土土器（第50図）

98は甕である。残存1/6での復元である。口縁部外面はヨコ方向のナデ調整を，胴部外面は斜方向の刷毛目調整を施す。内面はヨコ方向の刷毛目の後ナデ調整で仕上げる。**99**は甕である。残存1/8での復元である。胴部は上位位置で強く張る。外面はタテ方向の刷毛目調整，口縁部内面はヨコナデ調整，胴部内面はタテ方向の刷毛目調整を施す。**100**は甕である。残存1/10での復元である。外面はヨコ方向の刷毛目調整，内面の上位はヨコ方向の刷毛目，下位は斜方向の刷毛目調整を施す。**101**は免田式土器の壺片である。外面は7条の沈線が確認される。内面は指圧のみで無調整となる。**102**は免田式土器の壺片である。胴部片であり，外面には5条の重弧文と，1条のヨコ方向の沈線及び，斜方向の短い刻みが確認される。**103**は高坏片である。外面の上位はヨコ方向のナデ調整を，下位はタテ方向の刷毛目調整を施す。内面はナデ仕上げである。脚部には径6mm内外の穿孔があり，復元個数は4個，外面より内面に向かっての穿孔である。**104**は鉢である。残存1/10の復元，胴部から内湾気味に立上がり，口縁部端部はピンと外側にはねる。外面はタテ方向の刷毛目調整，内面上位はヨコナデ調整，下位はタテ及びヨコ方向の刷毛目調整を行なう。**105**は甕の脚部片である。残存は1/10での復元。外面はヨコ方向の刷毛目調整，内面はヨコ方向の刷毛目調整を施す。**106**は甕の脚台部である。残存1/4での復元。外面はヨコ方向のナデ調整，脚部内面はヨコナデで砂粒が付着する。底部内面は刷毛目調整である。**107**は甕の脚台である。残存1/4で復元。残存高は 6.7cmと高い。外面はタテ方向の刷毛目の後，ヨコナデ仕上げ，内面はヨコ方向のナデを行ない，指頭で調整を行なう。なお内面には砂粒が付着する。**108**は甕の脚台である。残存1/4で復元，外面はタテ方向の刷毛目の後にヨコナデで消す。内面はヨコ方向の刷毛目の後ヨコナデ調整で仕上げる。内面には雲母片，石英粒，砂粒が付着している。**109**は壺の胴部片と考えられる。外面上位には流水の波状文が右から左方向へと描かれている。内面はヨコ方向の刷毛目である。**110**はほぼ完形の甕である。口径18.1cm，器高36.0cm，胴部最大径23.0cmを測る。胴部外面はタテ方向の刷毛目調整を，脚台外面はヨコ方向へナデ調整を行なう。胴部内面上位はヨコ及び斜方向へ刷毛目を，下位は斜方向の刷毛目調整を行なう。脚台内面はヨコ方向の刷毛目の後にナデで仕上げる。なお外面口縁部より，胴部下位までは煤が付着する。



第49図　4号住居址実測図



第50図　4号住居址内出土土器実測図

4号住居址内出土鉄器，石器（第51図）

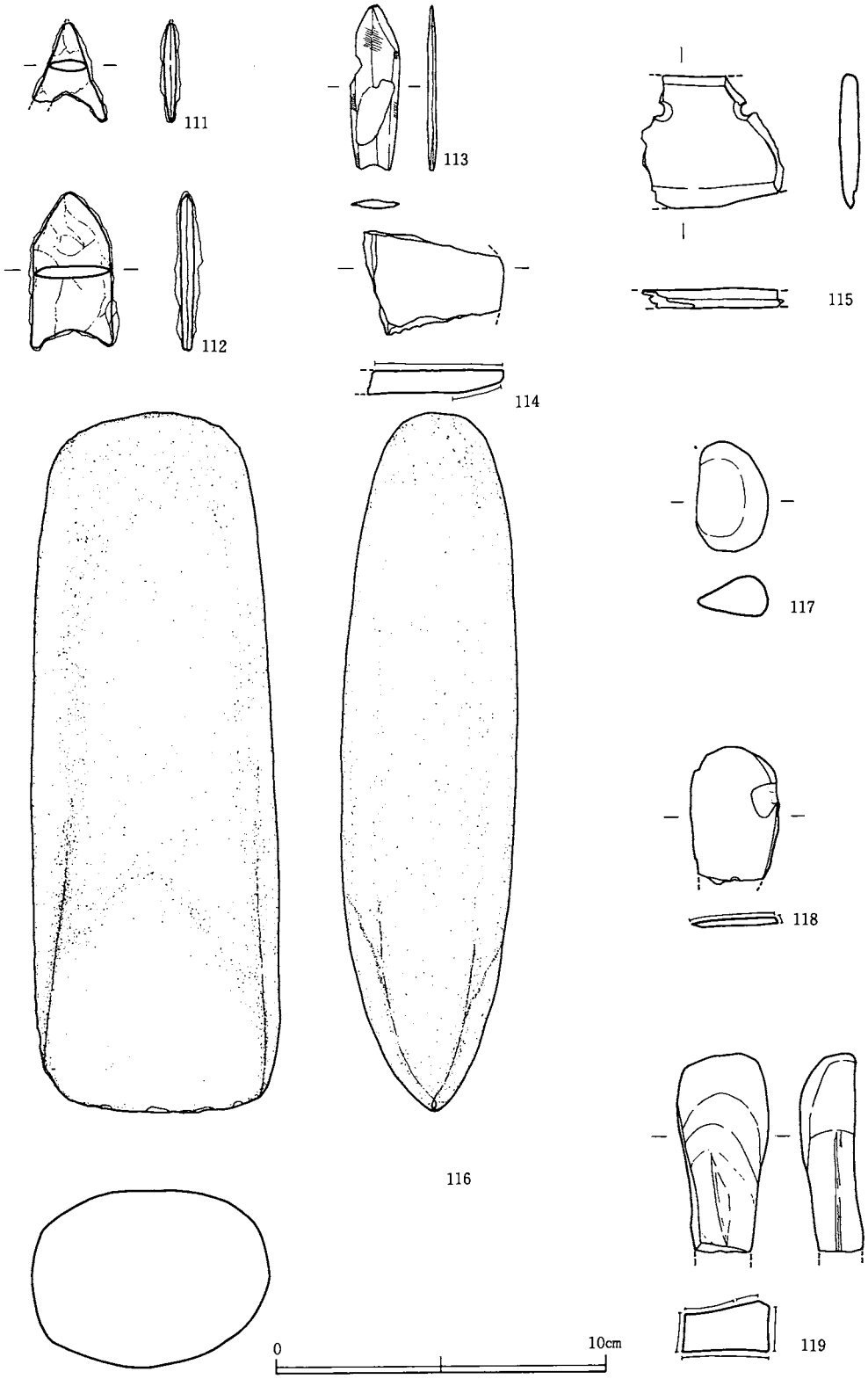
111は無茎三角形式の鉄鏃である。左側が一部欠損している。基部を強く三角形状に抉りこむ小型である。**112**は無茎五角形式の鉄鏃である。完形で重量は9.05g である。大型であり，基部を弧状に抉りこむ。**113**は有抉の石鏃である。左側上位が欠損する。長軸に対して幅が狭くなり表面には剝離の痕跡が見られる。**114**は砥石である。石質は砂岩であり，左側及び上下側が欠損する。研磨面は2面である。**115**は石包丁である。左右両側が欠損している。平面形態はほぼ長方形を呈するものと考えられる。背部には手擦れの痕跡が見られる。**116**は磨製石斧である。完形品であり全長20.90cm，幅7.35cm，厚さ5.40cmを測る。重量は1483.1g である。大型であり，よく研磨され刃部が造り出されている。断面は長楕円形で，石材は輝石角閃石安山岩である。**117**は砥石である。全長3.3cmと小型であり，中央部には窪みを有している。完形でありよく研磨されている。**118**は砥石である。下側が欠損しており，剝離した状況である。研磨面は2面である。**119**は砥石である。下部は欠損している。表面側はやや窪み，条痕が入る。研磨面は4面であり，よく利用されている。

(4)　5号住居址（第52図）

①・②—ⓐ・ⓑ区内，調査区最北端部に位置している。4号住居址を切って本住居址は作られている。平面形態は不整形であり，定形化しない。残存規模は東西方向5.8m，南北方向4.3m を測り，ほぼ東西方向に主軸を持つものと思われる。炉は径70cmのものが中央部に1基造られており，周辺部にはマット状炭化物が1.2m ×1.0m の範囲に散布していた。主柱穴は土器類が集中する面で精査し，検出に努めたが3層下位の貼り床土と，4号住居址覆土が酷似することから確認できなかった。貯蔵穴及びベッド状遺構は確認されていない。

住居址の覆土は全3層となる。上位より黒色土，黒褐色土，黄色土混入褐色土である。黒色土は古墳時代遺構の黒色土と近似するが，本住居址のものがより密である。最下層には弱い貼り床が見られた。

遺物の出土状況では上層の遺物量より中，下層の量が圧倒的に多い。また住居址内では西側に大多数の遺物が集中する。番号を付して取り上げた106点の内，図化できたものは48点でありここでは26点を掲載した。出土遺物の内訳は土器類では甕7点，壺10点，鉢2点，高坏7点である。鉄器は鏃が1点，石器では石包丁1点，砥石1点である。これらの出土層位は次の通りとなり上層よりは124，125，127，142，143等の小破片が出土する。大部分の遺物は2,3層よりの出土であり，121，123，135，144，145等がこれらに属する。この住居址の時期を決定すると考えられる床直上の資料では120，138，139があげられ，これらは時期的にセットとしてとらえることができよう。炉周辺部に集中して，完形で復元のできる資料が散布することから，本住居址では使用していた土器が，座ったまま廃棄されたものと考えられる。なお鉄鏃は3層中か

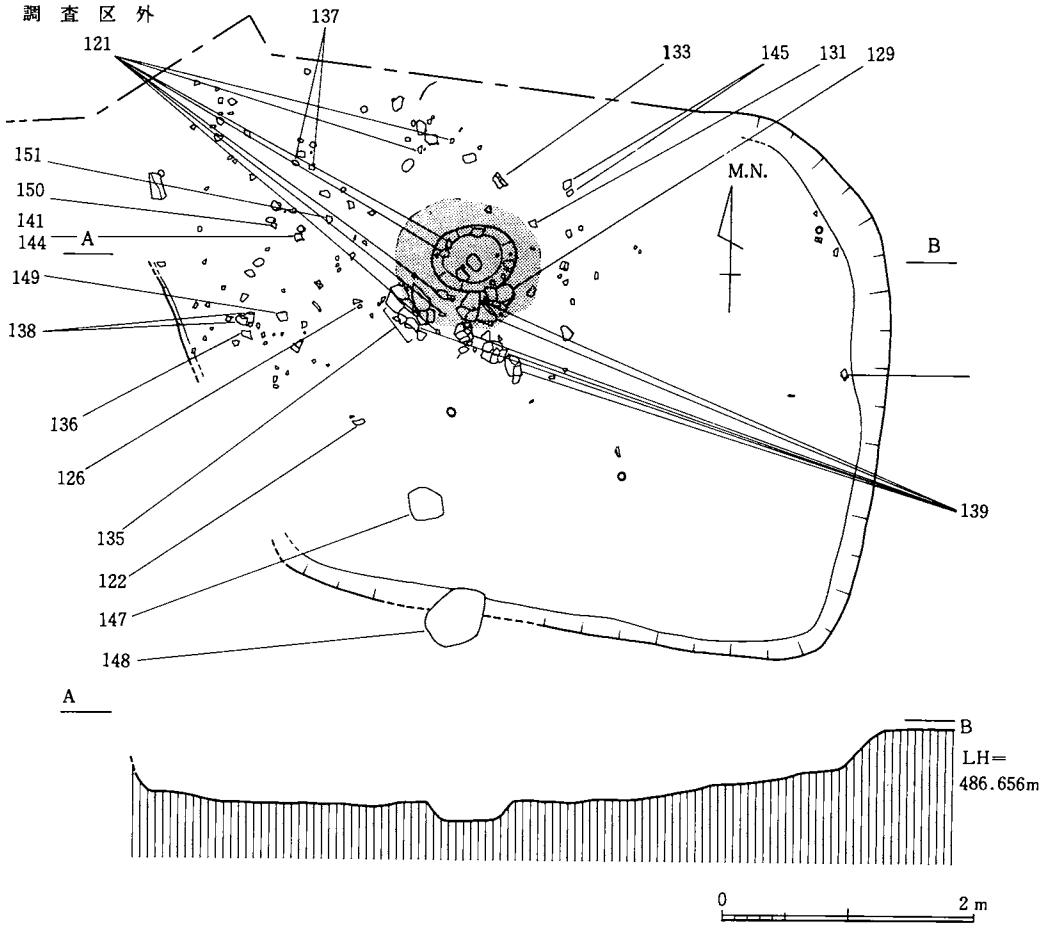


第51図　4号住居址内出土鉄器・石器実測図

ら，石器類は２層中からの流れ込みの資料である。147の台石は住居址の床面に乗ったものであり，本来の位置を保つ。148の台石は住居址内に一部かかり，落ち込み状況で確認された。

５号住居址内出土土器（第53～55図）

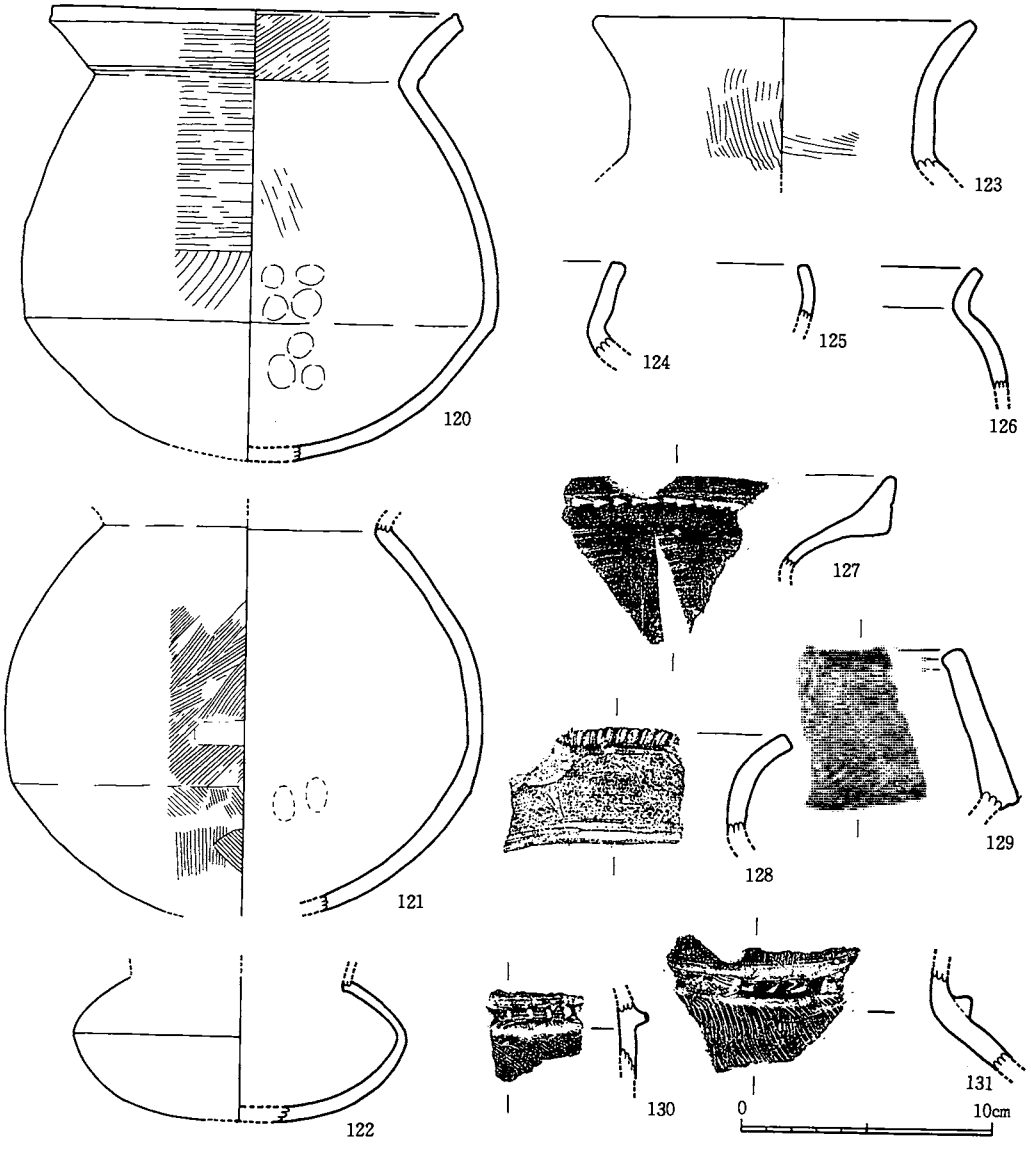
120は鉢である。口径16.4cm，器高17.8cm，胴部最大径18.9cmを測る。胴部の張りは強く，稜を形成する。外面上位はヨコ方向の刷毛目調整の後にナデ調整で仕上げる。中位は斜方向の刷毛目調整。下位はナデ調整である。口縁部内面は斜方向の刷毛目の後ナデ調整。胴部内面は一部に刷毛目が残るが，指圧の痕跡も確認される。**121**は鉢である。口縁部及び底部が欠損する。外面は斜方向の刷毛目調整の後上位はヨコ方向のナデで仕上げる。内面にはヨコ方向のナデ調整の後，部分的に指頭圧痕あり。**122**は壺である。口縁部は欠損しており，残存⅓での復元。外面はヨコ方向のナデ調整，内面も丁寧なナデ調整を行なう。**123**は壺である。口径15.3cm，残在



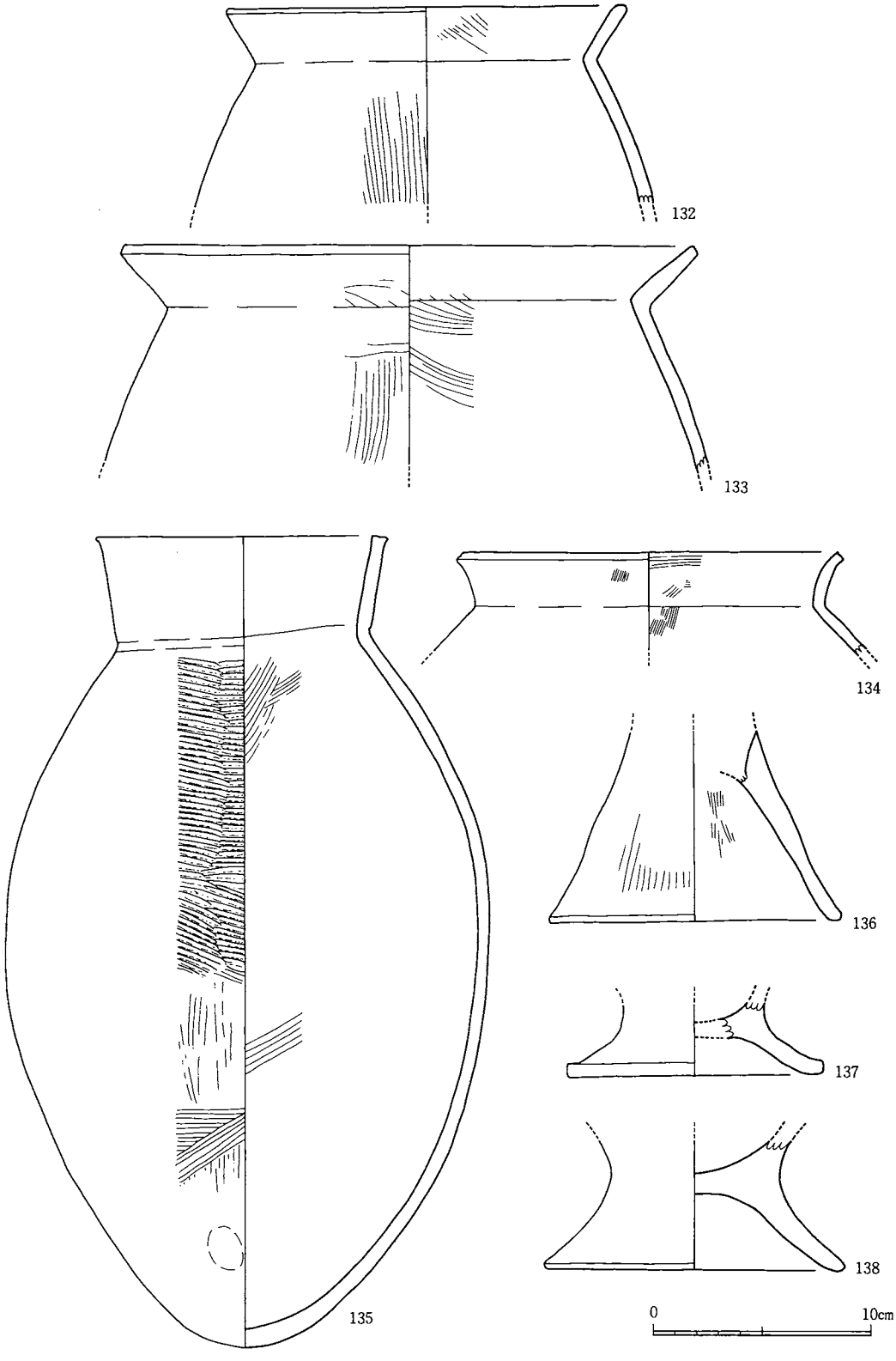
第52図　５号住居址実測図

高 5.9cmを測る。外面はヨコ方向のナデ調整及び刷毛目調整を行なう。内面は刷毛目の後にヨコ方向のナデ調整を行なう。**124**は甕の口縁部片である。外面はタテ方向の刷毛目の後ヨコ方向のナデ調整。内面はヨコ方向の刷毛目の後ナデ調整を行なう。**125**は鉢の口縁部である。外面は斜方向の刷毛目調整，内面には細い沈線が1条入る。**126**は小型壺の口縁部である。外面は風化が著しく観察できない。内面上位にはヨコ方向の刷毛目の後ナデ調整である。胴部内面はヨコ方向の刷毛目の後ナデ消し，仕上げる。**127**は壺の口縁部である。内外面ともヨコ方向のナデ調整を施し，口唇部には横一列に並ぶ長さ約5mmの押し引き文が見られる。**128**は壺の口縁部である。外面は斜方向の刷毛目の後ヨコ方向のナデ調整。内面はタテ方向の刷毛目の後ヨコ方向のナデ調整を施す。口縁端部は斜方向の刻み目が1～4mmの間隔で施されている。**129**は壺の口縁部片である。外面にはヨコナデ調整の後に櫛描きの波状文が施されており，内面はタテ方向の刷毛目の後，ナデ消しで仕上げる。胎土は大きめの石粒を含み，焼成は良好，色調は灰黄褐色である。**130**は壺の胴部片である。外面に突帯を有しており，そこには6～7mm間隔で縦方向の刻み目を施す。他の外面は刷毛目調整。内面は斜方向の刷毛目調整。**131**は壺の頸部である。外面には断面三角の突帯を有しており，そこには斜方向の刻みを施す。突帯の下位には斜方向の刷毛目調整。内面には斜方向の刷毛目調整を施す。**132**は甕である。残在¼での復元。口縁部外面はヨコ方向のナデ調整。胴部内面はタテ方向の刷毛目の後上段をナデ消す。口縁部内面は斜方向の刷毛目の後，ヨコ方向のナデ調整。胴部内面はナデ調整である。**133**は甕である。残存⅓での復元。口縁部外面は斜方向の刷毛目の後ヨコ方向のナデ調整。胴部外面はヨコ及びタテ方向の刷毛目調整。口縁部内面はヨコ方向のナデ調整。胴部内面は斜方向の刷毛目調整を施す。**134**は甕である。口縁部残存⅒での復元。外面上位は斜方向の刷毛目の後ナデ仕上げ。下位はヨコ方向のナデ調整。内面上位はヨコ方位の刷毛目，下位はタテ方向の刷毛目の後ナデ調整を行なう。**135**は完形の壺である。口径13.45cm，器高37.3cm，胴部最大径22.4cmを測る。胴部は卵形，底部は尖底で，口縁部は外傾する。口縁部外面はヨコ方向のナデ調整。胴部上～中位は，ヨコ方向の叩き目及び斜方向の叩き目の後，ナデ調整を施す。下位はヨコ方向及び斜方向の刷毛目の後ナデ調整を行なう。底部には指頭圧痕が見られる。口縁部内面はヨコ方向のナデ調整。胴部内面は斜方面の刷毛目が施される。なお内面は剝離が著るしく進む。**136**は甕の脚台である。大型で背が高く脚台径13.4cm，残存高 8.7cmを測る。残存⅓での復元，外面は刷毛目の後ナデ調整。内面は弱い刷毛目で指頭圧痕が多数見られる。底部との接合部は疑口縁を形成する。**137**は脚台であり，上部は不明。脚台径に対して，脚台高は 3.1cmと低い。内外面ともヨコ方向の刷毛目を施す。**138**は甕の脚台である。内外面ともヨコ方向のナデ調整を施す。**139**は甕である。上部は欠損するが，下部は完形である。外面上～中位はヨコないし斜方向の叩き目の後，ナデ調整を施す。下位は斜方向の刷毛目の後，ナデ消しを行なう。内面はヨコないし斜方向の刷毛目調整を施すが，器壁が剝離のため調整が観察できない箇所も多い。**140**は高坏の脚部である。外

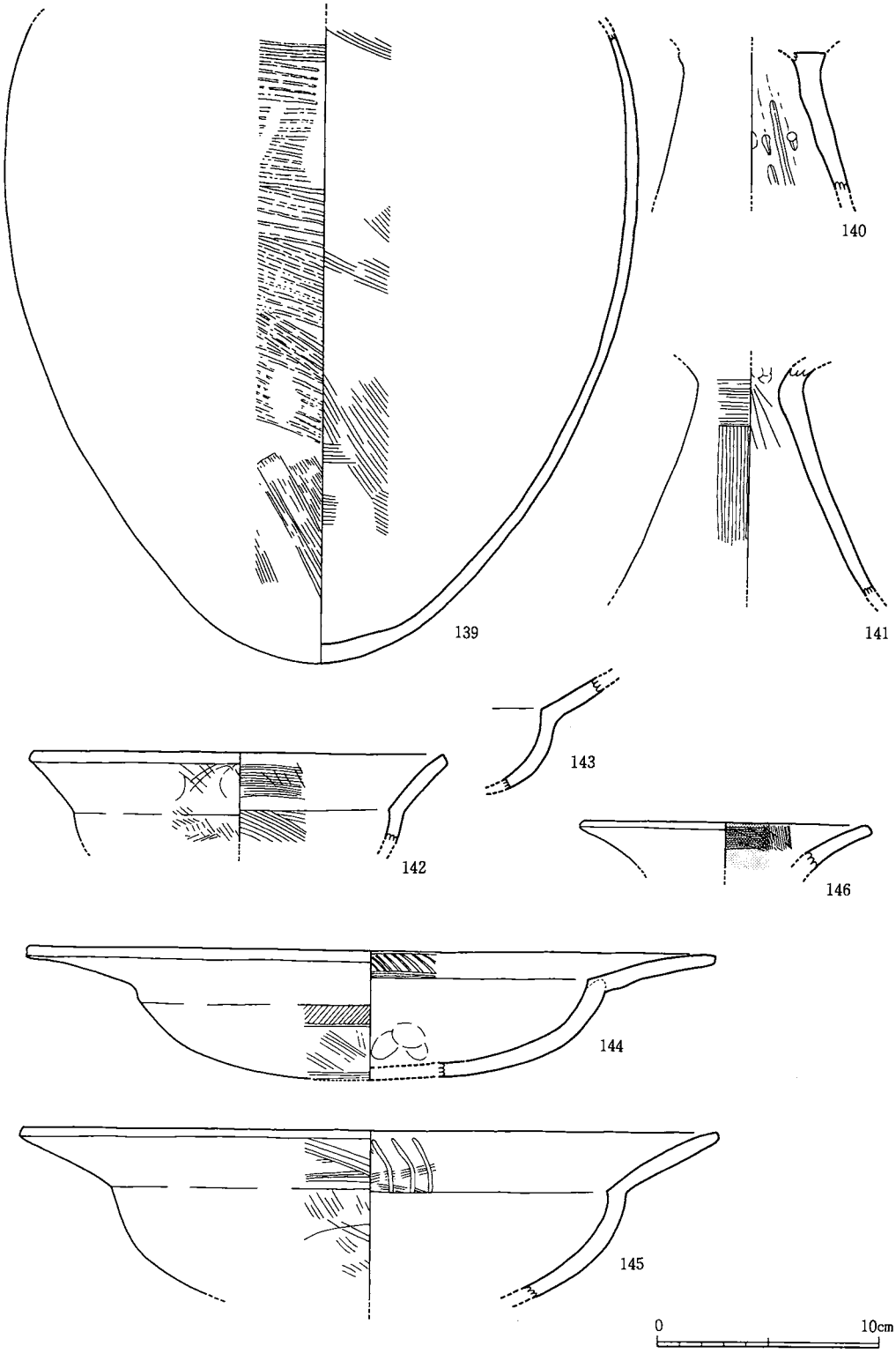
面はナデ調整を，内面にはヘラ削りの痕跡が見られる。なお接合面が明瞭に残る。**141**は高坏の脚部である。外面はタテ方向の刷毛目の後，ナデ調整を施す。内面には上位に指頭圧痕及びヘラ削りの痕跡が見られ，下位はナデ調整を行なう。**142**は高坏である。坏部であり，器高がやや深い。外面は斜方向及び不定方向の刷毛目の後，ナデ調整を行なう。内面上位は斜方向の刷毛目の後にナデ調整で仕上げる。下位は斜方向の刷毛目調整。**143**は高坏の坏部片である。外面は斜方向及びヨコ方位の刷毛目の後にナデ調整。内面上位は斜方向の刷毛目の後にナデ調整，下位はヨコ方向のナデ調整。**144**は高坏の坏部である。大型であり口径31.1cm，残存高 5.8cmを削る。外面上位はヨコ方向の刷毛目調整の後，ナデ調整。下位は斜方向及びヨコ方向の刷毛目の



第53図　５号住居址内出土土器実測図（その１）



第54図　5号住居址内出土土器実測図（その2）



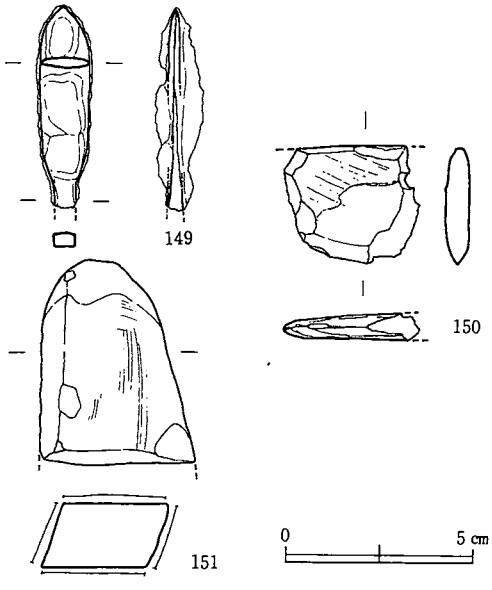
第55図　５号住居址内出土土器実測図（その３）

後ナデで仕上げる。内面上位にはヨコ方向の刷毛目調整の後，ナデ，最後に斜方向の暗文を施文する。下位はナデで仕上げるが，弱い指圧痕が見られる。**145**は大型の高坏の坏部である。口径31.6cm，残存高 7.6cmを測る。残存⅛での復元。外面上位には斜方向の刷毛目調整，下位は斜方向及び不定方向の刷毛目調整を重ねる。内面上位にはヨコ方向のナデ調整後斜方向の暗文を施す。下位はヨコ方向のナデ調整である。**146**は器種は不明であるが口縁部片である。外面はヨコ方向のナデ調整。内面に斜方向の強い刷毛目の後にタテ及びヨコ方向の刷毛目を重ねる。なお内面には赤色顔料が塗布される。

5号住居址内出土鉄器，石器（第56，57図）

147は安山岩製の台石である。長方向28.1cm，短方向26.0cm，厚11.0cmを測る。研磨面は表面のみで，部分的には窪みを有している。重量14.49kgである。**148**は安山岩製の台石である。長方向43.2cm，短方向33.0cm，厚13.5cmを測る。表裏面ともに良く研磨されているが，表面には研磨のため強い窪みを2ヵ所有する。他の面は粗い状況を残す。重量31.50kgである。

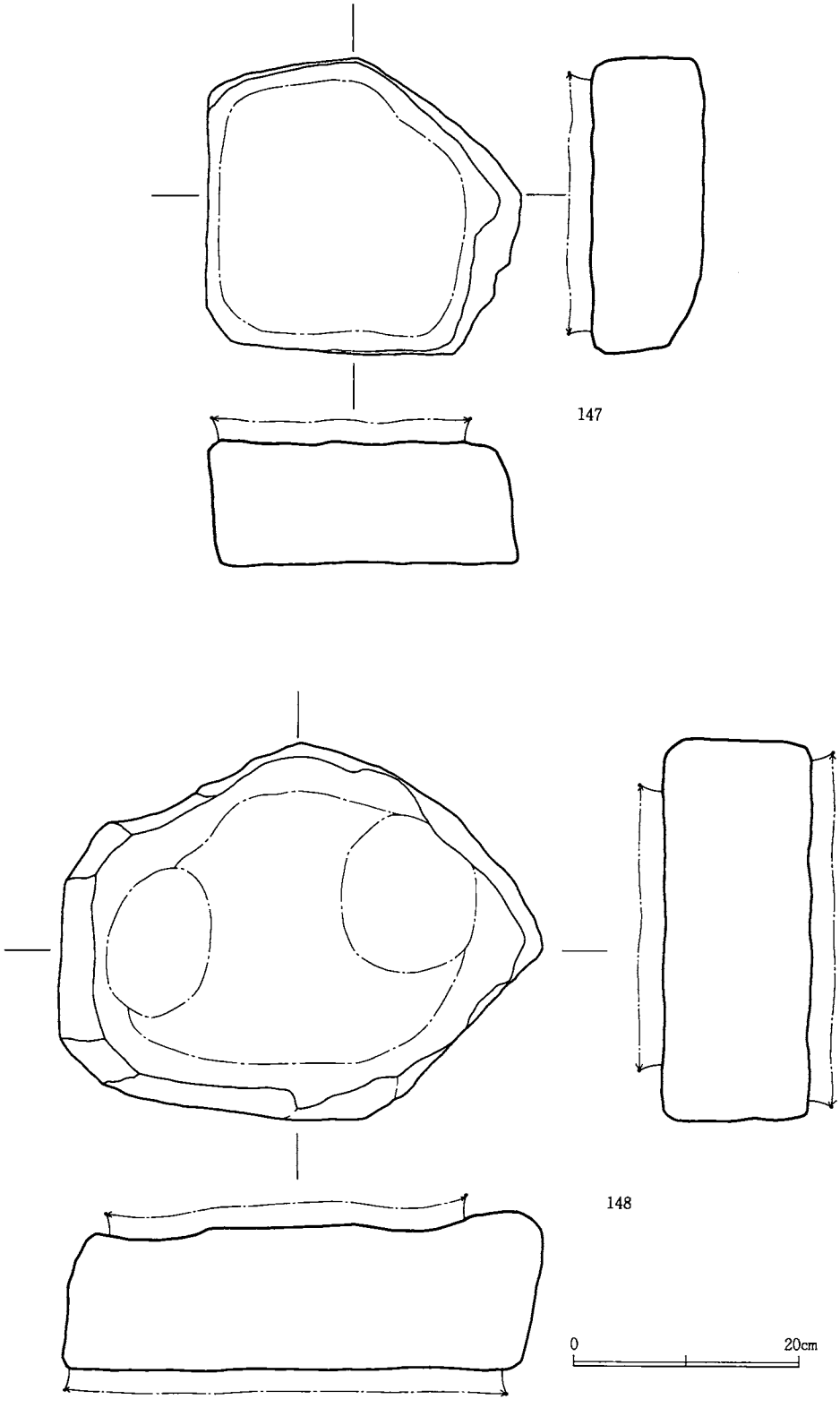
149は有茎の鉄鏃である。茎部は欠損するが，頭部は完形である。残存長 5.3cm，幅1.35cmを測る。柳葉形であり，関部を明瞭に造り出す。頭部の断面厚 3.0mm，茎部は長方形 6mm×4mmとなる。**150**は粘板岩製の石包丁である。右側，左側が欠損するが，残存長3.60cm，幅3.20cmである。平面形は長方形を呈しており，刃部には使用痕が見られる。**151**は凝灰岩製の石包丁である。下側が欠損するが，残存長5.42cm，幅4.15cmを測る。研磨面は4面である。



第56図　5号住居址内出土鉄器・石器実測図

(5)　6号住居址（第58図）

①・②—ⓐ・ⓑ区に位置し，切り合い関係のない単独出土の住居址である。長方形状を呈しており，その規模は長軸方向5.2m，短軸方向4.0mを測る。床面積は18.5㎡で主軸方向は東西，その方位N—71°—Eである。壁高は北側で40cm，東側で50cmである。ベッド状遺構は長軸方向の西側，東側の2ヶ所で，コーナー部を囲いこむ形で設けられている。段差高は10cm程の低い形状である。なおP1T.3の西側に弱い段差を有する箇所が見られるが，延長部分が不明であることからベッド状遺構と認定するには至っていない。

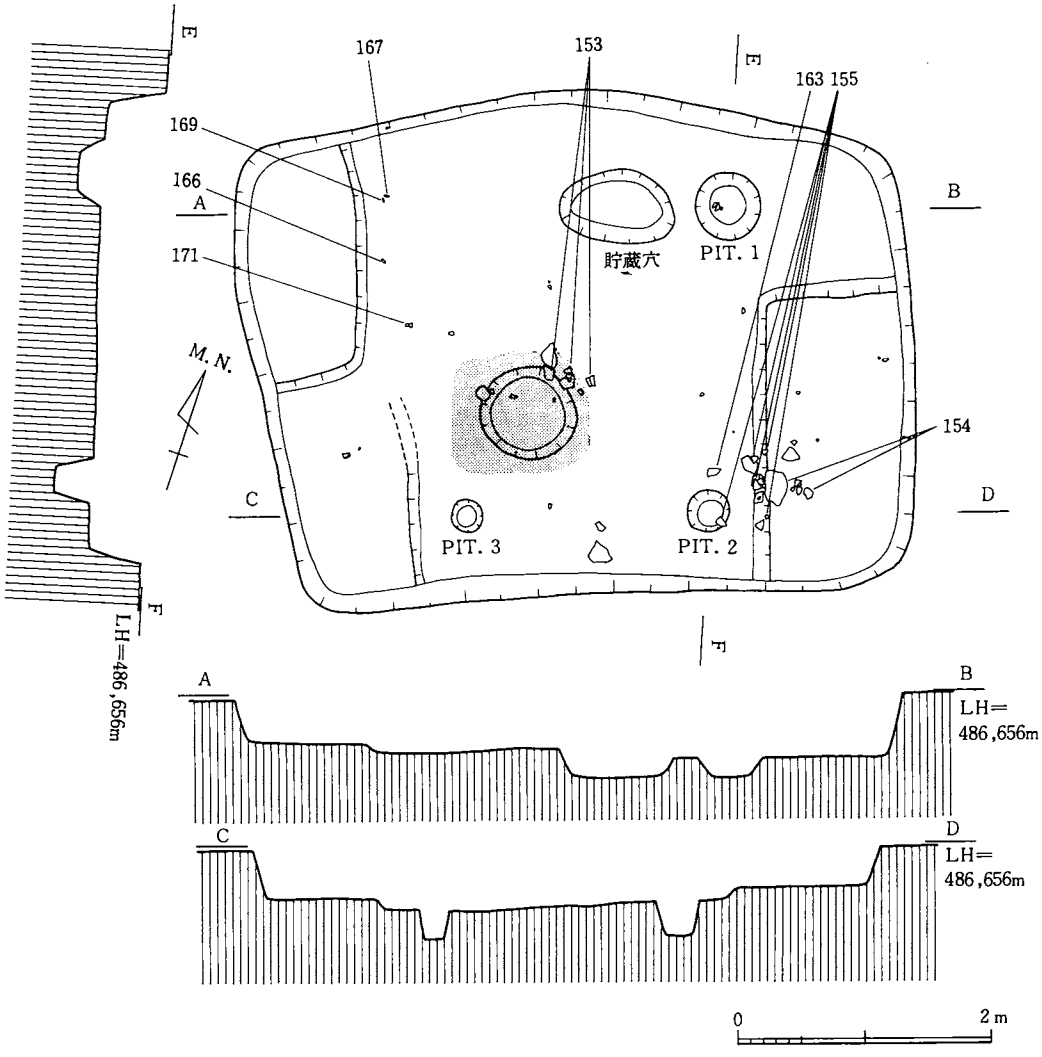


第57図　５号住居址内出土石器実測図

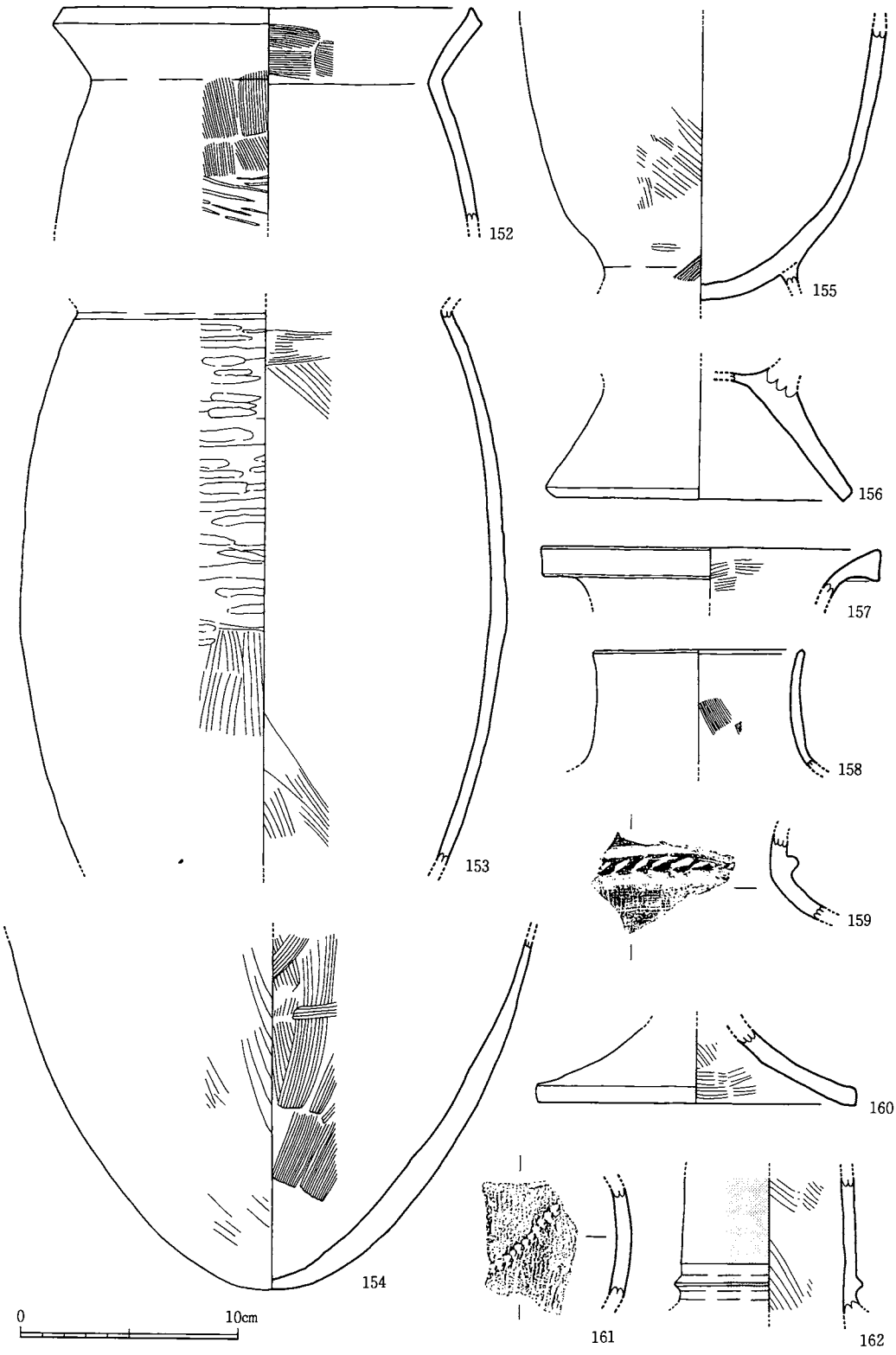
炉は中央部に1基確認され，周辺部にはマット状の炭化物が確認された。主柱穴は変則的な3本柱である。本来は4本柱とも考えられるがPIT. 1が他のPITに比べ浅い柱穴であることから，PIT. 4の想定位置に柱を直接床面に据えて柱の長さの調整を行ない，建物を構築したとも考えられる。貯蔵穴は北側に1基確認される。

住居址の覆土は，3層からなり上層より順に黒褐色土，黒褐色土に明褐色土をブロック状に含む層，黒褐色の粘質土となる。

遺物の出土状況では住居址東側にまとまって分布し，上～中層からの量が大部分を占める。番号を付して取り上げた資料36点の内，図化できたものは28点である。出土遺物の内訳は土器類では甕5点，壺4点，鉢3点，脚台及びジョッキ形土器各1点である。鉄器では鏃1点，鉈3点，手鎌3点，石器では砥石が1点である。153，154，163が2層中よりの出土であり，155



第58図　6号住居址実測図

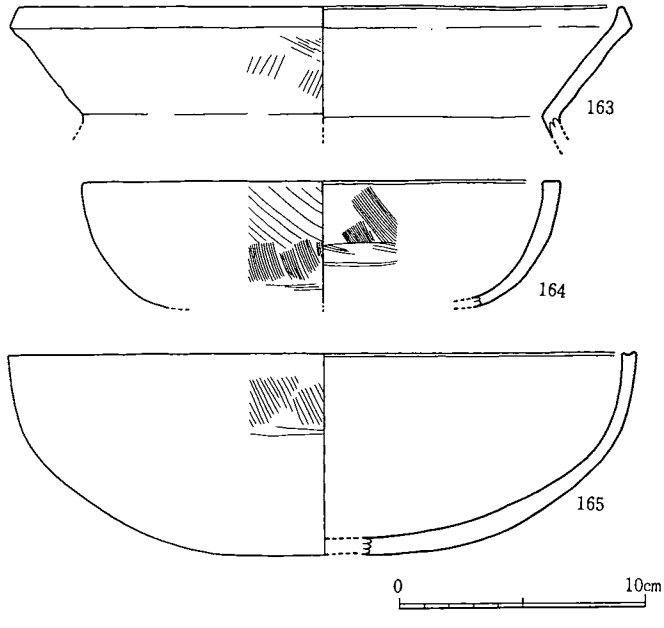


第59図　６号住居址内出土土器実測図（その１）

は2層及び床直上出土遺物の接合資料である。一方鉄・石器類では170が床密着の資料であり，その他のものは1，2層からの流れ込みである。住居址の廃絶に際しては，ほとんどの遺物は本来の位置になく，大部分はその後の流れ込みによるものである。

6号住居址内出土土器（第59，60図）

152は甕である。口径19.7cm，残存高9.8cmを測る。口縁部外面はヨコ方向のナデ調整，胴部上位はタテ方向の刷毛目を，中位にはヨコ方向の粗い叩き目を施す。口縁部内面はヨコ方向の刷毛目調整，内面下位は不定方向のナデ調整を行なう。**153**は甕である。口縁部及び，底部が欠損する。柳形の胴部である。外面上～中位はヨコ方向の粗い叩き目を施こす。下位はタテ方向の強い刷毛目調整を施こす。内面上位には弱い刷毛目調整，中位は不定方向の調整，下位は弱い刷毛目調整となる。**154**は甕の底部である。胴部上位は完全に欠損する。器壁は厚く13mmを測る。外面はタテ方向の刷毛目調整を施し，全体的にナデ消す。内面はタテ方向を基調とするが一部ヨコ方向の強い刷毛目を重ねる。深底部はナデ調整のみである。**155**は甕である。残存⅓での復元。底部には脚台の貼り付け痕跡が見られるが，脚台面の欠損は7mmほど残り，欠損面を磨きあげた可能性も考えられる。胴部外面中位はタテ方向及び斜方向の刷毛目調整が見られる。さらにこの調整法は底部まで一体で成形されている。内面はタテ方向へ刷毛目調整を施す。**158**は甕の脚台片である。残存⅛での復元。脚台径は14.1cmと大型である。外面はヨコ方向のナデ調整，内面は指圧の調整となる。**157**は壺の口縁部である。残存⅒での復元。外面はヨコ方向のナデ調整。内面はヨコ方向の刷毛目の後ナデ調整で仕上げる。**158**は口縁部片であるが壺のものと考える。残存⅙での復元。口径9.7cm，残存高5.2cmを測る。口縁部は外湾気味に立ち上がり，胴部へと続く。外面はヨコ方向のナデ調整，内面は斜方向の刷毛目の後ナデ調整を施す。**159**は壺の頸部片である。外面には突帯を貼り付けており，そこには斜方向の幅7mm～12mmの刻み目を定間隔に施す。外面下位



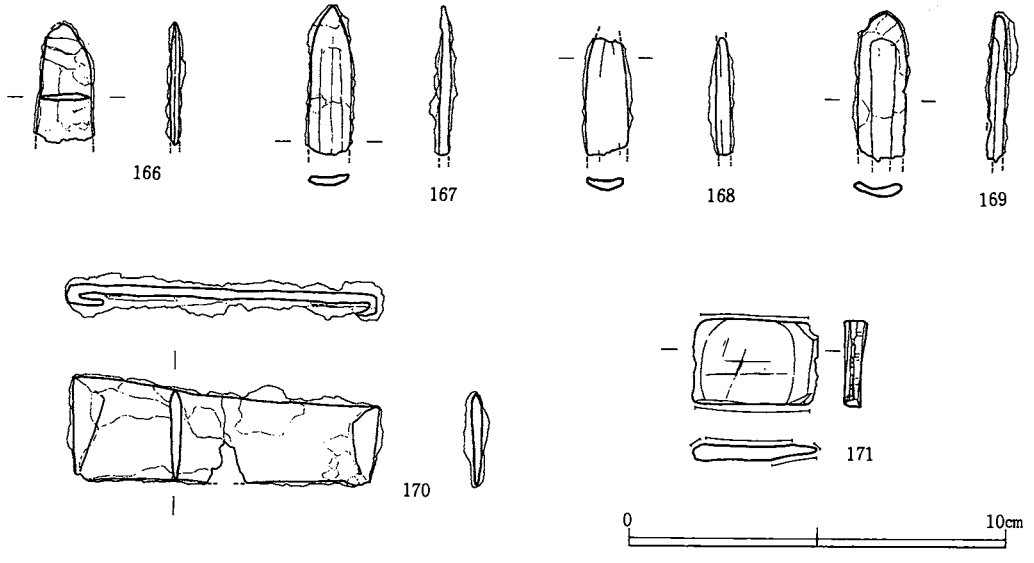
第60図　6号住居址内出土土器実測図（その2）

はタテ方向の刷毛目の後ヨコ方向のナデ調整を行なう。内面は斜方向の刷毛目及びヨコナデ調整を行なう。**160**は甕の脚台片である。残存⅛での復元。脚台径に対して脚台高が延びきれない。

外面はナデ調整，内面はヨコ方向の刷毛目調整を施す。**161**は壺の胴部片である。外面には斜方向に幅4㎜の刺突文が見られる。なお外面にはタテ方向の刷毛目が見られる。内面はナデ調整である。**162**は壺の頸部片と考える。外面下位には2条の突帯を有しており，上位は斜方向の刷毛目の後，ナデ調整で仕上げる。内面は斜方向の強い刷毛目調整である。**163**は甕の口縁部である。口縁部は外傾し口唇部は屈折し立ち上がる。外面は斜方向の刷毛目の後，ヨコ方向のナデ調整を施す。内面はヨコ方向の丁寧なナデ調整である。**164**は鉢である。残存⅙での復元。口径19.3cm，残存高5.0cmを測る。外面上～中位には斜方向に大柄の刷毛目の後に斜方向の細かい刷毛目を重ねる。下位にはヨコ方向の刷毛目調整を施す。内面上位には斜方向の刷毛目，中位はヨコ方向の刷毛目調整を行なう。**165**は鉢である。外面上位は斜方向の刷毛目調整の後，上位はヨコ方向のナデ調整，下位はヨコ方向の刷毛目調整を重ねる。その他内外面は不定方向のナデ調整である。

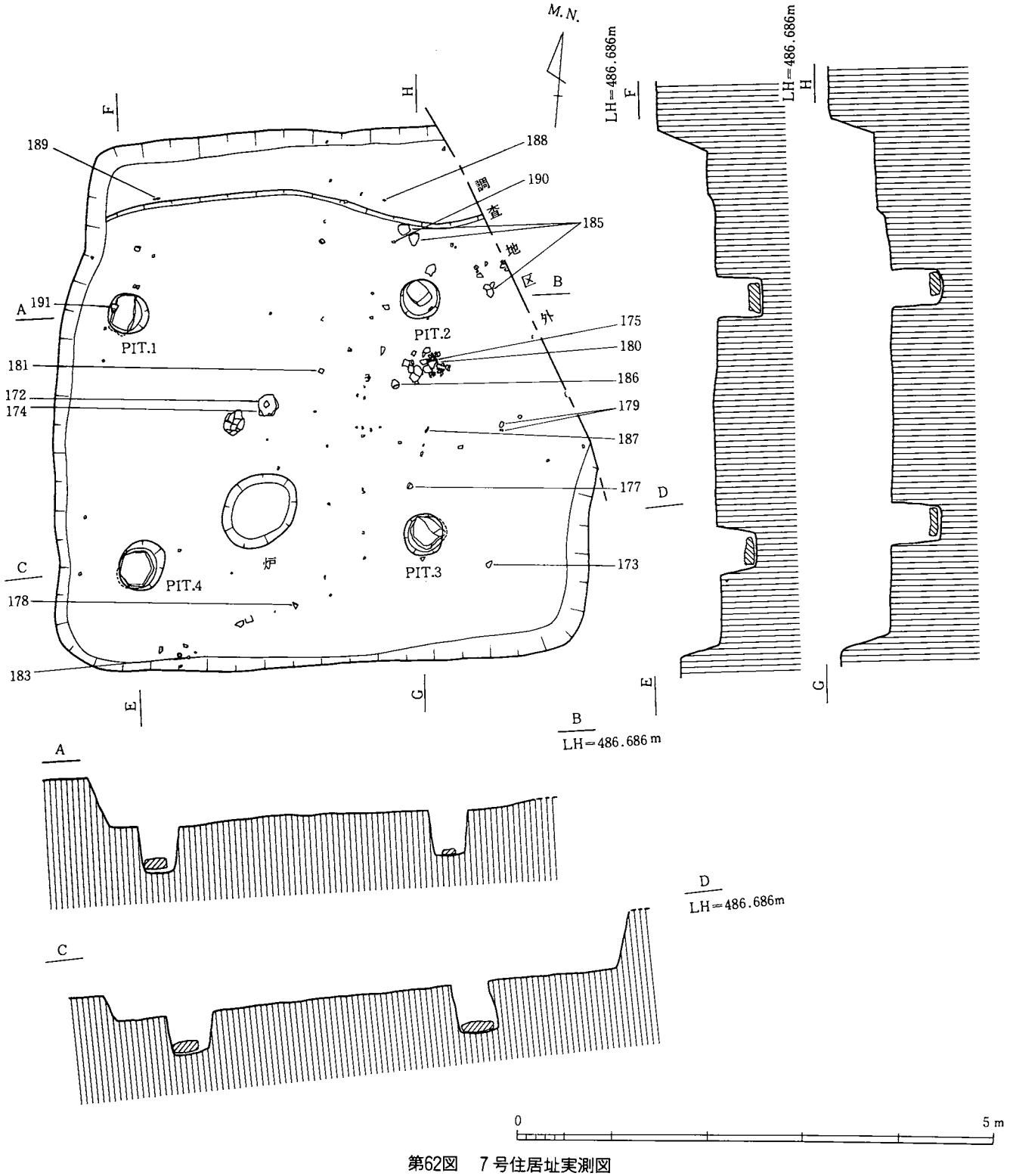
6号住居址内出土鉄器，石器（第61図）

166は鉄鏃と考えられる。頭部のみの残存で，茎部の有無は不明である。残存長3.2cmである。**167**は鉄製の鉇である。鋒部の残存で，基部側は欠損する。残存長3.95cm，幅1.15cmである。身部から鋒部までほぼ直線状である。**168**は鉄製鉇である。鋒部付近であるが，先端部及び基部側が欠損する。不純物が内面に付着するため，断面形は詳細は不明であるが，非常に浅いU字形



第61図　6号住居址内出土鉄器・石器実測図

を呈している。**169**は鉄製鉈である。鋒部のみの残存で，基部側は欠損する。残存長3.95cm，幅1.3cmである。鋒部側に鋭さはなく，基部側とも考えられる。**170**は鉄製手鎌である。ほぼ完形であり，全長8.1cm，幅2.8cmを測る。刃部に対して背部は並行して造られず，斜方向となる。左右の側端部は各々内側に7～9mm折り返し，袋部を造り出す。断面は背部側が3mmを保ち，刃部側は鋭さを有する。**171**は頁岩製の砥石である。剝離した破片であるが，残存長3.35cm，幅2.30cmである。研磨面は4面であり，表面には特に線条痕が見られる。



第62図　7号住居址実測図

(6)　7号住居址（第62図）

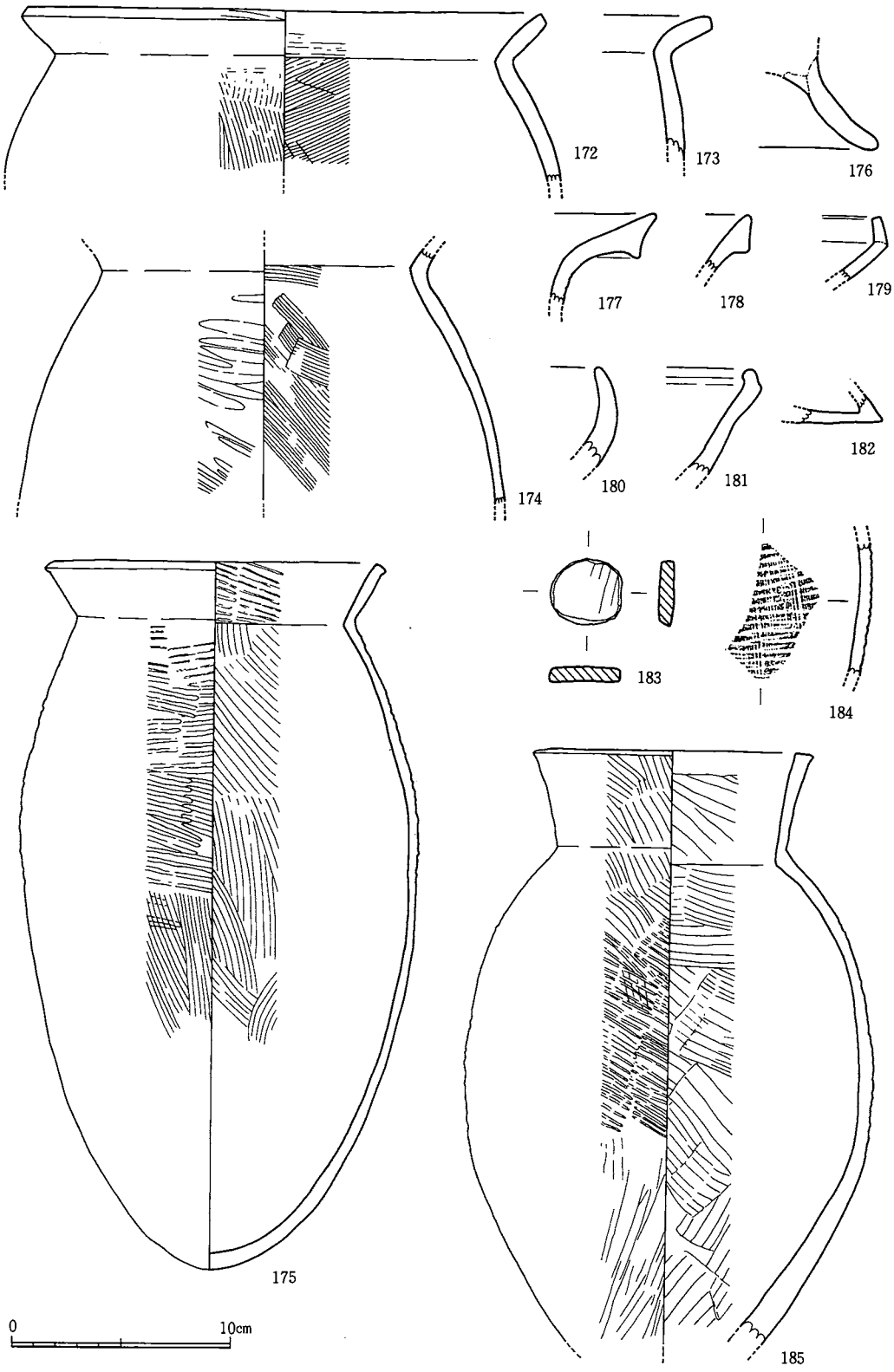
①—ⓑ・ⓒ区内，調査地区北部東側に位置している。全く切り合いのない単独の住居址であるが北東側が一部調査地区外へ出る。平面形態はほぼ正方形であり，東西方向 5.7m，南北方向 5.6m，床面積28.1㎡を測る。主軸方向は，周囲の状況から見て東西と考えられ，その方位はN—86°—Eとなる。壁高は南側が50cm，西側に45cmを測る。ベッド状遺構は北側の一辺に長く，大型のものが作られており段差は約10cmである。主軸穴は4本で，全ての柱穴内に盤石を有している。盤石は全て熔岩塊で最小25cm～最大40cm角の平石である。炉は中央よりやや南側に偏存した位置に1基あり，周辺部に少量，カーボンの散布が見られる。なお貯蔵穴は検出されていない。

住居址の覆土は5層からなり，灰褐色土，黒褐色土に黄褐色土の混入層，黒褐色粘質土，炭化物混入の黒色土，灰褐色粘質土の順で覆われる。

遺物の出土状況では，1層中より少量の資料が出土し，2層中より住居址内部の中央部に，大型で完形に近い土器がややまとまり出土する。番号を付して取り上げた70点の内，図化できたものは40点であり，ここでは16点を掲載した。出土遺物の内訳は土器類では甕5点，壺4点，鉢4点，ジョッキ形土器，メンコ形土器，杓子各1点となる。鉄器では鏃2点，石器では鏃1点，砥石1点である。土器は中層から完形に近い形態のものが出土する。これは175，185，186の一群である。さらに3層ならび床密着の資料では172，174，178，187であり，これらがこの住居址の時期決定の資料と考えられる。さらに鉄器，石器類では189，190が上層よりの流れこみであり，188，191が3層中よりの出土となる。住居址の中央部に大型の破片及び完形土器が見られることから，住居址廃絶時期に中央部に投棄したものと考えられる。

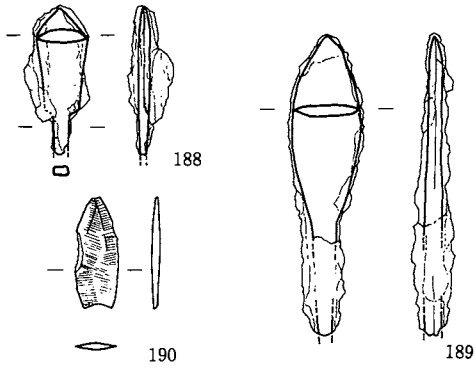
7号住居址内出土土器（第63，64図）

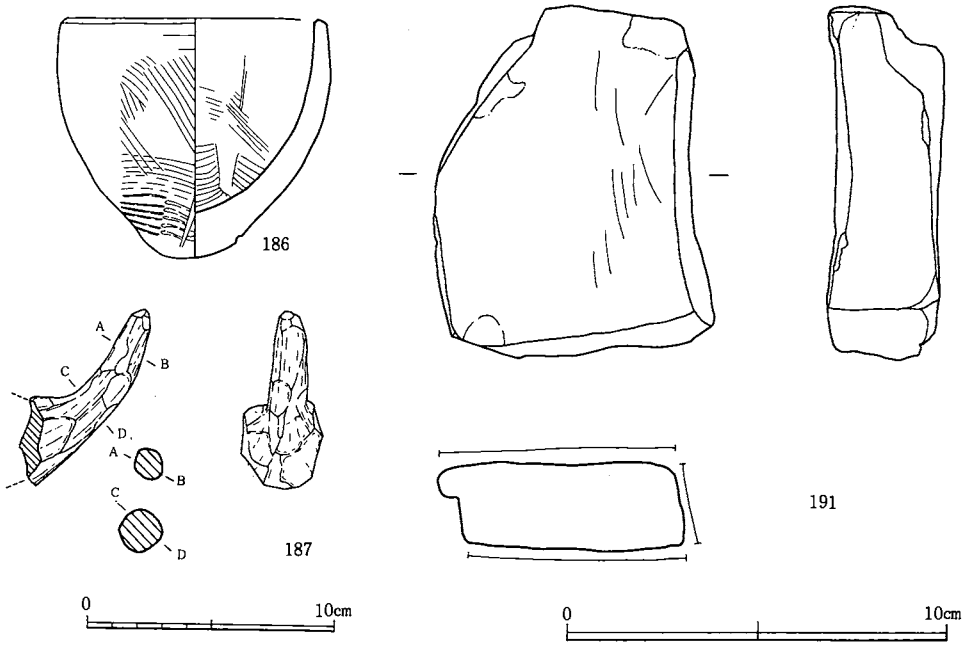
172は甕である。口径は24.0cmを測り，大型である。頸部は強く窄み胴部が張る。外面上位はヨコ方向のナデ調整，下位はタテ方向及び斜方向の刷毛目調整を施す。内面上位はヨコ方向の刷毛目調整の後，ナデ調整を行なう。下位は斜方向の刷毛目調整を行なう。**173**は甕の口縁部片である。外面上位は刷毛目の後ナデ調整を重ねる。下位はタテ方向の刷毛目調整，内面はヨコ方向のナデ調整を施す。なお外面は煤が付着する。**174**は甕の頸部～胴部片である。外面上位はヨコ方向の叩き目を，下位は斜方向の叩き目の後にヨコ方向のナデ調整を施す。外面には煤が付着する。内面は斜方向の刷毛目調整を重ねる。**175**は完形の壺形土器である。口径15.6cm，胴部最大径18.2cm，器高32.25cmを測る。底部は丸底で胴部は卵形，口縁部は外傾する。口縁部外面はナデ調整。胴部上位はヨコ方向，中位は緩い斜方向の叩き目を施す。下位はタテ方向の刷毛目調整及びナデ調整を施す。口縁部内面は斜方向の刷毛目の後にナデ調整を行なう。胴部内面はタテないし斜方向の刷毛目調整を行なう。深底部は刷毛目の後にナデ調整で仕上げる。**176**



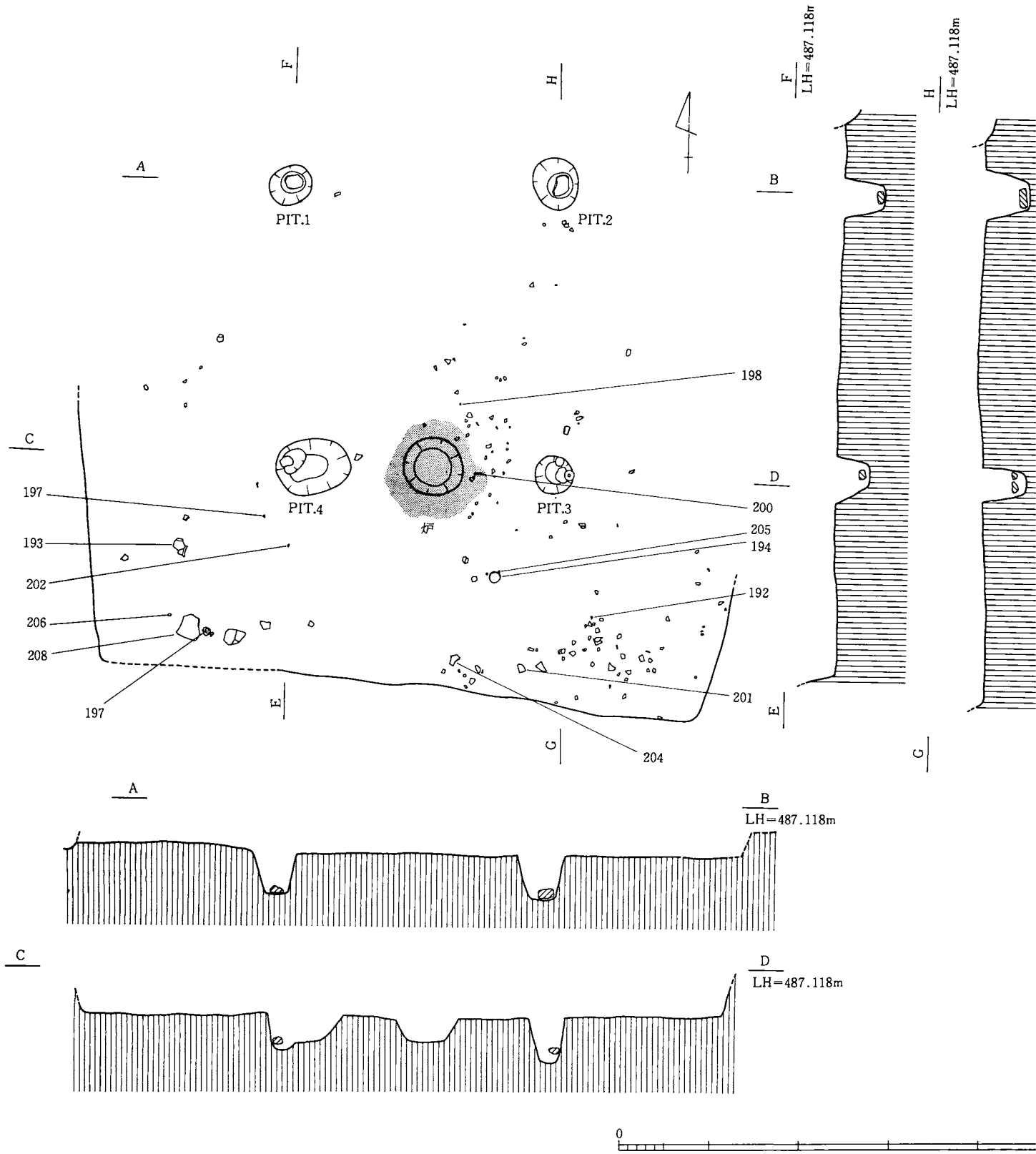
第63図　７号住居址内出土土器実測図(その１)

は甕の脚台部である。内外面ともヨコ方向のナデ調整を行なう。なお内面上位には指圧による強いナデが残る。**177**は壺の口縁部片である。外面上位はヨコ方向の刷毛目の後丁寧なナデ調整を施す。下位には斜方向の刷毛目の後にナデ調整を施す。内面はヨコ方向の刷毛目の後ヨコ方向のナデ調整を行なう。**178**は壺の口縁部片である。外面はヨコ方向のナデ調整。内面はヨコ方向の刷毛目の後にナデ調整を旋す。**179**は鉢の口縁部片である。外面上位はヨコ方向の丁寧なナデ調整。下位は斜方向の刷毛目の後ヨコ方向のナデ調整である。内面はヨコ方向の丁寧なナデ調整である。**180**は鉢の口縁部片である。外面は丁寧なナデ調整，内面はヨコ方向の刷毛目調整となる。**181**は鉢の口縁部片である。口縁部は外傾し，口唇部は屈折し，やや内傾する。外面はヨコ方向の刷毛目の後にヨコ方向のナデ調整を行なう。内面はヨコ方向の刷毛目の後にナデ調整を行なう。**182**はジョッキ形土器の底部である。外面はヨコ方向のナデ調整，底部はナデのみ。内面はヨコ方向のナデ及び不定方向のナデ調整を加える。**183**はメンコ形土器である。長方向 3.3 cm，短方向 3.1 cm，厚 7 mmを測る。表面には叩き目が残る。**184**は甕の胴部片と考える。外面にはヨコ方向の叩き目





第64図　７号住居址内出土土器実測図（その２）　　第65図　７号住居址内出土鉄器・石器実測図



第66図　8号住居址実測図

の後，タテ方向の刷毛目調整を重ねる。内面は斜方向の刷毛目調整となる。なお外面には煤が付着する。**185**は壺である。底部が欠損するが，口径12.9cm，胴部最大径18.8cm，残存高37.2cmを測る。胴部は卵形で器壁が薄いが，底部は13mmを測り厚い。口縁部外面は斜方向の刷毛目調整。胴部上位には斜方向の刷毛目調整，中位には斜方向の叩き目を重ねる。下位は斜方向の刷毛目調整を施こす。口縁部内面は粗い刷毛目調整，胴部内面は斜方向及びヨコ方位の刷毛目調整を重ねる。**186**は鉢の完形品である。口径10.8cm，器高 9.6cm，胴部最大径11.0cmを測る。底部は丸底で粗い切り離し面を残して，胴部がふくらみ，口縁部は直立する。口縁部端部はヨコ方向のナデ調整。外面中位は斜及びヨコ方向の刷毛目を，下位には一部叩き目が見られる。内面は不規則な刷毛目の後にナデ調整で仕上げる。**187**は杓子の取手と考える。把手部のみの残存で，残存長は 8.3cmである。棒状の粘土塊を手づくねで整形しており，表面は指によりナデ調整が行なわれているが，粗い面を残す。断面形はほぼ正円に近い。

7号住居址内出土鉄器，石器（第65図）

188は有茎の鉄鏃である。茎部を破損するが，頭部は完全である。残存長3.9cm，幅1.4cmを測る。関部の造り出しが明瞭である。頭部の断面厚は 4mm，茎部のそれは長方形であり 4mm× 3mmである。**189**は有茎の鉄鏃である。茎部を破損するが，残存長 7.9cm， 幅1.85cmを測る。 柳葉形の形状で，頭部厚は 3mm，茎部は不純物の付着で断面形は判明しない。**190**は磨製の石鏃である。先端部及び左側縁部が欠損するが，ほぼ完形である。残存長2.90cm，幅1.10cm，厚 2mmである。基部に抉りを有しており，研磨は良好である。**191**は砂質凝灰岩製の砥石である。完形であり全長9.30cm，幅7.45cm，厚2.40cmである。よく使用されており 4 面に線条痕，磨痕が集中する。重量317.5g である。

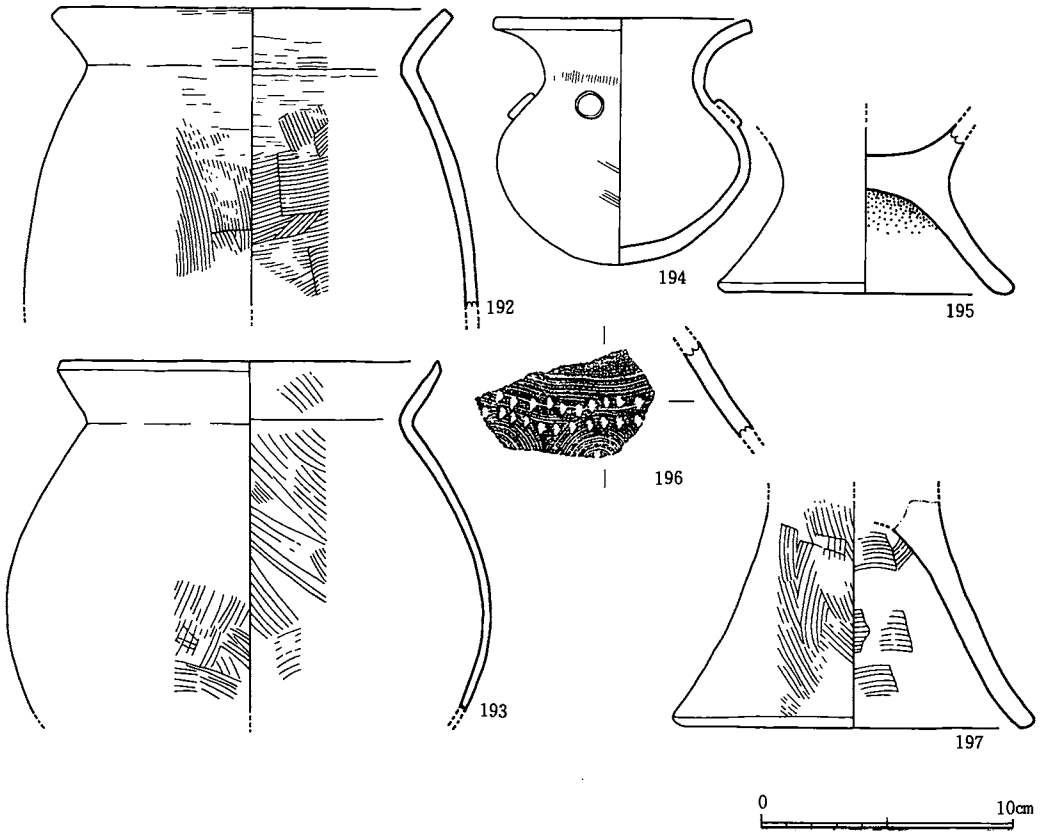
(7)　8号住居址（第66図）

①，②—ⓑ，ⓒ区内，調査区北部に位置している。本住居址は14号，16号住居址に切られている。隣接する 7 号， 9 号，13号住居址との切り合い関係については不明である。平面形態はほぼ正方形をなすと想定されるが，南北方向にやや長い長方形も想定しうる。残存規模は東西方向7.6m ，南北方向5.9m である。主軸の方向は現況では確定しがたく，仮に隣接住居址と同一の東西方向であるとすれば，N－89°－Wを測りうる。住居址の上面は上位の14号，16号住居址に大部分は削平されており，壁高も南側でわずかに30cmを測るのみである。炉は南側に偏り，径 1.2m のものが 1 基確認され，周囲にはぶ厚くマット状の炭化物が見られる。主柱穴は 4 本であり，そのいずれにも盤石が埋められている。PIT，1 には20cm角の熔岩塊の平石が 1 個，PIT，2 にも同質でやや大型の盤石が用いられている。PIT，3 には 2 個の熔岩塊で柱を固定しており，PIT，4 は掘り方を施して，二段掘りの下面には小型の熔岩性の掌石を利用している。

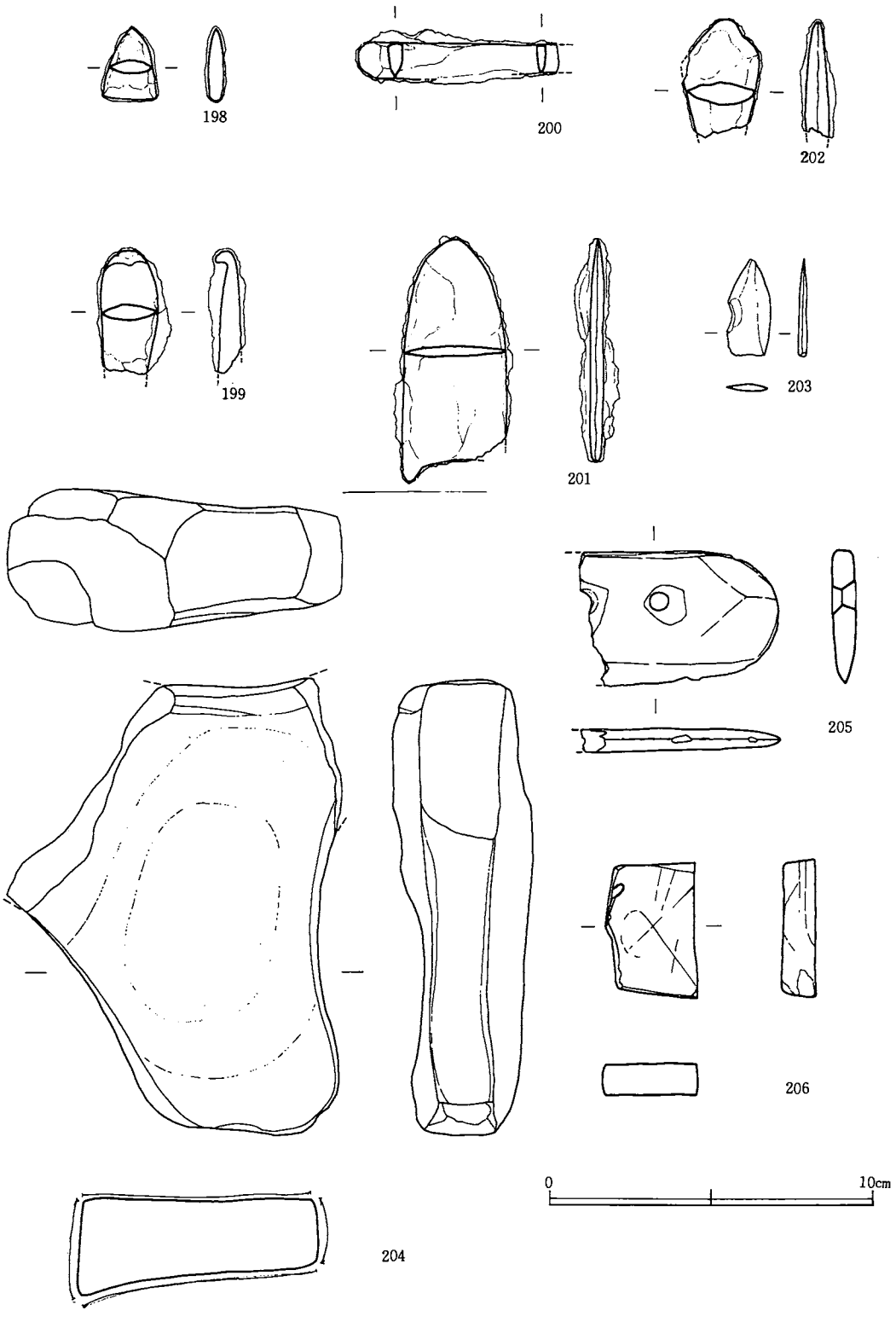
貯蔵穴及びベッド状遺構は確認されていない。

本住居址の覆土は，上面に14号住居址が位置していることから，最下層に黄褐色土が1層残るのみである。

出土状況では，本住居址の上位を2つの住居址が切っているため，大型の遺物はほとんど出土しない。番号を付して取り上げた55点の内，図化できたものは6点である。出土遺物の内訳

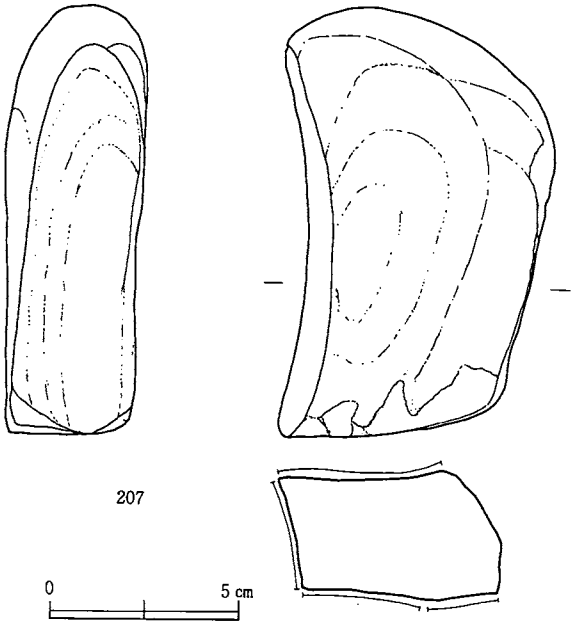


第67図　8号住居址内出土土器実測図

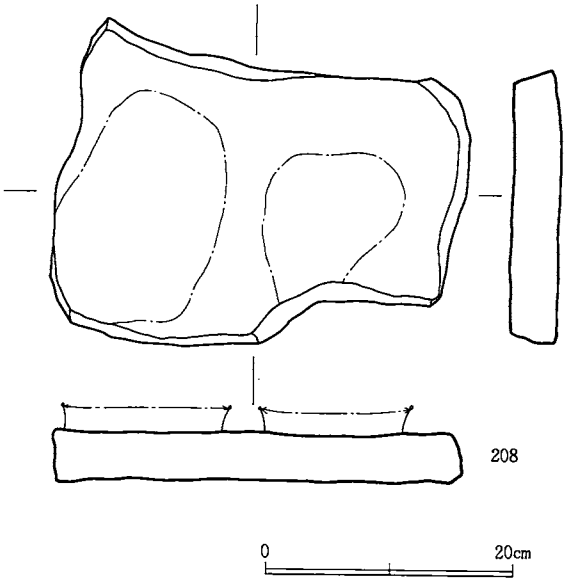


第68図　8号住居址内出土鉄器・石器実測図（その1）

は土器類では甕3点，壺2点，鉢1点である。鉄器は鏃が4点，刀子1点となり，石器では鏃，石包丁各1点，砥石3点，台石1点となる。各遺物の出土層位は土器では192，194，鉄器，石器では199，201，205，206が床直上の資料となる。また198，203はその上位の層出土ではあるが，この住居址の時代判定の資料として捉えることができよう。廃絶の状況は上面切り合いによって不明であるが，生活面に鉄器，石器の利器が集中して出土する様子は，廃絶状況のパターンを示すものとも考えられる。



第69図　8号住居址内出土石器実測図（その2）

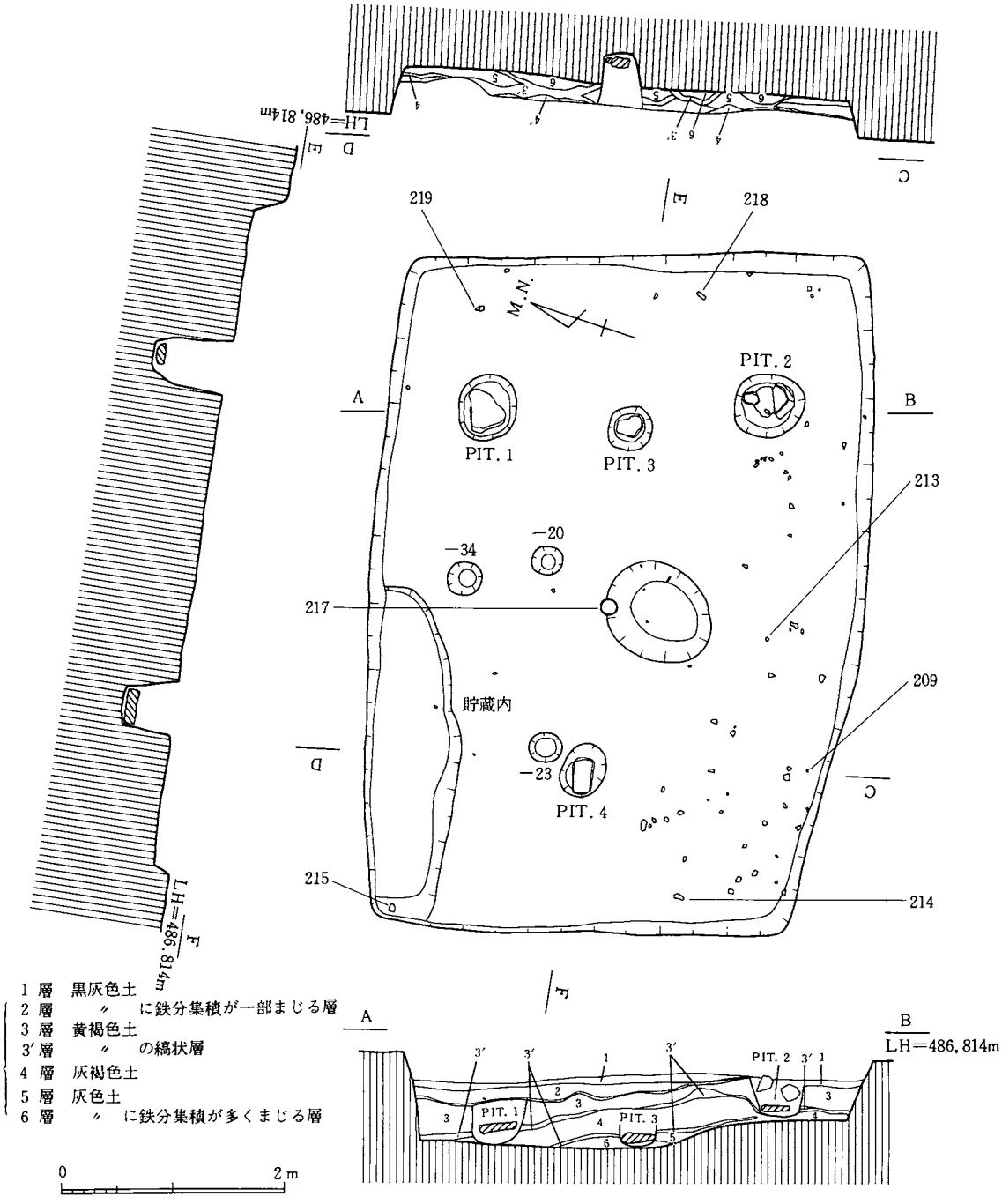


第70図　8号住居址内出土石器実測図（その3）

8号住居址出土土器（第67図）

192は甕である。胴部が弱く張り，残存長は11.7cmである。口縁部外面はヨコ方向の刷毛目の後にナデ調整を行ない，胴部は斜方向の刷毛目の後に一部ヨコ方向のナデによって仕上げられる。口縁部内面はヨコ方向の刷毛目の後にナデ調整，胴部はヨコないし斜方向の刷毛目の後一部ナデ消しを行なう。**193**は鉢である。胴部の上半分は多量の煤が付着している為に観察ができない。外面下位は斜方向及びヨコ方向の刷毛目調整を施す。内面は斜方向の刷毛目調整を重ねる。底内面は指圧のみの調整である。**194**は小型丸底壺である。完形であり口径10.4cm，器高9.75cm，胴部最大径10.2cmを測る。胴底部にはボタン状の突起が貼り付けられており，総計6個である。外面は頸部付近のみがタテ方向の刷毛目で，他はヨコ及び斜方向の刷毛目調整の後にナデで仕上げる。内面は全てヨコナデ調整である。**195**は甕の脚台である。外面はタテ方向の刷毛目の後にヨコナデ調整を行なう。内面には砂粒が付着するが，ヨコ方

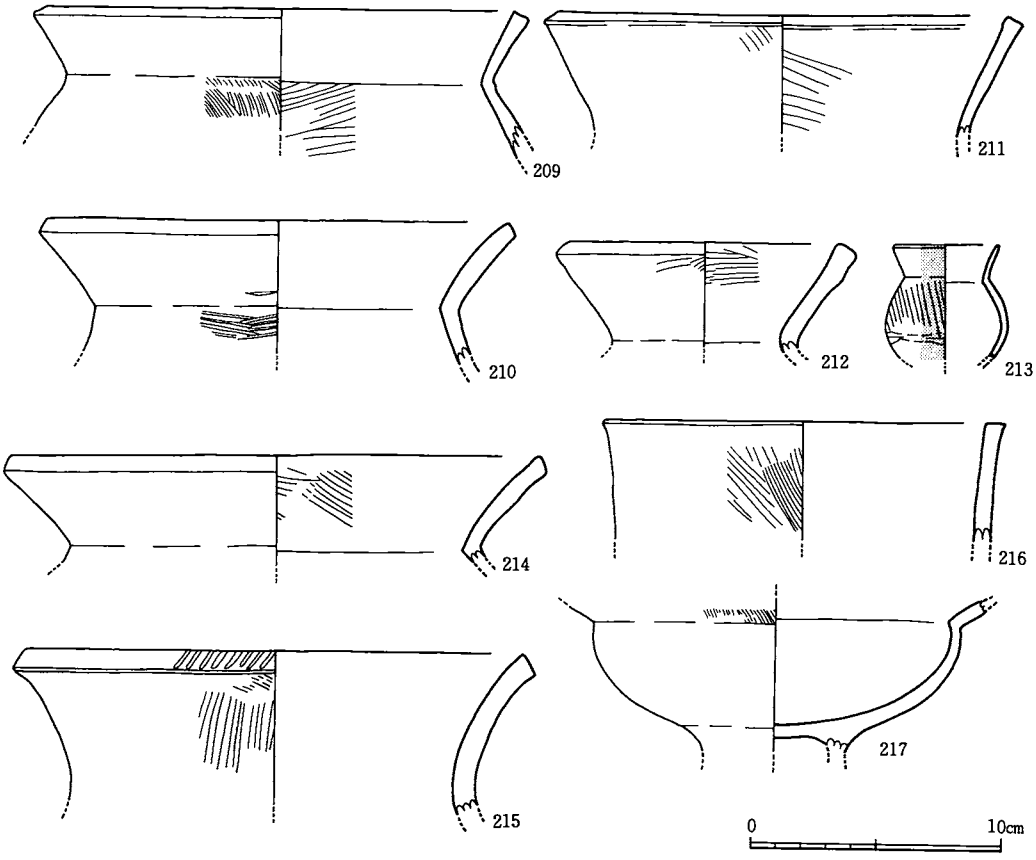
向のナデを施している。**196**は壺の胴部片である。外面は上位にヨコ方向の刷毛目を，下位に流水文を施すが，さらにこの資料では最後に，上下2段の刺突を行なう。内面は丁寧なナデ調整である。**197**は甕の脚台部である。この資料は接合面が観察できる。外面はタテ方向の刷毛目の後に部分的にナデ消しを行なう。内面はヨコ方向の刷毛目の後にナデで仕上げる。



第71図　9号住居址実測図

８号住居址内出土鉄器，石器（第68～70図）

198は無茎三角形式の鉄鏃である。完形であり全長 2.2cm，重量 2.6g と非常に小型である。平面形は長三角形型である。**199**は有茎の鉄鏃と考えられる。残存長 3.9cmを測る。茎部は欠損しており，鋒が内側に曲がり込んでいる。復元形態は広根の柳葉式と想定される。**200**は刀子である。茎部が欠損しているが残存長 6.4cmを測る。刃部２ヵ所の背部の厚さは鋒側の方が厚く５mmを測る。**201**は無茎三角形式の鉄鏃である。右側部分が一部欠損するがほぼ形状の復元は可能である。基部に抉りが入るが矩形を呈している。表面には錆が多量に付着するものの，本体部の造りは薄くわずかに３mmを測るのみである。重量は21.25gである。**202**は有茎の鉄鏃と考えられる。茎部が欠損しているが，残存長 3.6cmである。頭部の形状は木葉状に復元が可能である。断面は厚く７mmを測り，錆の為ふくらんだものと思われる。**203**は無抉の石鏃である。左側が一部剝離し，欠損するが最大厚で２mmである。重量1.4gである。**204**は凝灰岩製の砥石である。右上部と左上部が欠損している。表裏面ともによく使用されており，中央部が窪む。研磨面は６面であり，重量は660.5gとなる。**205**は石包丁である。左側部分が欠損しているが，平面形は

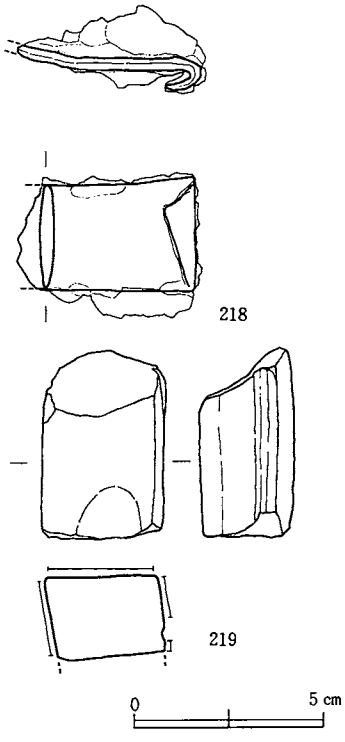


第72図　９号住居址内出土土器実測図

ほぼ長方形を呈している。**206**は凝灰岩製の砥石である。完形であり重量は17.1g である。よく使用されており5面に線条痕，磨痕がのこる。**207**は砂岩製の砥石である。大型のもので完形であり全長11.3cm，幅7.28cm，厚3.4cmで重量は434.2g を測る。よく使用されており中央部に窪みが生じる。研磨面は4面である。**208**は台石である。長方向33.0cm，短方向26.5cm，厚さ35cmで重量は 5.81 kg を測る。片面のみの使用で，その面には使用痕が2ヵ所に残る。

(8)　9号住居址（第71図）

①・②—ⓑ区内，調査区の北部に位置している。完全な形状であり長軸方向で 6.1m，短軸方向で 4.5m，床面積27.5㎡の長方形プランの住居址である。主軸方向に東西，その方位N－79°－E を測る。壁高は30cmであり，全面にわたり削平を受けたものと思われる。炉は中央部に1基あり，周辺部に少量の炭化物の散布が見られた。主柱穴は4本であるがそれは変則である。断面観察では北側部分の3本については新旧関係が伺える。当初はPIT，4 に対応するPIT，3 を使用したものと思われるが，何らかの要因でPIT，1・2 を新たに利用する形態となった。改築，建て替え等が考えられるが，その他の状況は想定できない。なお主柱穴内には全て安山岩製の台石が埋めこまれており，PIT，2 には特に熔岩塊で柱を二重に固定し支えている。貯蔵穴は西側に東西方向2.9m ×南北方向0.9m の細長い形状のものが1基見られる。



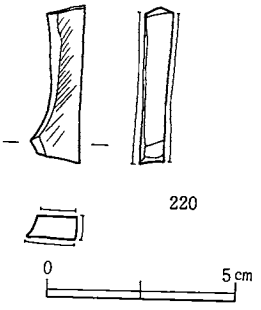
第73図　9号住居址内出土鉄器・石器実測図

住居址の覆土は褐色，黒色，黄褐色土が層をなしており，最下層には黒灰色土に鉄分が集積した層が一部形成される。本住居址では柱穴の断面に見られるように，柱穴上面に厚く鉄分が集積する。上面の観察のみでは平面形は判明しずらく，柱穴想定位置をボーリング棒で刺しながら検出を行なった。

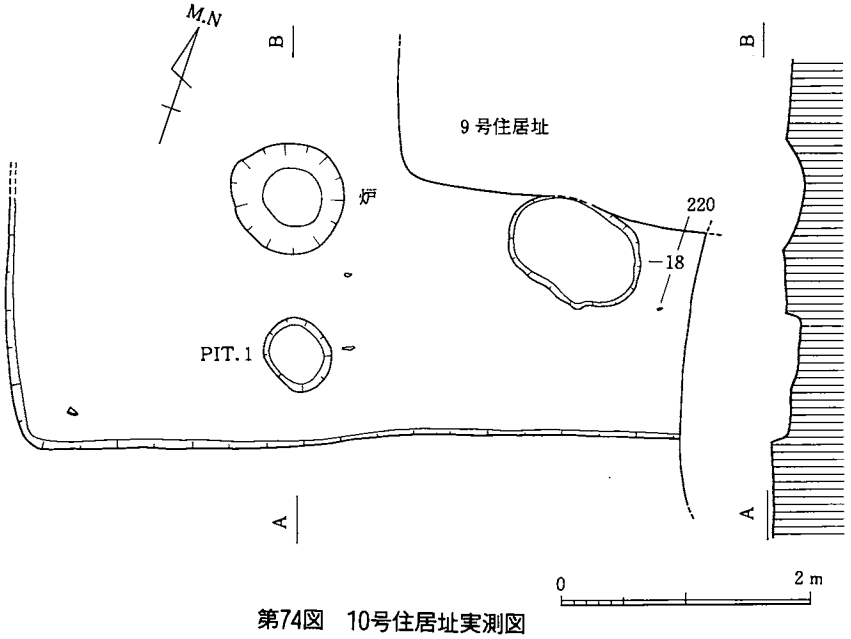
遺物の出土状況は少量の遺物が住居址西側に散布する。番号を付して取り上げた46点の資料中，図化できたものは22点である。出土遺物の内訳は土器類では甕4点，壺2点，小形壺，ジョッキ形土器，台付鉢各1点である。鉄器では手鎌1点，石器では砥石が1点となる。下層に相当する2層中の出土遺物は209，214，215，219であり，さらに本住居址の年代を決定すると考えられる資料は，炉内出土の217及び床直上出土の213である。住居址の廃絶に際してはほとんどの遺物が持ち出されたものと考えられ，本来のものは217，213のみと考えられる。

９号住居址内出土土器（第72図）

209は甕である。残存1/10での復元。外面下位は斜方向の刷毛目調整を口縁部はヨコ方向の刷毛目の後ナデ調整を行なう。胴部方向は斜方向の刷毛目調整である。**210**は甕である。口縁部壁面が肉厚である。残存1/8の復元。外面下位はヨコ方向の叩き目を有する。口縁部及び胴部内面はヨコ方向の刷毛目の後ナデ調整で仕上げる。**211**は甕の口縁部である。残存は1/10である。外面は斜方向の刷毛目の後にナデ調整，内面は斜方向の刷毛目調整である。**212**は壺の口縁部と思われる。残存1/10の復元。口径12.0cmと小型であるが，口縁部壁は肉厚である。外面は斜方向の刷毛目及びヨコ方向のナデ調整を行なう。内面は強いヨコ方向の刷毛目調整である。**213**は小型壺である。残存1/6での復元である。口径4.2cm，残存高4.5cm，胴部最大径 4.9cmを測る。口縁部は内外面ともヨコ方向のナデ調整である。外面は斜方向の弱い刷毛目調整を，下位には一部ヘラ削りの痕跡も見られる。内面は器壁があれ



第75号　10号住居址内出土石器実測図



第74図　10号住居址実測図

観察不能である。なお外面には赤色顔料が塗布してある。**214**は甕の口縁部である。残存1/10での復元。外面はヨコ方向の刷毛目調整，内面は斜方向の刷毛目調整である。**215**は壺の口縁部である。残存1/6での復元。外面は斜方向の強い刷毛目調整，口縁端部には斜方向の刻み目を施す。内面は器壁が荒れて観察不可。**216**は鉢の口縁部である。残存1/10での復元。外面は斜方向の刷毛目調整，口縁端部から内面はヨコ方向のナデ消しを行なう。**217**は脚台付の鉢である。脚台部は完全に欠損するが，鉢部は完形である。外面は弱い斜方向の刷毛目の後にヨコ方向のナデ調整を行なう。鉢部内面はヨコ方向のナデを，脚台内面は円回転状のナデで仕上げる。

9号住居址内出土鉄器，石器（第73図）

218は鉄製手鎌である。左側部分が欠損している。残存長4.9cm，幅3.7cm，厚4mmである。側面端部を8mm程折返して袋部を造り出している。木質は全く残っておらず，刃部面にも錆が付着している。**219**は砥石である。下側が欠損しているが残存長5.0cm，幅3.2cm，厚2.25cmを測る。研磨面は3面であり，表面中央部は窪みを有する。

(9) 10号住居址（第74図）

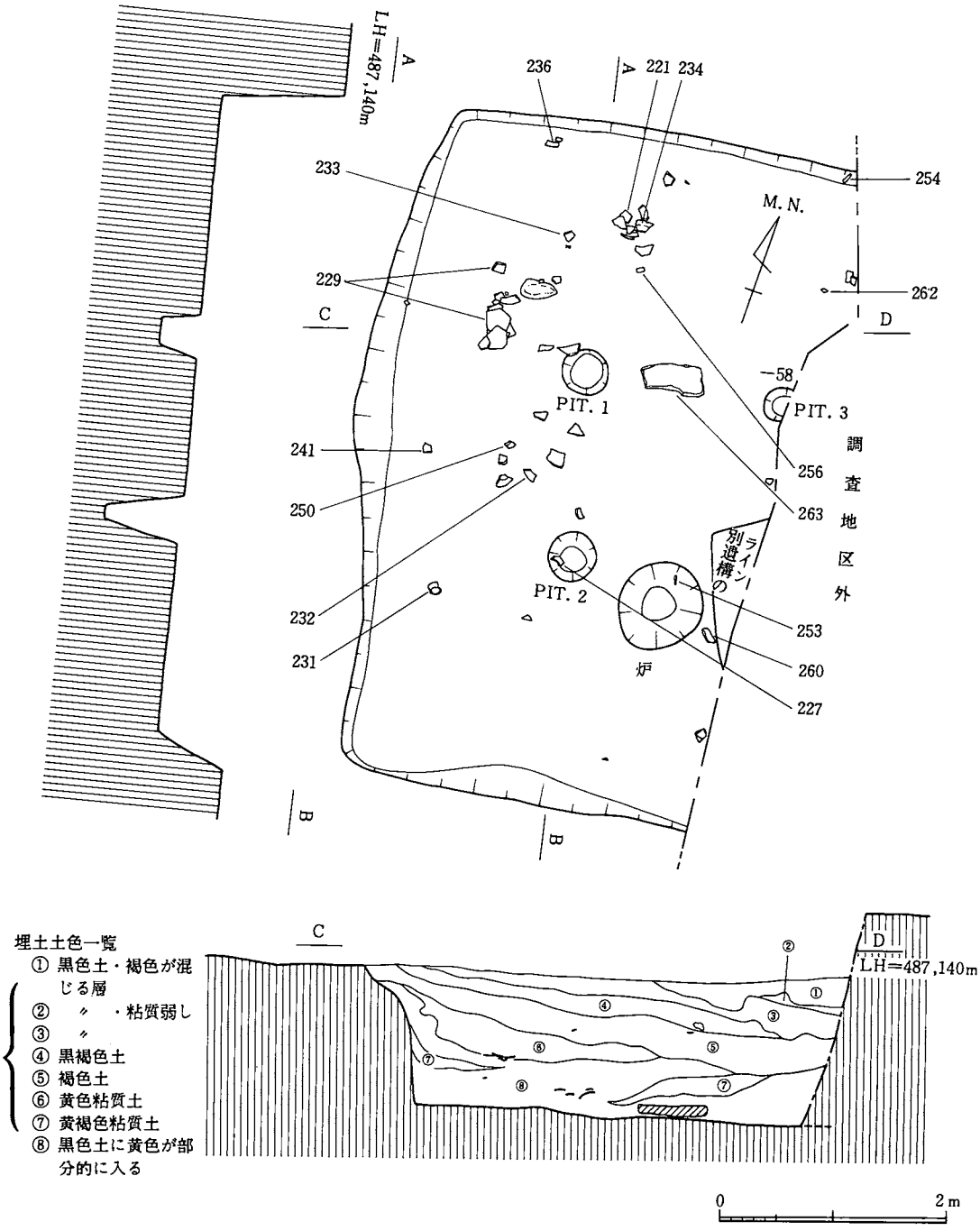
②—ⓑ区内，調査区北部西側に位置する。9号住居址に切られ，上面は強く削平を受けている為に，住居址の北側は床面まで完全にカットされている。残存規模は東西方向5.5m，南北方向2.4mを測るが，主軸方位は不明である。壁高は南側のみかろうじて残っており15cmである。炉は中央部に1基造られており，主柱穴を4本柱と想定すると炉が西側に位置することとなり，他の住居址の柱と炉の位置関係状況と異なる。主柱穴は1本のみの残存で，それも皿状で極めて浅い。貯蔵穴らしき土壙が1基，9号住居址に接して確認されるが，このままでは貯蔵穴が4本の主柱穴の中に含まれることとなり，これも他の住居址の様相とことなる。貯蔵穴，ベッド状遺構ともに確認されていない。

住居址の覆土は，黒褐色土層の1層のみである。

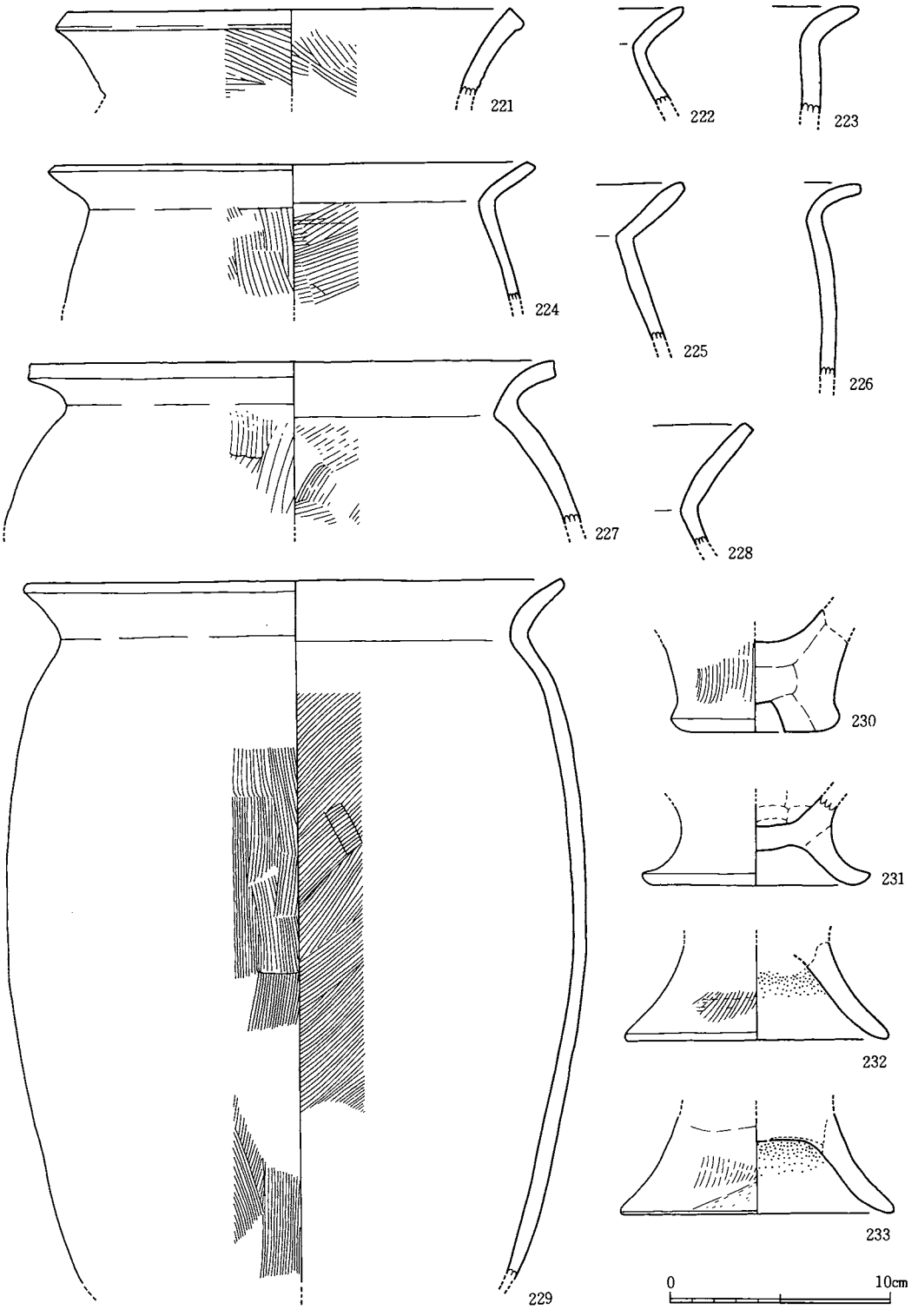
遺物の出土状況では少量の遺物が床面に直接乗り，貼り付く状況で出土する。細片のみで番号を付して取り上げた資料は4点のみで，図化できたものは1点のみである。220は床直上の資料であるが，時期判定の資料となる土器の出土はない。

10号住居址内出土石器（第75図）

本住居址からは図化できる資料が1点のみ出土している。**220**は凝灰岩製の小型の砥石である。全長4.3cmで，3面が砥石として使用されている。図中表面には斜方向の使用痕が観察される。



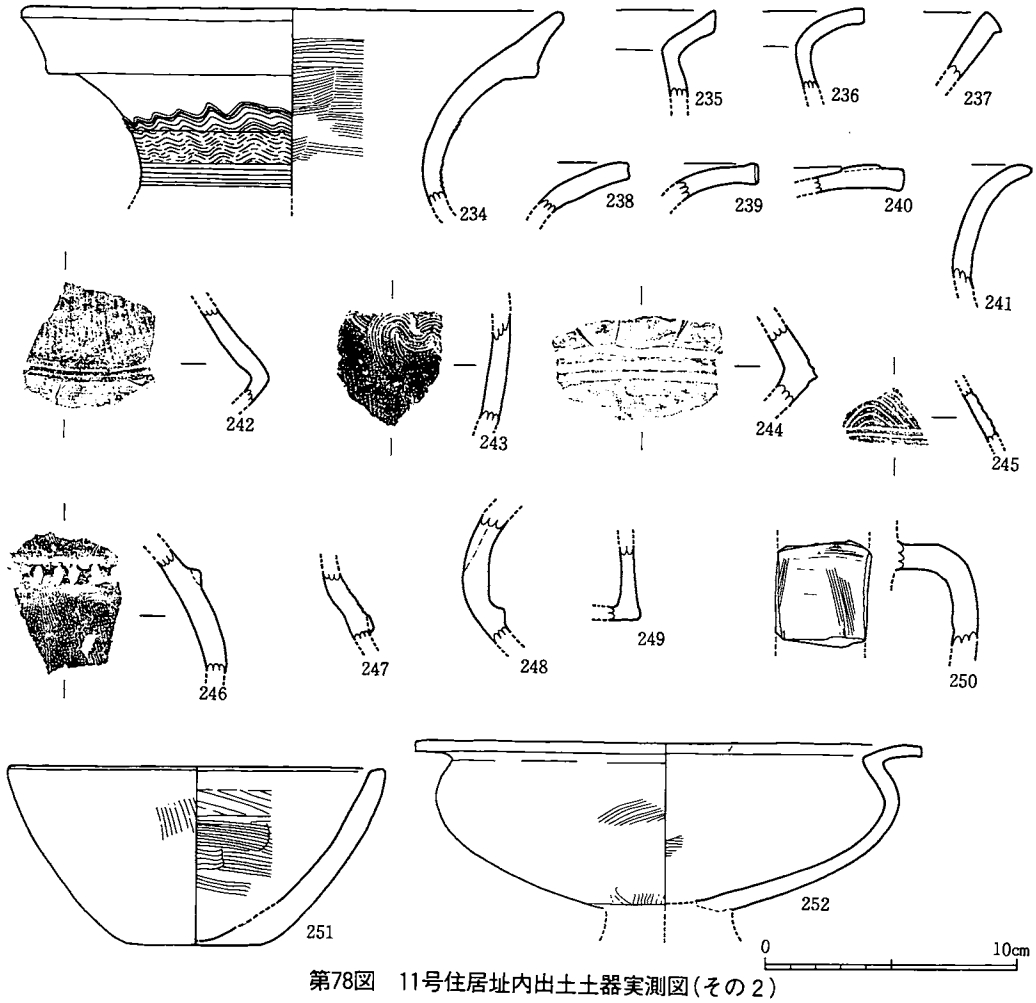
第76図　11号住居址実測図



第77図　11号住居址内出土土器実測図（その１）

⑽　11号住居址（第76図）

①・②—ⓓ区内，調査地区中央部東側に位置している。この地区では３号溝遺構を調査終了後，更に下層で遺物の流れ込みの層が見られることから，遺物を②—ⓓ区内の包含層資料として取り上げた。その後本住居址の遺構ラインが検出され，全面的に掘り下げた。東側は調査区外に出るものの，方形を基調とした平面形態で，残存規模は長軸（東西）方向 3.8m，短軸（南北）方向 6.0m を測る。主軸方位は周囲の状況から判断し，東西方向であると想定すればＮ－79°－Ｅとなる。壁高は大変残存が良く北側で1.1m，西側で1.2m を測り，これはほぼ本来の壁高を保っていたものと思われる。炉は中央部南側に１基確認されるが，周辺部にはカーボンの散在が見られない。主柱穴は４本と考えられる。PIT，３は約½が調査区外へ出て，更にPIT，４の規定位置には別遺構の切り込みラインが見られ，調査地区外でもあるため確認されていない。主柱穴は柱穴内に盤石等を含まない，径30～50cmの平面規模である。貯蔵穴ベッド状遺構はこの地区内では確認されず不明である。更に東側には別の遺構の切り込みが見られるが，住居址であるか否か判定できないため，遺構番号は付していない。



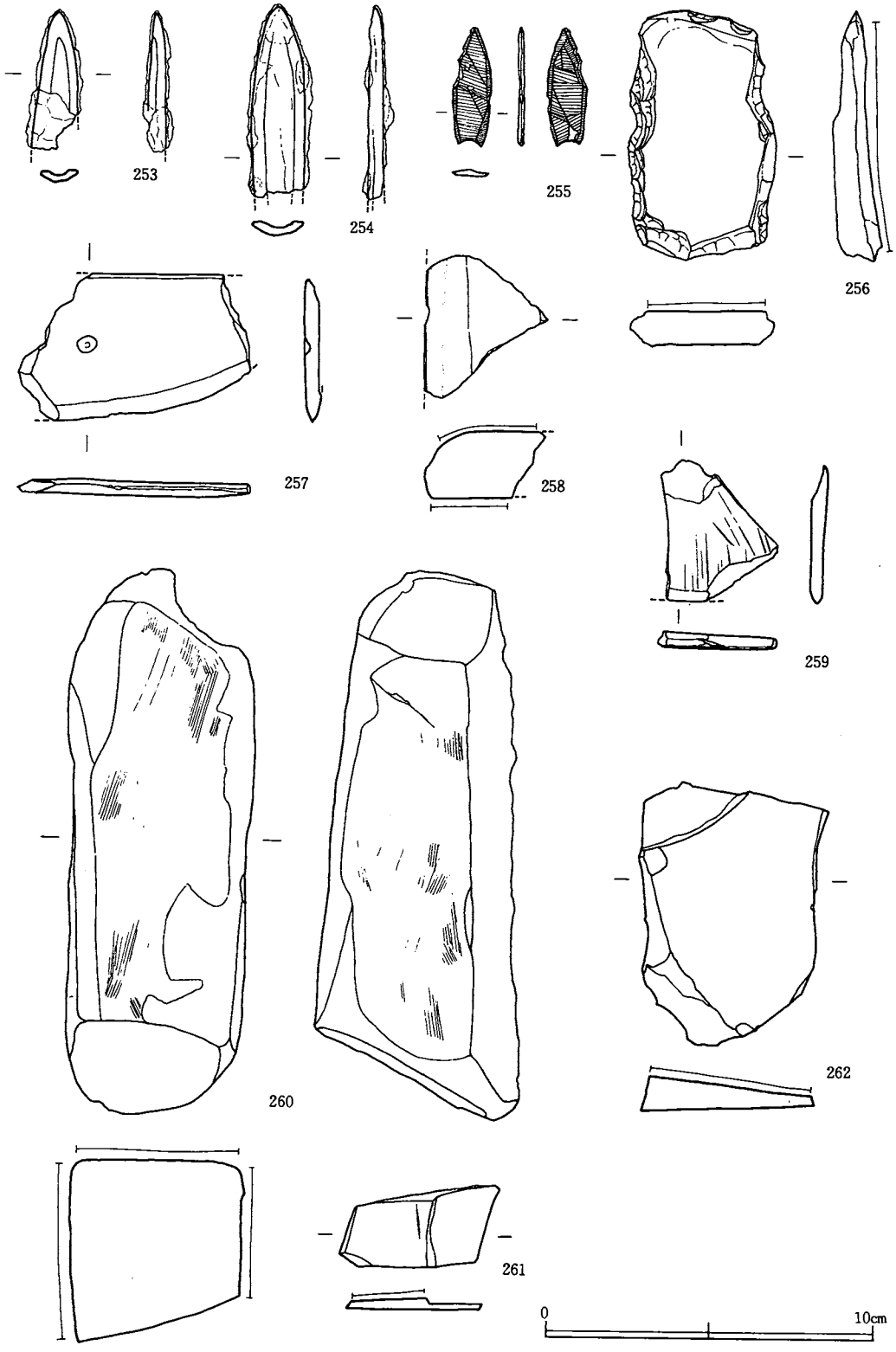
第78図　11号住居址内出土土器実測図（その２）

住居址の覆土は別図の通り8層となる。覆土の流れ込みは西方向から東方向へと周囲の地形に添って，埋没した状況を示している。これは②—ⓓ区内における包含層の形成状況と同様であり，本調査区では地形にそって，東側に順次堆積していったものと判断される。

遺物の出土状況では上層から小破片が，中，下層からも多量の土器が全体に散らばって出土している。番号を付して取り上げた資料は40点であるが，住居址が深く，遺物を残したままでの掘り下げが困難であったため，上層の遺物は実測図に記入せずに取り上げた。図化できた資料は23点であった。遺物の内訳は土器類では甕11点，壺16点，ジョッキ形土器2点，鉢，台付鉢各1点である。鉄器は鉇が2点，石器では石鏃，石斧各1点，石包丁2点，砥石4点，台石1点である。遺物の出土層位では中層のものとしては234，252等があげられる。下層からは222，229，231～233，239，241，250，251等であり，床直上からはさらに227，236，237が出土する。2点の鉄器はともに中層からの出土であり，石器では255，259，260などは全て上層よりの出土。256，257は下層からであり263の台石は床に密着しての出土である。住居址の廃絶に際しては，本来の位置にあったものは263のみと考えられ，下層から中層まではその後の投棄によって埋まり，最終的には包含層形成時に陥没したものと考えられる。

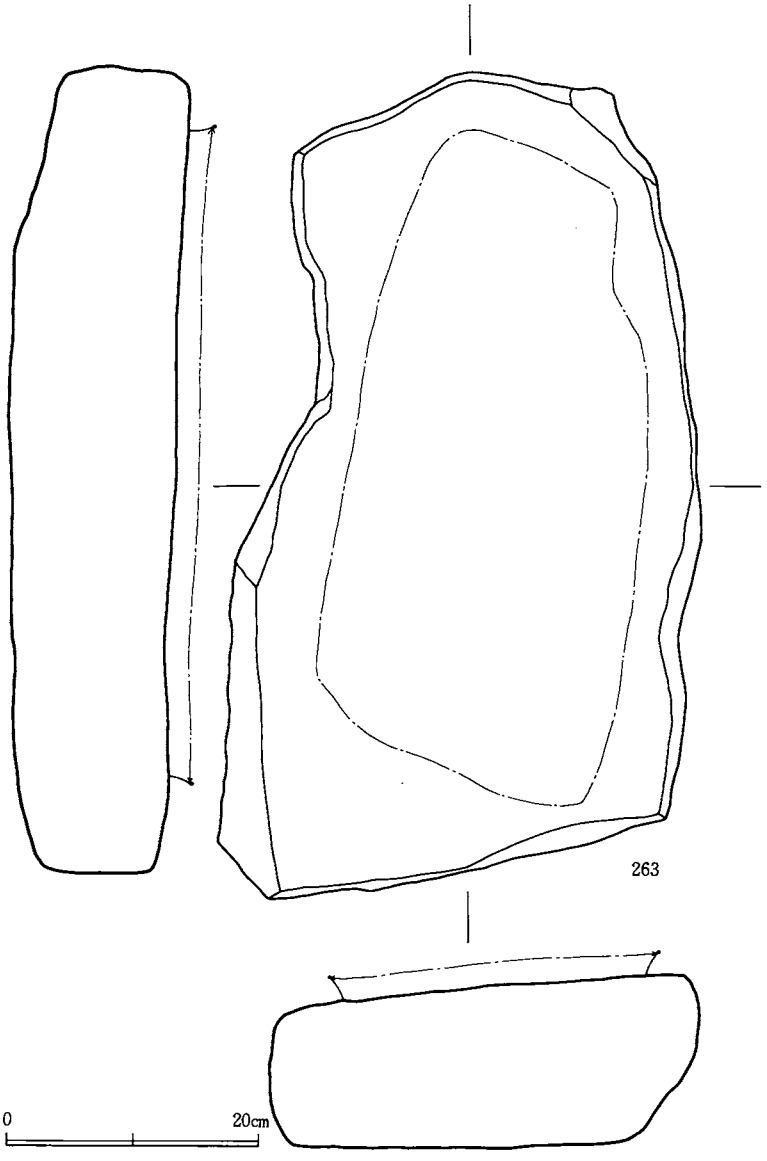
11号住居址内出土土器（第77，78図）

221は甕である。外面は斜方向の刷毛目の後，下段には叩き目が残る。内面はヨコ方向のナデの後，斜方向の刷毛目調整を重ねる。**222**は甕の口縁部片である。外面上位はヨコ方向のナデ調整，下位はヨコ方向のナデ調整。内面上位はヨコ方向のナデ調整，下位は斜方向の刷毛目の後，ヨコ方向のナデ調整。**223**は甕の口縁部片である。外面ヨコ方向のナデ調整を施す。外面にはカーボンが付着する。内面は丁寧なヨコ方向のナデ調整。**224**は甕である。口縁部外面はヨコ方向のナデ消し，胴部外面は斜方向の刷毛目の後部分的に指でナデ消す。内面上位はヨコ方向の刷毛目の上をナデ調整。下位は斜方向の刷毛目調整を行なう。**225**は甕の口縁部片である。外面上位はヨコ方向のナデ，下位は斜及びタテ方向の刷毛目調整。内面上位はヨコ方向のナデ，下位は斜方向の刷毛目調整を施す。**226**は甕の口縁部片である。口縁部は内外面ともナデ調整。外面はタテ方向の刷毛目調整。内面は斜方向の刷毛目の後，部分的にナデ調整を加える。**227**は甕である。胴部の張りが強く屈曲する。口縁部外面はヨコ方向のナデ調整。胴部下位はタテ方向の粗い刷毛目調整を加える。口縁部内面は刷毛目の後にナデ調整。胴部内面は不規則な刷毛目の後にナデで仕上げる。**228**は甕の口縁部片である。口縁部外面はタテ方向の刷毛目の後にヨコ方向のナデ調整。口縁部内面はヨコ方向の刷毛目調整となる。**229**は甕である。口径24.8cm，胴部最大径26.5cm，残存高31.9cmを測り，大型である。胴部最大位置は中位となり，頸部の窪みは強い。口縁部外面及び胴部上位はヨコ方向のナデ調整。中位～下位はタテないし斜方向の刷毛目を施し，部分的にナデ消す。口縁部内面はヨコ方向のナデ調整。胴部中位は斜方向の刷毛目，



第79図　11号住居址内出土鉄器・石器実測図

下位はヨコ方向のナデ調整である。**230**は脚台であるが，上部の形態は不明である。断面観察により，脚の貼り付け状況が見られる。これは丸型の底部に脚を貼り付ける。そして底部底面に貼り付け，最後は脚部を裏側から補強する。外面はタテ方向の刷毛目調整，底部内面指圧によるナデ調整。脚内面はナデ調整となる。**231**は甕の脚台である。外面はヨコ方向のナデ調整，底部内面には指圧が顕著に残る。脚内面はヨコ方向のナデ調整となる。**232**は甕の脚台である。外面は斜方向の刷毛目の後，ナデ調整で仕上げる。内面には砂粒が付着するが，ヨコ方向のナデ調整で仕上げる。**233**は甕の脚台である。外面はタテ方向の刷毛目の後，ヨコ方向のナデ調整で



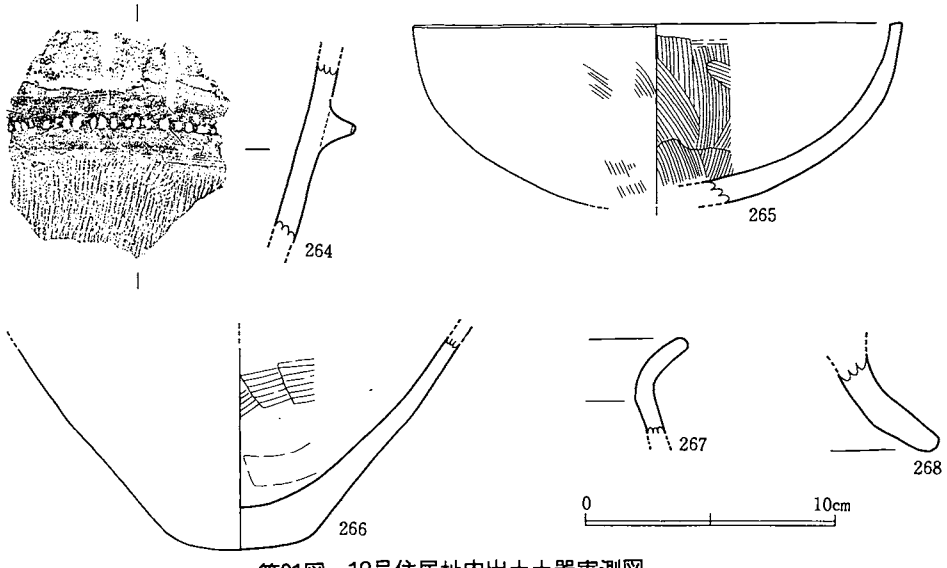
第80図　11号住居址内出土石器実測図

部分的に仕上げる。脚台内面には砂粒が付着し，ヨコ方向のナデ調整を行なう。**234**は壺である。口径21.6cm，残存高 7.2cmを測る。口縁部外面にはヨコ方向のナデ調整を，下位には流水文を施すが，一部ヘラ状工具による押しつけにより，流水文が浅くなる。最下位には細い沈線を施す。内面はヨコ方向の刷毛目調整を施す。**235**は甕の口縁部である。端部が鋭さを持つ。外面はヨコ方向のナデ調整である。内面上位はヨコ方向のナデ調整。下位は斜方向の刷毛目となる。**236**は甕の口縁部である。外面はヨコ方向のナデ調整。内面は一部斜方向の刷毛目が下位に見られる。**237**は壺の口縁部と考えられる。外面は斜方向の刷毛目，内面は斜及びタテ方向の刷毛目調整を施す。**239**は壺の口縁部である。外面はタテ方向の刷毛目の後，ヨコ方向のナデ調整，内面はヨコ方向のナデ調整となる。**239**は壺の口縁部片である。内外面ともヨコ方向のナデ調整を施す。口唇端部には幅 3mm，間隔 6mmの刻み目を有する。**240**は壺の口縁部片である。内外面ともヨコ方向のナデ調整を施すが，端部付近内面には円形の突起が貼り付く。**241**は壺の口縁部である。外面はタテ方向の刷毛目の後，上位はヨコナデ仕上げ。内面はヨコ方向のナデ調整を施す。**242**は壺の胴部である。外面上位はタテ方向の刷毛目の後にナデ調整。下位はヨコ方向のナデ調整。内面は斜方向の刷毛目の後にヨコ方向のナデ調整を施す。**243**は壺の胴部片である。外面にはタテ方向刷毛目を下位に，上位には流水文が施される。**244**は壺の口縁部片である。外面には，ヘラ状工具により横方向の研磨を施した後に，3本の幅 3～4mmの沈線を施す。内面はヨコ方向の丁寧なナデ調査を施す。**245**は免田式土器の胴部片である。外面には6本の重弧文の後に，2本の沈線を施す。**246**は壺の胴部片である。断面三角形の小型の突帯が貼り付けられ，約5mm間隔で刻み目が施される。他の外面はタテ方向の刷毛目を，内面は斜方向のナデ調整を施す。**247**は壺の頸部付近の破片である。外面には円形の突起が貼り付けられており，上位には浅い沈線を施す。内面はヨコ方向のナデ調整を行なう。**248**は壺の頸部付近である。断面三角形の突帯が貼り付けられており，突帯の上下位はタテ方向の刷毛目調整を施す。内面は丁寧なヨコ方向のナデ調整を施す。**249**はジョッキ形土器の底部である。外面はヨコ方向のナデ調整，内面は不定方向の指圧を加える。**250**はジョッキ形土器の把手である。幅は 3.7cm，厚10mmを測る。外面にはタテ方向の刷毛目の後にナデ調整を重ねる。**251**は鉢である。口径15.0cm，器高 7.2cmを測る。胴部器壁は 9mmとぶ厚いが，底部は 2mmときわめて薄い。外面は斜方向の刷毛目の後，ナデ調整。内面はヨコ及び斜方向の強い刷毛目調整を重ねており，内面が一部剝離する。**252**は台付鉢である。脚台部は完全に欠損しているが，口径20.2cm，残存高 6.8cmを測る。胴部の湾曲は強く，頸部から口縁部にかけては外湾気味に短く立ち上がる。外面上位はヨコ方向のナデ調整。中位には斜方向の刷毛目の後，ナデ調整。下位はヨコ方向のナデの後に，タテ方向の刷毛目調整を重ねる。

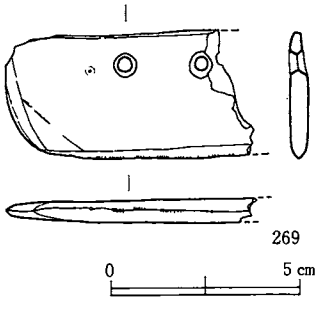
11号住居址内出土鉄器，石器（第79，80図）

253は鉄製の鉇片である。鋒部のみの残存で本体側は完全に欠損する。残存長 4.3cm，最大幅

1.15cmである。鋒部は直線状であり，断面も浅いU字形となる。**254**は鉄製の鉇片である。基部側が欠損しており，残存長5.9cm，幅1.7cmを測る。湾曲せず，身は直線的であり，断面は3mmと厚い。**255**は磨製石鏃である。左側縁部が一部破損しているが，ほぼ完形で全長3.70cm，幅1.22cm，厚2.3mmである。全面に細かく磨きによる調整が施され，重量1.3g である。**256**は打製石斧を砥石に転用したものである。左上部の先端部には使用痕がみられ，両端をみがいたものである。研磨面は1面であるが，よく利用され中央部が窪む。**257** は砂岩製の石包丁である。右側端部及び左側部分を欠損する。平面形では刃部が弱く外湾しており，穿孔の中途のものが1基見られる。**258** は砂岩製の砥石である。上下部及び右側が欠損する。研磨面は2面である。**259**は石包丁である。身部中央部の刃部のみが残存する。残存長4.20cm，幅3.60cmを測る。表面



第81図　12号住居址内出土土器実測図



第82図　12号住居址内出土石器実測図

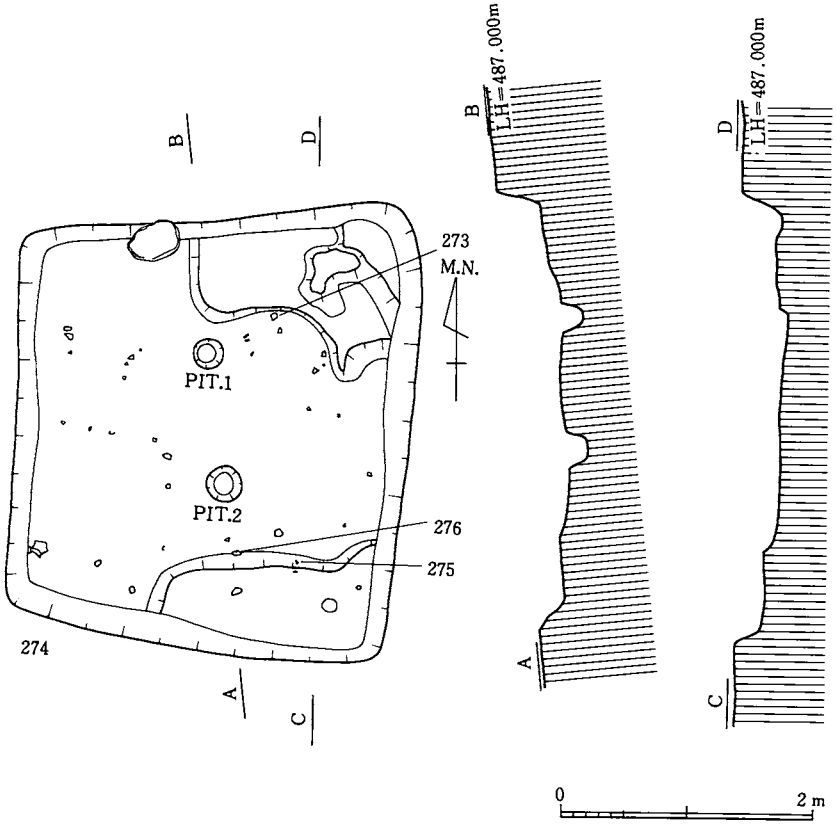
には線条痕が残る。**260**は大型の砥石である。全長16.60cm，幅5.70cm，厚5.65cmを測る。一部剝 離状況も見られるが，3面に線条痕，磨痕が集中している。重量812.5g である。**261** は凝灰岩製の砥石である。剝離したものであり，残存長4.95cm，幅2.60cmを測る。研磨面は1面のみ見られる。**262**は凝灰岩製の砥石である。これも剝離，欠損した石材であり，残存長8.02cm，幅5.70cmを測る。表面に広く研磨面が見られる。**263**は大型の台石である。長方向64.8cm，短方向33.8cm，最大厚13.0cmを測る。表面のみの使用であり，良好な研磨状況である。他面は粗い面が残る。重量53.3kg である。

⑾　12号住居址

②—ⓔ区内に位置している。18号，32号，24号住居址，５～７号溝遺構によって切られ，残存は南北方向2.3m，東西方向2.9m の範囲のみである。残存地区内には柱穴，炉は見あたらず，西側に低い（段差５cm）のベッド状遺構が１基残るのみである。

住居址の覆土は２層であり，上層より明黄褐色土，暗茶褐色土の順で堆積する。

遺物の出土状況はベッド状遺構の上面及び前面に少量の土器が散在する。出土した遺物の内，番号を付して取り上げたものは21点であり，その内図化できたものは６点のみである。遺物の内訳は土器類では甕１点，壺３点，鉢１点であり，石包丁が１点加わる。265,266は中層よりの出土。264，267，268は床直上及び密着の資料である。石器の269は上層よりの出土である。廃絶の状況は明確でない。



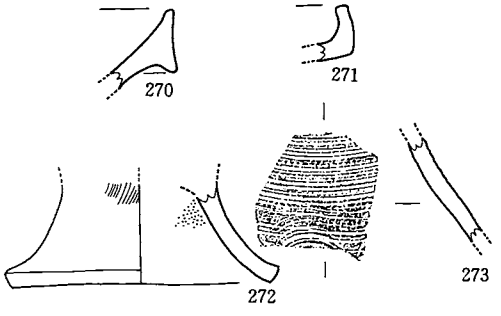
第83図　13号住居址実測図

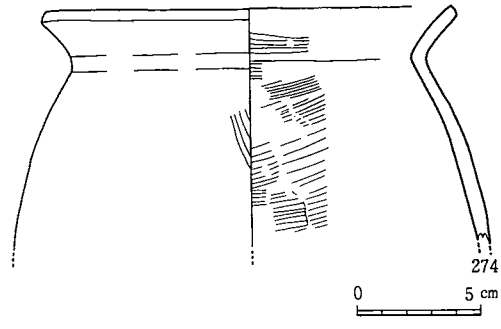
12号住居址内出土土器（第81図）

264は壺の胴部片である。大型の突帯を貼り付けており，間隔は不規則であるが,下方から上方への刻み目を施す。外面上位はヨコ方向のナデ調整，内面はタテ方向の刷毛目調整を施す。なお内面は斜方向の刷毛目調整である。**265**は鉢である。底部は欠損するが，残存高は 7.2cmを測る。外面上位はヨコ方向のナデ調整，下位は刷毛目の後ヨコ方向のナデで仕上げる。内面はタテないし，斜方向の刷毛目調整を施し，一部ナデ消す。**266**は壺の底部である。残存高は 8.1cm，底部径 5.9cmを測り，底はやや丸味をもつ。外面はタテ方向のナデ調整，底部は剝離のため観察不能である。内面はヨコ方向の刷毛目及び不規則なナデ調整で仕上げる。なお外面底部から下位にかけては煤が付着する。**267**は甕の口縁部片である。外面には煤が付着するが，斜方向の刷毛目調整の痕が見られる。内面はヨコ方向のナデ調整で仕上げる。**268**は甕の脚台片である。外面はヨコ方向のナデ調整，内面はヨコ方向のナデ調整を実施する。胎土中には小砂粒がきわめて多く含まれており，焼成は不良である。

12号住居址内出土石器（第82図）

ここからは石製品が1点出土する。**269**は粘板岩製の石包丁である。⅓欠損するが残存長 6.6cmを測る。平面形は長方形状をなしており，刃部と背部が平行する。穿孔2ヵ所の左側には当初穿孔を行ないかけて中断した跡が見られる。なお穿孔は両側からであり，刃部には使用痕が見られる。

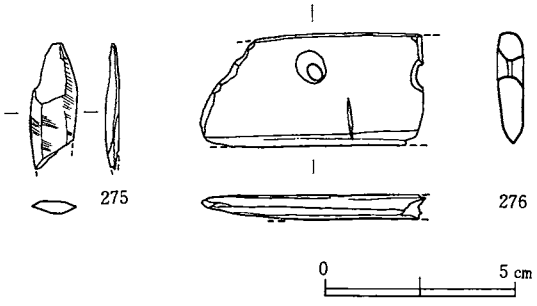




第84図　13号住居址内出土土器実測図

(12)　13号住居址（第83図）

①—ⓒ区内，調査区中央部東側に位置している。まわりの住居址とは全く切り合いのない単独出土の住居址である。平面形態は正方形を基調とするが，ややひずんでいる。平面



第85図　13号住居址内出土石器実測図

の規模は長軸（南北）方向 3.6ｍ，短軸（東西）方向 3.1ｍ，床面積 8.1㎡を測る。主軸方向は南北であり，方位はＮ－6°－Ｗとなる。壁高は北側30cm，西側35cmと比較的に低い。主柱穴は２本柱で，ともに径25～30cmと小型で浅い。ベッド状遺構は南側に段差10cmのものが，北側コーナー部をおおう形で，北側には同様の段差ながらもやや不整形の形状のものが，計２基造られている。炉及び貯蔵穴は検出されていない。

住居址の覆土は３層からなり，黒褐色土，褐色土，褐色土に黄色パミスを含む層である。

遺物の出土状況は小破片が住居址内に全体的に散在する。番号を付して取り上げた38点の内，図化できたものは19点で，ここでは７点を掲載した。その内訳は甕２点，壺３点である。石器は石鏃，石包丁各１点ずつが出土する。出土の層位は270を除き全てが上層，もしくは１層からの出土である。住居址の廃絶に際しては，ほとんどの資料が流れこんで埋没したものと考えられる。

13号住居址内出土土器（第84図）

270は壺の口縁部片である。一部刷毛目が残るがヨコ方向のナデ調整を行なう。内面は斜方向の刷毛目調整である。**271**は壺の口縁部片である。口縁部へ延びる屈曲部の部位である。外面下位は刷毛目調整で，他の内外面はヨコナデ調整を施す。**272**は甕の脚台片である。残存⅙による復元で，残存高 4.1cmを測る。外面上位はタテ方向の刷毛目であり，他はヨコナデ調整で仕上げる。なお内面上位には砂粒が付着する。**273**は壺の胴部片である。外面上位にはヨコ方向の強い刷毛目が施され，下位には櫛描きの流水文が描かれている。内面はヨコ方向の刷毛目の後ヨコナデを施す。**274**は甕である。残存⅙での復元であり，残存高 9.5cmを測る。外面下位は斜方向の刷毛目の後ヨコナデ調整を行う。内面上位はヨコ方向の刷毛目の後，ナデ消し，下位は斜方向の刷毛目調整を施す。

13号住居址内出土石器（第85図）

本住居址から石器が２点出土する。**275**は磨製石鏃である。残存長 3.4cmを測るが，表面の一部が剝離し，下部は欠損する。欠損のため形態分類はできない，材質は粘板岩製である。**276**は石包丁である。残存長 5.8cmを測るが両側辺部が欠損する。平面形は刃部と背部が平行し，長方形を呈している。穿孔は両側より行ない，表面には一部磨痕が残る。

(13)　14号住居址（第86図）

②—ⓒ区内，調査区中央部のやや北側に位置している。８号，15号住居址を切り，一方では16号住居址に切られる。平面形態はややひずむものの直方形を呈している。平面規模は長軸方向6.3m，短軸方向5.6m，床面積は31.3㎡を測る。この住居址では隣接する住居址の主軸方向

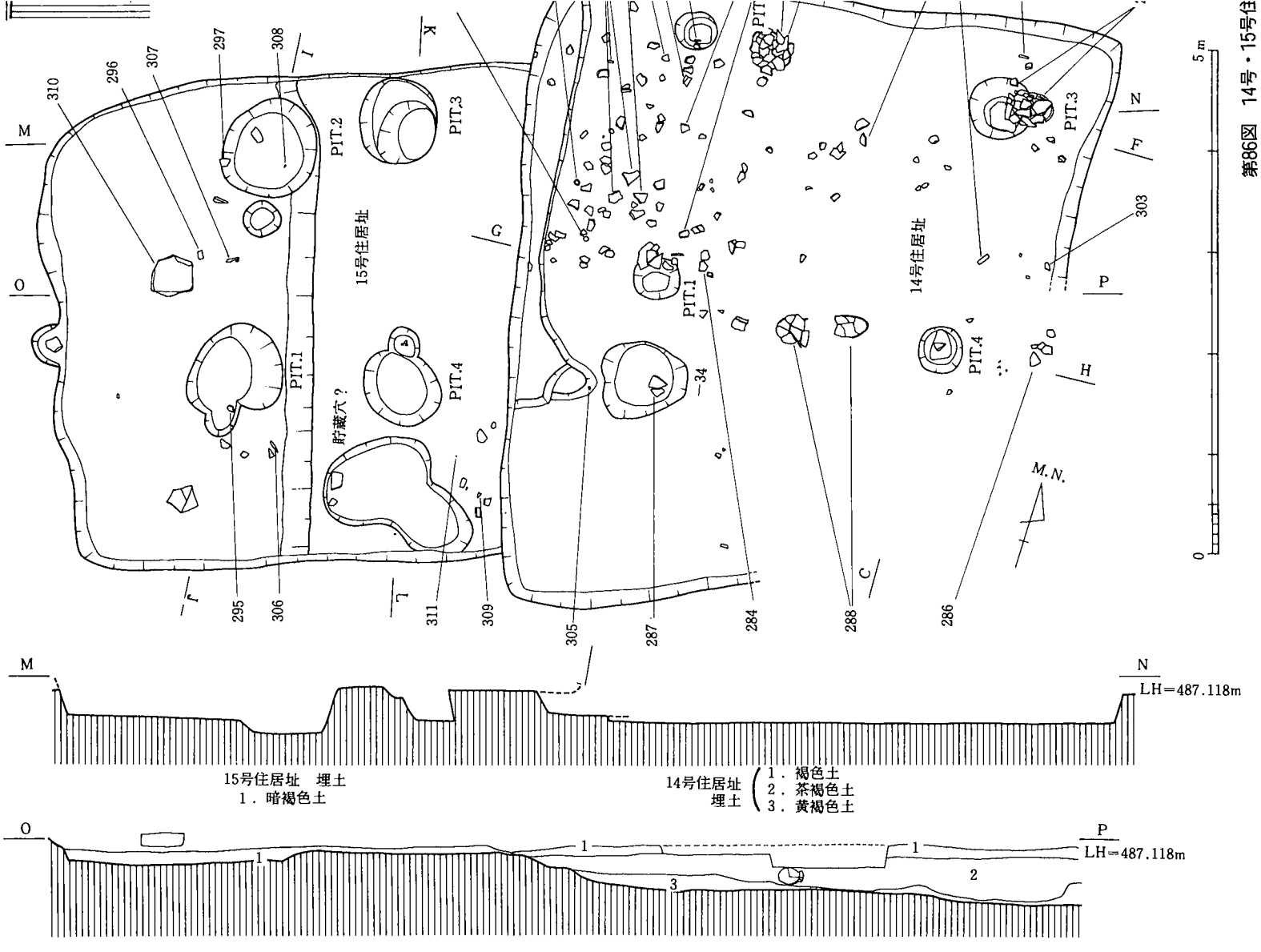
が東西であるのに対し，南北方向に主軸を持つ。主軸方位はN－10°－Wとなる。壁高は南側で20cm，東側で30cmを保つ。主柱穴は4本であり，その配置は住居址長軸方向の片方（北側）に片寄る。PIT，1には25cm×20cmの熔岩石が，PIT，2には20cm角の熔岩塊が用いられている。PIT，3及び4にも同質の石材で柱が固定されている。15号住居址と接する西側の一辺には，細長く幅30cm弱の段差がある。このような段差は17号，24号住居址の西側にも見られるがそれらは全長が短く，出入口の施設と考えられる小柱穴を伴なっていることから，本遺構ではベッド状遺構の小型のものと理解した。炉は検出されず，貯蔵穴も確認されていない。なお住居址南側に上端径80cmの柱穴が1基確認されるが，使途は不明である。

住居址の覆土は3層であり，上層より褐色土，茶褐色土，黄褐色土となる。最下層には少量の炭化物が含まれる。

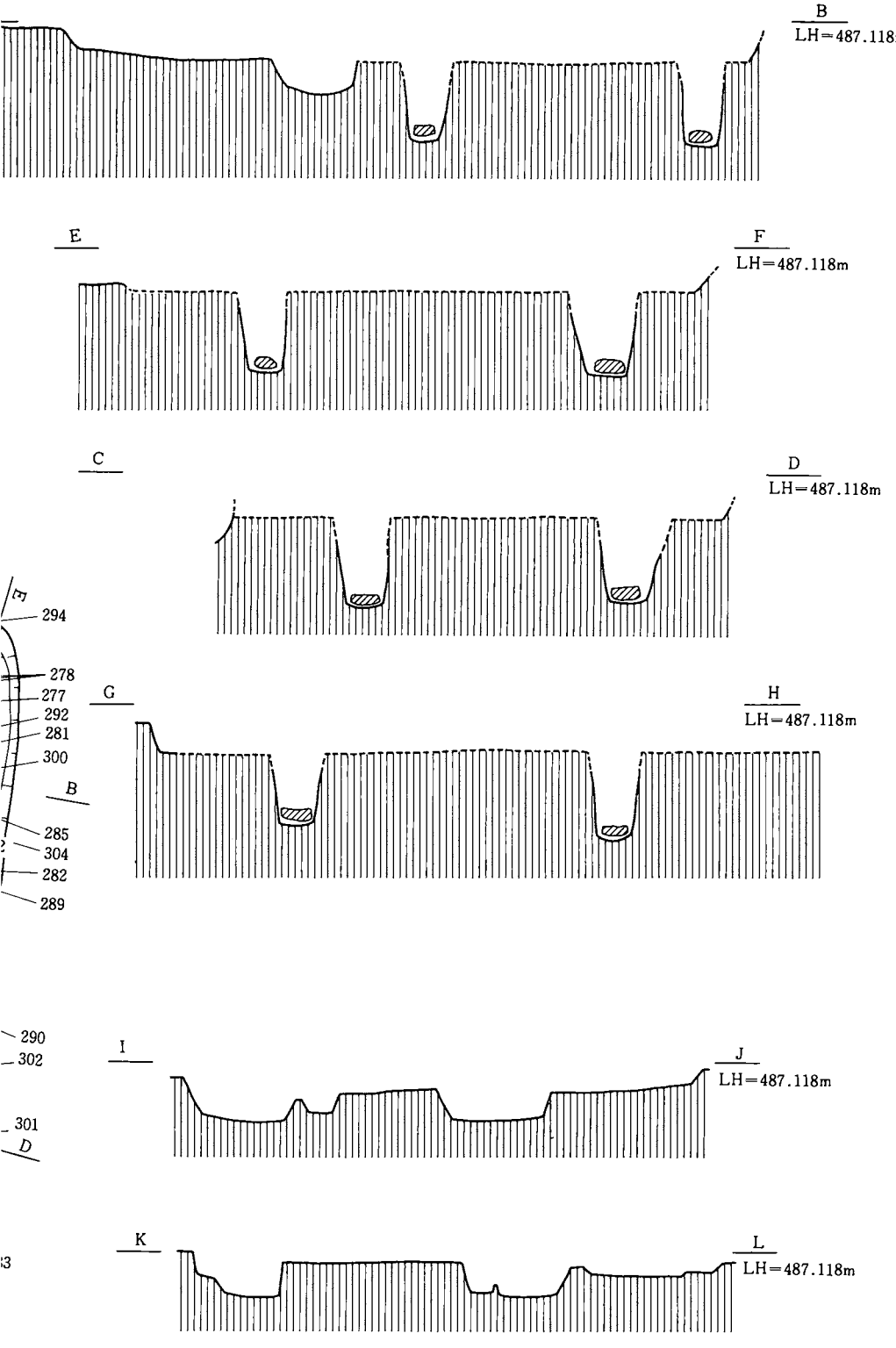
遺物の出土状況は1層中には小破片が，2層中に大型の土器類がまとまって出土してくる。遺物の分布は住居址北側に寄る柱側に集中して所在する。番号を付して取り上げた87点の内，図化できたものは48点であり，ここでは23点を掲載した。内訳は土器類では甕10点，壺5点，鉢1点，メンコ形土製品2点である。鉄器では鉇2点，手鎌1点，石器では砥石，用途不明石器各1点となる。またガラス製勾玉も1点出土する。遺物の出土する層位では，大部分の資料が2層からとなる。代表的なものとして完形もしくはほぼ器形復元が可能である277，283，287～289等であり，これらのものは出土箇所によっては床に接近しての出土である。または床直上の資料としては278，280があげられ，これらの資料がこの住居址の時期を決定するものであろう。3点の鉄器はともに2層からの出土であり，石器2点は3層からの出土となる。ガラス製勾玉は3層からの出土であり，ベッド状遺構の肩からすべり落ちたような状況であった。住居址の廃棄にあたっては15号住居址に接した地区に小破片が流れ込み，その後形成された中央部の窪地に，大型の完形土器類が投棄されたものと考えることができる。

14号住居址内出土土器（第87，88図）

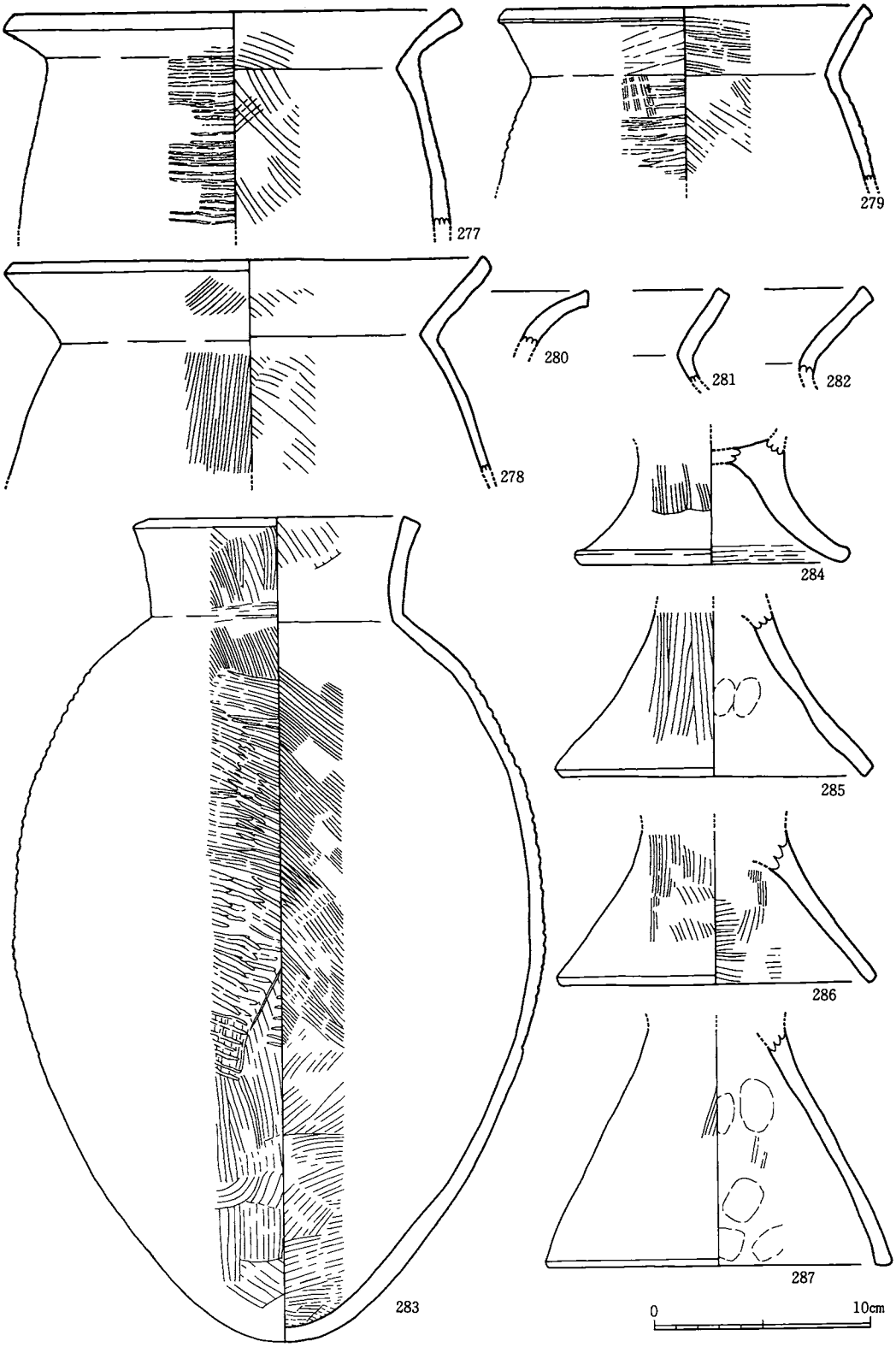
277は甕である。胴部の張りは弱く，口縁部は屈曲し，外反する。口縁部外面は叩き目の後ヨコナデ調整を施す，胴部外面はヨコ方位の叩き目を行なう。口縁部内面はヨコ及び斜方向の刷毛目調整，胴部側は斜方向の刷毛目調整を重ねる。**278**は甕である。胴部の器壁は薄く，口縁部は外傾する。口縁部外面は斜方向の刷毛目の後ナデ調整を行なう。胴部外面はタテ方向の刷毛目調整を施す。口縁部内面は斜方向の刷毛目の後ヨコナデ調整，胴部内面は斜方向の刷毛目の後部分的にナデ消しを施す。**279**は甕である。口縁部外面は斜方向の叩き目の後，ナデ調整を施す。胴部外面はヨコ方向の叩き目の後タテ方向の刷毛目調整を行なう。口縁部内面はヨコ方向の刷毛目，胴部は斜方向の刷毛目調整を施す。**280**は甕の口縁部である。外面はヨコナデ調整，外面はヨコ方向の刷毛目調整の後ナデ仕上げを行なう。**281**は甕の口縁部である。外面



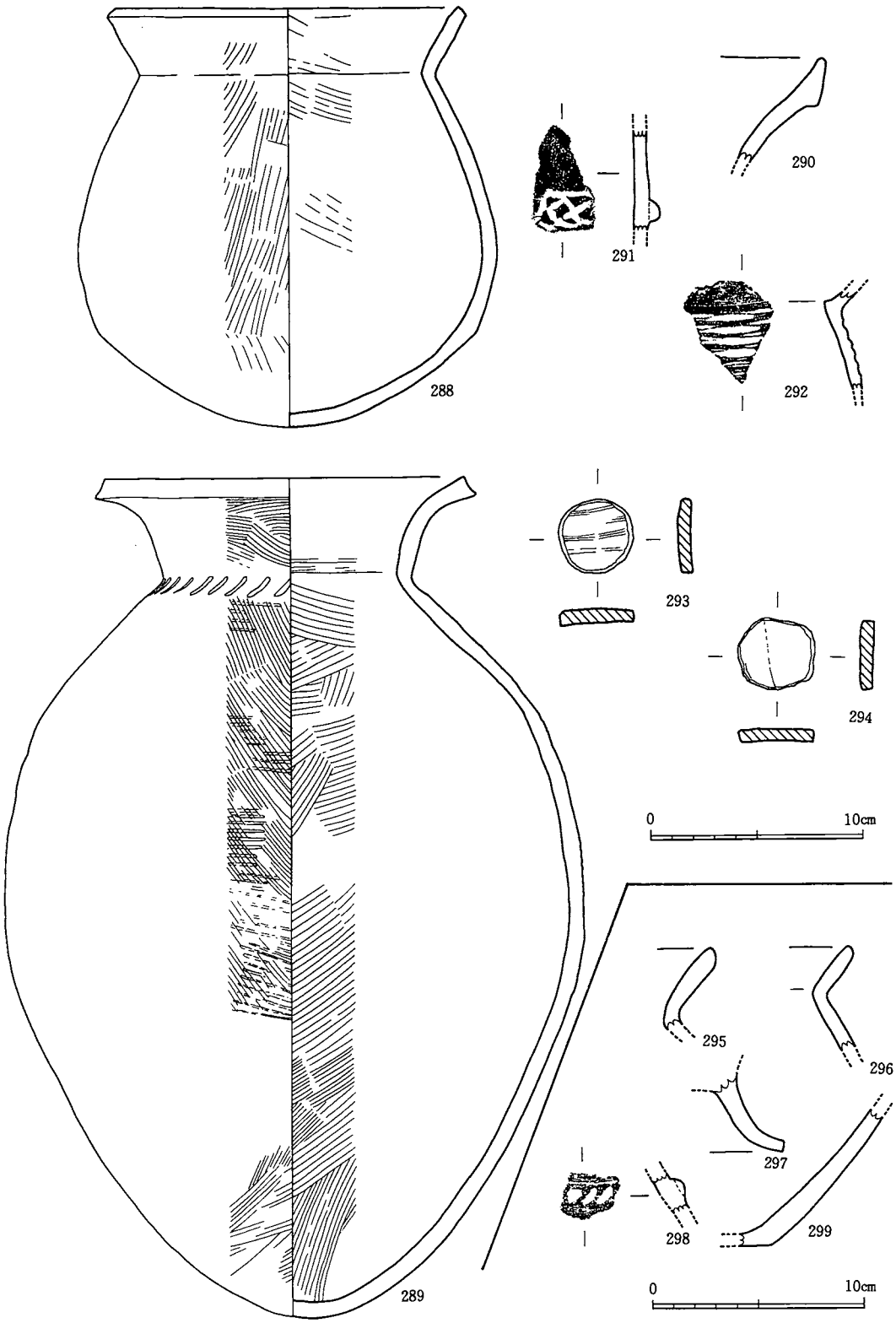
第86図　14号・15号住


B
LH=487.118m
E
F
LH=487.118m
C
D
LH=487.118m
E
294
278
277
292
281
300
B
285
304
282
289
G
H
LH=487.118m
290
302
301
D
I
J
LH=487.118m
K
L
LH=487.118m

居址実測図



第87図　14号住居址内出土土器実測図



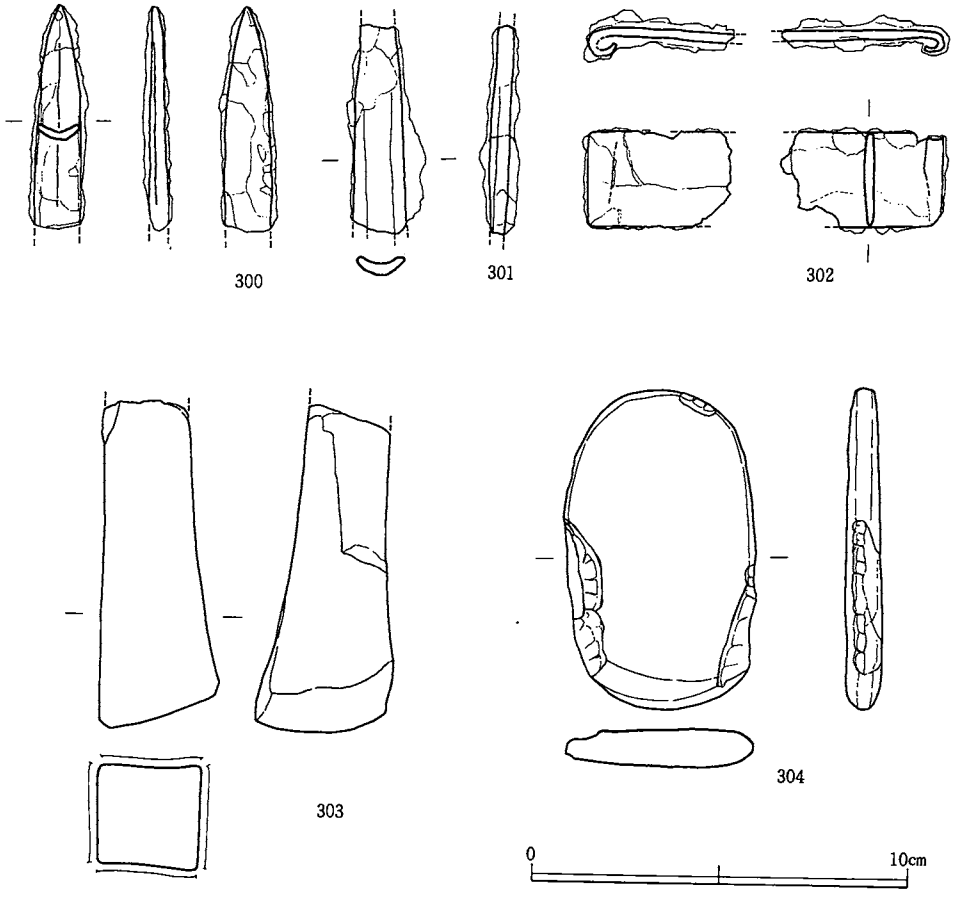
第88図　14号・15号住居址内出土土器実測図

はヨコナデ調整を全面に行ない，内面は斜方向の刷毛目の後，一部ヨコ方向の刷毛目を重ねる。**282**は甕の口縁部である。外面は斜方向の刷毛目の後タテ方向の刷毛目調整を重ねる。内面は斜方向の刷毛目である。**283**は完形の壺である。口径13.4cm，器高38.1cm，胴部最大径24.8cmを測る。口縁部外面はタテ方向の刷毛目調整，胴部上位は斜方向の刷毛目の後にヨコ方向の叩き目を重ねる。中位は斜方向の叩き目を，下位は叩き目を施した後にタテ方向の刷毛目調整を重ね，さらに下位はタテ方向の刷毛目調整のみである。口縁部内面は斜方向の刷毛目の後に，ヨコ方向のナデで仕上げる。胴部内面の中位は斜方向の強い刷毛目調整を重ね，さらに下位は弱い斜方向の刷毛目調整を重ねる。**284**は甕の脚台部である。外面上位はタテ方向の刷毛目調整，下位はヨコ方向の刷毛目の後，ナデ消しを行なう。内面はヨコ方向の刷毛目調整の他指圧によりナデ調整を行なう。**285**は甕の脚台部である。脚台が大きく広がり，脚台高も高い。外面はタテ方向の刷毛目調整も，外面下位と内面はヨコ方向のナデ調整を行なう。なお内面には指頭圧痕が確認される。**286**は甕の脚台片である。外面上位はタテ方向の刷毛目調整を，下位はヨコナデ調整を施す。内面はタテ及びヨコ方向の刷毛目調整を重ねる。**287**は甕の脚台片である。脚台径16.0cm，脚台高11.0cmと非常に大型である。外面はタテ方向の刷毛目調整の後ナデで仕上げる。内面は斜方向の刷毛目の後ナデ調整を行なう。いたる所に指頭圧痕が見られる。**288**は完形の鉢である。口径16.9cm，器高19.6cm，胴部最大径19.8cmを測る。胴部は下方に向かって大きく張り出し，下位でさらに内側に内湾して底部を形成する。口縁部外面は斜方向の刷毛目調整，上位～中位は斜方向の刷毛目調整，下位は一部斜方向の刷毛目が残るが，全面にわたり不定方向のナデ調整を行なう。胴部内面は斜方向の刷毛目を施し，ヨコナデで仕上げる。底部は指圧によって調整を行なう。**289**は完形の壺である。口径18.0cm，器高39.5cm，胴部最大径27.3cmを測る。外面の調整では，口縁部はヨコ及び斜方向の刷毛目調整，胴部上位はヨコ方向の叩き目を，中位～下位は斜方向の叩きを施し，斜方向の刷毛目調整を行なう。下位はタテ方向の研磨的なナデと不定方向の刷毛状条痕が見られる。内面の調整は口縁部ではヨコ方向の刷毛の後にナデ調整を，胴部上位は不定方向の刷毛目，中～下位は斜方向の刷毛目調整を重ねる。なお外面頸部には長さ1.4cm，幅2mmで斜方向の刻みを巡らし，これからは9mm内外の定間隔で刻まれている。**290**は壺の口縁部片である。内外面ともに全面にヨコナデ調整を施している。**291**は壺の胴部片である。貼り付けの突帯を有しており，その表面には×字状の刻み目を施す。刻みの順序はまず右上から左下へ，次に左上から右下へと規則的な流れを有する。内外面ともにナデ調整を全面に施す。**292**は甕の胴部片である。外面はヨコ方向に叩き目を施しており，内面はナデ調整のみである。胴部器壁は薄い。**293**はメンコ形土製品である。完形で平面形はほぼ円形であり，全長3.5cm弱を測る。やや反り気味である。表面には弱い刷毛目が観察でき，縁辺部の面取りを行なっている。重量9.8gである。**294**はメンコ形土製品である。完形品で，長方向3.5cm，短方向3.3cmと惰円形をなしている。表面には弱い刷毛目が見られ，縁辺部には面取り

を行なっている。重量 8.8g である。

14号住居址内出土鉄器，石器（第89図）

300 は鉄製鉇である。下部が欠損しており，上部のみであり，残存長 5.9cmを測る。最大幅は1.5cmで断面形は浅いＵ字形である。**301** は鉄製鉇である。下部と先端の鋒部が欠損する。残存長3.6cm，最大幅1.3cmを測り，断面は浅いＵ字形となる。**302**は鉄製手鎌である。中央部が欠損しているが，同一地点での取り上げであるので１個体とした。右側部分残存長 4.6cm，左側部分残存長4.0cmである。幅は2.5cm，厚３mmを測る。刃部と背部の長さはほぼ均等であり，全体的に見るとやや内側に反った感を受ける。両側部分は６～７mm内側に折り込んでおり，袋部を造り出している。**303**は凝灰岩製の砥石である。上半部が欠損しており，残存長は8.6cm，幅3.65cm，厚さ 2.8cmを測る。よく使用されており，研磨面は４面である。**304**は用途不明の石器であ



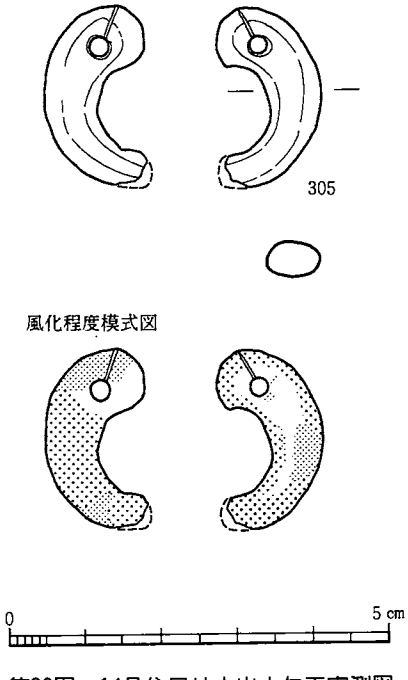
第89図　14号住居址内出土鉄器・石器実測図

る。全長8.5cm，幅5.15cm，最大厚1.0cmを測る。形態上では石斧形ではあるが，全面磨いてあり，全周の端部は鋭利さをもたず刃部は形成されていない。石斧下部側面両端から意図的な剝離がみられるが，使用痕等は全く見られない。

14号住居址内出土勾玉（第90図）

本住居址より，ガラス製の勾玉が1点出土している。勾玉は住居址西側の細長いベッド状遺構の肩部より流れ落ちる状況で検出された。共伴遺物は全くなく，付近には弥生土器の細片が出土するのみで，単独の出土である。**305**はガラス製勾玉である。尾部の端部が欠損するものの，ほぼ完形である。全長 2.3cm，断面形は図中左右にやや長い惰円形である。(長6.5mm×短4.5mm) 頭部には穿孔が見られるが，径 2.5mmであり，孔全周肩部はシャープであり糸擦れは全く見られない。勾玉頭部には1条の沈線が頭端部より穿孔部に向かって刻まれており，条線は穿孔まで達している。なお沈線は表裏2面とも刻まれている。重量は2.36gである。

下段は勾玉の風化模式図である。出土当初は全体に鮮明な青色に発色していたが時間が経過するにしたがって，風化が進み白色が強くなってきた。模式図の右側部分では頭部の沈線部分が強く白変する。中央部に強く白変する箇所があるが他は強いコバルトブルーである。図中左側部分では穿孔のある頭部が集中して白変し，尾部の一部も弱く白変する。他は右側同様強いコバルトブルーの発色を示す。なお模式図中スクリーントーン密の箇所が白変の状況の見えるところで，疎の箇所がブルーの発色の強い所，白抜き箇所が両者の中間地点である。



第90図　14号住居址内出土勾玉実測図

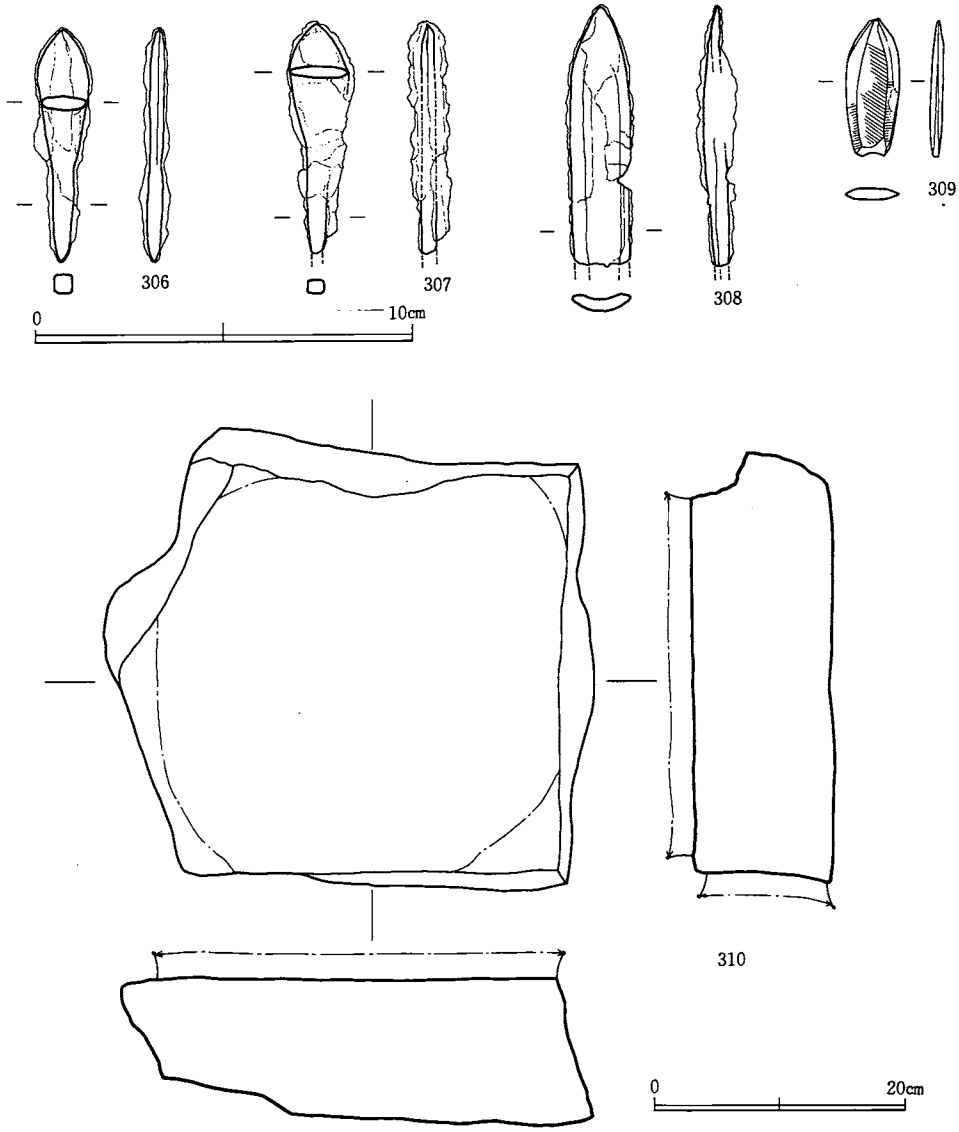
(14) 15号住居址（第86図）

②—ⓒ区内，調査区北部の西側に位置している。14号住居址に東側を切られている。平面形態は長方形で，残存規模は長軸方向 4.6m，短軸方向 4.8m を測る。主軸は東西方向と想定され，その方位はN－76°－Eとなる。主柱穴は4本であり，そのいずれも径は大型である。PIT，1は径が 90cmで，南側に径30cmの小柱穴が付く。PIT，2及び3は上端径が80～100cmであり，特にPIT，3では2段に堀り込んでいる。PIT，4は北側に小柱穴が付くがいずれも浅く，床面から20～30cmである。住居址の上面は削平されており，最も残存が良好と考えられる西側においても，壁高は25cmを測るのみで

ある。ベッド状遺構は住居址の東半分を占めており，段差は約10cmである。貯蔵穴は南側に瓢箪状の浅い遺構が１基確認されている。なお炉は検出されていない。

住居址の覆土は１層のみで，暗褐色土である。

遺物の出土状況では小破片の遺物が住居址内から少量出土する。番号を付して取り上げた25点の内，図化できたものは18点で，ここでは10点掲載した。遺物の内訳は土器類では甕３点，壺１点となり，鉄器は鏃２点，鉈１点，石器では鏃１点，台石１点である。なおガラス小玉１点も出土する。出土の層位では，ほとんどの資料が埋土全１層からの出土であり，全てが時期判定の資料となりうる。住居址の廃棄状況は不明であるが，この住居址でも15号住居址同様，利器の出土状況に特徴がある。



第91図　15号住居址内出土鉄器・石器実測図

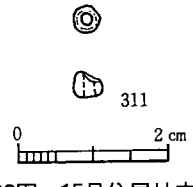
15号住居址内出土土器（第88図）

295は甕の口縁部である。外面はヨコ方向のナデ調整，内面はヨコ方向の刷毛目の後ヨコナデ調整で仕上げる。**296**は甕の口縁部片である。口縁部は内外面ともヨコ方向の刷毛目の後ヨコ方向のナデで仕上げる。胴部外面は斜方向の刷毛目の後にヨコ方向のナデで仕上げる。胴部内面はヨコ方向の刷毛目の後にヨコナデを施す。**297**は甕の脚台部片である。外面は斜方向の丁寧なナデ調整，内面には一部砂粒が付着するがヨコ方向の丁寧なナデ調整で仕上げる。**298**は壺の胴部片である。貼り付けの突帯を有しており，突帯には，長 1.1cm，短 4 mm程度の刻みが定間隔に施されている。内面は剝離して調整は不明。**299**は壺の底部と思われる。胴部外面はタテ方向の刷毛目調整，内面はタテないし斜方向の刷毛目の後にナデ調整で仕上げる。

15号住居址内出土鉄器，石器（第91図）

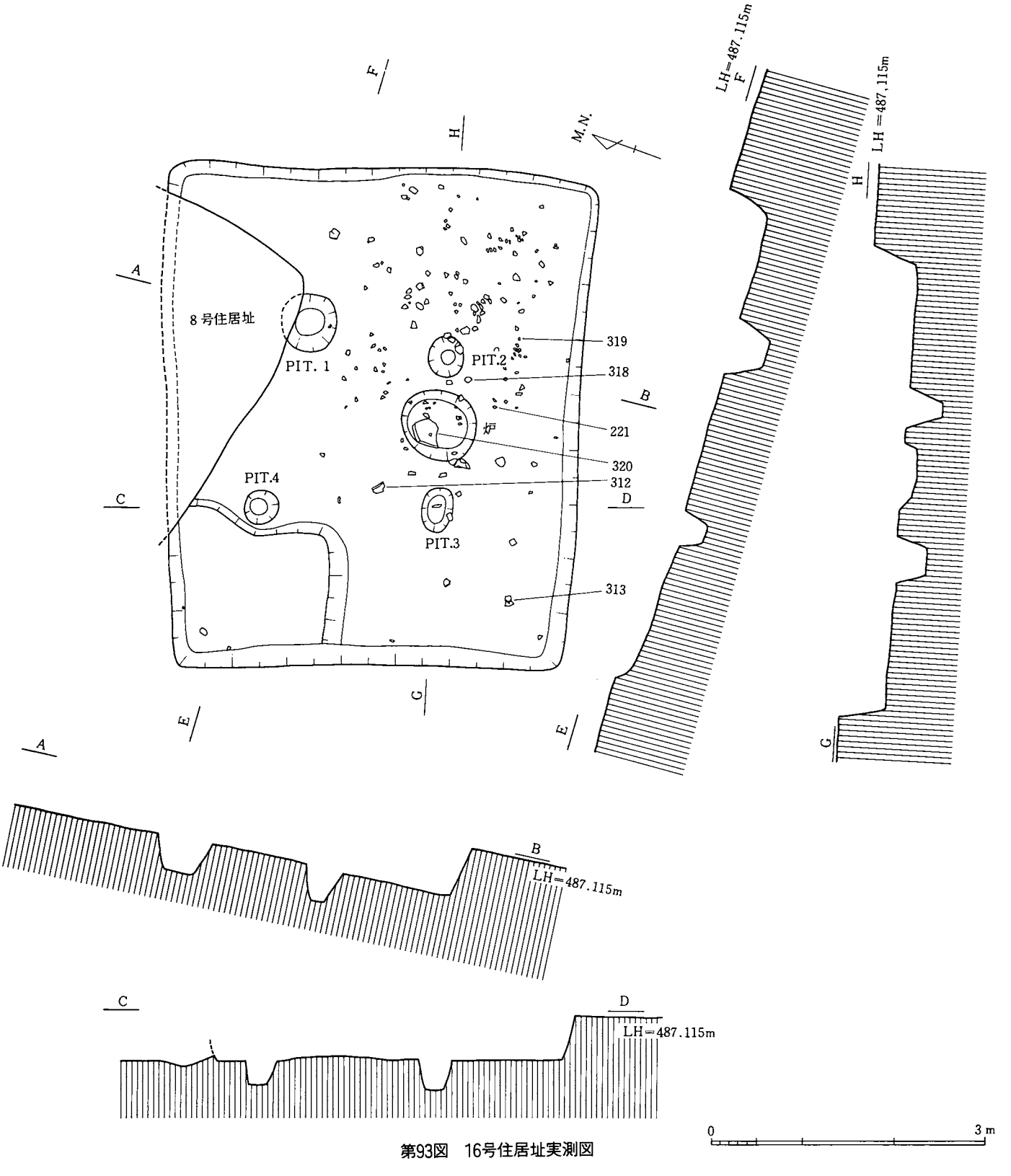
306は有茎三角形式の鉄鏃である。完形であり全長6.1cm，幅1.4cm，頭部の断面厚 4 mm を測り，茎部断面はほぼ方形で 5 mmとなる。関部が不明確であり，広根形の柳葉鏃と考えられる。全面に鉄分が付着するが重量8.0g である。**307**は有茎三角形式の鉄鏃である。錆の進行が頭部右側が強く一部形状が判明しない。茎部が欠損しており，残存長は6.1cm，幅1.6cm，頭部の最大厚 3 mmを測り基部断面はほぼ長方形である。平面形態は柳葉式のやや頭部幅の広い形式に属するものと考えられる。**308**は鉄製鉇である。下部は欠損しており残存長は 6.9cm，幅1.65cmで断面形は浅いU字型をなすが，断面厚は 4 mmと比較的に厚い。**309**は有抉の石鏃である。完形であり全長3.65cm，幅1.45cm，厚 3 mmである。長軸に対して幅がやや広くなり，重量は2.4g である。**310**は安山岩製の台石である。長方向39.1cm，短方向34.8cm，最大厚11.8cmを測る。研磨面は表面と側面の 2 面である。重量28.5kg を測る。

15号住居址内出土小玉（第92図）



第92図　15号住居址内出土小玉実測図

本住居址よりガラス製の小玉が 1 点出土している。**311**はガラス製小玉である。完形品であり全長4.0mm，幅3.5mm，穿孔の径1.5mmである。図中上位置の頭部にはやや粗さが残っており，頭頂部にガラスを切り離した状況の突起物が残る。色調は淡い青色を呈している。重量は0.05g である。



第93図　16号住居址実測図

(15)　16号住居址（第93図）

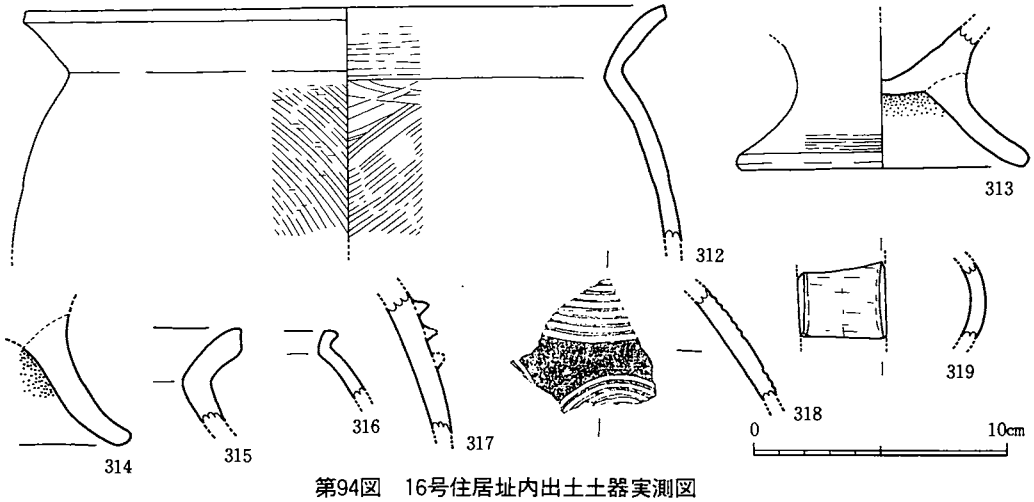
①・②－ⓒ・ⓓ区内，調査区のほぼ中央部に位置している。本住居址堀り下げ後，床面から8号住居址の遺構ラインが検出される。また本住居址は14号住居址を切る。平面形態は長方形で，長軸方向5.4m，短軸方向4.5m，床面積21.4㎡を測る。主軸はほぼ東西方向で，主軸方位はN－74°－Eとなる。壁高は南側で60cm，西側で50cmとなる。主柱穴は4本で，柱穴内には盤石を全く含まない。PIT,1が最も大型で径60cm，PIT，4が最小で径40cmを測る。中央部よりやや南側に片寄って炉が1基検出される。ベッド状遺構は北東側のコーナー部を被うように造られており，段差は6cmとなる。貯蔵穴は確認されていない。

住居址の覆土は3層に分かれる。第1層は褐色土，2層は黒褐色土に炭化物を含む層，3層は黒褐色土に地山の黄色ブロックを含む層となる。

遺物の出土状況では，住居址東側にまとまって小破片の資料が散在する。番号を付して取り上げた98点の内，図化できたものは13点で，ここで掲載したものは10点である。出土遺物の内訳は土器類では甕4点，壺3点，ジョッキ形土器1点である。石器類は砥石1点，台石1点である。土層より小破片が多数出土し，下層からは312，314，316，319が出土している。床直上及び密着の資料としては313，318が上げられる。320は炉内に落ち込んだ状態での資料である。住居址の廃絶に際しては320を除き，ほとんどが流れこみの遺物と考えられる。

16号住居址内出土土器（第94図）

312は甕である。胴部は強く張り，残存高9.3cmを測る。外面口縁部はヨコ方向のナデ調整，胴部は斜方向の刷毛目の後ナデ調整を行なう。口縁部内面はヨコ方向の刷毛目の後ヨコナデ調整を，下位は斜方向の刷毛目調整を行なう。**313**は甕の脚台部である。残存高5.6cmを測る。外面はヨコ方向の刷毛目の後ナデ調整を施す。底部内面は刷毛目調整の後を不規則のナデを行なう。

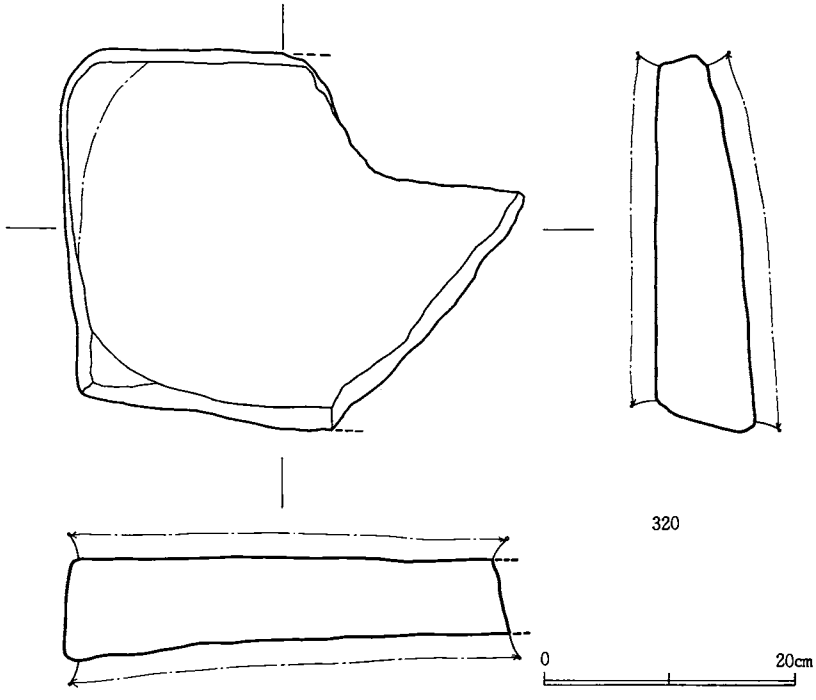


第94図　16号住居址内出土土器実測図

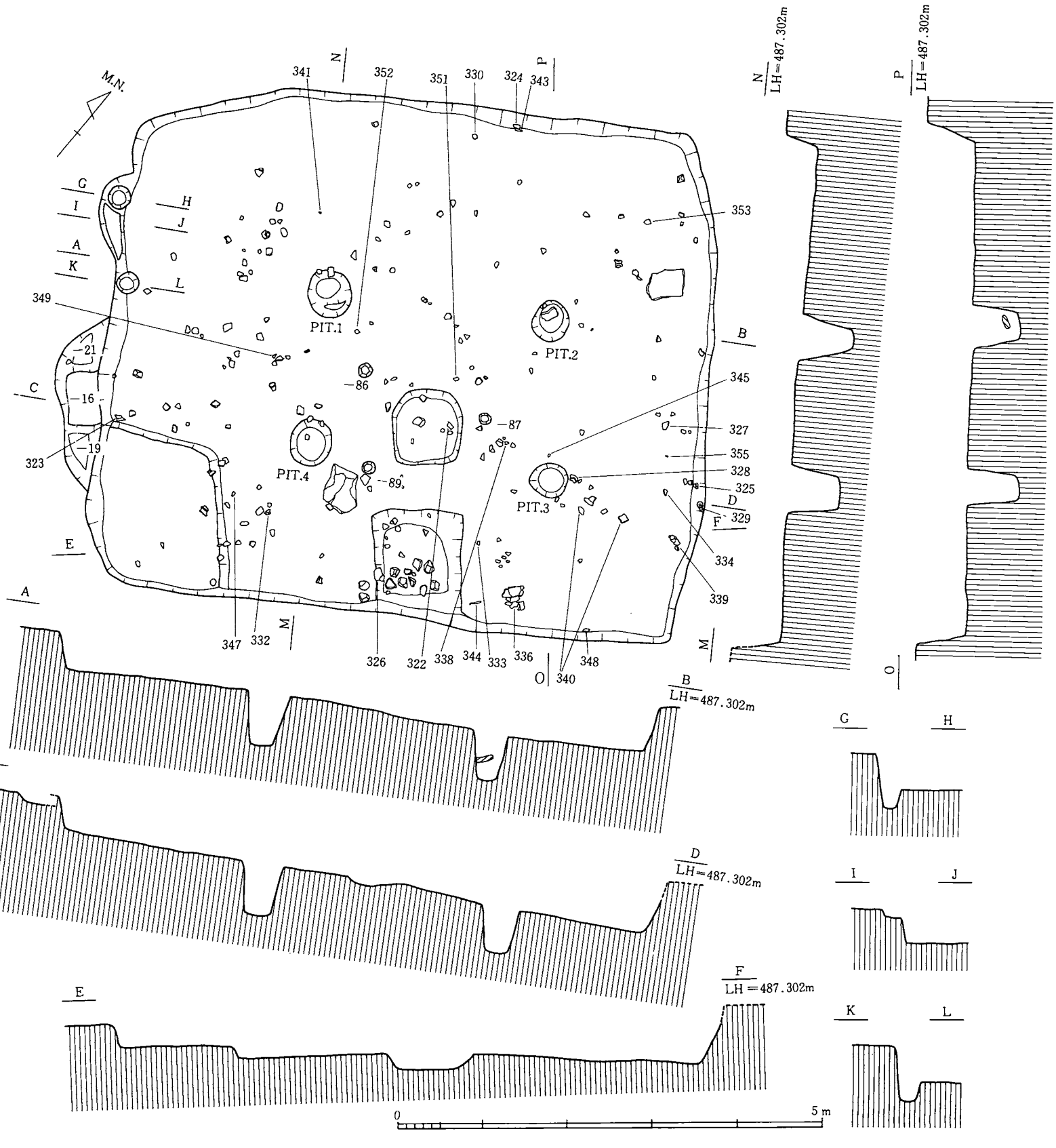
脚台内面には砂粒が付着し，ヨコ方向のナデも行なわれる。**314**は甕の脚台片である。接合状況が判明する資料である。外面は上方より下方への刷毛目の後ヨコナデ仕上げ。内面には砂粒が付着し，ヨコ方向のナデを施す。**315**は甕の口縁部片である。外面はタテ方向の刷毛目の後にヨコ方向のナデ調整。内面は刷毛目の後にヨコ方向のナデを行なう。**316**は小型の壺口縁部である。胴部はふくらむが口縁部は屈曲しやや外傾して短く立ち上がる。内外面ともにヨコ方向のナデ調整のみである。胎土は緻密で焼成良好。**317**は壺の胴部片と考えられる。貼りつけの突帯が３条造られており，間は雑でヨコナデされている。外面の下位はタテ方向の刷毛目の後ヨコナデを施す。内面はヨコ方向の刷毛目である。**318**は免田式土器の壺胴部片である。残存は 5.6㎝を測る。外面上位にはナデの後に沈線を刻み，その数は７本まで確認される。下位には同心円状の沈線が施される。内面はヨコ方向の刷毛目が行なわれる。**319**はジョッキ形土器の把手部である。残存長 3.1㎝で幅 3.4㎝を測る。最大厚５㎜と薄手の把手であり，内外面ともに指による丁寧なナデ調整が施されている。

16号住居址内出土石器（第95図）

本住居址からは２点の石器が出土している。**320**は安山岩製の台石である。長方向36.2cm，短方向29.7cm，最大厚8.0cmを測る。表裏両面ともに使用されており，平坦面を形成している。重



第95図　16号住居址内出土石器実測図



第96図　17号住居址実測図

量11.39kgである。**321**は小型の砥石である。全長3.4cmを測り，中央部がやや窪むものの，両面ともよく研磨されている。材質は砂岩と黒色頁岩製である。

⑯　17号住居址（第96図）

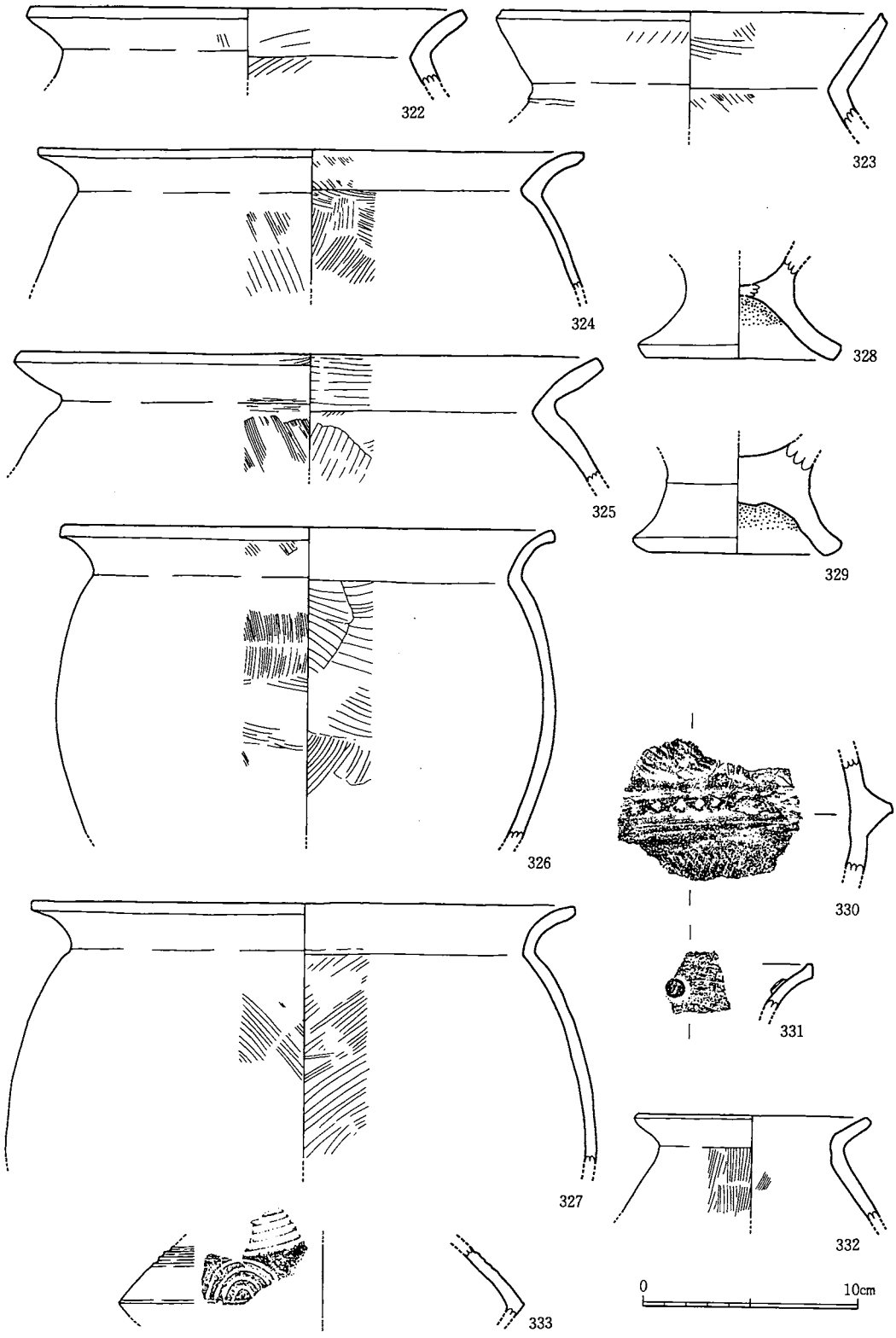
②・③—ⓓ区内，調査区のほぼ中央部に位置している。20号住居址に切られ，一方では18号住居址を切る。平面形態はほぼ長方形で，その規模は長軸方向7.1m，短軸方向6.0m，床面積37.5㎡を測り，本遺構内完形の住居址中で最大規模のものである。主軸方向は東西であり，主軸方位はN－58°－Eとなる。壁高は北側で60cm，東側で70cmを測るが，住居址上面は削平を受けているものと思われる。主柱穴は4本であり，内1本に盤石が含まれ柱穴の平面径は40～55cmとなる。PIT，2の盤石は安山岩製で20cm×10cmの平石である。住居址西側には階段上のステップと，その両脇には径25cmの同一規模の柱穴が配置され，これらは出入口の施設と考えられる。同一施設と思われるものは28号住居址にも見られる。ベッド状遺構は南東側にコーナー部を被って大型のものが1基ある。貯蔵穴は南側に1基，床面に角石を14個配置して造られている。炉は中央部よりやや南側に位置して1基つくられており，周囲には径15cm内外，床面からの深さ90cm弱の小柱穴が3基配置されている。

住居址の覆土は5層に分かれている。上層より黒色土，茶黄褐色土，褐色土，ロームを斑点状に含む茶褐色土，黒褐色土となる。最下層は主に貯蔵穴内に入る埋土である。

出土状況では住居址全体に広く遺物が散存する。番号を付して取り上げた資料171点中，図化できたものは58点であり，ここでは34点を掲載した。出土遺物の内訳は土器類では甕8点，壺7点，鉢4点となる。鉄器では鉄鏃1点，鉈2点，のみ状工具1点である。石器では鏃2点，石包丁6点，砥石3点となる。遺物の出土層位では，4層中のものが324，329，330であり，5層中出土及び床密着のものは326，328，333である。一方鉄器，石器類では341～344，346，348等が5層中の出土であり，これらも時期判定の資料となりうる。住居址の廃絶に際しては貯蔵穴の状況でも判明するように，本来の位置にあったものも多く，徐々に埋没していった可能性が強い。鉄器，石器等の利器類の出土も多く，これらはこの住居址の廃棄状況の特徴と言えよう。

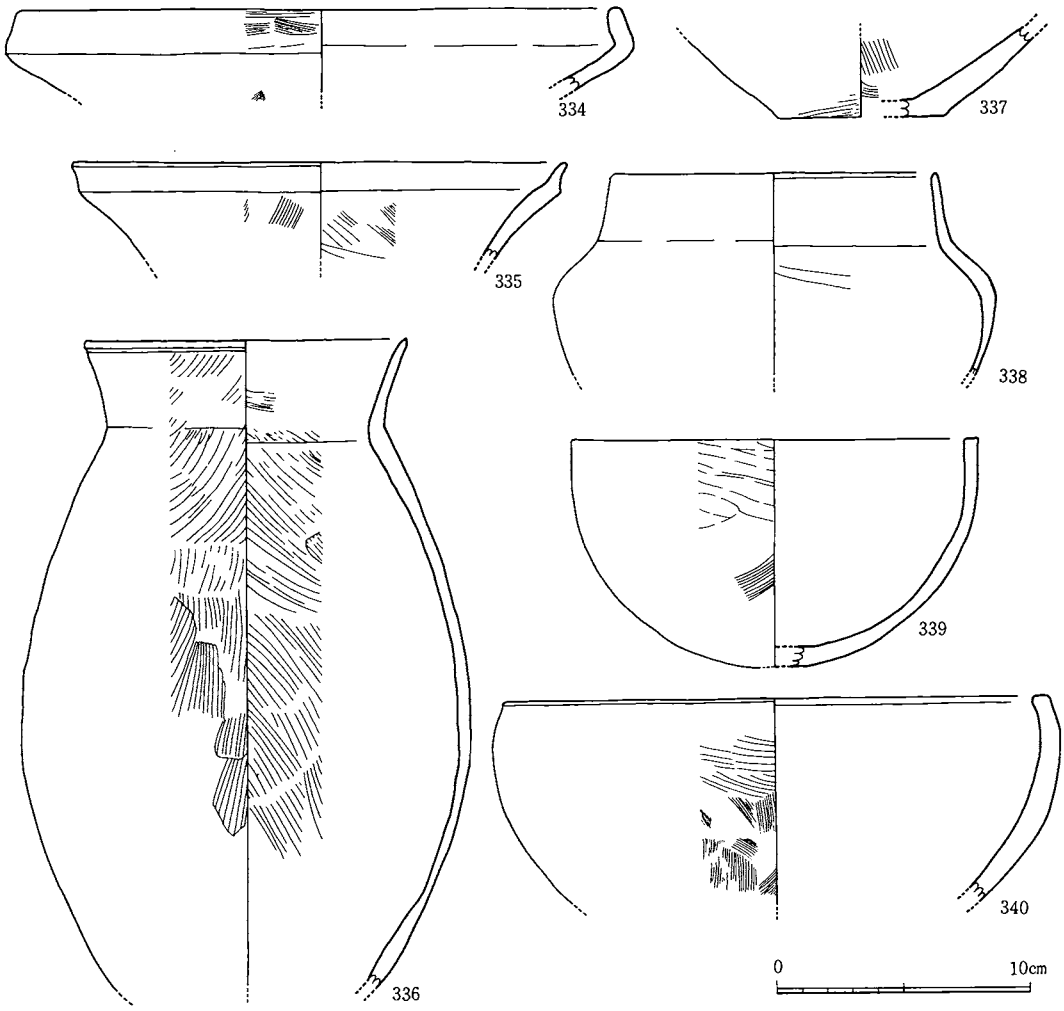
17号住居址内出土土器（第97，98図）

322は甕である。残存1/10での復元。外面はタテ方向の刷毛目の後に，ヨコ方向のナデ調整を行なう。内面上位はヨコ方向の刷毛目，下位は斜方向の刷毛目調整を行なう。**323**は甕である。残存1/6での復元。外面は斜方向の刷毛目の後ヨコ方向のナデ調整となる。内面上位はヨコ及び斜方向の刷毛目調整。下位は斜方向の刷毛目調整を施す。**324**は甕である。胴部の器壁は薄く，口縁部は強く屈曲する。外面は刷毛目調整の後ナデ消しで仕上げる。口縁部内面は斜方向の刷毛

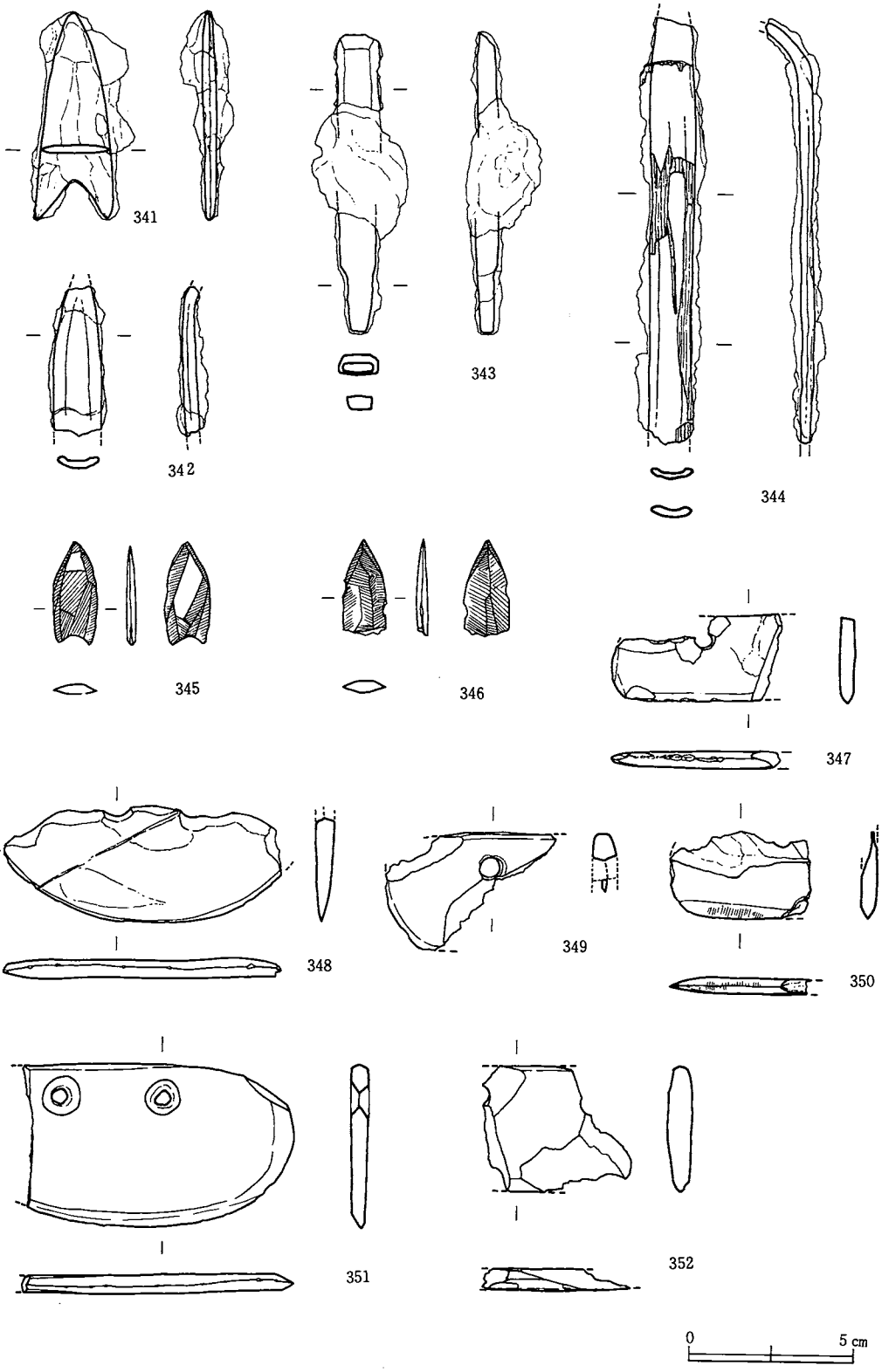


第97図　17号住居址内出土土器実測図（その１）

目の後，不定方向のナデ調整を，下位は斜方向の刷毛目調整を重ねる。**325**は甕である。外面上位はヨコ方向の刷毛目，下位は斜方向の刷毛目調整を重ねる。内面上位はヨコ方向の刷毛目，下位は斜方向の刷毛目調整を行なう。**326**は甕である。胴部の張りは強く，口縁部は短く外湾する。外面上位はタテ方向の刷毛目の後，強いヨコ方向の刷毛目調整を重ねる。下位は刷毛目の後，ナデ消しで仕上げる。内面上位はヨコ方向のナデ調整，胴部内面は斜方向の刷毛目調整を重ねる。**327**は甕である。大型で口径は25.4cmを測る。残存1/10での復元。口縁部は内外面ともヨコ方向のナデ調整を行なう。胴部外面は全面にわたり斜方向の刷毛目調整の後，部分的にナデ消す。内面上位は微細な刷毛目調整を，下位は強い斜方向の刷毛目調整を施す。**328**は甕の脚台である。内外面ともヨコ方向の刷毛目の後，ナデ調整を加える。内面には砂粒が付着する。**329**は甕の脚台である。外面はヨコ方向のナデ調整を，脚台内面には大粒の砂粒が付着する。**330**は

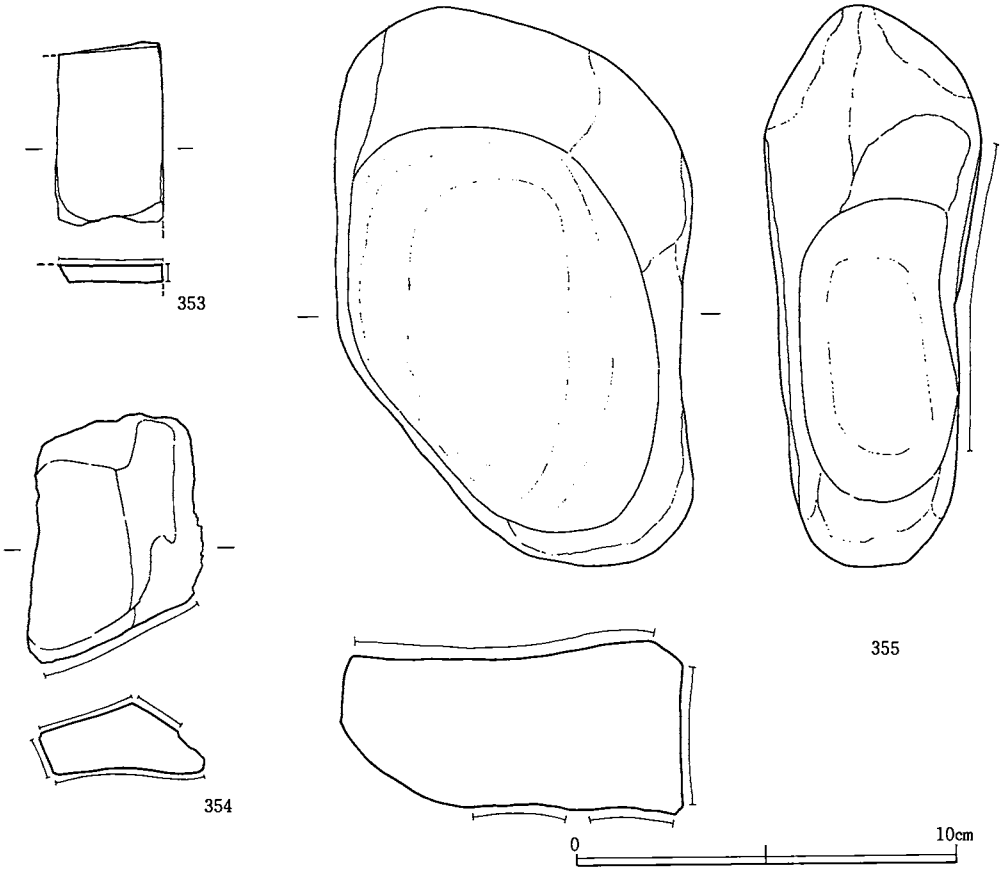


第98図　17号住居址内出土土器実測図（その2）



第99図　17号住居址内出土鉄器・石器実測図（その1）
※341のみ14号住居址内出土鉄器

壺の胴部片である。断面三角形の大型の突帯が貼り付けられており，そこには0.8～1.3mm間隔で刻みを施してある。外面は斜方向の刷毛目調整にヨコナデを一部行ない，内面は斜方向の刷毛目調整を施す。**331**は壺の口縁部である。外面には斜方向の刷毛目調整，内面には径８mmのボタン状突起を１個貼り付ける。**332**は壺である。口径11.0cm，残存高 4.8cmを測る。残存⅛での復元。口縁部外面はヨコ方向のナデ調整，下位はタテ方向の刷毛目調整を施す。内面上位はヨコ方向の刷毛目調整。下位は不定方向の刷毛目調整を行なう。**333**は免田式土器の壺の胴部片である。外面上位には４本の条線，円弧状の４本の沈線が入る。この重弧文は復元では12組となる。下位はヨコ方向の刷毛目調整を行なう。内面は不定方向のナデ調整である。**334**は壺の口縁と考える。口径は25.0cmと大型で，下部は完全に欠損する。残存⅒での復元。外面はヨコ方向の刷毛目の後ナデ調整。内面にはヨコ方向の刷毛目調整を施す。**335**は壺の口縁部である。口唇部は細身となり，外湾気味に立ち上がる。残存⅒での復元。外面はヨコ方向及び斜方向のナデ調整を行なう。内面は斜方向の刷毛目調整を行なう。**336**は甕である。残存½の復元。小型の壺で，口径12.8cm，胴部最大径17.8cm，残存高25.5cmを測る。口縁部外面は斜方向の刷毛目調整



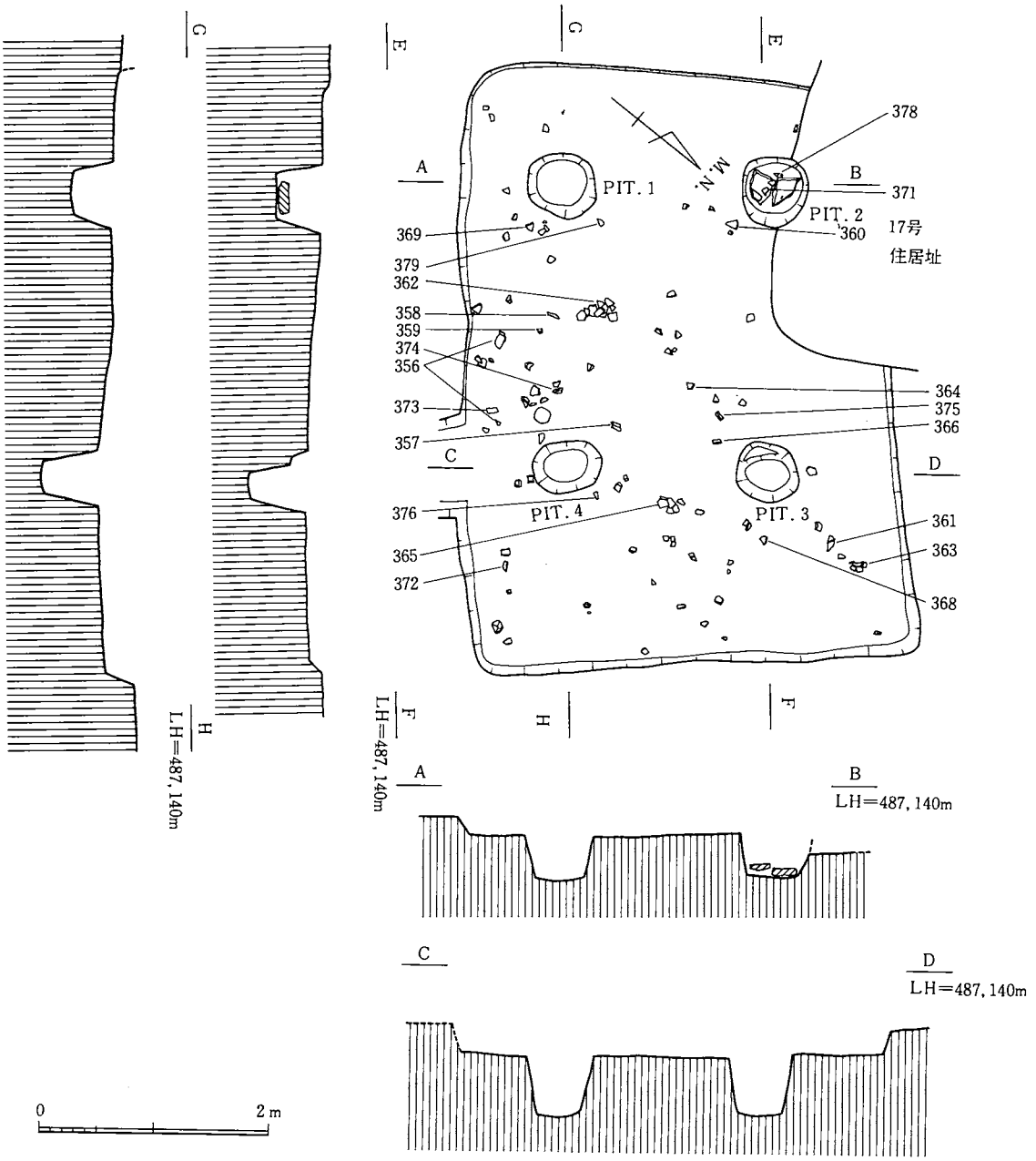
第100図　17号住居址内出土鉄器・石器実測図(その２)

をナデ消す。胴部外面は斜及びタテ方向の刷毛目調整を重ね，下位はナデ消す。口縁部内面はヨコ方向の刷毛目をナデ消し，胴部内面は斜方向の刷毛目調整を行なう。**337**は鉢の底部である。残存⅙の復元。外面には不定方向の刷毛目，内面にはタテ方向の刷毛目調整を施す。**338**は鉢である。底部は欠損するが，大型の鉢である。外面は全面にわたり刷毛目の後にヨコ方向のナデ調整で仕上げる。胴部内面はヨコ方向の刷毛目を一部施す。**339**は鉢である。口径16.1cm，器高9.0cmを測る。残存¼での復元。外面上位は削りを施し，下位は部分的に刷毛目調整が残るが，大部分はナデ調整で仕上げる。内面は部分的にナデ調整が見られる。**340**は鉢である。大型であり口径21.7cm，残存高 8.3cmを測る。外面上位は強いヨコ方向の刷毛目調整，下位はタテ方向の刷毛目調整を重ね，部分的にナデ消す。

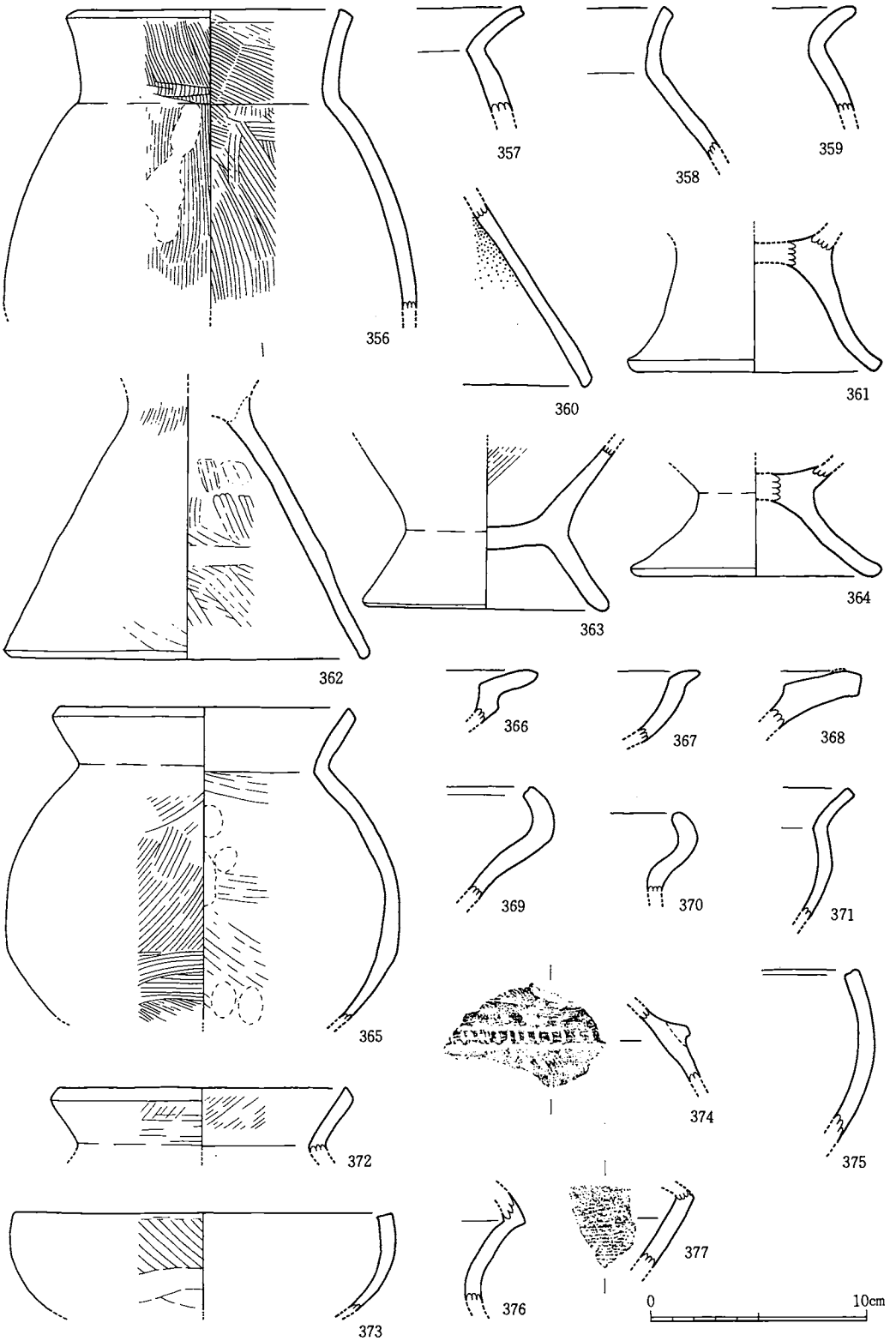
17号住居址内出土鉄器，石器（第99，100図）

341は無茎の鉄鏃である。完形であり全長6.3cm，幅2.35cmである。大型であり，基部を三角形に抉りこむ。錆が付着するが重量17.4g である。**342**は鉄製鉇である。　鋒先端部及び下部が欠損し，残存長4.5cm，幅1.5cmを測る。鋒部は内側に湾曲した状況である。**343**は鉄製鑿と考える。鋒両側端が微細に欠損するが，ほぼ完形である。鋒は約158°の角度で尖っており，刃部を形成する。頭部は断面1.3cm×0.6cmであるが中心部は中空であり，鍛造されたものと考えられる。茎部には関を有しており，断面形は８mm×４mmの長方形である。錆が付着するが，重量43.65gである。**344**は鉄製鉇である。鋒部及び基部が欠損するが，残存長12.8cm，幅1.45cmを測る。内面には木片が付着しており，先端部は内側に約133°折れまがる。断面は浅いU字形であり，厚さ２mmである。**345**は磨製石鏃である。有抉で，幅がやや広くなる。両面とも中央部に剝離面を残す。重量1.4gである。**346**は磨製石鏃である。基部が欠損するため抉りの有無は不明である。残存長3.95cm，幅1.32cm，厚４mmを測る。**347**は石包丁である。右側及び左上位部分が欠損している。平面形はほぼ長方形をなしており，残存長4.25cm，幅4.00cm，幅 6.5mmを測る。背部及び左側部は磨耗し，刃部はつぶれる。**348**は石包丁である。刃部のみの残存で，かろうじて穿孔部が判明する。残存長8.40cm，厚７mmである。刃部は弱く外湾する。**349**は石包丁である。右側及び左上部が欠損しており，残存長5.25cmを測る。平面形は長方形を呈するものと考える。**350**は石包丁である。右側及び左上部が欠損する。穿孔が一部見られるが，残存長は4.30cmを測る。刃部には使用痕が顕著に確認される。平面形は長方形を呈する。**351**は石包丁である。左側が欠損するが，残存長8.25cm，幅5.00cm，厚 5.5mmを測る。刃部は弱く外湾し，使用痕が観察される。**352**は石包丁である。右，左側が欠損し，穿孔部がかろうじて見られる。残存長4.51cm，幅3.90cm，厚７mmを測る。平面形は長方形と考えられる。**353**は凝灰岩製の砥石である。右上部の一角の残存のみで，残存長4.80cm，幅2.75cmを測る。研磨面は２面である。**354**は砂岩製の砥石である。全長6.50cm，幅4.05cm，厚1.78cmを測る。自然礫を利用し，研磨面は５面で

ある。重量69.2g である。**355**は頁岩製の大型の砥石である。全長14.7cm，幅9.40cm，厚4.60cm である。よく研磨され表面，側端面は弱く窪む。研磨面は4面である。重1121.0g である。



第101図　18号住居址実測図



第102図　18号住居址内出土土器実測図

(17)　18号住居址（第101図）

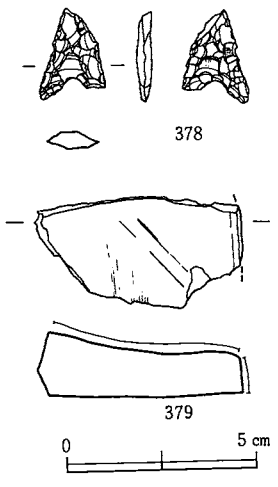
②—ⓓ・ⓔ区内，調査区中央部に位置している。本住居址は17号住居址に切られ，一方では24号住居址を切る関係となる。平面形態は長方形で，規模は長軸方向5.1m，短軸方向3.7m，床面積は18.0㎡を測る。主軸方向は東西であり，その方位はN－51°－Eとなる。壁高は最も残りの良好な東側で，わずか30cmと上面からの強い削平を受けている。主柱穴は4本であり規則的に配列されている。PIT，2は17号住居址に半分切られているものの，最も丁寧な造りである。この柱穴内に40cm角の熔岩塊を2個，盤石として埋めて柱を固定させている。この方法は他の柱穴には見られない良好なものである。なお炉は検出されていない。

住居址の覆土は3層であり，茶褐色土，茶褐色粘質土，黒色土に地山層を斑点状に含む層となる。なお3層中に微量のカーボンを含む。

遺物の出土状況では，住居址内部に小破片がまばらに散在する。番号を付して取り上げた資料86点の内，図化できたものは43点，その内ここで掲載したものは24点である。資料の内訳は，土器類では甕5点，壺11点，鉢6点となる。その他打製石鏃及び砥石が各1点ずつ出土する。遺物の出土層位は上層より小破片が出土するが，3層及び床直上の資料は多い。それらは357，359，361～364，374，375である。374，375の両石器は2層からの流れこみである。住居址の廃絶に際しては，大型の土器類を投棄した状態とも伺える。

18号住居址出土土器（第102図）

356は壺である。器壁は厚く，胴部の張りは弱い。口縁部外面はタテ方向の刷毛目調整を施し，頸部付近には木口の跡が残る。胴部外面はタテ方向の刷毛目を施し，一部ナデ消す。口縁部内面は斜方向の刷毛目を行なうが，口縁端部付近はナデ消される。胴部内面は斜方向，ヨコ方向の刷毛目調整を重ねる。**357**は甕の口縁部である。胴部の器壁は10㎜と厚い。外面はヨコ方向のナデ調整を施し，口縁部内面はヨコ方向のナデ，胴部内面は斜方向の刷毛目の後にヨコナデで仕上げる。**358**は甕の口縁部である。口縁部外面はヨコ方向のナデ調整，胴部外面は斜方向の刷毛目調整を行なう。口縁部内面はヨコ方向のナデ調整，胴部内面は斜方向の刷毛目となる。**359**は甕の口縁部である。口縁部外面はヨコ方向のナデ調整，胴部外面はタテ方向の刷毛目調整。内面はヨコ方向のナデ及び指圧による調整となる。**360**は甕の脚台部片である。脚台径は不明であるが，脚台高は残存8.4cmと高い。外面はタテ方向の刷毛目の後，タテ方向のナデ調整を行なう。内面の上位には微砂粒が付着する。下位はタテ方向のナデ調整を行なう。**361**は甕の脚台部である。外面は一部タテ方向

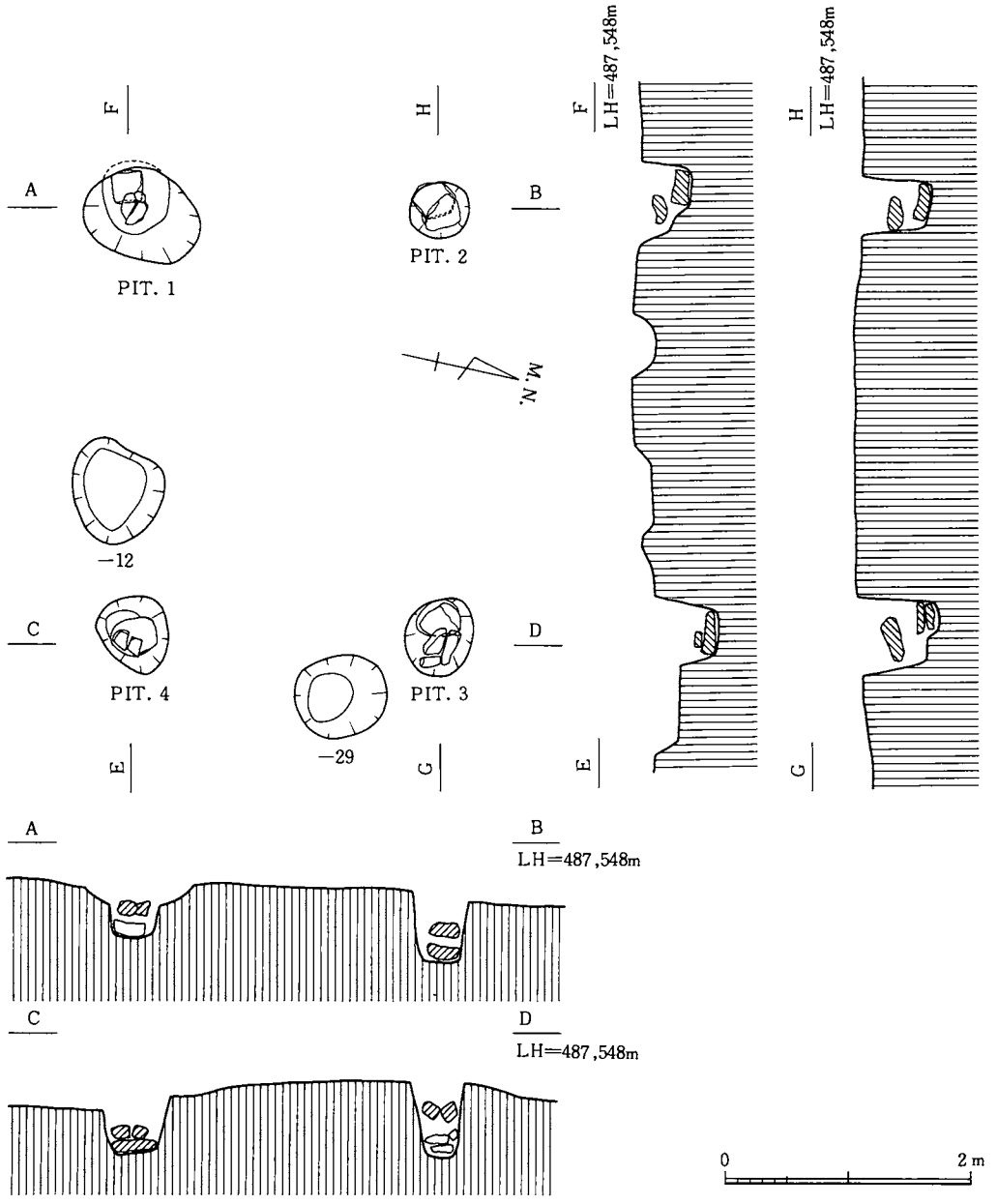


第103図　18号住居址内出土石器実測図

の刷毛目が残るが，ヨコ方向のナデで仕上げる。内面は刷毛目の後にヨコ方向のナデ調整を行なう。**362**は甕の脚台部である。脚台径16.9cm，脚台高12.1cmを測り，大型で背が高い。外面は斜方向のナデ調整を，境界取り付け部はタテ方向の刷毛目の後ナデ調整で仕上げる。内面上位は刷毛状工具で強く押しあて下方に引き，その後にナデ調整で仕上げる。中～下位は斜方向の刷毛目の後にヨコ方向のナデ調整を施す。**363**は甕の脚台部である。外面はタテ方向の刷毛目の後にヨコ方向のナデ調整を行なう。底部内面は刷毛目の後にナデ調整を，脚台内面はヨコ方向のナデ調整を施す。**364**は甕の脚台部である。内外面ともにヨコ方向のナデ調整，底部内面は斜方向の刷毛目の後にナデ調整。**365**は鉢である。底部は欠損するが,口径14.0cm,胴部最大径18.2cm，残存高14.5cmを測る。胴部は中位よりやや下側で最大径を測り，そこを境として調整方法が変わる。口縁部外面はヨコ方向のナデ調整を，中位は斜方向の刷毛目，下位はヨコ方向ないし斜方向の刷毛目調整を施す。口縁部内面はヨコ方向のナデ調整，胴部はヨコ方向の刷毛目の後ヨコ方向のナデで仕上げる。一部指頭圧痕も確認される。**366**は鉢の口縁部片である。口縁部は短く，強く屈曲する。外面はヨコ方向のナデ調整，内面は斜方向の刷毛目の後，ヨコ方向のナデ調整で仕上げる。**367**は鉢の口縁部片である。外面はタテ方向の刷毛目の後ヨコ方向のナデ調整，内面はヨコ方向のナデを施す。**368**は壺の口縁部である。口縁端部に2個のボタン状の突起を貼り付ける。内外面ともにヨコ方向のナデ調整を施す。**369**は壺の口縁部である。袋状の形状をなしている。外面はヨコ方向の丁寧なナデ調整。内面はヨコ方向のナデ調整を行なう。**370**は壺の口縁部である。外面はタテ方向の刷毛目の後ヨコ方向のナデを施す。内面はヨコ方向のナデ調整を行なう。**371**は鉢の口縁部である。外面はヨコ方向のナデ調整，内面上位はヨコ方向のナデ調整，下位は斜方向の刷毛目の後にヨコ方向のナデで仕上げる。**372**は甕である。外面はヨコ方向及び斜方向の刷毛目の後にヨコ方向のナデ調整を施す。内面は斜方向の刷毛目の後にナデ後にナデ調整を行なう。**373**は鉢である。口径が17.2cmと大型であるのに対し，器高は比較的に浅い。外面はヨコ方向の刷毛目の後下位についてはヨコないし斜方向のナデ調整を行なう。内面はヨコ方向のナデ調整を行なう。**374**は壺の胴部片である。台形状の突帯を貼り付けており，突帯には斜方向の刻みを不定間隔に施す。外面上位はヨコ方向のナデ調整を，下位には斜方向の刷毛目の後にヨコ方向のナデを施す。内面は不規則な刷毛目の調整を施す。**375**は鉢の口縁部である。外面上位はヨコ方向のナデ調整，下位は斜方向の刷毛目調整を施す。内面は斜方向の刷毛目の後にヨコ方向のナデ調整を施す。**376**は壺の頸部片である。逆〝く〟の字状に強く屈曲する。外面はタテ方向の刷毛目の後ヨコ方向のナデ調整を行なう。内面はヨコ方向の刷毛目の後にヨコ方向のナデ調整を重ねる。**377**は免田式土器の壺胴部片である。外面の上位には，沈線が1条のみ見られる。外面はヨコ方向の刷毛目，内面はヨコ方向のナデ調整を実施する。なお外面下位には煤が付着する。

18号住居址内出土石器（第103図）

378は打製石鏃である。石材は黒曜石である。先端部と片脚部を欠損する。基部末端が尖る。なお縁辺は直線的な形状である。重量0.9gである。**379**は凝灰岩製の砥石である。上，下部分が欠損しているが，全長5.50cm，幅3.00cm，厚2.75cmを測る。研磨面は2面で，特に表面はよく使用されており斜方向の擦痕が見られる。



第104図　19号住居址実測図

(18)　19号住居址（第104図）

②—ⓓ区内，調査区中央部西側に位置している。削平によって床面までカットされており，柱穴のみの残存である。平面形はほぼ正方形と考えられ，残存規模は長軸方向4.5m，短軸方向3.6mを，主軸方向は東西，主軸方位はN—78°—Eを測る。主柱穴は4本であり，全ての柱穴に盤石，根固め石が入っている。PIT，1は方形の盤石と熔岩塊の根固め石3個を埋めており，柱穴の造りは2段の掘り下げを行なっている。PIT，2内の盤石は安山岩が用いられている。PIT，3は大型の盤石と熔岩塊が4個，PIT，4にも熔岩塊を用いて柱を支持している。

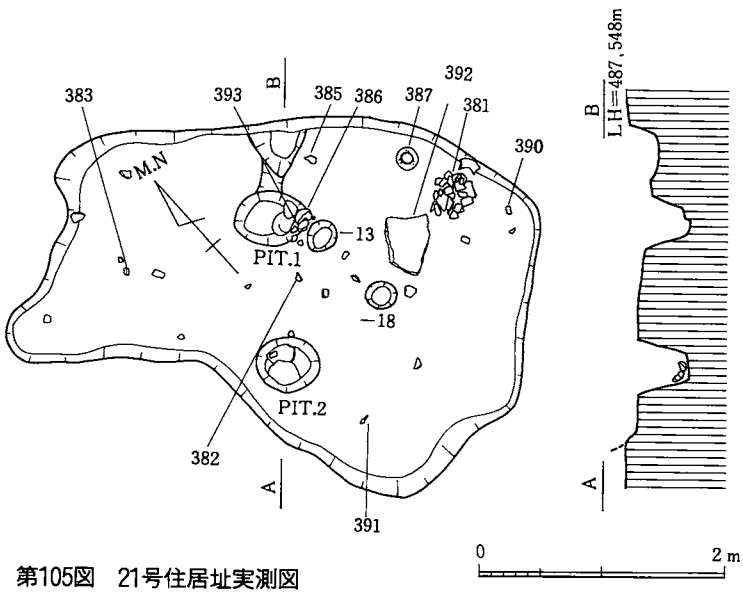
強い削平のため炉，貯蔵穴，ベッド状遺構などは確認されておらず，出土遺物は全く見られない。

(19)　21号住居址（第105図）

③・④—ⓓ区内，調査区南部の西側に位置している。22号住居址，4号溝を切っている。平面形態は不整形な雲形状であり，長軸（南北）方向は4.0m，東西方向2.9mを測り，床面積は8.4㎡と非常に小型である。主軸は2本の柱間を通る東西方向となり，その方位はN—44°—Eとなる。壁高は西側で10cm，その他の所でも7～8cmと浅く，隣接する22号住居址同様，強く削平を受けている。主柱穴は2本であり，PIT，1には熔岩塊が1個，根石として，PIT，2にも同様熔岩塊が1個盤石として用いられている。炉及びベッド状遺構は検出されていない。

住居址の覆土は茶褐色土の全1層である。

遺物の出土状況で上層の削平に対して，遺物の残存状況は良く，大型の遺物類が台石周辺部に集中している。番号を付して取り上げた資料29点中，図化したものは20点であり，ここに14点を掲載した。その内訳は土器類では甕2点，鉢4点，壺，脚台，杓子の各1点である。鉄器では鉄鏃，鉄斧各1点，石器では石鏃1台石各1点が出土する。また碧玉製管玉1点を出土する。出土の層位は下層から381，

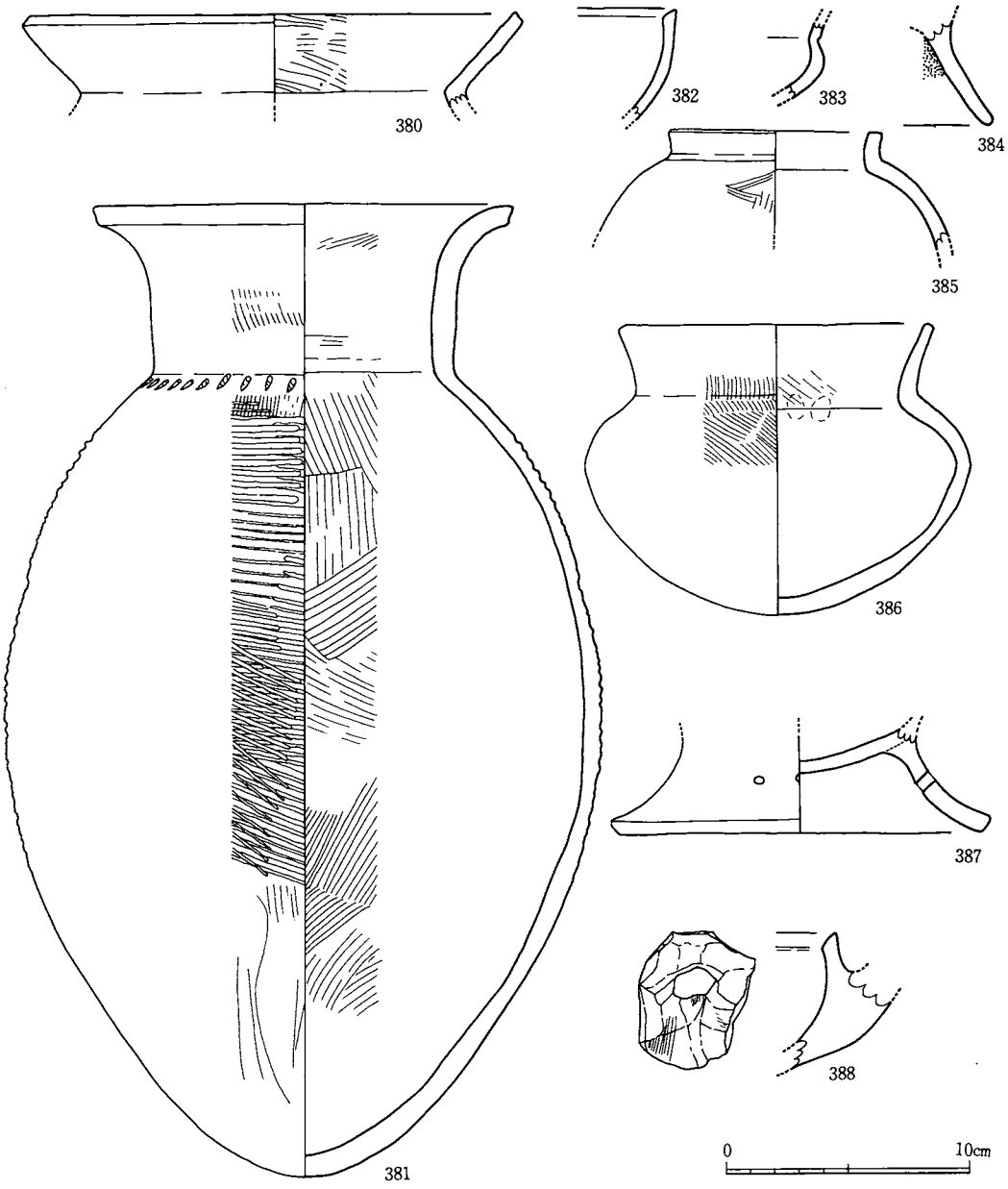


第105図　21号住居址実測図

382，384，385及び390，391の両鉄器も出土する。管玉もPIT．2に隣接しての下層からの出土である。住居址の廃絶に際しては、遺物類はほぼ原位置を保っていたものと判断される。

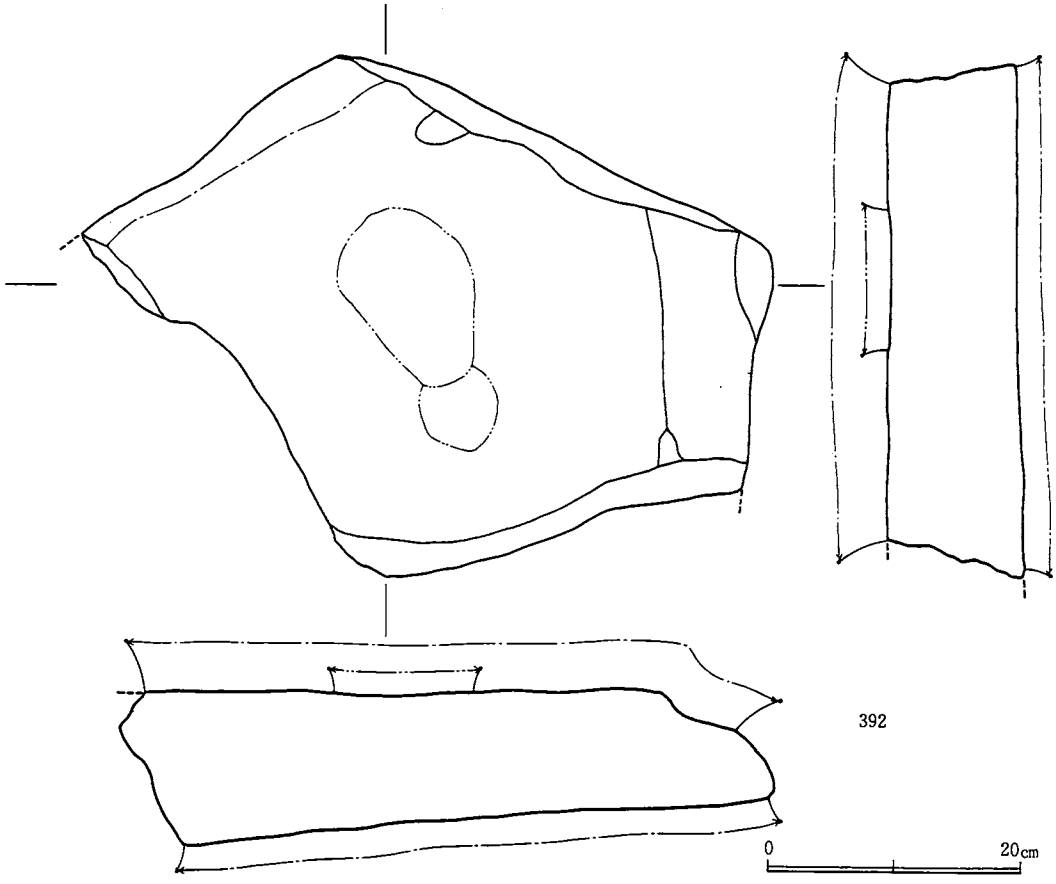
21号住居址内出土土器（第106図）

380は甕である。残存½での復元。外面には煤が付着しており，調整は不明。内面は斜方向及びヨコ方向の刷毛目調整である。**381**は完形の壺である。口径17.4cm，器高40.0cm，胴部最大径



第106図　21号住居址内出土土器実測図

24.9cmを測る。口縁部外面はタテ方向の刷毛目の後にヨコナデ調整を，胴部外面上位はタテ方向の刷毛目の上をヨコ方向に叩き目を施す。中位は斜方向の叩き目を，下位はヘラ状工具によりケズリ状の調整を施す。なお頸部境部には幅5mmの刻みが斜方向に定間隔で刻まれている。口縁部内面はヨコ方向の刷毛目の後にナデ調整を，胴部内面はタテないし斜方向の刷毛目調整を重ねる。なお底部は丸底である。**382**は鉢の口縁部である。残存1/6での復元であるが，底部は完全に欠損している。外面上位はヨコ方向の刷毛目調整を，下位は斜方向の強い刷毛目調

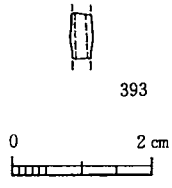


第107図　21号住居址内出土石器実測図

整を施す。内面はヨコ方向の刷毛目の後にナデで仕上げる。**383**は鉢の胴部片と思われる。外面上位はタテ方向の刷毛目調整を，下位は刷毛目の後にナデ消しで仕上げる。内面はヨコナデ調整である。**384**は甕の脚台片である。外面はヨコ方向のナデ調整，内面には砂粒が付着する。**385**は鉢である。残存⅛で復元するが，底部は完全に欠損する。口縁部は短く直立する。外面は斜方向の強い刷毛目の後にヨコ方向の刷毛目を重ねる。内面はヨコ方向のナデ調整である。**386**はほぼ完形の鉢である。残存⅙での復元となる。口縁部はタテ方向の刷毛目の後ヨコナデで仕上げる。胴部上位は斜方向の刷毛目を，下位はナデ調整のみである。口縁部内面は斜方向の刷毛目の後にナデ調整を行ない，一部指圧が残る。胴部内面はヨコナデ調整である。**387**は台付鉢である。鉢部は完全に欠損しているが，脚台部は完形である。脚部には径4㎜程度の穿孔が外側から内側に向かって施されており，これは2個で1対となり，計6個を数える。脚部外面及び内面はヨコ方向の刷毛目調整を，底部の内外面は不定方向のナデ調整を行なう。**388**は杓子である。把手部，坏部を欠損するが残存長5.7㎝を測る。外面はヘラ状の工具等で削り一部分はタテ方向の刷毛目調整を行なう。内面上位はヨコ方向のナデ調整を，中～下位はタテ及び斜方向の刷毛目調整を行なう。

21号住居址内出土鉄器，石器（第107図）

389は有抉の石鏃である。先端部が欠損するが残存長2.8㎝，最大幅1.6㎝，厚4㎜である。長軸に対して幅が広くなる。**390**は鉄製斧である。全長6.1㎝，幅2.7㎝，最大厚1.45㎝で完形であり，重量は43.85gを測る。刃部は鋭さを持って研ぎ出されている。袋部は斧全体を丸め込む状態で，両側端を約9㎜程折り込む。この部位の断面形は長惰円形であり，袋部は完結しない。木質の付着は確認されていない。**391**は有茎三角形式の鉄鏃である。完形であり全長7.7㎝，擡幅2.05㎝を測る。断面は頭部で4㎜，茎部で7㎜×4㎜で形状長方形を呈する。重量15.8g である。**392**は安山岩製の台石である。左側及び下側が欠損するが，残存は長方向55.0㎝，短方向41.5㎝，最大厚12㎝を測る。研磨は表裏2面とも施されており，表面の中央部には敲打の痕跡が2ヶ所見られる。重量32.0㎏である。



第108図　21号住居址内出土管玉実測図

21号住居址内出土管玉（第108図）

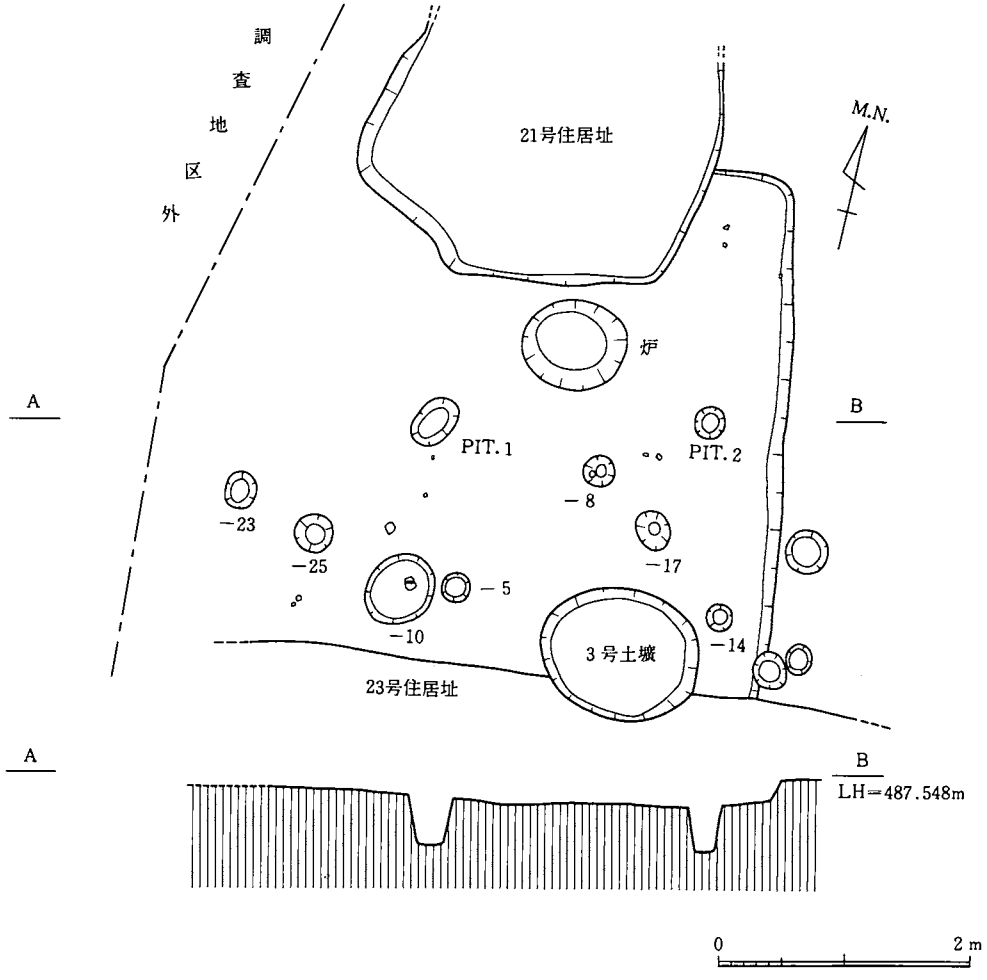
本住居址内の下層より1点管玉が出土している。**393**は全長6㎜，幅3.5㎜で断面形は正円に近い。穿孔の径は1.5㎜内外で，天地側ともほぼ同値である。碧玉製であり，色調は青緑色である。なお重量は0.08gである。

⑳　22号住居址（第109図）

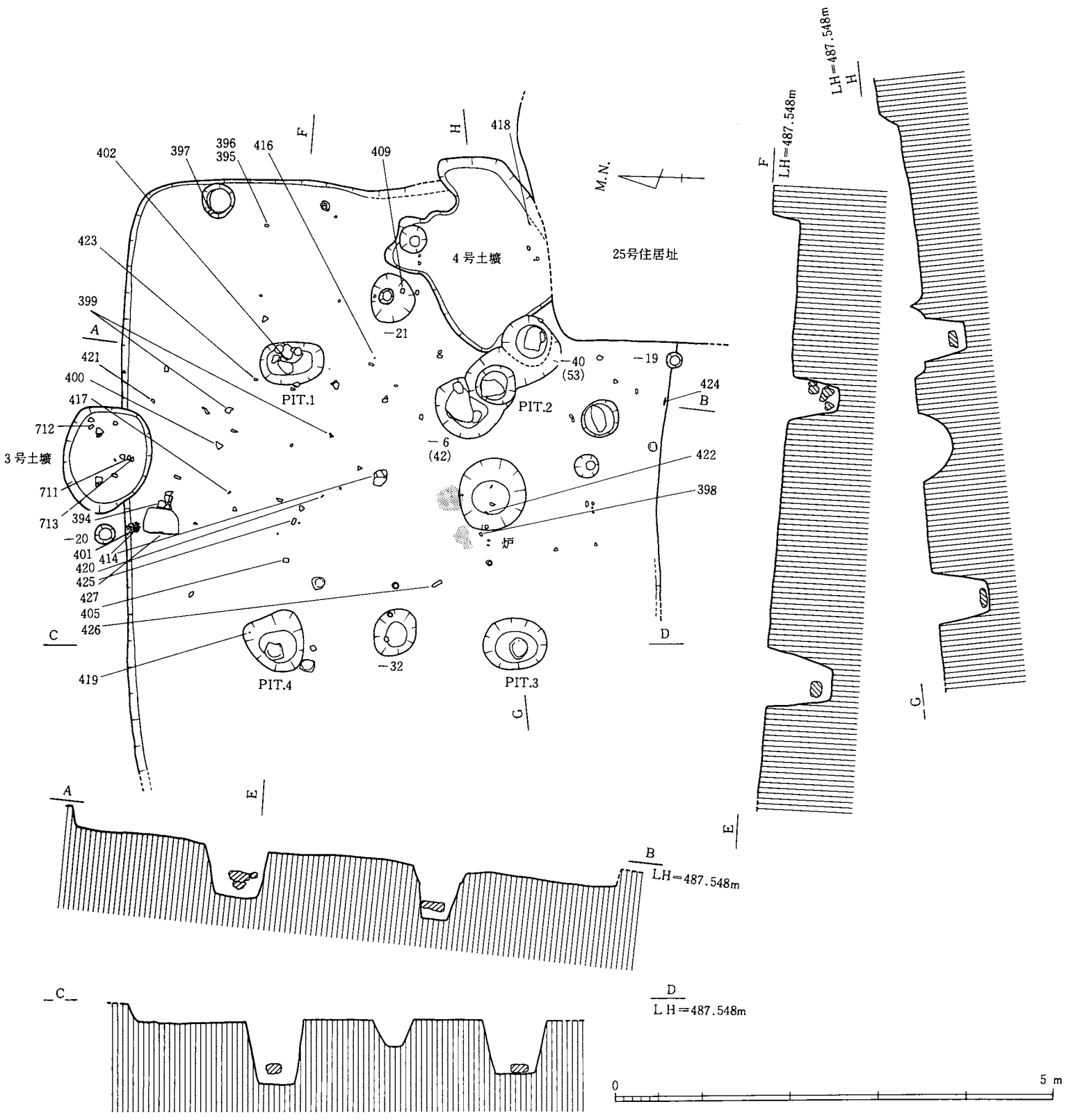
③・④—ⓓ区内，調査区の西側に位置している。21号，23号住居址，３号土壙に切られ，更に西側は床面に達する程の強い削平を受けている為に，平面形態は不明であるが，柱の位置関係から正方形を想定した。残存規模は長軸方向4.3m，短軸方向4.1m を測る。主軸方位はＮ－77°－Ｅとなる。削平のため壁高は東側で僅か15cmを残し，西側は完全に消滅している。炉は主柱穴間より少々離れた位置に１基あるが，カーボン等の散在はほとんど見られない。主柱穴は２本であるが，双方ともに20～50cm内外と非常に小型のものである。ベッド状遺構は調査区内では確認されていない。

住居址の覆土は黒褐色土の１層のみで，一部黄褐色土が混入する。

出土状況では薄い埋土内に，土器類の小破片が散在する。番号を付して取り上げた資料は６点であるが，実測に耐えるものはなく図化できなかった。破片は弥生土器終末時期の胴部片であった。



第109図　22号住居址・３号土壙実測図



第110図　23号住居址実測図

(21) 23号住居址（第110図）

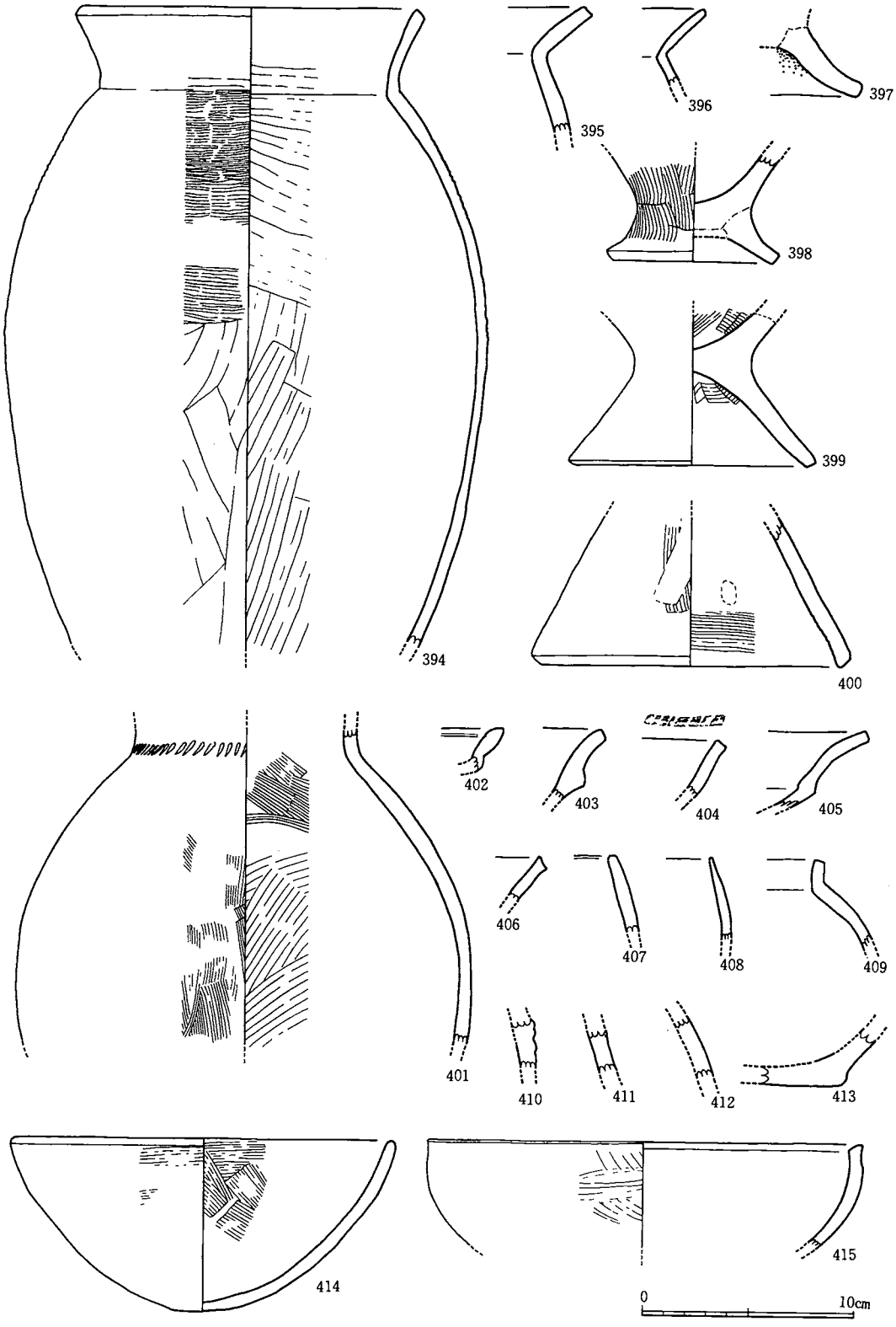
③・④－ⓓ・ⓔ区内，調査区南部の西側に位置している。22号住居址を切り，25号住居址及び3号，4号土壙に切られる。平面形態は直方形であり，残存規模は長軸方向6.7m，短軸方向6.1mを測る。西側部分については削平が床面にまで達し，遺構ラインはカットされており，壁高は最も残りの良い東側で，30cmを保つのみである。主軸方位は東西方向のN－89°－Wである。中央部よりやや南側に片寄った地点に1基炉が確認され，周辺部にマット状炭化物の薄い層が見られる。主柱穴は4本であり，そのいずれにも盤石及び根固め石が見られる。PIT，1には大型の盤石はなく小型（10～20cm角）の熔岩石が7個用いられている。PIT，2には周辺部に同規模の柱穴が2個確認され，そのいずれにも大型の盤石が埋まっている。柱間の通り及び最も深い柱穴を23号住居址の主柱穴として認定した。PIT，3及び4には20cm角の盤石が用いられており，それらはいずれも熔岩塊である。ベッド状遺構及び貯蔵穴は確認されていない。

住居址の覆土は全3層であり，上層より黒褐色土，黄褐色土混入の黒褐色土，黄褐色土となる。黄褐色土には一部炭化物を含む。

遺物の出土状況では住居址内全体に薄く遺物が散在するが，やや大型の資料は北側の台石周辺部に集中する傾向が見られる。番号を付して取り上げた資料80点中，図化できたものは　点あり，ここでは34点を掲載した。出土遺物の内訳は土器類では，甕8点，壺8点，鉢5点，高坏1点である。鉄器類では鏃5点，鎌2点，鋤もしくは鍬先と思われる鉄器が1点の出土となる。石器類では紡錘車1点，砥石2点，台石1点である。遺物の出土層位は，1層，2層中に小破片が入るが，台石付近に大型の土器類401，403，413，415等が集中する。最下層及び床直上の遺物としては405，406，410，411であるがいずれも細片であり，時期判定が難かしい。鉄器類では416，417の鉄鏃が2層出土で，419，425もこの層からのものである。421の紡錘車及び427の台石も下層からの出土でかる。多様な種類の鉄，石器の出土がこの住居址の特徴と言えよう。住居址の廃絶に際しては，台石付近の遺物を除いて，ほとんどが流れ込みの遺物であると考えられる。

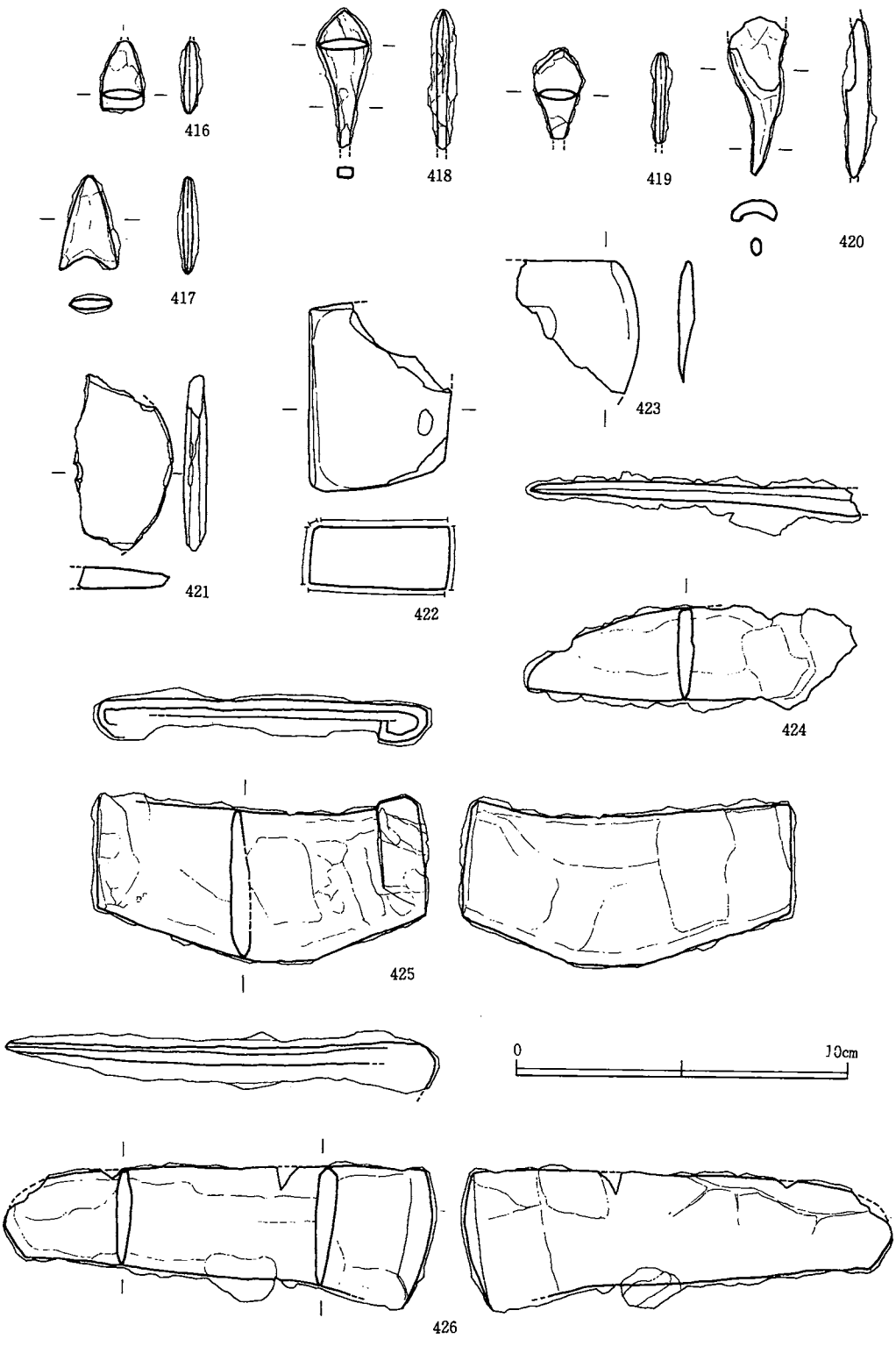
23号住居址内出土土器（第111図）

394はほぼ完形の甕である。底部は欠損するが口径16.6cm，胴部最大径23.6cm，残存高29.8cmを測る。口縁部外面は丁寧なヨコ方向のナデ調整を，胴部上～中位まではヨコ方向の叩き目を重ねるが，一部器壁が剝離する所が見られる。中～下位にかけてはタテ方向の強い刷毛目調整を行なう。口縁部内面はヨコ方向のナデ調整を施し，胴部内面は斜方向の強い刷毛目調整を方向を変えて施す。**395**は甕の口縁部片である。口縁部外面はヨコ方向のナデ調整，胴部外面はタテ方向の刷毛目の後にヨコ方向でナデ消す。口縁部外面はヨコ方向のナデ調整，胴



第111図　23号住居址内出土土器実測図

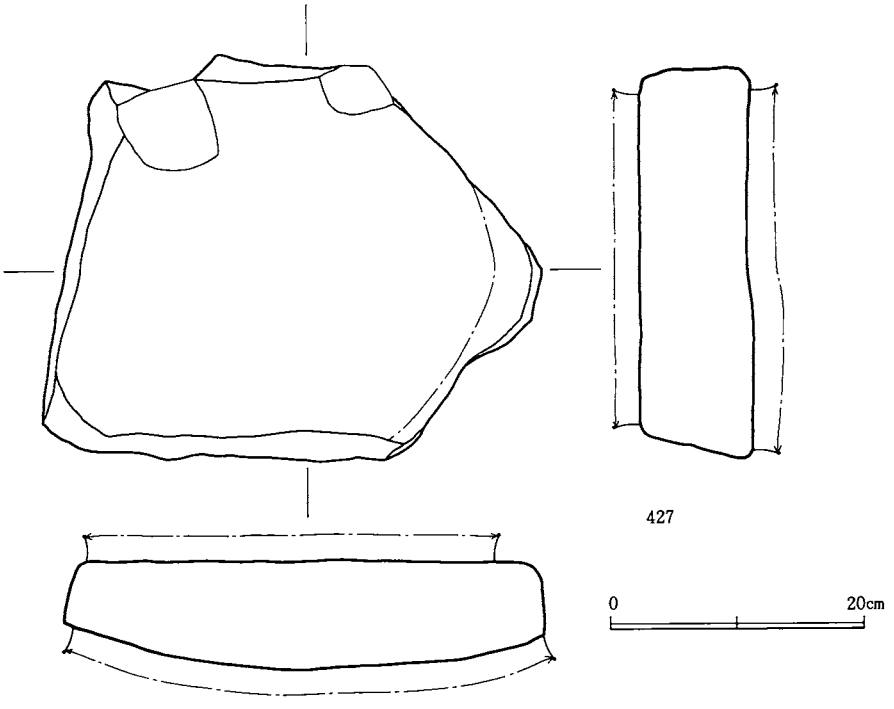
部外面はタテ方向の刷毛目の後にヨコ方向でナデ消す。口縁部外面はヨコ方向のナデ調整，胴部内面は斜方向の刷毛目の後にヨコ方向のナデ調整を施す。**396**は甕の口縁部である。口縁部外面はタテ方向の刷毛目の後にナデ調整，胴部外面はヨコ方向のナデ調整を施す。内面はヨコ方向のナデ調整を施す。**397**は甕の脚台片である。外面はタテ方向の刷毛目の後ヨコ方向のナデ調整を，内面には砂粒が付着する。**398**は甕の脚台片である。外面はタテ方向の刷毛目を，さらに下位はその後にヨコナデ調整を施す。底部内面は不規則なナデ調整と指圧による調整を行なう。脚内面はヨコ方向のナデ調整を施すが，一部剝離している。**399**は甕の脚台部である。外面はヨコ方向のナデ調整を，脚台内面は刷毛目調整を施し，下位はその後ヨコ方向のナデ調整を行なう。底部内面は刷毛目の跡が残る。**400**は甕の脚台部である。口径は15.1cm，残存高は 7.1cmと高い。外面はタテ方向の刷毛目の後にヨコ方向のナデ調整を施す。内面はタテ方向のナデ調整を，下位は深い刷毛目調整が残る。**401**は壺の胴部である。胴部最大径は21.6cm，残存高は14.9cmを測る。外面は頸部に幅 7mmの連続した刺突文を施している。外面の調整はタテ方向の刷毛目の後にヨコ方向のナデ調整を施す。内面では上位に小単位の刷毛目の後，ヨコ方向のナデ調整を行なう。中位は上位よりも太めの単位の原体による刷毛目調整を行なう。**402**は鉢の口縁部片である。口縁部は肥厚する。内外面ともヨコ方向のナデ調整を行なう。**403**は壺の口縁部片である。口縁部外側には粘土の隆起が見られる。外面はヨコ方向のナデ調整，内面はタテ方向の刷毛目の後ヨコ方向のナデ調整。**404**は口縁端部に刻み目が入る壺の口縁部片である。外面はヨコ方向のナデ調整，内面はヨコ方向のナデ調整。**405**は高坏の口縁部片である。外面上位はヨコ方向の刷毛目の後にヨコ方向のナデ調整を，さらに下位はヘラによる研磨を行なう。内面はヨコ方向の刷毛目の後にヘラ研磨を重ねる。**406**は甕の口縁部片である。内外面ともヨコ方向の刷毛目の後に，指圧によるナデ調整で仕上げる。**407**は鉢の口縁部と考えられる。内外面ともヨコ方向の丁寧なナデで仕上げる。**408**は鉢の口縁部片である。外面には一部煤が付着するが，斜方向の刷毛目の後，ヨコ方向のナデで仕上げる。内面はヨコ方向のナデ調整。**409**は短く直立する壺の口縁部片である。外面はヨコ方向の刷毛目の後にヨコ方向のナデ調整を行なう。内面は上位にヨコ方向のナデ調整を，下位に指による押圧を施す。**410**は胴部片であるが，器種は不明。ヨコ方向のナデ調整の他に上下方向のヘラ状工具による切り取りの沈線が認められる。内面はヨコ方向のナデ調整である。**411**は壺の胴部片である。上位に円形棒状工具による連続刺突が見られる。間隔は約3mmで，外面調整はヨコ方向のナデ，内面はヨコ方向の刷毛目の後，ナデ調整を行なう。**412**は壺の胴部片と考えられる。外面はタテ方向の刷毛目の後ヨコナデを施し，一部流水文が見られる。なお赤色顔料が塗布されている。内面は剝離のため調整不明。**413**は壺の底部片である。外面はヨコ方向のナデ調整を底部は刷毛目の後にナデ調整を行なう。**414**は鉢である。ほぼ完形であり，口径18.3cm，器高 8.3cmを測る。底部はやや尖底となる。外面はヨコ方向のナデ調整。内面上位はヨコ方向の刷毛目の後に斜方向の刷毛目調整を重ねる。下位はヨコ方向のナデ調整を施す。



第112図　23号住居址内出土鉄器・石器実測図

23号住居址内出土鉄器，石器（第112,113図）

416は無茎の鉄鏃である。完形品であり，全長2.0cm，幅1.3cm，厚4.5mmを測る。重量は2.0gである。三角形状の平基状に属するものである。**417**は無茎の三角鏃である。416に比べやや大型の完形品である。全長2.9cm，幅1.8cm，厚3mmで，重量は2.55g を測る。基部に三角形の抉りを持つ形態である。**419**は有茎三角形式の鉄鏃である。茎部は完全に欠損しており，残存長 2.7cm，幅1.5cm，頭部厚3.5mmを測る。関部に段を有さない形式の鏃と考えられる。**420**は形態不明の鉄器である。頭部が欠損するが，全長4.4cm，幅1.6cmを測る。断面形では頭部は浅いU字形をなしており，茎部はほぼ円形である。**421**は石製の紡錘車である。石材は粘板岩で，左部分が欠損しているが，残存長は5.30cm，幅3.00cm，厚7mmである。両面とも良く研磨されており，左側には穿孔の一部が見られる。**422**は凝灰岩製の砥石である。右上部が欠損するが，全長5.60cm，幅4.40cm，厚1.9cmを測る。研磨面は6面であり，よく利用されている。**423**は石包丁の破片である。珪質粘板岩製であり左側部分の大半が欠損している残存長3.60cm,幅3.70cm,厚5mmである。**424**は鉄製鎌である。柄部は欠損しているが，残存長9.9cm，刃部中央部の幅2.2cm，厚4mmを測る。刃部はほぼ直線的であり，柄部付近でやや拡がる。背部はゆるく内曲しており，末端部は不明である。折り曲げ等の痕跡は見られない。**425**は鉄製の鋤もしくは鍬先と考えられる。完成品で



第113図　23号住居址内出土石器実測図

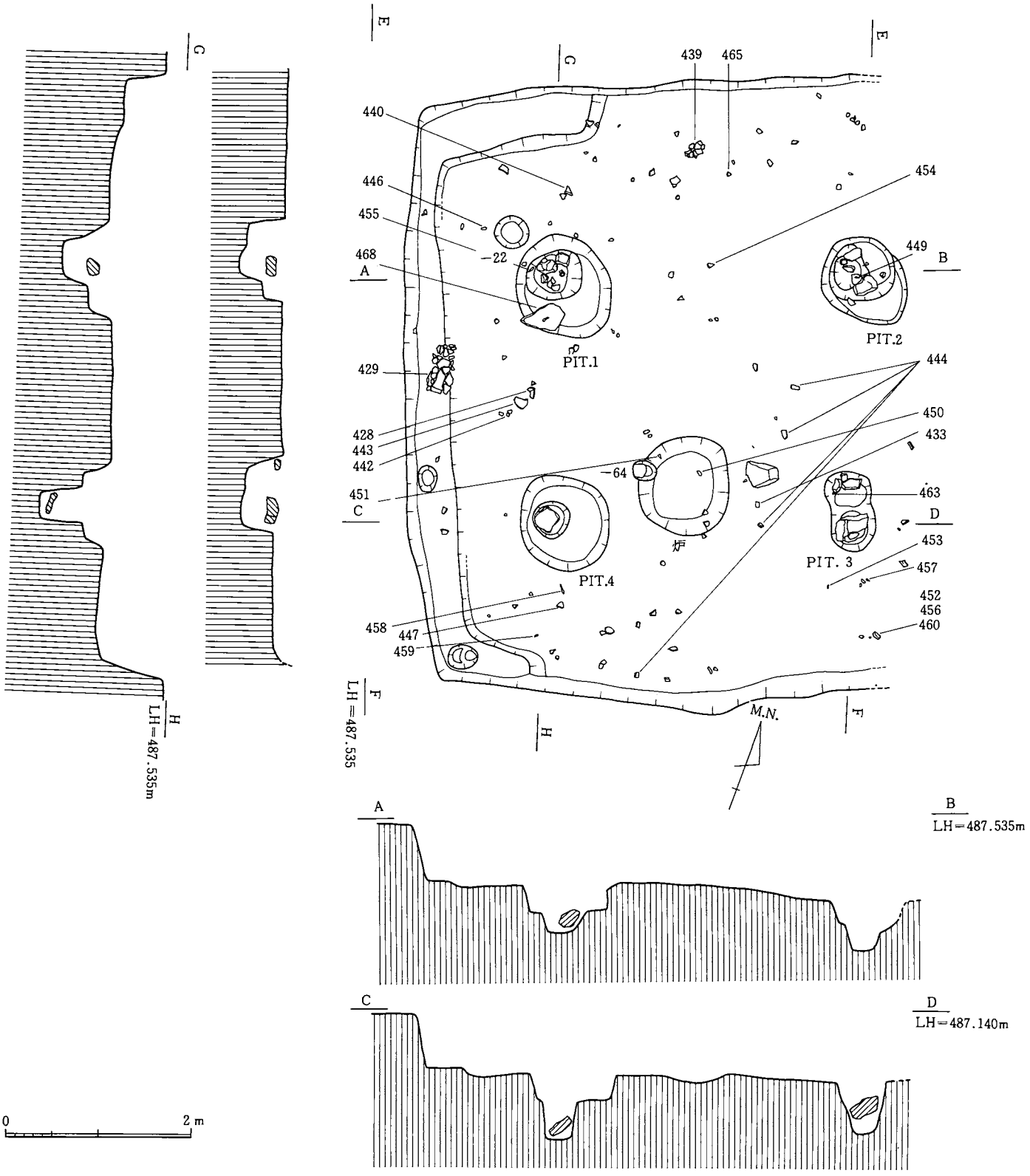
あり，刃部側の全長10.0cm，背部側全長9.8cm，幅4.5cmを測る。刃部は中央部がつき出した形状をなしており，中央部には背部と平行する箇所も1.8cm程ある。背部はやや内湾気味であり，両側面は先端1.5cmを袋状に折り曲げて袋部を造り出している。本体の縦断面は背部は鋭く，刃部は鋭角にはなっているものの5mmとやや鈍い。表面には錆が付着するが重量は92.5g である。**426**は鉄製の鎌である。ほぼ完形品であり，全長13.0cm，幅4.3cmを測る。鋒部は鋭角状に尖っており，刃部は中程までは直線的であるが，折曲して柄部に至る。背部は内湾気味となっており，柄部では先端部を折り込んで装着できるように造り出す。本体の縦断面では鋒側の方が薄く厚5mm，柄側7mmとなる。424に比べて本資料の方が刃部の形状は鋭さを有している。重量75.7g である。**427**は安山岩製の台石である。長方向39.6cm，短方向31.6cm，最大厚8.5cmを測る。研磨面は2面であり，表面の方が研磨の状況が良好である。裏面は石材自体が湾曲しており，研磨よりも敲打痕が残る。総重量16.1kg である。

(22)　24号住居址（第114図）

②・③—ⓓ・ⓔ区内，調査区南部の中央部に位置する。18号住居址に北東側を，32号住居址に東側を切られ，29号，30号住居址を切る。想定される平面形態はほぼ正方形を呈すると思われ，残存規模は長軸（東西）方向5.5m，短軸（南北）6.9m を測る。平面形はほぼ正方であろうと考えられるが，周辺の住居址の主軸方向を参照すると，東西方向が主軸方向と考えられ，その方位はN－71°－E となる。壁高は南側で70cm，西側で60cmを測る。ベッド状遺構は北西側から西側を通り，南西側へと幅30～40cmで細長く[状に造られており，その落差は8～15cmである。炉は中心よりやや離れて径100cmの大型のものが造られており，隣接する小柱穴は床面から－70cmと深く，炉側に内傾し検出されたため炉の付属の遺構と考えられる。なお周辺部にカーボン等の散在は見られない。主柱穴は大型の掘り方を持つ2段掘りであり，柱部分については更にもう一段掘り下げを行なう。PIT，1の掘り方の径は1.2m を測り，柱部分には熔岩製の石を7個盤石として用いている。PIT，2は掘り方の径が1.1m で，途中でステップを持ち，柱部分には熔岩塊を10個用い柱を固定している。PIT，3は径50cmの柱穴が2基並列したものであるが，双方ともに安山岩製台石片や熔岩塊を盤石等に使用しており，柱の建て替えも想定されうる。実測図中では柱の並びの良い南側の柱穴を用い図化している。PIT，4の掘り方径は1.0m，その深さは床面から－90cmを測り4本の主柱穴内では最も深く，盤石も32×30×15cmと最も大型である。なお貯蔵穴は確認されていない。以上の如く主柱穴の状況ならびに住居址の平面規模をとっても，24号住居址は本遺跡内で中心となる住居址と考えられる。

住居址の覆土は3層からなり，上層より茶褐色土，明茶褐色土，黒褐色土となる。なお部分的には黄色ロームを斑点状に含む層も一部見うけられる。

遺物の出土状況では住居址内部に全般的に広く散在するものの，大型のものは西側ベッド状

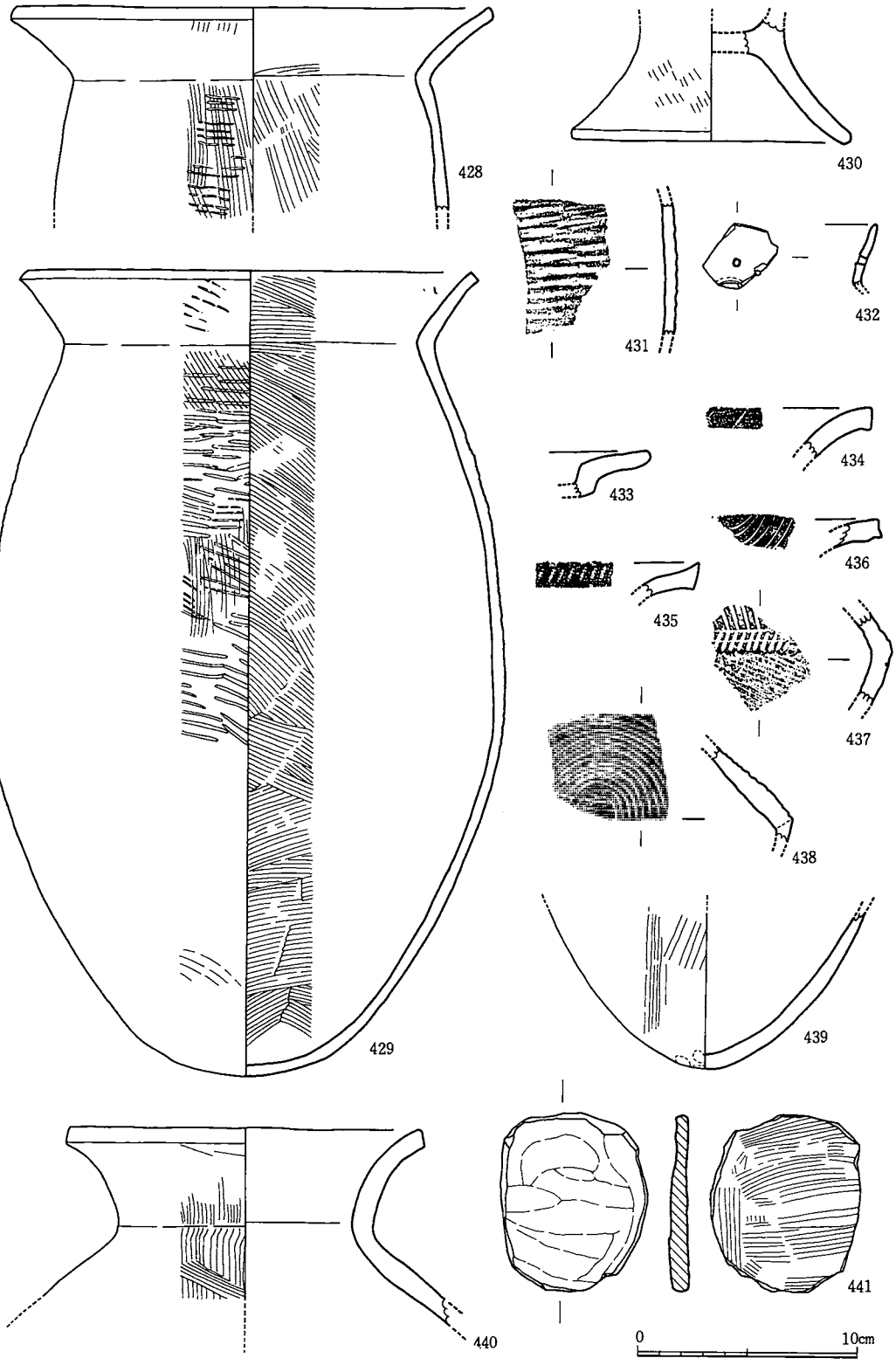


第114図　24号住居址実測図

遺構付近にまとまる。番号を付して取り上げた資料99点のうち，ここでは41点を掲載した。出土遺物の内訳は土器類では甕４点，壺12点，鉢２点，高坏及びメンコ形土製品各１点であり，甕に対しての壺片の量が多い。鉄器では鉄鏃７点，刀子４点，鉇１点，手鎌３点となる。石では石鏃１点，石包丁１点，砥石３点，台石１点となり，鉄器の出土量がずば抜けて多い。遺物の出土層位では２層中よりのもの，即ち土器では430，433，439，440，446，447であり，鉄器では448，451～453，455～457，459，460である。最下層，ピット内出土のものは431，434の土器及び449，458，460の鉄器である。鉄器類が下層中から出土するのも特徴と言えよう。また463，464，468も２層中より出土する。住居址の廃絶に際してはピット上面，及び床面の資料のみが原位置を保っていたものと考えられ，残りの資料は全て西側からの流れ込みによるものと考えられる。

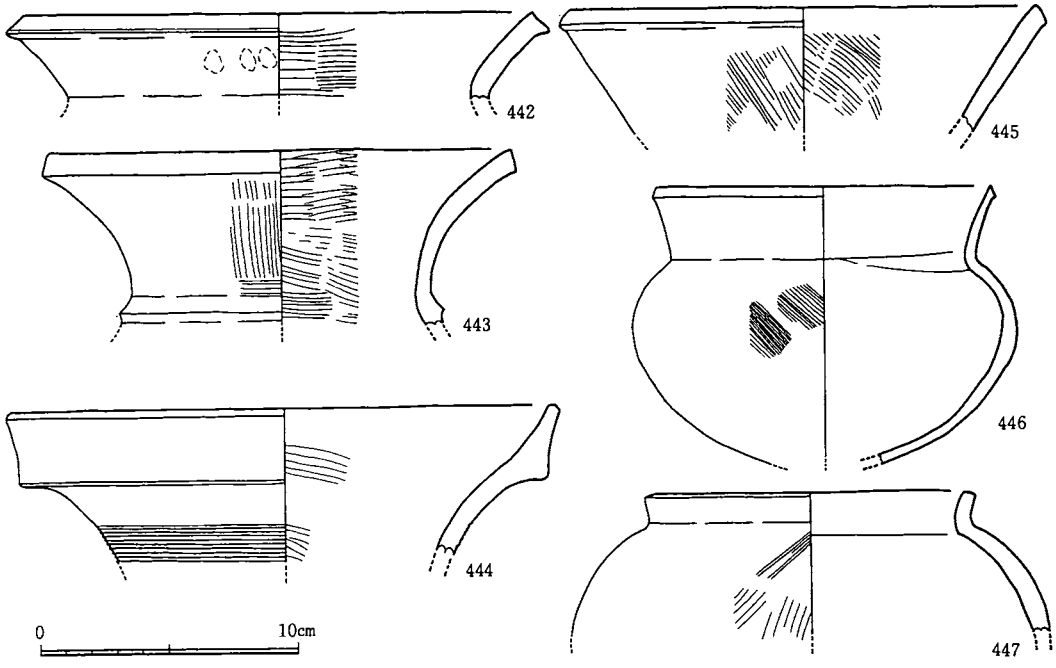
24号住居址内出土土器（第115，116図）

428は甕である。残存⅙での復元。口径22.0cm，残存高9.3cmを測る。口縁部外面はタテ方向の刷毛目の後にヨコ方向のナデ調整を行なう。胴部外面はヨコ方向の叩き目を施し，その後タテ方向の刷毛目調整を重ねる。口縁部内面はヨコ方向の刷毛目の後，ナデ調整を施す。胴部内面は斜方向の刷毛目調整を施す。**429**は完形の甕である。口径20.9cm，器高36.4cm，胴部最大径23.6cmを測る。口縁部外面は斜方向の刷毛目の後に強いヨコナデで消す。胴部外面にはヨコ方位を基調とする叩き目を施す。さらにこの後に，上位では斜方向の刷毛目を，中位では部分的にタテ方向の刷毛目調整を重ねる。下位ではタテ及びヨコ方向のナデ調整を行なう。口縁部内面はヨコないし斜方向の刷毛目を，胴部内面は斜方向の刷毛目調整を重ねる。**430**は甕の脚台である。外面は斜方向の刷毛目の後，ヨコ方向のナデ調整。内面は丁寧なヨコナデ調整，脚台内面は不定方向のナデ調整を行なう。**431**は甕の胴部片と考えられる。外面はヨコ方向を基調とした叩き目を重ね，内面は斜方向の刷毛目調整となる。**432**は壺の口縁部片である。器壁は薄くわずか３mmであり，口縁部は外反し立ち上がる。焼成前に径３mmの穿孔が2個，外面から内面に向かって施され，右側箇所が破損する。内外面とも手ずくねで整形を行なう。**433**は高坏の口縁部である。口縁部の屈折後の口唇部の延びは短かい。外面はヨコ方向の刷毛目の後，ヨコ方向のナデ調整。内面は一部ヨコ方向の刷毛目の後，ヨコ方向のナデ調整で仕上げる。**434**は壺の口縁部片である。外面はヨコ方向の刷毛目の後ヨコナデで仕上げる。内面はヨコ方向のナデ調整である。口唇部には斜方向の刻み目を12mm内外で施す。**435**は壺の口縁部片である。外面にはヨコ方向の刷毛目調整，内面はヨコ方向の刷毛目の後ナデ調整を施す。口唇部には斜方向の刻み目を，4.5mm間隔で施す。なお刻み目には板具の木口部木質面が見られる。**436**は免田式の壺もしくは高坏の口縁部である。外面にはヨコ方向のナデ調整を，内面には口縁端部側から内側に向かって重弧文を施す。沈線は２本を１単位として，計８本である。**437**は免田式土器の壺の胴部

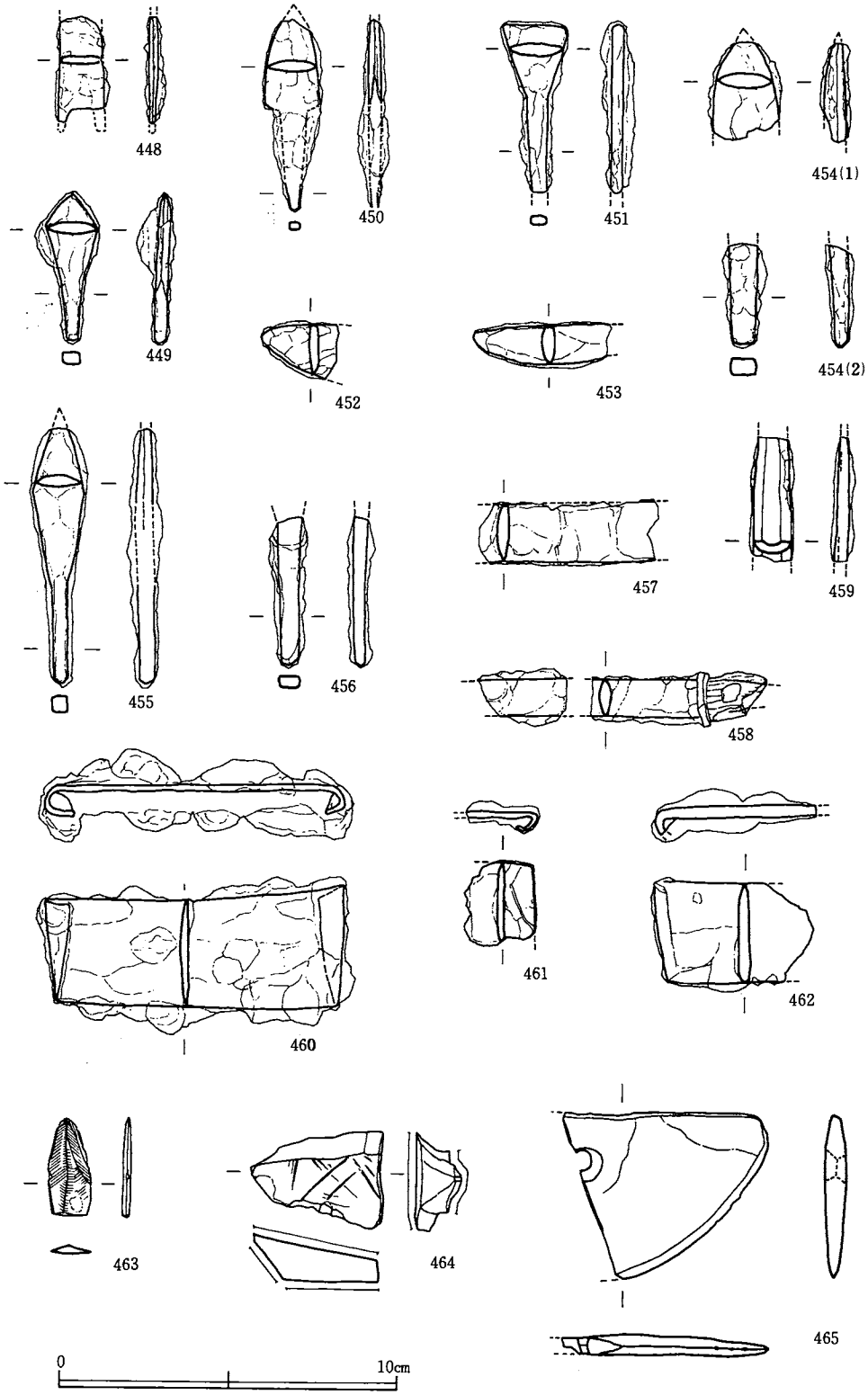


第115図　24号住居址内出土土器実測図（その１）

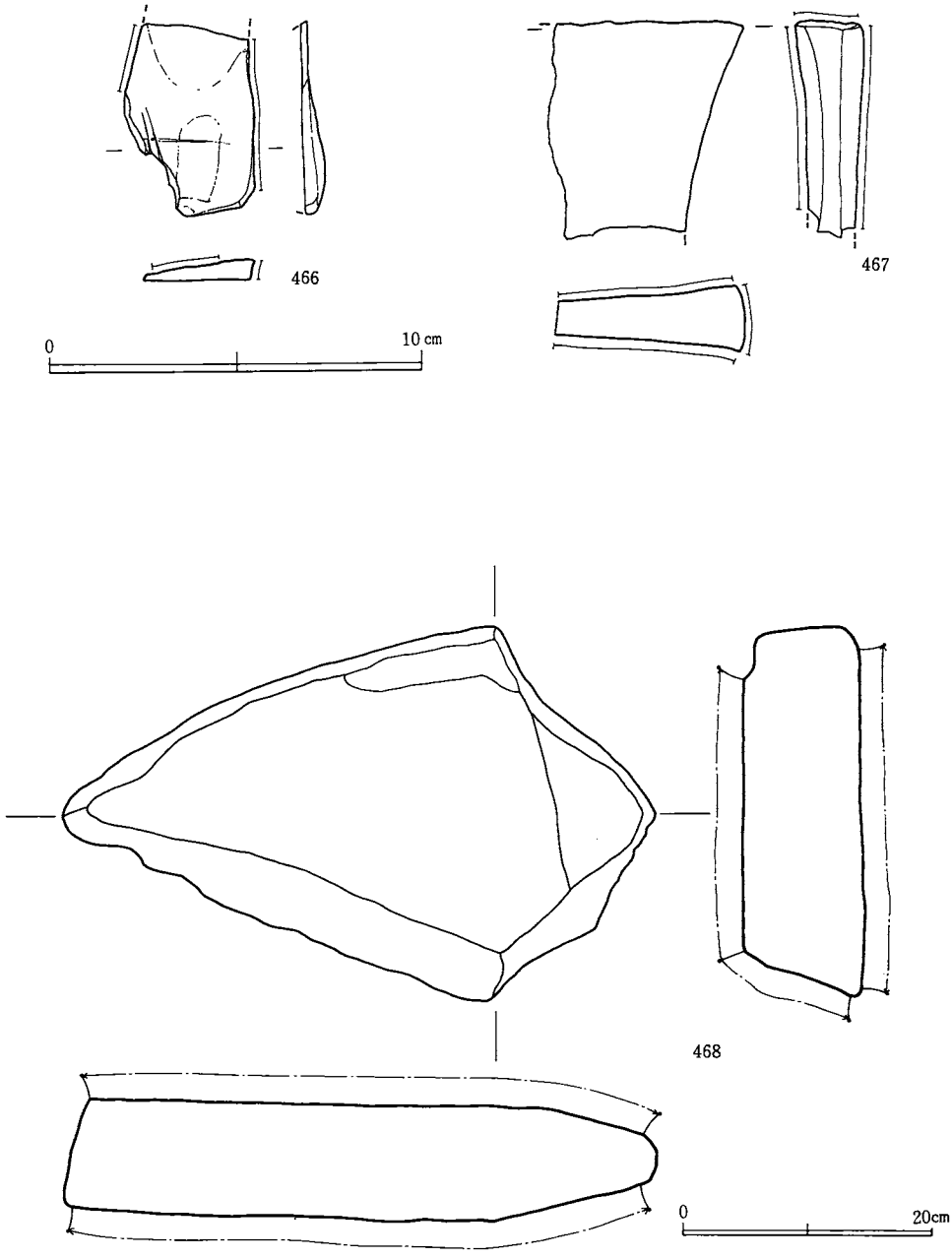
片である。外面上位には重弧文が見られ，ヨコ方向に2本の沈線を有する。沈線の後に左上から右下へ第1本目の横沈線の位置まで描き，その後逆に右上より左下へと条線を描く。外面下位及び内面は斜方向の刷毛目調整を施す。**438**は免田式土器の壺胴部片である。外面上位にはまずヨコ方向に2本の沈線を引く。14本の円孤状の沈線を1本ずつ手描きで描く。内面は指圧による調整を加える。**439**は甕の底部である。外面はタテ方向の刷毛目調整，下位は指圧の痕跡が見られる。なお煤が全面に付着する。内面は刷毛目も一部見られるが，ナデ消しのため単位は不明。**440**は壺である。口径16.3cm，残存高10.1cmを測る。外面上位はタテ方向の刷毛目の後，ヨコ方向でナデ消す。下位はタテ方向の刷毛目の後に斜方向の刷毛目が重ねられる。内面はナデ調整を行ない，部分的に指圧が残る。**441**はメンコ形土製品である。長方向8.0cm，短方向6.7cm，最大厚8mmを測る。外面には刷毛目調整，内面は指圧による整形である。側端部は面取りがなされる。重量59.9g である。ジョッキ形土器の底部を転用したものと考えられる。**442**は壺である。残存1/8での復元である。外面はヨコ方向のナデ調整を施すが，部分的に指圧が残る。内面はヨコ方向の刷毛目の後，ナデ調整で仕上げる。**443**は壺である。外面には突帯を有しておりその付近はヨコナデ調整，他はタテ方向の刷毛目調整を施す。内面はヨコ方向及び斜方向の刷毛目調整を重ねる。**444**は壺である。口径21.6cm，残存高 6.0cmを測る。残存1/5での復元。外面はヨコ方向のナデ調整を，下位には9条の沈線を施す。内面には斜方向の刷毛目の後ヨコ方向のナデ調整を施す。**445**は鉢である。外面は斜方向の刷毛目調整，内面は斜方向の刷毛目調整の後，上位はヨコ方向のナデ調整を行なう。**446**は鉢である。底部が一部欠損するが，ほぼ完形であり，



第116図　24号住居址内出土土器実測図（その2）



第117図　24号住居址内出土鉄器・石器実測図



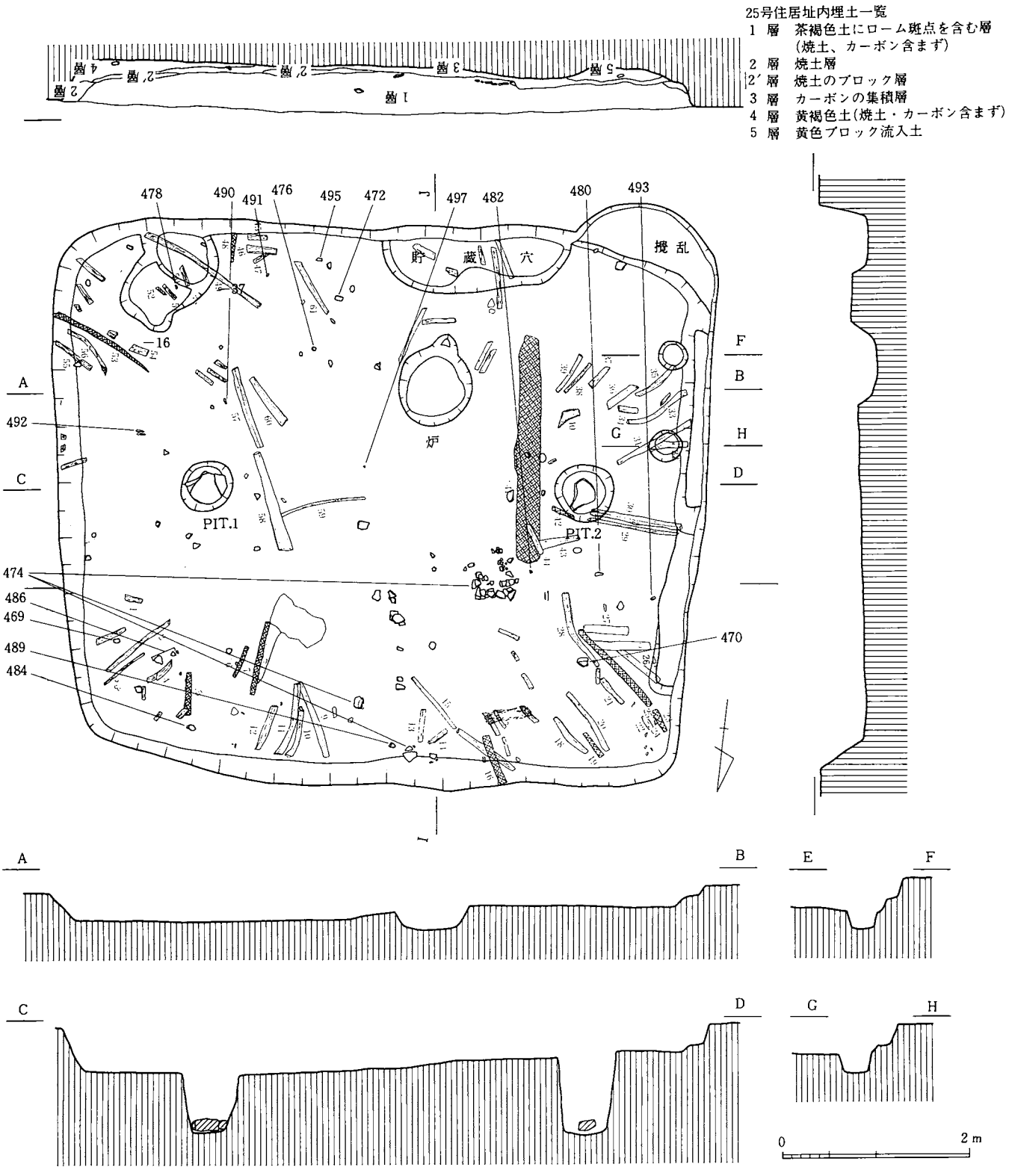
第118図　24号住居址内出土石器実測図

残存¼での復元である。口縁部外面はヨコ方向の刷毛目の後ナデ調整。胴部上位は斜方向の刷毛目調整を，下位は不定方向のナデ調整である。口縁部内面はヨコ方向のナデ調整，胴部内面は不定方向のナデ調整となる。**447**は鉢である。残存⅙での復元。口縁部は内外面ともナデ調整。外面は斜方向の刷毛目の後に，ナデ調整を加える。内面は指圧による調整となる。

24号住居址内出土鉄器，石器（第117，118図）

448は鉄鏃である。鋒部と基部が欠損しており残存長3.1cmを測る。基部には⌐形の抉りが入る。基部幅14mmに対し，残存頭部幅が13mmとほぼ変わらない事から，鏃身はさらに長く延びるものと考えられる。最大厚は3mmと薄い。**449**は有茎の鉄鏃である。完形であり，全長4.5cm，幅1.5cmを測る。圭頭形であるが関部を造り出さないタイプである。頭部厚4mm，茎部の断面形は長方形を呈し5.5mm×4.0mmである。多量の錆が付着するが，重量4.85g である。**450**は有茎の鉄鏃である。鋒先端部が欠損し，茎部に多量の不純物が付着する。明瞭に関部を造り出し，関は内湾気味となる。頭部厚は4mm，茎部断面は長方形を呈し4mm×2mmである。錆が付着するが重量8.55g である。**451**は有茎の鉄鏃である。茎部端が欠損するが，残存長4.9cm，幅1.9cmを測る。頭部厚は4mmと厚く，鋒部が平行で広根となる。茎部の断面形は長方形で5mm×3mmである。**452**は鉄製刀子である。鋒部のみの残存で，残存長はわずかに2.3mmを測るのみである。刃部は鋭さを持ち，背部厚は3mmを測る。**453**は鉄製刀子である。柄部側が欠損し，残存長4.15cm，幅1.3cmを測る。背部に対して刃部は内湾気味となる。刃部先端部は鋭利であるが，背部の厚はあつく4mmを測る。**454**は有茎の鉄鏃と考える。同一箇所から二片同時に出土したため，接点は見い出せないが，同一個体と考えた。中央部が欠損しているため関の有無及び形状は判明しない。頭部厚は4.5mm，茎部は断面長方形で7mm×5mmを測る。**455**は有茎の鉄鏃である。鋒の先端部が欠損するが，残存長7.5cm，幅1.5cmを測る。長軸に対しての幅は狭く細身である。頭部厚4.5mm，茎部断面形は正方形で，厚は5mmとなる。**456**は鉄鏃の茎部片である。関部付近で破損しており，残存長4.5cmを測り，茎部断面形は長方形で6mm×4mmとなる。**457**は鉄製刀子片である。鋒部及び柄部側が欠損し，身中央側のみ残存する。残存長5.3cm，幅1.8cmを測る。断面形は刃部側が鋭利であり，背部及び中身部側が肥厚する。**458**は鉄製刀子である。鋒側及び柄部の先端部が各々欠損するが，柄部には木質が残存する。残存長7.9cm，幅1.6cmを測る。柄部には木材が差し込まれた状態で確認されており，木材端部には鍔状に造り出す。断面形では刃部が鋭さを持ち，中身部が最も肥厚する。**459**は鉄製鉈である。鋒先端部及び下部側が欠損する。ほぼ直線的で，残存長3.7cm，幅1.2cmを測る。断面形は非常に浅いU字形で厚3.5mmである。**460**は完形の鉄製手鎌である。背部長8.8cm，刃部長8.3cm，中央部での幅3.1cm，右側端部幅3.6cmを測る。身部はほとんど直線的であり，左右端部を各々7～8mm折りまげて袋部を造り出す。刃部，背部は鋭利さを持ち，中央部が最もふくらみ2.5mmを測る。**461**は鉄製手鎌である。右上

(454(1)-(2))



第119図　25号住居址実測図

部のみの残存で，残存長2.45cm，幅2.10cmを測る。側端部は7mm程折り曲げて袋部を造り出す。最大厚は2mmである。**462**は鉄製手鎌である。右側部分を完全に欠損し，残存長4.7cm，幅3.1cmを測る。身部はほぼ直線的であり，袋部も折りまげるが先端は欠損する。刃部に鋭利さは見られず，幅3.5mmを測る。**463**は磨製石鏃である。左側縁部が欠損するがほぼ完形で全長2.9cm，幅1.25cm，最大厚2.5mmである。基部に抉りを持たず，身側に対し幅がやや広い。重量1.05gである。**464**は凝灰岩製の砥石である。欠損片であり，残存長3.80cm，幅2.90cmを測る。研磨面は3面であり，特に表面には線条痕等が明瞭に残る。**465**は石包丁である。材質は結晶片岩製。左半分を欠損しており，残存長は6.10cm，幅4.80cm，最大厚6mmを測る。全体形として背部は直線的であるのに対し，刃部は外湾し，半月形を呈する。刃部には使用痕が見られる。**466**は凝灰岩製の砥石である。上部が欠損し裏面が剝離する。研磨面は3面となる。**467**は凝灰岩製の砥石である。下部側が欠損するが，残存長5.80cm，幅5.10cmを測る。研磨面は4面である。**468**は安山岩製の台石である。菱形を呈しており，長方向47.8cm，短方向30.1cm，厚9.6cmを測る。表裏面及び側面が利用されている。重量15.65kgである。

(23) 25号住居址（第119図）

③・④—ⓔ・ⓕ区内，調査区南端に位置している。26号，28号，29号住居址を切っている。平面形態は直方形で，規模は長軸方向6.9m，短軸方向5.9m，床面積35.8㎡を測る。主軸方向は東西で，その方位はN－82°－Eとなる。壁高は北側で50cm，東側で45cmを測り，周囲の状況から判断して西側部分も削平を受けていたものと思われる。主柱穴は2本でありともに盤石を持つ。PIT，1は柱穴の上端径55cmで，50cm×40cmの熔岩製の平石を1個埋めている。PIT，2は柱穴の規模がPIT，1とほぼ同じであるが，より小型の熔岩塊を利用している。住居址の西側の一辺には細長いステップ状の遺構が造られており，特にステップが明確な段差として造られる箇所では，住居址内側に2個の小柱穴が見られる。小柱穴は上端径30～35cm，深さは床面から20cmでほぼ2個は同一規模である。17号住居址同様，住居址の出入口の施設と思われる。炉は中心からやや南側に偏在した位置に1基，さらにその南側には貯蔵穴が見られる。ベッド状遺構は確認されていない。

住居址の覆土は4層に分かれる。1層は茶褐色土にロームの斑点を含む層で焼土，カーボンはほとんど含まない。2層は焼土層，3層はカーボンの集積層であり，両層ともに焼失家屋の柱材を含む層となる。4層は住居址の壁側に一部見られるのみの薄い層の茶褐色粘質土で，これにもカーボン等は含まない。

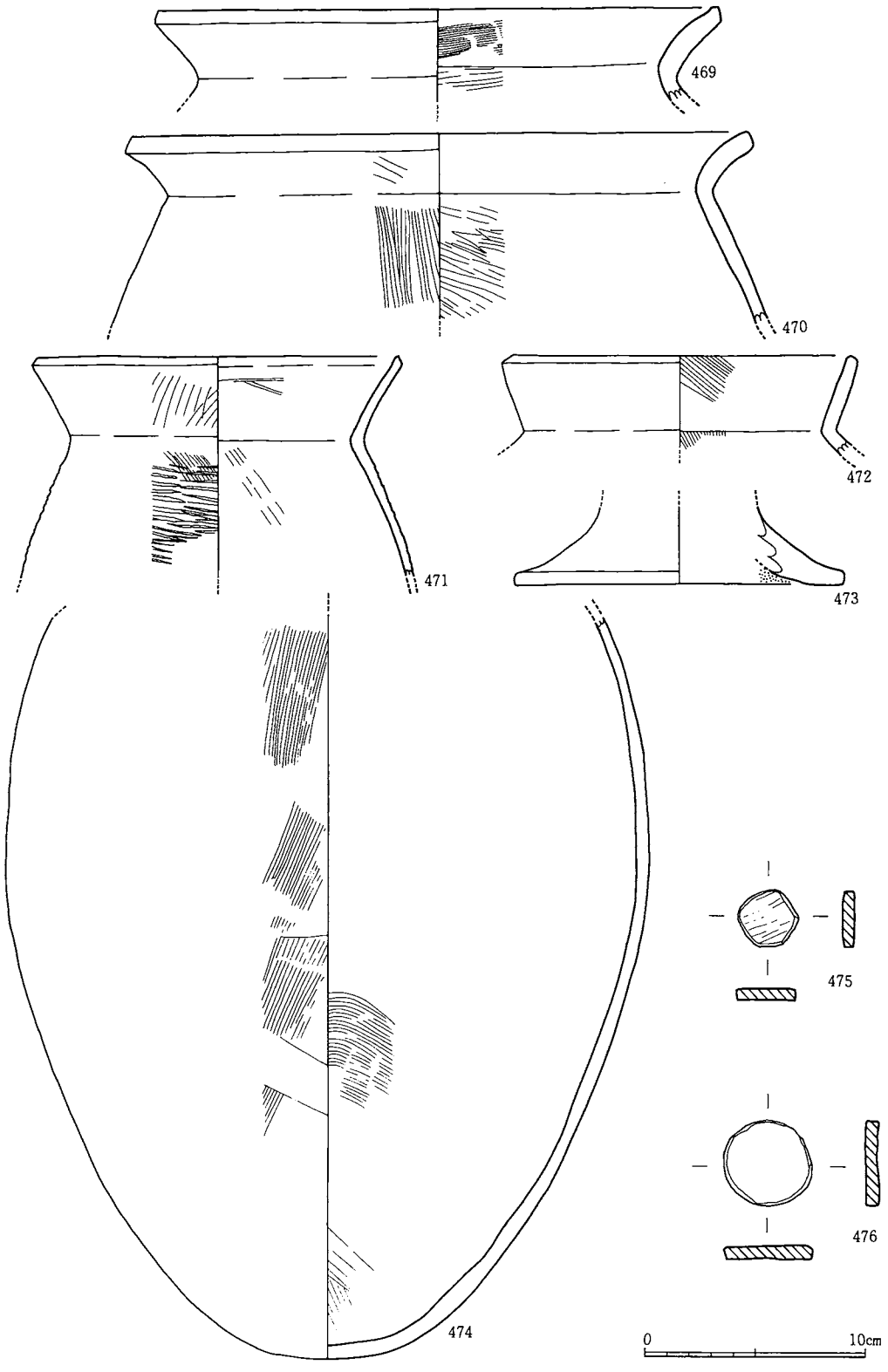
出土した炭化材は第4章付論4の表に示す通りであるが，大型の材木にはバーク（樹皮）が付いたまま柱材として使用しており，焼けた際にバークのみ炭化し中心部は腐蝕したものと考えられる。炭化材の出土状況は周縁部から住居址の中央方向に向かって，放射線状に検出されており，更

には住居址の壁上端から中心側に，緩やかな傾斜角を持って倒れかかっている。また材木の他に「あし」状の植物も材木の上にのった状況で検出されていることから，住居址の屋根に利用したものと考えられる。

遺物の出土状況では，カーボン層をはさんで上層から小破片が出土し，下層からは原位置のままの資料が分布する。番号を付して取り上げた64点の資料中，図化できたものは　点，ここで掲載したものは29点となる。出土遺物の内訳は土器類では甕6点，壺9点，高坏2点，メンコ形土製品2点，鉢2点である。鉄器では鏃1点，鉇2点，石器類では鏃1点，砥石3点，石弾1点である。遺物の出土層位は，3層中では472，473，474，477，481，486の一連の土器類及び490の鉄器であり，これらが住居焼失時に使用されていた遺物類と考えられる。さらに下層には469，470，476，484，489及び493の石鏃が含まれる。これらの住居址内の遺物は大部分が焼失の際に，炭化物と共にパックされた状態のものであり，上層のものはその後埋没し廃棄されたものと考えられる。

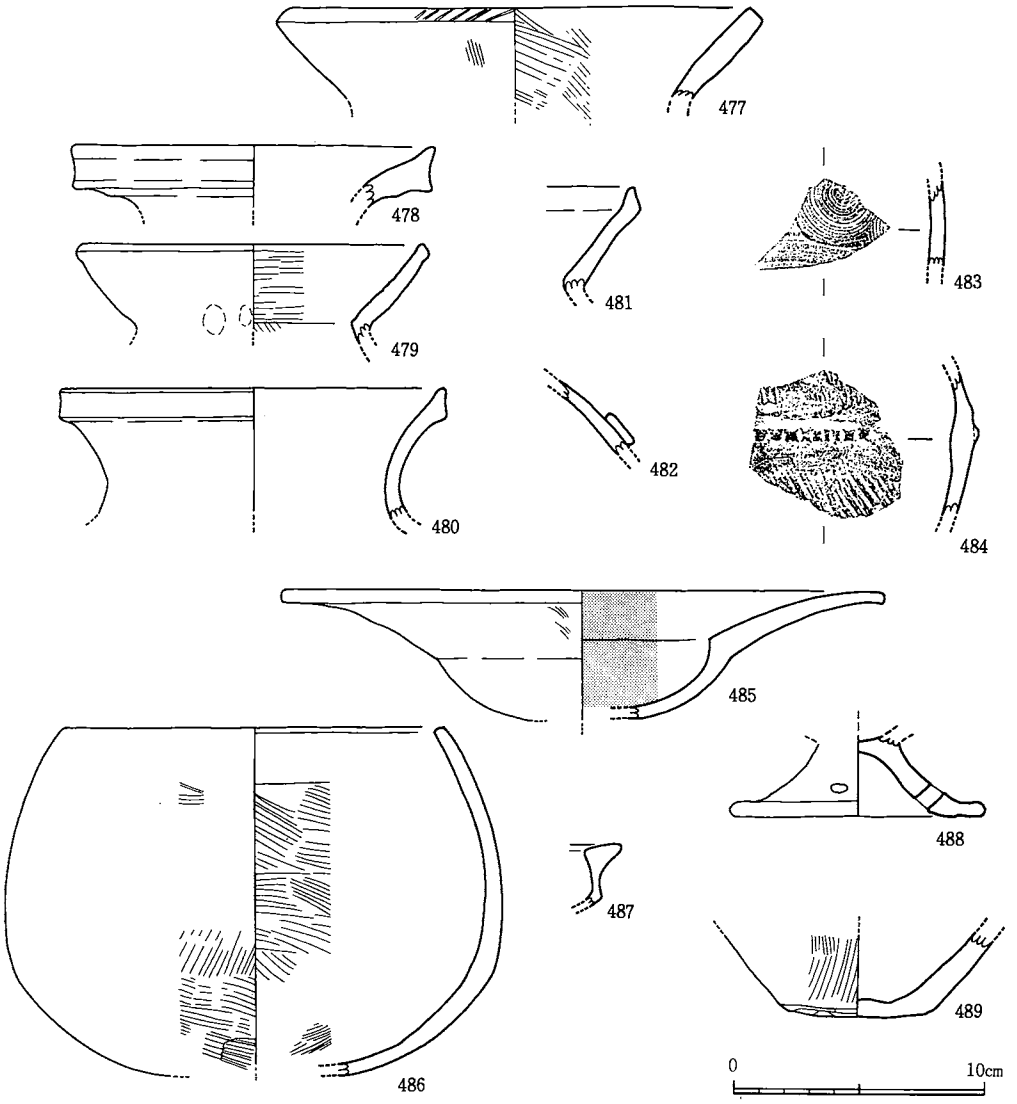
25号住居址内出土土器（第120,121図）

469は甕である。残存1/10での復元。外面は全面にわたりヨコ方向のナデ調整を，内面は斜方向及びヨコ方向の刷毛目の後ヨコナデ調整を行なう。**470**は口径28.8cmを測る大型の甕である。胴部が強く張り,ふくらむ。残存1/8での復元。口縁部外面は斜方向の刷毛目の後ヨコ方向でナデ消す。胴部外面はタテ方向の刷毛目調整を行なう。口縁部内面はヨコ方向のナデ調整を，胴部内面は斜方向の刷毛目調整を行なう。**471**は甕である。残存1/4での復元。口径が小さく，口縁部は外傾するが胴部の張りも弱い。口縁部外面は斜方向の刷毛目調整の後ヨコ方向のナデで仕上げる。胴部外面はヨコ方向の叩き目を行ない，斜方向の刷毛目調整を重ねる。内面は斜方向の刷毛目の後ヨコ方向のナデ調整を行なう。**472**は甕である。口径16.2cmと小型である。外面はヨコ方向のナデ調整を，内面は斜方向の刷毛目調整を行なう。**473**は甕の脚台片である。脚台径は15.0cmと大型であるが，脚部が肉厚であり，砂粒がかなり低位置より付着している。調整は内外面ともヨコ方向のナデ調整である。**474**は甕の胴部である。口縁部及び頸部は欠損しているが，残存高33.8cm，胴部最大径29.5cmを測る。外面上～中位は斜方向の刷毛目調整を，下位はヨコ及び斜方向のナデ調整を施す。内面上位は丁寧なナデ調整を，中～下位は部分的に斜方向の刷毛目調整が加わる。**475**はメンコ形土製品である。ほぼ円形であり,径は2.7cmを測り，厚6mmである。表面には叩き目が残り，縁辺部は面取りを行なう。**476**はメンコ形土製品である475よりもやや大型で，ほぼ円形の5.1cm，厚6mmを測る。表面はよく研磨されており，縁辺部は丁寧な面取りの状態が見られる。**477**は壺である。残存1/12での復元。外面は斜方向の刷毛目の後にナデ調整を施す。内面は斜方向の刷毛目調整が見られる。さらに口縁端部には斜方向で長1.0～1.2mmの刻みを定間隔に施している。なおこの土器には内外面とも赤色顔料が塗布してある。



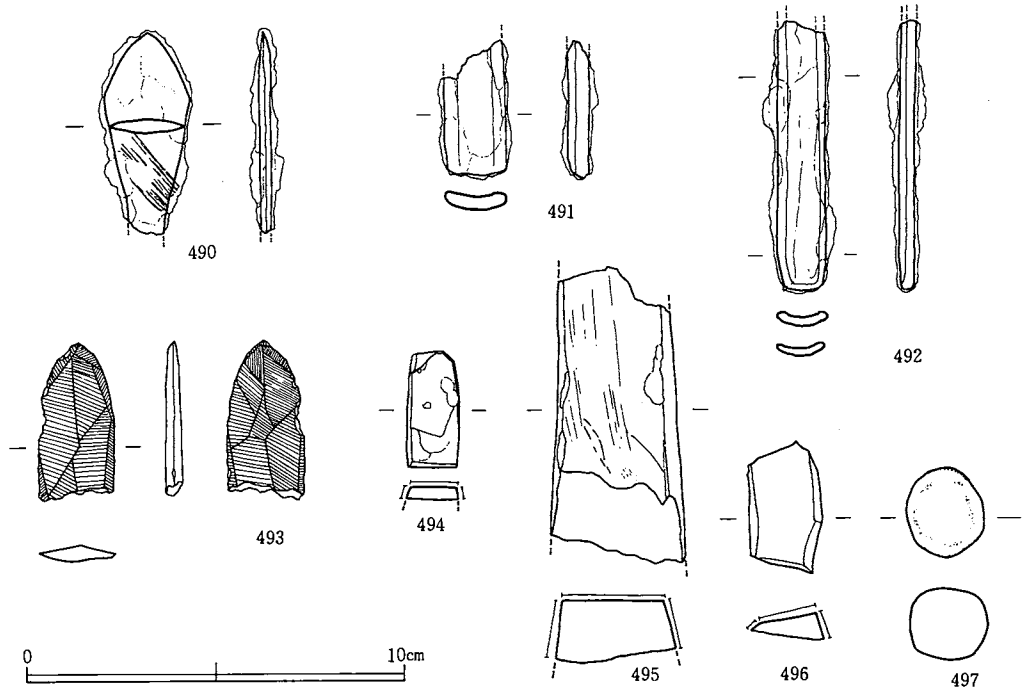
第120図　25号住居址内出土土器実測図（その１）

478は壺の口縁である。残存⅙での復元。内外面ともヨコ方向のナデ調整を施す。**479**は壺の口縁部である。残存½での復元。外面はヨコ方向のナデ調整を施し，部分的に指頭圧痕が見られる。口縁部内面はヨコ方向の刷毛目調整，胴部内面は斜方向の刷毛目調整である。**480**は壺の口縁部である。残存⅛での復元。口径は15.5cmと大型で，口縁部の湾曲は強い。内外面とも全周にわたりヨコ方向のナデ調整を行なう。**481**は壺の口縁部である。口縁端部内面に強い窪みを有しており，稜が走る。外面は斜方向の刷毛目調整，内面は斜方向の刷毛目及びナデ調整を行なう。**482**は壺の胴部片である。表面に径1.5cm，厚4mmのボタン状の貼り付けを有する。内



第121図　25号住居址内出土土器実測図（その2）

面の調整はタテ方向の刷毛目。外面はヨコ方向のナデ調整である。**483**は壺の胴部片と考えられる。外面には波状の流水文が描かれており，下位にはヨコ方向のナデ調整が見られる。内面はナデ調整である。**484**は壺の胴部片である。外面は突帯を有しており，その上位には指圧による窪みを有する。突帯にはタテ方向の刻み目が不定間隔に施されている。外面上位は粗いヨコ方向の刷毛目，下位はタテ方向の刷毛目を重ねる。内面はヨコ方向の刷毛目調整を施す。**485**は高坏である。坏部のみ1/10の残存で脚部は完全に欠損する。坏部は内湾しており，口縁部は屈曲しさらに外湾して広がる。外面には一部刷毛目調整が認められるが，磨耗のため観察しずらい。内面には強い稜が一条みられ，全面に漆を塗布する。一部刷毛目調整が見られる。**486**は鉢である。底部が欠損し，残存1/8での復元である。胴部最大径位置付近で強い稜がみられ，この地点で調整方向が変わる。外面上位は一部ナデ調整であるがヨコ方向のナデ調整を基調とする。斜方向の刷毛目を稜の上位置まで行ない，稜下位は斜方向の断続的な短い刷毛目を重ねる。外面底部付近は無調整となる。内面は口縁部付近はナデ消すものの，斜方向及びヨコ方向の刷毛目調整を重ねる。**487**は鉢の口縁部片である。口縁部の延びは短く，器壁は厚い。内外面ともヨコ方向の刷毛目調整を行なう。**488**は脚台片であり，鉢が上部に付くものと考えられる。脚台径が10.2cmと広がるのに対し，脚台高は3.0cmと低い。なお脚台中位置には径7mmの穿孔が外側から内側に向かって施されており，想定個数は3～4個である。内外面ともヨコ方向を基調とするが，



第122図　25号住居址内出土鉄器・石器実測図

不定方向のナデ調整を行なう。**489**は壺の底部である。底部径6.1cm，残存高3.2cmを測る。外面はタテ方向の刷毛目調整，底部外面はヘラ状の工具で削ってあり平坦面を形成させる。内面は指圧による調整で，一部凹凸が見られる。

25号住居址内出土鉄器，石器（第122図）

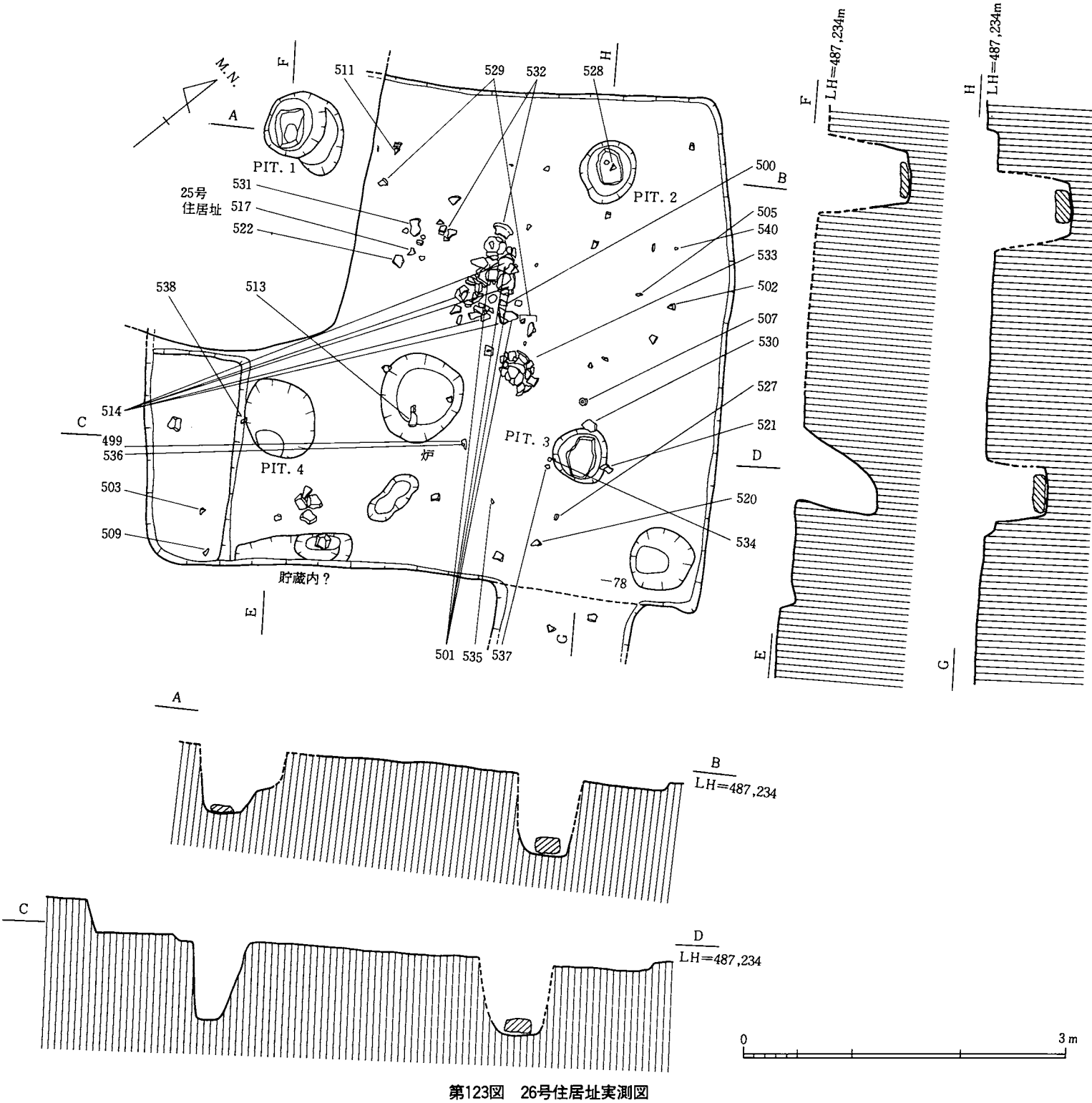
490は有茎三角形式の鉄鏃である。茎部が完全に欠損しており，残存長 5.4cm，幅 2.5cm，頭部厚 3.5mmを測る。関部がかすかに残存しているため柳葉式と考えられる。なお表面には斜方向で幅 9mmの木質が付着している。**491**は鉄製鉇である。上部が完全に欠損しており，残存長はわずかに 3.6cm，幅 1.9 cm を測るのみである。断面形は浅いU字形をなしており厚は 4.0mmを保つ。**492**は鉄製鉇である。上部鋒部が欠損しているが残存長7.2cm，幅 1.3cmを測る。断面形状では浅いU字形であるが，上部側の方がやや厚い。**493**は大型の磨製石鏃である。先端部よりの左側縁辺部及び下部が欠損している。残存長4.10cm，幅2.05cm，最大厚 4.5mmとぶ厚い。**494**は凝灰岩製の砥石である。砥石本体の先端部が剝離したもので，全長3.05cm,幅1.41cm,厚0.35cmである。研磨面は3面に見られる。**495**は凝灰岩製の砥石である。 中央部のみの残存で上部，下部が欠損している。残存長7.80cm，幅3.60cm，厚1.65cmを測る。研磨面は３面である。 **496**は頁岩製の砥石である。小型であり，本体から欠損，剝離したものと考えられるが，その状況は不明である。残存長3.50cm，幅1.90cm，厚７mmである。研磨面は３面である。**497**は石弾である。安山岩製で，径はほぼ2.3cm，断面形はややひずみ楕円形となる。

㉔　26号住居址（第123図）

③一ⓕ区内，調査区南端に位置している。25号住居址に切られ，掘り下げ後床面には28号住居址のラインが検出された。平面形態は長方形であり，長軸方向5.3m，短軸方向4.5m，床面積22.9㎡を測る。やや東西側が長く，主軸方向は東西であり方位はN－44°－Eとなる。壁高は南側で35cmであり，他の壁面は住居址の重復によりほとんど残っていない。炉は中央からやや離れて偏存し南側にかたよる。この炉は下層の28号住居址の埋土内に掘り込まれるが，良好な状態で確認された。主柱穴は４本であり，内３本には盤石が埋められている。PIT，1には28cm×40cm×10cmの安山岩を，PIT，2，3にも同規格の熔岩塊を埋めて盤石として利用している。ただしPIT，4はやや内傾して造られており盤石等は有さない。住居址の南側には小型の溝が見られるが，周辺部に安山岩製ぐり石が見られることから，貯蔵穴と考えられる。ベッド状遺構は段差10cm程で南側コーナー部に１基設けられている。

住居址の覆土は，３層に分かれており，明茶褐色土，暗茶褐色土，茶褐色土にローム混入層である。さらに埋土の下部には貼り床の痕跡が見うけられる。

出土状況では上層から小破片が，下層からほぼ完形の土器が炉周辺部に集中して出土する。

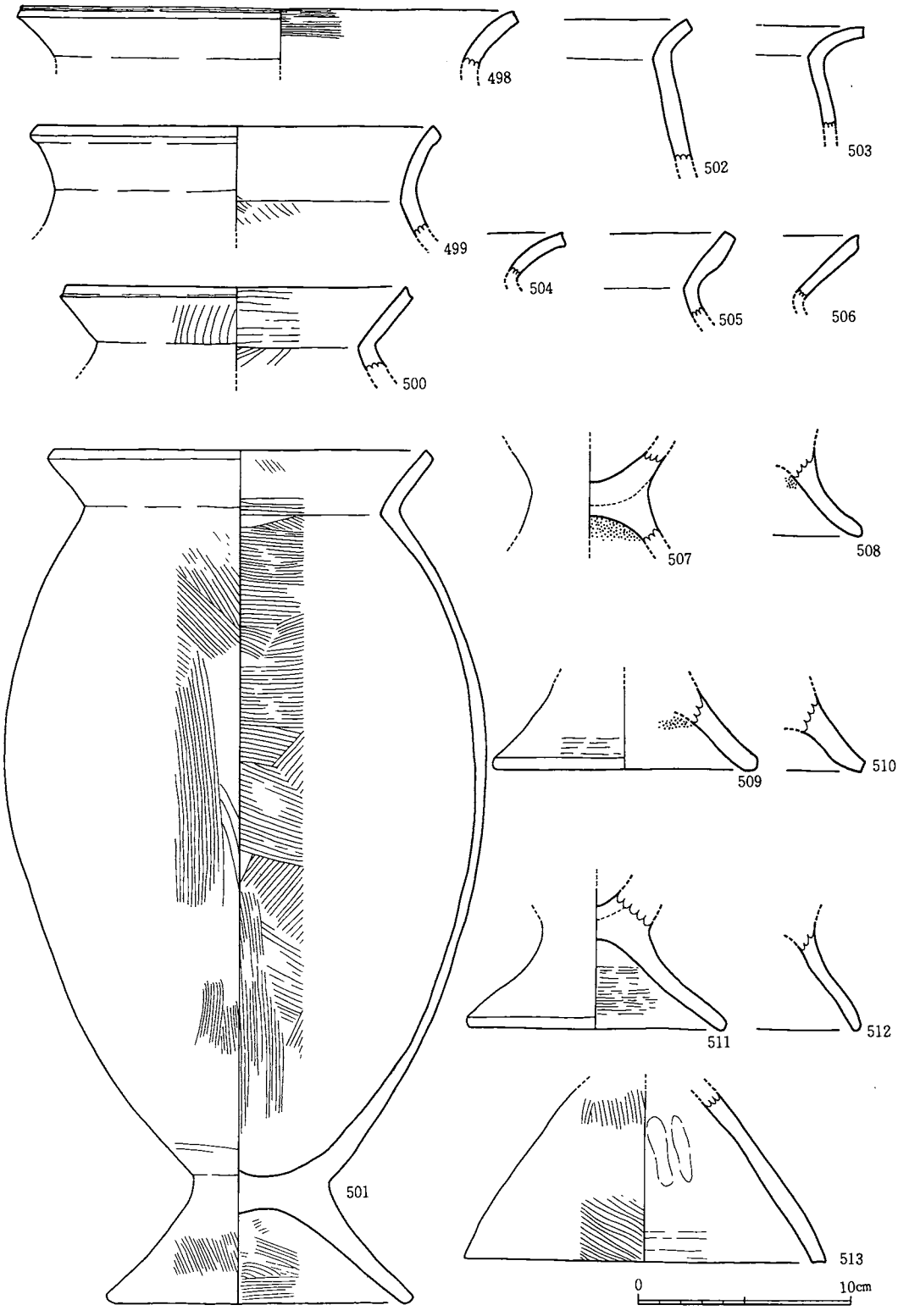


第123図　26号住居址実測図

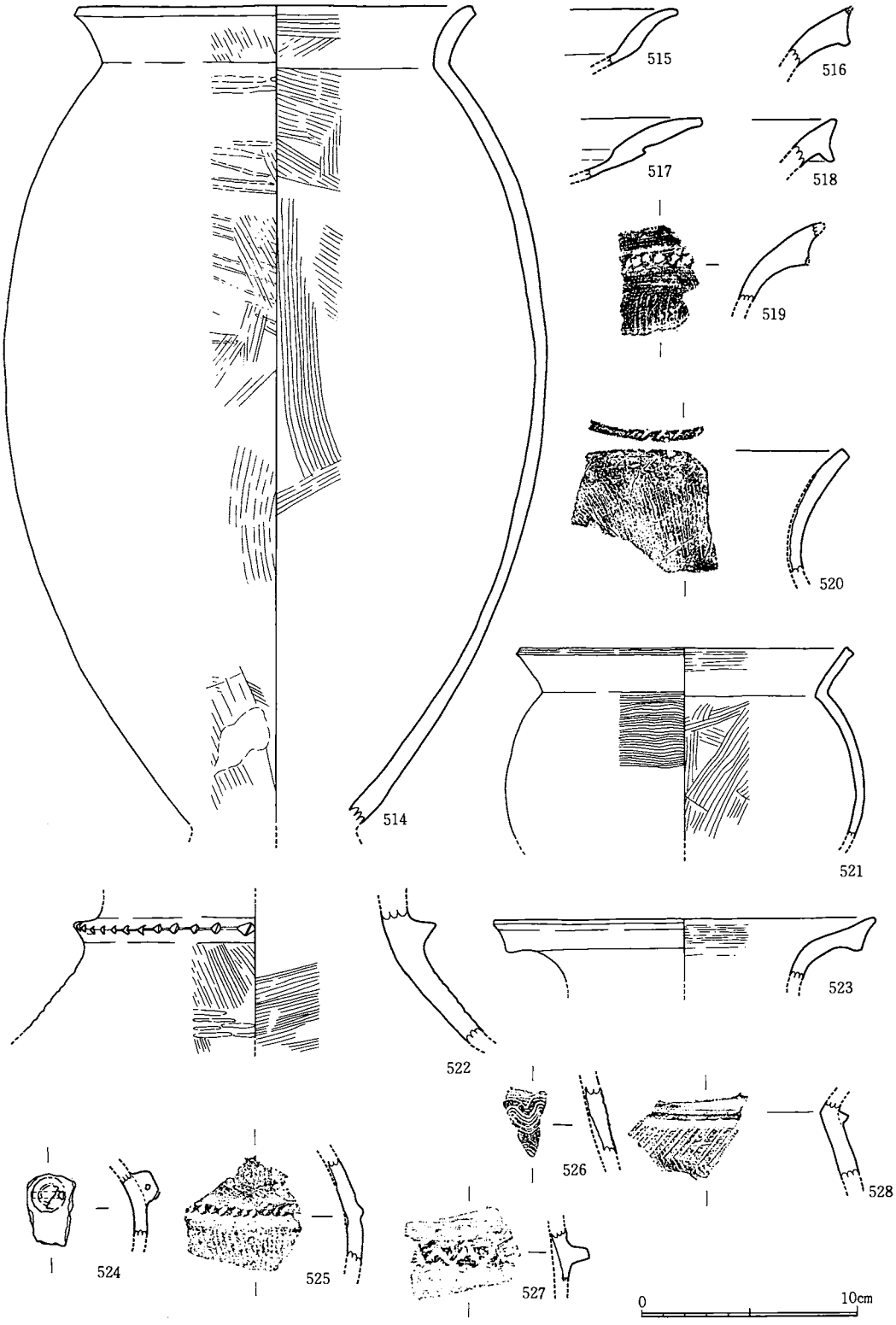
番号を付して取り上げた資料は全部で64点に達する。この内で図化した資料は52点であり，ここで掲載したものは41点となる。遺物の内訳は土器類では甕18点，壺16点，鉢1点，高坏2点である。鉄器は鉄鏃2点，鉇1点，手鎌1点であり，石器では石鏃，石包丁，砥石が各1点の出土となる。遺物の出土層位では，2層中に多量の遺物が包含される。それは499，503，505，507，508，514の甕，520，522，527，528，529，532，533の壺，521の鉢等であり534，535の鉄鏃及び538の砥石も含まれる。さらに下層の最下層，密着のものでは502,516,526の土器類であり，536の鉄製鉇や540の石鏃もこの層からの出土となる。炉周辺部に集中する土器類はほぼ同一レベルであり，状況からみてセット関係として捉えることができる。それは一連の完形の土器である501，513，516，532，533等である。住居址の廃絶に際しては中央部に土器がまとめて棄てられ，その後西側から小破片の遺物が流れ込んだ状況と考えられる。

26号住居址内出土土器（第124～126図）

498は甕である。残存⅛での復元。外面はヨコ方向のナデ調整。内面はヨコ方向の刷毛目の後ヨコ方向のナデ調整を施す。**499**は甕である。残存⅙での復元。外面はヨコ方向のナデ調整を，内面上位はヨコ方向の刷毛目の後ナデ調整。下位は斜方向の刷毛目調整となる。**500**は甕である。残存⅛での復元。外面はタテ方向の刷毛目の後にナデ調整。内面上位はヨコ方向の刷毛目の後ナデ調整，下位は斜方向の刷毛目調整となる。**501**は完形の甕である。口径18.2cm，器高40.0cm，胴部最大径22.8cm，脚台径14.6cm，脚台高 5.7cmである。口径から中軸線を出すと，脚台部分がやや片側に寄る。口縁部外面はヨコ方向のナデ調整，胴部は斜方向，タテ方向の刷毛目の後，ヨコ方向のナデ調整を行なう。脚台部はヨコ方向のナデ調整となる。口縁部内面はヨコ方向の刷毛目の後にナデ調整を，胴部内面は上位ではヨコ方向，中～下位では斜方向及びタテ方向の刷毛目調整を重ねる。脚台内面はヨコ方向の刷毛目の後ナデ調整を行なう。なお外面には胴部中位から脚台取り付け部まで煤が付着する。**502**は甕の口縁部片である。外面はタテ方向の刷毛目調整，内面上位にはヨコ方向の刷毛目の後，ナデ調整を行なう。内面下位は斜方向及びタテ方向の刷毛目調整を施す。**503**は甕の口縁部である。内外面ともヨコ方向のナデ調整，外面はヨコ方向及びタテ方向の刷毛目調整を重ねる。内面は斜方向の刷毛目調整を行なう。**504**は甕の口縁部片である。内外面ともヨコ方向のナデ調整である。**505**は甕の口縁部片である。外面上位はヨコ方向のナデ調整を，下位はタテ方向の刷毛目の後，ナデ調整を施す。内面はナデ調整を行なう。**506**は甕である。外面はナデ調整を施すが，煤が付着して観察しずらい。内面はヨコ方向の刷毛目調整の後ナデで仕上げる。**507**は甕の脚台である。外面はナデ調整，脚台内側には砂粒が付着する。**508**は甕の脚台片である。外面はタテ方向の刷毛目，内面には砂粒が付着するが，ヨコ方向のナデ調整を施す。**509**は甕の脚台である。外面やヨコ方向の刷毛目の後ナデ調整を行なう。内面には微砂粒が付着し，ナデ調整を行なう。**510**は甕の脚台片である。外面はタテ方向

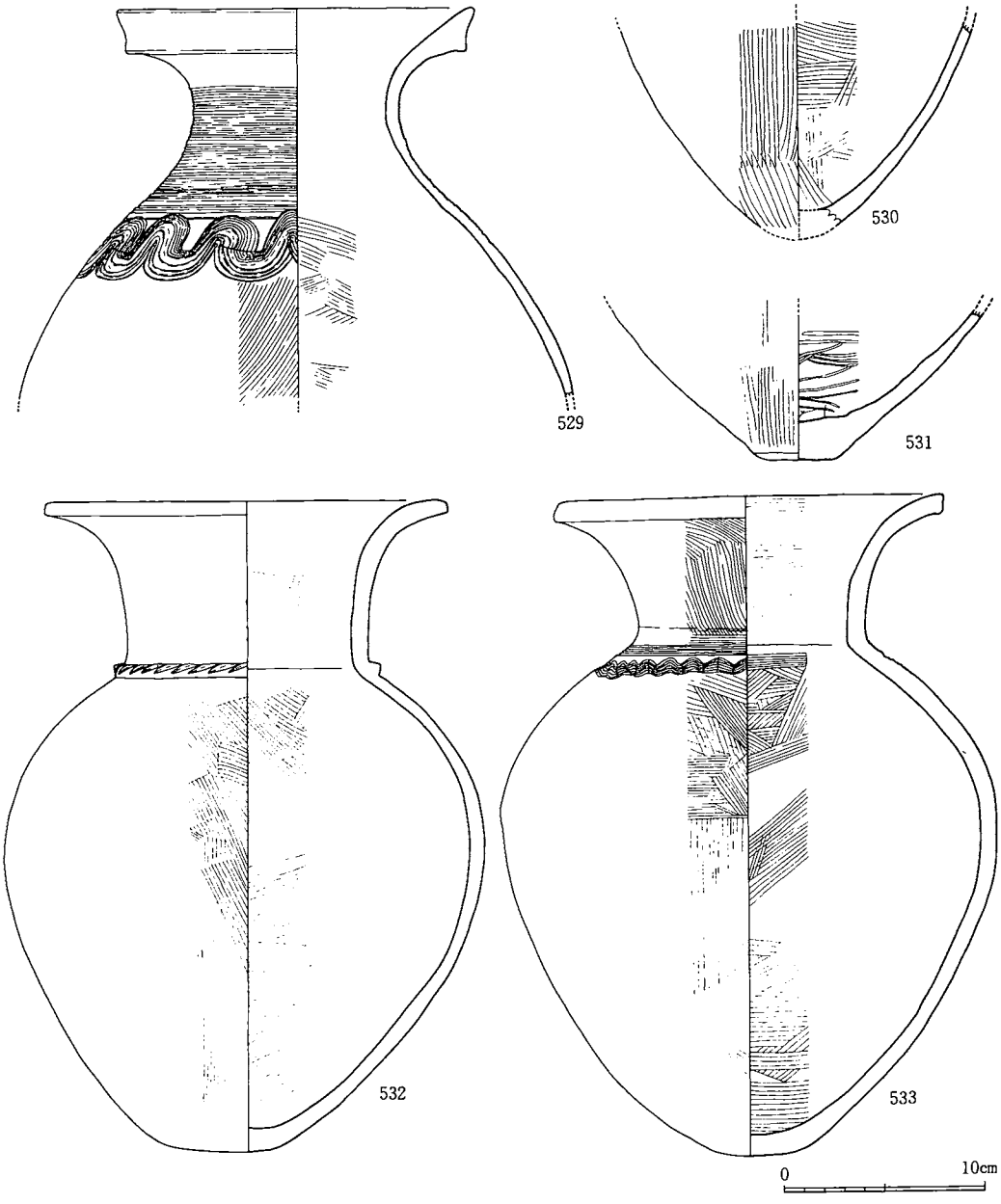


第124図　26号住居址内出土土器実測図（その１）



第125図　26号住居址内出土土器実測図（その２）

の刷毛目の後，ナデ調整を行なう。内面はナデ調整のみである。**511**は甕の脚台である。残存⅛の復元。外面はナデ調整，内面はヨコ方向の刷毛目調整の後ナデ調整を行なう。**512**は甕の脚台片である。外面はヨコ方向の刷毛目の後ヨコ方向のナデ調整を行なう。内面はナデ調整である。**513**は甕の脚台である。残存⅓での復元。脚台径17.2cm，残存高8.1cmと比較的に高い。外面はタテ及び斜方向の刷毛目の後，部分的にナデ調整で消す。内面はナデ調整を施し，部分的に指圧痕が残る。**514**は大型の甕である。脚台部のみ欠損するがほぼ完形である。口径18.9cm，胴部最大径25.5cm，残存高37.9cmを測る。口縁部外面は斜方向の刷毛目の後にナデ調整。外面上位はヨコ方向の叩き目，中位は斜方向の叩き目の後にナデ消し及び刷毛目調整を重ねる。外面下位はタテ方向の刷毛目及びナデ調整を行なう。口縁部内面は刷毛目の後にヨコ方向のナデ調整。内面は不規則な刷毛の後，ヨコ方向のナデを施す。**515**は高坏の口縁部である。外面はナデ調整，内面はヨコ方向の刷毛目の後，ナデ調整で仕上げる。**516**は壺の口縁部片である。全面にわたりヨコ方向のナデ調整を行なう。**517**は高坏の口縁部片である。外面は，ナデ調整を，境界部には強い窪みを有しており，さらにその下位は粗い面が残り，ナデ調整を重ねる。**518**は壺の口縁部片である。口唇部がめくれる。内外面ともヨコ方向のナデ調整を施す。**519**は壺の口縁部片である。口唇部が一部欠損するものの，端部に刻み目を有している。刻み目は不規則で不定である。下位はナデ調整を加える。内面はヨコ方向のナデ調整である。**520**は壺の口縁部片である。外面はヨコ方向のナデ調整及びタテ方向の刷毛目調整後，ヨコ方向のナデ調整を行なう。口唇部端部にはヨコナデ後に5mm間隔で刻み目を施している。内面は剝離のため調整は不明。**521**は壺である。残存⅙での復元。口径15.8cm，胴部最大径16.7cm，残存高8.2cmを測る。口縁部外面はナデ調整，胴部外面はヨコ方向の刷毛目の後ナデ調整を施す。口縁部内面はヨコ方向の刷毛目の後，ナデ調整。胴部内面は斜方向のクロスする刷毛目調整を行なう。**522**は壺の頸部である。大型の断面三角の突帯を有しており，それには定間隔で刻みを有する。外面下位はヨコ方向に叩き目を施し，その後斜方向の刷毛目調整を重ねる。**523**は壺の口縁部である。外面はヨコ方向のナデ調整，内面はヨコ方向の刷毛調整の後，ナデ調整で仕上げる。**524**は壺の胴部片と考えられる。ボタン状の径1.6cmのものに，焼成前に穿孔を施す。片側からの穿孔であり，径は3mm程である。**525**は壺の胴部片と考えられる。外面には小型の突帯が貼り付けられており，そこには斜方向の刻み目を施す。外面の調整は，ナデ及びタテ方向の刷毛目調整の後ナデで仕上げる。内面は剝離のため観察できない。**526**は壺の破片と考えられる。外面には3条の平行沈線と7条の櫛描き波状文を施す。内面は剝離のため不明。**527**は壺の胴部片である。大型で方形の突帯を貼り付けており，斜方向で八の字形の刻みを施す。周囲はナデ調整で仕上げる。**528**は壺の頸部片である。頸部に断面三角の突帯を貼り付け，その下位には斜方向の刷毛目，ヨコナデ調整後に，斜方向の沈線を2～4mm間隔で施文する。**529**は壺である。口縁部外面はヨコ方向の丁寧なナデ調整。中位は沈線を意識した刷毛状工具によるヨコ方向の刷毛目調整，その下位には刷毛

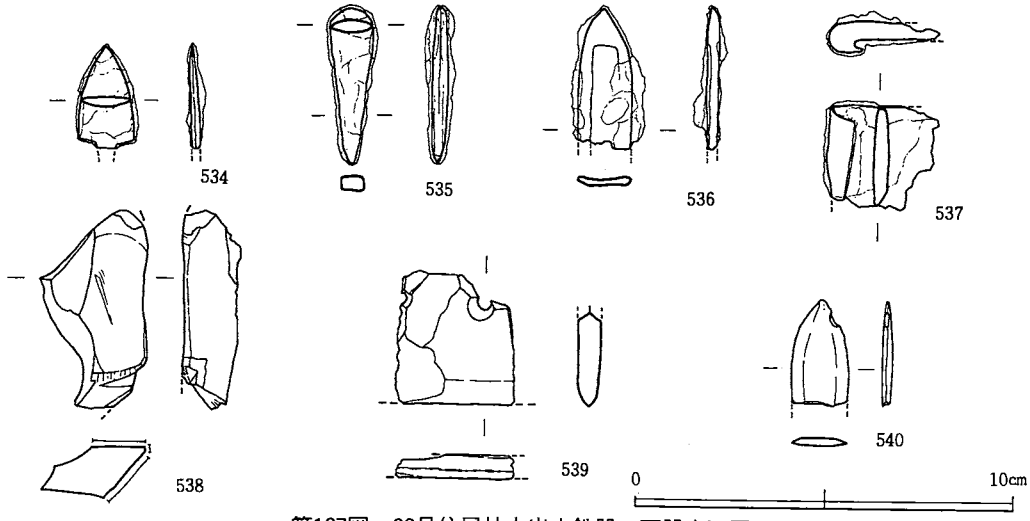


第126図　26号住居址内出土土器実測図（その３）

状工具による流水文が描かれる。流水文は向って左から右へ描かれ，基点は右上部を描く時に使われたものが残る。さらに下位には斜方向の刷毛目を施す。内面上位はヨコ方向の刷毛目の後にナデ調整を，下位はヨコ方向の丁寧なナデ，部分的に刷毛目の痕跡が見られる。**530**は甕の底部である。胴部側と最底部が欠損するが，残存長11.2cmを測る。外面はタテ方向の刷毛目調整を，さらに下位は中心部に向かって刷毛目調整を重ねる。内面上位はヨコ方向の刷毛目調整を，下位は不定方向の刷毛目調整の後，ナデ消しを行なう。**531**は壺の底部である。外面はタテ方向の刷毛目の後ナデ調整で仕上げる。底部はヨコ方向の刷毛目調整を施すが，磨耗が著しい。内面は幅２～３mmのヘラ状工具で調整する。**532**は完形の壺である。口径20.4cm，器高32.5cm，胴部最大径24.3cmである。底部は平底で，胴部はほぼ卵形となる。頸部には右上部から左斜方向に刻み目を施す。頸部外面にはタテ方向の刷毛目の後にヨコ方向のナデ消しを行なう。胴部上位は斜方向，下位はタテ方向の刷毛目を重ね，一部ナデ消しを行なう。頸部内面はヨコ方向の刷毛目の後にナデ調整で消し，仕上げる。胴部内面は斜方向及びヨコ方向の刷毛目調整を重ねる。**533**は完形の壺である。532と器形的にも法量的にも類似するが，頸部の状況が異なる。この資料では頸部は突帯を有せず，ヨコ方向の沈線を意識したヘラ状工具の痕跡。さらに下位にはヨコ方向の櫛描きの流水文が描かれている。頸部外面はタテ方向の刷毛目調整。胴部上位は不整方向の刷毛目の下位に，斜方向及びヨコ方向の刷毛目調整を施す。下位にはタテ方向の刷毛目の後ナデ消しで仕上げる。口縁部内面はヨコ方向の刷毛目の後にナデ調整。胴部上位は不整方向の刷毛目，中位は斜方向の刷毛目の後，部分的にナデ消す。下位はヨコ方向の強い刷毛目が入る。

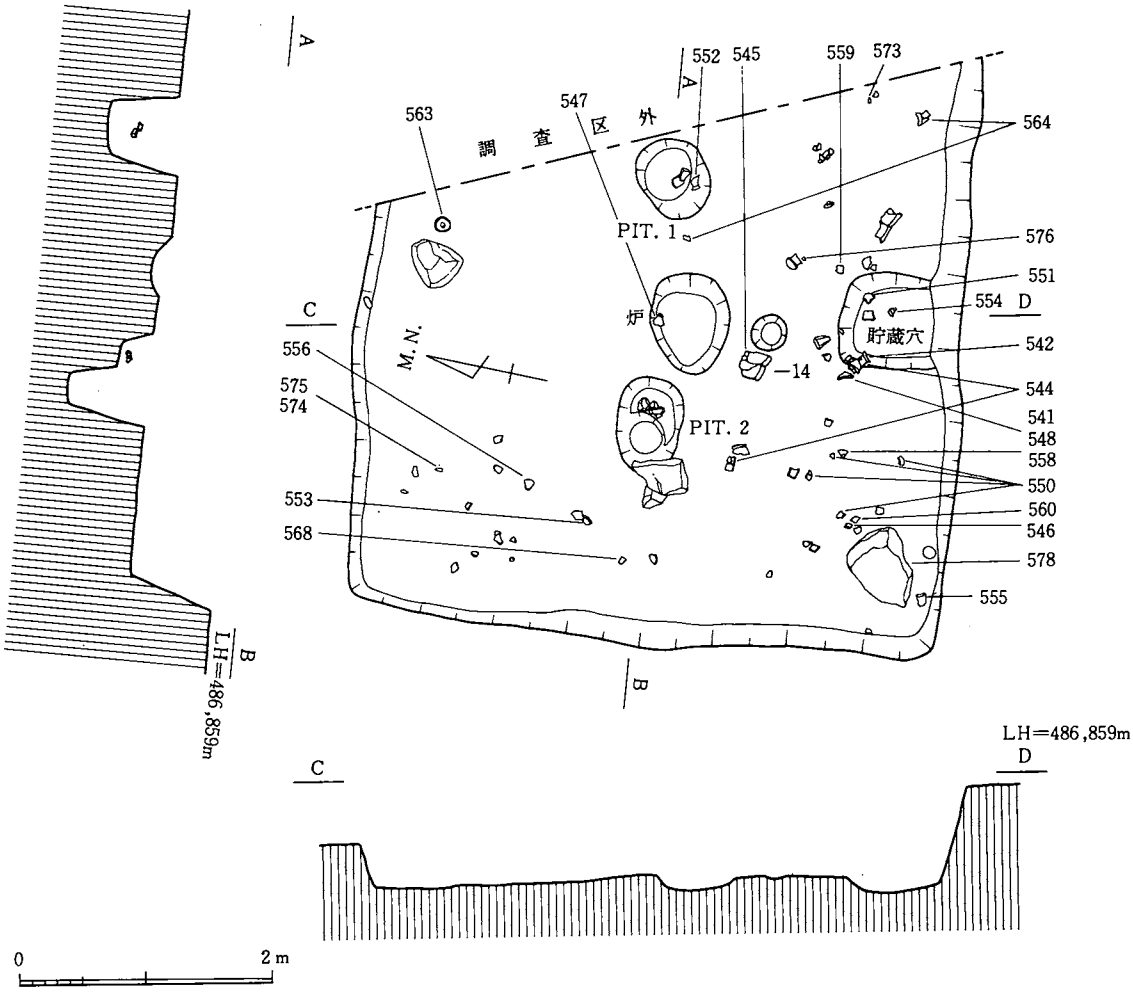
26号住居址内出土鉄器，石器（第127図）

534は有茎の鉄鏃である。茎部は欠損するが，頭部は完全である。残存長2.75cm，幅1.50cm，



第127図　26号住居址内出土鉄器・石器実測図

厚は3mmを測る。形状としては関が外湾する，有茎の三角形式である。**535**は有茎の鉄鏃である。完形であり，長さ4.15cm，幅1.15cm，頭部厚3mmを測る。鋒部は円孤状を描いており，円頭形を呈する。茎部断面は6.0mm×3.5mmを測る，長方形である。重量は3.35g である。**536**は鉄製の鉇である。基部側下半分が欠損するが，残存長3.75cm，幅1.45cmを測る。断面形は浅いU字形で，厚2mmを測る。**537**は鉄製鉇である。　左側上部のみの残存で残存長2.70cm，幅2.95cmである。左側面端部を7mm程内側に折り曲げて袋部を作り出す。**538**は砂質頁岩製の砥石である。一部分のみの残存で，残存長5.30cm，幅2.85cmを測る。研磨面は2面を確認することができる。**539**は石包丁である。上部及び左右が欠損しており，残存長3.20cm，幅3.55cmを測る。刃部には使用痕が観察される。**540**は磨製石鏃である。基部側が全く欠損するが，残存長2.80cm，幅1.50cmを測る。長軸に対してやや幅の広いタイプと考えられる。



第128図　27号住居址実測図

㉕ 27号住居址（第128図）

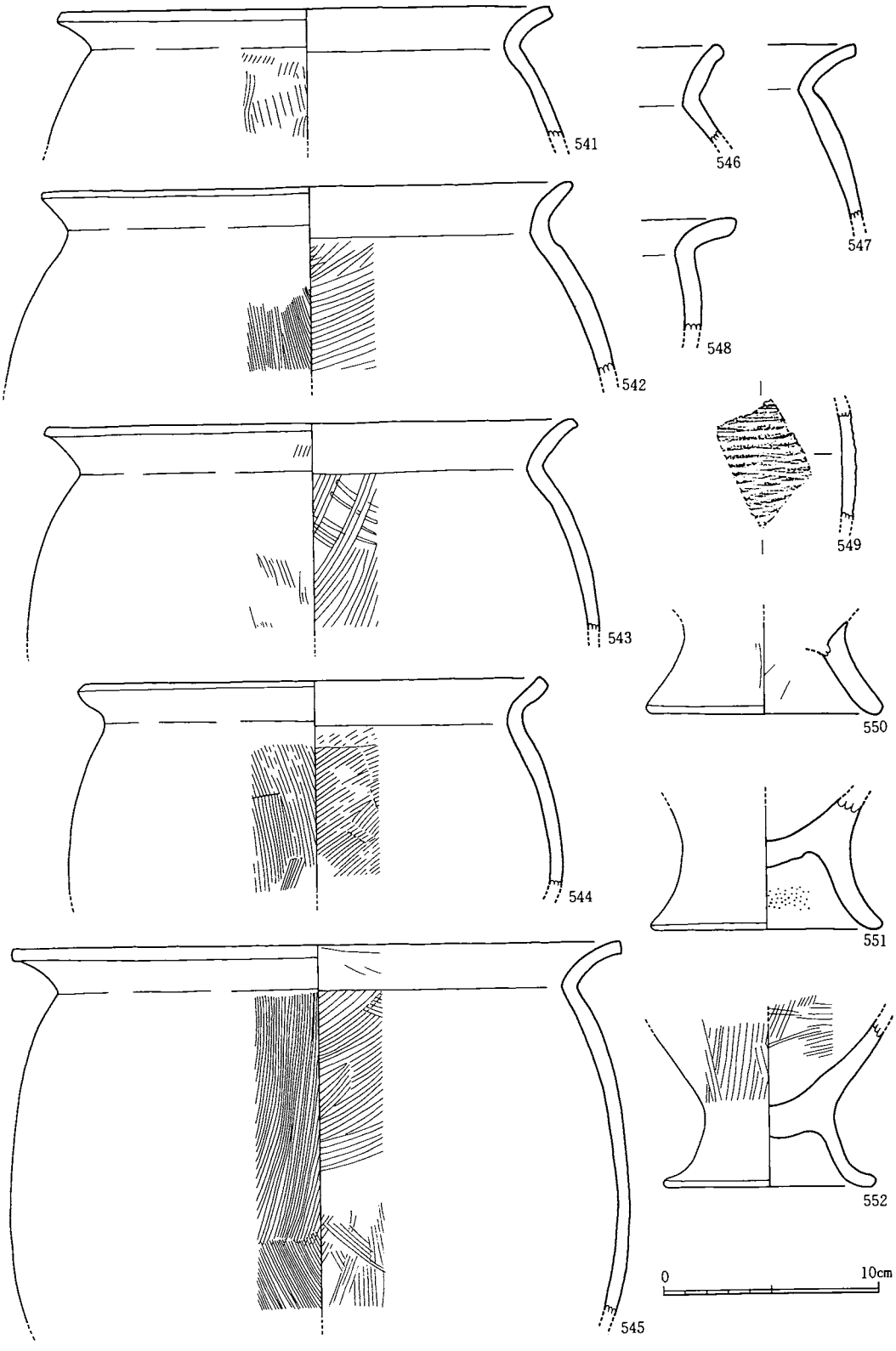
②—ⓕ区内，調査区最南部に位置する。切り合い関係のない単独検出であり，遺構は一部分調査区外へ出るが平面形態は長方形を呈する。残存規模は長軸方向4.8m，短軸方向4.8m を測る。主軸は東西方向であり方位はN－83°－Eである。壁高は北側で40cm，西側で70cmであるが，やはり上面を一部削られたものと思われる。炉は中央部に1基確認されるが，周辺遺構にはカーボン等の散在は見られない。なお隣接する径30cmの柱穴は炉に付属するとも考えられる。主柱穴は2本柱であり，柱穴内に熔岩塊の小石を，PIT，1には2個，PIT，2には4個埋めこんで柱を固定している。さらにPIT，2は二段に掘り下げた丁寧な造りであり，地山の再堆積土（赤褐色土に白色粘土が一部混じりあった層）に，茶色の柱根（径23cm）が明瞭に確認された。貯蔵穴は南側部分に1基検出されるが，ベッド状遺構の有無については不明である。

住居址の覆土は6層となる。上層より順に明茶色土，明茶色土に橙色の砂粒を含む層，褐色土，褐色土に黄色ロームの斑点を含む層，強粘性の黒褐色土，明褐色土である。中央部の石は流れ込みで1～3層中に含まれ，住居址本来の位置のものではない。

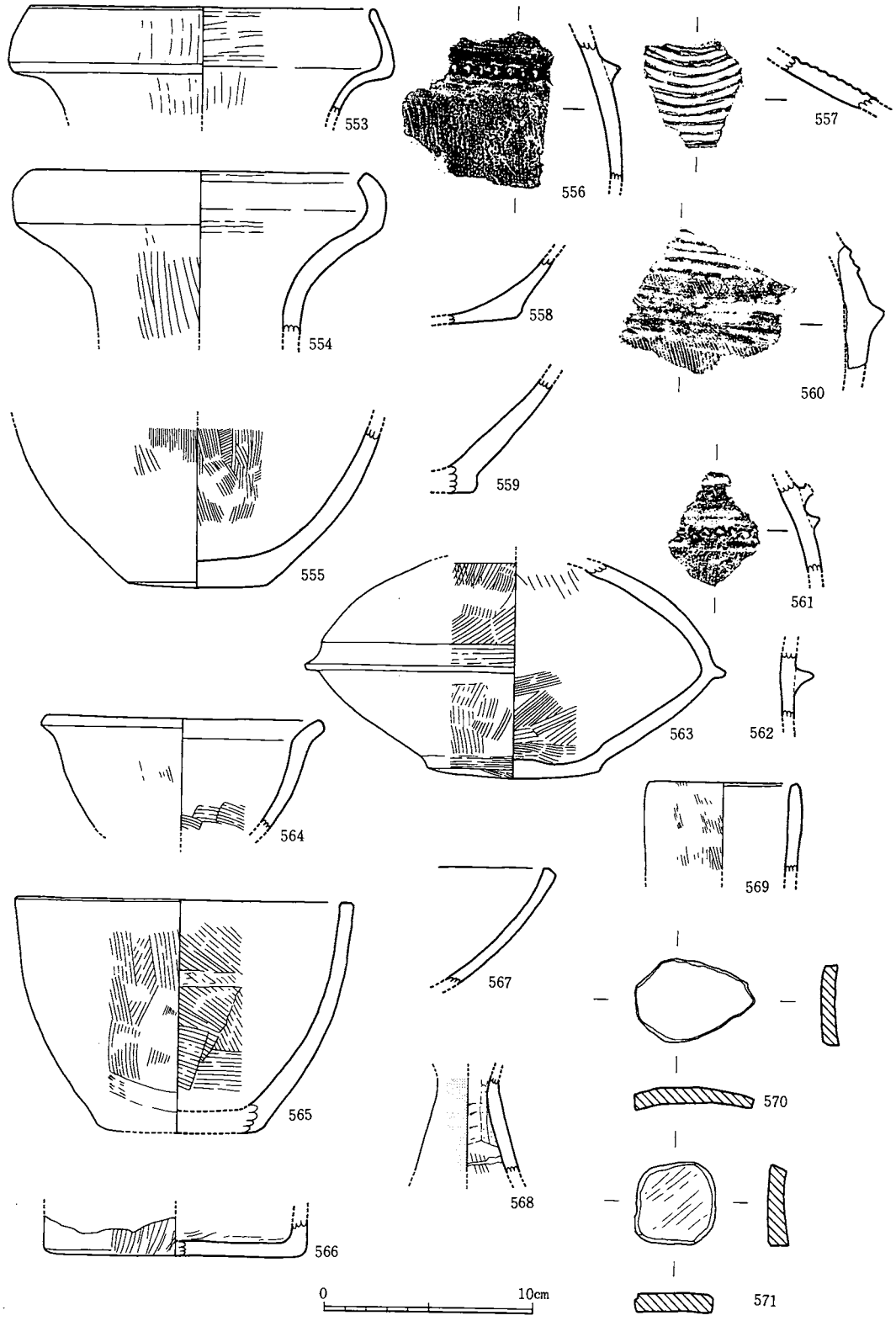
出土状況では住居址内部に全般的に小破片が入るが，大型の破片が主に下層より出土する。出土遺物の内番号を付して取り上げた資料は59点である。実測図化できたものは52点となり，ここでは36点を掲載した。出土遺物の内訳は土器類では甕12点，壺11点，鉢3点，高坏1点，ジョッキ形土器1点，メンコ形土製品2点である。鉄器の出土は全くなく，石器類では石鏃4点，石包丁2点である。遺物の出土層位は上層のものは全て小破片であり，大型のものは中・下層に集中する。5層からは541，543～545の甕，563，566，567が出土し，最下層の6層及び床密着，直上の資料が547，548，551，553～555，559，564等である。なお552はPIT，1内出土である。出土する石器のうち576の石包丁，574，575の石鏃も6層及び床密着資料で，本住居址の時期判定の好資料となりうる。なお578の台石は流れ込みの資料であり，本住居址のものではない。住居址の廃絶に際しては原位置を保つものも多く，その後の埋没はかなり早い速度であったと考えられる。

27号住居址内出土土器（第129，130図）

541 は甕である。残存⅙での復元。外面はタテ方向の刷毛目をナデ消し仕上げる。内面上位は全面にわたりヨコナデ調整を施し，下位は不定方向のナデ調整で仕上げる。**542** は甕である。残存¼での復元。口縁部外面はヨコ方向のナデ調整を，斜方向の細かい刷毛目調整を行なう。内面は斜方向の刷毛目調整を重ねる。**543** は甕である。残存⅓での復元。口縁部外面はタテ方面の刷毛目の後，ヨコ方向のナデ調整で仕上げる。胴部外面は斜方向の刷毛目の後，ヨコ方向のナデ調整を施す。口縁部内面はヨコ方向のナデ調整，胴部内面は斜方向の刷毛目調整を行なう。**544** は甕である。口縁部外面はヨコ方向のナデと強い指圧でのナデ調整。胴部外面はタテ方向の



第129図　27号住居址内出土土器実測図（その1）



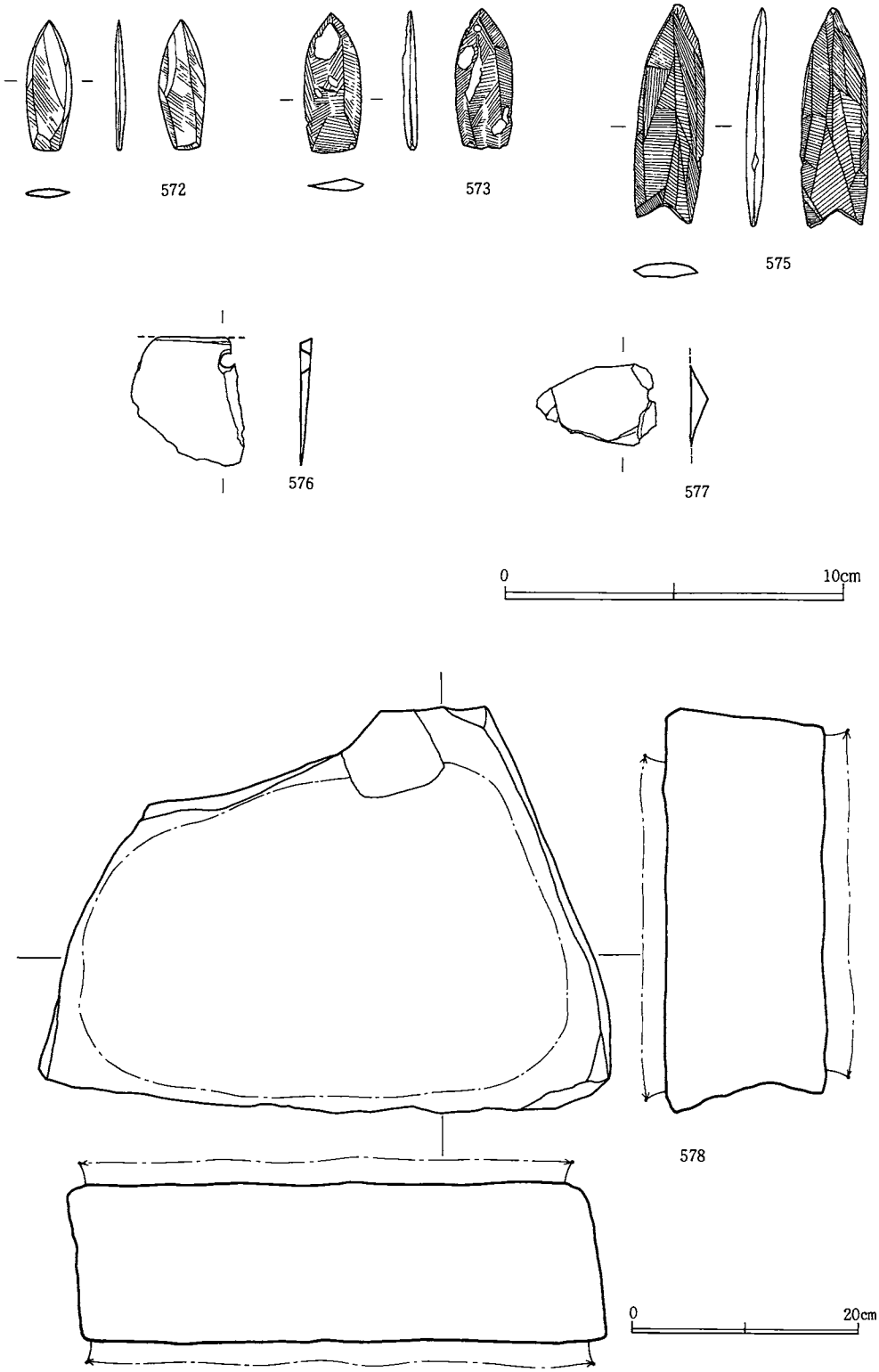
第130図　27号住居址内出土土器実測図（その２）

刷毛目調整を行なう。口縁部内面はヨコ方向のナデ，胴部内面は斜方向の刷毛目調整を行なう。**545**は大型の甕である。残存⅓での復元。口縁部外面はヨコ方向のナデ調整。胴部外面はタテ方向の刷毛目を基調とするが，一部斜方向の刷毛目調整を重ねる。口縁部内面はヨコ方向のナデ調整を，胴部内面上位は斜方向の刷毛目を，下位はタテ方向及び斜方向の刷毛目調整を重ね，その後，一部ナデ消す。**546**は甕の口縁部片である。口縁部外面はヨコ方向のナデ調整，下位はタテ方向の刷毛目調整を施す。口縁部内面はヨコ方向及び斜方向の刷毛目調整。胴部内面は斜方向の刷毛目調整を行なう。**547**は甕の口縁部片である。口縁部外面はタテ方向の刷毛目の後ヨコ方向のナデ調整，胴部外面はタテ方向の刷毛目調整を施す。口縁部内面はヨコ方向の刷毛目の後，ナデ消す。胴部内面は斜方向の刷毛目調整を重ねる。**548**は甕の口縁部である。口縁部外面はヨコ方向のナデを，下位はタテ方向の刷毛目の後にヨコナデで仕上げる。内面はヨコ方向のナデ調整である。**549**は甕の胴部片である。外面はヨコ方向の叩き目を重ね，内面は斜方向の刷毛目調整を施す。**550**は甕の脚台である。残存⅓での復元。外面はタテ方向の刷毛目の後，ヨコナデ調整で仕上げる。内面はタテ方向の痕跡が一部残るが，他はヨコ方向のナデで仕上げる。貼り付け部は疑似口縁となる。**551**は甕の脚台である。残存⅓での復元。外面にはタテ方向の刷毛目が一部残るが，ヨコ方向のナデ調整で仕上げる。内面には砂粒が付着し，弱い指圧によって調整を行なう。底部内面は器壁があれ観察不能。**552**は甕の脚台である。残存½での復元。外面上位はタテ方向の刷毛目を，下位はヨコ方向のナデ調整を施す。底部内面は斜方向の刷毛目を重ね，最底部はナデ調整を施す。脚台内面はヨコナデ及びナデ調整を行なう。**553**は壺の口縁部片である。外面はタテ方向の刷毛目の後，よわいヨコナデで仕上げる。内面上位はヨコ方向の刷毛目の後，ヨコ方向のナデ調整，下位はタテ方向の刷毛目の後不整方向のナデ調整を行なう。**554**は壺の口縁部である。口唇部内外面はヨコ方向の丁寧なナデ調整を施す。外面中～下位はタテ方向の刷毛目の後，中位のみはナデ消す。内面は一部ヨコ方向の刷毛目が残るが，指圧の調整を加える。**556**は壺の胴部片である。断面三角形の突帯が貼り付けられており，それには間隔6㎜で，刻み目を施す。外面下位にはタテ方向の刷毛目の後，ヨコ方向のナデ調整を施す。内面は斜方向の刷毛目調整である。**557**は免田式土器の壺の胴部片である。外面にはヨコ方向に11条の沈線を施す。内面はナデ調整である。**558**は壺の底部である。外面はタテ方向の刷毛目を，底部はヘラ状の工具で削り調整を行なう。内面はヨコ方向の刷毛目が施されている。**559**は壺の底部である。外面はタテ方向の刷毛目調整，内面はヨコ方向，タテ方向の刷毛目を施した後にナデ調整で仕上げる。**560**は壺の胴部片である。外面上位は斜方面の刷毛目の後に3条の大型の沈線を入れる。突帯下位にはタテ方向の刷毛目調整を施す。内面は斜及びヨコ方向の刷毛目の後にナデ調整を施す。**561**は壺の胴部片である。表面には2条の突帯を有しており，下段のものには間隔6㎜で斜方向の刻み目を施す。外面の突帯の間はナデ，下位はタテ方向の刷毛目の後，ヨコ方向のナデ調整で仕上げる。内面はヨコ方向の刷毛目の後，ヨコ方向のナデ調整を施す。**562**

は壺の胴部片である。外面には突帯を貼り付け，周囲は斜方向の刷毛目及びヨコ方向のナデ調整を施す。内面には斜方向の刷毛目の後，ヨコ方向のナデを施す。**563**は壺である。頸部は完全に欠損するが，胴部は完形となる。胴部最大径19.9cm，残存高10.2cmを測る。外面上位には斜方向の刷毛目の後に一部ナデ消す。中位の突帯部分はヨコ方向のナデ調整を，下位はタテ方向の刷毛目調整を重ねる。底部には斜方向の刷毛目調整を行なう。内面上位にはヘラ工具の痕跡が残るが，ナデ調整。中～下位は中央部より外縁に向っての刷毛目調整を行なう。**564**は鉢である。底部を欠損するが口径13.3cm，残存高 5.2cmを測る。外面はタテ方向の刷毛目の後ヨコ方向のナデ調整で仕上げる。内面はヨコ方向の刷毛目の後に部分的にヨコ方向のナデを重ねる。**565**は鉢である。底部が欠損するが，ほぼ完形で口径16.0cm，器高11.0cmを測る。器壁は肥厚する。外面上～中位はタテ方向の刷毛目を，部分的にナデ消す。下位はヨコ方向のナデ調整を行なう。内面はヨコないし斜方向の刷毛目を施すが，一部ナデ消す。**566**はジョッキ形土器の底部と考える。残存⅕での復元。底部径12.4cm，残存高 1.8cmを測る。外面はタテ方向の細かい刷毛目調整，内面は刷毛による不規則な調整を施す。色調は明るい橙色である。**567**は鉢の口縁部片である。外面の端部ではヨコナデであるが，下位ではタテ方向の刷毛目を重ねる。内面はタテ方向の刷毛目調整。**568**は高坏脚部である。外面はタテ方向のヘラ研磨の後，赤色顔料塗布。内面上位はヨコ方向のヘラ削り，下位には一部刷毛目が残る。**569**はジョッキ形土器の口縁部である。口径7.4cm，残存高4.2cmを測る。外面はタテ方向の刷毛目の後にヨコ方向のナデ調整，内面はヨコ方向の丁寧なナデ調整である。**570**はメンコ形土器である。長方向5.6cm，短方向4.0cm，厚 8mmを測る。内湾気味であり，表面には弱い刷毛目が見られる。**571**はメンコ形土製品である。長方向3.9cm，短方向3.3cm，厚 9mmを測る。表裏面ともに弱い刷毛目調整を施す。

27号住居址内出土石器（第131図）

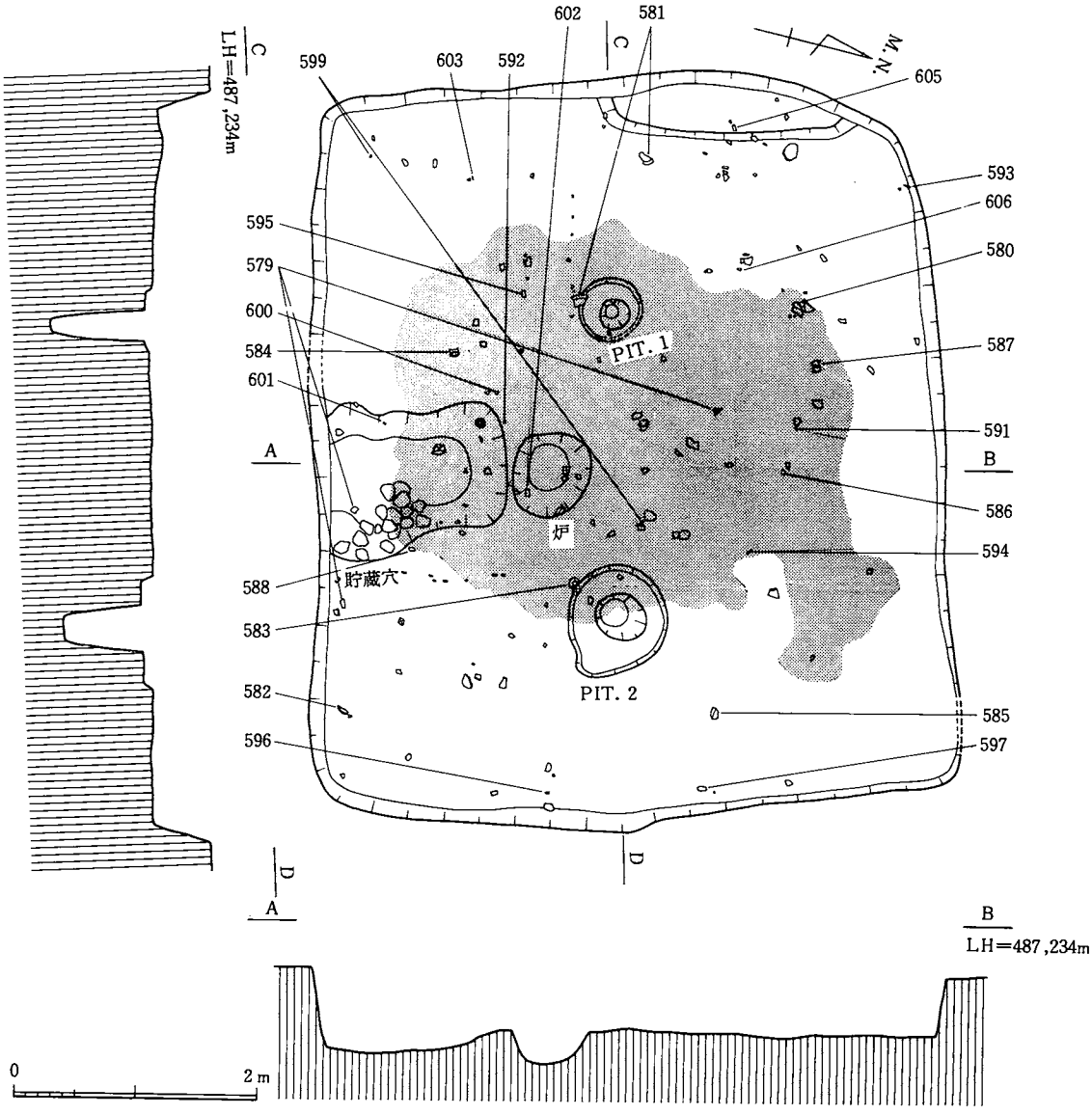
572は磨製石鏃である。完形であり，全長3.87cm，幅1.35cm，厚 3mmである。抉りを持たない幅の狭くなる形態である。重量2.1gである。**573**は磨製石鏃である。剝離面の一部を両面に残すが，ほぼ完形である。全長4.10cm，幅1.75cm，厚 4mmとなる。基部に抉入のない形態である。重量3.6gである。**574**は欠番である。**575**は大型の磨製石鏃である。鋒部が微少に欠損するが，残存長6.55cm，幅2.05cmと大型で，厚 4.5mmとぶ厚い。全面にわたり磨きによる調整が施されている。**576**は粘板岩製の石包丁片である。右側及び左側，裏面が剝離する。形状の復元ではほぼ正方形と思われる。**577**は凝灰岩製の石包丁片である。穿孔部付近の残存で，残存長は3.51cmを測る。**578**は大型の台石である。長方向51.10cm，短方向36.2cm，厚14.2cmを測る。表，裏面ともに全面にわたり研磨が施されている。重量40.50kgである。



第131図　27号住居址内出土石器実測図

㉖　28号住居址（第132図）

調査区南部の③―ⓔ・ⓕ区内に位置している。26号住居址の検出作業中に床面に遺構ラインが確認された。29号，30号住居址を切り，25号，26号住居址によって切られている。平面形態は長方形を呈しており，長軸方向6.1m，短軸方向5.2m を測る完全な平面形の住居址である。床面積は29.0㎡，主軸方向は東西で，その方位はＮ－77°－Ｅである。壁高は北側が50cm，東側は45cmであり，上面は一部削平を受けており，本来の深さを保っていない。ベッド状遺構は西側に１基造られており落差は約15cm程である。ベッドとしては規模が小型であることや，棟方



第132図　28号住居址実測図

向の最端部であることから，出入口の遺構（ステップ）とも考えられる。炉は2本の主柱穴間の中心線よりやや離れる状態で1基検出された。なお周辺部にはマット状に炭化物がぶ厚く散在する。主柱穴は2本であり，途中に段を有する2段掘りの形状で非常に深い。貯蔵穴は南側に不整形状で1基有しており，底面には10～15cmの熔岩質ぐり石が17個不規則に配置されていた。ベンガラが内2個に付着し，カーボンも遺構内に入り込む。

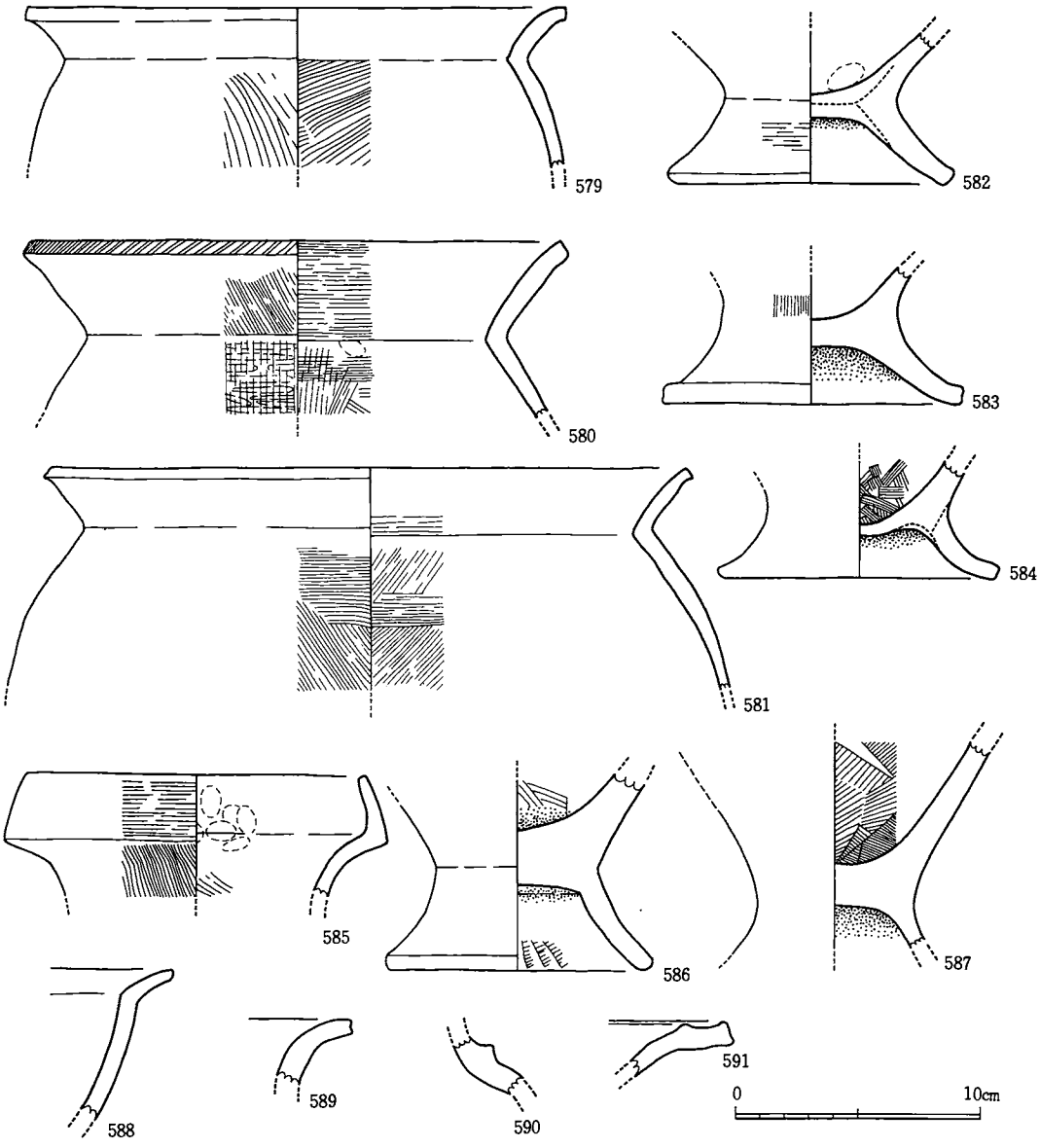
住居址の覆土は6層にわかれている。上層より黒褐色土，褐色土，黄色土混入黒褐色土，黒色土混入褐色土，黄褐色土混入黒褐色土，黒褐色粘質土の順となる。なお南西側には本住居址の覆土上面に26号住居址の貼り床痕跡が見られる。

出土状況では，住居址内に遺物が散在して分布する。出土した遺物の内，番号を付して取り上げた資料は131点であるが，この内図化できたものは41点となり，内28点をここに掲載した。出土した遺物の内訳は土器類では甕8点，壺4点，鉢1点である。鉄器は4点であり全てが鏃である。石器では石鏃が3点，石包丁が4点，紡錘車1点，砥石3点である。土器に対して比較的に石器の出土量が多い。遺物の出土層位は上層のものは小破片であり，3層中より579,581,586等の大型の資料が出土する。さらに最下層及び床直上，密着の資料として583，584の甕脚台，及び585の壺等があげられる。鉄器は592，595が2層中の出土で，他は上層よりの流れ込みである。石器類では597，605が3層中より出土するが，さらに下層及び床密着，直上から一連の石器598，601，602が出土し，この住居址の時期判定の好資料となる。住居址の廃絶に際しては，下層の資料は原位置を保っていたものと思われ，その後西側から埋没して，最終的には上位の住居址に切られたものと考えられる。

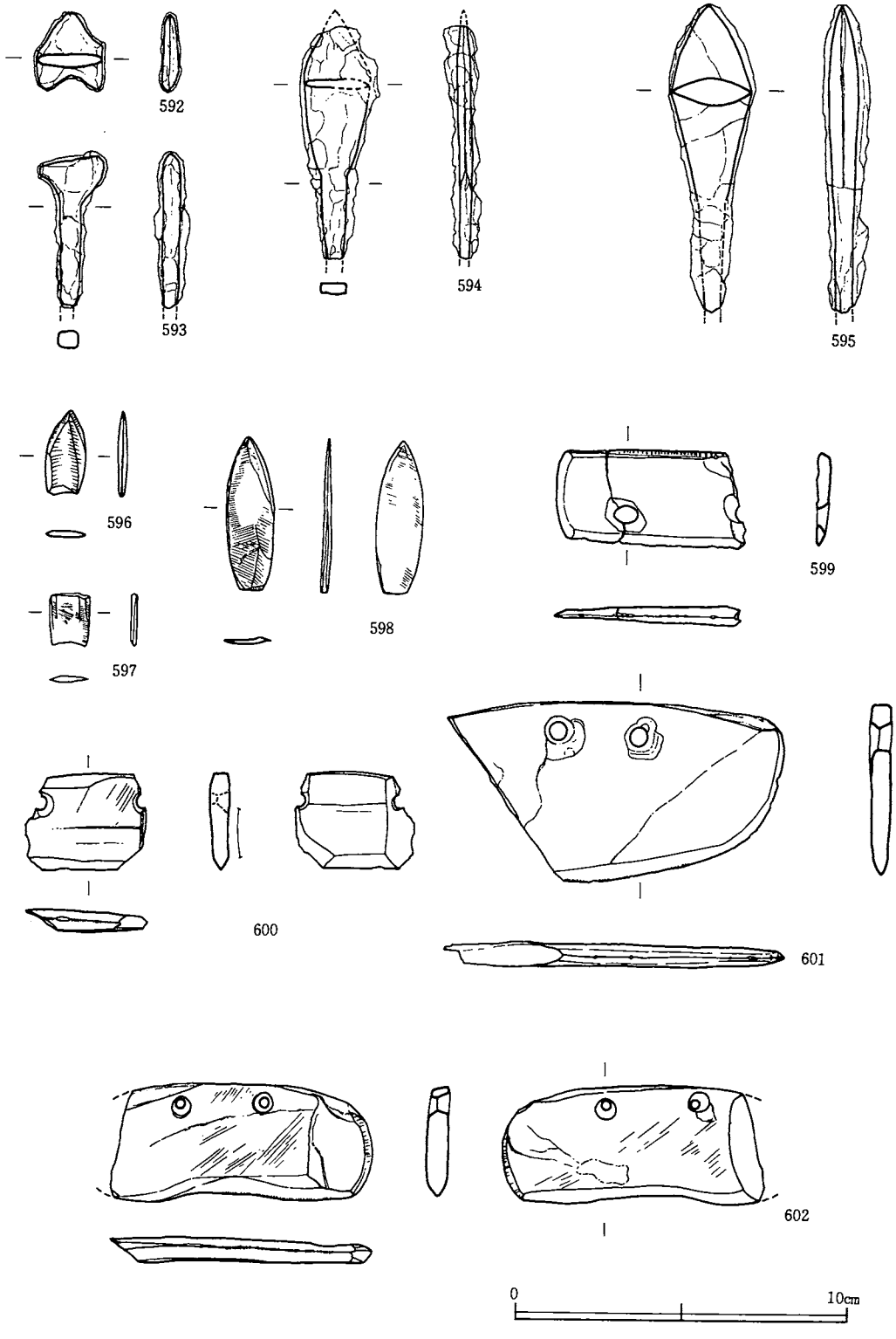
28号住居址内出土土器（第133図）

579は甕である。口縁部は丸みをもって内湾し端部はやや平行する。外面下位は斜方向の刷毛目調整の後にヨコナデを施し，口縁部は内外面ともヨコナデ調整である。内面下位は斜方向の刷毛目調整を施す。**580**は甕である。胴部外面はヨコ方向の叩き目を行ない，タテ方向の刷毛目，最後にナデで仕上げる。口縁部外面は斜方向の刷毛目の後ナデで調整。口縁端部は叩き目で刻みを入れる。口縁部内面はヨコ方向の刷毛目の後ナデ仕上げ，胴部内面はヨコ及び斜方向の刷毛目を行ない，強いナデで仕上げる。**581**は本住居址で最も大型の甕である。胴部の張りは強く，口縁部は外傾する。胴部外面はヨコ及び斜方向の刷毛目の後ナデで仕上げる。口縁部の内外面はヨコナデ調整。胴部内面は斜方向の刷毛目の後にヨコ方向の刷毛目調整を重ねる。**582**は甕の脚台である。外面はヨコ方向の刷毛目の後ヨコナデ仕上げ。胴部内面は指頭圧痕が見られる。脚内面はヨコナデ調整であり，砂粒が付着する。なおこの資料は脚台の取り付け状況が判明する資料である。**583**は甕の脚台である。外面はタテ方向の刷毛目が一部に見えるが，ヨコナデで消す。底部内面は強いナデを，脚台内面は砂粒の付着が見られ，ヨコナデ調整を施す。

584は甕の脚台部である。外面はヨコナデ調整，底部内面には不整方向の刷毛目調整が見られる。脚台内面には砂粒が付着する。この資料では断面観察から，甕の底部に脚を貼り付け，脚内面に支持土をつけた状況が伺える。**585**は壺の口縁である。袋状の形状をなしており，残存高は5.1cmを測る。口縁部外面上位はヨコ方向の刷毛目の後ナデ調整，下位はタテ方向の刷毛目調整を行なう。内面は斜方向の刷毛目の後ヨコナデで仕上げ，一部に指頭圧痕が残る。**588**は甕の脚台である。甕の底部厚は2.2cmを測り，ぶ厚い。外面はヨコ方向のナデを施し，強い稜を有する。脚台内面には少量の砂粒が付着し，ヘラ削りの後にナデ調整を行なう。底部内面は刷毛目をナ



第133図　28号住居址内出土土器実測図

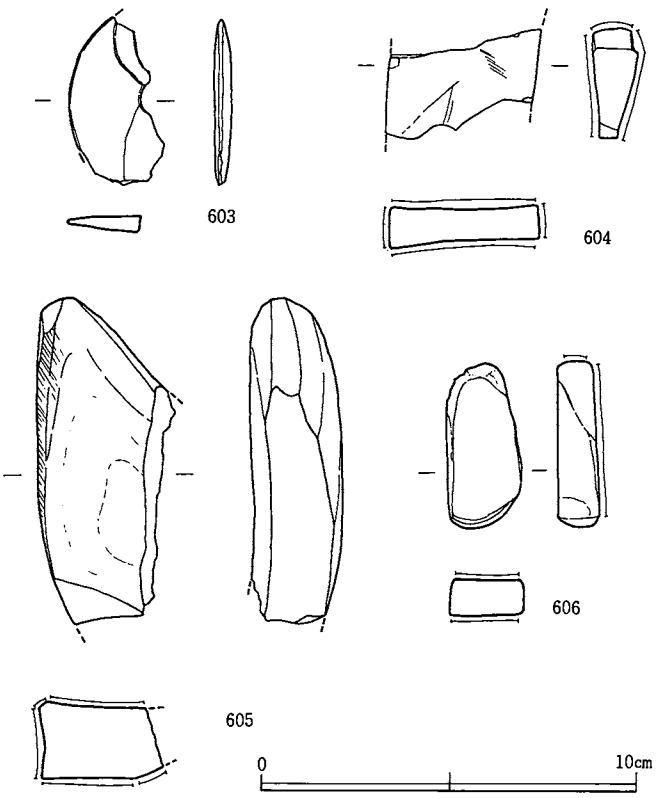


第134図　28号住居址内出土鉄器・石器実測図（その1）

デ消しており，この面にも砂粒が付着する。**587**は甕の脚台である。外面は不整方向のナデ調整を施し，脚台の内面には砂粒が付着する。底部内面は不整方向の刷毛目調整を行なう。**588**は鉢の口縁部である。外面はヨコ方向の刷毛目調整の後ナデで仕上げる。内面は斜方向の刷毛目の後ヨコ方向のナデ調整を重ねる。なお口縁部外側に黒斑あり。**589**は甕の口縁部片である。外面はタテ方向の刷毛目調整を，内面はヨコ方向の刷毛目調整を施す。**590**は壺の頸部片である。両端つまみあげ状の突帯が貼り付けられており，内外面ともヨコ方向のナデ調整である。**591**は壺の口縁部片である。外面はタテ方向の刷毛目の後ナデ調整，内面はヨコ方向の刷毛目の後にナデで仕上げる。

28号住居址内出土鉄器，石器（第134，135図）

592は無茎五角形式の鉄鏃である。完形であり，全長2.3㎝を測る。小型であり，基部を弧状に抉りこむ。重量4.6g。**593**は有茎三角形式の鉄鏃である。茎部が欠損している。鏃頭部が基本的には方形をしており，鋒が斜めであり不整形となる。**594**は有茎三角形式の鉄鏃である。茎部が欠損する。形態上柳葉形をしており，関部が不明瞭であり，大型で幅広い。**595**は有茎三角形式の鉄鏃である。茎部が欠損する。柳葉形をなしており，大型で幅が広い。**596**は有抉の石鏃である。完形で全く欠損がない。長軸に対してやや幅が広い。重量は1.20g である。**597**は有抉の石鏃である。上部が欠損している。長軸に対し，幅が狭い。研磨のおよばない部分が下位に見られる。**598**は無抉の石鏃である。完形であり，重量は2.60g である。長軸に対してやや幅が狭くなる。研磨のおよばない部分が両面にある。**599**は石包丁である。右側及び裏面が欠損している。穿孔側に刃部を持ち，従来とは逆で，裏面欠損後は左端部を磨きなおしている。**600**は石包丁である。両端が欠損している。形



第135図　28号住居址内出土石器実測図（その2）

態は長方形を成しており，欠損後は砥石として再利用している。表面には斜方向及びヨコ方向の磨痕が残り，裏面は使用により窪む。**601**は石包丁である。形状は刃部，背部が弱く外湾し台形状を呈している。左側が欠損する。穿孔部に未貫通の部分があり，再度やりなおしている。周囲には剝離した状況が見られる。なお背部には手ずれ糸ずれによる光沢が確認される。**602**は石包丁である。左側が欠損する。平面形態は長方形を呈するが，刃部中央が使用の為で，強く窪む。刃部には穂採み時と思われる使用痕が認められる。また欠損部に近い刃部には手ずれと思われる磨耗が見られる。**603**は紡錘車である。右側が欠損している。石材は緑色結晶片岩である。**604**は砥石である。上下側が欠損している。研磨面は5面であり，よく使用されている。**605**は砥石である。右側及び下側が欠損している。使用のため中央部が窪む。研磨は3面であり，よく使いこまれている。**606**は砥石である。完形であり，表裏面ともよく研磨され，平担となる。研磨は3面である。

(27) 29号住居址（第136図）

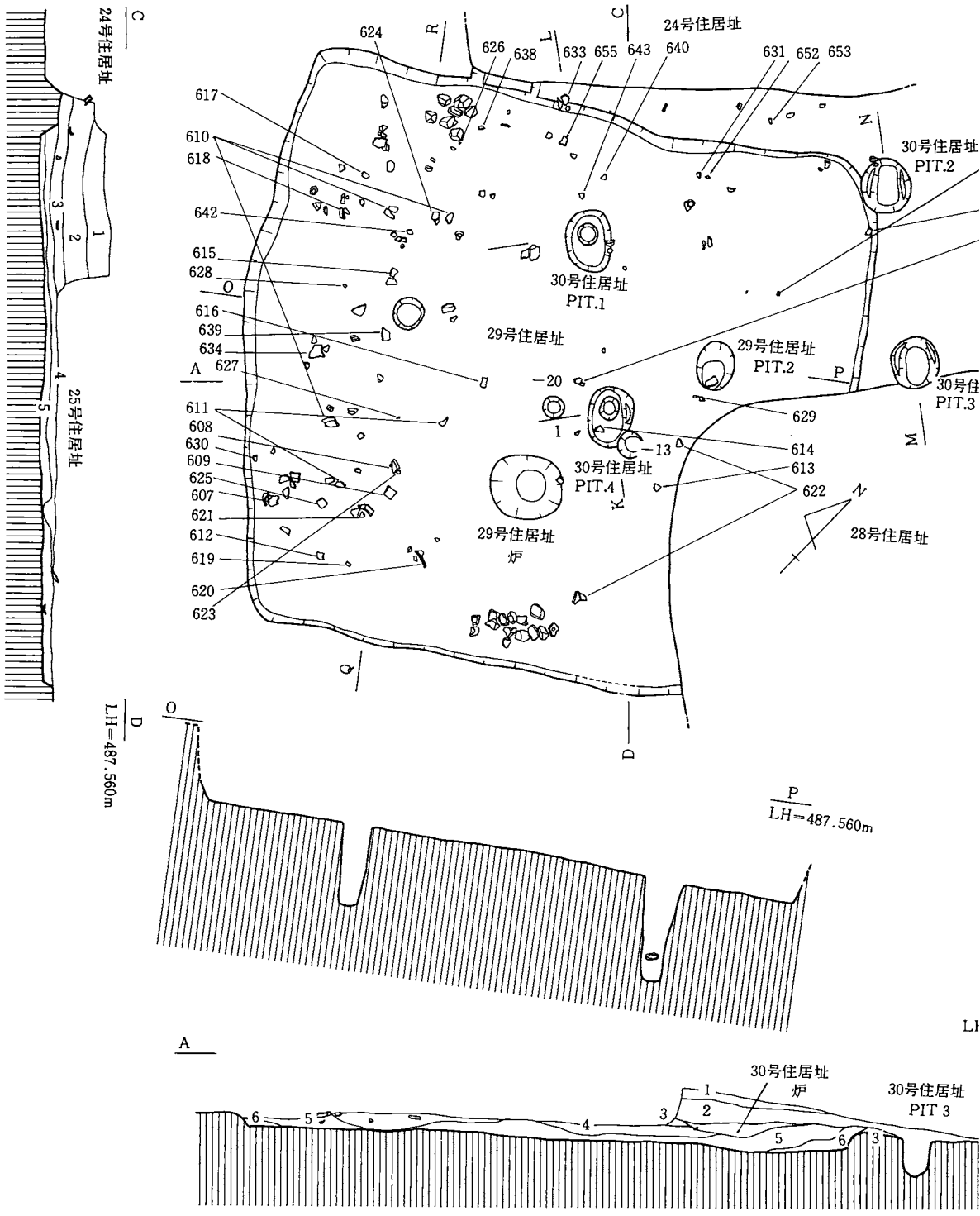
③―ⓔ区内，調査区南側に位置している。30号，25号，28号住居址に切られ，平面形の想定される住居址である。平面形態は直方形で平面規模は長軸方向5.9m，短軸方向5.4m，想定床面積33.1㎡である。主軸方向は東西で，主軸方位はN－51°－Eとなる。壁高は上面が他住居址に切られている為に北側で45cm，西側ではわずか20cmである。炉は中央部よりやや南側に偏って1基位置する。主柱穴は2本であり，共に径が30～45cmと小型で深い。PIT，2には熔岩塊の10cm角の小石が埋められている。貯蔵穴は通常の掘り込み型のものは見られないが，掌石を配置した遺構が2基確認されている。南側には熔岩製の掌石を14個集めた一群，北側には同質のもの7個を集めた一群のそれである。なおベッド状遺構は確認されていない。

住居址の覆土は大半が25号住居址に切られていた為に，残りの箇所のみであるが3層に分かれる。上層よりブロックを含む茶褐色土，茶褐色土，明黒褐色土になる。

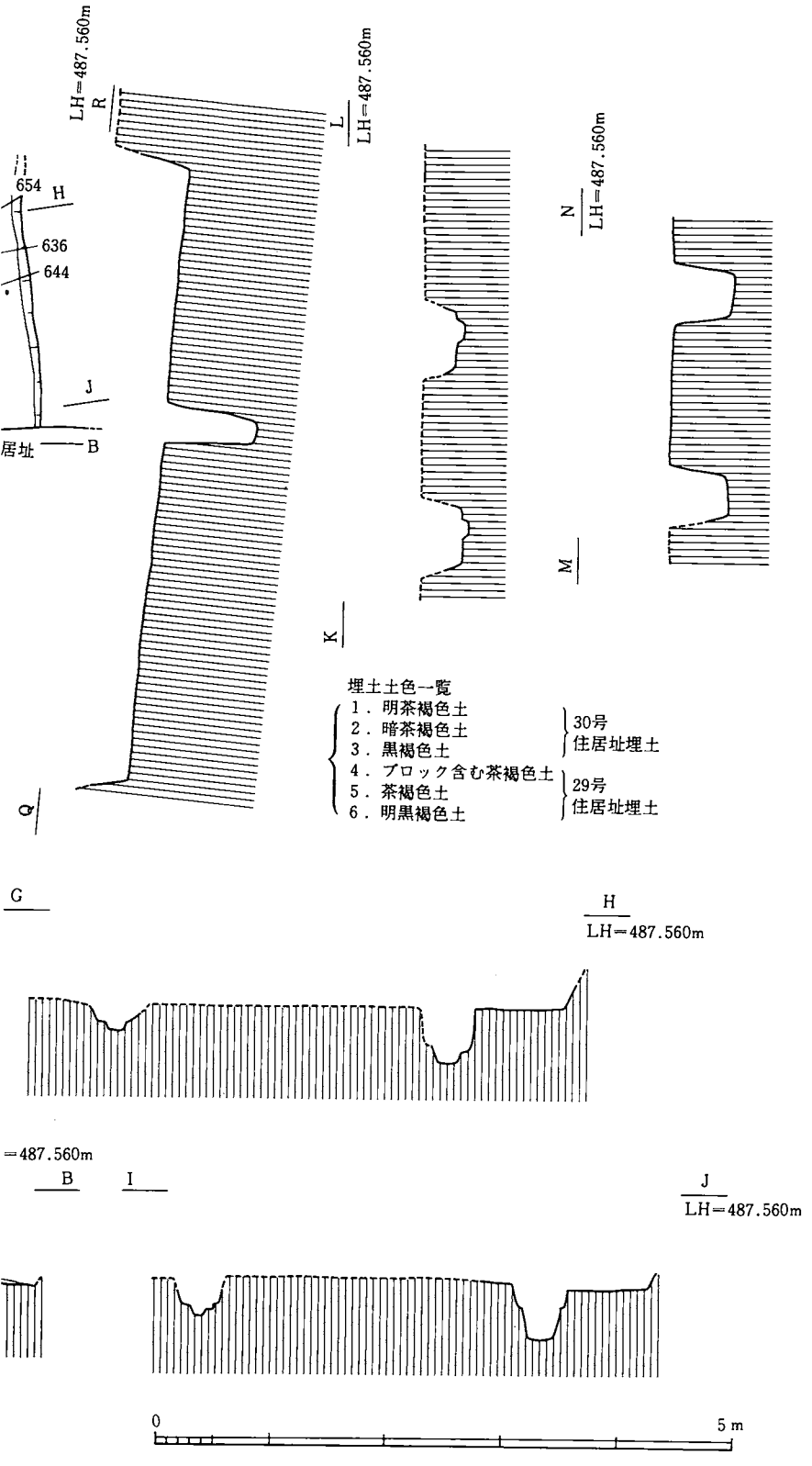
出土状況では，遺物類は住居址内に広く散在する。番号を付して取り上げた資料60点中，図化できたものは45点であり，ここでは23点を掲載した。出土遺物の内訳は土器類では甕13点，壺5点である。鉄器の出土は全くなく石鏃が4点，石包丁1点となる。遺物の出土層位は大きく2分される。上層（4層）中に大多数の資料が含まれており，下層（5層）中には一部の遺物と石器が含まれる。それは607，616，622の土器と626～630までの全ての石器である。住居址の廃絶に際しては少量の土器と石器類が同位置にあったものと考えられ，他の資料はその後の流れ込みによるものと考えられる。

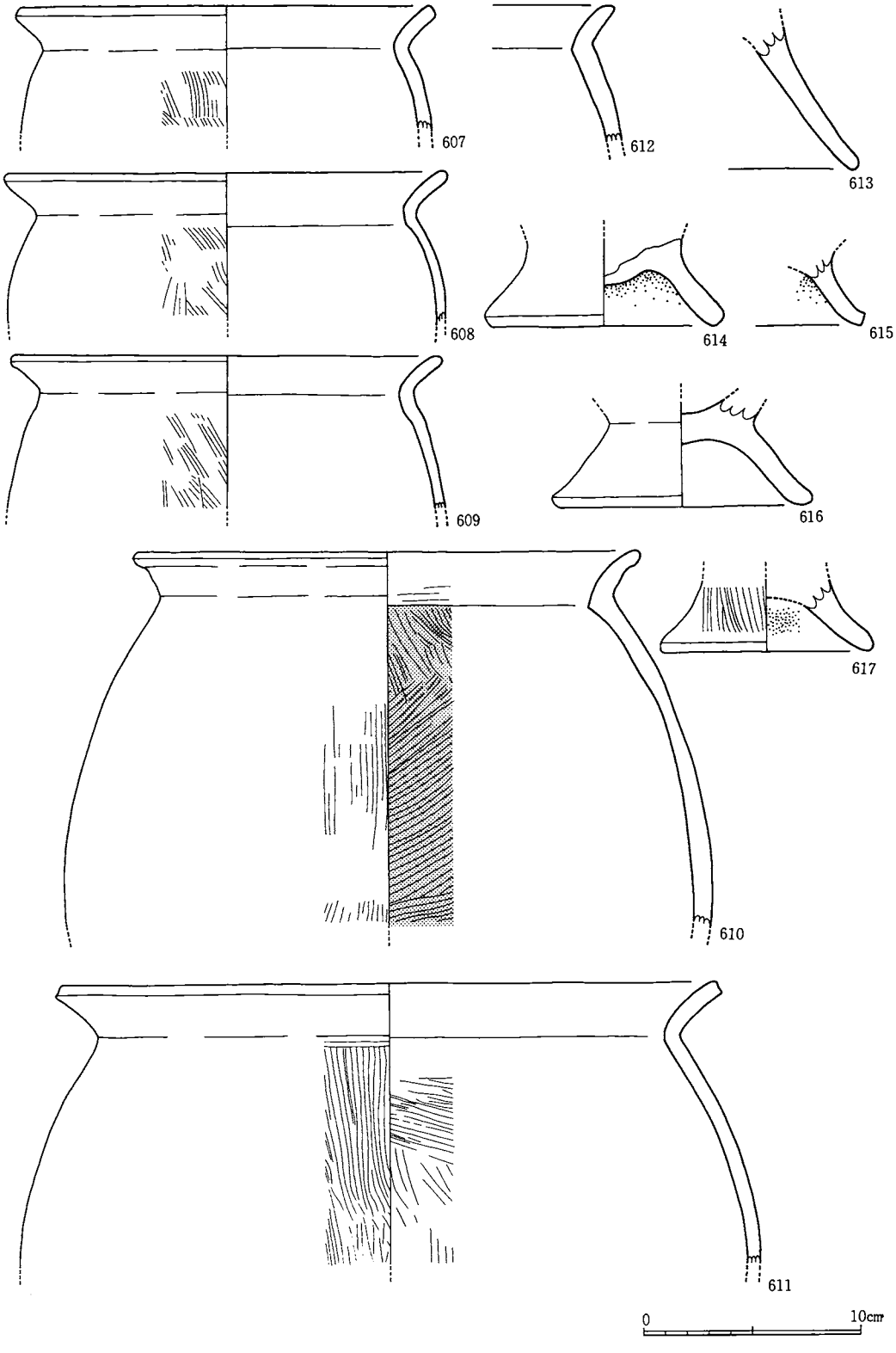
29号住居址内出土土器（第137，138図）

607は甕である。残存¼での復元。口径19.6cmと比較的に小型である。口縁部外面はヨコ方向



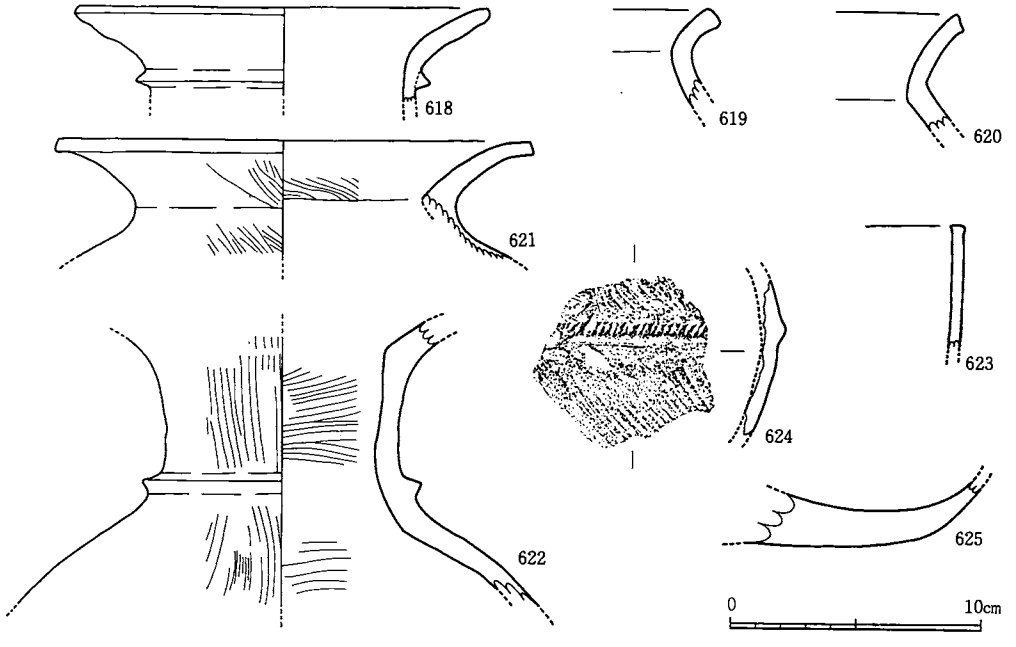
第136図　29号・30号住居址実測図


LH=487.560m
R
L
LH=487.560m
654
H
636
644
J
居址
B
N
LH=487.560m
M
K
埋土土色一覧
1．明茶褐色土
2．暗茶褐色土
3．黒褐色土
30号
住居址埋土
4．ブロック含む茶褐色土
5．茶褐色土
6．明黒褐色土
29号
住居址埋土
Q
G
H
LH=487.560m
=487.560m
B
I
J
LH=487.560m
0
5 m



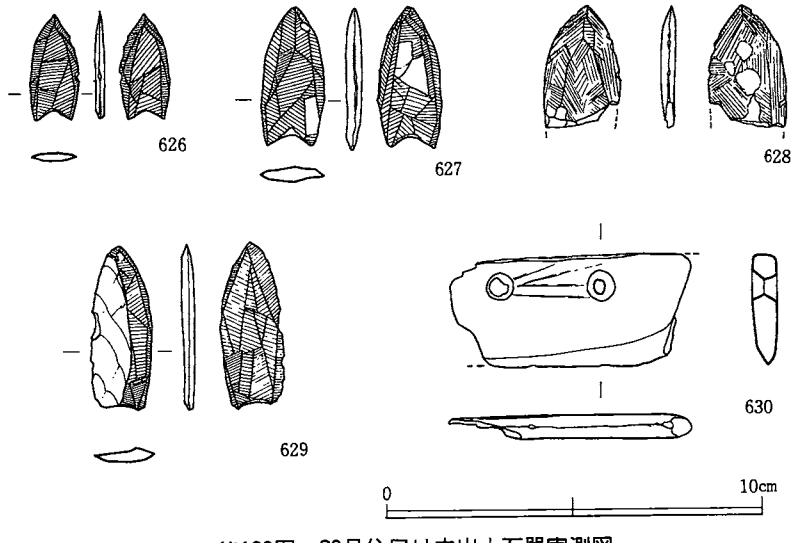
第137図　29号住居址内出土土器実測図（その１）

のナデ調整，胴部外面はタテ方向の刷毛目調整の後刷毛目調整を重ねる。内面は全面にわたりヨコ方向のナデ調整を施す。**608**は甕である。残存¼での復元。この資料も胴部の張りは弱く，頸部の屈曲はゆるやかである。口縁部外面はタテ方向の刷毛目の後ヨコ方向のナデ消しを行なう。胴部外面は斜方向の刷毛目の後ヨコ方向のナデ調整を施す。口縁部内面はタテ方向の刷毛目の後ヨコ方向のナデ調整を，胴部内面は斜方向のナデ調整を行なう。**609**は甕である。頸部への押圧が強く窪みを有する。口縁部外面はヨコ方向のナデ調整，胴部外面は斜方向の刷毛目の後ナデ調整を行なう。内面は一部タテ方向の刷毛目調整を後，全体にナデ調整を施す。**610**は大型の甕である。底部は欠損するが，残存⅙の復元である。口径23.7cm，胴部最大径30.1cm，残存高17.5cmを測る。胴部の張りは強く，最大径は中位に位置する。頸部は強く屈曲し，内面には鋭い稜が造られる。口縁部は短く，外湾して立ち上がる。外面上位はヨコ方向のナデ調整を下位はタテ方向の刷毛目の後にヨコ方向のナデ消しで仕上げる。口縁部内面はヨコ方向の刷毛目の後ナデ調整を行なう。胴部内面は上位では斜方向の刷毛目を丁寧に，その後方向を変えて刷毛目調整を重ねる。なお内面には赤色顔料が塗布されている。**611**は大型の甕である。胴部～底部にかけて欠損しており，残存⅕の復元である。口縁部外面はヨコ方向のナデ調整，胴部外面はタテ方向の刷毛目調整の後ヨコ方向のナデ調整により仕上げられる。口縁部内面はヨコ方向のナデ調整を，斜方向及びタテ方向の刷毛目調整を重ねる。上位は一部ナデ消される。**612**は甕の口縁部である。口縁部は内外面ともヨコ方向のナデ調整を，胴部外面は斜方向の刷毛目の後にヨコ方向のナデ調整を施す。胴部内面は斜方向の刷毛目の後，一部ナデ消しを行なう。**613**



第138図　29号住居址内出土土器実測図（その２）

は甕の脚台である。脚台高は高く外面は斜方向の刷毛目の後ヨコ方向のナデ調整を行なう。内面は上位に波状の刷毛目調整が，その下位にはヨコ方向のナデ調整を行なう。**614**は甕の脚台部である。外面はタテ方向の刷毛目の後ヨコ方向のナデ調整を行なう。内面には砂粒が付着しており，その下位はヨコ方向のナデ調整を行なう。**615**は甕の脚台部である。内外面ともヨコ方向のナデ調整を，なお内面には砂粒が付着する。**616**は甕の脚台部である。外面はヨコ方向の刷毛目の後にヨコ方向のナデ調整を行なう。脚台内面はヨコ方向のナデ調整を施す。**617**は甕の脚台部である。外面はタテ方向の刷毛目の後，ヨコ方向のナデ調整を行なう。内面は砂粒が付着し，ヨコナデで仕上げる。**618**は壺の口縁部と考えられる。残存⅓の復元。外面には断面三角形の突帯が付き，内外面ともヨコ方向のナデ調整で仕上げる。**619**は壺の口縁部である。口縁部は短く，胴部へとつながる。外面はヨコ方向の刷毛目の後，ナデ調整。内面はヨコ方向のナデ調整を行なう。**620**は壺の口縁部である。口縁部外面はヨコ方向のナデ調整，胴部外面はタテ方向の刷毛目の後ナデ調整を行なう。内面は斜方向の刷毛目の後ヨコ方向のナデ調整で仕上げを施す。**621**は壺である。口径⅓での復元。口縁部のみで，胴部は欠損している。外面はタテ方向の刷毛目の後にヨコ方向のナデ調整を行なう。内面は斜方向の刷毛目の後にヨコ方向のナデ調整を施す。**622**は壺の頸部である。残存⅓の復元。残存長11.5cmを測るが，口縁部及び胴部側が欠損する。頸部外面には断面三角形の突帯を貼り付ける。外面はタテ方向の刷毛目の後ヨコ方向のナデ消しを行なう。内面はヨコ方向の刷毛目の後一部をヨコ方向のナデ調整を行なう。**623**は壺の口縁で直立する。口縁端部付近はヨコ方向のナデ調整，外面はタテ方向の不規則な刷毛目調整。内面はタテ方向の刷毛目の後，ヨコ方向のナデ調整を施す。**624**は壺の胴部片である。１条の突帯を有しており，そこには斜方向の刻み目を２～４mm間隔で施す。外面は斜方向の刷毛目の後，突帯部周辺のみをヨコナデ調整を行なう。なお内面は剝離し，調整は不明である。**625**は鉢の底部と思われるが形状は不明である。胴部側の器壁は薄く５mm，底部側は2.1cmを測る。外面はタテ方向の刷毛目調整。底部は２方向の刷毛目を重ねた後にナデ調整，内面はヨコ方向の刷毛目調整である。



第139図　29号住居址内出土石器実測図

29号住居址内出土石器（第139図）

626は有抉の石鏃である。完形であり全長2.8cm，幅1.38cm，厚2.5mmであり重量は 0.9g である。全面にわたり研磨調整が施されている。**627**は有抉の石鏃である。完形であり全長 3.7cm，幅1.70cm，厚 4.5mmで，重量は 3g である。比較的に厚みがあり，一部に剝離面を残す。**628**は磨製石鏃である。基部が欠損するため，抉の有無は不明である。比較的に肉厚であり，裏面に剝離面を残す。**629**は有抉の石鏃である。平面形態としては完形であるが表面の左側に剝離面を残す。左右は対称とならない。残存長4.52cm，幅1.60cm，厚 3.8mmを測る。**630**は石包丁である。中央部のみが残り左右が欠損している。残存長6.45cm，幅3.00cm，最大厚 7.0mmである。穿孔部付近には線条痕が残る。

(28) 30号住居址（第136図）

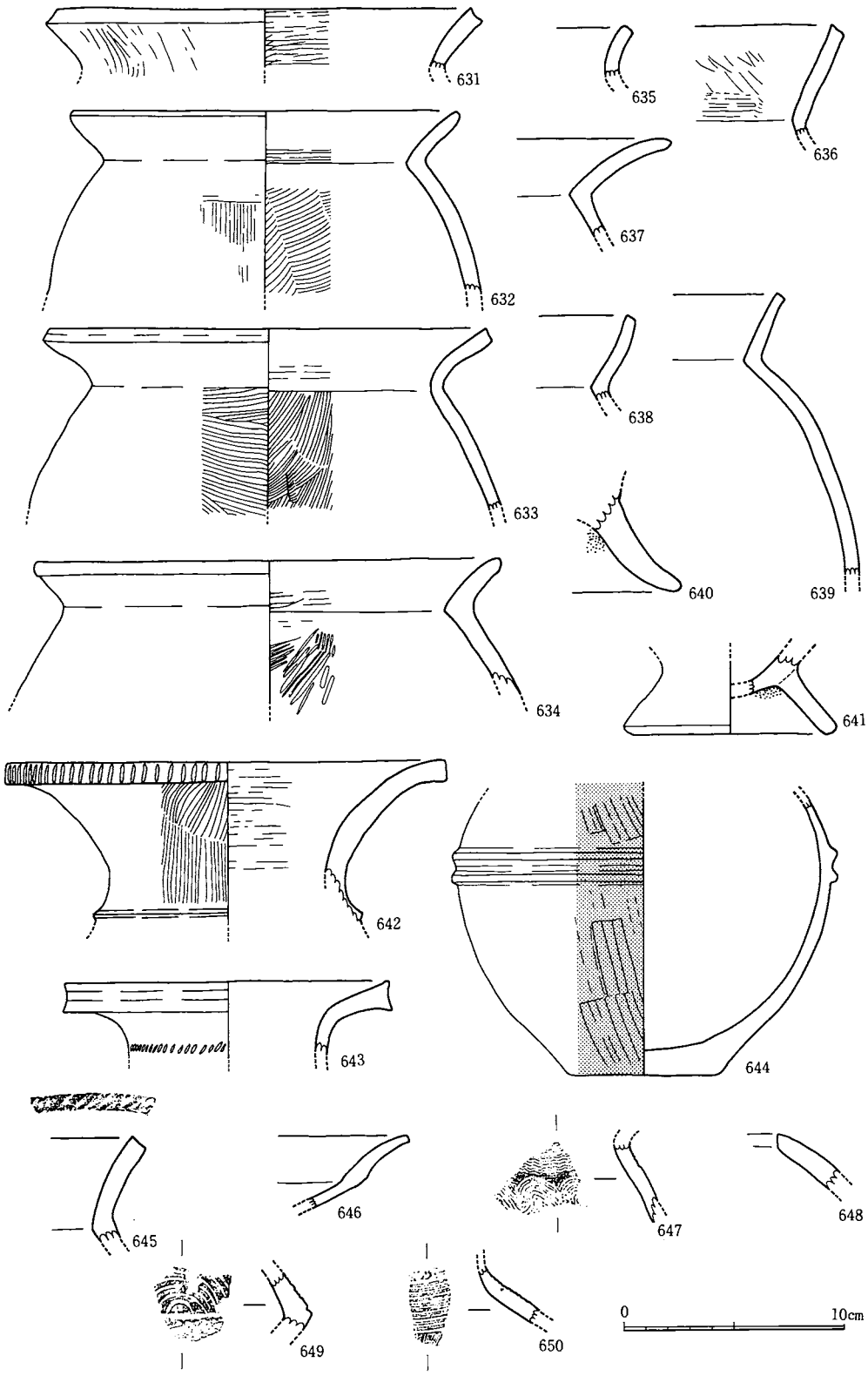
③—ⓔ区内，調査区南側に位置している。29号住居址を切り，28号住居址に切られる。平面形態は長方形であると想定され，残存規模は長軸方向5.1m，短軸方向3.2m を測る。主軸方向はほぼ東西で，主軸方位はＮ－40°－Ｅとなる。壁高は，上面の削平によって東側がわずかに残るのみで，20cmを保つ。炉は29号，30号住居址の縦断面上にかかっており，平面は半截の状態である。主柱穴は４本であり，そのいずれにも盤石は見られない。PIT，1 及びPIT，4 は上端径60cm内外で，二重の掘り方を持った柱穴であり段差を有している。残りのPIT，2及び3も大型で中段にステップを有している。貯蔵穴及びベッド状遺構は確認されていない。

住居址の覆土は，残存する北側においては３層から成っている。明茶褐色土，暗茶褐色土，黒褐色土の順であり，最大層のものはPIT，3 内にも埋まる。

出土状況では，住居址内部に全般的に広く資料が散布する。番号を付して取りあげた資料は28点であり，その内図化したものは26点で，ここでは25点を掲載した。出土遺物の内訳は土器類では甕10点，壺９点，高坏及び鉢各１点である。鉄器では鉇が１点出土し，石器は鏃，石包丁が各１点である。なお石製勾玉も１点出土する。遺物の出土層位は上層（１～２層）まで比較的に大型の破片を含んで出土するが，中層である３層中からは638，640，642，648の土器及び653，654の石器となる。なお658の石製勾玉も最下層からの出土である。住居址の廃絶に際しては３層及び最下層の資料をのぞき，流れ込みによるものと考えられる。

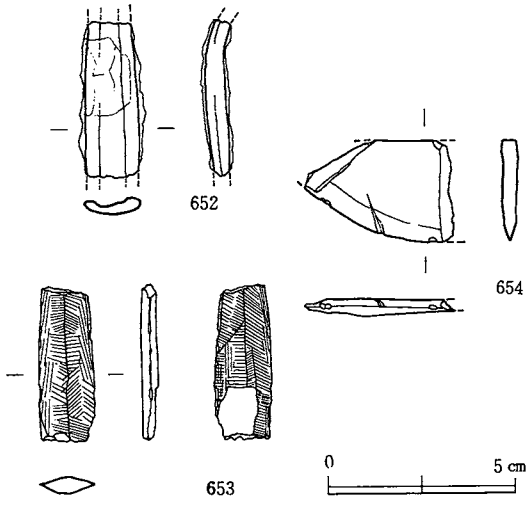
30号住居址内出土土器（第140図）

631は甕である。残存⅓の復元。外面はタテ方向の刷毛目の後ヨコ方向のナデ調整を施す。内面はヨコ方向の刷毛目調整である。**632**は甕である。残存⅓の復元。胴部は張り，頸部のくびれは強い。口縁部外面はヨコ方向の刷毛目の後ヨコナデ調整を，胴部下位はタテ方向の刷毛目の後ナデ調整を施す。口縁部内面はヨコ方向の刷毛目の後，ヨコ方向のナデ調整。胴部上位はヨ



第140図　30号住居址内出土土器実測図

コナデ消し，下位は斜方向の単位幅2.2～2.4cmの刷毛目調整が見られる。**633**は甕である。残存⅛の復元。口縁部外面はヨコ方向のナデ調整，胴部外面には叩き目の後に，ヨコ方向の刷毛目調整を行なう。口縁部内面はヨコ方向のナデ調整，胴部内面は斜方向の刷毛目調整を施す。**634**は甕である。頸部の窪みは強く内面には強い稜を造る。外面はヨコ方向のナデ調整。口縁部内面はヨコ方向の刷毛目の後，ヨコナデ調整。胴部下位は斜方向の刷毛目の後，ナデ調整を行なう。**635**は甕の口縁部片である。内外面とも丁寧なヨコ方向のナデ調整を行なう。**636**は甕の口縁部である。外面は斜方向の刷毛目の後，ヨコ方向のナデ調整を行う。内面は斜方向の刷毛目の後ヨコ方向のナデ調整を施す。**637**は壺の口縁部である。頸部は強く屈曲する。外面はタテ方向の刷毛目の後，ヨコ方向のナデ調整を施す。内面はヨコ方向の刷毛目調整の後ヨコ方向のナデ調整を施す。**638**は甕の口縁部である。内外面ともヨコ方向のナデ調整で仕上げる。**639**は甕である。部分的な破片であるため復元径は求められない。口縁部外面はヨコ方向のナデ調整，胴部外面は斜方向の刷毛目調整を施す。口縁部内面はヨコ方向の刷毛目の後ナデ調整を行なう。内面は斜方向の刷毛目の後部分的にナデ仕上げ。**640**は甕の脚台片である。外面はヨコ方向のナデ調整，内面には砂粒が付着している。**641**は甕の脚台である。外面はヨコ方向のナデ調整，内面には砂粒が付着する。**642**は壺である。残存⅙での復元。口径20.2cm，残存高 7.2cmを測る。外面はタテ方向の刷毛目の後，ヨコ方向のナデ調整を施す。口縁端部はヨコナデの後にタテ方向の定間隔の刻み目を有する。内面はヨコ方向の刷毛目の後に，ヨコ方向のナデ調整を施す。**643**は壺である。残存は⅓で復元。口縁部内外面はヨコ方向のナデ調整を施す。なお頸部には斜方向の幅 5mm内外の刻み目が入れられている。**644**は壺である。口縁部を欠損しており，胴部最大径 17.55cm，残存高12.5cmを測る。外面には二重の突帯が貼り付けてあり，指圧により調整を行なう。他の外面はタテ方向の刷毛目調整を重ねる。底面は不定方向の刷毛目を施す。内面は不定方向のナデによる調整と指圧による調整で仕上げる。なお外面は底部を含め全面にわたり赤色顔料を塗布する。**645**は壺の口縁部である。口縁端部には斜方向の刻み目を入れており，その後ヨコ方向のナデ調整を行なう。外面はヨコ方向のナデ調整，内面はヨコ方向の刷毛目の後ヨコナデ調整を行う。**646**は高坏の口縁部である。内外面ともヨコ方向の刷毛目の後ヨコ方向のナデ調整を行なう。**647**は壺の頸部片である。外面上位には波状文が，中位には櫛描きの流水文を右側から左側

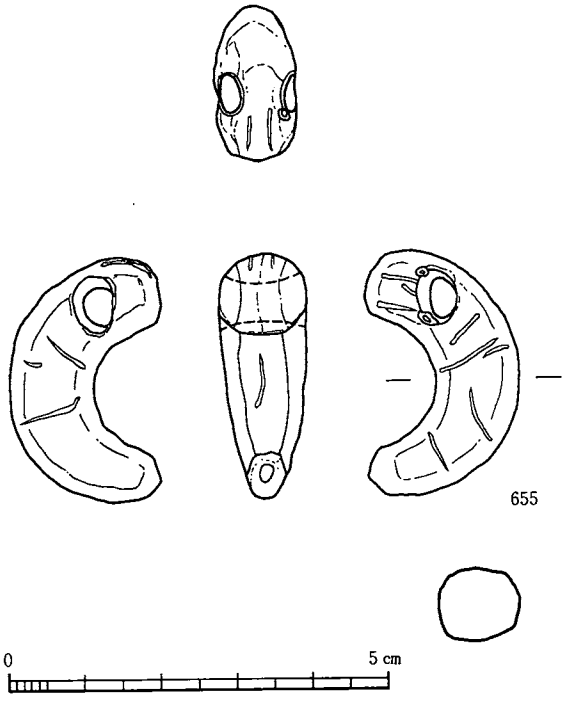


第141図　30号住居址内出土鉄器・石器実測図

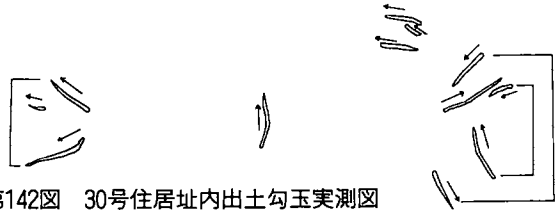
方向へと施す。内面は指圧の調整後ナデで仕上げる。**648**は鉢の口縁部片である。口縁端部は鋭さを持っている。内外面ともヨコ方向のナデ調整で仕上げる。**649**は免田式土器の壺である。上位は7本の同心円状の沈線が施されており，その後これらを1条のヨコ方向の条線が切る。さらに下位には円形の刺突文が定間隔に入れられている。**651**は壺の胴部片である。外面はタテ方向の刷毛目の後に，11本単位の沈線をヨコ方向に引く。内面は指圧での調整を施す。

30号住居址内出土鉄器，石器（第141図）

652は鉄製鉇である。鋒部先端部及び基部側が欠損する。残存長4.1cm，幅1.45cmを測る。この残存箇所は先端部に近く屈曲している。断面は浅いU字形であり，厚 5.5mmと肥厚する。**653**は磨製の石鏃である。先端及び基部が欠損するが，残存長4.10cm，幅1.40cm，厚 4.2cmを測る。細身で比較的鏃長が長いと思われる。裏面に剝離面が見られる。**654**は石包丁の破片である。右側部分及び左側側端部が欠損しており，さらには裏面も剝離している。石材は黒色結晶片岩である。



刻線位置関係図



第142図　30号住居址内出土勾玉実測図

30号住居址内出土勾玉（第142図）

本住居址より1点の石製勾玉が出土する。出土状況は埋土3層中より，弥生土器の細片と共にやや床面より10cm浮いた状態での出土である。**655**は硬玉製の勾玉である。全長3.3cm，断面形は左右にやや長い円形で9mm×12mmである。勾玉表面には条線が刻まれている。条線の位置関係図に示す通り，これらの条線は表面を基本面として2本1単位でなされている。表位置には中央部に内外面から方向をちがえて2本，さらに外側に2本の条線を刻む。さらに頭部に平行して2本の短い条線を引く。裏面は長い条線を内側から外側へ2本，

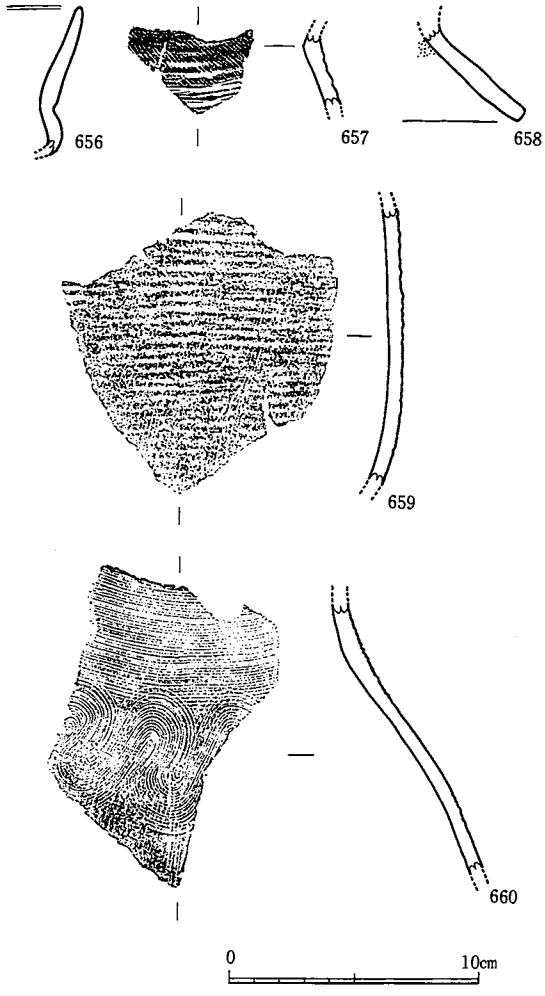
と短い条線を１本引く，腹部にも下方から上方に向かって１条描く。頭部には２本を１単位として背側から腹側へ描く。色調は黒色であり，条線部は白色となる。重量 7.34g である。

(29)　31号住居址（第47図）

②—ⓐ区，調査区最北端に位置しており，３号住居址の発掘作業の最終段階で検出される。住居址は北側が調査区外に出て，西側が２号住居址に切られている。残存規模は南北方向 2.3ｍ，東西方向 3.6ｍを測り，平面形態は方形を基調とし，主柱穴４本を配置したものと思われる。壁高は３号住居址に切られるため，残存20cm程である。炉は１基確認されるが，周辺部の炭化物の散布は微少であった。

住居址の覆土は，３号住居址の貼り床痕跡（黒褐色土に明褐色土のブロックが固まり硬くなる。）が上部をおおい，下位に明褐色土層が堆積する。

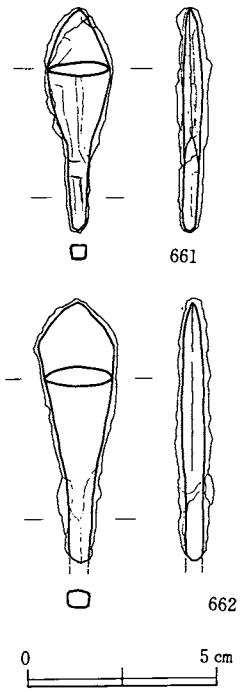
出土状況は本住居址上位が３号住居址に切られているため，ほとんど遺物は残存していない。少量の遺物が確認面から下側に出土し，番号を付して取り上げた資料は８点であり，図化できたものは５点のみであった。遺物の内訳は土器類では甕３点，壺及び小型丸底壺各１点である。鉄器は鏃２点の出土である。遺物の出土層位では657，661，662は下層に位置しており，住居址の時代を決定する資料と考えられる。住居址の廃絶の状況は不明である。



第143図　31号住居址内出土土器実測図

31号住居址内出土土器（第143図）

656は小型丸底壺である。残存は⅙，残存高は5.8cmを測る。体部は小型であり，口縁部はやや内湾気味に立ち上がる。口縁部外面はタテ方向の刷毛目の後，ヨコナデを施し，内面は斜方向の刷毛目の後ヨコナデ調整を行なう。体部外面は部分的な斜方向の刷毛目の後ヨコナデ調整を，



第144図　31号住居址内出土鉄器実測図

内面は指圧による整形を行なう。**657**は甕の胴部片である。外面は平行の叩き目を施し，一部斜方向の刷毛目を重ねる。内面はヨコ方向のナデ調整である。**658**は甕の脚台片である。外面はヨコ方向のナデ調整を，内面には砂が付着するものの，ヨコ方向の刷毛目の後ヨコナデ調整を施す。**659**は甕の胴部片である。外面に平行の叩き目を施し，斜方向の刷毛目を重ねる。内面はヨコ方向の刷毛目調整の後，タテ方向の刷毛目を重ねる。**660**は壺の胴部片である。外面上位はヨコ方向の強い刷毛目を施し，下位は2.2cm幅単位で流水文を右から左へと描く。内面は刷毛目での不定方向の調整である。

31号住居址出土鉄器（第144図）

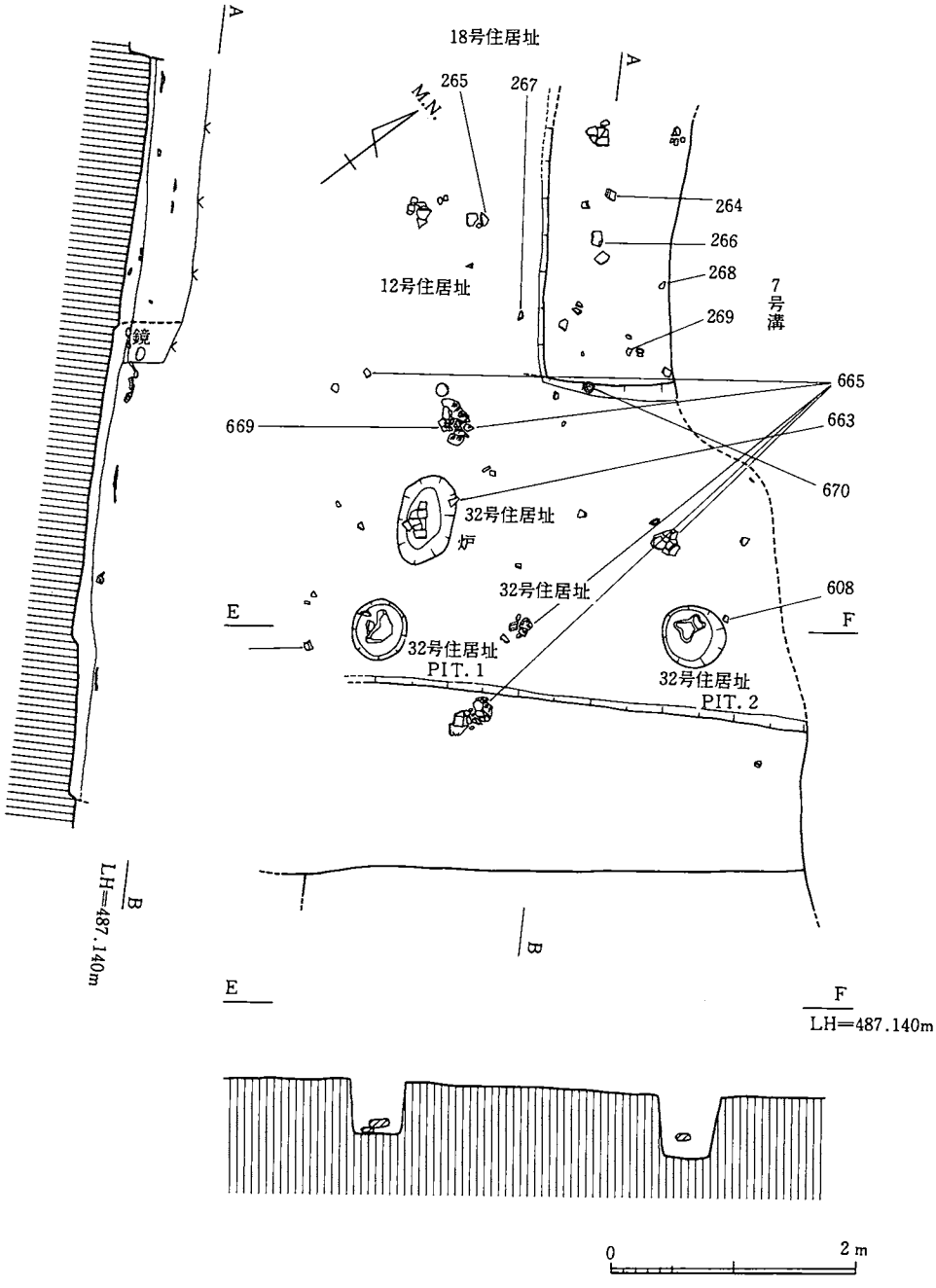
661は有茎三角形式の鉄鏃である。全長5.9cmを測り，完形である。柳葉形の形状を示しており，関部が不明確で全体的に細根である。茎の断面形はほぼ正方形である。**662**は有茎三角形式の鉄鏃である。茎が欠損しており，残存長6.9cmを測る。661同様柳葉の形状であるが，全体的には広根に属すると考えられる。

(30)　32号住居址（第145図）

②・③－ⓔ区内，調査区南部の東側に位置している。12号住居址を切り，24号住居址，5～7号溝によって切られる。平面形態は長方形であると想定され，残存規模は長軸方向4.5m，短軸方向4.0mを測る。主軸方位はN－39°－Eである。壁高は北側のみが確認され60cmを測るが，これは12号住居址との断面観察によるものである。ベッド状遺構は，東側に段差5cm程の低いが大型の遺構が確認される。炉は中央部に1基，主柱穴は2本が検出された。2本の主柱穴内には盤石が埋められており，PIT，2にはさらに根固めとして不整形の熔岩塊が用いられている。

住居址の覆土は2層からなり上層より明茶褐色土，暗茶褐色土に黒色の斑点を含む層である。

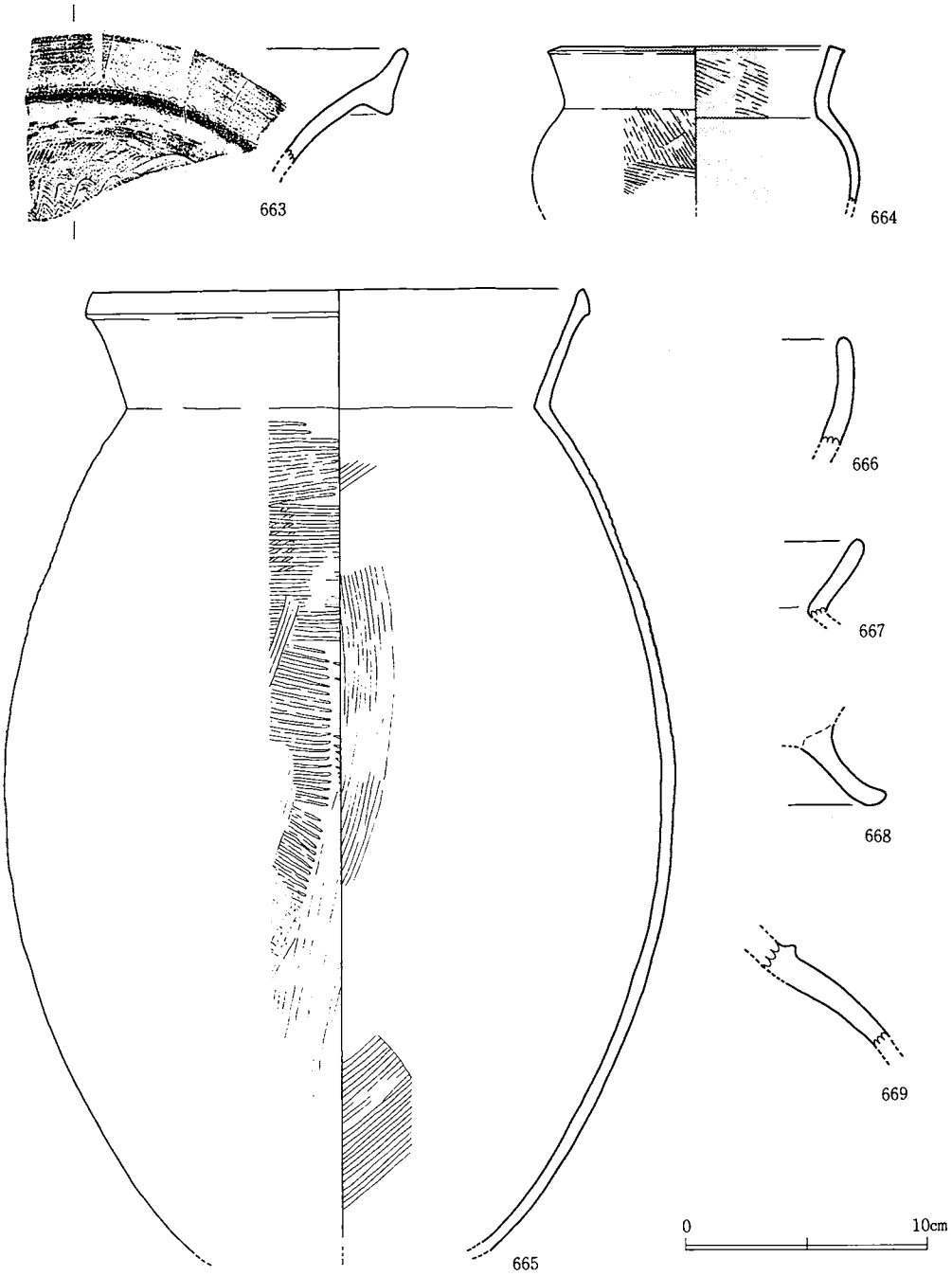
出土状況では，住居址上面が削平されている為に遺物類が部分的に散布している。番号を付して取り上げた34点内で図化出来たものは21点であり，ここでは7点を掲載した。出土遺物の内訳は，土器類では甕2点，壺2点，鉢2点である。なお鉄器，石器の出土はなく青銅鏡が1点出土する。出土の層位では，665の大型の遺物が1層中に割れて散在する。床直上及び最下層からは663，666～668，670の遺物が出土し，これらがこの住居址の時期を決定する。住居址の廃絶に際しては最下層の資料を除き，大多数の遺物類を投棄したものと考えられる。



第145図　32号・12号住居址実測図

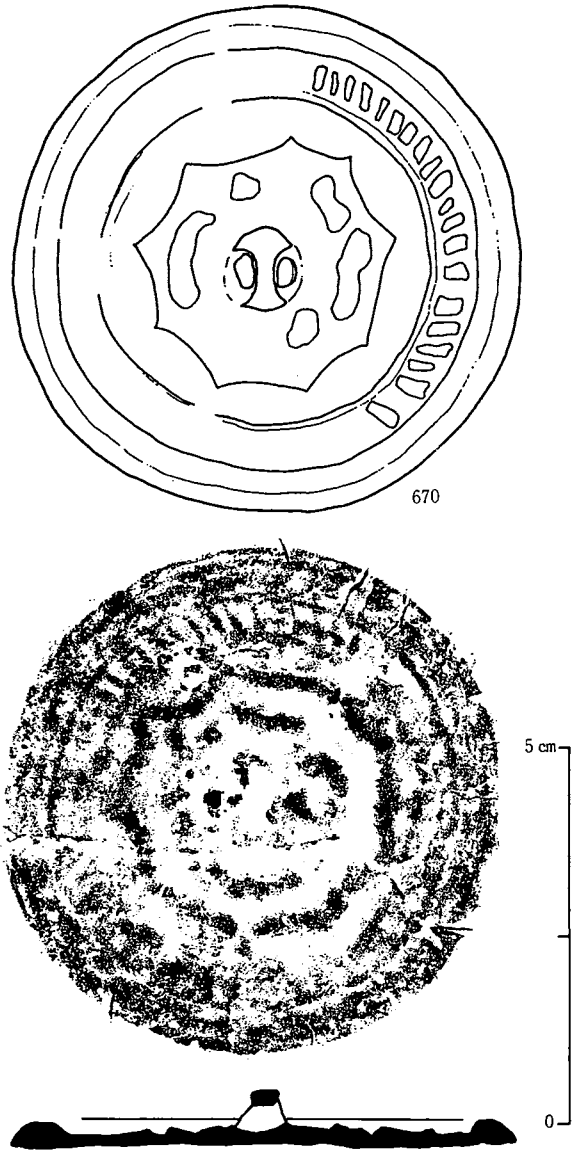
32号住居址内出土土器（第146図）

663は壺の口縁部片である。口縁部の外面上位はヨコ方向の丁寧なナデ調整を，下位は斜方向の刷毛の上にヨコナデを行なう。さらに下位には流水文が見られる。内面はヨコ方向の刷毛目の後に，ヨコ方向の丁寧なナデ調整で仕上げる。**664**は鉢である。残存高は 6.7cmを測る。外面



第146図　32号住居址内出土土器実測図

上位はヨコ方向のナデ調整を，下位はヨコないし斜方向の刷毛目の後にヨコナデ調整を施す。内面上位は斜方向の刷毛目の後にヨコナデを行う。下位はヨコ方向の丁寧なナデ調整である。**665**は甕のほぼ完形品である。底部が欠損するが，残存高39.4cmを測る。胴部の最大位置は中位よりやや下位置にあり，口縁端部は強く屈曲する。口縁部外面はヨコナデ調整を，胴部外面上位はヨコ方向の叩き目，中～下位は斜方向の叩き目を施す。下位は叩き目が残るがタテ方向のナデで仕上げる。内面上位ではヨコ方向のナデであるが，下位はタテ，斜方向刷毛目の上をヨコナデで仕上げる。胎土は中密で，焼成は良好である。**666**は鉢の口縁部片である。口縁部はやや内湾気味に立ち上がる。外面はヨコ方向の刷毛目の後にヨコナデで仕上げる。内面はヨコないし斜方向の丁寧なナデ調整である。**667**は甕の口縁部片である。内外面ともにヨコ方向のナデ調整である。**668**は甕の脚台片であり，接合部から破損したものと考えられる。内外面はヨコナデを行ない，一部無調整部分が残る。**669**は壺の胴部片である。両端からつまみ上げの形状の突帯が貼り付けられる。外面上位は斜方向の刷毛目の後ヨコナデ調整，下位は斜方向の刷毛目調整である。内面はヨコ方向の刷毛目調整である。



第147図　32号住居址内出土青銅鏡実測図

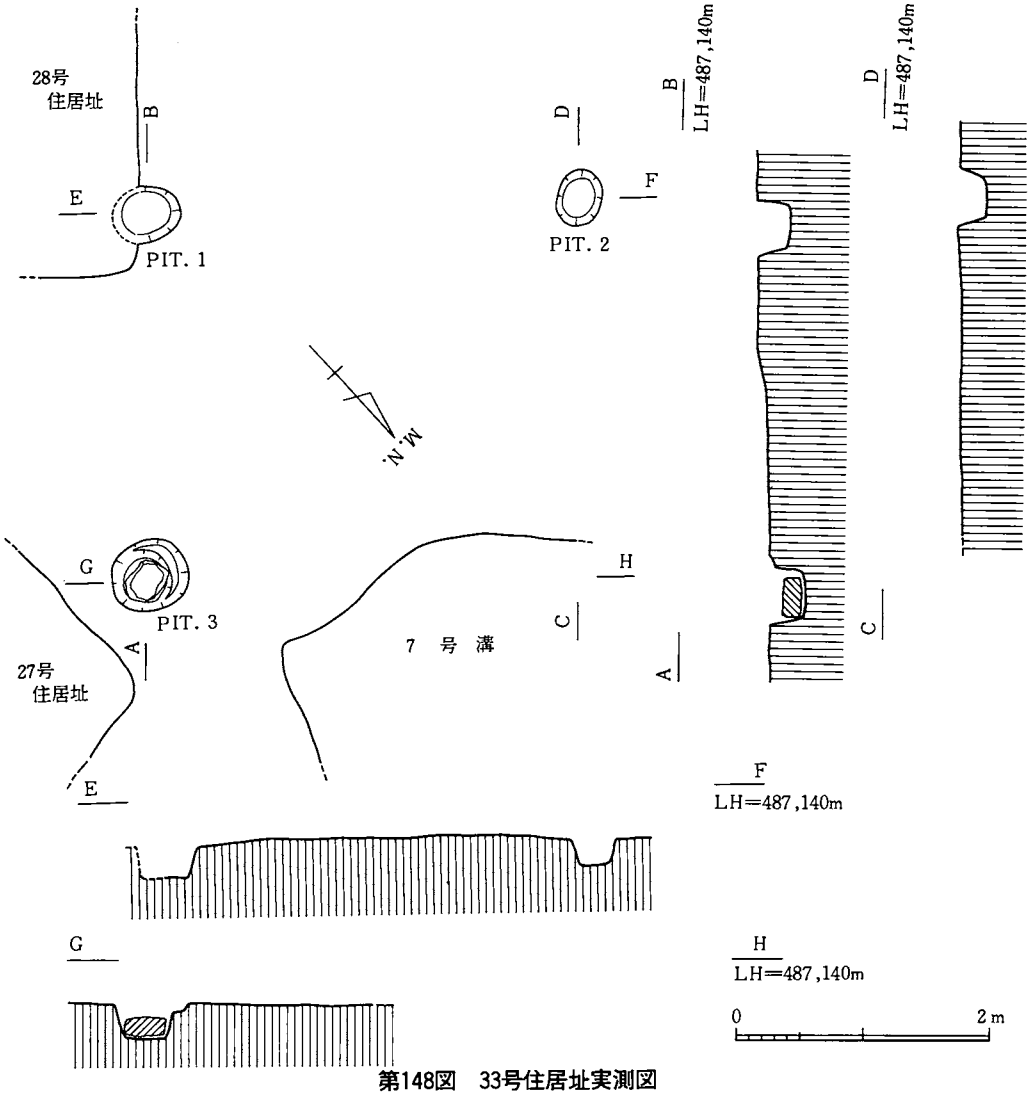
32号住居址内出土青銅鏡（第147図）

本住居址より，小型仿製鏡が1点出土した。出土の状況は次の通りで，北東側の住居址の壁面近く，床面より約10cm浮いて出土。鏡は背面を上にし，東側に約15度傾斜した状況である。「内行九花文帯小型仿製鏡」である。**670**は径は6.5cm，紐高は0.7cm，最も薄い箇所で0.1cmを測る。鏡縁は

幅0.5cmの丸縁であり，その内側には斜行櫛歯文帯(0.3cm)をめぐらす。更に内側は内行花文帯となっており，花文数は9個である。円弧と鈕座の間には文様があるが，不鮮明であり形態が判明しない。低い小乳状とも考えられる。鈕座は分銅型で薄い。鋳上がりは悪く，文様が½は不鮮明であるし，表面には「ス」状の微小な穴がいくつもある。破損断面の観察においても内壁面に，微細な気泡が見られる。なお出土当時は砂粒及び一部カーボンが鏡面に多量に付着していたが，背面及び鈕部には赤色の顔料の残存が確認される。直接的な共伴遺物はない。

(31)　33号住居址（第148図）

②・③—ⓔ区内，調査区南部の東側に位置する。住居址は強い削平のため床面もとばされており，主柱穴が一部残るのみである。残存規模は長軸方向4.5m，短軸方向4.0mを測り，平面形態は方形を基調とした遺構である。27号，28号住居址，7号溝によって切られ，隣接する32号住居址との新旧関係は不明である。長軸方向は東西で，その方位はN－45°－Eを測る。主柱穴4本



第148図　33号住居址実測図

のうち1本は7号溝によってカットされているが，他の3本は良好な状態で検出される。なかでもPIT，3には熔岩塊の盤石が埋められていた。なお炉・ベッド状遺構などは削平のため，有無については不明である。

本住居址においては覆土は残存していない。

出土遺物は検出されていない。

(32)　34号住居址（第149図）

②一ⓔ区内，調査区南部の東側に位置する。この住居址は5号～7号溝，34号住居址の上面に所在する。径35cmのPIT，1と厚さ10cmの薄い炭化層が確認されたことから，ここに集中する土器の1群の範囲を住居址内として認定した。柱穴は1基のみで，柱穴数は不明。炭化層は1.0m×1.7mの範囲であるが，皿状の浅い落ち込みのみで下端は不明である。壁の立ち上がりも確認されていない。

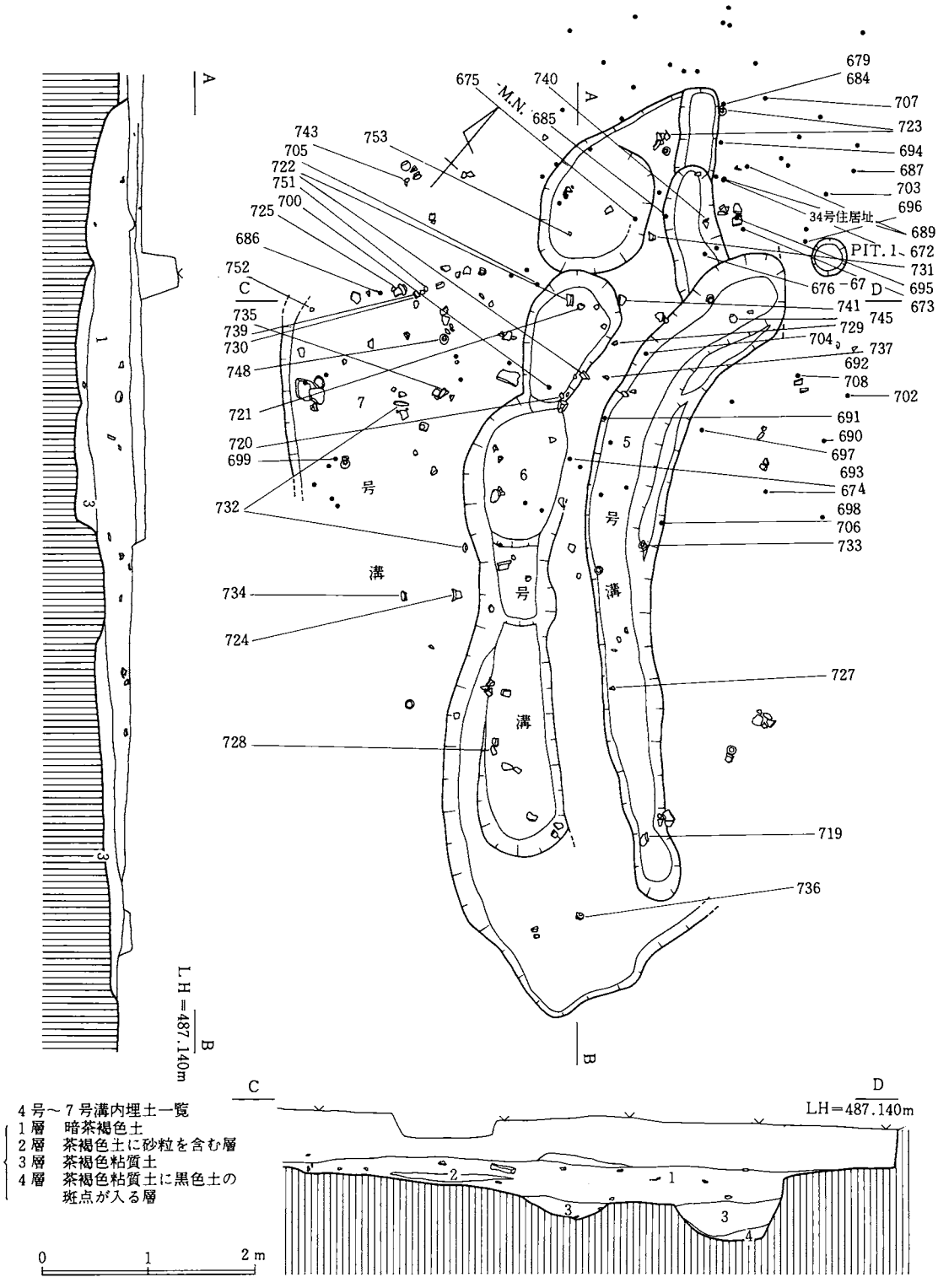
住居址の覆土は残存したベルトの状況から明茶褐色土であるが，上層に茶褐色土も一部覆るようである。

遺物の出土状況は第149図の，5号～7号溝の図と一緒に示した。黒点で示したものが34号住居址の出土遺物である。

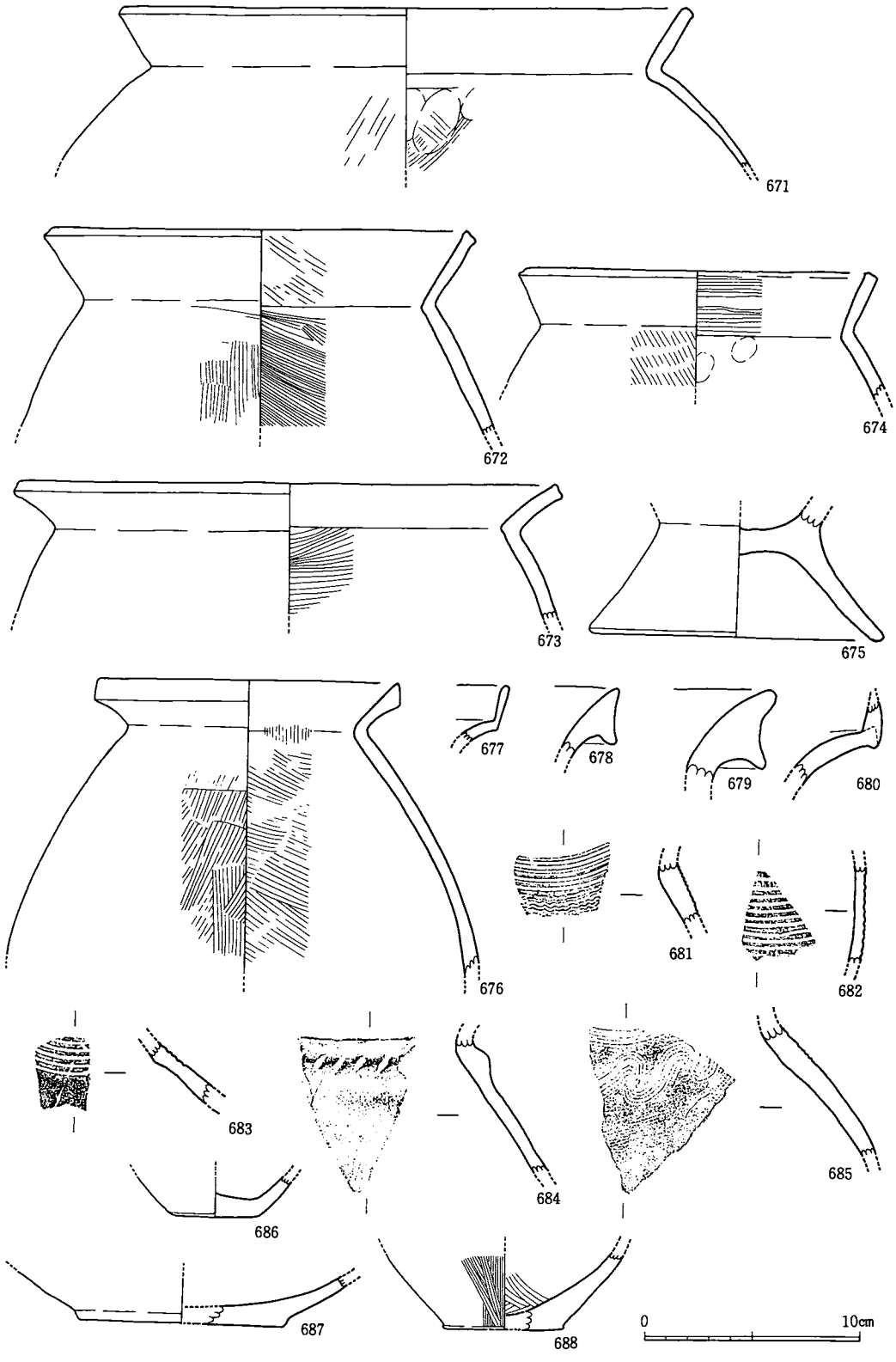
出土状況では，遺構として確認されたPIT，1及び焼土層の周辺部に集中して，遺物類が散布する。番号を付して取り上げた資料79点中，図化した資料は39点であり，ここでは39点を掲載した。出土遺物の内訳は土器類では甕5点，壺16点，鉢5点，高坏4点，ジョッキ形土器1点である。鉄器類では鉄鏃2点，鉈1点となる。石器では石鏃1点，石包丁2点，砥石2点である。遺物の出土層位では，多くは上～中層からまとまって出土し，下層からは小破片の資料がまとまる。これらは679，680，684，685，687，689，690，692，693，694，698，699の資料である。また8点に及ぶ鉄器，石器は全て下層からの出土である。住居址の廃絶に際しては，下層に小破片及び鉄器，石器の利器類が放置され，上層には大型の資料を投棄したものと考えられる。

34号住居址内出土土器（第150，151図）

671は甕である。胴部の張りは強い。外面上位はヨコ方向のナデ調整。下位は斜方向の刷毛目の後にナデ調整を施す。内面上位はヨコ方向のナデ調整。胴部内面は不整方向の刷毛目の後，指頭圧痕が見られる。**672**は甕である。外面上位はヨコ方向のナデ調整。胴部外面はタテ方向の刷毛目の後，部分的にヨコ方向のナデ調整を行なう。口縁部内面は斜方向の弱い調整を行なう。胴部内面は斜方向の刷毛目調整を行なう。**673**は甕である。残存¼での復元。口縁部外面はヨコ方向のナデ調整，胴部外面は斜方向の刷毛目の後ナデ調整を行なう。内面上位はヨコ方向のナ

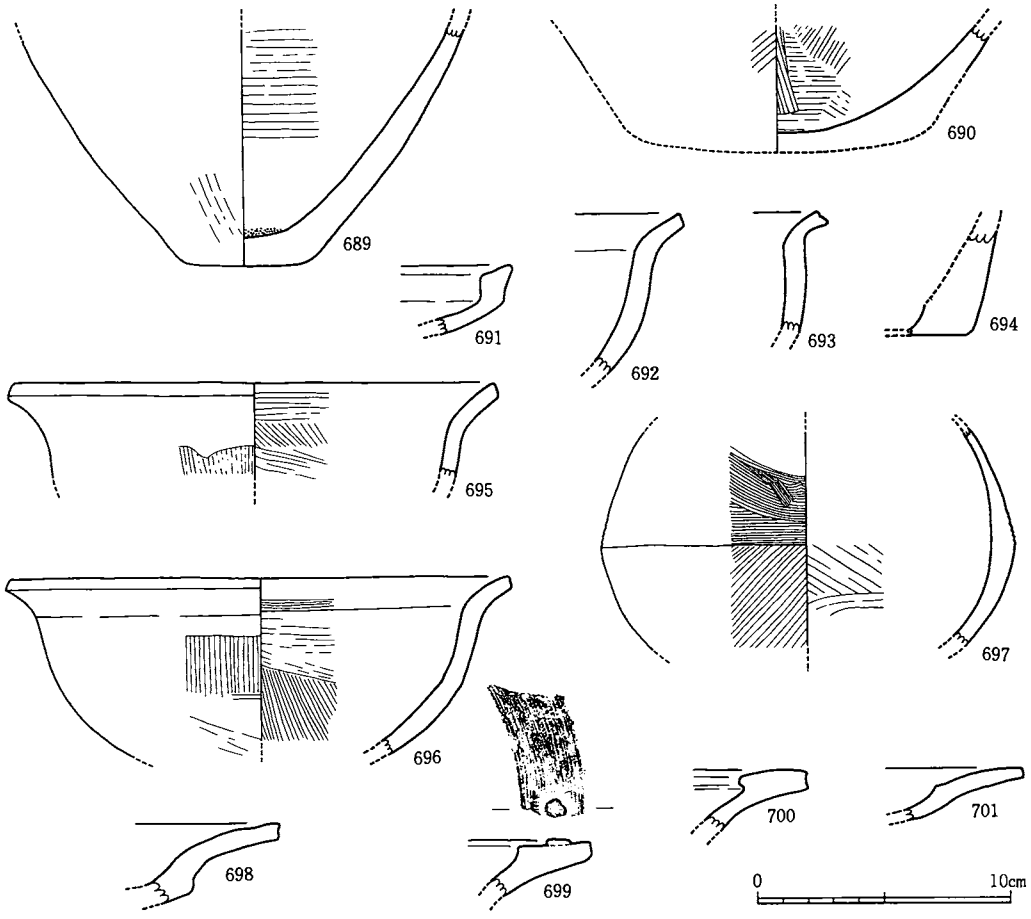


第149図　34号住居址，5号・6号・7号溝実測図



第150図　34号住居址内出土土器実測図（その１）

デ調整，下位は斜方向の刷毛目調整である。**674**は甕である。口縁部外面はヨコ方向のナデ調整，胴部外面は斜方向の刷毛目の後，部分的にナデ消す。内面上位はヨコ方向の刷毛目，下位はナデ調整の後に指圧痕が残る。**675**は甕の脚台片である。大型であり，径は13.6cmを測る。外面はヨコ方向のナデ調整，底部内面は不定方向のナデ調整。脚台内面はヨコ方向のナデ調整を施し，一部指圧痕が見られる。**676**は壺と考えられる。頸部が強くくびれ，口唇部断面が三角形となり，胴部は強く張る。外面上位はヨコ方向のナデ調整，下位は斜方向ないし，タテ方向の刷毛目調整を重ねる。なお煤が中位置まで付着する。内面上位はヨコ方向のナデ調整，胴部内は斜方向の刷毛目調整を重ねる。**677**は壺の口縁部片である。外面はタテ方向の刷毛目調整。内面はナデ調整。**678**は壺の口縁部片である。内外面とも全面にわたりナデ調整を施す。**679**は壺の口縁部である。端部は押圧により強く窪み，上下方向に押し広げる。内面はヨコ方向の刷毛目の後，ヨコナデ仕上げ。端部の窪み部分にはヨコ方向の刷毛目。下側には弱い刻み目を施す。**680**は壺の



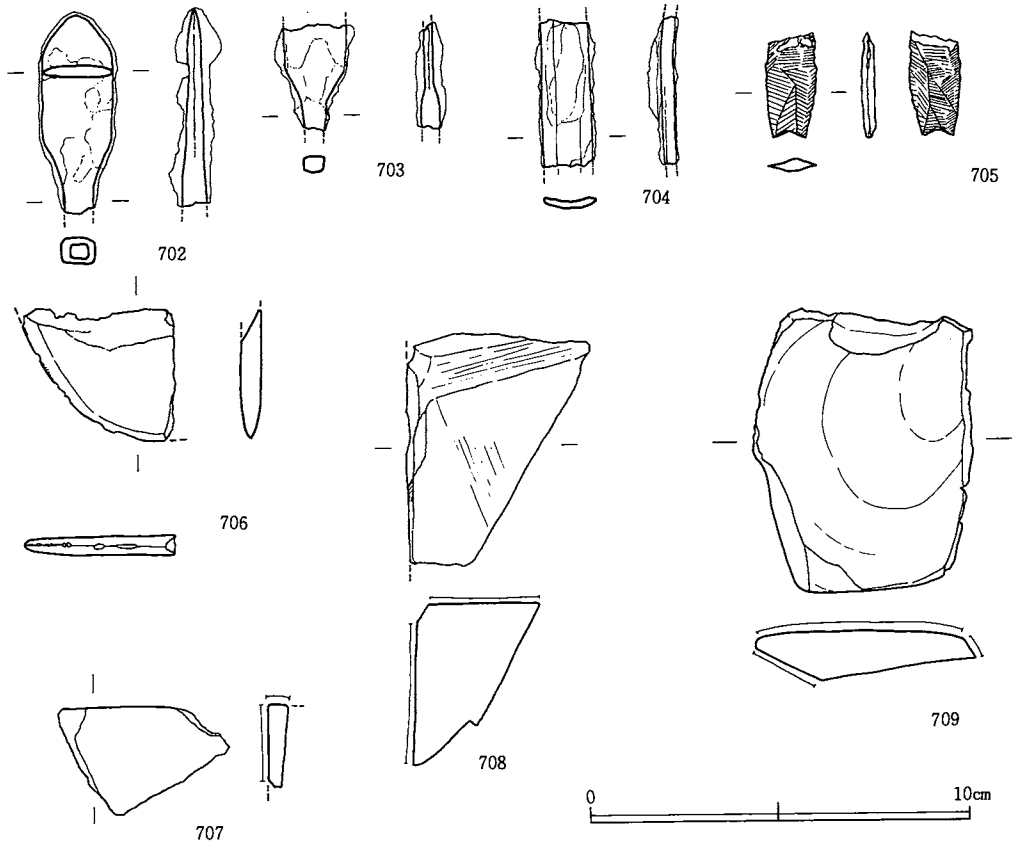
第151図　34号住居址内出土土器実測図（その２）

口縁部である。頸部から外湾気味に進み，口縁部は直立する。口縁部外面はヨコ方向の刷毛目の後ナデ調整，下位はタテ方向の刷毛目調整を行なう。内面はヨコ方向の刷毛目を施すが，ナデ及び指圧痕が見られる。胎土はやや密であるが1～3mm程の長石を含む。色調はにぶい橙色である。**681**は壺の胴部片である。外面上位にはヨコ方向の強い沈線が8条見られ，下位には櫛描きの流水文を施す。内面はナデ調整である。**682**は免田式土器の壺片である。外面には沈線が11本確認され，一部刷毛目がかかる。内面はナデ調整である。**683**は免田式土器の壺片である。外面上位にはヨコ方向に沈線を5本施し，下位はタテ方向の刷毛目調整を行なう。内面は不整方向のナデである。**684**は壺の頸部片である。外面には突帯を有しており，そこには斜方向の幅1.1cmの刻み目を9～11mm定間隔に施す。外面下位はナデ調整。内面は剝離が著しく，観察が困難である。**685**は壺の胴部片である。外面上位にはヨコ方向の櫛描き文及び流水文を施す。下位はヨコ方向の刷毛目の後，ナデ消す。内面はヨコ方向の刷毛目調整となる。**686**は壺の底部である。小型であり，底部径は4.3cmを測る。全面にわたりナデ仕上げである。**687**は壺の底部である。外面はヨコ方向のナデ調整，底部は不整方向のナデである。内面は器壁剝離のため調整は不明。**688**は壺もしくは鉢の底部と考える。底部は平担であり，不整方向の刷毛目調整を加える。外面はタテ方向の刷毛目調整。内面は不整方向の刷毛目調整となる。**689**は壺の底部である。残存¼での復元。外面はタテ方向の刷毛目の後，不整方向のナデ消しを行なう。内面はヨコ方向の刷毛目の後，ナデ消しを行なう。なお底部内側最下面に砂粒が付着する。**690**は壺の底部である。外壁面が剝離し，調整が部分的に不明であるが，斜方向の刷毛目の後にナデ消しの状況が見られる。内面は不整方向の刷毛目調整を重ねる。**691**は壺の口縁部片である。口縁部内外面はヨコ方向のナデ調整を，下位には不定方向のナデ調整を加える。**692**は鉢の口縁部片である。外面上位にはタテ方向の刷毛目の後に一部ナデ消しを行なう。下位はヨコ方向の刷毛目の後ナデ調整で仕上げる。内面上位はヨコ方向の刷毛目の後ナデ仕上げ。下位はタテ方向の刷毛目調整である。**693**は鉢の口縁部片である。口縁部が短く外側に屈曲する。外面は風化のため調整が判明しない。内面上位はヨコ方向のナデ調整。下位は不整方向の刷毛目調整である。**694**はジョッキ形土器の底部片である。外面は不整方向の丁寧なナデ調整。内面は剝離の為調整がやや不明であるが，一部に指圧痕が見られる。**695**は鉢である。外面上位はヨコ方向のナデ調整，下位はタテ方向の刷毛目調整である。内面には斜方向の刷毛目の後，ヨコ方向のナデ調整を施す。**696**は鉢である。残存¼での復元。口径20.1cm，残存高7.1cmと大型である。外面上位にはヨコ方向のナデ，中位にはタテ方向の刷毛目，及び斜方向の刷毛目調整を施す。内面上位はヨコ方向の刷毛目，下位はタテ方向の刷毛目調整である。**697**は鉢である。口縁部及び底部が欠損する。胴部最大径は16.4cmを測り，残存高は8.6cmである。外面上位には斜方向及びヨコ方向の刷毛目調整を，下位には斜方向の刷毛目調整を施す。内面は不整方向の刷毛目の後，丹念なナデ仕上げを行なう。**698**は高坏の口縁部片である。外面はタテ方向の刷毛目調整を行ない，一部ナデ

消す。内面はタテ方向の刷毛目調整である。**699**は高坏の口縁部である。口縁部には径9mmのボタン状の突起が貼り付けられる。外面はヨコ方向の刷毛目の後ナデ調整。内面はヨコ方向のナデ調整である。**700**は高坏の口縁部である。口縁部は外湾し，端部が肥厚する。なお内側は強い窪みを有する。外面はヨコナデ調整を施し，内面はナデ調整で仕上げる。**701**は高坏の口縁部片である。外面はナデ調整，内面はヨコ方向のナデ調整を施す。

34号住居址内出土鉄器，石器（第152図）

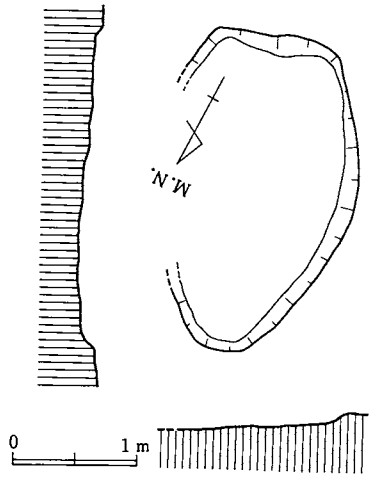
702は有茎の鉄鏃である。茎部は欠損するが，頭部は完全である。残存高5.30cm，幅2.25cmを測る。柳葉形であるが，関を明瞭に造り出す。頭部の最大厚は3mm，茎部は断面長方形で9mm×6mmであり，中身は空洞となる。**703**は有茎の鉄鏃である。頭部上半部及び茎部が欠損する。関部を明瞭に造り出す。茎部の断面形は長方形であり6mm×4mmとなる。**704**は鉄製鉇である。鋒部と基部が欠損し，残存長3.9cm，幅1.5cmを測る。鋒部に近く，内側に171度傾く。断面形はU字形で非常に浅く，厚2mmである。**705**は磨製石鏃である。先端部が欠損するが，残存長2.80cm，幅1.38cmを測る。有抉で，幅がやや狭くなる。**706**は粘板岩製の石包丁である。右側及び上



第152図　34号住居址内出土鉄器·石器実測図

部側が欠損しており，残存長4.00cm，残存幅3.49cmを測る。**707**は結晶片岩製の砥石である。剝離した破片であり，研磨面は2面となる。**708**は凝灰岩製の砥石である。剝離片であり，残存長6.15cm，幅4.98cmを測る。研磨面は2面である。**709**は砂岩製の砥石である。残存長7.50cm，幅5.80cmを測る。研磨面は3面でよく使用されている。

(33)　2号土壙（第153図）



第153図　2号土壙実測図

③—ⓓ区内，調査区南部の中央に位置している。古墳時代の20号住居址に東側を切られている。長軸（南北）方向2.6m，短軸（東西）方向1.5m，確認面からの深さ最高20cmを測る。主軸方向はN—28°—Wとなる。

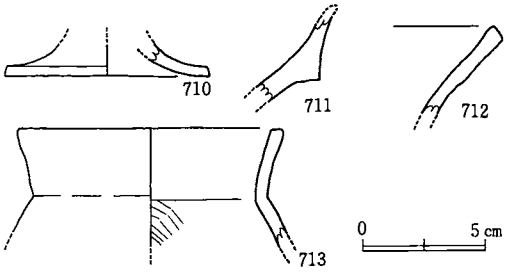
遺構の覆土は茶褐色土の1層であり，出土遺物は微細な弥生土器が少量出土するのみで，これらは図化できなかった。

(34)　3号土壙（第110図）

③・④—ⓓ区内，調査区の西側に位置している。22号，23号住居址双方を切っている。平面規模は長軸（東西）方向1.3m，短軸（南北）方向1.0mを測り，確認面からの深さは約20cmと非常に浅い。

埋土は2層となり上層が黒褐色土，下層は黒褐色土に黄褐色土が混入した層である。

出土状況では土壙内に小破片が散布する。出土の資料は番号を付して取り上げたものが11点であり，図化できたものは4点である。ここでは全ての資料を掲載した。713が下層からの出土であり，この土壙の時代判定の資料となる。本来使用時の位置にあるものはなく，流ん込んで埋没したものと考えられる。



第154図　3号土拡内出土土器実測図

3号土壙内出土土器（第154図）

710は小型の脚台片である。脚台径は小さく8.3cm，残存高は1.3cmである。器壁は薄く，復元形態は不明である。内外面ともにヨコナデ調整で，内面の一部にタテ方向の刷毛目が残る。**711**は壺の口縁部片である。端部は欠損するが，外面には上位がヨコ方向のナデ調整，

下位がヨコ方向の刷毛目の後ナデ調整を施す。内面はヨコ方向のナデ調整を行なう。**712**は甕の口縁部片である。外面はヨコナデ調整を施し，内面は斜方向の刷毛目調整を行なう。**713**は小型壺である。頸部の屈曲は弱く，外面はヨコ方向のナデ調整，内面は斜方向の刷毛目の後ナデで仕上げる。色調は明褐色，胎土は密，焼成は良である。

㉟　4号土壙（第110図）

③・④—ⓔ区内，調査区の南部の西側に位置する。23号住居址を切り，一方では25号住居址に切られる。平面形は不整形であり，長軸（東西）方向 2.2m，短軸（南北）方向 1.8m，最大深28cmを測る。主軸方位は東西方向と考えられる。

土壙の覆土は黒褐色土に黒色土が混入する層であり，出土遺物は少量の弥生土器片があるのみで，図化できるものはない。

㊱　3号溝（第161図）

①・②—ⓓ区内，調査区中央部東側に位置する。遺物が少量散布する包含層中に，片側の遺構面のみが切り込む形状で確認された。南北方向は 6.9m までは確認されるがその先は不明である。東西方向では西側のみで東側は調査区外へ出る。溝の断面形は片面のみの確認であるが逆台形状を呈している。（第 161 図の上段の断面図を参照）

溝の埋土は包含層に類似した黒褐色土で，包含層よりも薄く，亘つしまりがある。

遺物の出土状況では，溝内に薄く流れ込んだ状態で確認されており，出土量は少ない。番号を付して取り上げた資料15点中，図化できたものは 4 点であり，ここでは全てを掲載した。遺物の内訳は弥生土器の壺 2 点，須恵器の壺 1 点，瓦器のすり鉢 1 点である。出土状況からみて弥生の包含層を切って造られた溝であり，その時期は出土する714，716の時期と考えられる。

3号溝内出土土器（第155図）

714は瓦質のすり鉢である。胴部片で残存長6.4cmを測る。外面は斜方向で不規則に細い条線を有する。内面は上方から下方に向かって浅い条線を刻む。単位は 9mm内外である。色調は内外面とも明紫灰色で，焼成は良好である。**715**は弥生土器の壺口縁部である。内外面ともにヨコ方向のナデ調整で仕上げる。**716**は須恵器の短頸壺口縁部片である。口縁部の立ち上がりは短かく1.3cmを測る。内外面ともヨコナデ調整で，色調は明紫灰色，焼成は良好である。**717**は弥生土器の甕口縁部片である。外面はタテ方向の刷毛目調整を，内面は斜方向の刷毛目調整を施す。

㊲　4号溝（第156図）

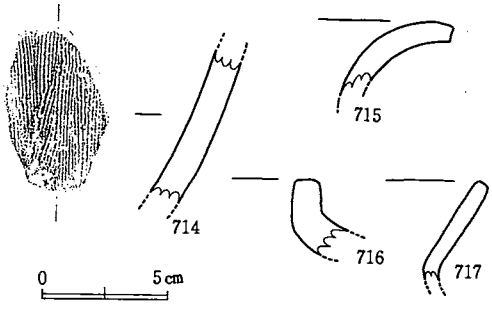
③—ⓓ区内，調査区中央部西側に位置する。21号住居址に切られるが，隣接する19号住居址

との新旧関係は不明である。主軸方位はN－89°－Wで，ほぼ東西方向に流れる。平面規模は東西方向5.9m，南北方向2.5m，深さは最大40cmを測る。溝内には3個のピットが，周辺部には4個のピットが散布している。溝は深さに高低差があり，段差を有している。

埋土は2層に分かれており，1層は茶褐色土であり，2層は茶褐色土に黄色ロームのブロックを含む層である。

遺物の出土状況は段差を有する溝内に，小破片の遺物が小数散在する。番号を付して取り上げた資料は7点であり，その中で図化できたものは4点となる。ここでは2点を掲載した。遺物の内訳は石包丁1点，台石1点で土器類については図化できなかった。遺物の出土層位は1層中の上位に，共に位置しており754はやや浮いた状態であった。溝は西側から徐々に埋没していったものと考えられる。

4号，7号溝内出土鉄器，石器（第157図）



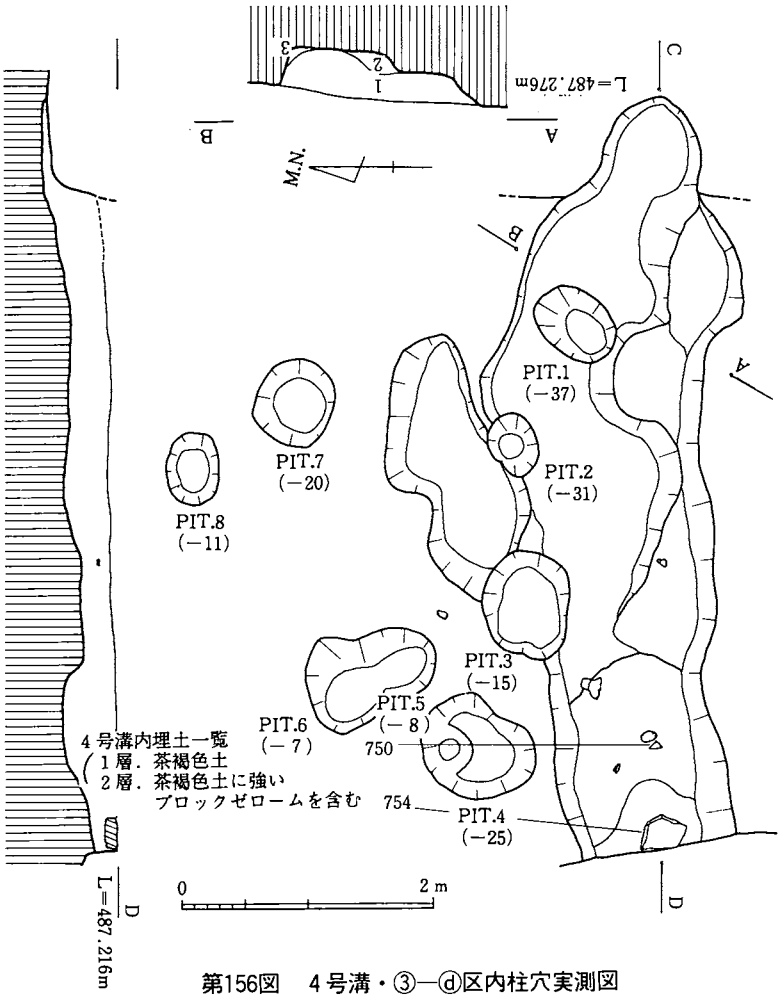
第155図　3号溝内出土土器実測図

753は7号溝出土の無茎五角形式の鉄鏃である。全長3.9cmを測る大型の資料であり，基部を弧状に抉りこむ。**750**は4号溝出土の石包丁である½欠損しているが，形状の復元は可能で，刃部が外湾し半月形を呈する。**751**は7号溝出土の砥石である。大きく欠損するが，研磨面は2面残る。材質は角閃石安山岩製である。**752**は7号溝出土の砥である。欠損した小破片であるが，1面のみに研磨面が見られる。**754**は4号溝出土の台石である。材質は安山岩製であり，長方向38.5cm，短方向29.2cm，厚9.0cmの平担な形状である。2面ともよく研磨されている。重量13.35kg。

(38)　5号，6号，7号溝（第149図）

②－ⓔ区内，調査区南部の東側に位置している。34号住居址の遺物を取り上げた段差で，長い溝状の遺構が検出された。この溝の規模は長軸（南北）方向8.8m，短軸（東西）方向4.8mを測る。溝は32号住居址を切り，円弧を描いて流れており主軸方位は起点と終点を結ぶ線でN－33°－Wを測る。上層の大型で浅い溝を7号溝とし，下層で西側の階段状にステップを作る溝を6号溝，5号溝は東側の細長い円弧状の遺構となる。

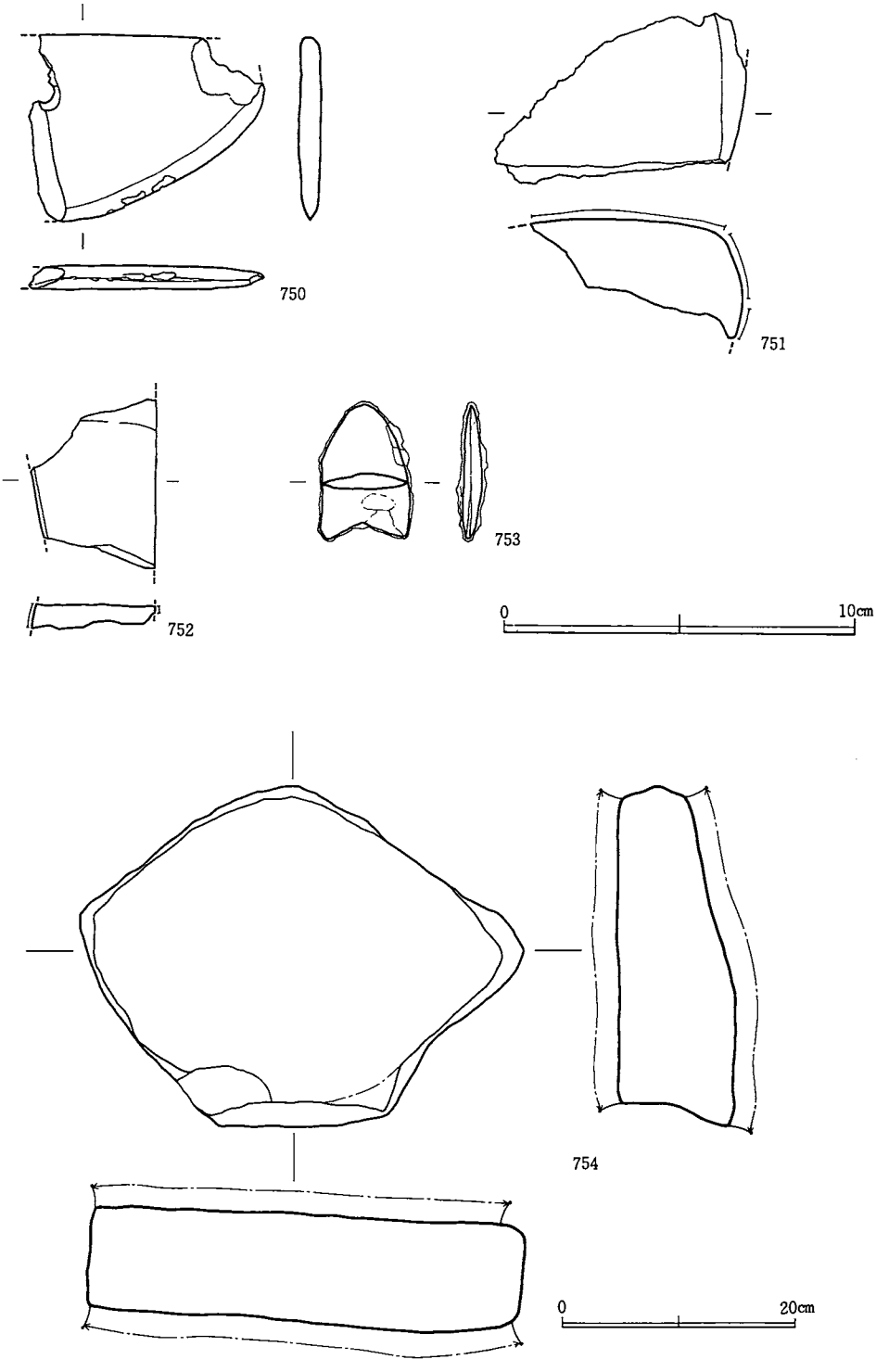
埋土は別図にもある通り，7号溝は暗茶褐色土であり，間に土の流れ込みを示す砂層が間層



第156図　4号溝・③—ⓓ区内柱穴実測図

として入る。5号，6号溝ともに上層の埋土は茶褐色粘質土で同一埋土であるが，5号溝のみは下層に黒色土の斑点が混じる層となる。

遺物の出土状況では，全般的に広く散布するが，6号溝西側に大型の土器類が集中する傾向がある。また5号，6号溝内は少量の出土のみで，大部分は7号溝内からの出土である。番号を付して取り上げた資料は5号～7号溝全てあわせて93点におよぶ。このうち図化できたものは62点であり，ここでは内35点を掲載した。出土遺物の内訳は土器類では甕19点，壺9点，高坏3点，鉢1点である。鉄器は鏃が7号溝から1点，石器では砥石が7号溝より2点出土する。7号溝における遺物の出土層位は上位から下位に至るまで，満遍無く出土するが下位の資料としては次のものがあげられる。土器では725，728，730，736，738，743，745であり，752の石器もこれに含まれる。さらに下層の密着資料は729，731，740，745の土器と753の鉄鏃である。一方5号溝の下位からは719が，6号溝の下位からは720，721の甕片が出土する。溝の埋没に際しては，西側から徐々に流れる状態で埋まったものと考えられる。



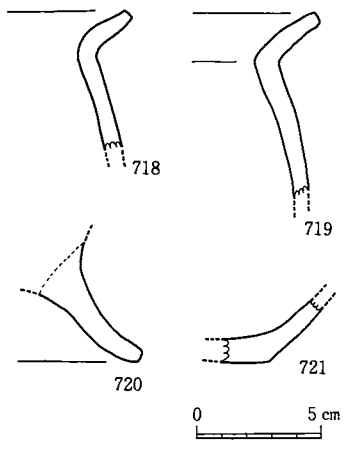
第157図　4号・7号溝内出土鉄器·石器実測図

5号，6号溝内出土土器（第158図）

718は甕の口縁部片である。外面はタテ方向の刷毛目の後ナデで仕上げる。内面は斜方向の刷毛目の後ヨコナデ調整で仕上げる。**719**は甕の口縁部片である。外面はタテ方向の刷毛目の上をヨコナデ調整を施す。内面下位は斜方向の刷毛目調整を行なう。**720**は甕の脚部片である。外面はヨコ方向のナデの後，下方から上方への刷毛目調整。施文具の木口の痕跡が強く残る。内面はヨコ方向のナデ調製で砂粒が付着する。**721**は甕の底部片である。外面はヨコ方向のナデ調整を，内面は不規則なナデで仕上げる。

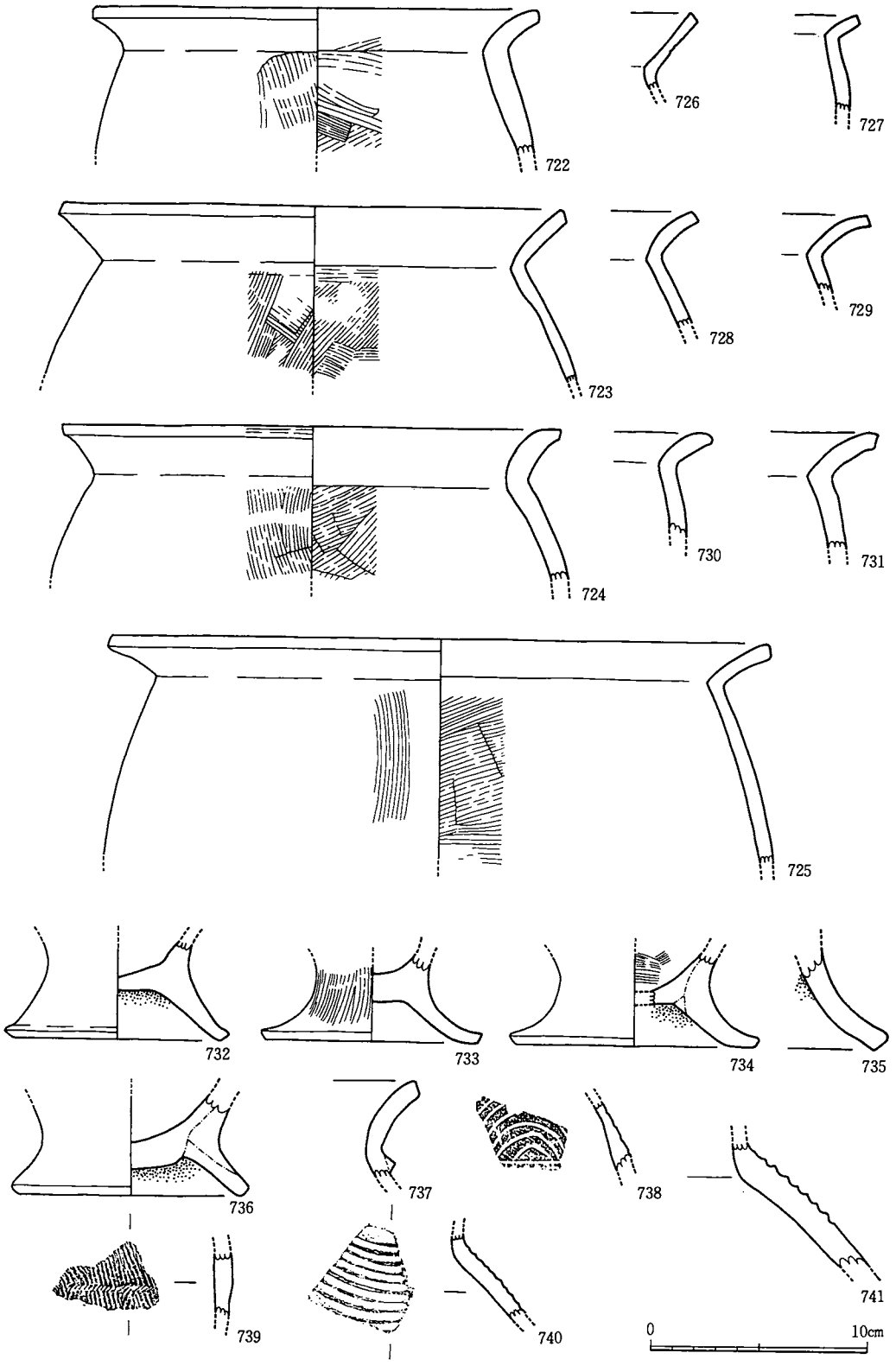
7号溝内出土土器（第159，160図）

722～731までは甕形土器の資料である。**722**は胴部のふくらみが弱く，器壁が厚い。調整では外面は上方及び斜方向の刷毛目の後ヨコ方向のナデ調整を施す。内面はヨコないし斜方向の刷毛目を施すが，不規則であり，部分的にナデる。**723**はやや胴部がふくらむが，口縁部は直に外傾する。外面は斜方向の刷毛目の後，上位はナデ消す。内面は横方向のナデ及び斜方向の刷毛目調整を施す。なお上部には指頭圧痕あり。**724**は胴部のふくらみが強く，口縁部も丸みを持って外湾する。外面はタテ方向の刷毛目の上をナデで仕上げ，内面は斜方向の刷毛目を施す。**725**は本遺構出土の甕類中最も大型である。頸部の屈曲は強く，胴部の張りは弱い。外面はタテ方向の刷毛目を施すが，カーボンの付着により観察しずらい。内面上位はヨコ方向刷毛目の上をナデで仕上げる。内面下位は斜方向の刷毛目を施すが部分的にナデを行なう。**726**は部分的に煤が付着する。外面はヨコ方向の叩きの上を上方から右斜方に刷毛目を施す。内面はヨコ方向の丁寧なナデを行なう。**727**は口縁部が短く立ち上がる。外面はタテ方向の刷毛目の後にヨコナデを施し，内面はタテ方向の刷毛目の後にナデ仕上げを行なう。



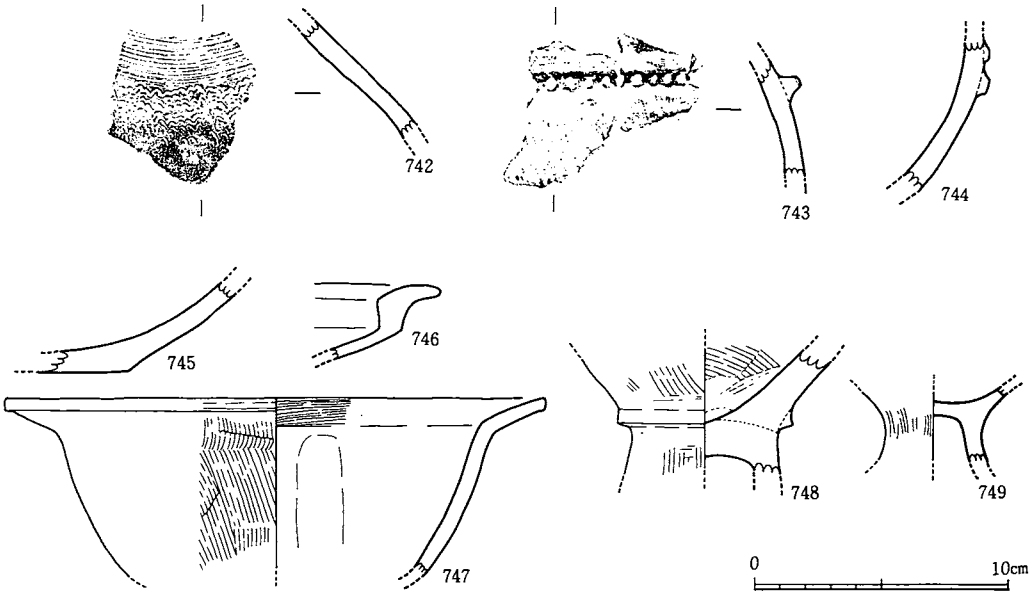
第158図　5号・6号溝内出土土器実測図

728は口縁部がやや丸味をもって外湾する。外面は斜方向の刷毛目を施すが，部分的に煤が付着。内面は斜方向の刷毛目を行なう。**729**は屈曲が強く大きく外湾する。外面の上位はヨコ方向のナデを，下位はタテ方向の刷毛目の後ナデ消す。内面の上位はヨコ方向の刷毛目の上をヨコナデ，下位はヨコ方向のナデ調整を行なう。**730**は口縁部が短く外湾する。外面はタテ方向の刷毛目の上をヨコナデ，内面はヨコ方向のナデ調整である。**731**は頸部に強い指圧を伴っている。外面には部分的に媒が付着しており，調整はタテ方向の刷毛目の後ヨコナデ，内面は斜方向の刷毛目



第159図　７号溝内出土土器実測図（その１）

調整を施す。732から736は甕の脚台片である。**732**は内面に砂粒が付着する。外面はヨコ方向のナデ調整，内面はヨコナデである。**733**は底部がぶ厚く，1.4cmを測る。外面はタテ方向の刷毛目調整，内面はヨコ方向の刷毛目の上をヨコナデで仕上げる。**734**は内面に砂粒が付着し，接合状況が観察できる。外面はヨコ方向のナデを，底部内面は不規則な刷毛目調整を施す。**735**は外面がヨコナデ，内面には砂粒が付着し，ヨコナデを施す。**736**は断面形状が判明する資料である。甕本体部に脚台部を貼りつけ，その後支持土を甕部に補充し完成させる。内外面ともヨコ方向の刷毛目の後にナデ調整，底部内面は不整形のナデを行ない，指圧をさらに重ねる。**737**は壺の口縁部片である。頸部に突帯を有しており，突帯は両端からつまみ上げる様な形状となる。外面はヨコ方向のナデ調整を，内面はヨコ方向の刷毛目の後にナデ仕上げ。**738**は免田式土器の壺胴部片である。残存長4.9cmを測る。外面の文様描写の手順は次のとおりとなる。それは斜方向の刷毛目の後，同心円状の沈線，その後に平行沈線を入れる。そして最後に5mm間隔で縦方向の沈線を入れる。内面は斜方向の刷毛目を施す。**739**は壺胴部片と思われる。外面には煤が付着し，調整はタテ方向の刷毛目である。内面はタテ方向のヘラ削りである。**740**は免田式土器の壺胴部片である。外面には大型で幅4mm内外の沈線を9本数えることができる。内面はヨコ方向のナデを施す。**741**は壺の胴部片と思われる。外面は，刷毛目調整の後にヨコ方向の大型の沈線を8本刻む。内面は指による圧痕が見られ，全体ではヨコナデ調整を行う。**742**は壺の胴部片である。外面では上位に沈線状にヨコ方向の刷毛目を，中位に上面刷毛目調整の後に弱い流水



第160図　7号溝内出土土器実測図（その2）

文を施す。内面は斜方向の刷毛目調整を施す。**743**は壺の胴部片である。残存長 9.1㎝を測る。外面には突帯を有しており幅4㎜で間隔8㎜で刻みを施す。外面の調整はタテ方向のナデ調整，内面は斜方向の刷毛目及びヨコナデ調整を施す。**744**は壺の胴部片である。外面には突帯を2条持ち，タテ方向の刷毛目の後ヨコナデを施す。内面はタテ方向の刷毛目を行なう。色調は内面灰色，外面は黒褐色を呈する。**745**は甕の底部である。底部径は判明しないが薄手である。外面は斜方向の刷毛目の後ヨコナデ調整。底部は不規則な刷毛目をし，部分的に指頭圧痕あり。内面は不規則なナデ調整を施す。**746**は高坏である。体部から口縁部にかけては強く屈曲し，口縁はやや外湾気味となる。外面はヨコ方向の丁寧なナデ調整を，内面はヨコ方向のナデを施すが部分的には研磨を行なう。胎土は緻密であり素地は細かい。**747**は鉢である。体部からふくらみ気味に立ち上がり，口縁部は屈曲する。底部の形状は不明である。外面は斜方向の刷毛目調整を，内面上位はヨコ方向の刷毛目であるが，体部内面はタテ方向のヘラ削りを施す。内外面とも色調は黒色，焼成は良好である。**748**は高坏の脚部である。頸部に断面三角形の突帯を有する。外面は突帯部を除きタテ方向の刷毛目調整を，脚部内面は指頭圧痕が見られ，坏部内面には斜方向の刷毛目に手ずくねで整形し，仕上げる。焼成は良で色調は赤褐色である。**749**は高坏片である。外面はタテ方向の刷毛目の後にヨコ方向のナデを行なう。内面は脚，坏側ともにヨコ方向の丁寧なナデを施す。

㊴　②—ⓓ区内包含層（第161図）

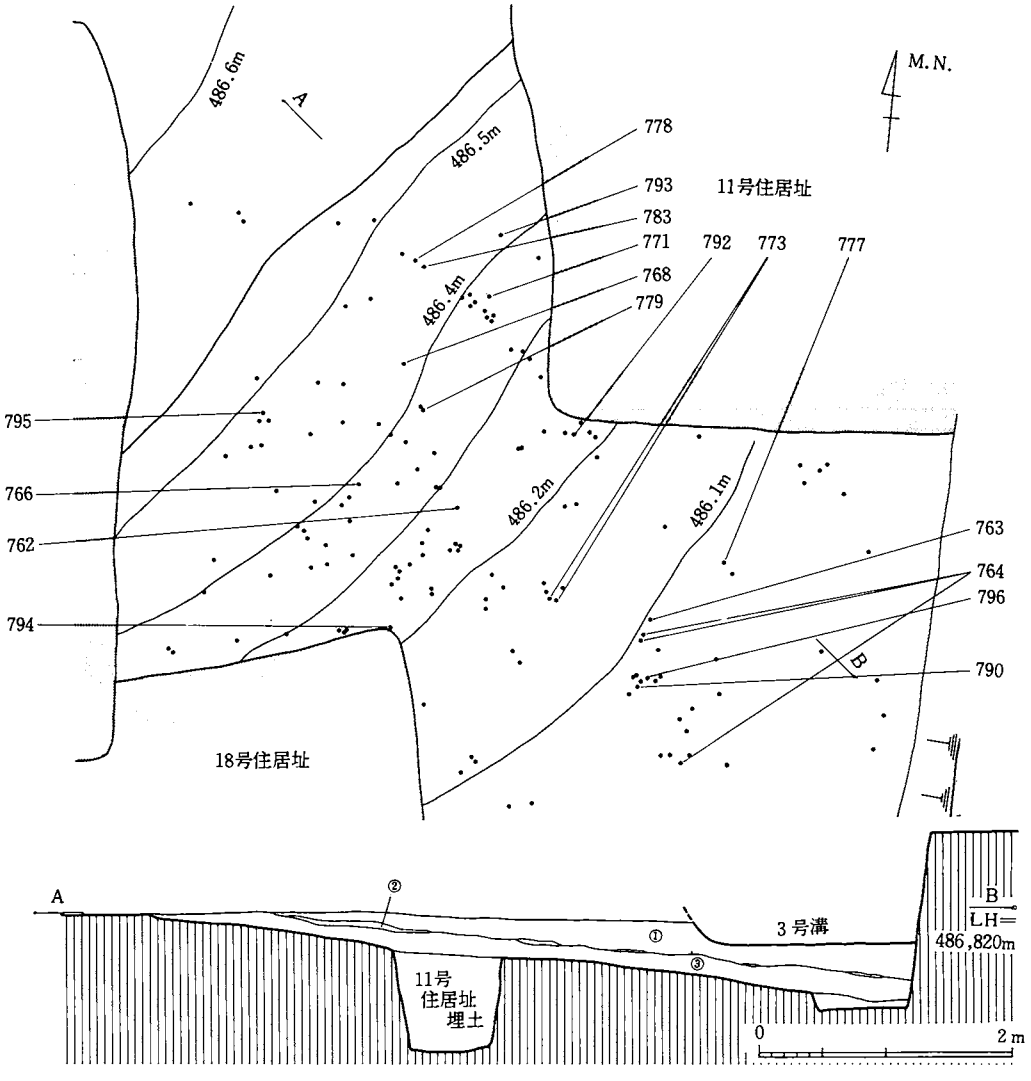
調査区の東側のこの地区には遺構が確認されない空白の地区や，遺構の上面（遺構の確認面よりさらに上位箇所）にも，数多くの遺物が出土している。この状況は遺跡が高所から低所へ特にこの地区では東から西方向へと，流れ込んで包含層を形成する状況が観察される。第161図には，住居址の間に包含層として堆積した遺物の出土状況を示したもので，北東から南西方向への流れ込みの状況である。包含層中の②層は砂粒混入の間層であり，包含層除去後に11号住居址の遺構ラインが検出された。

②—ⓓ・ⓔ区についても同様の包含状態である。

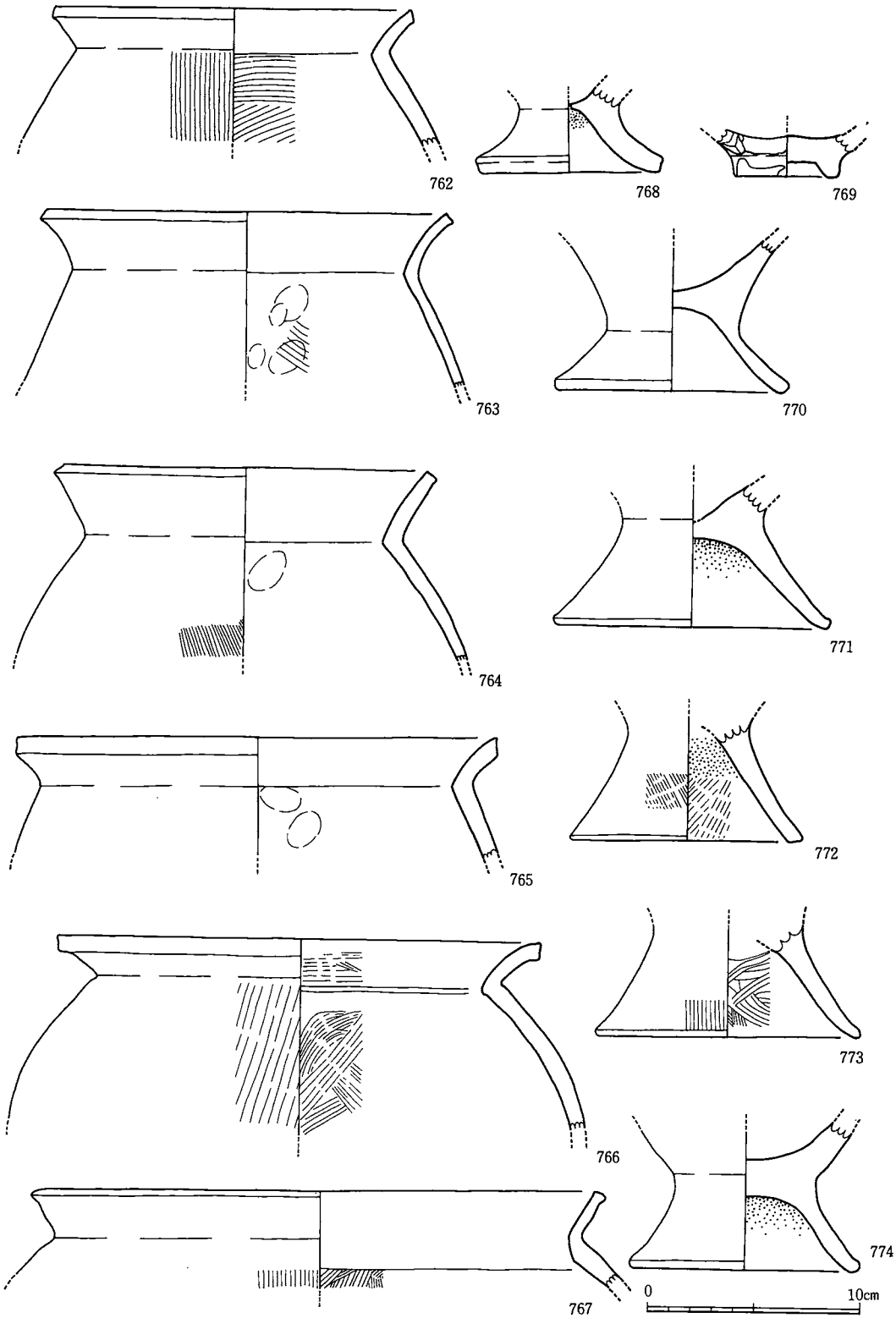
遺物の出土状況では，住居址の存在しない空間に広く分布する。番号を付して取り上げた資料146点内で，図化できたものは61点であり，この内ここでは32点を掲載した。遺物の内訳は土器類では甕12点，壺12点，鉢1点，小型丸底壺1点，ジョッキ形土器1点，メンコ形土製品1点である。また近世陶磁器1点も出土する。鉄器類では鏃1点，鉈1点である。石器類では紡錘車，投弾，砥石が各1点の出土である。包含層中における遺物の出土層位は，上下層では時期的な差はみられない。なお3層出土の資料は次のとおりである。土器類では765～767，770，772，774，776，781，782，789であり794の紡錘車がこれに含まれる。

②－ⓓ区内一括出土土器（第162,163図）

762～767は口径が計測できる大型の甕である。**762**は胴部の器壁が厚く，外面調整は上下方向の刷毛目，内面調整は斜方向及びヨコ方向の刷毛目で仕上げる。**763**は胴部の器壁は薄く，胴部の張りも弱い。外面はヨコナデ調整，内面は指圧の後に斜方向の刷毛目調整を行なう。**764**は胴部の張りが強い甕である。外面はヨコ方向のナデ調整及び斜方向の刷毛目調整を行なう。内面はヨコナデ調整を行なうが，指圧痕が残る。765は口縁端部が鋭くなる形状を有する。外面はヨコナデ調整，内面も同様の調整であるが，一部指圧痕が残る。**766**は胴部が強く張り，頸部の屈曲が強い。外面中位は上下方向の刷毛目調整を，頸部から上位はヨコナデ調整を施す。内面上

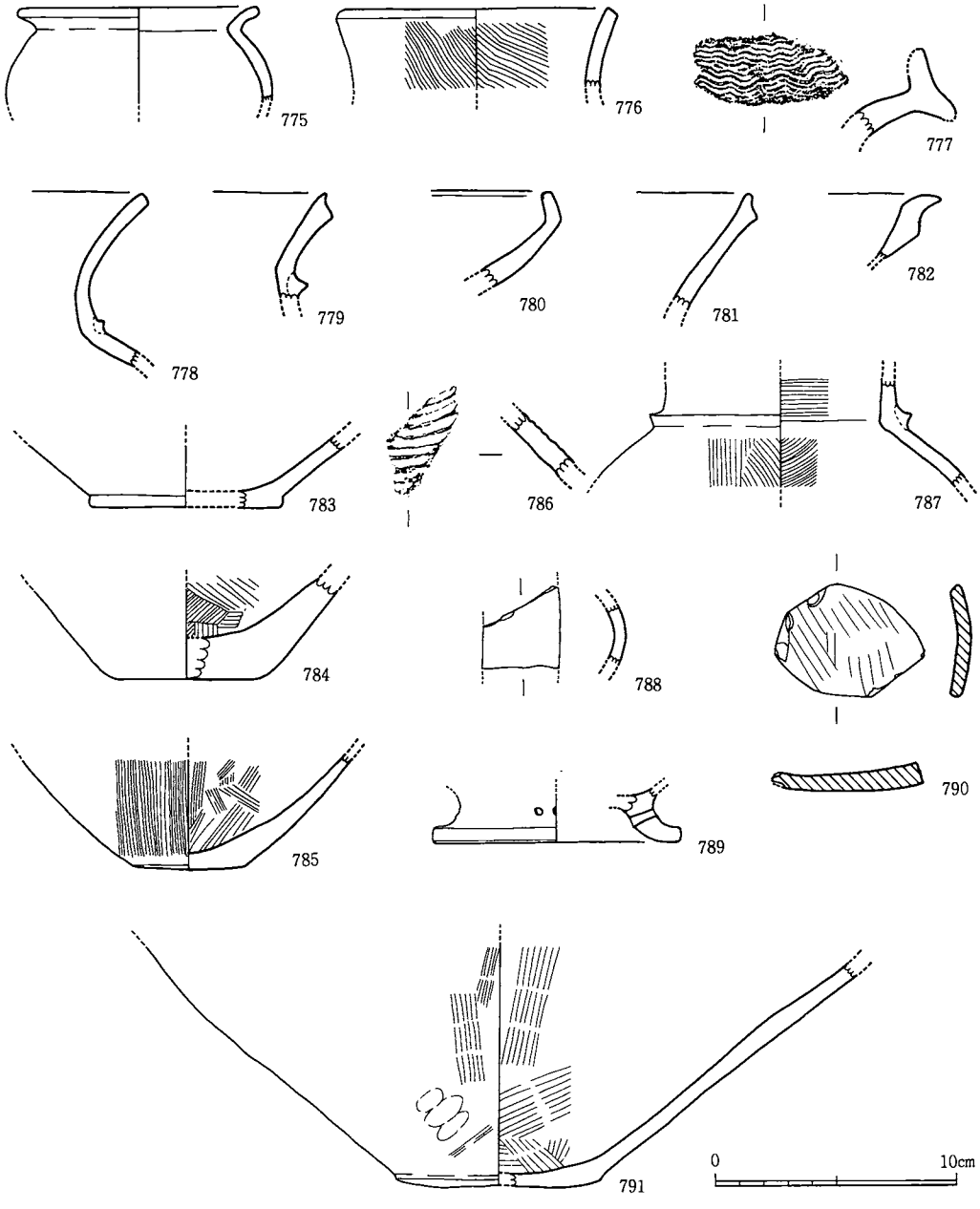


第161図　②－ⓓ区包含層内遺物出土状況実測図



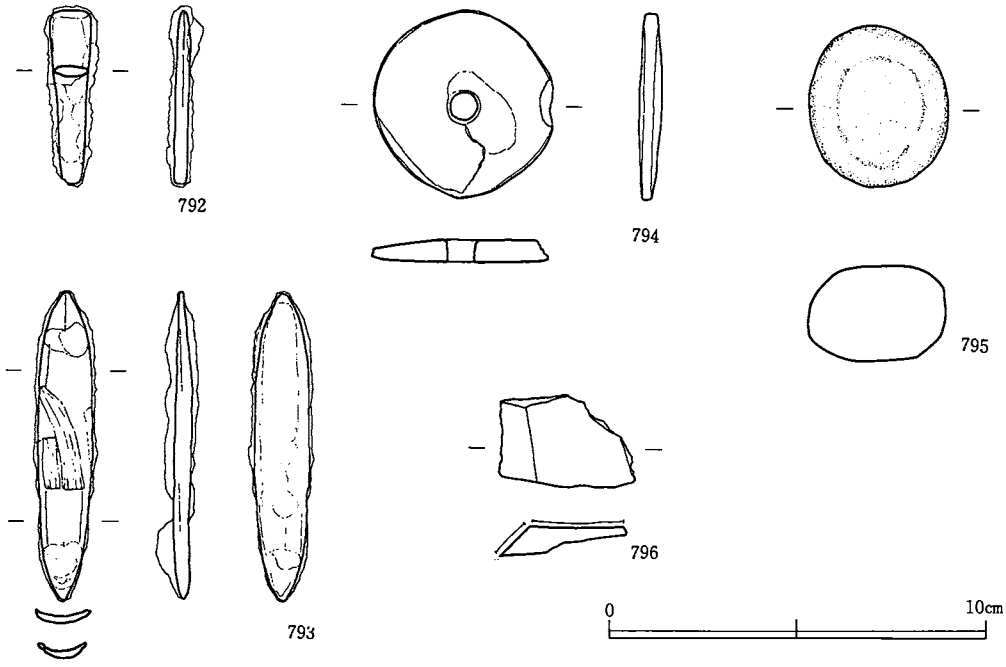
第162図　②－ⓓ区内一括出土土器実測図（その１）

位はヨコ方向の刷毛目を，下位は下方から上方への刷毛目を基調とするが，一部不整方向の刷毛目調整も見られる。**767**は胴部の器壁の厚さに比べ，口縁部が薄い。外面はタテ方向の刷毛目調整をナデ消し，内面は下方から上方に向っての刷毛目調整を行なう。**769**は近世陶器の破片である。外面は緑釉がかかり，高台内面は釉がかからない素焼きのままである。見込み部には白釉がかかる。嬉野焼と思われる。768・770～774は饗脚台部である。**768**は脚部端部に弱い沈線が



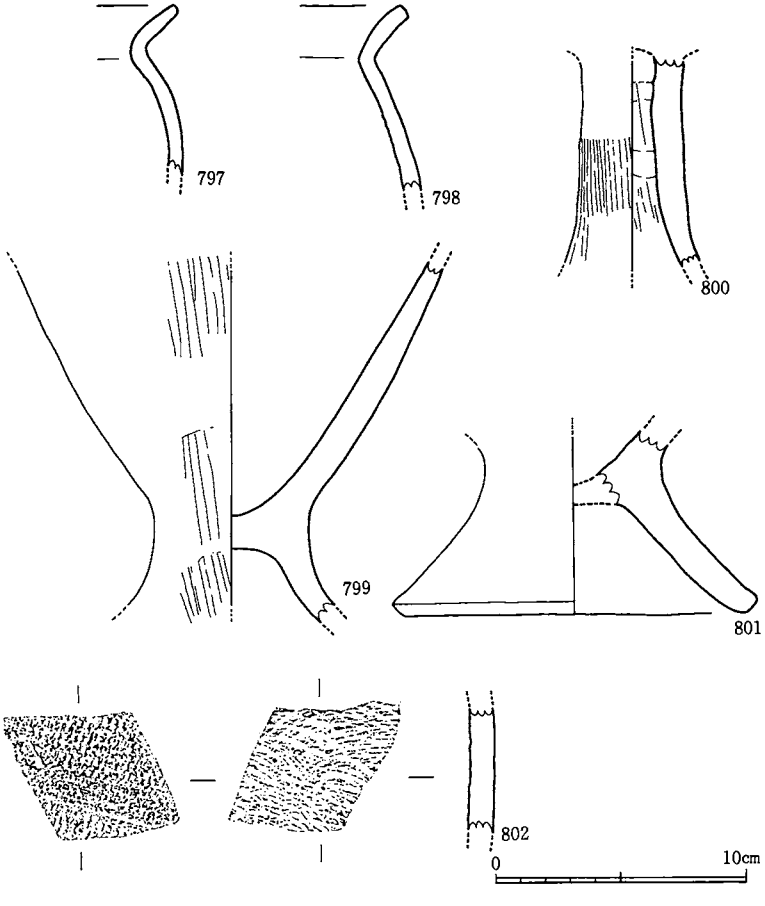
第163図　②－ⓓ区内一括出土土器実測図（その２）

入る。内外面ともヨコナデ調整を施し，内面には砂粒が付着する。**770**は脚部が細く下方につき出すが，胴部との接合部はぶ厚い。外面上位は一部タテ方向の刷毛目が見られるが，ヨコナデ調整で仕上げる。底部内面は不整方向のナデを施す。**771**は脚台端部がめくれる。外面はヨコ方向の刷毛目調整の後，ナデ消す。脚台内面はヨコナデを施し，砂粒が付着する。**772**は脚台径があまり広がらない。外面は斜方向刷毛目の後にヨコナデを施す。脚台内面には砂粒が付着し，斜方向の刷毛目調整を行なう。**773**は脚台端部を強く押さえ整形する。外面はタテ方向の刷毛目及びナデ調整を，内面は不定方向の刷毛目調整を行なう。**774**は底部が厚く 1.7cmを測る。外面はヨコ方向のナデ調整を，脚台内面は砂粒が付着し，不整方向のナデ調整で仕上げる。**775**は小型の壺である。底部が欠損し，風化が著しく調整の観察はできない。ただ内外面ともに赤色顔料が塗布してあった可能性も伺える。**776**は壺の口縁部片であり，外湾気味に立ち上がる。外面は斜方向の丁寧な刷毛目調整，内面は右下から左上への刷毛目調整を重ねる。**777**は壺の口縁部片である。外面は口縁部に櫛描きによる波状文が入る。下位はヨコナデ調整，内面はナデ調整で仕上げる。色調は淡黄褐色，焼成はあまく，胎土は粗である。**778**は壺の口縁部片である。頸部に断面三角形の突帯を有する。外面はタテ方向の刷毛目調整の後，ヨコナデを施す。内面は斜方向の刷毛目の後ナデ消しを行なう。**779**は頸部に断面三角形の突帯を有する壺口縁部である。端部が強いヨコナデの為，突起する。外面はタテ方向の刷毛目の後ナデ消し，内面はヨコ方向のナデ調整を行なう。**780**は鉢の口縁部である。胴部から内湾気味に膨らみ，口縁部は強く



第164図　②—ⓓ区内一括出土鉄器・石器実測図

屈曲する。内外面とも不定方向のナデを施す。**781**は壺の口縁部である。外面は斜方向の刷毛目調整の後ヨコナデ仕上げ。内面は斜方向の刷毛目調整を行なう。**782**は鉢の口縁部と考えられるが，形状は判明しない。内外面ともにヨコ方向の刷毛目調整で仕上げる。783～785,791は壺の底部である。**783**は体部と底部の境界部に段差を持つ。調整は内外面とも不整方向のナデである。**784**は底部が厚く，最大 2.1cmを測る。外面はナデ調整，内面は一部指圧痕が残るが,不定方向の刷毛目を下方から上方へと施す。**785**は底部径が狭く，立ち上がる器壁も薄い。外面はタテ方向の刷毛目調整の後ナデで仕上げる。内面は不整方向の刷毛目調整となる。**791**は残存高10.1cmと大型の破片である。外面はタテ方向の刷毛目及び指圧を施し，底部には不定方向の刷毛目調整が走る。内面はヨコ方向及び不定方向の刷毛目調整を行なう。**786**は免田式土器の壺胴部片である。残存長 5.0cmを測り，条線は８本まで残る。**787**は壺片である。頸部には断面三角形の突帯が付く。外面はタテ方向及び斜方向の刷毛目調整を行ない，内面の上位はヨコ方向の刷毛目，下位は斜方向の刷毛目調整で仕上げる。**788**はジョッキ形土器の把手である。残存長 3.4cm，幅は3.2cm，厚0.5cmである。**789**は脚台である。脚台径に対して脚台高が低く，鉢の一部かと思われる。脚台には0.3cm径で外面より内面に向って穿孔し，２個で１対となる,全体の復元数は不明。**790**はメンコ形土製品である。表裏とも刷毛目調整の後，全面にわたり研磨が施されている。



第165図　②－ⓓ·ⓔ区内一括出土土器実測図

②－ⓓ区内一括出土鉄器，石器（第164図）

792は円頭斧箭式の完形の鉄鏃である。全長 4.5cmを測る。**793**は完形の鉇である。内面には木質が付着している。全長 8.2cmを測る。

794は石製の紡錘車である。最大長4.9cmで一部欠損するが，よく研磨されている。材質は結晶片岩製である。**795**は投弾である。全長4.2cm，角閃石輝石安山岩製であり，一面はやや擦れた状況が見られる。**796**は砥石片である。欠損しているが2面に研磨面が見られる。

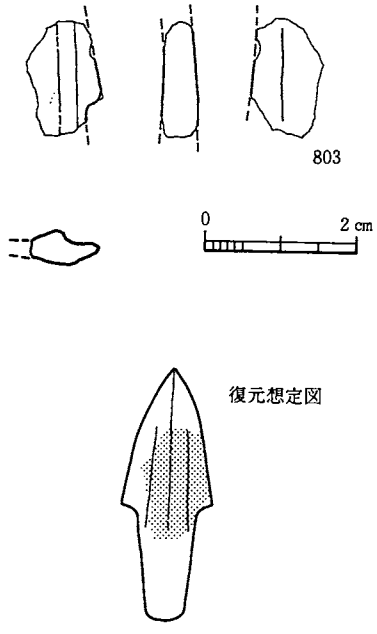
(40)　②—ⓓ・ⓔ区内包含層

調査区東側，34号住居址に隣接する地区である。基本的に西側から東側へと流れ込む一群の遺物を一括して取り上げた。

遺物の出土状況は概当地区内に広く散布する状況でひろがる。層位としては確認できず1層のみである。この地区内で番号を付して取り上げた資料は41点であり，図化できたものは23点であった。ここでは内7点について掲載した。遺物の内訳は弥生土器の土器類では甕4点，高坏1点，須恵器の甕胴部片が1点出土する。これらは全1層に薄く広がった状態であり，803の銅製鏃もこのような層中に含まれて出土したものである。

②—ⓓ・ⓔ区内出土土器（第165図）

797は甕の口縁部である。口縁部は丸みを持っており，胴部は膨らむ。外面はヨコ方向のナデ調整を施す。内面は斜方向及び上下方向の刷毛目調整を施す。色調は暗黒褐色で，焼成は不良。**798**は甕の口縁部である。口縁部はやや丸みを持つものの，胴部はなだらかに下る。外面は上下方向の刷毛目調整を施し，内面は斜方向及びヨコ方向の刷毛目調整で仕上げる。色調は明黒褐色，焼成は良好である。**799**は甕胴部片であり，脚台付近まで残り，残存高13.2cmを測る。外面は上下方向の刷毛目調整を行ない，一部ナデ消す。内面は器壁があれており観察不能である。脚台内面はヨコ方向の調整を行ない指圧の痕跡が残る。色調は暗褐色，焼成は良好である。**800**は高坏の脚部片で，残存高8.1cmを測る。外面はタテ方向の刷毛目調整の後，磨きを施す。内面は上位に指圧痕が残るが，木製工具によるヨコ方向の削りが見られる。色調は暗黄褐色，焼成は良である。**801**は甕脚台である。脚台径14.5cm，脚台高6.2cmを測る。外面は一部斜方向の刷毛目の後，ヨコ方向のナデ調整で仕上げる。内面は斜方向及び不定方向のナデ調整を行ない，胴部との取り付け部は指圧で仕上



第166図　②—ⓓ·ⓔ区出土銅鏃実測図

げる。色調は暗黄褐色で，焼成は良好である。**802**は須恵器片である。残存長 8.4cmで胴部片と思われる。外面は格子目の叩きを施し，その目は0.2～0.3cmで非常に小さい。内面は同心円文の痕跡が見られる。色調は青紫灰色で，焼成は良好である。

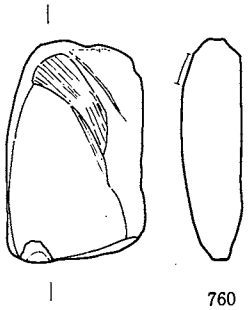
②－ⓓ・ⓔ区内出土銅鏃（第166図）

包含層中より銅鏃と思われる破片が1点出土した。**803**は現存での最大長 1.8cm，幅 1.0cm，厚 0.4cmを測る。微細な砂粒が表面に付着し，鋳上がりは悪くもろい。鏃の刃部片側の残存であり，中央部に鎬（しのぎ）がとおる。残存重量0.80g である。

(41)　③－ⓓ区内柱穴（第156図）

調査区西側の当地区内には，計8個の柱穴が集中している。これらは埋土的に見れば茶褐色土であり，後述する古墳時代の黒色埋土の柱穴とは明らかに異なる。平面規模からすれば径50～90cmを測り，特にPIT，4 などは中段にスラップを有する柱穴である。このグリッドは全体的に削平を受けている為に，この柱穴群は上面に位置した，住居址の柱穴とも考えられる。

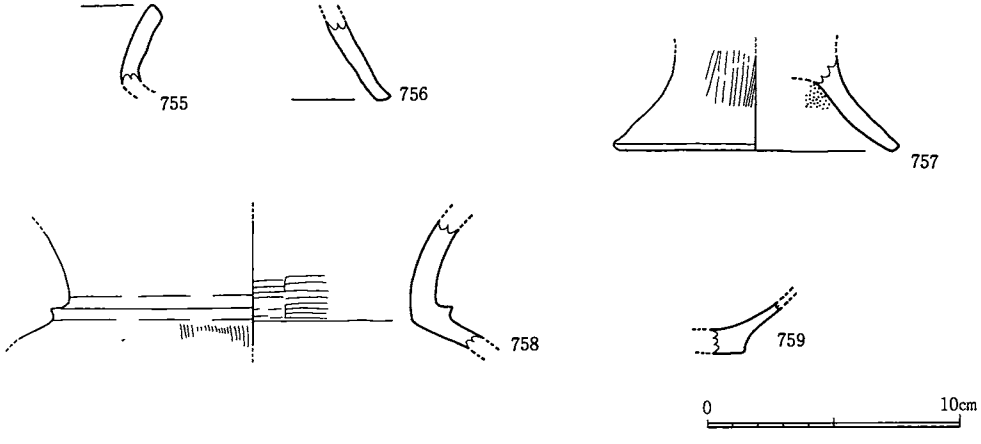
出土状況ではこの一連のピット内より遺物類が出土する。遺物の内訳は土器類では甕3点，壺2点であり，石器では砥石が1点出土する。ともに弥生時代に属する柱穴であると考えられる。



第167図　③－ⓓ区内出土石器実測図

③－ⓓ区内出土土器（第168図）

755はPIT，7出土の甕口縁部片である。全面にわたりヨコナデ調整を施す。色調は明黄褐色で，焼成は良好。**756**はPIT，2出土の

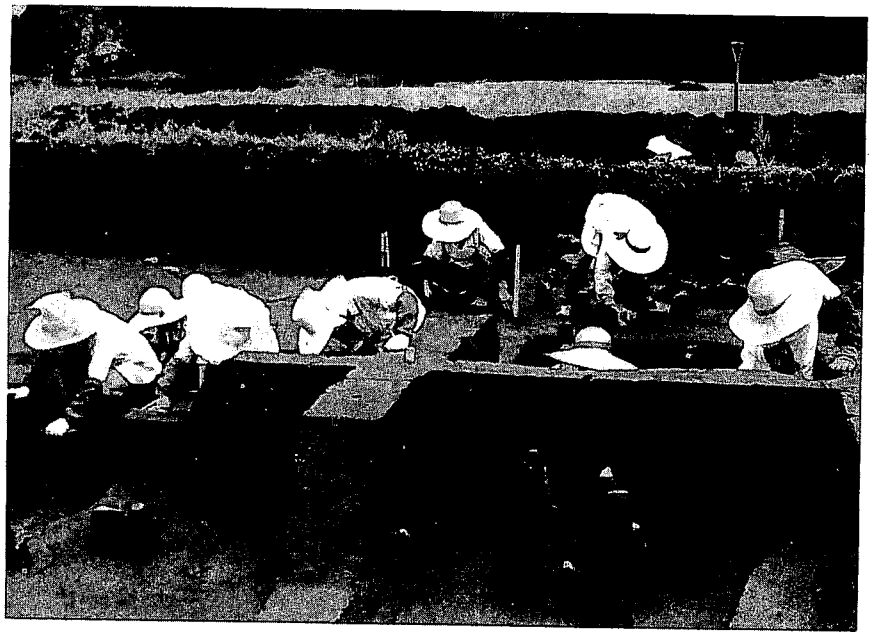


第168図　③－ⓓ区内出土土器実測図

甕脚台片である。全面にわたりヨコナデ調整を施す。色調は明黄褐色,焼成は良好。**757**はPIT，８出土の甕脚台である。脚台径11.3cm，残存高 3.8cmを測る。外面は上下方向の刷毛目調整を施す。内面はヨコナデ仕上げを行ない，砂粒が付着する。色調は明黄褐色，焼成は良好。**758**はPIT，4出土の壺片である。頸部径は14.5cm，残存高5.1cmを測る。外面では頸部に断面三角形の突帯を有する。上位はヨコナデ調整，下位は上下方向の刷毛目調整を施す。内面はヨコナデ調整及びヨコ方向の刷毛目調整を施す。色調は明黄褐色，焼成は良好。**759**はPIT,4内出土の壺底部片である。残存高は 2.3cm，胴部壁は薄く 0.4cm，それに対し底部は厚く 1.2cmである。外面は上下方向の刷毛目調整の後ヨコナデで仕上げる。底部は斜方向の刷毛目が明瞭に残る。内面は無調整，色調は明茶褐色で，焼成は良好である。

③—ⓓ区内出土石器（第167図）

この地区のピットより石器が１点出土する。**760**はPIT，４より出土した砥石である。岩質は結晶片岩製で，長方向 5.8cm，短方向 3.6cm，厚 1.6cmを測る。自然面を全面に残し，一面のみを研磨する。研磨は良好。



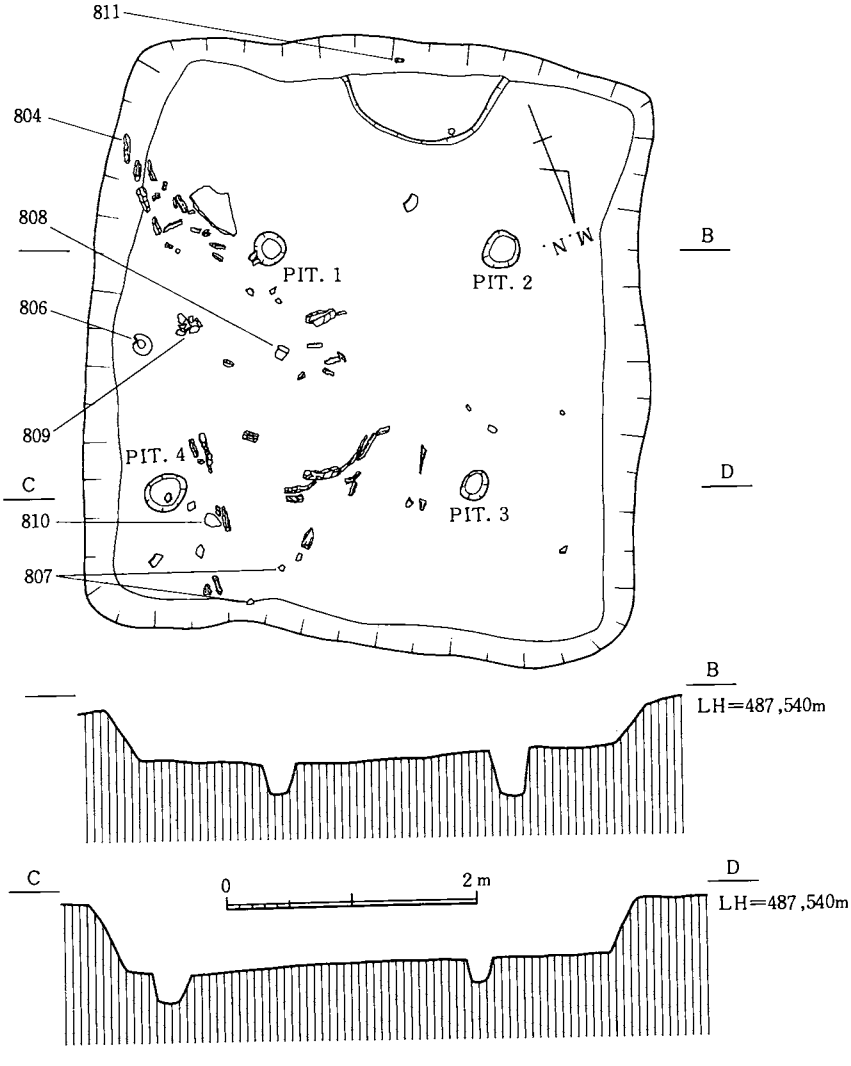
発掘調査風景

3，古墳時代について（第170図）

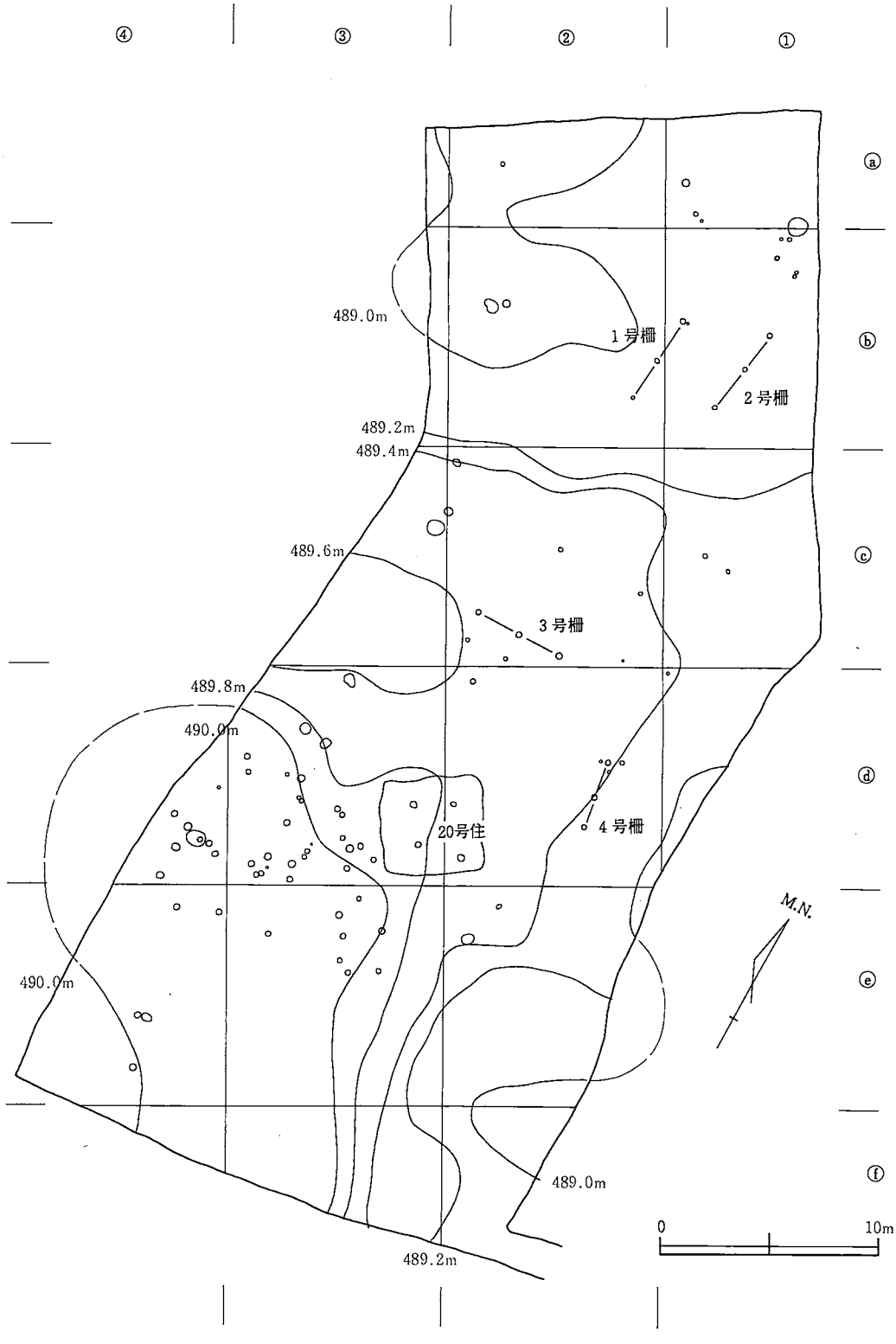
当概地区では20号住居址を代表とする黒色の埋土を持つ遺構を，古墳時代に属する遺構と考えた。その内訳は，住居址1軒，柵列4基，80個弱の柱穴群で，別第170図の遺構配置図に示すとおりである。20号住居址内の須恵器により，その時代は7世紀前半と考えられるが，この時期に集落が一部形成されていたと考えられる。以下項目にわけて住居址，柵列，柱穴群の順に説明を加えたい。

(1)20号住居址（第169図）

②・③—Ⓓ区内，調査区中央部に位置している。17号，18号，24号住居址及び2号土壙を切



第169図　20号住居址実測図

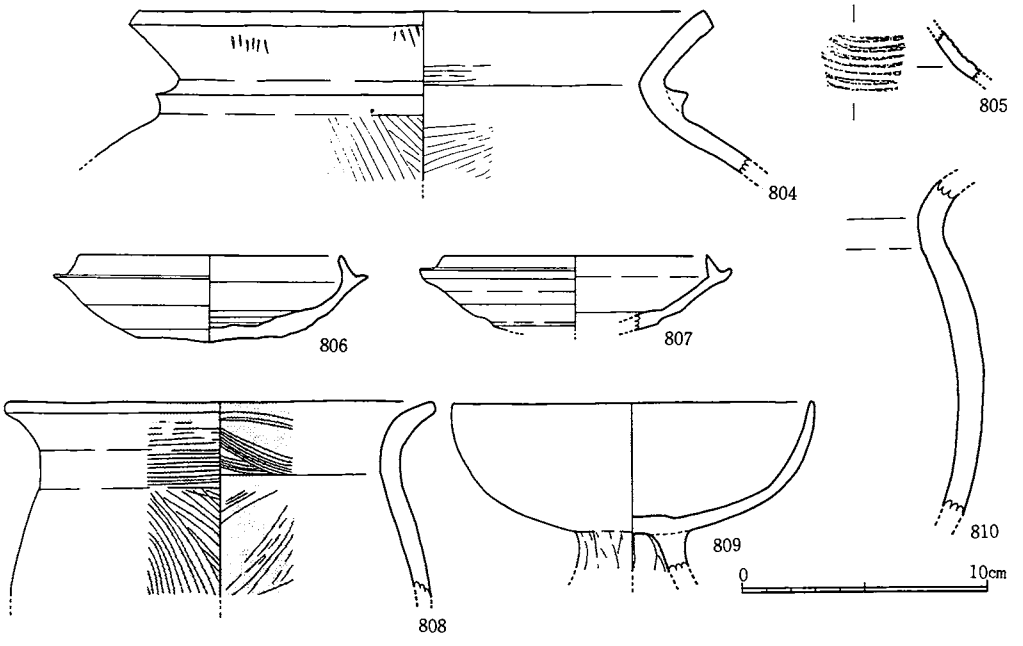


第170図　Ⅳ．Ⅴ－C～E区古墳時代遺構配置図

って造られている。平面形態はほぼ正方形で，長軸（東西）方向4.7m，短軸（南北）方向4.5m，床面積16.8㎡を測る。主軸方位は N－28°－Eであるが，ほぼ正方の形状であることから直角に移動する可能性も否定できない。壁高は東側で50cm，北側で40cmである。主柱穴は4本であり，上端径は25～35cmと極めて小型である。北側に落差10cmのベッド状遺構が造られるが，炉は検出されない。

住居址の覆土は2層からなっており，1層の暗茶褐色土には焼土及びカーボンが混入していた。2層は明茶褐色土で，下面には弱い硬化面が確認された。

遺物の出土状況では，上層より弥生土器にまじって炭化材が20点ほど2群に分かれて出土する。2方向からの転倒焼失とも考えられるが，周囲からは炭化物，焼土等は検出されない。遺物番号を付して取り上げた資料は，カーボンを含めて41点であるが，その内で図化できたものは30点，ここで掲載したものは8点である。遺物の内訳は弥生土器壺2点，須恵器坏2点，土師器甕2点，高坏1点であり，砥石1点も含む。遺物の出土層位では1層及び2層に弥生土器を含むものの，2層中からは806，808～810の遺物が出土し，古墳時代の住居址であると判断される。住居址の廃絶に際しては，古墳時代の遺物類が埋まった後に何らかの原因で樹木（材木）が焼失し，転倒したものと考えられる。



第171図　20号住居址内出土土器実測図

20号住居址内出土土器（第171図）

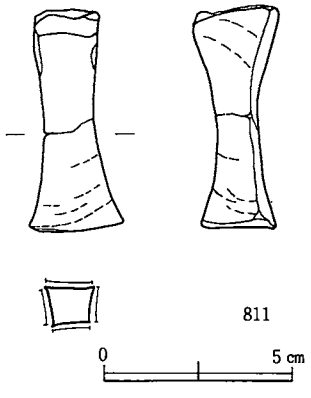
出土した遺物の内半数は弥生時代に属する土器であるが，ここでは２点を図示した。**804**は頸部に断面三角形の突帯を有する壺である。胴部外面は斜方の刷毛目調整の後ヨコナデを施す。胴部内面も同様の斜方向の刷毛目調整である。**805**は壺の胴部片である。外面は櫛状の施文具で６本のヨコ方向条線を施す。内面は，ナデ調整であり指圧痕が見られる。**806，807**はともに須恵器の坏身である。**806**は残存⅔で，口縁部から立ち上がり部に接してやや内側がふくらむ。外面は回転ヘラ削りを施し，口縁部から内部にかけてはナデ調整で仕上げる。**807**は残存⅙で，底部を欠損し，**806**に比べると器壁の仕上げが粗く，口縁部と立上り部との境に窪みを有する。外面は，回転ヘラ削り調整，口縁部から内部にかけてはナデ調整で仕上げる。**808**は土師器の甕である。外面は，ヨコ及び斜方向の刷毛目調整，内面はヘラ刷りの後に刷毛目調整で仕上げる。なお，内外面ともに漆塗りで色調は黒色である。**809**は土師器の高坏である。外面は指で整形後，ナデ調整を施し，脚部ではヘラ削り痕がみられる。坏部内面はナデ調整を施し，脚部内面にはヘラ削りの痕跡が明瞭に残る。表裏ともに器壁を研磨したあとに漆を塗布したものと考えられる。内外面ともに漆塗の痕跡は弱い黒点となり微量残存するが，脚内面には良好な状態で残る。**810**は土師器の甕片である。外面は幅５cm前後の刷毛目調整を施し，内面はヘラ削り及び一部ヨコナデ調整で仕上げる。色調は橙色で，焼成は良好である。

20号住居址内出土石器（172図）

20号住居址からは石器類では砥石が１点出土する。**811**は凝灰岩製の砥石で、全長 8.9 cmを測る。研磨面は４面であり，線条痕，磨痕が残り，中央部が強く窪む。

(2)柵列について（第170図）

古墳時代の柱穴内で，柱間の通りが良く，また間隔が近似する遺構が確認されている。４基の遺構はその形状からして柵列状のものであろうと考えられ全て２間である。調査区北部に２基並行しており，中央部20号住居址の周辺部に，住居址を囲む形で２基配置されている。以下順次遺構の概要を記す。



第172図　20号住居址内出土石器実測図

１号柵列　①・②－ⓑ区に位置し，２号柵列と平行して並ぶ。主軸は南北方向，その方位はＮ－４°－Ｅとなる。北側よりの３個の柱穴の径25cm，20cm，15cmとなり，柱間寸法の心数値は2.15m，2.05m を測る。出土遺物はなし。

２号柵列　①－ⓑ区に位置し，１号柵列と平行する。

主軸方向は南北，その方位はN－7°－Eとなる。北側からの3個の柱穴の径は25cm，25cm，20cmとなり，柱間寸法の心数値は1.95m，2.20mを測る。出土遺物はなし。

3号柵列　③－Ⓒ区，20号住居址の北側に位置する。主軸方向は東西，その方向はN－89°－Eとなる。西側からの3個の柱穴の径は20cm，35cm，30cmとなり，柱間寸法の心数値は2.15m，2.10mを測る。

4号柵列　②－ⓓ区，20号住居址の東側に位置している。主軸方向は東北，その方位はN－12°－Eとなる。北側からの3個の柱穴の径は25cm，30cm，20cmとなり，柱間寸法の心数値は1.70m，1.45mを測る。出土遺物はなし。

(3)柱穴群について（第170図）

古墳時代に属すると考えられる黒色の埋土を持った柱穴群が，調査区全域で確認されている。個数は80個弱であり，平面規模は最大径80cmのものから最小径15cmのものまで多様である。分布の特徴は20号住居址が位置する③－ⓓ区に主分布を示すということである。柱穴は，確認面から10～20cm程度のものが多く，概して西側が浅く，東側に向かうにしたがって深くなる。これは地形に対して上面の削平の状況を示すものであろう。柱穴内からの遺物の出土は，弥生土器が少量出土するのみで図化できるものはなかった。

4．試掘トレンチについて（第6図）

Ⅳ・Ⅴ－C～E区内では，住居址の重復が見られない空白地区については，さらに遺構の有無を確認する為に9本の試掘トレンチを設定した。7号～15号トレンチは遺物の流れ込みが見られる，東側包含層地区に主に設定した。7号～11号・15号トレンチの一群は5号・6号・7号・9号各住居址がとりまく空白地区に設定して掘り下げた。この地区では少量の遺物が包層されていたものの，遺構は全く検出されなかった。13号・14号の両トレンチは13号・16号・11号住居址が囲む地区に設定し掘り下げたが，ここでも遺構は検出されなかった。

このように，遺構の重復が激しいⅣ・Ⅴ－C～E内においては数ケ所に，全く遺構が検出されない空白地帯が見られることとなる。

試掘トレンチ内出土土器（第8図）

ここでは，2次調査の試掘トレンチの7号～15号までの資料を概観する。

11は壺で，14号トレンチからの出土である。口径19.0cm，残存高6.6cmを測る。頸部から大きく屈曲して，口縁部は外湾してひらく。外面では，口縁部を右上方から左下方に向っての刷毛目調整を行ない，屈曲部より下位は上方より下方への刷毛目調整が見られる。内面では一部ヨコナデ調整を行なうが，全体的に刷毛目調整で仕上げる。12は甕で，14号トレンチからの出

土である。口径22.4cm，残存高7.3cmを測る。外面では一部刷毛目調整が残るが，全面にナデを施す。内面ではヨコナデ及び刷毛目調整を行なう。**13**は甕で，同じく14号トレンチからの出土である。頸部のくびれ部を強く押圧しており，緩やかな段を有する。外面は全面にナデ調整を行なう。内面はヨコ方向のナデ調整を基調とするが，磨耗し観察不能である。**16**は壺胴部片で10号トレンチからの出土である。外面では，頸部に断面三角形の突帯を有し，斜方向に間隔，0.6cm前後で刻み目を施す。さらに下位にはヨコ方向に不規測な条線を有する。内面では，内壁が剝離しており観察不能である。

試掘トレンチ内出土石器（第9図）

ここでは，2次調査の試掘トレンチから出土した石器を紹介する。

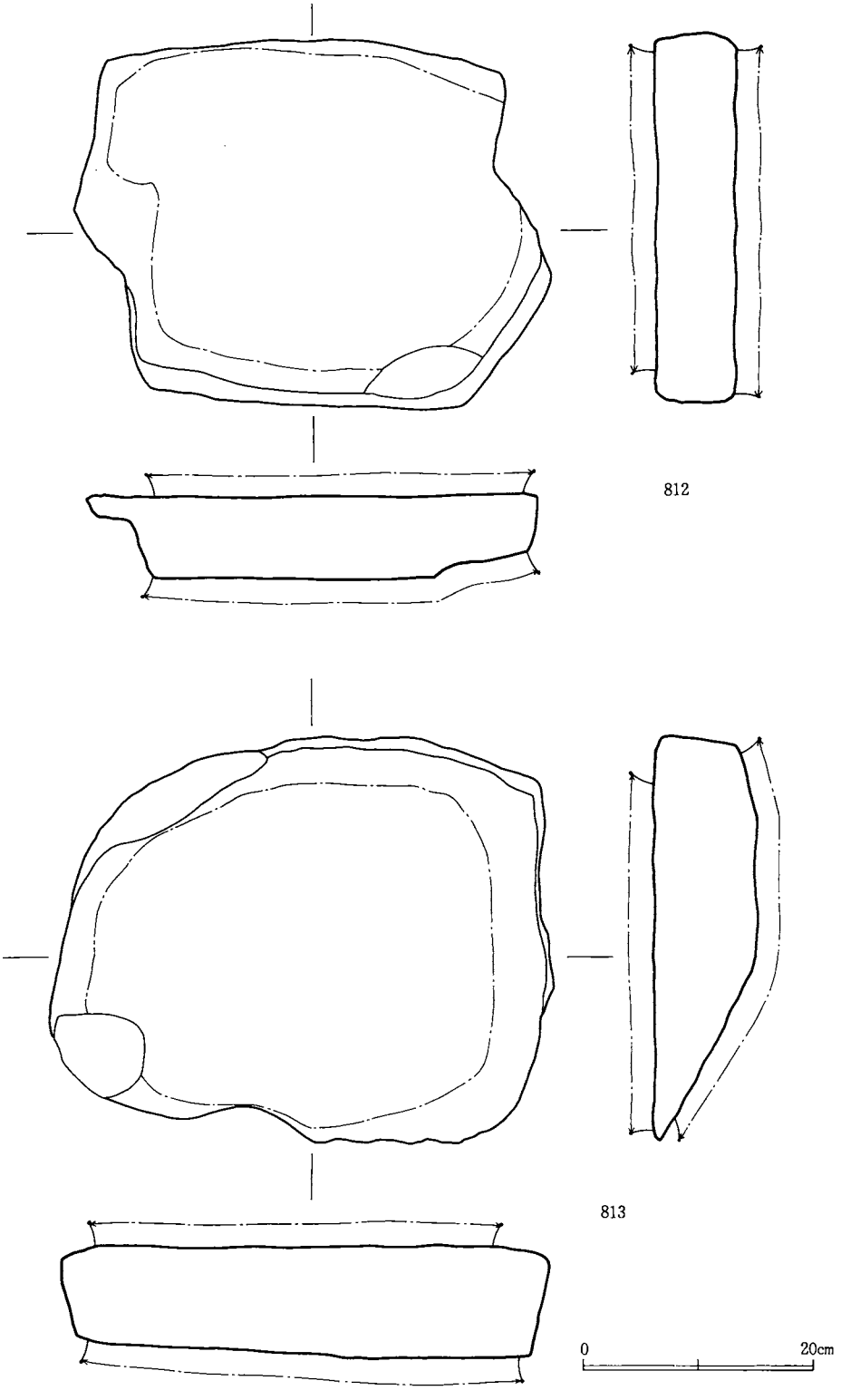
19は14号トレンチから出土した石器片である。残存の形状は，ほぼ三角形をなしており，全長は3.3cmである。薄く剝離しており，原形を保つのは2辺のみである。

5．Ⅳ・Ⅴ－C～E区周辺部出土資料

Ⅳ・Ⅴ－C～E区周辺部表採出土遺物（第175図）

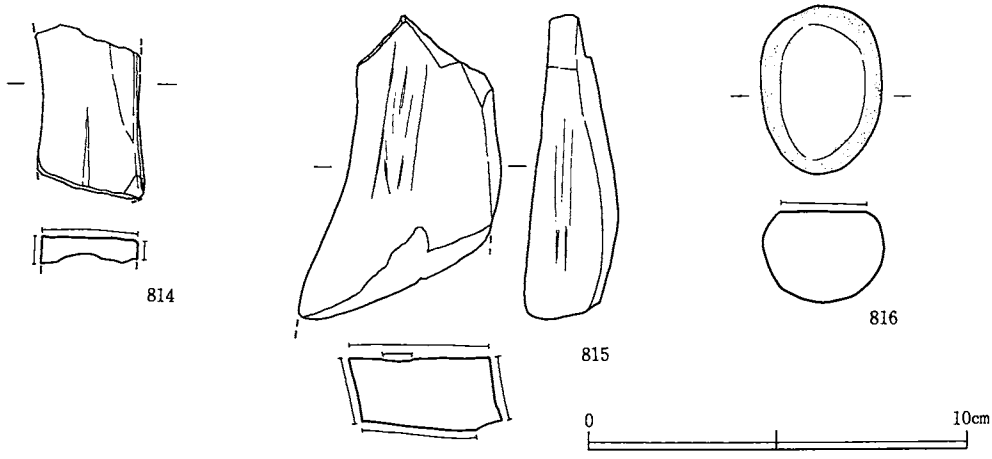
2次調査に際して，周辺部より10点の土器が出土している。以下各遺物ごとに概観したい。

817は石棺北側から表採した甕の口縁部片である。口縁部断面は三角形状をなし，全面にわたりヨコ方向のナデ調整を施す。色調は明褐色，焼成は良好。 **818**は遺跡北側道路付近表採の甕口縁部片である。口縁部断面T字形で，全面にわたりヨコナデ調整を施す。色調は明茶褐色，焼成は良好である。 **819**は石棺地区の北側で表採した甕の口縁部片である。口縁断面はT字形であるが，かなり内傾する。色調は明黄褐色，焼成は良好。 **820**は調査区東側表採の壺の口縁部片である。口縁部は逆くの字形で強く屈曲しており，外面は斜方向刷毛目の後ヨコナデ調整で仕上げる。内面はあて具痕跡が残り，ヨコナデ調整で仕上げる。色調は明赤褐色，焼成は良好。 **821**は，調査区南側で表採された壺の口縁部片である。断面は強く逆くの字形に屈曲し，立ちあがる。口縁部は肉厚であり，外面の調整はヨコナデ及び斜方向の刷毛目後にヨコナデで仕上げる。内面はヨコナデ調整である。 **822**は調査区北側表採の甕の底部片である。底部径は10.8cm，残存高6.2cmであり，底部はぶ厚く最大3.1cmを測る。外面はタテ方向及び不定方向のナデ調整，内面は器壁が粗れ，観察不能である。なお外面底部はヘラで研磨する。色調は明黄褐色，焼成は良好である。**823**は調査区西側より表採の陶器のすり鉢である。体部外面はヨコナデ調整，底部は回転糸切りはなしを行なう。内面には強い条線を1単位16本前後のもので，外周より中心見込み部に向って刻む。色調は明茶褐色で，焼成は良好である。 **824**は調査区北側より表採の壺胴部片である。外面は三条の大型の突帯を有し，ヨコ方向のナデ調整を施す。内面は不定方向のナデ調整を施す。色調は明黄褐色で，焼成は良である。 **825**は調査区南側で表

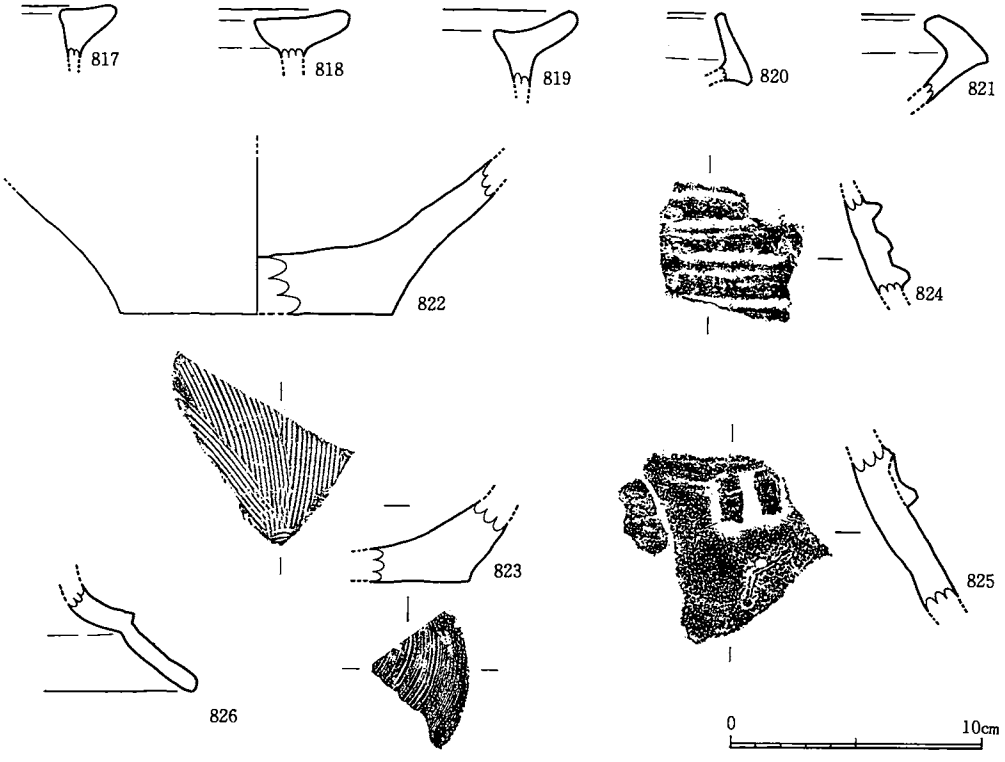


第173図　Ⅳ・Ⅴ－C～E区内出土石器実測図(その1)

採された壺の胴部片である。外面は，突帯下部に長さ１.８cmのリボン状の帯を２個で一対として貼り付ける。調整は不定方向のナデ調整，内面は指圧のみの調整である。色調は黄褐色で，焼成は良好である。**826**は調査区南側表採の須恵器脚部である。形態は不明であるが，脚は中位で段を有しており，下方へ延びる。外面は回転ヨコナデ調整を施し，内面はナデ調整を行なう。色調は灰白色で，焼成は良好である。



第174図　Ⅳ・Ⅴ－Ｃ～Ｅ区内出土石器実測図（その２）

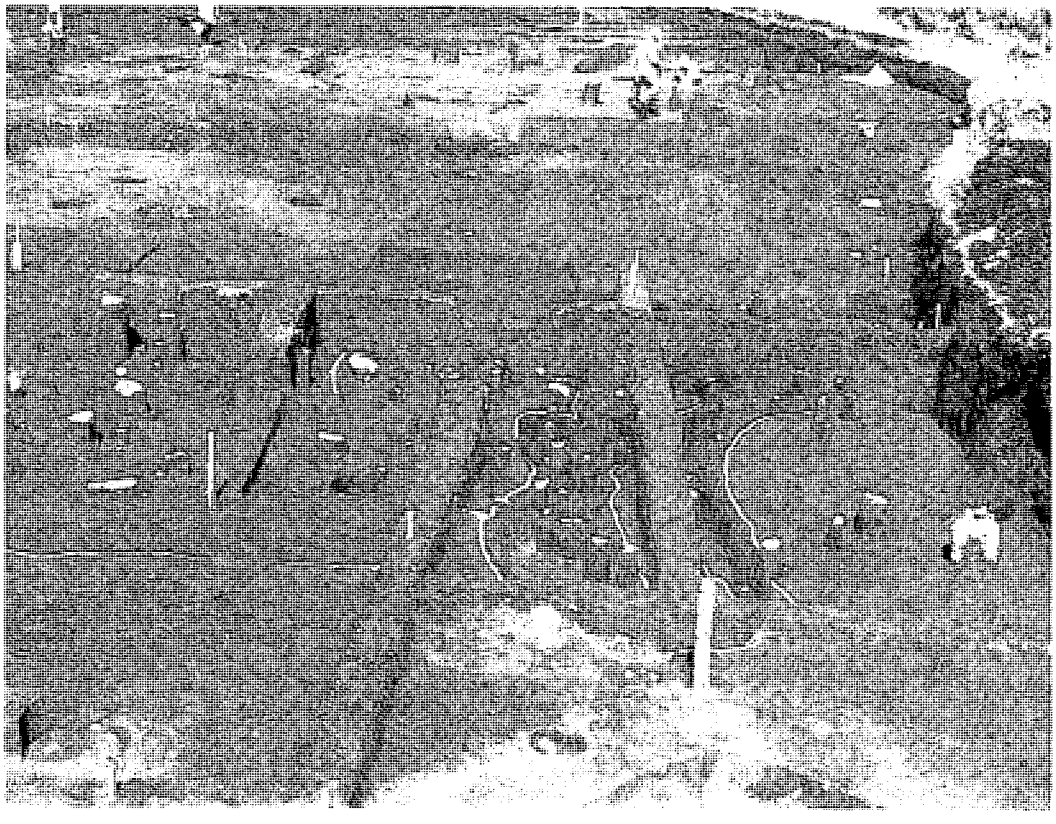


第175図　Ⅳ・Ⅴ－Ｃ～Ｅ区周辺部表採土器実測図

Ⅳ・Ⅴ－C～E区内全区出土石器（第173・174図）

2次調査に際して，本地区より石器が5点全区一括として取り上げられた。出土遺物の内訳は砥石が3点，台石が2点である。

814は結晶片岩製の砥石である。残存長4.2cm，幅2.9cmを測る。研磨面は3面で剝離し欠損している。中央部に線条痕が明瞭に残る箇所がある。重量16.8g 。 **815**は凝灰岩製の砥石である。残存長8.4cm，幅5.2cmを測る。研磨面は4面であり，特に一面には線条痕が明瞭に残り，窪む。重量は96.8g 。 **816**は，角閃石安山岩製の磨石である。全長4.5cm，幅3.1cmを測る。一面のみを強く研磨し平担面を形成させる。重量39.7g である。 812及び813は大型の台石である。**812**は③－ⓔ区内出土安山岩製の台石である。長方向20.9cm，短方向15.8cm，最大厚3.6cmを測る。一部剝離するもののほとんど平担であり，研磨は2面行なわれている。なお裏側には一部赤色顔料が塗布される。重量16.75kgである。 **813**は全区内出土の安山岩製の台石である。長方向21.5cm，短方向17.4cm，最大厚4.9cmを測る。表面は一部敲打を加えた後に，研磨を全面に行なう。裏面も丁寧に研磨を行ない，稜部もなだらかとなる。重量22.3 kgである。



調　査　風　景

第5節　Ⅵ－Ｆ区の調査

Ⅵ－Ｆ区の調査について

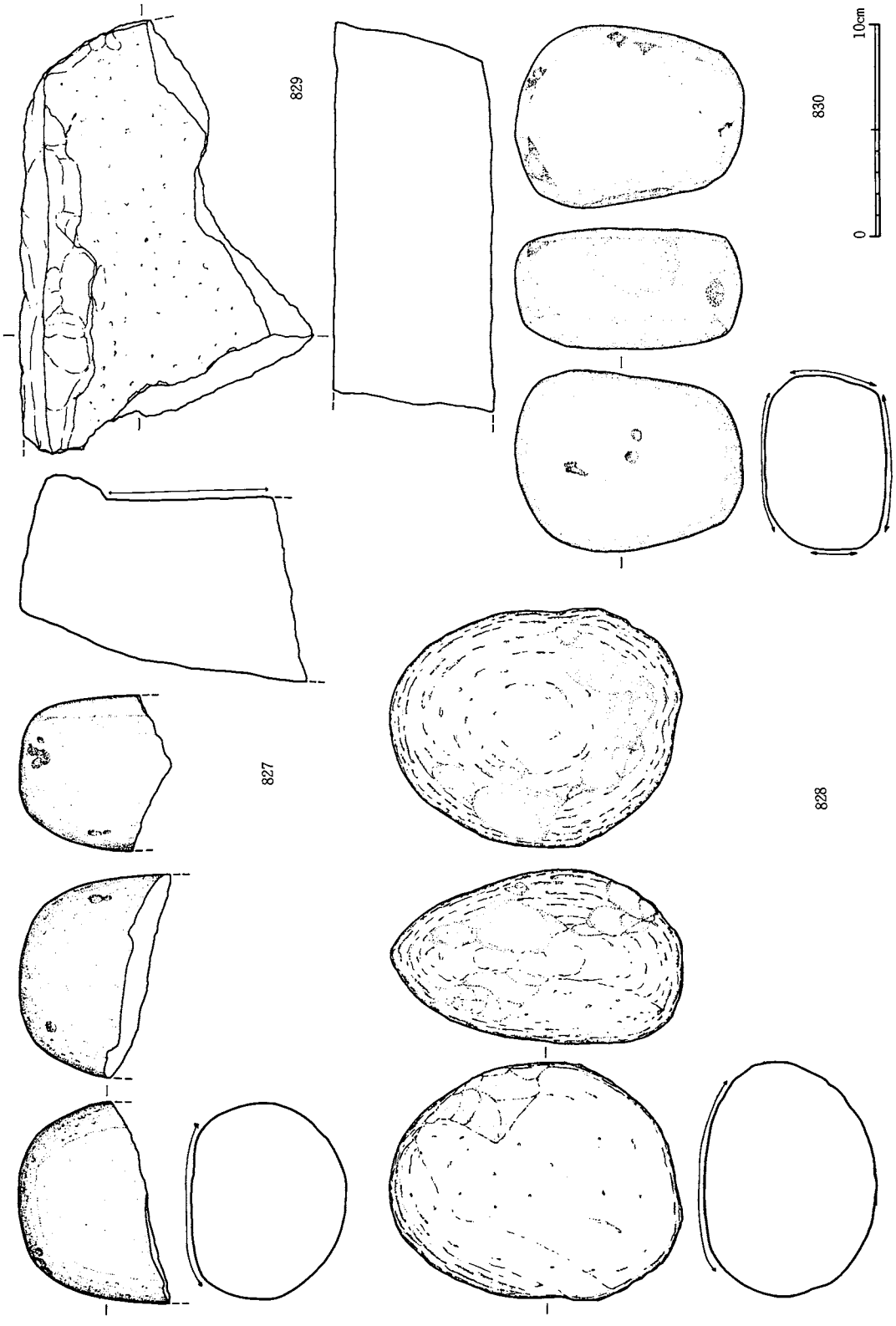
発掘調査地区内の作業が終息しつつある10月下旬に，大グリッドの標記で示すⅥ－Ｆ区内に地権者の同意を得て，試掘トレンチを設定した。この地点は乙姫集落から永草集落に向かう舗装道路の右側，山本信治氏所有の畑である。畑は3筆からなり，作付けの関係から作物のない地点をえらび，計4ヵ所のトレンチ設定となる。この地点は今回全面調査をしたⅣ・Ⅴ－Ｃ～Ｅ区からは西南西の方位となり，位置としては約70m離れた距離である。地形図で見る通り遺跡の乗る丘陵は，西側から東側に向かって舌状に延びており，本試掘地点は現況では山地側と田畑側の境部に位置している。

試掘した4トレンチの全てから弥生終末時期の土器が，コンテナ1箱程度出土した。今回は整理期間の関係上図化はできなかったが，Ⅳ・Ⅴ－Ｃ～Ｅ区内の資料とほぼ同時期と考えられる。なお作付けの際の攪乱によって，遺構は残存していないが，畑全体にわたって厚く包含層を形成していた。

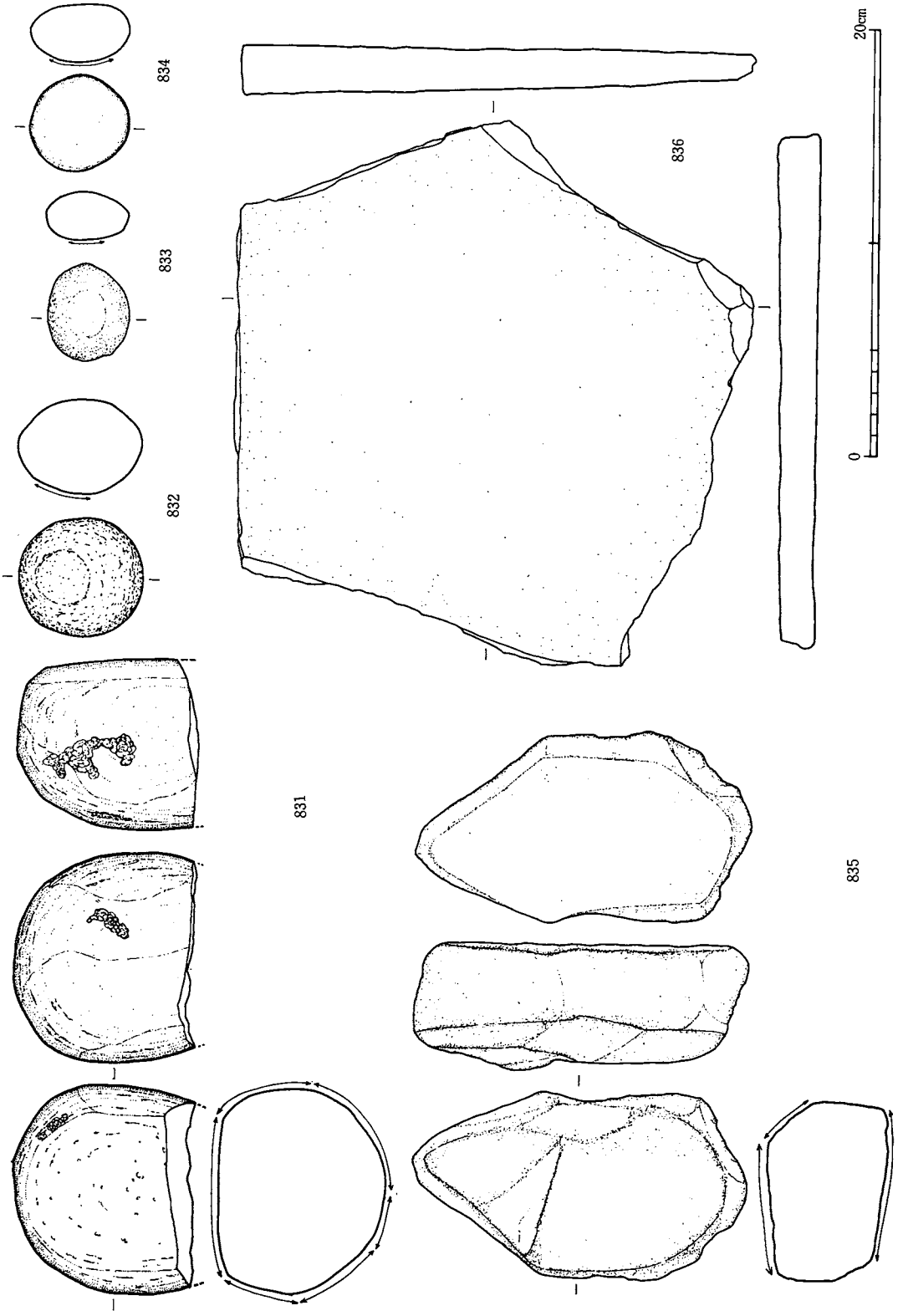
このように同一丘陵上に位置するものの，本調査からやや離れた箇所で包含層が確認されたことにより，本遺跡は更に山地側に延びていた可能性が考えられる。

第6節　Ⅳ・Ⅴ－Ｃ～Ｅ区内出土石器類追加資料（第176～185図）

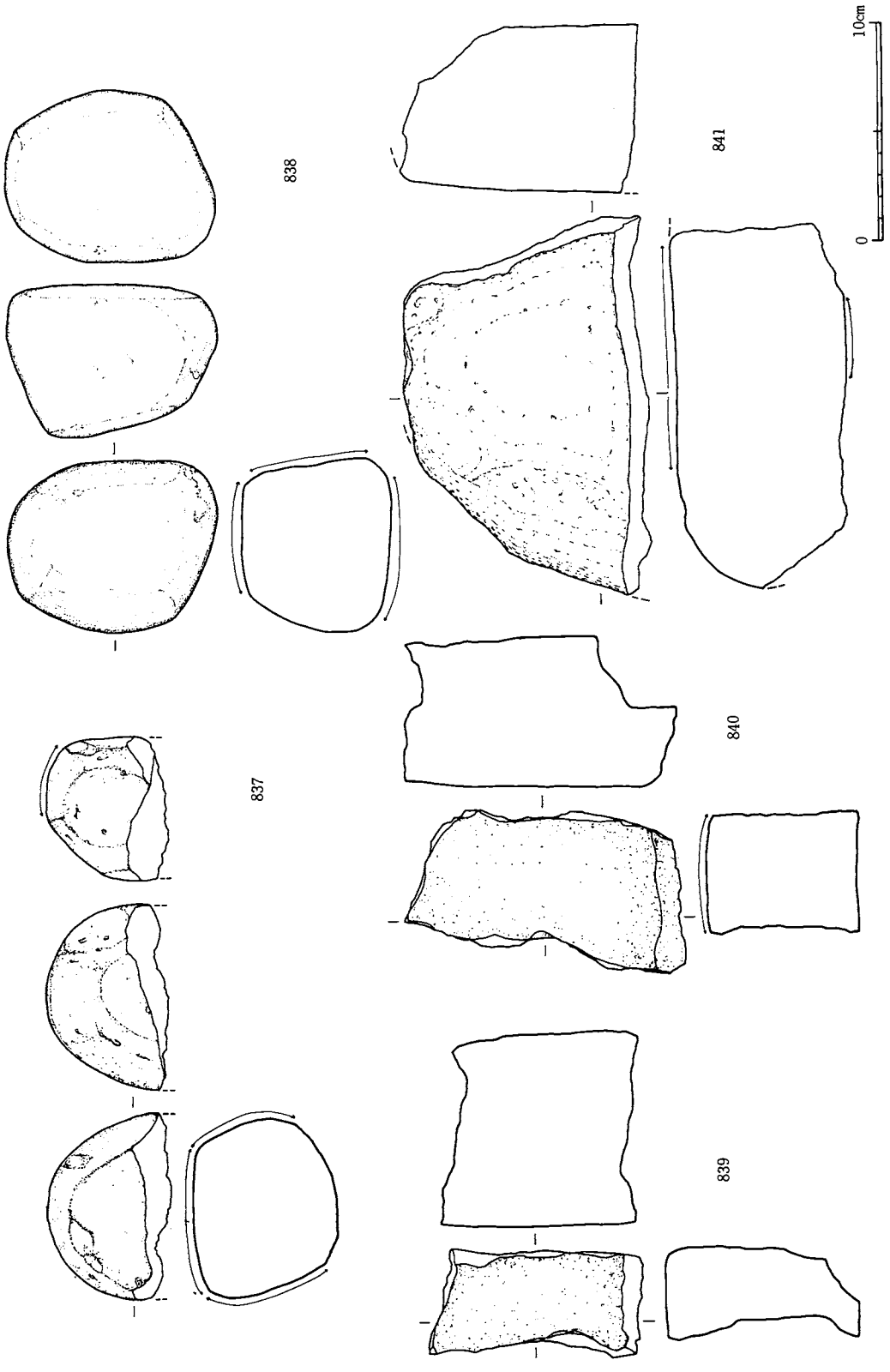
この地区内より石器類の資料が45点出土した。これは整理途中で，一部所在が不明になったものが，確認されたため，ここで新たな追加資料とした。なお名遺構の実測図中には，実線を引いてのこの遺物類の地点は示していない。



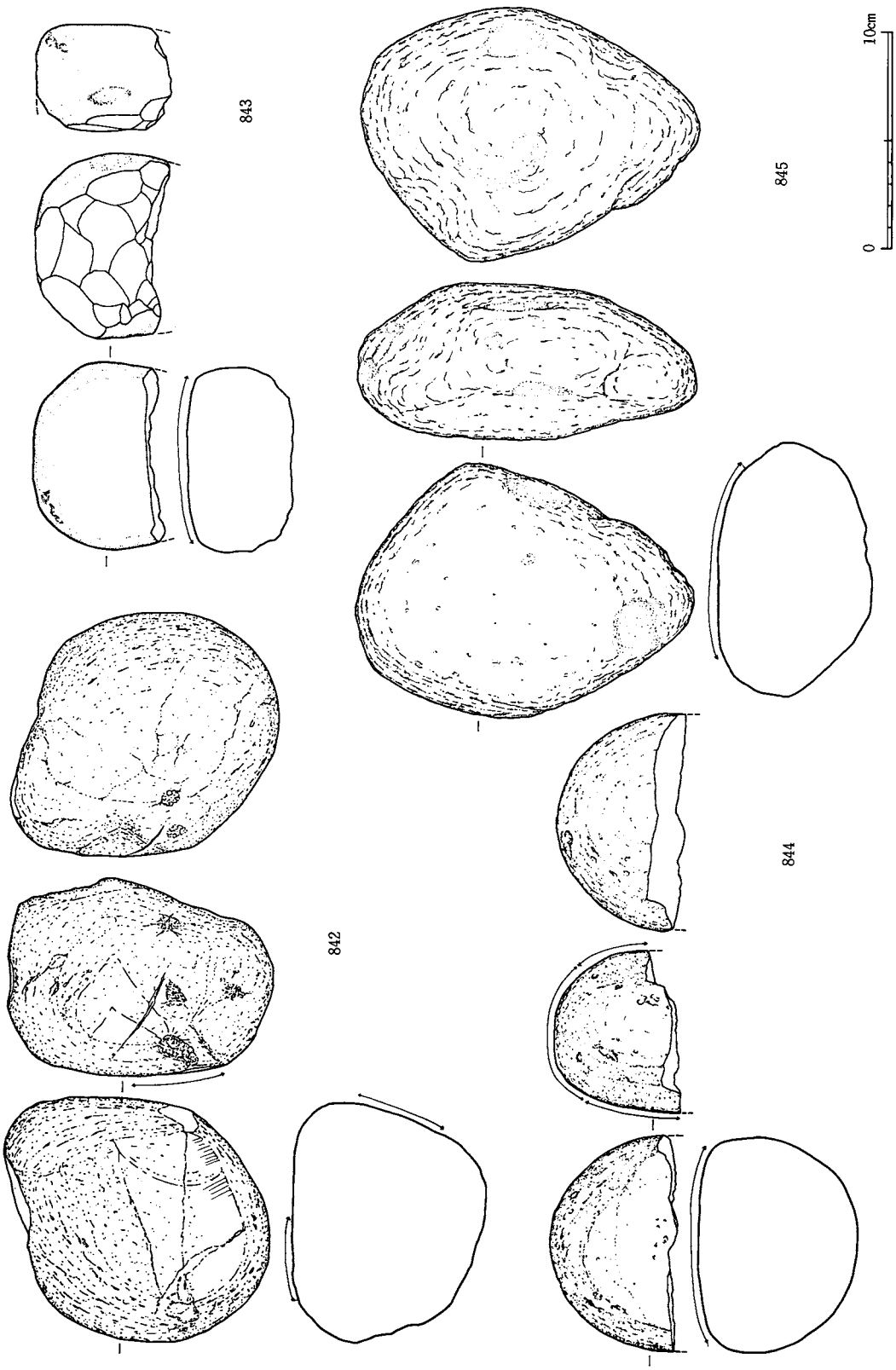
第176図　1号住居址内出土石器実測図



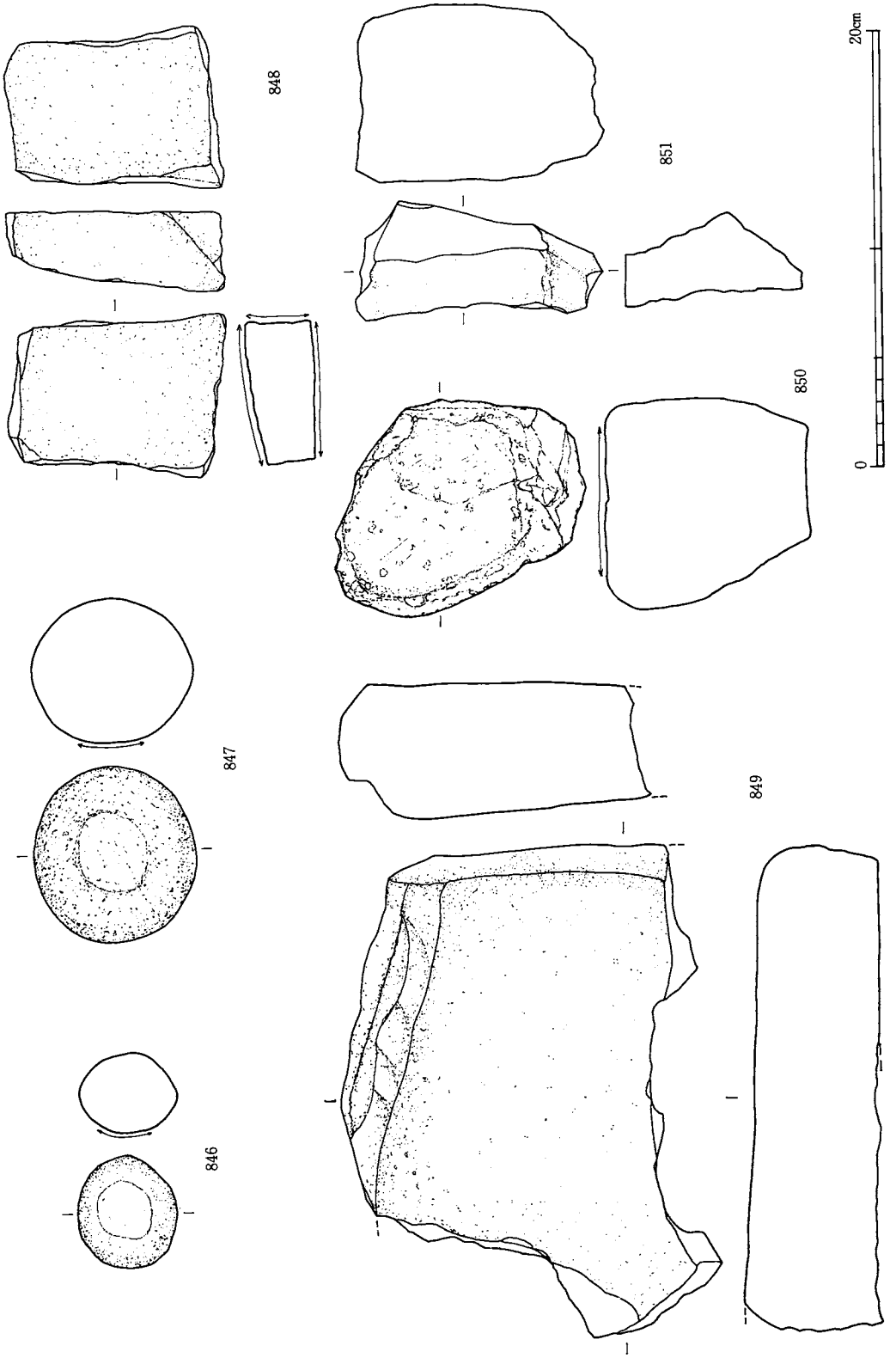
第177図　4号・5号・15号住居址内出土石器実測図（831・834は4号住居址、832・833は5号住居址、835・836は15号住居址内出土）



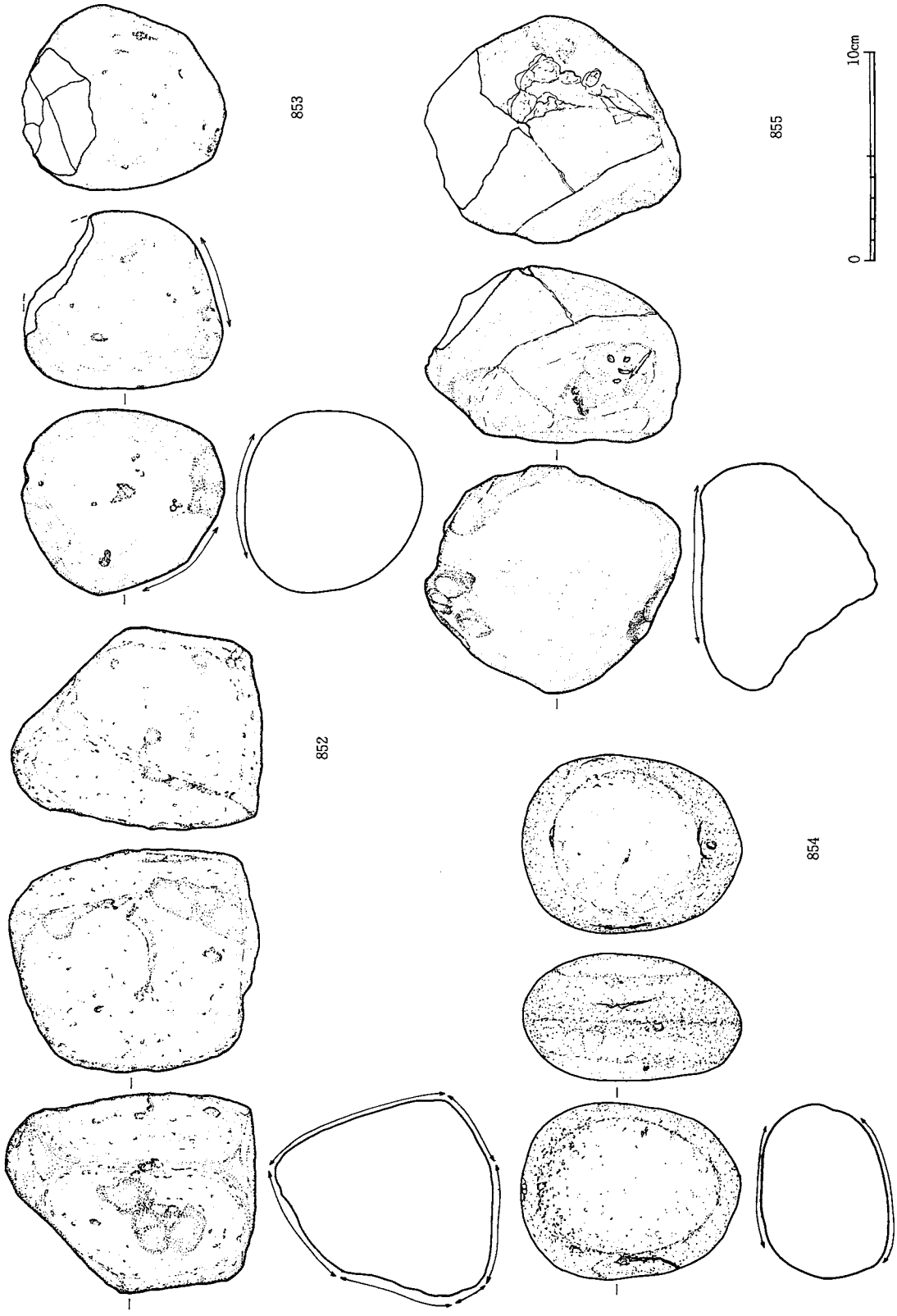
第178図　16号住居址内出土石器実測図



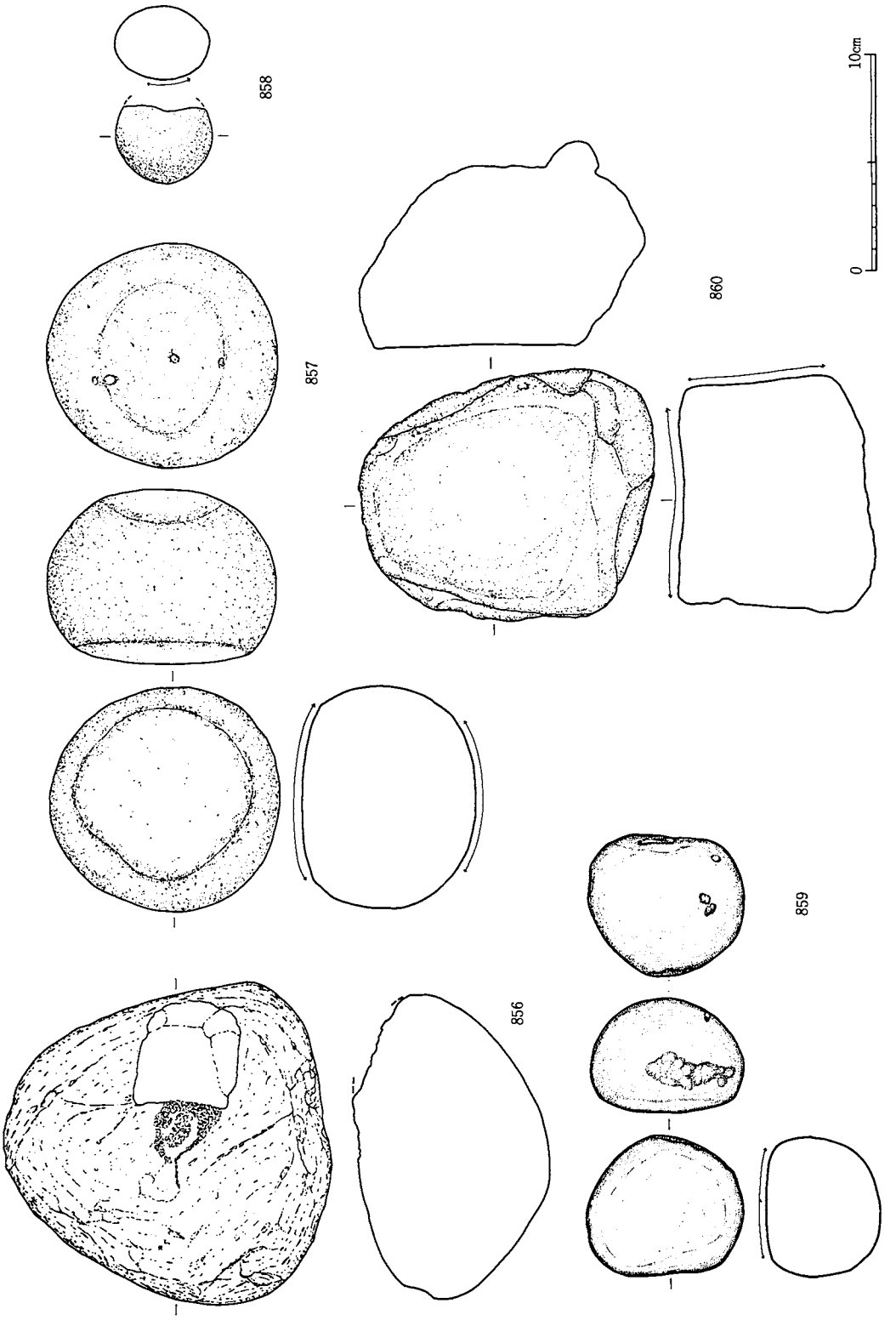
第179図　17号住居址内出土石器実測図（その１）



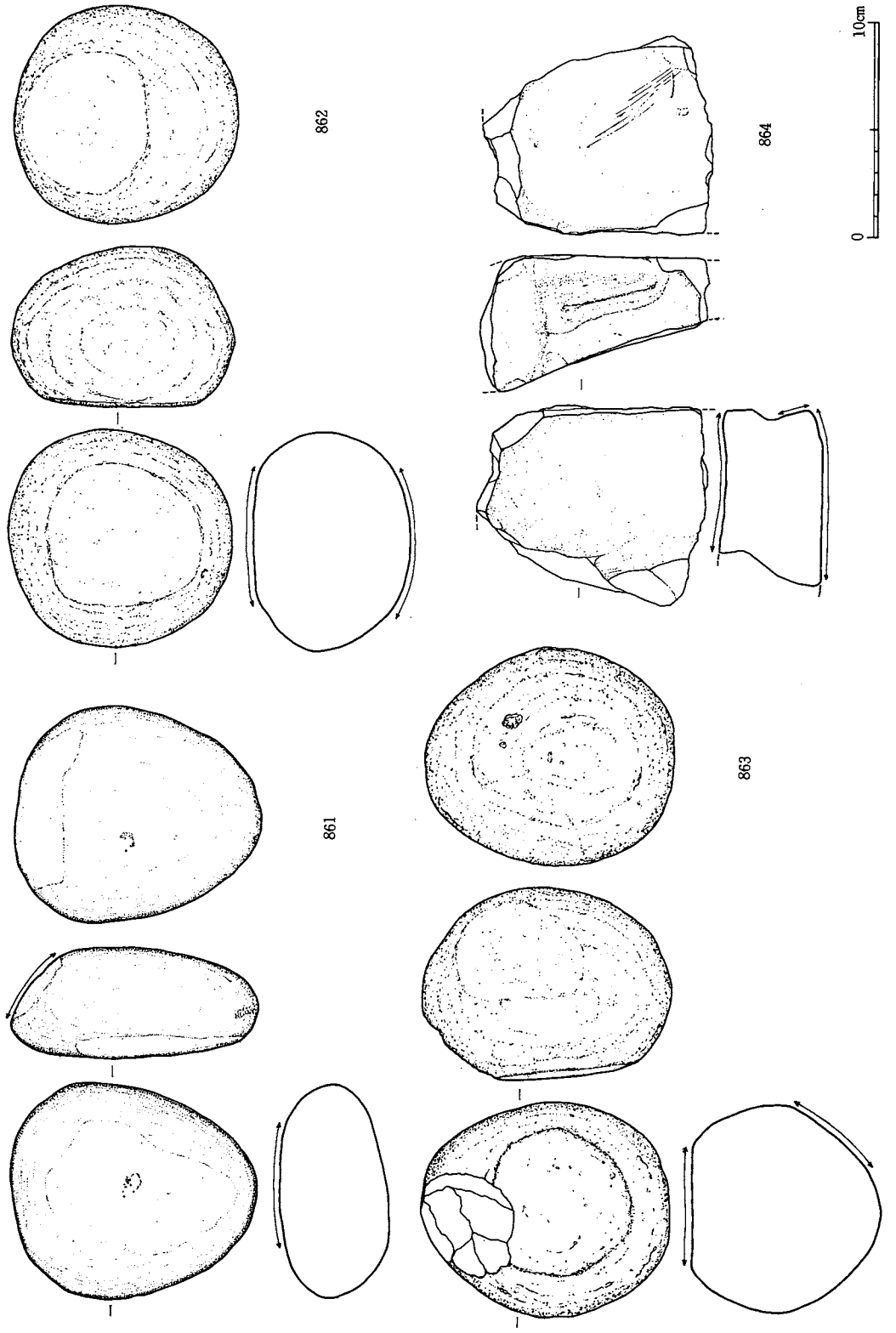
第180図　17号住居址内出土石器実測図（その2）



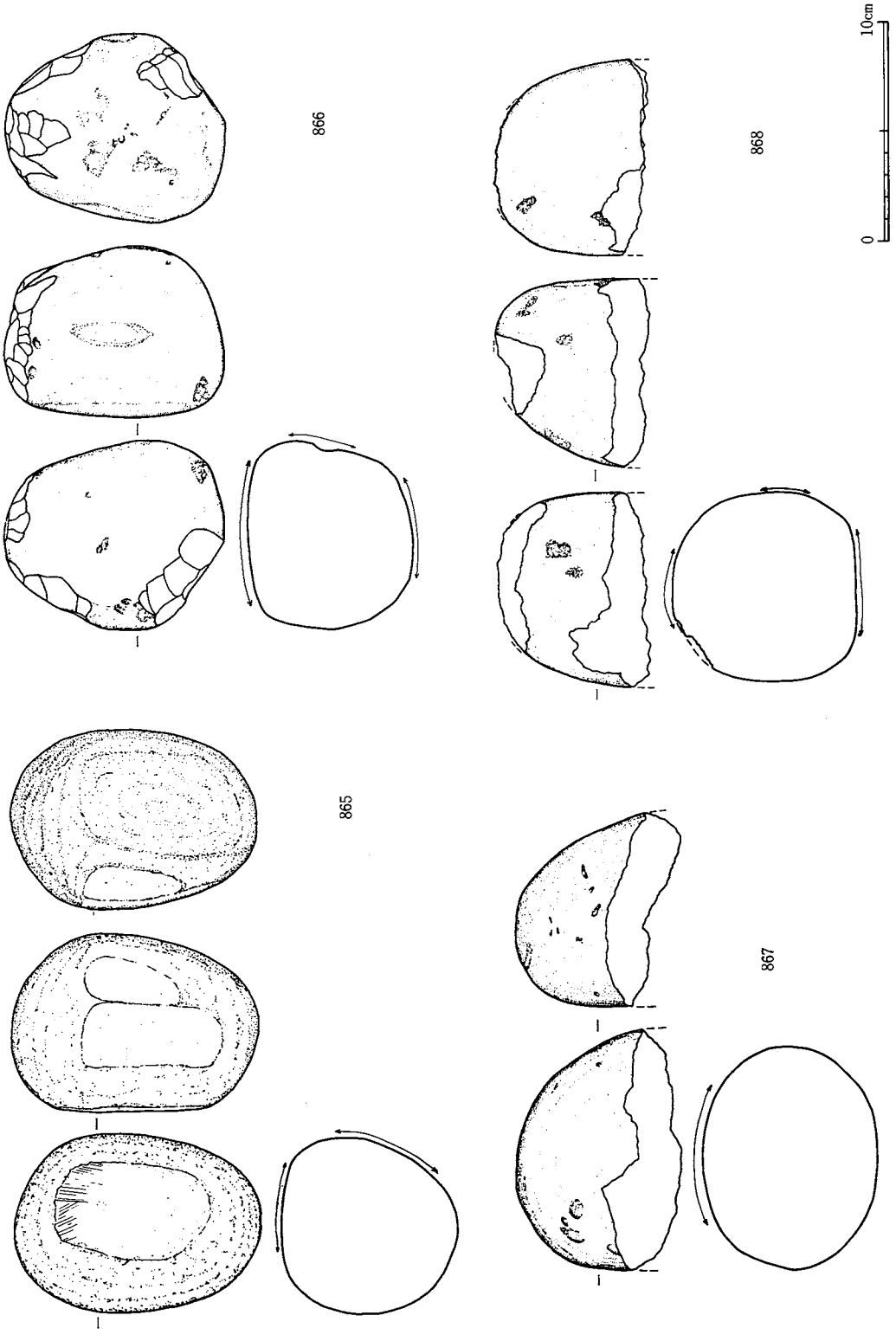
第181図　17号・18号住居址内出土石器実測図（852は17号住居址、853～855は18号住居址出土）



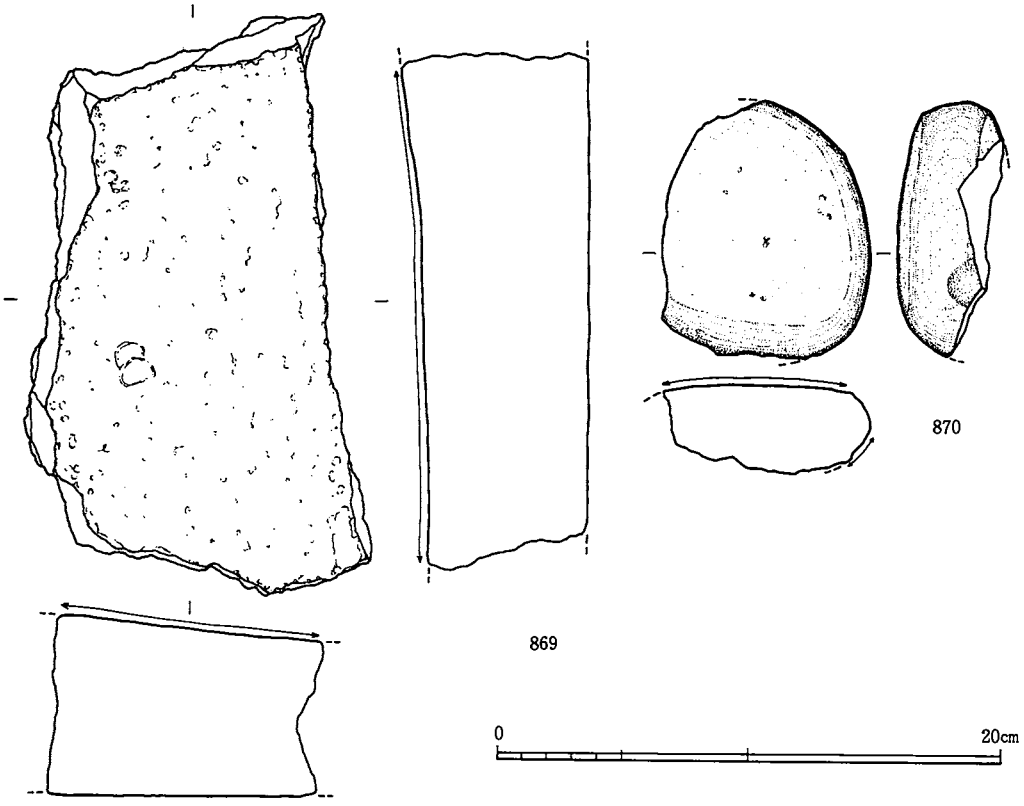
第182図　23号・25号・26号住居址内出土石器実測図（856・857は23号住居址、858・859は25号住居址、860は26号住居址出土）



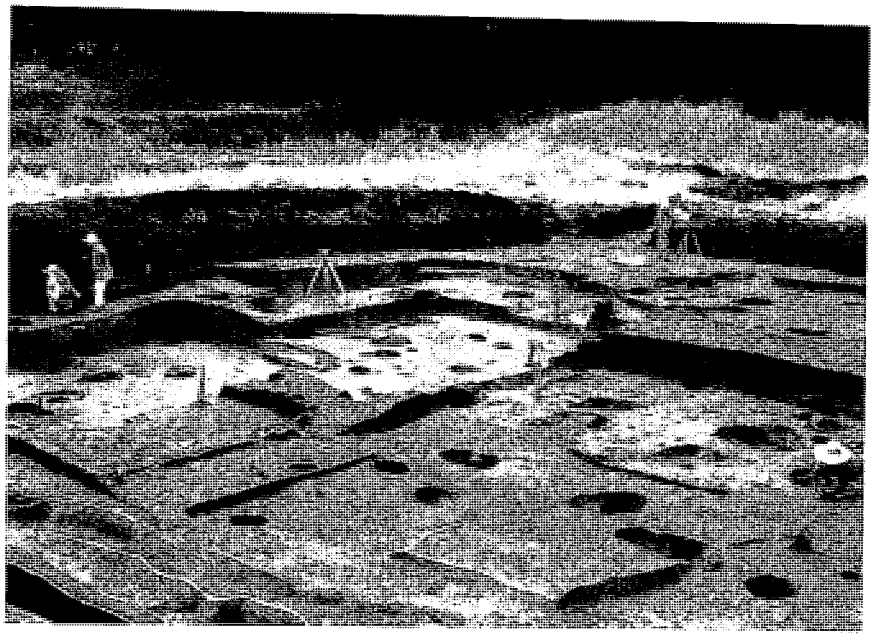
第183図　27号・32号住居址内出土石器実測図（861・863・864は27号住居址、862は32号住居址出土）



第184図　4号・7号溝、34号住居址内出土石器実測図（865は4号溝、866・868は7号溝、867は34号住居址出土）



第185図　7号溝，③－ⓓ区内出土石器実測図(869は7号溝 870は③－ⓓ区ＰＩＴ，4出土)



発掘調査風景

第3章　考　　察

第1節　下山西遺跡出土土器の編年(案)について

住居跡の内から，多くの土器が出土した。器形は甕・壺・鉢・高坏・ジョッキ型土器などである。総数は700個をこえる(第2表下山西遺跡出土土器法量表参照)。住居の製作時間の前後関係（第5節）や出土土器の型式学的な変遷を勘案して編年するとⅠ～Ⅳ期の4段階の変遷が把握できる。ここでは器形毎の変遷の説明をなし，既知の編年との対比をおこなう。本文中( )内の数字は，第1表下山西遺跡出土土器編年表中の土器番号を示す。

甕

甕はA・Bの形式がある。脚台を持つ甕AはⅠ～Ⅲ期にみられる（1～11)。Ⅰ期のものは胴部の最大径が上方にあるが，Ⅱ・Ⅲ期には胴部の中央部に最大径が移動する。脚部はⅠ・Ⅱ期のものが下端径が脚高より広いのに対し，Ⅲ期にいたりその比が逆転する。甕Bは脚台をもたない長胴の甕で，Ⅳ期に出現する（13・14)。タタキが器表に残り内面はナデ調整，ヘラケズリは未だ見られない。Ⅲ期には甕Aの脚部を意識的に打ち欠いたものがあり，しかも打ち欠き面の上にススが付着しており，恰も甕Aを甕Bに作り換えたごとき所作とみられる。

壺

壺にはA～Hの8形式がある。多く見られるのは壺Aである(15～19)。直立し，さらに大きく外湾する口縁部を持ち，胴部との境に断面三角の突帯を巡らせるものや，刻み目や波状文を持つものがある。Ⅰ・Ⅱ期には胴部の最大径は上方にあるが，Ⅲ・Ⅳ期になり下に移り，其とともに全体の形が細長くなる。タタキが器表に残されているのはⅢ期以降である。壺Bは直口壺であるが，Ⅰ・Ⅱ期の資料を欠く（20～22)。壺Cは口縁部を断面三角形に肥厚させて，頸部に櫛描波状文を持つ（23～26)。新しくなるにしたがい波状文が直線化していく。壺Dは袋状口縁を持つ（27～29)。Ⅰ期以降には見られない。壺Eは重弧文土器であるが，通有の長頸の他に広口のものもあり，形式は異なるがここでは一括しておく（38～41)。壺Fは複合口縁。内傾するものと外傾するものがある（34・35)。Ⅲ期のみに見られた。壺Gは一点の出土で，口縁部を欠くが，おそらく長頸をもつとみられ，胴部と頸部の境に断面三角形の突帯を持つ（36)。壺Hは頸部の短い壺（37)。また小型で胴部上半にボタン状突起をもつもの（44）がある。なおⅡ期には壺Aを模した袖珍土器がある(66)。

鉢

鉢には通有のものと，脚台を持つものがあるが，脚台を持つものは全体形を明らかにしえない（59～61)。前者にはA～Dの4形式がある。鉢Aは側面形が三角形をなすもので平底を成すもの（45・46)。Ⅰ・Ⅱ期にある。鉢Bは尖底（47～49)。この類はこの土器自体で直立は出来ない。Ⅱ～Ⅳ期にみられる。鉢Cは断面形が半円形をなすもの（50～54)。口径と器高の比率からみて，a深鉢，b浅鉢の二形がある。Ⅱ～Ⅳ期に見られるが形態の変化を認めない。鉢DはCの深鉢に口縁部が付いたもので，胴部最大径が下半になるもの（55・56）とほぼ中央部になる（57・58）の2形がある。前者はⅢ・Ⅳ期，後者はⅣ期にみられる。

高坏

高坏は資料の点数が少ない。途中から大きく外反する坏部と4穴をもつ脚部がⅡ期にみられ（63・64)，喇叭状の脚部と開ききみの坏を持つものがⅢ期にみられる（67)。以上の他にジョッキ型土器（62・65)，杓子型土器（68・69）も出土している。

陣内遺跡出土土器との対比

九州地方の弥生土器および土師器の編年については諸先学の論考があるが，以下，下山西遺跡の所在する中九州地方の西側についての論考を検討しながら下山西遺跡出土土器の年代を考えてみたい。

下山西遺跡と最も地理的にも時間的にも近い遺跡は陣内遺跡（阿蘇町西湯浦）である。検出された遺構はⅠ～Ⅲ期に時期区分され，Ⅰ期は土師器への移行直前の時期，即ち弥生終末期と考えられた。各住居跡出土の土器を細かくみるならば，甕の形式において前後関係が想定できる。報文中，長胴の甕を，①低い脚台を持つもの，②高い脚台を持つもの，③極小さい平底を呈するもの。④砲弾形の底部を持つもの，に4分類しているが，それぞれの類は共伴しつつも，基本的には①→④の時間的変遷をたどるとみられる。下山西Ⅲ・Ⅵ期が陣内Ⅰ期に対応する。陣内遺跡甕②類のうち，脚の下半が外に広がらず，むしろ内湾気味のものは，下山西遺跡をはじめ西弥護免遺跡（大津町）・運動公園遺跡（熊本市）・葉山遺跡（熊本市）などの白川流域を中心にする遺跡において顕著にみられ，宇城地方まで広がっている。その他の地域，とりわけ菊地川中・下流域では皆無である。また，知られているように壺Cも，上述の甕の広がりを少しく拡げた分布をなし，両者が有機的関連を持つことを示している。

津袋遺跡出土土器との対比

白川水系では，下山西遺跡の土器と編年対比できる遺跡は上述の諸遺跡があるが未整理であ

る。そこで，菊池川中流域の弥生後期の代表的遺跡である津袋遺跡（鹿本町）の出土土器と対比してみよう。高木正文氏によると，津袋遺跡の土器はⅠ・Ⅱ期に整理される。下山西Ⅲ期の脚高の高い甕は津袋遺跡にはみられない。これは上述の地域差を示している。壺のうちA類は形態や調整技法は共通で，しかも変容の過程も同一であるから，両遺跡の対比が可能である。下山西Ⅰ・Ⅱ期が津袋Ⅰ期，下山西Ⅲ期が津袋Ⅱ期に対比出来る。

弥生土器か土師器か

それでは下山西Ⅳ期は，どの時期であろうか。下山西Ⅳ期に類似する土器としては古閑遺跡（益城町）北地区出土土器をあげることができる。中部九州の古式土師器の資料を整理した野田拓治氏は古閑遺跡の土器を「長胴台付甕が全く失われて，長胴丸底の甕が継承されるとともに，外来系の甕が加わる段階」と理解し，外来系の土器を庄内式と認定したうえで，土師器の最古の段階として「古閑期」を設定した。

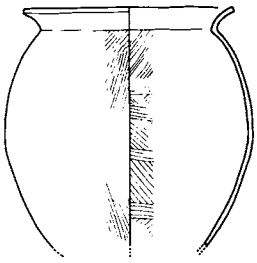
この理解に立って下山西遺跡の土器をみると，下山西Ⅳ期には外来系の甕は伴っていないが，中期以来の伝統的器形である脚台付甕はすでに作られていない。すでに平野部の古閑遺跡（益城町）には庄内式の甕は登場しているから，この期は土師器の時代とすることが出来よう。従って，下山西Ⅳ期を以て阿蘇地方の土師器の開始とすることができよう。阿蘇地方の土師器については，さらに遡らせる考えもある。陣内遺跡11号住居跡出土の壺を外来系土器とし，さらに他の住居跡から出土した高脚台の甕（陣内遺跡の甕②類）も同期と見て，これらを土師器とする考えであるが，同意しがたい。

しかし，留意しなければならない現象がある。それは脚台を失った土器の使用例である。下山西Ⅲ期の甕の脚台を失ったもの中には，実質的な使用法においてⅣ期の甕と同様の用途を果たしているものもある。この現象の背後には，他地域ではすでに脚台の無い甕を使用しているという事実があるかもしれない。つまり，丸底甕の普及過程において起こる現象かもしれない。そうであれば，土師器の始まりはやや上げる必要があろうが，その解明は今後の課題としておく。

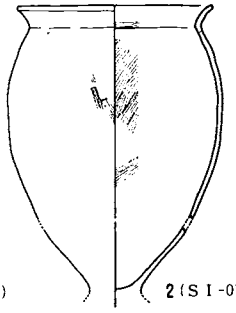
参考文献

1．高木正文　1979　鹿本地方の弥生後期土器（「古文化談叢」第6集）
2．武末純一　1982　北九州における弥生時代の複合口縁壺（『古文化論集・下巻』）
3．石橋新次　1983　中九州における古式土師器（「古文化談叢」第12集）
4．野田拓治　1982　古式土師器の成立と展開（『古文化論集・下巻』）
5．清田純一　1982　『陣内遺跡』(阿蘇町文化財調査報告第2集)

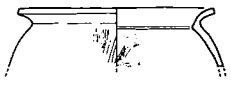
下山西Ⅰ期



1（S I -01）

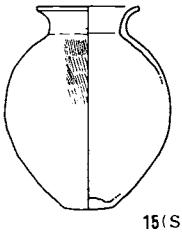


2（S I -01）



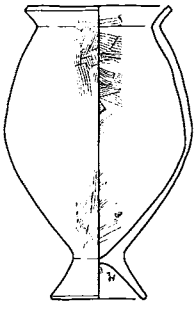
3（S I -11）

4（S I -28）

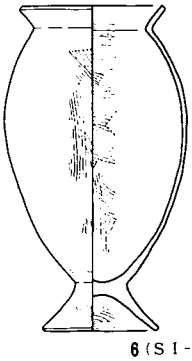


15（S

下山西Ⅱ期

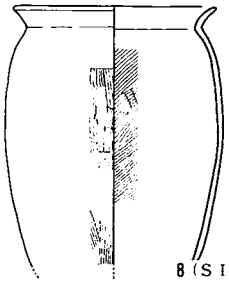


5（S I -04）

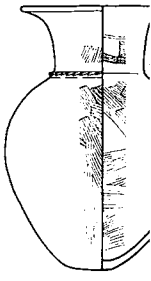


6（S I -26）

7（S I -11）

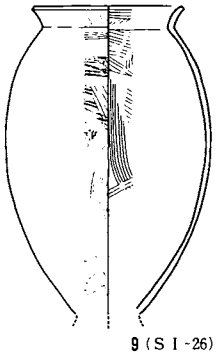


8（S I -11）

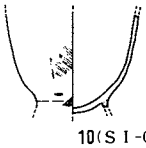


16（S

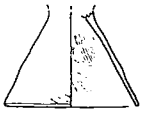
下山西Ⅲ期



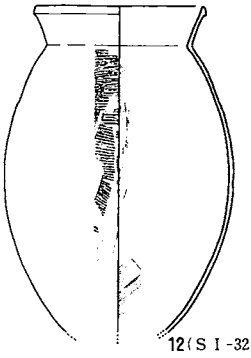
9（S I -26）



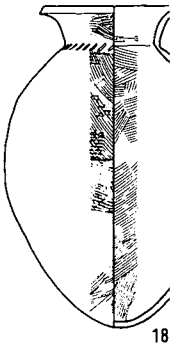
10（S I -06）



11（S I -18）

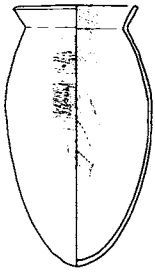


12（S I -32）

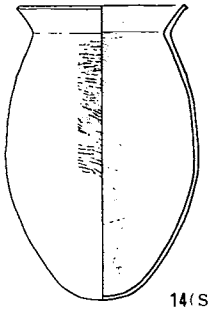


18

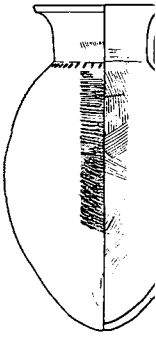
下山西Ⅳ期



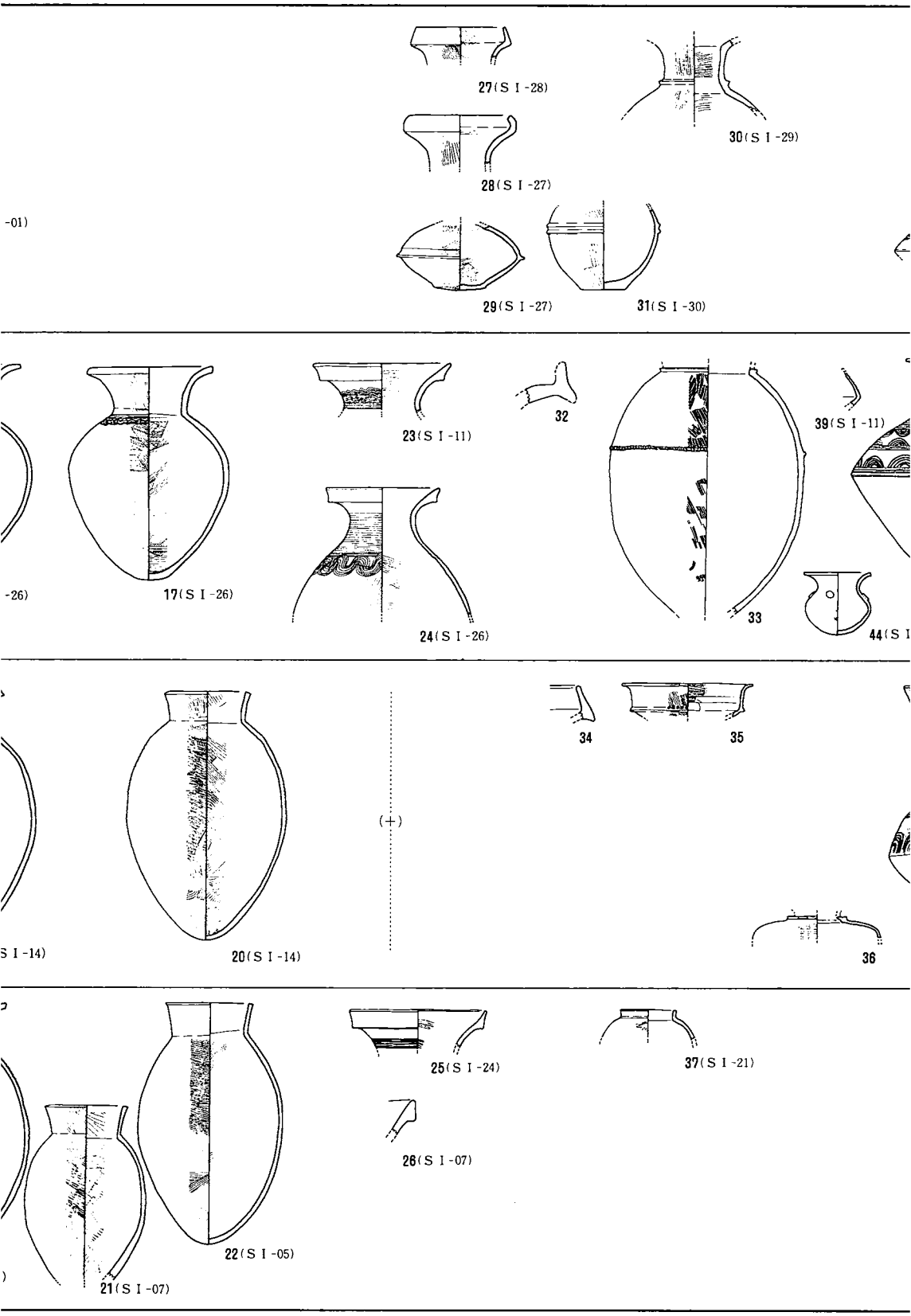
13（S I -07）



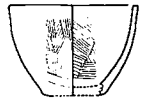
14（S I -24）



19（S I -



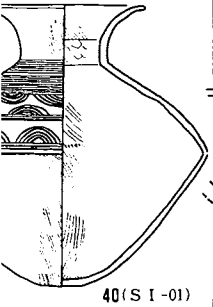
第1表　下山西遺跡出土土器編年表



45(S I -27)

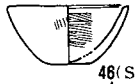
62(S I -27)

38(S I -17)

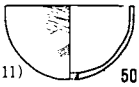


40(S I -01)

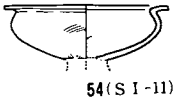
-08)



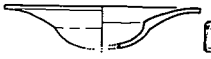
46(S I -11)



50(S I -17)



54(S I -11)



63(S I -25)

85(S I -11)

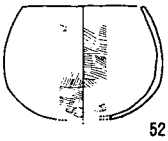
42(S I -34)

51(S I -25)

55(S I -25)

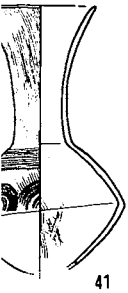
64(S I -04)

43(S I -26)

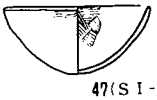


52(S I -25)

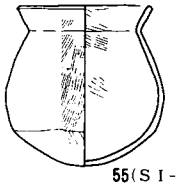
66(S I -09)



41

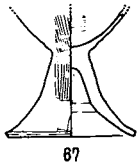


47(S I -23)



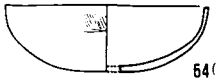
55(S I -14)

48(S I -23)

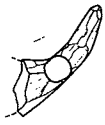


67

53(S I -06)

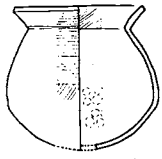


54(S I -06)

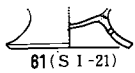


68(S I -07)

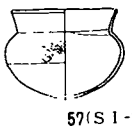
69(S I -21)



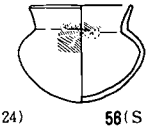
56(S I -05)



61(S I -21)



57(S I -24)



58(S I -21)

49(S I - 07)

( ) 内のSIは出土竪穴の番号を示す。

32・34・42・43・62・65・68・69以外は$\frac{1}{4}$の約尺

第2表　下山西遺跡出土土器法量表（その1）

単位：cm

出土地区・遺構名	土器番号	種別	器種	口径	器高(残存高)	胴部最大径	脚台径	脚台高(残存高)	備考
調査全区	1	弥生土器	甕	19.2	19.7	20.5			1次調査
調査区西南一括	2	〃	壺(口縁部)	18.3	(9.4)				〃　頸部径12.8
調査全区	3	〃	〃		(14.3)				〃
石棺周辺部一括	4	〃	甕	13.5	(5.9)				〃
調査全区	5	〃	壺		(5.2)				〃
〃	6	〃	〃		(6.4)				〃
〃	7	〃(免田式土器)	〃		(13.0)				〃
④－Ⓔ区内	9	弥生土器	甕(口縁部)	18.4	(8.9)				壺埋納土壙周辺部一括
〃	10	〃	〃(胴部)		(38.1)	30.1			壺埋納土壙内
Ⅳ V-C-E区試掘トレンチ	11	〃	壺(口縁部)	19.0	(6.6)				14号トレンチ
〃	12	〃	甕(〃)	22.4	(7.3)				〃
〃	13	〃	〃(〃)	24.2	(5.6)				〃
〃	14	〃	壺(〃)						2号トレンチ
〃	15	〃	高坏						3号トレンチ
〃	16	〃	壺(胴部)						10号トレンチ
〃	17	〃	鉢	11.0	6.1				1号トレンチ 手づくね
〃	18	〃	甕	29.5	(30.0)	31.6			〃
3号石棺北側	25	〃(免田式土器)	長頸壺	13.7	(31.7)	19.7			
〃	26	弥生土器			(3.8)	19.8			
〃	27	〃	(胴部)						
〃	28	〃	台付鉢	20.1	(5.3)	17.0			
〃	29	〃	高坏(坏部)						
〃	30	〃	〃(〃)						
〃	31	〃	壺(口縁部)						
〃	32	〃	〃(胴部)						
〃	33	〃	高坏(脚部)		(15.0)		15.5	10.3	
〃	34	〃(重弧文土器)	(胴部)						

単位：cm

遺構名	土器番号	種別	器種	口径	器高(残存高)	胴部最大径	脚台径	脚台高(残存高)	備考
	36	弥生土器	甕	18.8	(9.1)				中層
	37	〃	〃	23.9	(7.5)				上層
	38	〃	〃	20.3	(11.1)				上・中層
1	39	〃	〃(口縁部)						中層
	40	〃	〃　〃						上層
号	41	〃	〃　〃						上層
	42	〃	〃　〃						下層
住	43	〃	〃　〃						中層
	44	〃	〃　〃						中層
	45	〃	〃	26.1	(29.3)	30.4			下層
居	46	〃	〃	31.3	(13.8)				中層
	47	〃	〃	30.2	(14.6)	(29.55)			下層
	48	〃	〃	22.0	(13.6)	22.0			上層
址	49	〃	〃	26.55	(7.9)				下層
	50	〃	〃(脚台部)				10.4	3.6	中層
	51	〃	〃				10.6	3.5	上層

第2表　下山西遺跡出土土器法量表（その2）

単位：cm

遺構名	土器番号	種別	器種	口径	器高(残存高)	胴部最大径	脚台径	脚台高(残存高)	備考
	52	〃	甕				11.3	4.1	中層
	53	〃	〃				12.0	(4.5)	上層
	54	〃	〃	25.1	(21.2)	24.9			中層
	55	〃	〃	24.4	(35.1)	26.8			中層
	56	〃	〃（脚台）				11.5	3.0	下層
	57	〃	〃　〃				12.4	3.8	中層
1	58	〃	〃　〃				12.3	3.6	上層
	59	〃	〃　〃				10.2	3.1	中層
	60	〃	〃　〃				12.5		中層
号	61	〃	〃　〃		(6.3)		12.2	3.5	下層
	62	〃	〃　〃		(9.3)		11.0	4.0	下層
	63	〃	壺	12.7	24.8	20.6			下層・底径6.4
	64	〃	〃	16.5	(8.9)				下層
住	65	〃	〃	7.4	(8.1)	14.0			中層
	66	〃	〃	15.3	(5.4)				？
	67	〃	〃（口縁部）						上層
	68	〃	〃　〃						上層
居	69	〃	〃　〃						上・中層
	70	〃	高坏　〃						上層？
	71	〃	壺　〃						上層
	72	〃	〃（胴部）						下層
址	73	〃	〃（底部）		(6.0)				中層・底径6.1
	74	〃	〃　〃		(3.9)				上層・底径8.5
	75	〃	壺（胴部）						下層
	76	〃	〃　〃						下層
	77	〃	〃　〃						上層
	78	〃	〃　〃						上層
	79	〃	〃	19.8	34.4	36.1			上・中層・底径5.4
	83	弥生土器	甕	17.1	(5.9)				上層
	84	〃	〃（脚台）				10.8	(4.1)	〃
2	85	〃	壺						〃
号	86	〃	甕		(11.8)				3層
住	87	〃	壺（口縁部）	20.5	(3.9)				上層
居	88	弥生土器	甕（口縁部）	16.6	(3.4)				中層
址	89	〃	壺（底部）		(9.4)				上層・底径2.3
	90	〃	甕	21	(12.8)				上層
	91	〃	壺（口縁部）	14.1	(2.4)				床面直上
	93	弥生土器	甕（口縁部）						上層
3	94	〃	〃						〃
号	95	〃	壺（口縁部）						下層
住居址	96	〃	〃（底部）		(2.4)				上層・底径3.8
	97	〃	甕	21.6	(6.7)				上層
	98	弥生土器	甕	18.3	(7.7)				1層
4	99	〃	〃	26	(9.3)				3層
号	100	〃	〃	12.5	(6.7)				床直上
住	101	（免田式）	壺（胴部片）						〃
居	102	〃	〃						〃
址	103	弥生土器	高坏					(6.0)	3層
	104	〃	鉢	10.9	(3.9)				床密着

第2表　下山西遺跡出土土器法量表（その3）

単位：cm

遺構名	土器番号	種別	器種	口径	器高(残存高)	胴部最大径	脚台径	脚台高(残存高)	備考
4号住居址	105	〃	甕（脚部）				10.9	(6.0)	3層
	106	〃	〃				11.8	4.3	床直上
	107	〃	〃				12.5	(6.7)	床直上
	108	〃	〃				13.5	7.2	3層
	109	〃	壺（胴部片）						上層
	110	〃	甕	18.1	36.0	23.0	11.8	5.4	4層
5号住居址	120	弥生土器	鉢	16.4	17.8	18.9			床直上
	121	〃	〃		(15.2)	19.0			3層
	122	〃	小形壺		(5.6)	13.2			2層
	123	〃	壺	15.3	(5.9)				3層
	124	〃	壺（口縁部）						上層
	125	〃	鉢（口縁部）						〃
	126	〃	小形壺						床直上
	127	〃	壺（口縁部）						上層
	128	〃	〃　〃						上層
	129	〃	〃　〃						2層
	130	〃	壺（胴部）						上層
	131	〃	〃　〃						3層
	132	〃	甕	18.6	(9.1)				2層
	133	〃	〃	26.7	(10.4)				2層
	134	〃	〃	17.8	(4.8)				2層
	135	〃	壺	13.45	37.3	22.4			3層
	136	〃	甕（脚台）				13.4	(8.7)	1層
	137	〃	脚台				11.8	3.1	2層
	138	〃	甕（脚台）				13.8	4.6	床直上
	139	〃	甕		(28.2)	(28.6)			2･3層，床直上
	140	〃	高坏					(6.2)	2層
	141	〃	〃					(10.0)	2・3層
	142	〃	〃	18.9	(4.1)				上層
	143	〃	〃						〃
	144	〃	〃	31.1	(5.8)				2層
	145	〃	〃	31.6	(7.6)	23.0			〃
	146	〃	口縁部片	13.1	(2.1)				上層
6号住居址	152	弥生土器	甕	19.7	(9.8)				上層
	153	〃	甕		(25.1)	22.4			2層
	154	〃	〃		(16.0)				2層
	155	〃	〃						2層，床直上
	156	〃	〃（脚部）				14.1	5.0	下層
	157	〃	壺（口縁部）	15.6	(2.2)				上～中層
	158	〃	壺（口縁部）	9.7	(5.4)				中～下層
	159	〃	壺（頸部）						上～中層
	160	〃	脚台				14.7	(3.3)	上層
	161	〃	壺（突帯）						下層
	162	〃	ジョッキ形土器		(6.2)				上層
	163	〃	甕（口縁部）	25	(5.3)				2層
	164	〃	鉢	19.3	(5.2)				上～中層
	165	〃	〃	25.4	8.1				上～中層・底径8.6
	172	弥生土器	甕	24.0	(7.6)				床密着
	173	〃	甕（口縁部）						3層

第2表　下山西遺跡出土土器法量表（その4）

単位：cm

遺構名	土器番号	種別	器種	口径	器高(残存高)	胴部最大径	脚台径	脚台高(残存高)	備考
	174	〃	甕		(11.3)	22.2			密着
7	175	〃	壺	15.6	32.25	18.2			2層
	176	〃	甕（脚部）						表土層
号	177	〃	壺（口縁部）						1層
	178	〃	〃　〃						床直上
住	179	〃	鉢（口縁部）						3層
	180	〃	〃　〃						2層
	181	〃	〃　〃						1層
居	182	〃	ジョッキ形土器（底部）						上～中層
	183	〃	メンコ形土器						1層3.0×3.7，0.7
址	184	〃	甕（胴部）						3層
	185	〃	壺	12.9	(27.1)	18.8			2層
	186	〃	鉢	10.8	9.6	11.0			2層
	187	〃	杓子（把手）						3層
	192	弥生土器	甕	15.4	(11.9)	18.0			床直上
8	193	〃	鉢	15.3	(13.7)	19.2			2層
号住居址	194	〃	小型壺	10.4	9.75	10.2			床直上
	195	〃	甕（脚部）				11.8	4.3	上層
	196	〃	壺						上層
	197	〃	甕（脚部）				14.4	(9.0)	1層
	209	弥生土器	甕（口縁部）	19.7	(5.8)				2層
	210	〃	〃　〃	18.9	(5.6)				上層
9	211	〃	〃　〃	19.0	(4.7)				下層
号	212	〃	壺	12.0	(4.3)				上層
住	213	〃	小型壺	4.2	(4.5)	4.9			床直上
居	214	〃	甕	21.6	(4.2)				2層
址	215	〃	壺（口縁部）	20.7	(6.5)				2層
	216	〃	ジョッキ形土器	16.0	(4.7)				下層
	217	〃	台付鉢	16.6	(6.1)				炉内
	221	弥生土器	甕	21.5	(3.9)				6層
	222	〃	甕（口縁部）						9層
11	223	〃	〃　〃						6層
	224	〃	〃　〃	22.3	(6.3)				下層
	225	弥生土器	甕（口縁部）						6層
	226	〃	〃						中～下層
号	227	〃	壺	24.2	(7.4)				床直上
	228	〃	甕（口縁部）						上層
	229	〃	甕	24.8	(31.8)	26.5			（中・下層 9層
住	230	〃	脚台				7.7	1.3	上層
	231	〃	甕（脚台）				10.3	2.6	9層
	232	〃	〃　〃				12.0	4.3	9層
	233	〃	〃　〃				12.4	4.5	9層
居	234	〃	壺	21.6	(7.7)				6層
	235	〃	壺（口縁部）						中～下層
	236	〃	〃　〃						床直上
	237	〃	〃　〃						床直上
址	238	〃	〃　〃						6層
	239	〃	〃　〃						9層
	240	〃	〃　〃						上層

第2表　下山西遺跡出土土器法量表（その5）

単位：cm

遺構名	土器番号	種別	器種	口径	器高(残存高)	胴部最大径	脚台径	脚台高(残存高)	備考
11号住居址	241	〃	〃　〃						9層
	242	〃	壺（胴部）						中層
	243	〃	〃　〃						中層
	244	〃	〃　〃						上層
	245	〃	〃　〃						上層
	246	〃	〃　〃						中～上層
	247	〃	〃　〃						上層
	248	〃	〃　〃						7層
	249	〃	ジョッキ形土器（底部）						上～下層
	250	〃	〃（把手）						9層・幅3.7・厚1.1
	251	〃	鉢	15.0	7.2				9層・底径5.4
	252	〃	台付鉢	20.2	(6.6)				中～下層
12号住居址	264	弥生土器	壺（突帯）						床直上
	265	〃	鉢	19.7	(7.1)	19.1			中層
	266	〃	壺（底部）		(8.4)				中層・底径5.4
	267	〃	壺（口縁部）						床密着
	268	〃	甕（脚部）					(3.8)	〃
13号住居址	270	弥生土器	壺（口縁部）						2層
	271	〃	〃　〃						上層
	272	〃	甕（脚部）				11.0	4.0	上層
	273	〃	壺（胴部）						上層
	274	〃	甕	16.7	(9.6)				1層
14号住居址	277	弥生土器	甕	21.3	(10.0)	20.1			2層
	278	〃	〃	22.7	(9.9)				床直上
	279	〃	〃	17.3	(8.1)				上層
	280	〃	壺（口縁部）						床直上
	281	〃	甕（口縁部）						2層
	282	〃	〃　〃						2層
	283	〃	壺	13.4	38.1	24.8			2層
	284	〃	甕（脚台）				12.6	5.0	3層
	285	〃	〃　〃				14.7	(7.5)	2層
	286	〃	〃　〃				14.7	(7.1)	2層
	287	〃	〃　〃				16.0	11.0	2層
	288	弥生土器	鉢	16.9	19.6	19.8			2層
	289	〃	壺	18.0	39.5	27.3			2層
	290	〃	壺（口縁部）						2層
	291	〃	壺（突帯）						一括
	292	〃	甕						2層
	293	〃	メンコ形土器						2層3.5×3.6.0.7
	294	〃	〃						2層3.3×3.6.0.6
15号住居址	295	弥生土器	甕（口縁部）						1層
	296	〃	〃　〃						〃
	297	〃	〃（脚部）						1層
	298	〃	壺（胴部）						〃
	299	〃	底部		(6.3)				密着
16住居址	312	弥生土器	甕	25.6	(9.4)				2層
	313	〃	〃（脚部）				11.5	2.9	床密着
	314	〃	〃						下層
	315	〃	甕（脚部）						中層

第2表　下山西遺跡出土土器法量表（その6）

単位：cm

遺構名	土器番号	種別	器種	口径	器高(残存高)	胴部最大径	脚台径	脚台高(残存高)	備考
16号住居址	316	〃	壺（口縁部）						下層
	317	〃	壺（胴部）						上層
	318	〃	壺（胴部）						床直上
	319	〃	ジョッキ形土器（把手）						下層
17号住居址	322	弥生土器	甕（口縁部）	20.5	(3.6)				2層
	323	〃	〃　〃	18.2	(5.4)				上層
	324	〃	〃　〃	25.5	(6.4)				4層
	325	〃	〃　〃	27.5	(5.8)				3層
	326	〃	〃　〃	23.1	(14.4)	23.3			5層
	327	〃	〃　〃	25.4	(11.9)	27.6			2層
	328	〃	甕（脚部）				9.4	3.8	2層
	329	〃	〃　〃				9.7	3.4	4層
	330	〃	壺（胴部）						4層
	331	〃	〃（口縁部）						上層
	332	〃	〃	11.0	(4.9)				2層
	333	〃	〃（胴部）		(3.3)	18.9			床密着
	334	〃	壺（口縁部）	25	(3.4)				2層
	335	〃	〃　〃	19.7	(3.9)				1層
	336	〃	壺	12.8	(25.6)	17.8			2層
	337	〃	鉢（底部）		(2.5)				上層・底径6.7
	338	〃	鉢	13.0	(8.1)	17.5			上層
	339	〃	〃	16.1	9.0	(16.1)			上層
	340	〃	〃	21.7	(8.2)	22.4			2層
18号住居址	356	弥生土器	壺	13.2	(13.8)	19.1			1層
	357	〃	壺（口縁部）						直上
	358	〃	〃　〃						2層
	359	〃	〃　〃						3層・密着
	360	〃	甕（脚部）						2層
	361	〃	〃　〃				(11.7)	6.2	直上
	362	〃	〃　〃				16.9	12.1	3層
	363	〃	〃　〃				11.5	3.55	3層
	364	〃	〃　〃				11.6	3.8	直上
	365	〃	鉢	14.0	(14.5)	18.2			2層
	366	弥生土器	鉢（口縁部）						1層
	367	〃	〃　〃						1層
	368	〃	壺（口縁部）						2層
	369	〃	〃　〃						2層
	370	〃	〃　〃						中層
	371	〃	鉢（口縁部）						2層
	372	〃	壺	14.0	(3.0)				2層
	373	〃	鉢	17.2	(4.6)	17.8			1層
	374	〃	壺（胴部）						密着
	375	〃	鉢（口縁部）						〃
	376	〃	壺（口縁部）						直上
	377	〃	壺（胴部）						中層
20号住居址	804	弥生土器	壺	24.1	(6.1)				2層
	805	〃	〃（胴部）						1層
	806	須恵器	坏	10.8	3.6				2層・底径6.0
	807	〃	〃	(11.0)	(3.1)				1層

第2表　下山西遺跡出土土器法量表（その7）

単位：cm

遺構名	土器番号	種別	器種	口径	器高(残存高)	胴部最大径	脚台径	脚台高(残存高)	備考
20号住居址	808	土師器	甕	17.7	(8.1)				1層
	809	〃	高坏	14.9	(6.8)				2層
	810	〃	甕						2層
21号住居址	380	弥生土器	甕	20.7	(3.65)				上層
	381	〃	壺	17.4	40.0				上層
	382	〃	鉢（口縁部）						下層
	383	〃	〃（胴部）						上層
	384	〃	甕（脚部）						下層
	385	〃	鉢	8.8	(4.3)				下層
	386	〃	〃	12.9	12.0	15.8			下層
	387	〃	脚台				(15.6)	3.7	上層
	388	〃	杓子						上層
23号住居址	394	弥生土器	甕	16.6	(29.8)	23.6			1層・台石付近
	395	〃	甕（口縁部）						2層
	396	〃	〃　〃						2層
	397	〃	〃（脚部）						2層
	398	〃	〃　〃				(8.2)	2.4	〃
	399	〃	〃　〃				11.8	4.5	1層
	400	〃	〃　〃				15.1	(6.9)	2層
	401	〃	壺（胴部）		(14.6)	21.6			1層・台石付近
	402	〃	壺（口縁部）						2層
	403	〃	〃　〃						2層・台石付近
	404	〃	〃　〃						下層
	405	〃	高坏（口縁部）						床直上
	406	〃	甕　〃						最下層
	407	〃	鉢　〃						上層
	408	〃	〃　〃						上層
	409	〃	〃　〃						下層
	410	〃	壺（胴部）						最下層
	411	〃	〃　〃						〃
	412	〃	〃　〃						上層
	413	〃	壺（底部）						下層・台石付近
	414	〃	鉢	18.3	8.3				1層
	415	弥生土器	鉢	20.8	(4.9)				1層・台石付近
24号住居址	428	弥生土器	甕	22.0	(9.2)				1層
	429	〃	〃	20.9	36.4	23.6			1層
	430	〃	〃（脚部）				12.6	4.9	2層
	431	〃	〃（胴部）						最下層
	432	〃	壺（口縁部）						1層
	433	〃	高坏（口縁部）						2層
	434	〃	壺（口縁部）						最下層
	435	〃	〃　〃						〃
	436	〃	〃　〃						〃
	437	〃	壺（胴部）						上層
	438	〃	〃　〃						〃
	439	〃	〃（底部）		(7.2)				2層
	440	〃	壺	16.3	(7.8)				2層
	441	〃	メンコ形土器						上層8.0×6.7、0.8
	442	〃	壺	21.2	(3.2)				1層

第2表　下山西遺跡出土土器法量表（その8）

単位：cm

遺構名	土器番号	種別	器種	口径	器高(残存高)	胴部最大径	脚台径	脚台高(残存高)	備考
24	443	〃	〃	18.4	(6.7)				1層
号	444	〃	〃	21.6	(5.9)				上～中層
住	445	〃	鉢	18.9	(4.9)				上層
居	446	〃	鉢	13.3	(10.9)	14.9			2層
址	447	〃	〃	12.8	(5.6)				2層
	469	弥生土器	甕	26.0	(3.9)				最下層
	470	〃	〃	28.8	(8.4)				4層
	471	〃	〃	17.0	(10.0)				上層
	472	〃	〃	16.2	(4.1)				3層
	473	〃	〃（脚台）				(15.0)	(3.5)	3層
25	474	〃	〃		(33.7)	29.5			3層
	475	〃	メンコ形土器						上層2.6×2.8、0.6
号	476	〃	〃						直上3.9×4.0、0.7
	477	〃	壺	33.5	(3.7)				3層
	478	〃	〃	14.6	(2.4)				1層
住	479	〃	〃	14.1	(3.4)				上層
	480	〃	〃	15.5	(4.9)				1層
	481	〃	〃（口縁部）						3層
居	482	〃	〃（胴部）						1層
	483	〃	〃　〃						上層
址	484	〃	〃　〃						最下層
	485	〃	高坏	24.3	(5.1)				上層
	486	〃	鉢	15.3	(13.8)				3層
	487	〃	〃						上層
	488	〃	〃（脚台）				(10.2)	3.0	2層
	489	〃	壺（底部）		(3.2)				4層底径6.1
	498	弥生土器	甕	23.8	(2.7)				上層
	499	〃	〃	19.5	(4.7)				2層
	500	〃	〃	16.7	(3.8)				1層
	501	〃	〃	18.2	40.0	22.8	14.6	5.7	1層
26	502	〃	〃（口縁部）						3層
	503	〃	壺（口縁部）						2層
	504	〃	甕（口縁部）						上層
号	505	弥生土器	甕（口縁部）						2層
	506	〃	〃　〃						一括
	507	〃	甕（脚台）					(3.6)	2層
	508	〃	〃　〃						2層
住	509	〃	〃　〃				12.5	(3.8)	1層
	510	〃	〃　〃						上層
	511	〃	〃　〃				12.3	4.5	1層
	512	〃	〃　〃						上層
居	513	〃	〃　〃				17.2	(8.0)	炉内出土
	514	〃	甕	18.9	(37.9)	25.5			中，下層
	515	〃	高坏（口縁部）						2層
	516	〃	壺（口縁部）						最下層
址	517	〃	高坏（口縁部）						1層
	518	〃	壺（口縁部）						上層
	519	〃	〃　〃						〃
	520	〃	〃　〃						2層

第2表　下山西遺跡出土土器法量表（その9）

単位：cm

遺構名	土器番号	種別	器種	口径	器高(残存高)	胴部最大径	脚台径	脚台高(残存高)	備考
26号住居址	521	〃	鉢	15.8	(8.8)	16.7			2層
	522	〃	壺（胴部）						2層
	523	〃	壺	17.9	(2.9)				上層
	524	〃	壺（胴部）						上層
	525	〃	〃　〃						下層
	526	〃	〃　〃						最下層
	527	〃	〃　〃						2層
	528	〃	〃　〃						2層
	529	〃	壺	18.1	(19.3)				2層
	530	〃	甕（底部）		(10.5)				2層
	531	〃	壺（底部）		(7.3)				2層底径3.1
	532	〃	壺	20.4	32.5	24.3			2層
	533	〃	〃　〃	19.5	33.5	25.0			2層
27号住居址	541	弥生土器	甕	23.2	(6.2)				5層
	542	〃	〃	24.9	(8.7)				4層
	543	〃	〃	24.9	(9.9)				5層
	544	〃	〃	22.0	(9.8)				5層
	545	〃	〃	28.5	(17.5)				5層
	546	〃	甕（口縁部）						上層
	547	〃	〃　〃						床密着
	548	〃	〃　〃						床直上
	549	〃	〃（胴部）						下層
	550	〃	〃（脚部）				(11.0)	3.5	中層
	551	〃	〃　〃				10.8	3.3	床直上
	552	〃	〃　〃				9.9	3.3	ＰＩＴ内出土
	553	〃	壺	18.1	(5.0)				床直上
	554	〃	〃	17.5	(7.5)				〃
	555	〃	〃（底部）		(7.3)				6層底径6.5
	556	〃	〃（胴部）						4層
	557	〃	〃						1層
	558	〃	〃（底部）						3層
	559	〃	〃						床密着
	560	〃	〃（胴部）						4層
	561	弥生土器	壺（胴部）						上層
	562	〃	〃						4層
	563	〃	壺	19.9	(10.1)	20.0			5層底径8.2
	564	〃	鉢	13.3	(5.2)				密着
	565	〃	〃	16.0	11.0				4層底径7.8
	566	〃	ジョッキ形土器（底部）		(1.8)				5層底径12.4
	567	〃	鉢						5層
	568	〃	高坏		(4.4)				3層
	569	〃	ジョッキ形土器（口縁部）	7.3	(4.1)				中層
	570	〃	メンコ形土器						上層4.0×4.6、0.8
	571	〃	〃						中層3.9×3.8、1.0
28号住居址	579	弥生土器	甕	22.1	(6.4)				3層
	580	〃	〃	22.3	(6.9)				1層
	581	〃	〃	26.5	(8.9)				3層
	582	〃	〃（脚台）				11.7	3.4	2層
	583	〃	〃				12.2	3.6	床直上

第2表　下山西遺跡出土土器法量表（その10）

単位：cm

遺構名	土器番号	種　別	器　種	口　径	器高(残存高)	胴部最大径	脚台径	脚台高(残存高)	備　考
	584	〃	甕（脚台）				11.5	2.9	直上
28	585	〃	壺	53.8	(4.9)				床直上
号	586	〃	甕（脚台）				11.0	4.2	3層
	587	〃	〃					(7.6)	2層
住	588	〃	鉢（口縁部）						床直上
居	589	〃	壺（口縁部）						最下層
址	590	〃	〃（頸部）						〃
	591	〃	壺（口縁部）						2層
	607	弥生土器	甕	19.6	(5.7)				ＰＩＴ内出土
	608	〃	〃	20.7	(6.8)				4層
	609	〃	〃	20.2	(7.0)				〃
	610	〃	〃	23.7	(17.3)	30.1			〃
29	611	〃	〃	31.0	(13.0)				〃
	612	〃	甕（口縁部）						〃
	613	〃	〃（脚台）						〃
号	614	〃	〃　〃				11.2	3.4	〃
	615	〃	〃　〃						〃
住	616	〃	〃　〃				12.1	3.8	5層，床直上
	617	〃	〃　〃				9.8	(3.3)	4層
	618	〃	壺	16.7	(3.6)				〃
居	619	〃	甕（口縁部）						〃
	620	〃	〃　〃						〃
址	621	〃	壺	19.2	(4.6)				〃
	622	〃	〃		(10.5)				5層，床直上
	623	〃	壺（口縁部）						4層
	624	〃	〃（胴部）						〃
	625	〃	底部						〃
	631	弥生土器	甕	20.0	(2.6)				1層
	632	〃	〃	17.8	(8.2)				上層
	633	〃	〃	20.6	(7.9)				2層
	634	〃	〃	21.4	(6.1)				2層
30	635	〃	甕（口縁部）						炉内
	636	〃	〃						2層
号	637	弥生土器	壺（口縁部）						上層
	638	〃	甕（口縁部）						3層
	639	〃	〃　〃						2層
住	640	〃	甕（脚部）						3層
	641	〃	〃　〃				9.6	3.0	1層
居	642	〃	壺	20.2	(7.4)				3層
	643	〃	〃	15.1	(3.3)				2層
	644	〃	〃		(12.4)	17.55			炉内及び3層底径6.6
址	645	〃	壺（口縁部）						下層
	646	〃	高坏（口縁部）						上層
	647	〃	壺（胴部）						上層
	648	〃	鉢（口縁部）						下層
	649	〃	壺（胴部）						中層
	650	〃	〃　〃						〃
	651	〃	〃　〃						〃
	656	弥生土器	小型丸底 壺						1層

第2表　下山西遺跡出土土器法量表（その11）

単位：cm

遺構名	土器番号	種別	器種	口径	器高(残存高)	胴部最大径	脚台径	脚台高(残存高)	備考
31号住居址	657	〃	甕か						中～下層
	658	〃	甕（脚台）						上層
	659	〃	〃（胴部片）						〃
	660	〃	壺（胴部片）						〃
32号住居址	663	弥生土器	壺（口縁部）						床直上
	664	〃	鉢	12.4	(6.6)				1層
	665	〃	壺	21.2	(40.1)	28.2			1層
	666	〃	鉢						最下層
	667	〃	甕（口縁部）						〃
	668	〃	甕（脚部）						床直上
	669	〃	壺（胴部）						1層
34号住居址	671	弥生土器	甕	26.7	(7.2)				中～下層
	672	〃	〃	20.0	(9.0)				中層
	673	〃	〃	25.5	(5.9)				中層
	674	〃	〃	16.6	(5.3)				中層
	675	〃	〃（脚部）				13.6	5.15	中～下層
	676	〃	壺	14.2	(12.8)				中～下層
	677	〃	壺（口縁部）						上層
	678	〃	〃　〃						中層
	679	〃	〃　〃						下層
	680	〃	〃　〃						下層
	681	〃	〃（胴部）						中～下層
	682	〃	〃　〃						中～下層
	683	〃	〃　〃						上層
	684	〃	〃　〃						下層
	685	〃	〃						下層
	686	〃	〃（底部）		(1.7)				中層底径4.0
	687	〃	〃　〃		(2.1)				下層 〃 9.4
	688	〃	〃　〃		(3.5)				中層 〃 5.7
	689	〃	〃　〃		(9.2)				下層 〃 4.6
	690	〃	〃　〃		(4.5)				下層 〃 11.8
	691	〃	壺（口縁部）						中層
	692	〃	鉢（口縁部）						下層
	693	弥生土器	鉢（口縁部）						下層
	694	〃	ジョッキ形土器（底部）						下層
	695	〃	鉢	19.5	(3.8)				中層
	696	〃	鉢	20.1	(6.9)				中層
	697	〃	鉢		(8.6)	16.4			中層
	698	〃	高坏（坏部）						下層
	699	〃	〃　〃						下層
	700	〃	〃　〃						中層
	701	〃	〃　〃						上層
②－ⓓ区	762	弥生土器	甕	17.0	(6.2)				1層
	763	〃	〃	19.4	(8.0)				1層
	764	〃	〃	18.0	(8.8)				3層
	765	〃	〃	22.7	(5.4)				3層
	766	〃	〃	22.8	(8.7)				3層
	767	〃	〃	27.1	(4.0)				3層
	768	〃	〃（脚台）				8.9	3.1	1層

第2表　下山西遺跡出土土器法量表（その12）

単位：cm

遺構名	土器番号	種　別	器　種	口　径	器高(残存高)	胴部最大径	脚台径	脚台高(残存高)	備　考
	769	近世陶器	高台付埦						1層底径4.8
	770	弥生土器	甕（脚台）				11.0	3.0	3層
②	771	〃	〃　〃				13.0	4.9	1層
	772	〃	〃　〃				11.0	5.0	3層
	773	〃	〃　〃				12.4	5.0	1層
	774	〃	〃　〃				10.8	3.8	3層
	775	〃	小型丸底壺	10.0	(3.9)	11.1			1層
	776	〃	壺	11.8	(3.3)				3層
	777	〃	〃（口縁部）						1層
ⓓ	778	〃	〃　〃						2層
	779	〃	〃　〃						1層
	780	〃	鉢（口縁部）						1層
	781	〃	壺（口縁部）						3層
区	782	〃	壺（口縁部）						3層
	783	〃	壺（底部）		(2.5)				1層底径7.8
	784	〃	〃　〃		(3.7)				1層 〃 5.6
	785	〃	〃　〃		(4.5)				1層 〃 4.6
	786	〃	壺（胴部）						上層
	787	〃	〃（頸部）		(4.0)				1層
	788	〃	ジョッキ形土器（把手）						1層幅3.3厚0.5
	789	〃	脚台				10.4	(2.0)	3層
	790	〃	メンコ形土器						1層4.6×6.2、0.6
	791	〃	壺（底部）		(9.0)				2層底径8.6
5号溝	718	弥生土器	甕（口縁部）						一括
〃	719	〃	〃　〃						4層
6号溝	720	〃	〃（脚台）						3層
〃	721	〃	〃（底部）						3層
7号溝	722	〃	甕	20.6	(6.5)				上位
	723	〃	〃	23.4	(7.8)				中位
	724	〃	〃	23.0	(6.8)				中位
	725	〃	〃	30.5	(10.1)				下位
	726	〃	甕（口縁部）						上位
	727	〃	〃						中位
	728	弥生土器	甕（口縁部）						下位
	729	〃	〃						密着
	730	〃	〃						下位
	731	〃	〃						密着
	732	〃	甕（脚台）				10.3	3.5	中位
	733	〃	〃				10.3	3.1	中位
	734	〃	〃				11.5	3.1	上位
	735	〃	〃						上位
	736	〃	〃				10.9	2.8	下位
	737	〃	壺（口縁部）						中位
	738	〃	壺（胴部）						下位
	739	〃	〃						上位
	740	〃	〃						直上
	741	〃	〃						上位
	742	〃	〃						上層
	743	〃	〃						下位

第2表　下山西遺跡出土土器法量表（その13）

単位：cm

遺構名	土器番号	種別	器種	口径	器高	胴部最大径	脚台径	脚台高	備考
	744	〃	〃						中位
	745	〃	壺（底部）						密着
	746	〃	高坏（坏部）						上層
	747	〃	鉢	21.5	(7.1)				直上
	748	〃	高坏（脚部）		(4.5)				中位
	749	〃	〃		(2.8)				上位
3号溝	714	瓦器	すり鉢						
	715	弥生土器	壺						
	716	須恵器	壺（口縁部）						
	717	弥生土器	甕（口縁部）						
3号土壙	710	弥生土器	脚台				8.3	(1.3)	上層
	711	〃	壺（口縁部）						上層
	712	〃	甕（口縁部）						上層
	713	〃	壺	10.7	(4.2)				下層

単位：cm

出土地区	土器番号	種別	器種	口径	器高（残存高）	胴部最大径	脚台径	脚台高（残存高）	備考
②-ⓓ・ⓔ区	797	弥生土器	甕(口縁部)						グリッド内一括
	798	〃	〃 〃						〃
	799	〃	〃(胴部)		(12.2)				〃
	800	〃	高坏(脚部)		(7.8)				〃
	801	〃	高坏(脚台部)					(6.6)	〃
	802	須恵器	(胴部)						〃
③－ⓓ区	755	弥生土器	甕(口縁部)						PIT．7
	756	〃	〃(脚台部)						PIT．2
	757	〃	〃 〃				11.2	(3.7)	PIT．8
	758	〃	壺		(4.3)				PIT．4
	759	〃	〃						〃
Ⅳ・Ⅴ－C～E区周辺部	817	〃	甕(口縁部)						石棺北側表採
〃	818	〃	〃 〃						遺跡北側道路付近表採
〃	819	〃	〃 〃						石棺地区北側表採
〃	820	〃	壺(口縁部)						調査区東側表採
〃	821	〃	〃 〃						調査区南側表採
〃	822	〃	甕(底部)		(4.8)				調査区北側表採底径10.8
〃	823	陶器	すり鉢						調査区西側表採
〃	824		壺(胴部)						調査区北側表採
〃	825		〃 〃						調査区南側表採
〃	826	須恵器	(脚部)						〃 〃 〃

第2節　下山西遺跡出土の鉄器について

本遺跡から出土した鉄器は鉄片（破片）68点も含めると152点に及ぶ。種別の判明するものは84点であり，これは，1軒の住居址から平均して2.5点の鉄器が保有されていた状況となる。製品84点の内訳は鉄鏃43点，鉇18点，手鎌11点，刀子５点，鎌２点，鉄斧・鑿・鋤もしくは鍬先が各１点，そして石棺内より鉄剣が３点となっている。

このように本遺跡では多様な種類の鉄器が出土しており，後述する石器の消滅状況とも複雑に関係している。本遺跡における鉄器文化の様相は阿蘇谷における鉄器の流入（受容）の初期的状態及び弥生終末期に至るまでの発展段階をも示しており，一遺跡においての受容関係の変化を知りえる好例と言えよう。

これら鉄器類を用途・目的別に分解して本遺跡における鉄器文化の特徴を捉えると次の５点にまとめることができる。

① 狩猟具，武器としての鉄鏃の種類が多様で数量的にも群を抜いて多い。また石棺より出土した鉄剣は弥生的要素の強いものである。

② 工具として鉇・刀子類の数量が比較的に多く，さらには鑿・鉄斧の出現もあいまって木器加工での鉄器への強い依存が考えられる。

③ 農具としては石包丁と同一性格の手鎌が普及しており，鉄鎌の出現も見る。また鋤もしくは鍬先の出土により多様な鉄器を受容していたことが伺える。

④ 鉄器はほとんどが住居址からの出土であり，各住居址の鉄器の保有に関しては住居址ごとに数量に多少がある。概して大型の住居址の方が保有量が多い傾向が見られる。

	鉄鏃					鉇	手鎌	刀子	その他		形態不明鉄片
	Ⅰ類		Ⅱ類		不明	17	11	5	鎌	2	68
型式他	a	2	a－1	1	2				鉄斧	1	
	b－1	2	a－2	1					鋤先or鍬先	1	
	b－2	1	b	1					鑿	1	
	c	1	b－1	1					鉄剣	3	
	d－1	1	b－2								
	d－2	2	c	3							
	e	1	d－1	1							
			d－2	4							
			e－1	9							
			e－2	5							
			e－3	1							
			Ⅱ類	4							
小計	10		31		2	17	11	5		8	68
	43										

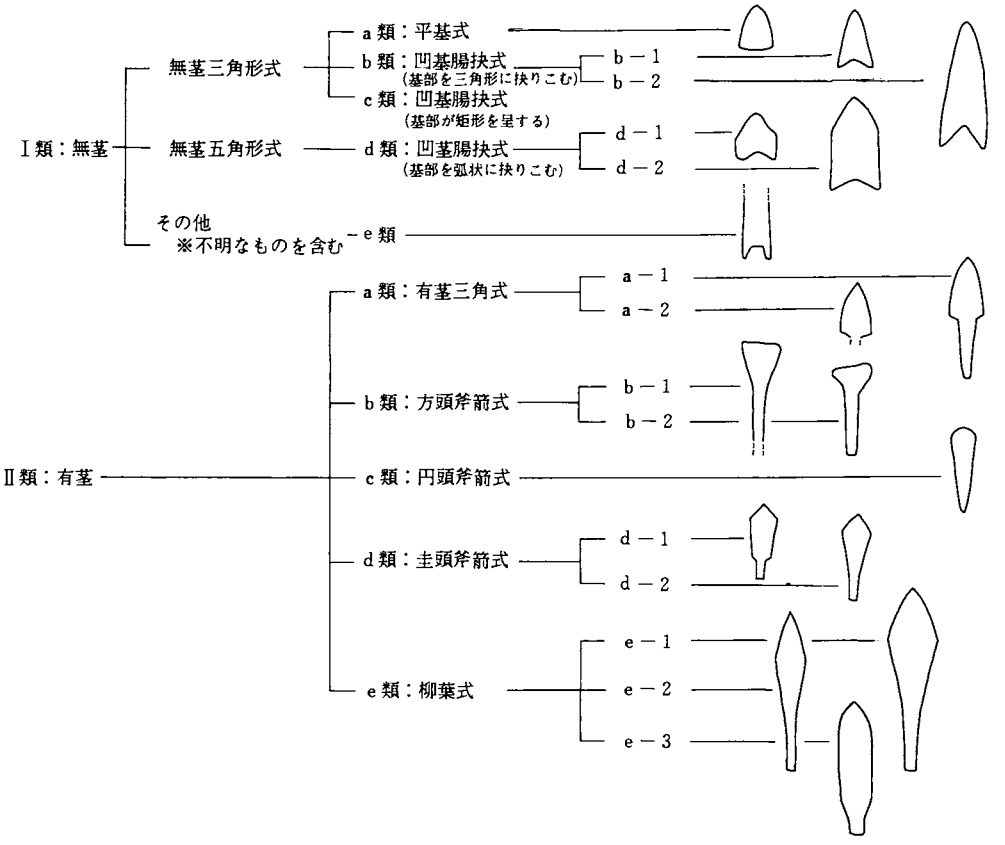
下山西遺跡出土鉄製品　合計　152点

第3表　下山西遺跡出土鉄製品総数一覧

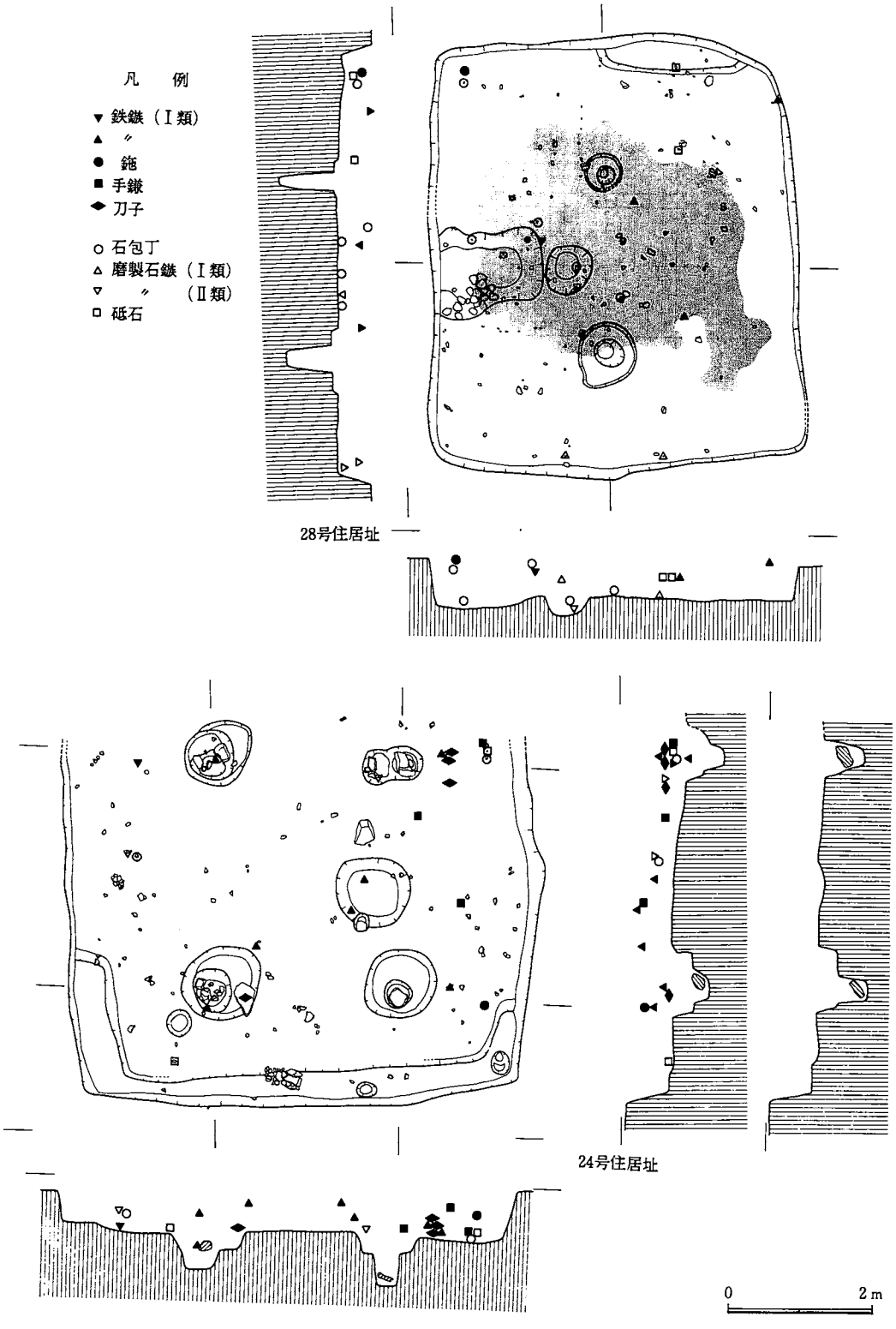
⑤　次節で後述の石器様相とも関係して，阿蘇谷において石器が消滅し，鉄器に変わっていく過程が判明する。

以下項目を追って検討を加えてみたい。

(1)　鉄鏃の形式分類は，かって後藤守一氏が，さらには弥生時代に限っては大村直氏が行なっている。ここでは両氏の形式分数を基礎とし，本遺跡出土の新型式を含めて行なった。鉄鏃については総数43点の出土であり，形態的には大きく二分することができる。即ち無茎のものと有茎のものであり，詳しくは第186図に示す通りである。まず無茎のⅠ類では全体型から三角形式，五角形式，その他（不明含む）とした。基部の抉りの有無及び抉りの形状によってa～d類に分類した。b･d類はさらに小型か大型かによって細分類を行なった。次に有茎のⅡ類では鏃身部の形状により５つに分類をまず行なった。a類は鏃身部の平面形が三角形のものである。さらに関部の内湾(a－2類)・外湾(a－1類)の形状によって２つに細分類する。b類は鏃身の鋒部が方形を呈しているものである。さらには鋒部が茎部に対してほぼ直角方向(b－1類)であるか，もしくはやや傾方向(b－2類)であるかによって細分類した。c類は鋒部が円形を呈するものである。従来までの分類になかった新出の型式である。d類は鋒部が圭頭であり山形をなすものである。基本的には刃部は山形の頭部のみに限定さ



第186図　下山西遺跡出土鉄鏃形態分類



第187図　24号・28号住居址内鉄器・石器出土状況図

れうるものと考えられる。細分したd—1類では関部を明瞭に造り出し，d—2類では関部の造り出しがなされていないものである。e類は鏃身部の形態が柳葉形，もしくは細長の木葉形をするものである。e—1類は関部の造り出しが不明確でしかもe—2類に比べて幅長が長く比較的大型化しているものである。e—2類はe—1類と同様の形態であるが，幅長が短く比較的に小型のものである。e—3類は関部を明らかに造り出したものである。

以上鉄鏃の出土総数は形式分類において，無茎10点に対して有茎は31点と3倍の量となっている。無茎から有茎の鉄鏃へ移行する中で，両者の使用された期間はほぼ同一時間と考えるが，ここでは石器消滅後の鉄器の本格的使用がこのような数量となって現われたものと考えられる。また有茎類中ではd類圭頭斧箭式が5点，e類柳葉式が15点と多くこの両形式が一搬的でありかつまたⅣ期に集約的に使用された結果であると考えられる。

石棺から出土した鉄剣は3点であるが，その内で22の資料は身の基部に2穴を有しており，関部の造り出しが明瞭である。形態的に石剣に類似しており類例資料等から弥生時代的色彩の強い遺物と言えよう。

(2) 工具としての鉇は鑿と共に無茎鏃が使用され始めるⅠ～Ⅱ期で出現する。しかしながら同様の工具としての鉄斧の使用はⅣ期に入ってからとやや遅れる様相を示す。大型材の加工に関しては25号住居址主柱の焼失材に見られるように樹皮は残したまま使用しており，鉇・刀子などはそれ以外の小型木材及び木製加工品に限定されていたとも考えられる。また鑿についても，本遺跡での使用開始時期が早いため現存のような使用法とは異なる性格を有するとも考えられるが推定の域を出ない。

(3) 農具としての手鎌は最終的には石包丁に取って代わるものであるが，本遺跡においてもその出現の時期はⅡ～Ⅲ期に確認されており，Ⅱ期まで溯ることも可能と考えられる。また鎌もⅡ～Ⅲ期には出現することから稲の穂づみ以外の別用途として利用されたものとも考えられる。また同時期で鋤もしくは鍬先と考えられる資料が確認されることから，ほとんどの石器類が鉄器化していく過程がより理解しやすい。

(4) 住居址どうしにおける鉄器保有量の多少は明瞭に現われてくる。比較的に保有量の多い住居址は6号住居址(5点)，8号住居址(5点)，14号住居址(5点)，23号住居址(8点)，26号住居址(5点)，28号住居址(5点)であり，最多数を示すのは24号住居址の15点である。概して住居址の規模が大型で，Ⅲ・Ⅳ期に含まれる住居址から多数の鉄器が出土している。本遺跡内で最多数を保有する24号住居址では第187図に見られる様な出土状態を示す。上層から流入した状態での資料も見られるが，大多数は集中，接近して出土しており，本住居址内本来の一括資料であることがわかる。

(5) 後述する石器の節においても重複した内容ではあるが，下山西遺跡出土の石器・鉄器の時間的関係は第188図に見られる通りである。

Ⅰ期では27号・28号・29号の各住居址出土の石器(626・575・598・602・601) を基準資料とし，一部4号住居址内石器資料(116) を含める。Ⅱ期では4号・8号・26号の各住居址内の鉄器資料(112・198・201・537) を基礎として，28号住居址内鉄器資料(592) を補足とした。Ⅲ期では14号・15号住居址内鉄器資料を基礎としたが306は他の有茎鏃の関係からⅡ～Ⅲ期に溯る可能性も考えられる。Ⅳ期では5号・7号・21号・24号・31号の各住居址内鉄器資料(449・450・451・593・188・662・149・390) を基礎とした。また細時期に関して遺物の時間的流れが不鮮明な箇所では便宜的に2つの過渡期を設けて補足した。Ⅰ～Ⅱ期では17号住居址の資料を基礎とした。石器では347・351を，鉄器では343・344の資料である。さらに無茎の小型鏃はⅡ期(198・592) 及びⅡ～Ⅲ期(117) での出土ではあるが，全体的な鉄器の受容の様子からみてここではⅠ～Ⅱ期まで上げることも可能であろう。Ⅱ～Ⅲ期では23号・26号住居址出土の鉄器資料(534・535・418・426・425) を基礎とする。Ⅱ期で右包丁は消滅するが，一部手鎌も併用した時期も考えられることから，537はⅡ期まで上げた。

以上のように，本遺跡においては鉄器の受容関係がかなり石器との関係をも含めて明確に現われる。大きな流れとして以下の3段階が考えられる。第1段階では石器はかなり多く利用されているが，無茎の小型鏃ならびに鉇・鑿が始めて現われる。この時期が遺構Ⅰ期の最終時期である。その後遺構Ⅱ期で石器は完全に消滅し，次期からは本遺跡においては用具が完全に鉄器化する。第2段階では有茎で小型の鉄鏃が出現する。一方では無茎鏃が大型化し，併行して使用される。また石包丁の消滅にともない手鎌・鎌が本格的に利用される。この時期が遺構Ⅱ期の終末ならびに遺構Ⅲ期の初頭時期である。第3段階では，無茎鏃は有茎鏃に完全に取って代わり，有茎鏃のバリエーションが豊富となり量も飛躍的に増大する。

下山西遺跡の所在する山間部阿蘇谷地区では平野部の遺跡に比べて物の受容・消化の仕方が石器・鉄器ではやや異なるとも考えられる。本例に対しての類例資料と検討を待ちたい。

参考文献

1．大村　直　1983「弥生時代における鉄鏃の変遷とその評価」(考古学研究30巻3号)
2．緒方　勉　1974「まとめ」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査概報一福岡熊本線(南関～植木)一』
3．小田富士雄　1977「鉄器」『立岩遺跡』
4．岡崎　敬　1956「日本における初期鉄製品の諸問題」(考古学雑誌　42巻1号)
5．黒田　裕司　1984「西弥護免遺跡出土の鉄器について」『埋蔵文化財研究会第16回研究集会　発表要旨』
6．後藤　守一　1939「上古時代鉄鏃の年代研究」(人類学雑誌 54巻4号)
7．高倉　洋彰　1985「初期鉄器の普及と画期」『九州歴史資料館研究論集 10』
8．高谷　和生　1984「下山西遺跡出土の鉄器について」『埋蔵文化財研究会第16回研究集会 発表要旨』
9．森　浩一　1974「考古学から見た鉄」『日本古代文化の研究 鉄』
10．橋口　達也　1974「初期鉄製品をめぐる二・三の問題」(考古学雑誌 60巻1号)

第４表　下山西遺跡出土鉄製品一覧（その１）

※印は残存表

遺物番号	出土遺構	出土層位	器種	分類	法量				備考
					長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
111	SI-04(No164)	3　層	鉄　鏃	Ⅰ-b-1	3.1	2.2	0.4	2.25	
112	SI-04(No159)	床　直	鉄　鏃	Ⅰ-d-2	4.7	2.5	0.4	9.05	完形品
	SI-04(No95)	一　括						9.5	実測図なし
149	SI-05(No9)	3　層	鉄　鏃	Ⅱ-e-3類	※ 5.3	1.35	0.45	9.7	
	SI-05(No92)	2　層						13.2	実測図なし
166	SI-06(No3)	2層底面	鉄　鏃	?	※ 3.2	1.5	0.3	2.1	
167	SI-06(No1)	1　層	鉇		※3.95	1.15	0.3	4.1	
168	SI-06(C区)	覆土中位	鉇		※ 3.1	1.2	0.3	3.0	
169	SI-06(No2)	1　層	鉇		※3.95	1.3	0.3	4.35	
170	SI-06(No45)	密　着	手　鎌		8.10	2.80	0.3	16.9	完形品
188	SI-07(No31)	3層ベッド上	鉄　鏃	Ⅱ-d-1類	※ 3.9	1.4	0.35	5.0	
189	SI-07(No1)	1　層	鉄　鏃	Ⅱ-e-2類	7.9	1.85	0.5	12.9	
198	SI-08(No59)	下　層	鉄　鏃	Ⅰ-a類	2.2	1.7	0.5	2.6	完形品
199	SI-08(SI-14のNo47)	直　上	鉄　鏃	Ⅱ-e-1類	※3.85	1.8	0.7	10.6	
200	SI-08(No71)	3　層	刀　子		※ 6.3	1.1	0.5	12.9	
201	SI-08(No9)	直　上	鉄　鏃	Ⅰ-c類	7.5	3.3	0.4	21.25	
202	SI-08(SI-14のNo48)	1　層	鉄　鏃	Ⅱ-e-1類	※ 3.7	2.3	0.75	7.6	
218	SI-09(No8)	1　層	手　鎌		※ 3.0	4.75	0.4	36.05	
	SI-09		鉄　鏃	Ⅱ類				4.4	実測図なし
253	SI-11(No26)	9　層	鉇		※ 4.3	1.2	0.55	6.65	
254	SI-11(No1)	5　層	鉇		※ 5.9	1.7	0.35	8.45	
	SI-11全区	7　層	手　鎌					17.8	実測図なし
300	SI-14(No12)	2　層	鉇		※5.95	1.3	0.5	6.7	
301	SI-14(No23)	2　層	鉇		※ 5.5	1.4	0.55	11.85	
302	SI-14(No19)	2　層	手　鎌		※ 8.1	2.5	0.3	18.8	
	SI-14(No1)	2　層						13.05	実測図なし
306	SI-15(No8)	2　層	鉄　鏃	Ⅱ-e-2類	6.1	1.4	0.5	8.0	完形品
307	SI-15(No17)	3　層	鉄　鏃	Ⅱ-e-2類	※ 6.1	1.6	0.4	12.1	
308	SI-15(No21)	pit内出土	鉇		※ 6.9	1.65	0.6	10.75	

第4表 下山西遺跡出土鉄製品一覧（その2）

※印は残存表

遺物番号	出土遺構	出土層位	器種	分類	法量 長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	備考
341	SI-14(No164)	2層下位直上	鉄鏃	Ⅰ-b-2類	6.3	2.35	0.4	17.4	※14号住へ移る 完形品
342	SI-17(No167)	4層下位密着	鉇		※ 4.5	1.5	0.3	6.9	
343	SI-17(No30)	4層上位	鑿		9.0	1.35	0.7	43.65	
344	SI-17(No171)	4層下位密着	鉇		※12.8	1.45	0.5	24.3	
	SI-18(No1)	3層下位密着	手鎌					3.95	実測図なし
	SI-18(No59)	1層中位	鉄鏃	Ⅱ類				4.1	〃
390	SI-21(No20)	下層	鉄斧		6.1	2.7	1.45	43.85	完形品
391	SI-21(No2)	下層	鉄鏃	Ⅱ-e-1類	7.7	2.05	0.55	15.8	〃
416	SI-23(No52)	2層中位	鉄鏃	Ⅰ-a類	2.0	1.3	0.45	2.0	完形品
417	SI-23(No17)	2層中位	鉄鏃	Ⅰ-b-1類	2.9	1.8	0.3	2.55	〃
418	SI-23(No73)	直上	鉄鏃	Ⅱ-d-2類	※ 4.1	1.6	0.4	6.15	
419	SI-23(No2)	2層pitふち	鉄鏃	Ⅱ-d-2類	※ 2.7	1.5	0.35	2.3	
420	SI-23(No15)	2層上位	鉄鏃		※ 4.4	1.6	0.7	5.5	
424	SI-23(No69)	1層上位	鎌		9.9	2.8	0.5	29.9	
425	SI-23(No11)	2層上位	鋤先or鍬先		10.0	4.55	0.8	92.5	完形品
426	SI-23(No46)	1層下位	鎌		13.0	4.3	0.6	75.7	〃
448	SI-24(No43)	4層(上位)	鉄鏃	Ⅰ-e類	※ 3.1	1.4	0.3	1.8	
449	SI-24(No92)	ピット内	鉄鏃	Ⅱ-d-2類	4.5	1.5	0.4	4.85	完形品
450	SI-24(No68)	1層(下位)	鉄鏃	Ⅱ-a-1類	※ 5.6	1.65	0.4	8.55	
451	SI-24(No69)	1層(中位)	鉄鏃	Ⅱ-b-1類	※ 4.9	1.9	0.35	8.65	
452	SI-24(No53)	2層(上位)	刀子		※ 2.3	1.6		2.15	
453	SI-24(No54)	2層(下位)	刀子		※4.15	1.3	0.7	5.7	
454	SI-24(No31)	1層(中位)	鉄鏃	Ⅱ-e-1類	※2.95	0.85	0.5	7.7	
455	SI-24(No11)	2層(上位)	鉄鏃	Ⅱ-e-2類	※ 7.5	1.5	0.5	10.8	
456	SI-24(No53)	2層(上位)	鉄鏃	Ⅱ類	※ 4.4	0.75	0.45	3.7	
457	SI-24(No53)	2層(上位)	刀子		※ 5.3	1.8	0.4	8.9	
458	SI-24(No88)	pit No1上面 床面	刀子		7.9	1.6	0.4	8.1	
459	SI-24(No80)	2層(中位)	鉇		※ 3.7	1.2	0.4	3.5	
460	SI-24(No55)	2層(下位)	手鎌		8.8	3.5	2.5	51.85	完形品
461	SI-24(C区)	中層	手鎌		※2.45	2.1	0.2	3.4	
462	SI-24(D区)	上層	手鎌		※ 4.7	3.1	0.4	12.9	

第4表　下山西遺跡出土鉄製品一覧（その3）

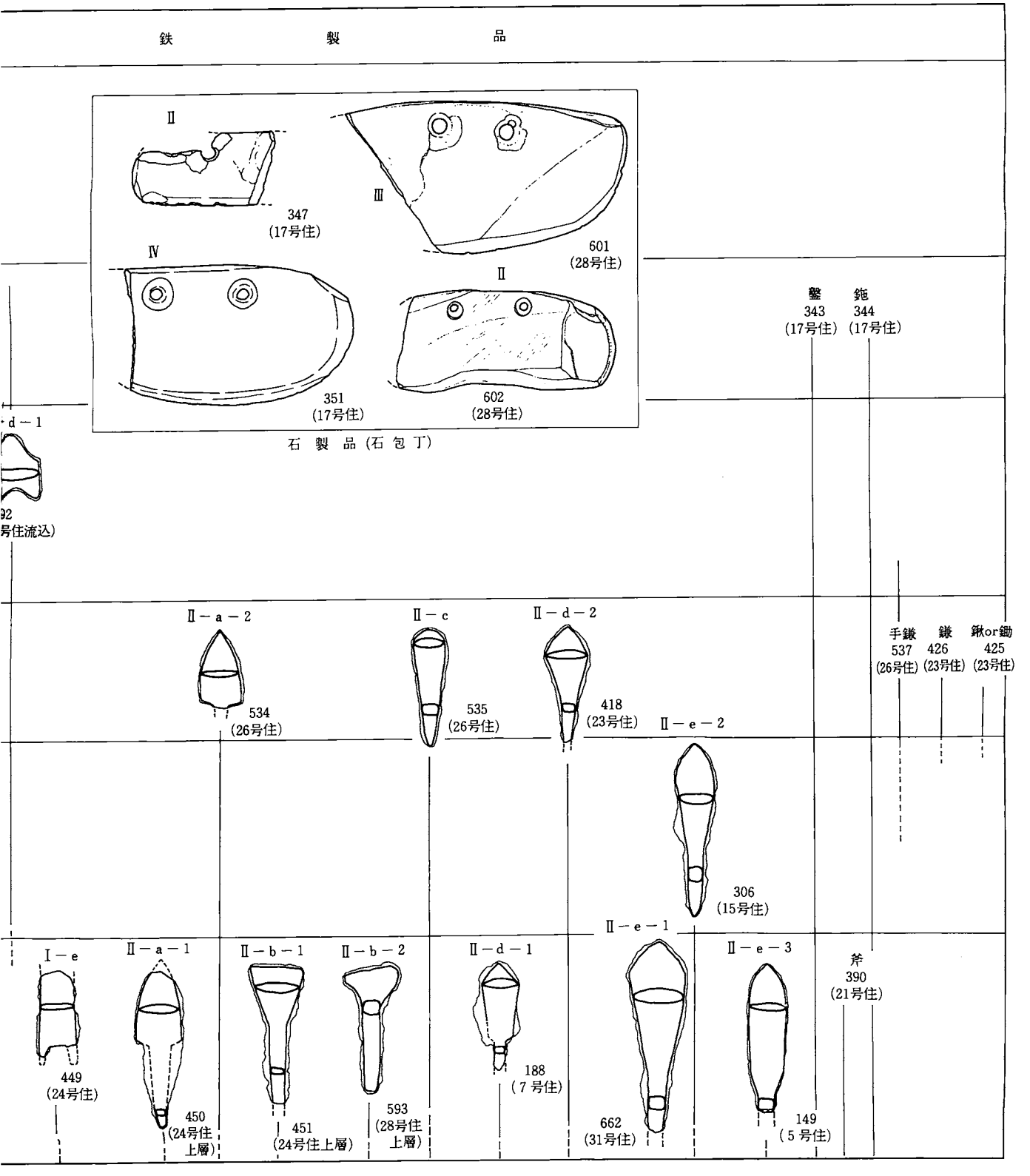
※印は残存表

遺物番号	出土遺構	出土層位	器種	分類	法量 長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	備考
490	SI-25(No32)	3層下位直上	鉄鏃	Ⅱ-e-1類	※ 5.3	2.25	0.3	9.25	
491	SI-25(No39)	2層	鉇		※ 3.6	1.7	0.4	6.25	
492	SI-25(No9)	2層	鉇		※ 7.1	1.3	0.45	13.2	
534	SI-26(No33)	2層下位	鉄鏃	Ⅱ-a-2類	※2.75	1.5	0.3	1.8	
535	SI-26(No29)	2層下位	鉄鏃	Ⅱ-c類	4.15	1.15	0.5	3.35	完形品
536	SI-26(No30)	2層下位密着	鉇		※3.75	1.45	0.35	6.15	
537	SI-26(No23)	1層上位	手鎌		※2.95	※ 2.7	0.4	17.85	
	SI-26(No23)	1層上位						7.9	実測図なし
592	SI-28(No71)	2層	鉄鏃	Ⅰ-d-1類	2.3	2.0	0.5	4.6	完形品
593	SI-28(No1)	1層	鉄鏃	Ⅱ-b-2類	※4.65	1.95	0.5	8.05	
594	SI-28(No120)	1層	鉄鏃	Ⅱ-e-1類	※ 7.1		4.5	11.95	
595	SI-28(No78)	2層(下位)	鉄鏃	Ⅱ-e-1類	※9.25	2.45	0.9	22.95	
	SI-28(No88)	1層						1.9	実測図なし
	SI-29(No58)	4層上位	手鎌					3.4	〃
652	SI-30(No23)	1層中位	鉇		※ 4.1	1.45	0.55	10.9	
661	SI-31(No14)	床直	鉄鏃	Ⅱ-e-2類	5.9	1.7	0.5	7.5	完形品
662	SI-31(No6)	下層	鉄鏃	Ⅱ-e-1類	※6.85	2.0	0.6	15.4	
	SI-31(No5)	上層	鉄鏃	Ⅱ-c類				3.7	実測図なし
702	SI-34(No78)	下層	鉄鏃	Ⅱ-e-1類	※5.25	1.9		11.35	
703	SI-34(No34)	下層	鉄鏃	Ⅱ	※ 2.8	1.7	0.55	8.6	
704	SI-34(No68)	下層	鉇		※ 3.9	1.5	0.25	5.6	
	SI-34(No60)	中層	手鎌					11.0	実測図なし
753	SD-07(No82)	3層下位直上	鉄鏃	Ⅰ-d-2類	3.9	2.6	0.55	7.35	完形品
792	②—ⓓ区内一括		鉄鏃	Ⅱ-c類	4.6	1.1	0.4	5.8	完形品
793	②—ⓓ区内一括		鉇		8.2	1.5	0.5	12.65	完形品
	14トレンチ褐色土		鉄鏃	Ⅱ-b類				2.75	実測図なし
	Ⅳ～Ⅴ—C～E区内							2.75	実測図なし
22	2号石棺		鉄剣		※27.2				
23	3号石棺		鉄剣		※30				
24	4号石棺		鉄剣		31				

時　期	出土住居址	石　　製　　品
Ⅰ期	27号、28号 29号	Ⅰ－b類 626（29号住） Ⅰ－a類 575（27号住） Ⅱ－c類 598（28号住） 石包丁 Ⅱ類 602 Ⅲ類 601（28号住） 磨製石斧 116（4号住）
Ⅰ～Ⅱ期	17号	石包丁 Ⅱ類 347 Ⅳ類 351（17号住）
Ⅱ期	4号、8号 26号	Ⅰ－d－2 112（4号住） Ⅰ－a 198（8号住） Ⅰ－c 201（8号住）
Ⅱ～Ⅲ期	23号、26号	
Ⅲ期	14号、15号	Ⅰ－b－2 341（17号住中層） Ⅰ－b－1 117（23号住流込）
Ⅳ期	5号、7号 21号、24号 31号	

0　10cm

第188図　下山西遺跡におい



る石器・鉄器系統図 (縮尺½)

第３節　下山西遺跡出土の石器について

本遺跡からは第５表に示す通り多様な石器類が出土している。

その内訳は砥石46点が最も多く，石包丁29点，磨石28点，台石(石皿)27点，磨製石鏃25点，石弾６点，紡錘車３点，打製石鏃２点，磨製石斧・敲石・形態不明石器各１点となり，総数169点に及ぶ。

これらの石器を用途・目的別に分類してその傾向と特徴を捉らえてみると次の点で集約できるのではなかろうか。

① 狩猟具・武器としての石鏃が多く形態差が見られる。

② 工具としての砥石の量がずば抜けて多い。

③ 農具としての石包丁がまとまって出土しており形態差を捉らえることができる。

④ 調理具として磨石・敲石及び台石(石皿)の数量が近似し，組み合わせが捉らえやすい。

⑤ 磨製石鏃・石包丁の出現の時期がわかり，鉄器類との組み合わせ等とも含め，終熄の状態が解かり容い。

以下順を追って項目ごとに述べてみたい。

(1) 狩猟具・武具としての石鏃では明らかに時代の異なる縄文時代の打製石鏃を２点含むが，形態上バリエーションが拡がる。第189図は本遺跡出土磨製石鏃を形態別に分類したものである。全体のプロポーションとしては所謂柳葉形式であり，縦長で基底部より中胴部に最大径が認められる形状のみである。しかし基部形態には茎部を有するものは見られないものの２通りある。１つは基部中央部に深さ等は種々ではあるが抉りを入れた有抉(Ⅰ類)と，基部が平坦である無抉(Ⅱ類)のものとである。さらに長軸と幅部との関係から幅の広くなるb類と幅の狭くなるc類とに分類することが可能となった。数量としては有抉Ⅰ類の方が

	磨製石鏃					石包丁		砥石	磨石	台石(石皿)	その他	
	Ⅰ類		Ⅱ類		不明	Ⅰ類	4	46	28	27	石弾	6
型式他	a	1			7	Ⅱ類	17				紡錘車	3
	b	8	b	1		Ⅲ類	2				打製石鏃	2
	c	5	c	3		Ⅳ類	2				磨製石斧	1
						不明	4				敲石	1
											不明	1
小計		14		4	7		29	46	28	27		14
					25							

下山西遺跡出土石製品　合計　169点

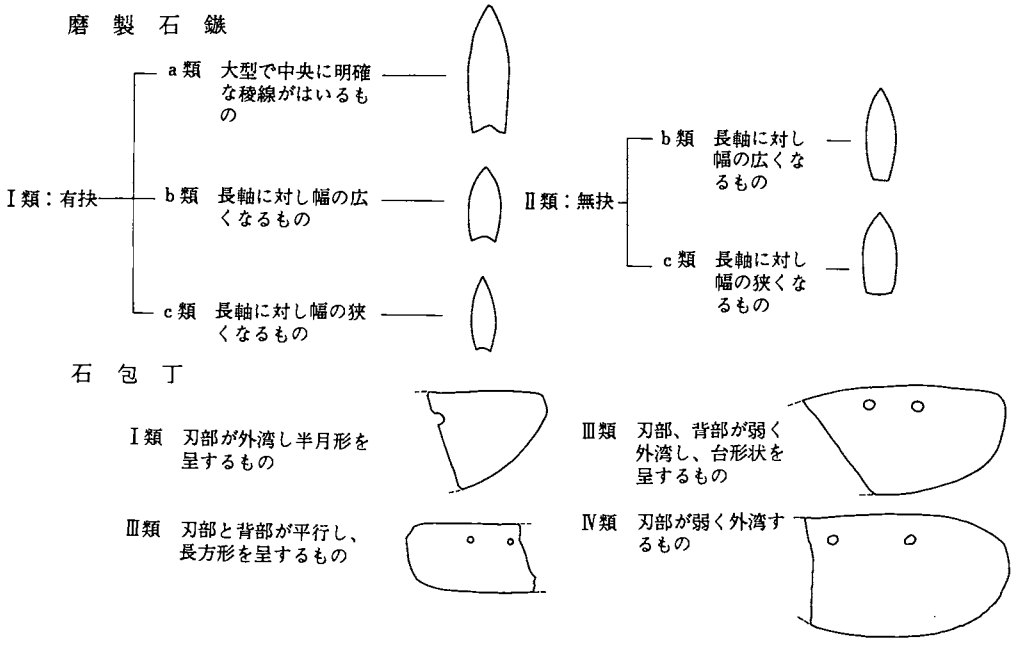
第５表　下山西遺跡出土石製品総数一覧

多く，さらには大型で中央部に明確な稜線のはいるa類も1例ではあるが確認されている。ただしⅠ・Ⅱ類においては，第189図にあるように抉りの有無のみでは統計数量の不足もあるかと思われるが，傾向は見い出されない。しかし幅部の長短によるb・c類においてはあるまとまりを示しており，大型のa類でも突出した傾向が見られる。

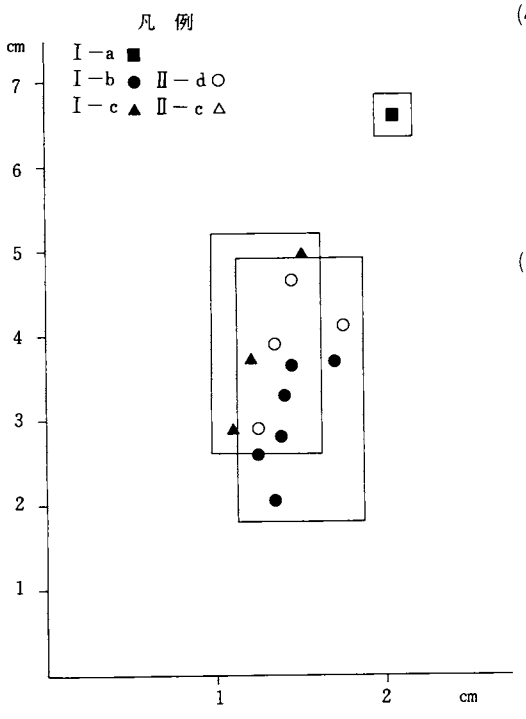
(2)　砥石は磨製石鏃，鉄器を研磨する工具として利用されたものと考えられ，一部の資料には強い線条痕が見られるものも多い。規格的には大型で20cmをこえる物から，小型は4cm内外のものまで多様であるが，概して全面にわたり研磨面としてよく利用されている。また岩質においては凝灰岩，砂岩，頁岩等と多様であるが砂質凝灰岩がその内の大多数を占めており，このことは石材原産地と関係をもった特定地域との交流を伺えるものであろう。また岩質の特性により研磨工程での仕分けも考えられる。

なお磨製石斧が1点出土しているが，これは時期的にも中期以前のものであり，伝世された後に遺棄されたものと考えられる。なお石質は輝石角閃石安山岩であり，当地域にこの岩質はなく，当時筑豊地区との交易を充分に想定しうる材料である。

(3)　農具として石包丁が取りあげられる。石包丁は29点もの資料が出土しており，形態的には第189図形態分類図中に示す通り，4類に分類できる。穿孔部には糸擦れ痕が，刃部には使用痕が明瞭に残っており明らかに使用後破損し投棄されたものと考えられる。なお未製品もしくは製作段階で破損した資料は全く見られない。石材は粘板岩，砂岩，結晶片岩等多様であるが，大型磨製石斧と同質の石材が数点見られることからここでも同様の交易圏が想定しうる。



第189図　下山西遺跡出土磨製石鏃・石包丁形態分類



第６表　磨製石鏃法量比較表

(4)　セットとして磨石・敲石及び台石(石皿)が確認された。これらの資料は各遺構時期から全般的に出土しており，集落終熄時に一挙に廃棄もしくは投棄したものではない。普遍的な資料と言えよう。

(5)　本遺跡では形態的に種類が豊富であり，時期差が現われる資料として磨製石鏃と石包丁があげられる。両資料の形態別分類は第６表に示した通りである。磨製石鏃では一般的に中型のものから，幅と全長の比率が１：２以上となり大型化の傾向が見られ言われている。本遺跡では遺跡の始まるⅠ期においてほぼ各種類の資料が出そろう事となる。即ちⅠ期に属する29号住居址から626(Ⅰ－b類)が，27号住居址から575(Ⅰ－a類)，28号住居址から598(Ⅱ－c類)の遺物が良好な状態で確認される。さらにはⅡ期に至るまで石鏃はそのままの状態で広範に使用されている。

石包丁では形態的に最も古いと考えられるものは刃部が外湾し半月形を呈するⅠ類である。Ⅰ類の資料は４点出土しⅠ期の30号住居址等からも出土する。しかし一方では28号住居址におけるように同じⅠ期の遺構内であっても602(Ⅱ類)，603(Ⅲ類)の資料も同時期に共伴している。また17号住居址に見られる様にⅡ類(347)とⅣ類(351)が共伴する状態も見られ形態的には混在する。この現象はⅡ期まで各住居址内でみられ，以後Ⅲ期以降の住居址内より流入した状態で出土はするものの，基本的にはⅡ期で終結する。

以上の通り下山西遺跡の石器について概観したが，時間的には本遺跡の前半時期では石器使用の最終段階を示すものと考えられる。Ⅰ期では一部中期の資料を含むものの完成された形の多岐にわたる石器が現われる。その後はⅠ～Ⅱ期で一部の鉄器に影響を与えながらもⅡ期までそのままの形態を踏襲して，Ⅲ期では完全に鉄器類に取って代わられる。

さらには本遺跡では磨製石鏃，石包丁の未製品は破片等を含めて１点も出土しておらず，生産遺跡とは異なる性格の遺跡であることが想像される。

参考文献

１．下條　信行　1975「未製品よりみた弥生時代前期の生産体制」(『九州考古学の諸問題』)
２．下條　信行　1977「石器」(『立岩遺跡』)
３．中村幸四郎　1982「方保田東原遺跡出土の石包丁について」(『方保田東原遺跡』)
４．松村　道博　1978「磨製石鏃について」(『谷頭遺跡』)

第7表　下山西遺跡出土石製品一覧（その1）

※印は残存表

遺物番号	出土遺構	出土層位	器種	分類	石材	法量				備考
						長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
80	SI-01(No413)	下層	磨製石鏃		粘板岩	※3.90	1.58	0.38	2	
81	SI-01(No不明)		砥石		凝灰岩	※3.30	4.05	0.85	10.95	
828	SI-01(No17)	Ⅲ－D区	磨石			14.0	11.28	8.25	1410	
827	SI-01(No343)	Ⅲ－D区	〃			※ 7.2	9.65	7.38	665	
830	SI-01(No252)	Ⅱ－D区	〃			10.88	8.6	5.75	935	
829	SI-01(No405)	下層	台石			20.35	13.95	9.66	2730	
92	SI-02 C区	覆土	砥石		砂岩	※3.98	3.65	1.20	26.6	
113	SI-04(No158)	床直	磨製石鏃	Ⅰc	結晶片岩	(4.95)	1.50	0.20	2.7	完形品
114	SI-04 E区	1層	砥石		砂岩	※4.30	3.10	0.75	15.9	
115	SI-04(No161)	3層	石包丁	Ⅱ	粘板岩	※4.25	(4.00)	(0.65)	15.7	
116	SI-04(No40)	床直	磨製石斧		輝石角閃石安山岩	20.90	7.35	5.40	1475	完形品
117	SI-04	覆土	砥石		凝灰岩	3.32	2.20	1.20	9.9	
118	SI-04 A区	4層	砥石		結晶片岩	※4.10	2.65	0.30	7.3	
119	SI-04 A区	中層	砥石		砂岩	5.95	2.70	1.81	40.75	
831	SI-04(No99)	2層	磨石片(敲石兼用か)			※8.70	10.0	8.1	1050	
834	SI-04(No51)	3層	石弾			4.70	4.6	2.75	80	
147	SI-05(No106)	上層	台石		安山岩	28.2	26.06	11.2	14.49kg	
148	SI-05(No105)	1層	台石		〃	43.14	33.24	14.08	31.5kg	
150	SI-05 A区	2層	石包丁	Ⅱ	粘板岩	※3.60	(3.20)	(0.70)	11	
151	SI-05(No7)	3層	砥石		凝灰岩	※5.42	4.15	1.70	44.9	
832	SI-05(No34)	3層	石弾			5.90	5.6	4.55	250	
833	SI-05(No62)	中層	〃			3.90	4.65	2.3	50	
171	SI-06(No5)	2層	砥石		頁岩	3.35	2.30	0.50	6.2	
190	SI-07(No9)	1層	磨製石鏃	Ⅰc	粘板岩(古世代)	(2.90)	(1.10)	0.20	0.9	ほぼ完形
191	SI-07(No24)	直上	砥石		砂質凝灰岩	9.30	7.45	2.40	315	
203	SI-08(No3)	3層	磨製石鏃	Ⅰb	粘板岩or千枚岩	(2.05)	(1.35)	0.20	1.4	ほぼ完形
204	SI-08(No89)	2層	砥石		凝灰岩	14.10	10.30	3.00	660.5	
205	SI-08(No82)	直上	石包丁	Ⅱ	結晶片岩	※6.10	4.20	0.70	31.45	
206	SI-08(No42)	直上	砥石		凝灰岩	4.20	2.90	1.00	17.1	
207	SI-08(No7)	直上	砥石		砂岩	11.30	7.28	3.40	434.2	

第7表　下山西遺跡出土石製品一覧（その2）

※印は残存表

遺物番号	出土遺構	出土層位	器種	分類	石材	法量 長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	備考
208	SI-08	2層	台石			33.64	26.16	4.3	5.81kg	
219	SI-09(No5)	2層	砥石		凝灰岩	5.0	3.30	※2.25	61.85	
	SI-09	覆土			頁岩				7.3	実測図なし
220	SI-10(No2)	直上	砥石		凝灰岩	4.20	1.32	0.60	4.9	
255	SI-11	覆土内	磨製石鏃	Ⅰc	輝緑凝灰岩	(3.70)	1.22	0.23	1.3	ほぼ完形
256	SI-11(No5)	覆土内 9層	砥石		結晶片岩	7.70	4.52	1.10	65.9	打製石斧の砥石転用
257	SI-11(全区)	上～下層	石包丁	Ⅲ	砂岩	※7.10	4.40	0.50	23.9	
258	SI-11 C区	上層	砥石		〃	4.35	3.80	2.10	35.2	
259	SI-11 A区	上層	石包丁		粘板岩	※4.20	3.60	0.50	7.7	
260	SI-11(No30)	上層	砥石		凝灰岩(白亜紀)	16.60	5.70	5.65	810	
261	SI-11 C区	上層	砥石		凝灰岩	4.95	2.60	0.40	8.3	
262	SI-11(No34)	覆土内	砥石		〃	8.02	5.70	1.10	52.4	
263	SI-11	床面	台石		安山岩	65.1	38.28	13.38	53.3kg	
269	SI-12	Ⅰ層(上層)	石包丁	Ⅱ	粘板岩	※6.65	3.40	0.4		
275	SI-13(No23)	Ⅰ層	磨製石鏃		輝緑凝灰岩	※3.32	1.25	0.35	1.4	
276	SI-13(No27)	Ⅰ層	石包丁	Ⅱ	粘板岩	※5.89	3.00	0.70	18.1	
303	SI-14(No39)	Ⅲ層	砥石		凝灰岩	※8.60	3.65	2.8	116.6	
304	SI-14(No20)	Ⅲ層	不明石器		結晶片岩	8.50	5.15	1.00	68.9	完形品
309	SI-15(No24)	Ⅲ層	磨製石鏃	Ⅰb	珪質粘板岩	3.65	1.45	0.30	2.4	完形品
310	SI-15(No15)	覆土上層	台石		安山岩	39.16	36.62	11.7	28.5kg	
835	SI-15(No12)	床密着	台石			24.75	25.63	2.4	2190	
836	SI-15(No12)	〃	〃			16.03	8.98	6.0	1200	
320	SI-16	Ⅰ層(黒褐色土層)	台石		安山岩	37.1	30.08	8.2	11.39kg	
321	SI-16	覆土上層	砥石		砂岩＋黒色頁岩	3.40	2.15	0.60	7.5	
838	SI-16(No2)	Ⅰ層	磨石			9.7	7.92	7.0	880	
839	SI-16(No123)	床面密着	台石			10.0	4.95	8.93	640	
837	SI-16(No125)	床面密着	磨石			5.65	8.56	6.63	475	
840	SI-16(No128)	2層	台石			13.08	7.55	7.0	1.0kg	
841	SI-16(No128)	2層	台石			11.4	17.4	7.75	2.26kg	

第7表 下山西遺跡出土石製品一覧（その3）

※印は残存表

遺物番号	出土遺構	出土層位	器種	分類	石材	法量 長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	備考
345	SI-17(No82)	2層(中位)	磨製石鏃	Ⅰb	頁岩	(3.30)	1.40	0.30	1.4	完形品
346	SI-17(No166)	2層(下位)直上	磨製石鏃		珪質粘板岩	※3.95	1.32	0.40	1.2	
347	SI-17(No128)	2層(上面)	石包丁	Ⅱ	粘板岩	※5.10	(2.70)	0.50	11.5	
348	SI-17(No169)	4層	石包丁	Ⅳ	黒色片岩	※8.40	3.51	(0.70)	25.25	
349	SI-17(No16)	2層(下位)	石包丁	Ⅱ	粘板岩	※5.25	3.60	(0.90)	10.4	
350	SI-17(No128)	2層下位(直上)	石包丁		粘板岩or千枚岩	4.3	2.7	0.53	8.1	SI-24(No98)と同一
351	SI-17(No44)	3層(中位)	石包丁	Ⅳ	粘板岩	※8.25	5.00	0.55	39.45	
352	SI-17(No161)	2層(下位)	石包丁	Ⅱ	〃	※4.51	(3.90)	(0.70)	13.4	
353	SI-17(No6)	2層床直	砥石		凝灰岩	※4.80	2.75	0.5	12.8	火を受けたあと有
354	SI-17C区	下層	砥石		砂岩	6.50	4.65	1.78	69.2	
355	SI-17(No168)	4層(下位密着)	砥石		頁岩	14.70	9.40	4.60	1125	
842	SI-17(No152)	4層(下位直上)	磨石							
843	SI-17(No109)	5層(下位)	磨石			※ 6.2	8.55	4.95	435	
844	SI-17(No3)	上層	磨石			※5.95	10.1	7.4	495	
845	SI-17(No114)	5層(下位)	磨石			15.97	11.75	7.2	1.41kg	
846	SI-17(No45)	2層(下位)床直	石弾			4.6	5.2	3.7	100	
847	SI-17(No138)	3層(下位)直上	磨石			7.5	8.1	6.65	580	
848	SI-17(No8)	3層(上部)	台石			10.1	7.48	3.65	415	
849	SI-17(No168)	pit内の根石	台石			16.55	22.7	6.38	3.845kg	
850	SI-17(No158)	5層(下位)	磨石			11.8	10.0	9.7	1.56kg	
851	SI-17(No162)	2層(中位)	台石			11.55	5.5	8.1	515	
852	SI-17(No22)	4層(下位直上)	磨石			12.1	9.72	10.7	1.82kg	
	SI-17(No52)	上層			結晶片岩				7.6	実測図なし
378	SI-18(No2)	2層(上位)	打製石鏃		粘板岩	※2.45	※1.75	0.4	1.3	
379	SI-18(No64)	2層(中位)	砥石		凝灰岩	5.50	※3.00	2.75	29.6	
853	SI-18(No1)	3層(下位)	磨石			※ 9.8	8.95	8.6	985	
854	SI-18(No9)	3層(下位密着)	磨石			10.7	8.6	6.1	895	
855	SI-18(No38)	3層(中位直上)	磨石			12.5	11.0	8.5	1.345kg	
811	SI-20(No1)	壁面密着	砥石		凝灰岩	5.90	2.50	1.10	27.7	
389	SI-21(No37)	1層(中位)	磨製石鏃	Ⅰb	粘板岩	※2.89	1.53	0.45	1.9	
392	SI-21(No22)	上層	台石		安山岩	54.84	41.1	12.16	32.0kg	
421	SI-23(No24)	2層上位	紡錘車		粘板岩	※5.30	※3.00	0.70	15.9	

第7表　下山西遺跡出土石製品一覧（その4）

※印は残存表

遺物番号	出土遺構	出土層位	器種	分類	石材	法量 長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	備考
422	SI-23 D区	一括	砥石		凝灰岩	5.60	4.40	1.90	71.2	
423	SI-23(No26)	1層(下位)	石包丁	Ⅱ	珪質粘板岩	※3.60	※3.70	(0.50)	8.3	
427	SI-23(No7)	1層	台石		安山岩	39.8	32.12	8.6	16.08kg	
856	SI-23(No5)	直上	敲石			15.24	15.0	9.3	2.26kg	
857	SI-23(No67)	密着	磨石			10.77	10.4	8.15	1.41kg	
463	SI-24(No49)	2層(上位)	磨製石鏃	Ⅱc	頁岩	2.90	1.25	0.25	1.05	完形品
464	SI-24(No55)	2層(下位)	砥石		凝灰岩	3.80	2.90	1.40	10.8	
465	SI-24(No89)	1層(上中位)	石包丁	Ⅰ	結晶片岩	※6.10	※4.80	(0.60)	23.4	
466	SI-24	A区 上層	砥石		凝灰岩	※ 5.2	※ 3.5	※0.63	8.65	
467	SI-24(No24)	A区 上層	砥石		砂質凝灰岩	※5.80	5.10	1.80	59.4	
468	SI-24(No47)	1層(上位)	台石		安山岩	47.84	30.04	9.2	15.65	
	SI-24(No98)	2層(下位)直上	石包丁	Ⅱ	粘板岩or千枚岩	※4.30	※2.70	※0.50	8.1	実測図なし
493	SI-25(No52)	4層(中位)	磨製石鏃		(凝灰質)粘板岩	※4.10	2.05	0.45	4.7	
494	SI-25(C区)	埋土上層	砥石		凝灰岩	3.05	1.41	※0.32	3.5	
495	SI-25(No40)	3層	砥石		〃	※7.82	※3.60	※1.65	48g	
496	SI-25 C区	炭化層	砥石		頁岩	3.50	1.90	0.71	7.5	
497	SI-25(No61)	1層(下位)	石弾		安山岩	2.35	1.10	1.90	7.9	風化顕著
858	SI-25(No10)	2層	磨石			4.5	3.7	3.43	95	
859	SI-25(No46)	3層(直上)	磨石			7.28	6.62	5.3	400	
538	SI-26(No49)	2層(中位)	砥石		砂質頁岩	※5.30	※2.85	1.40	20.9	
539	SI-26	上層一括	石包丁	Ⅱ	粘板岩	※3.20	※3.55	0.60	11.6	
540	SI-26(No13)	3層密着	磨製石鏃		結晶片岩	※2.80	1.50	0.25	1.25	
860	SI-26(No45)	1層	台石			13.9	11.7	9.1	2.165kg	
572	SI-27(No21)	上層	磨製石鏃	Ⅱc	粘板岩(古世代)	3.87	1.35	0.30	2.1	完形品
573	SI-27(No19)	3層(上位)	磨製石鏃	Ⅱb	結晶片岩	4.10	1.75	0.40	3.6	完形品
575	SI-27(No3)	6層(最下層)	磨製石鏃	Ⅰa	(凝灰質)粘板岩	(6.55)	2.05	0.45	7.0	ほぼ完形品
576	SI-27(No27)	5層下位(密着)	石包丁	Ⅱ	粘板岩	※3.38	※3.80	※0.32	4.6	
577	SI-27 B区	上層	石包丁		凝灰岩(古世代)	※3.51	※2.35	※0.51	4.0	
578	SI-27	3層	台石		安山岩	51.2	36.0	14.3	40.5kg	
861	SI-27(No50)	3層(上位)	磨石			11.5	10.17	5.15	825	
863	SI-27(No47)	6層(中位)	磨石			11.78	10.15	8.95	1.415kg	
864	SI-27(No33)	5層(下位直上)	台石			10.85	9.28	6.4	685	

第7表 下山西遺跡出土石製品一覧（その5）

※印は残存表

遺物番号	出土遺構	出土層位	器種	分類	石材	法量 長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	備考
596	SI-28(No113)	2 層	磨製石鏃	Ⅰb	珪質粘板岩	2.60	1.25	0.25	1.2	完形品
597	SI-28(No43)	3 層	磨製石鏃	Ⅰc	粘板岩	※1.60	1.25	0.20	0.75	
598	SI-28(No125)	直 上	磨製石鏃	Ⅱc	結晶片岩	4.63	1.45	0.30	2.6	完形品
599	SI-28(No89)接(No105)合	1 層 3 層	石包丁	Ⅱ	輝緑凝灰岩	※5.65	2.90	(0.65)	11.0	
600	SI-28(No73)	1 層	石包丁	Ⅱ	粘板岩	※3.71	2.90	(0.70)	9.1	砥石に転用
601	SI-28(No131)	直 上	石包丁	Ⅲ	結晶片岩	※10.30	5.50	(0.80)	58.3	
602	SI-28(No124)	直上(密着)	石包丁	Ⅱ	粘板岩	※8.00	※3.60	(0.90)	34.1	
603	SI-28(No84)	2 層	紡錘車		緑色結晶片岩	※4.40	※2.55	0.42	5.9	
604	SI-28 C区北	3 層	砥 石		凝灰岩	4.10	2.90	1.12	11.0	
605	SI-28(No141)	3 層	砥 石		〃	※8.68	※3.65	※2.10	89.65	
606	SI-28(No7)	2 層	砥 石		〃	4.40	2.00	1.00	15.1	
										実測図なし
										〃
626	SI-29(No18)	5層(下位)密着	磨製石鏃	Ⅰb	頁 岩	2.80	1.38	0.25	0.9	完形品
627	SI-29(No44)	5層(下位)直上	磨製石鏃	Ⅰb	〃	3.70	1.70	0.45	3.0	〃
628	SI-29(No6)	5層(下位)密着	磨製石鏃		黒色片岩or千枚岩	※3.20	2.08	0.40	3.6	
629	SI-29(No60)	5層(中位)	磨製石鏃	Ⅰb	頁 岩	※4.52	※1.60	※0.38	2.4	
630	SI-29(No39)	5層(下位)密着	石包丁	Ⅱ	粘板岩	※6.45	3.00	0.70	19.6	
										実測図なし
										〃
653	SI-30(No18)	3層(下位)床直	磨製石鏃		粘板岩	※4.10	1.40	0.42	3.9	
654	SI-30(No26)	3層(中位)直上	石包丁	Ⅰ	黒色結晶片岩	※4.00	※2.70	※0.41	7.1	
862	SI-32(No15)		磨 石							実測図なし
705	SI-34(No43)	下 層	磨製石鏃	Ⅰc	凝灰岩(白亜紀)	※2.80	1.38	0.38	1.6	
706	SI-34(No71)	下 層	石包丁	Ⅰ	粘板岩	※4.00	※3.49	(0.50)	12.0	
707	SI-34(No73)	下 層	石包丁		結晶片岩	※4.55	※2.75	※0.59	8.4	
708	SI-34	下 層	砥 石		凝灰岩	※6.15	4.98	3.50	118.0	
709	SI-34	下 層	砥 石		砂 岩	7.50	5.80	1.35	83.8	
867	SI-34(No79)	下 層	磨 石			※ 7.6	11.02	8.9	755	
750	SD-04(No8)	溝付近	石包丁	Ⅰ	粘板岩	※6.68	(5.30)	0.70	31.4	
754	SD-04(No7)		台 石		安山岩	38.24	29.1	9.4	13.35kg	

第7表　下山西遺跡出土石製品一覧（その6）

※印は残存表

遺物番号	出土遺構	出土層位	器種	分類	石材	法量 長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	備考
865	SD-04(No3)	1層	磨石			11.3	8.1	8.2	1.145kg	
751	SD-07(No66)	3層(下位)	砥石		角閃石安山岩	※7.25	※4.81	※3.40	95.7	
752	SD-07	3層(中位)	砥石		凝灰岩	※4.80	※3.65	※0.68	14.0	
866	SD-07(No44)	3層(上位)	磨石			10.1	8.6	7.6	1.035kg	
868	SD-07(No5)	3層(上位)	磨石			7.05	8.9	8.6	700	
869	SD-07(No45)	3層(下位)	台石			22.95	13.8	7.65	3.5 kg	
										実測図なし
										〃
19	試掘トレンチ内出土 14T		石包丁	Ⅱ	粘板岩	※2.80	※2.95	0.50	4.8	
20	試掘トレンチ内出土 13T	上層	砥石		凝灰岩	3.65	2.50	1.40	22.35	
21	試掘トレンチ内出土 拡張	上面	砥石		頁岩	4.35	3.25	2.35	33.55	
	No10T		打製石鏃		チャート	※2.40	※1.79	0.45	0.9	
	13T				角閃石安山岩				14.95	
794	②-ⓓ(No30)	3層	紡垂車		結晶片岩	4.90	4.80	0.60	21.7	
795	②-ⓓ(No16)	1層	石弾		角閃石輝石安山岩	4.20	3.65	2.50	43.2	
796	②-ⓓ	1層	砥石		凝灰岩	3.40	2.48	0.75	5.5	
870	②-ⓓ(No112)	2層	磨石			10.18	8.3	4.23	500	
	②-ⓓ	A区上層			輝石安山岩				41.0	実測図なし
82	Ⅲ－C・D区西側地区		台石		安山岩	48.1	42.26	13.0	35.0kg	
	Ⅲ－C・D区	表採	磨石		凝灰岩				19.2	実測図なし
812	3－b区内		台石		安山岩	31.8	42.0	7.2	16.75kg	
813	Ⅳ・Ⅴ～C－E区		台石		安山岩	44.3	35.22	9.96	22.3kg	
814	下山西B		砥石		結晶片岩	4.5	2.9	0.70	20.0	
815	表採				凝灰岩	8.0	5.4	2.40	100.0	
816	Ⅳ・Ⅴ～C－E区	全区一括	砥石		角閃石安山岩	4.43	3.20	2.40	39.7	
	〃		台石			36.46	31.20	16.00	23.4kg	実測図なし
760	③－ⓓ区 pit 93		砥石		結晶片岩	5.80	3.60	1.60	58.1	

第4節　下山西遺跡出土の青銅製品及び玉類について

本遺跡出土の特殊な遺物類として小型仿製鏡・銅鏃の青銅製品と石製・ガラス製の玉類をあげることができる。

(1)　青銅製品について

熊本県下における弥生時代の青銅製品の出土は昭和61年度現在39遺跡（うち所蔵5箇所含む）59点にも及んでいる。形態の種別においては鏡を始めとして剣・矛・戈・鏃そして最近では舶載製の鉇・飾金具も確認されている。県内における青銅製品の分布は北部九州の影響の強い県北地区を中心として，大河川の流域に集中するという傾向が見られる。

本遺跡も基本的には白川流域の上流域地域として取らえることが可能であり，河川流域には11遺跡15点があげられる。弥生時代に限ってみると，阿蘇地区（南郷谷・小国地区を含めて）では本遺跡発見前までに小国町下城神社所蔵の銅戈(4)，同町両神社所蔵の銅矛(1)，南小国町天満宮神社所蔵の銅戈(1)，阿蘇町乙姫の鏡山下遺跡出土の銅戈(1)が確認されていたのみで，他地区に比べ出土の絶対数が少なかった。今回下山西遺跡から青銅鏡・銅鏃の発見により，他地域と非常に類似した出土の様相を知ることができた。

青銅鏡　熊本県内における青銅鏡の出土例は第8表に示す通り本例を含め18例を数えることができる。その内訳は舶載鏡5例，仿製鏡が13例となる。基本的には県北地区に分布し，白川，菊池川の流域部に集中する傾向が見られる。以下，青銅鏡の出土の様相を整理してみると，次の3点に集約することができよう。形状的には舶載鏡はすべて破片であり，所謂破鏡と見ることができる。一方仿製鏡は1例を除き完形品である。出土状況では状態の判明するものの内で，竪穴住居址に廃棄された状態で出土する例が多い。青銅鏡の時期はほとんど例外なく，弥生後期後葉～終末期に相当するものである。

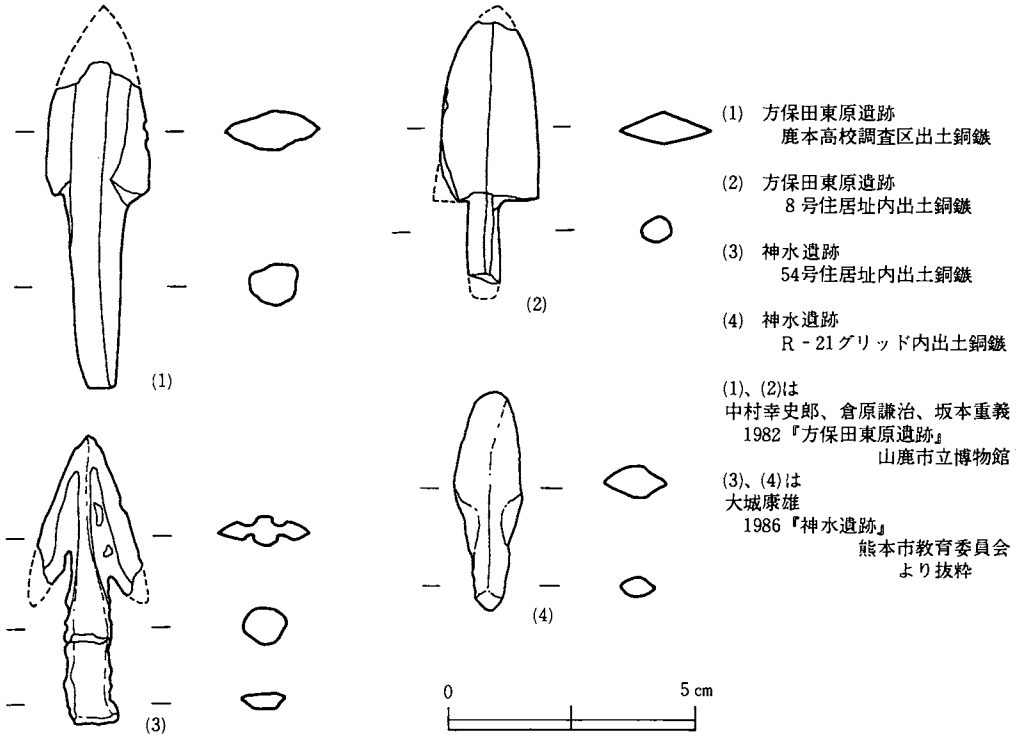
本遺跡出土の青銅鏡は第147図の実測図にも示す通り，花文数は9個で，面径は6.3cmを測る。県内出土の内行花文鏡内では最小の径であり，県内に同范鏡は見当らない。全国で出土した弥生時代小型仿製鏡148例中，面径等から最も類似するものは山口県秋根遺跡出土の内行花文鏡であるが，背文構成が異なり同范とはいいがたい。鏡は第32号住居址内からの出土であるが，出土状態から見ても流れ込みとは考え難く，意図的な遺棄あるいは投棄によるものと考えられる。隣接する第24号住居址は比較的に規模も大きく，造成もきわめて丁寧であり，鉄器の出土量もずば抜けて多いことから，鏡の所有もしくは管理に関係した個人の住居とも考えられる。その場合隣接する住居址に投棄もしくは遺棄するという現象が見られることとなる。

銅鏃　熊本県内では本遺跡例の他に2遺跡4例が知られている。第190図に両遺跡出土の資料を転載した。(1)は方保田東原遺跡鹿本高校調査区トレンチ内出土資料である。先端部は欠損するが，比較的保存状態は良く器面に青銅のなめらかさを残している。茎は菱形で先端部には僅かに鏑を残している。(2)は方保田東原遺跡8号住居址内出土例である。(1)に比べ鏃幅が長く，鏑を持ち茎部の菱形の断面形はシャープである。(3)は神水遺跡54号住居址内出土例である。有茎両翼鏃で鏃身に樋がついた特異な形状をなしており，現在の所舶載・国産の別は判明していない。(4)は神水遺跡R－21グリッド出土例である。有茎鏃であり，身の断面は菱形に近い形状を成しているが，やや鋭利さに欠ける。

以上，県内の出土例を見てきたが，下山西遺跡出土銅鏃と形態的に近似するものは見あたらない。ただ鏃身部に鏑が通り，肩部の形状等から(1)の方保田東原出土例に類似するとも考えられる。しかしながら本例は小破片であり，しかも断面形が不整形であることからして他の青銅製品の転用である可能性も強く，現段階では不明な箇所も多い。今後類例資料の増加をまちたい。

(2)　玉類について

本遺跡からはガラス製小玉2，碧玉製管玉1，硬玉製勾玉1，ガラス製勾玉1が出土してい



第190図　熊本県内出土銅鏃実測図

る。これらの資料は1例を除き全て住居址内からの出土であり，特殊な埋納遺構等は伴なわない。このような状態が本遺跡出土玉類の性格の一端を現わすものと考えられる。本節では勾玉2例を取り上げることとし，類例資料との検討を行なってみたい。ただし，熊本県内においては明らかに弥生時代の勾玉と断定できる資料はなく，全国的に見ても146例が確認されているのみである。

石製勾玉　30号住居址内出土の硬玉製定形式勾玉である。全長3.3cmを測り，比較的大型で表面には第142図実測図中に示す通り14本にも及ぶ条線が刻まれている。このように多数の条線が施される例は少なく，定形式勾玉の中では香川県大井遺跡出土の6条の刻線を有する例とともに特異な資料と言えよう。しかも2条を1単位として施文する技法は他に例は見られない。呪術的な何らかの要素を強く示すものとも考えられる。なおこの資料は刻線が貧弱で浅く，頭部穿孔部に外縁からの刻線が達していないため，ここでは森貞次郎氏分類の定形式勾玉としてあつかうこととした。

ガラス製勾玉　14号住居址出土のガラス製勾玉である。この資料は付論の分析に記されているように，舶載のガラスを素材とした製品で，出土数は全国で6遺跡11例を知られるのみである。全長2.3cmを測り，小型に属し，しかも頭部には表裏とも1条の丁字頭の刻みを有している。類似資料としては福岡県須玖岡本遺跡甕棺出土例があげられるが，須玖資料は全長5.4cmと大型で，丁字の施文位置も頭部下側に三条施すなどやや様相が異なる。須玖資料は，刻線を鋳造後施工したものととらえており，下山西資料も同様の施工順序であったと考えられる。

規格的には長崎県原の辻遺跡出土例と数値が同一ではあるが，原の辻例が巻上げ法により製作されていると考えられていることから，この点で異なる。現在までの所ガラス鋳型を含め同范資料は確認されていない。なお丁字頭勾玉には小型のものはないと考えられていたが兵庫県田能遺跡出土の硬玉製資料とともに最小の例となる。

また，最近では弥生時代のガラス製品内に含まれる「気泡の残存」に着目して，二種類のガラス成形技術をたどる研究がなされているが，本勾玉の資料は風化が激しく，気泡の観察が不可能である。今後専門家による肉眼観察以外の方法での検討を待ちたい。

参考文献

1．伊藤　照雄・山内　紀嗣編　1977『秋根遺跡』下関市教育委員会
2．緒方　　勉　1986『神水遺跡』(熊本県文化財調査報告第82集) 熊本県教育委員会
3．大城　康雄・柿内　順也・鶴島　俊彦　1986『神水遺跡発掘調査報告書』熊本市教育委員会
4．木下　佳子　1986「ガラスの技術」(『弥生文化の研究6　道具と技術Ⅱ』)
5．隈　　昭志　1982「熊本県下の弥生時代鑑鏡」(『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』)
6．高倉　洋彰　1972「弥生時代小形仿製鏡」(考古学雑誌　58巻3号)
7．高倉　洋彰　1981『弥生時代社会の研究』
8．中村幸史郎・倉原　謙治・坂本　重義　1982『方保田東原遺跡』(山鹿市立博物館調査報告書2)
9．高倉　洋彰　1985『弥生時代小型仿製鏡について(承前)』(考古学雑誌　70巻3号)

10．高谷　和生　1986「下山西遺跡・弥生時代の青銅器とその共伴関係」(『埋蔵文化財研究会第20回研究集会資料』)
11．肥後考古学会編　1983「肥後古鏡聚英」(『肥後考古第3号』)
12．藤田和裕他　1978「原の辻遺跡」(長崎県文化財調査報告書第31集) 長崎県教育委員会
13．森　貞次郎　1980「弥生勾玉考」(『鏡山猛先生古稀記念古文化論攷』)
14．山崎　一雄　1977「飯塚市立岩および春日市須玖岡本関係試料の化学分析」『立岩遺蹟』
15．山崎　一雄　1986「ガラスの材料」(『弥生文化の研究6　道具と技術Ⅱ』)

第8表　熊本県内出土青銅鏡一覧

番号	遺跡名	出土地名	鏡式	面径	背文構成	
1	戸坂遺跡(I)	熊本市戸坂町西原ノ北原	内行花文鏡	復元15cm	A－B－破損	
2	〃 (II)	〃	内行花文鏡			
3	古閑原遺跡	菊池郡泗水町吉富古閑原	内行花文鏡	復元 14.6cm	A－B－破損	
4	西弥護免遺跡	菊池郡大津町西弥護免	内行花文鏡 II b	8.6cm	A――B－C(6)――E	清切
5	石原亀の甲遺跡(I)	熊本市石原町亀の甲	内行花文鏡 II a	7.5cm	A－B－C(8)――E	
6	〃 (II)	〃	内行花文鏡 II a	約 7.5cm	A－B－C(8)――E	
7	方保田東原遺跡	山鹿市方保田東原	内行花文鏡 II a	7.5cm	A――B－C(9)――E	
8	徳王遺跡	鞠託郡北部町徳王字鶴畑424	内行花文鏡 II a	7.7cm	A――B－C(9)－D――E	
9	古閑白石遺跡(I)	山鹿市古閑白石 (従来の方保田白石遺跡)	内行花文鏡 II a	9.2cm	A――B－C(10)－D――E	
10	〃 (II)	山鹿市古閑白石	内行花文鏡	復元不可	小片	
11	下山西遺跡	阿蘇郡阿蘇町乙姫字下山西	内行花文鏡 II a	6.3cm	A――B－C(9)－D――E	
12	諏訪原遺跡	玉名郡菊水町江田字諏訪原	八乳鏡	約 9.0cm	A－円圏－D－破損	
13	木瀬遺跡	菊池郡合志町上床木瀬	S字文鏡	4.9cm	A－円圏－D――E	
14	(伝菊池・阿蘇郡)	菊池郡・阿蘇郡	重圏文鏡	5.83cm	蒲鉾縁－B－無文－B――E	
15	(大道小学校付近)	山鹿市方保田	方格規矩鏡	17.0cm	A－複波鋸歯文帯－B－銘文帯－動物文・乳文	
16	枯木原遺跡	上益城郡矢部町下名連 名枯木原	方格規矩鏡	復元 14.5cm	A－複波鋸歯文帯－破損	
17	轟貝塚	宇土市宮庄町字須崎	鏡式不明 (舶載品)	復元不可	A――B――破損	
18	西一丁田遺跡	阿蘇郡久木野村久石字 西一丁田	方格規矩鏡	復元不可	破損――動物文――破損	

この表は｛高倉洋彰　1985「弥生時代小形仿製鏡について(承前)」(考古学雑誌70－
　　肥後考古学会　1983『肥後考古3号肥後古鏡聚英』
を参照として作製した。なお、背文構成については高倉氏の分類表記に順じ

出土状況	保管者・所蔵者	註・文献	備考
住居址	熊本市教委	乙益 1969 (1)	1966発見 (昭和41年)
	熊本市教委	大城 1986 (2)	
住居址	古閑国春	隈 1981(3) 隈 1982(4)	1970発見 (昭和45年)
と住居址の り合い部分	西弥護免調査団	瀬丸, 黒田 1980(5)	1979
採集	熊本県教委	高木, 光沢 1979(6) 布目 1982(7)	1976
〃	〃	〃	〃
土器溜め	山鹿市立博物館	中村他 1982(8)	1982
住居址	上野辰男	富田 1979(9)	1960
箱式石棺墓	鹿本高校	隈 1982(4)	1968
採集	古財国春	隈 1982(4)	1968
住居址	熊本県教委	高谷 1987 (本報告)	1983
住居址	熊本県教委	高倉 1972(10)	1969
住居址	熊本大学	〃 〃 〃 高倉 1981(11)	1968
不明	飯田小春	野田 1983(12)	不明
不明	山鹿市立博物館	隈 1983(14)	1964以前
不明	—	三島・島津1983(15)	不明
不明	宇土高校	高木 1983(16)	不明
住居址	熊本県教委	中原・島津1983(13)	1982

3)

。

(1) 乙益重隆，1969年「戸坂町北原出土の内行花文鏡」『昭和42年度，熊本市西山地区文化財調査報告書』43頁，熊本市教育委員会

(2) 大城康雄，1986年『戸城遺跡発掘調査報告書』熊本市教育委員会

(3) 隈　昭志，1981年「原始・古代」『植木町史』植木町教育委員会

(4) 隈　昭志，1982年「熊本県下の弥生時代鑑鏡」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』同刊行会

(5) 瀬丸敬二・黒田裕司，1980年『西弥護免遺跡調査概報』西弥護免遺跡調査団

(6) 高木正文・光沢徳行，1979年「熊本県石原亀甲遺跡の小形仿製鏡」『九州考古学』54号，九州考古学会

(7) 布目順郎，1982年「石原亀甲，徳王両遺跡出土の小形仿製鏡の鈕孔内にあった紐の材質について」『古代学研究』第97号，古代学研究会

(8) 中村幸史郎・倉原謙治・坂本重義，1982年『方保田東原遺跡』（山鹿市立博物館調査報告書２），山鹿市立博物館

(9) 富田紘一，1979年「原始・古代」『北部町史』北部町

(10) 高倉洋彰，1972年「弥生時代小形仿製鏡について」『考古学雑誌』第58巻第３号，日本考古学会

(11) 高倉洋彰，1981年「Ｓ字状文仿製鏡の成立過程」『九州歴史資料館研究論集』７，九州歴史資料館

(12) 野田拓治，1983年「重圏文鏡」『肥後古鏡聚英』（解説，肥後考古３），肥後考古学会

(13) 中原幸博・島津義昭，1987年「西一丁田遺跡」『肥後考古学会第188回例会発表資料』，肥後考古学会

(14) 隈　昭志，1983年「方格規矩鏡」『肥後古鏡聚英』（解説，肥後考古３），肥後考古学会

(15) 三島　格・島津義昭，1983年「方格規矩鏡」『肥後古鏡聚英』（解説，肥後考古３），肥後考古学会

(16) 高木恭二，1983年「方格規矩鏡」『肥後古鏡聚英』（解説，肥後考古３），肥後考古学会

第５節　住居址の構造とその変遷について

本調査地区は調査に至る経過にも記してある様に遺跡の周辺部では既に工事が進んでいた為本報告記載の通り，残存した中核部のみの報告である。このⅣ・Ⅴ－Ｃ～Ｅ区内からは竪穴住居址34軒が確認された。複雑に錯綜し，重復した状態ではあったが，住居址の構造及びその変遷については資料としてまとめ得ることができた。ここでは阿蘇地方における弥生時代後期～終末時期にかけての代表例としての下山西遺跡の様子について触れてみたい。

(1)　竪穴住居址について

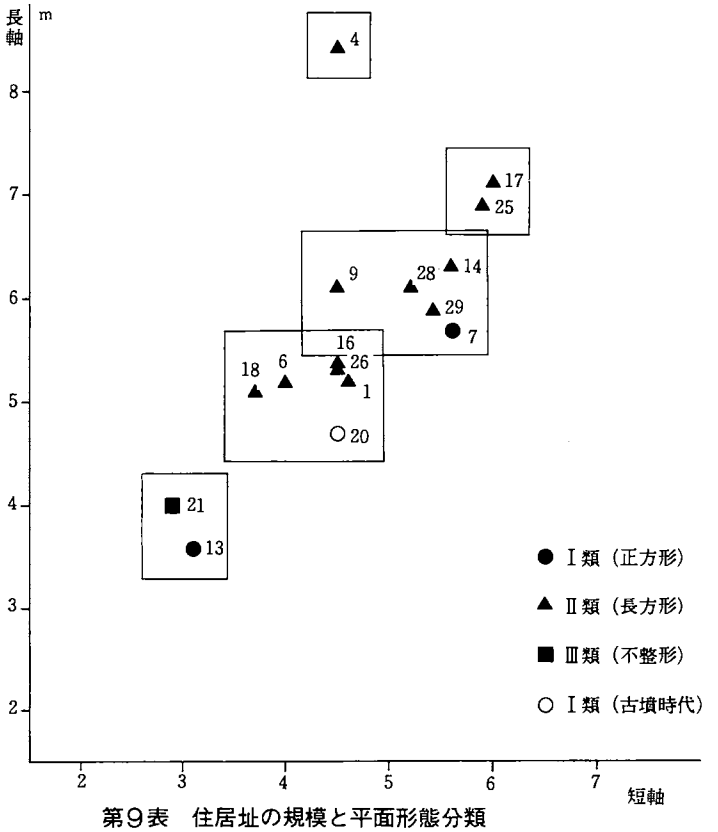
Ⅲ～Ⅴ－Ｃ～Ｅ区内からは確認されただけで34軒に及ぶ住居址が検出された。これらはいずれも竪穴住居であり，高床式の倉庫的な施設は確認されていない。概要は第13表中にまとめて示す通りであるが，各竪穴住居址（以下竪穴住居址を住居址と略して呼称する。）には施設として，共通する要素もみられる。それは時間的･空間的な拡がりの中での普遍的な要素として捉らえることが可能な要素も多く，ここでは項目別にまとめることからこの問題にも触れてみたい。

平面形態

検出された住居址は，平面形態において方形を基調とするものと，特異な形状をなす不整形のものに大別される。さらに方形基調のものは長軸と短軸との比率から２類に分けることができる。（第９表参照）

Ⅰ類　方形を基調とするがほぼ正方形に近い形態である。

Ⅱ類　同じく方形を基調とするが，一

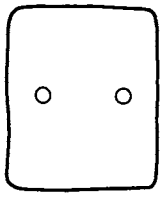
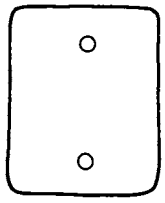
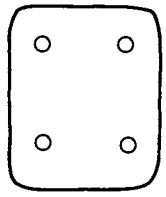
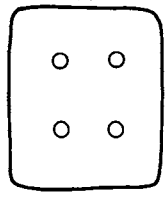
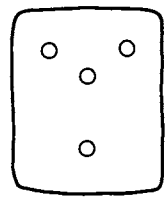
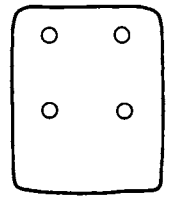
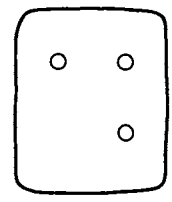


第９表　住居址の規模と平面形態分類

方向の長軸が延び，全体として長方形となる形態である。

Ⅲ類　特異な形状であり，不整形となる。

上述の分類によれば，34軒内の内訳は，Ⅰ類に該当するものが6軒，Ⅱ類が18軒，Ⅲ類が2軒となる。比率としては各々Ⅰ類23%，Ⅱ類69%，Ⅲ類8%であり，長方形プランが全体の約7割を占めることとなる。しかしながら必ずしもここで記す長軸・短軸が厳密に決定しうるものではなく，長・短軸が明瞭でなく，形態的には多少歪んだ形状の住居址も存在する。さらに各類別における形態差は住居址の規模に対して相関的な関係は現在確認されている住居址内では見とめられない。第9表は各住居址を平面形態別に類別し，長・短軸の長さを基準として，傾向を求めたものである。この表中に見られる如くⅠ類（正方形平面プラン）においては，小型～大型規模のものまで，各種混在しており，他類であっても各グループ内で共存しうる。さ

A　類 （2本主柱穴）	B　類 （4本主柱穴）	C　類 （3本主柱穴）
A－1  A－2 	B－1  B－2  B－3  B－4 	C－1 
A－1　21号住 22号住 A－2　1号住 4号住 13号住 25号住 27号住 28号住 29号住 30号住	B－1　10号住？ 20号住 24号住 26号住 30号住 31号住？ B－2　7号住 8号住 11号住 15号住 16号住 17号住 18号住 23号住 B－3　9号住 B－4　14号住 B　19号住 33号住	C－1　6号住

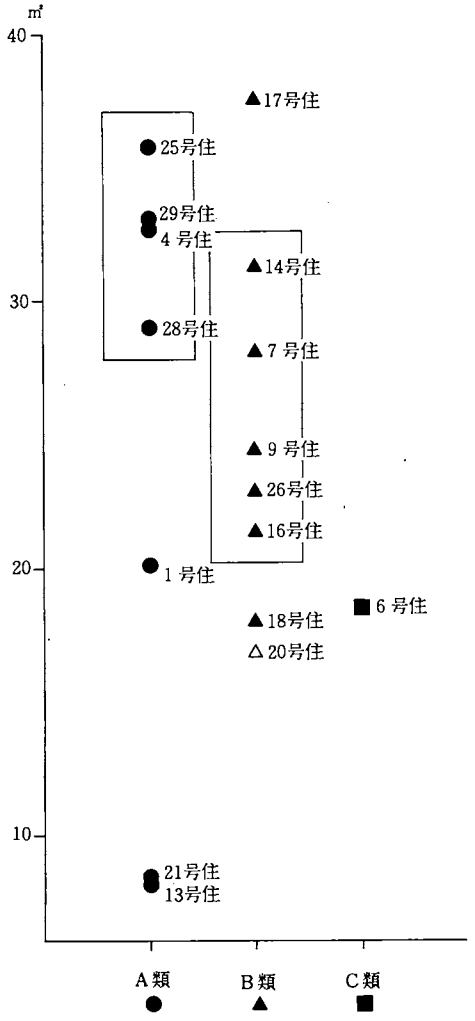
第10表　住居址の主柱穴数と配置関係

らに本遺跡においては平面形態の類別をこえて平面の規模でグルーピングが可能と考えられる。それは13号，21号住居址の小型グループ，17号，25号住居址の大型グループ，4号住居址の長大型グループそしてその他の住居址が含まれる中型グループである。本遺跡における住居址の規模は4.5～6.5m内の方形規格のものが標準となりうるものと思われ，それ以外の極大規模の住居址は特殊な用途の異なった性格のものとも考えられる。

主柱穴の数と配置

本遺跡検出の住居址34軒を主柱穴の数と配置関係とで分類すれば第10表のとおり2～4本を基調とする主柱穴の構成である。34軒の住居址内で切り合いその他で未検出及び未確認のものが5軒見られるが，その他大部分については上述の類別が可能であった。

A類は2本の主柱穴を有するグループであり，柱の配置関係から2類に細分した。



第11表　住居址内柱穴数と床面積

A－1類　主柱穴を2本有しており，長方形プランの長軸に対し2本の主柱穴は垂直方向の配置となる。2軒，5.9%の比率となる。

A－2類　主柱穴が2本であり，長軸に対して主柱穴は並行方向の配置となる。8軒，23.5%である。

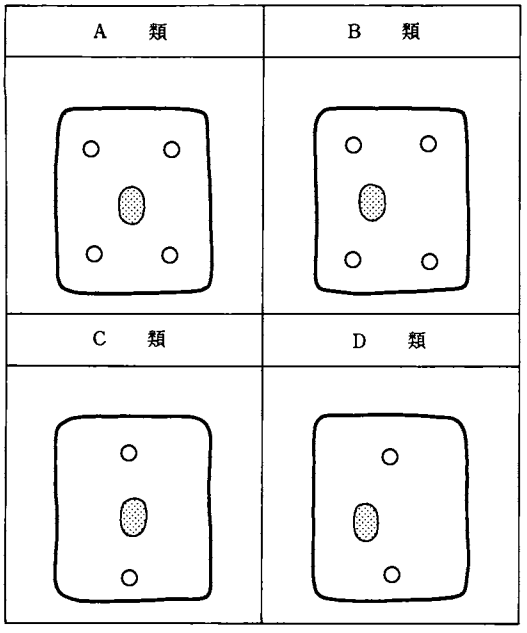
B類は4本の主柱穴を有するグループであり柱の配置関係から更に4類に細分が可能である。

B－1類　B－1類は4本の主柱穴が，隅側の四方に離れて拡がるものである。6軒，17.6%である。

B－2類　4本の主柱穴が，住居址の中央部にまとまって寄るものである。8軒，23.5%となる。

B－3類　主柱穴数は4本であるが，片側1本を2本柱に建て替えたと考えられる変則型である。1軒，2.9%である。

B－4類　主柱穴の4本が，長軸の片側に寄るもの。1軒，2.9%となる。



第191図　炉配置関係図

C類は3本の主柱穴を有するものであり，1軒のみの検出である。

C－1類　主柱穴が3本のものである。1軒，2.9%である。

（全体の比率の算出にあたっては総数34軒に対しての数値となる。）

本遺跡においては，主柱穴2本柱のA類と4本柱のB類とは2対3の割合で4本柱の住居址が多数を占める。

住居址内柱穴数と床面積

第11表内に示した規模項目内の長軸と短軸の数値については住居址上場長を記載した。一方床面積については，検出された下場長を乗算し算出した。その結果，本遺跡中最大値を示すのは17号住居址の37.5㎡，最小値を示すのは13号住居址の8.1㎡である。これにより類値上でも最大規模の住居址が最小規模のものに比べ，実に4倍強も大型であることが判明する。さらにこの傾向は第11表の住居址内柱穴数と床面積の比較表において伺い知ることができる。床面積10㎡未満の極小型の住居址は2本柱のA類内に認められる。しかしながら比較的に小型に属すると考えられる床面積20㎡内外の住居址は4本柱のB類中にその多くを占める。さらに30㎡内外の大型の住居址においてはもちろん両類中にそれらは共存するものの，2本柱のA類中にその多くを占める。そして最大規模を測る17号住居址は4本柱のB類に含まれる。A類7軒の平均床面積は23.9㎡，B類7軒のそれは26.2㎡となり，4本柱のB類の方が床面積数値がやや上まわると言えよう。しかしながら必ずしも2本主柱穴のものが所謂小型住居であり，4本主柱穴のものが大型住居であるとは速断できない。傾向及びその内容的には更に細分しうるものと思われる。

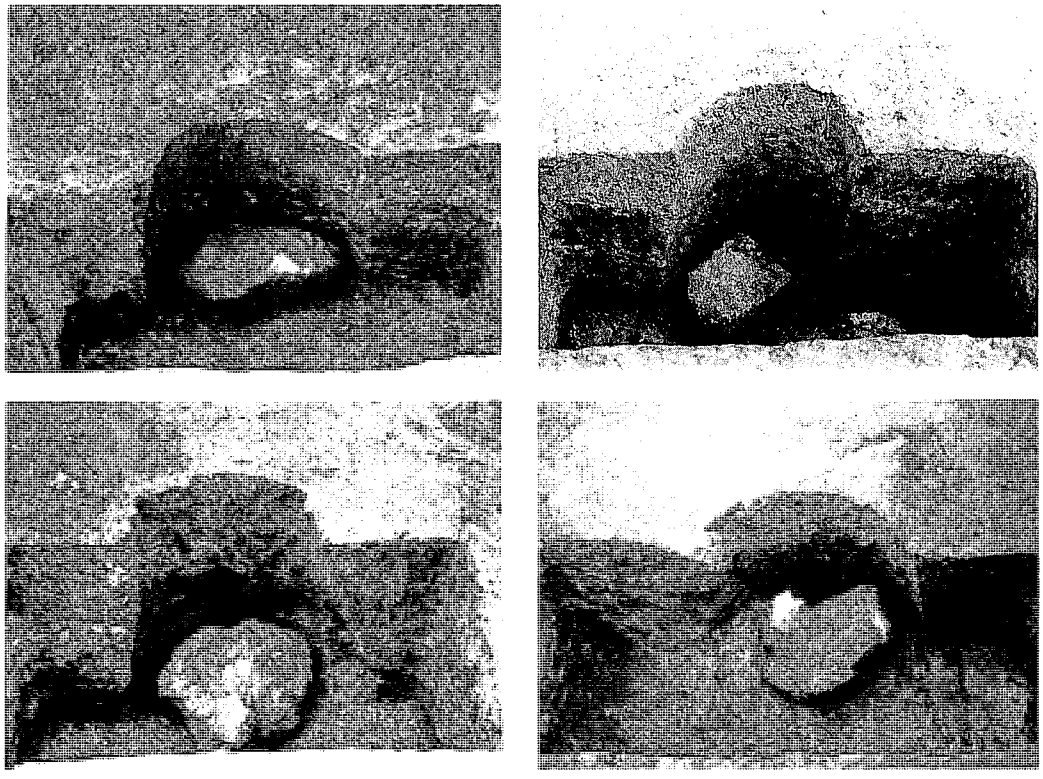
住居址内施設

本遺跡で確認された住居址内には貯蔵穴，炉跡及びその付帯設備，柱穴内台石及び盤石，ベッド状遺構，出入口柱穴等の各施設が見られる。

貯蔵穴　貯蔵穴は34軒内で9例が確認され8例は存在しなかった。これらのものは形態的に見てB類に分類が可能である。

A類　平面形は長楕円形で土壙状に浅く，素掘りの簡素なものである。

B類　平面形は長楕円形で土壙状に50～70cm掘り込み，内部に角礫を8～14個程度敷くもの。



第192図　７号住居址ピット半截状況写真

１．ピット.NO,１　　２．ピット.NO,２

３．ピット.NO,３　　４．ピット.NO,４

Ｃ類　土壙状の掘り込みはなく，Ｂ類同様の角礫を床面上に直接敷くもの。

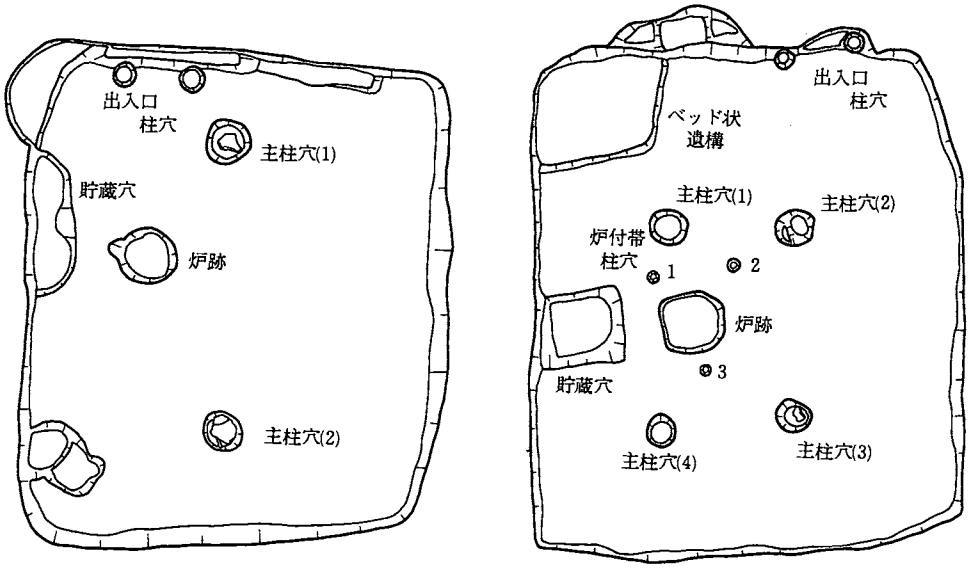
Ａ類は６号，９号，15号，25号，27号住居址の５軒，Ｂ類は17号，26号，28号住居址の３軒，Ｃ類は29号住居址の１軒である。住居址内の設置数は29号住居址を除き，いずれも１基である。貯蔵穴の位置は方位的には北側２例，西側１例，南側７例となり，圧倒的に南側方位が多い。本遺跡では主軸方位に対して南側壁側に１基，長惰円形の掘り込み型の貯蔵穴を設ける例が多く，上屋構造等との関係上普遍的な様相と考えられる。ただし本遺跡内で貯蔵穴内にほぼ完形の土器が原位置で据えられた事例は確認されていないが，ここでは名称が示すような機能までは追求できない。

炉跡　炉跡は34軒中で，24軒が確認され，炉跡なしが５軒，不明が４軒となる。確認された24軒内の炉にはいずれも多量の炭化物を層状に含んでおり形態的には２類に分類できる。

Ⅰ類　長惰円形を呈し，土壙状に深い。

Ⅱ類　長惰円形ではあるが，皿状で浅く，わずかに窪む程度である。

Ⅰ類に含まれるものは22例であり大多数の住居址はこれに属する。Ⅱ類は10号，34号住居址



第193図　住居址構造図（右　17号住居址、左　25号住居址）

の２軒である。住居址における炉の設置の有無は住居址規模，形態等とは全く関係はなく，何らかの別の要因が関係するものと考えられるが，現段階では不明である。

炉跡配置関係　住居址内における炉の設置位置は，上屋等との関係等から見て，第191図に見られる通り，２本柱，４本柱ともに２分類することができる。

Ａ類　主柱穴が４本であり，炉跡はその中央部に位置するもの。

Ｂ類　同じく主柱穴が４本であり，炉跡は中央から偏在し，壁側に寄るもの。

Ｃ類　２本の主柱穴の軸線上に乗り，主柱穴の間に位置するもの。

Ｄ類　同じく主柱穴数は２本であるが，中央から離れ，偏在するもの。

これらの分類によれば，Ａ類１軒，Ｂ類10軒，Ｃ類４軒，Ｄ類７軒となる。４本柱の住居址では炉跡位置が圧倒的に偏在するものが全時期を通じて多い。２本柱では炉跡が中央部に位置するものは遺跡Ⅰ～Ⅱ期の古手の時期に集中する傾向が見られる。

小柱穴　炉跡に付属する施設としては隣接する小柱穴があげられる。17号住居址の場合は径15cm，深さ90cm弱のほぼ同規格の小柱穴が３基，二等辺三角形状に配置される。24号住居址では炉跡に非常に接近して径30cm，深さ70cmの柱穴が炉側に向かって斜方向に配置されている。ともに状況的に見て炉とセットで考えうる施設と言えよう。

マット状炭化物層　炉跡に関連する遺物(構)として，マット状炭化物層があげられる。本遺跡では炉跡周辺部にカーボン及び一部焼土を伴う層がいくつかの住居址で見られる。本住居址内では２号，５号，６号，８号，23号，28号住居址の計６軒であり，他住居址に比べ相対的に長期間の使用を知る一要素とも言えよう。

ベッド状遺構　住居址内にベッド状遺構を有するものが14軒，無いものが８軒である。さら

にベッドを有する14軒の内複数のベッドを持つものが２軒あげられる。大型幅広でコーナー部まで包みこむ形状のものや，細長く帯状のものなど多様な形態であるが，概して古い時期に属する住居址にはベットを持たない傾向が見られる。なお形態による時期差は本遺跡では存在しない。

主柱穴内台石・盤石　主柱穴内における台石や盤石の出土状況は本住居址群の特徴と言えよう。遺跡の立地する地区は現在は水田ではあるが，水捌けも良い地区である。しかしながら，湧水地は周辺部いたるところに点在しており，やや脆弱な地区も見うけられる。住居址の上屋を保つために柱を保持・固定するために台石及び盤石を用いたものと考えられる。柱穴内にこれらの石を有するものは15軒，全く無いものは11軒である。さらに有するもの15軒の中でも，主柱穴全てに持つものは７号，８号，９号，14号，19号，21号，23号，24号，25号，32号の計10軒に達する。これらの住居址では主柱穴数が２本でも４本でも同様に主柱穴内に台石及び盤石が利用されており，必ずしも主柱穴数との関係は指適できない。また平面規模の大小では概して床面積20㎡をこえる中型～大型の住居址に多く利用する傾向が伺えるが，例外では極小型の21号住居址でも台石等が検出されている。主柱穴内に台石・盤石を利用した時期はある程度限定することができ，主として遺跡Ⅱ，Ⅲ期に属するものと言えよう。

出入口小柱穴　住居址の出入口に関する柱穴が２軒で確認された。第193図の住居址構造図に示す２軒である。17号住居址では径25cmの同一規模の柱穴が２基，間隔100cmで検出され，一方の25号住居址では径35cmの柱穴が2基，間隔100cmを保って確認された。ともに柱穴は20cmと浅く，中段にステップを有している。住居址内側に位置する出入口の施設（開閉扉の支え柱の痕跡）と考えられる。

住居址の増改築については顕著な事例は見られないが，９号住居址東住柱穴の建替え例があげられる。９号住居址では第71図内の断面図中にも見られるように東側に3基の柱穴が集中し，配置されている。３基の柱穴の前後関係ではまず両側の２基の柱穴を利用した上屋を構築した後に廃棄し，新たに中央に１本の柱を建て，西側と１対としている。９号住居址では，３本柱から２本柱へ移るこの段階で何らか上屋の改築を行なった可能性が考えられる。

住居址の床の状況については，Ⅳ・Ⅴ－Ｃ～Ｅ区の北側では鉄分の集積のため状況把握が難行した。それに対し南側では鉄分の集積もなく，良好な状況で床面が検出された。その結果住居址最大面には通常観察されるような所謂踏み固めた状態での硬化面は確認されなかった。床面に何らかの敷物等を置いていたとも推定される。また住居址の重復に際しては，脆弱な箇所については固めて補強し，所謂貼り床状の痕跡が南側住居址の切り合い地区で数箇所確認された。

第12表　下山西遺跡住居址概要一覧

住居址番号	平面形態	主柱穴の数と配置	規模 長軸×短軸, 床面積 (m) (m) (㎡)	住居址内施設 貯蔵穴	炉 形態	炉 位置	マット状炭化物	柱穴内台石・盤石	ベッ
1号	Ⅱ	A－2	5.2× 4.6, 20.1	なし	Ⅰ	D	なし	なし	
2号	—	—	—	—	Ⅰ	D?	あり (1.7m×1.5m)	—	南
3号	—	—	—	—	—	—	—	—	南東
4号	Ⅱ	A－2	8.4× 4.5, 32.7	なし	Ⅰ	C	なし	なし	
5号	Ⅲ	—	—	—	Ⅰ	—	あり (1.2m×1.0m)	—	
6号	Ⅱ	C	5.2× 4.0, 18.5	A (北側, 1基)	Ⅰ	B	あり (1.1m×0.9m)	なし	西側,
7号	Ⅰ	B－2	5.7× 5.6, 28.1	なし	Ⅰ	B	なし	4本全てにあり	北
8号	Ⅰ?	B－2	—	なし	Ⅰ	B	あり (1.1m×1.0m)	4本全てにあり	
9号	Ⅱ	B－3	6.1× 4.5, 24.4	A (西側, 1基)	Ⅰ	C	なし	4本全てにあり	
10号	Ⅱ?	B－1?	—	—	Ⅱ	B?	なし	—	
11号	Ⅰ	B－2	—	—	Ⅰ	B	なし	なし	
12号	—	—	—	—	—	—	—	—	東
13号	Ⅰ?	A－2	3.6× 3.1, 8.1	なし	なし	なし	なし	なし	南側,
14号	Ⅱ	B－4	6.3× 5.6, 31.3	—	なし	なし	なし	4本全てにあり	
15号	Ⅱ	B－2	—	A (南側, 1基)	なし	なし	なし	なし	東
16号	Ⅱ	B－2	5.4× 4.5, 21.4	—	Ⅰ	B	なし	なし	西
17号	Ⅱ	B－2	7.1× 6.0, 37.5	B (南側)	Ⅰ	A	なし	4本のうち1本にあり	西
18号	Ⅱ	B－2	5.1× 3.7, 18.0	—	なし	なし	なし	4本のうち1本にあり	
19号	Ⅱ?	B	—	—	—	—	—	4本全てにあり	
20号	Ⅰ	B－1	4.7× 4.5, 16.8	なし	なし	なし	なし	なし	南
21号	Ⅲ	A－1	4.0× 2.9, 8.4	なし	なし	なし	なし	2本全てにあり	
22号	—	A－1	—	—	Ⅰ	D	なし	なし	
23号	Ⅱ?	B－2	—	なし	Ⅰ	B	あり	4本全てにあり	
24号	Ⅰ?	B－1	—	—	Ⅰ	B	なし	4本全てにあり	西
25号	Ⅱ	A－2	6.9× 5.9, 35.8	A (南側)	Ⅰ	D	なし	2本全てにあり	
26号	Ⅱ	B－1	5.3× 4.5, 22.9	B (南側)	Ⅰ	B	なし	4本のうち3本にあり	南
27号	Ⅱ	A－2	—	A (南側)	Ⅰ	C	なし	2本のうち1本あり	
28号	Ⅱ	A－2	6.1× 5.2, 29.0	B (南側)	Ⅰ	C	あり (3.6m×3.2m)	なし	西
29号	Ⅱ	A－2	5.9× 5.4, 33.1	C (南側及び北側)	Ⅰ	D	なし	なし	
30号	Ⅱ?	B－1	—	—	Ⅰ	B	なし	なし	
31号	—	B－1?	—	—	Ⅰ	D?	なし	—	
32号	—	A－2?	—	—	Ⅰ	D	なし	2本全てにあり	東
33号	—	B	—	—	—	—	—	1本にあり	
34号	—	—	—	—	Ⅱ?	—	—	確認された1本についてはなし	

ド状遺構	時　期	備　　考	主軸方位
な　し	Ⅰ期	○1号溝・1号土壙に切られる。	N－73°－W
側，1基	Ⅲ期	○3号住を切る。31号住に切られる。	N－32°－E
東側，1基	Ⅲ期	○2号・4号住に切られる。○下層に31号住検出。	－
－	Ⅱ期	○3号・5号住に切られる。	N－82°－E
－	Ⅳ期	○4号住を切る。	－
東側，計2基	Ⅲ期	単独。	N－71°－E
側，1基	Ⅳ期	単独。	N－86°－E
な　し	Ⅱ期	○14号・16号住に切られる。	－
な　し	Ⅱ期		N－79°－E
－	不明		－
－	Ⅱ期	○3号溝を切る。	N－79°－E
側，1基	不明	○18号・24号・32号住，5～7号溝に切られる。	－
北側，計2基	Ⅱ期	単独。	N－6°－W
－	Ⅲ期	○8号・15号・16号住を切る。	N－10°－W
側，1基	Ⅲ期	○14号住に切られる。	N－76°－E
側，1基	Ⅱ期	○8号を切る。14号住に切られる。	N－74°－E
側，1基	Ⅰ期	○20号住に切られる○18号住に切られる。	N－58°－E
な　し	Ⅲ期	○17号・24号住を切る。	N－51°－E
－	不明	不明。	N－78°－E
側，1基	古墳時代7世紀	○17号・18号・24号住，2号土壙を切る。	N－28°－E
な　し	Ⅳ期	○22号住，4号溝を切る。	N－44°－E
－	不明	○21号・23号住，3号土壙に切られる。	N－77°－E
な　し	Ⅲ期	○3号・4号土壙に切られる。○22号・25号住を切る。	N－89°－W
側，1基	Ⅳ期	○32号住に切られる。○18号・29号・30号住を切る。	N－71°－E
な　し	Ⅱ期	○26号・28号・29号住を切る。○23号住に切られる。	N－82°－E
側，1基	Ⅱ～Ⅲ期	○25号住に切られる。○28号住を切る。	N－44°－E
－	Ⅰ期	単独。	N－83°－E
側，1基	Ⅰ期	○26号・25号住に切られる。○29号・30号住を切る。	N－77°－E
な　し	Ⅰ期	○25号・28号・30号住に切られる。	N－58°－E
－	Ⅰ期	○28号住に切られる。○29号住を切る。	N－40°－E
－	Ⅳ期	○2号・3号住を切る。	－
側，1基	Ⅳ期	○24号住を切る。○12号住・5～7号溝を切る。	N－39°－E
－	不明	○27号・28号住，7号溝に切られる。	N－45°－E
－	Ⅱ期	○5～7号溝を切る。	－

(2) 住居址の変遷について

本遺跡において確認された遺構どおしの切り合い関係及び遺物の様相等から判断して第12表に見られるような遺跡時期の細区分が可能となった。大別して弥生時代と古墳時代の二時期が考えられ各々弥生時代ではⅠ～Ⅲ期に，古墳時代ではⅣ・Ⅴの時期に細分できる。なお表中時期不明としたものは基本的には弥生時代に属するけれども細区分時期が不明のものである。

表中左上図はⅣ・Ⅴ－C～E区内における遺構の切り合い関係を示したものである。新旧関係は図中矢印に示す「新←旧」の表示の通りである。切り合い関係等に不明な箇所もあるが，調査区南側においては住居址どうしの切り合いが5期にわたって確認することができた。即ちこの住居址群の新旧関係は次の通りで，29号住が最も古く→30号住→28号住→26号住→25号住居址の順番で建て替えられた事が判明した。

Ⅰ期は弥生時代後期前葉に相当する時期である。調査区では中央部及び南側に集中する傾向が見られる。住居址では27号・28号・29号・30号の南側地区の住居址群とⅢ－C・D区の1号住居址・1号土壙がそれに相当する。なお1号・5～7号の溝遺構もこの時期のものと思われる。本遺跡において最も古い住居址は27号及び29号住居址であり，特に29号住居址はⅠ期の時期内で30号→28号住居址の順で短時間に建て替えが進められたものと考えられる。1号住居址は最下層の一群の土器からⅠ期に相当すると考えられるが，住居址の廃絶後は土器類の投棄の場として用いられており，Ⅱ期時期まで遺構としては継続することとなる。調査区南側の3本の溝は当初浅い不整円弧状溝がほぼ並行して2本掘られたが，急速に埋設後は浅く窪み遺物類の廃棄の場となったものと思われる。調査区中央部の17号住居址はⅠ期では最も新しい時期のものと考えられる。全住居址に対してのⅠ期の住居址の占有率は17.6%を占める。

Ⅱ期は後期中葉に相当する時期である。南側の住居址群は26号，25号住へと引き継がれ間をあけずに継続したものと思われる。17号住居址西側には隣接して11号住居址が造られる。土器様式ではほとんど同一時期と考えられるが，鉄器・石器の様相からⅡ期では最も古い時期に属するものと考えられる。

一方今まで住居址が造られていなかった調査区北側にも集中して住居址が建て替えられる。それは8号・9号・13号・16号の各住居址で，切り合い関係からでは8号住居址が最も古く，13号・9号住居址が新しいと言えよう。また北側にも長方形で大型の4号住居址がこの時期に現われる。全住居址に対してⅡ期の住居址の比率は26.5%と最も高い。

Ⅲ期は後期後葉に相当する時期である。調査区南側の一連の継続した建て替えは23号住居址へと繋がり，中央部南側には17号住居址の流れとして18号住居址が現われる。中央部北側には前時期の住居址群を継続して15号住居址とガラス製勾玉が出土した14号住居址へと移り変わる。

また調査区北側では4号住居址の後に2号・3号・6号の3基の住居址が引き続いて現われ

ており，住居址等の間隔等から見て二軒同時に建て替えられていった可能性も考えられる。全主居址に対してのⅢ期の住居址の比率は23.5%となり，Ⅱ期同様に高率を占める。

Ⅳ期は古墳時代初頭に相当する時期で，この後，古墳時代中期に一部集落が作られるものの実質的には下山西遺跡終結の時期である。調査区南側では最も大型で遺物が豊富な24号住居址，鏡が出土した32号住居址，ガラス小玉が出土した21号住居址へとつながる。また調査区北側では５号・７号・31号の各住居址が等間隔で並び弥生時代の終結を迎える。全住居址に対してⅣ期の住居址の比率は14.7%となる。

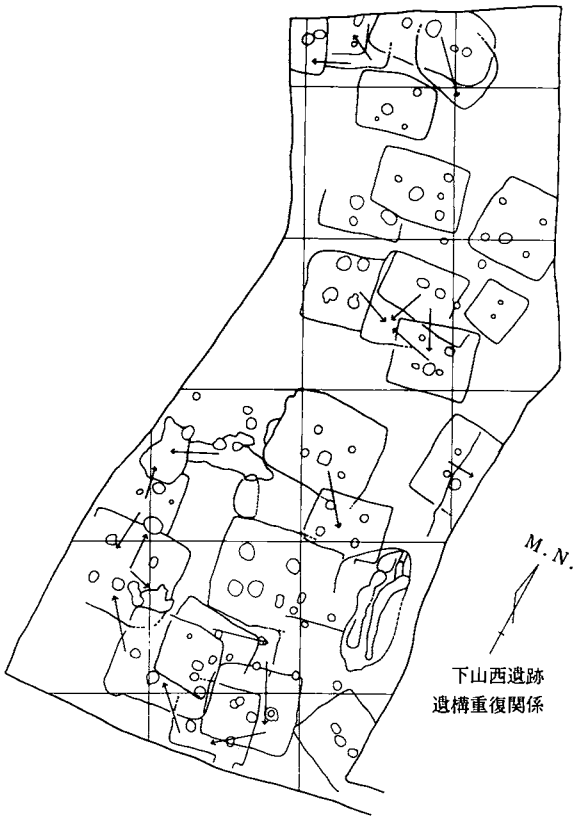
Ⅴ期は古墳時代中期の一時期である。Ⅳ期の弥生時代終了後，遺跡は暫く中断するが７世紀になり再開することとなる。中央部に20号住居址が，また周辺部に散らばる様にして１～３号柵列がならぶ。黒色埋土ピットが散在するものの，遺構の密度は薄く，集落の縁辺的様相を示しているものと考えられる。

以上下山西遺跡にむける遺構の各時期を概観してきたが，遺跡の中心は弥生時代であり，特にⅡ～Ⅲ期にかけてが，この地区では最も集落が集中していたものと考えられる。調査区内では各住居址群ごとに住居址が継続して建て替えられたものと考えられ，調査区内で常時４～６軒が展開していたものと考えられる。この様な住居址が複雑に重復する現象は弥生時代後期～終末期にかけて多く見られる現象であり，集落における個々の建物の配置が集落全体を差配する１つの意志的なものによってなされていたとも考えられる。このことはどのように住居址が重復しても尾根線に対し並行方向に建物主軸が決定されたり，炉跡の位置及び出入口施設の位置の画一化，さらには調査区中央部に住居址が入りこまない通路的空間を占有することなどから実証できるのではなかろうか。

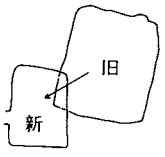
本調査区内では1,300㎡と狭い面積に約33軒にも及ぶ住居址が確認された。旧地形等による当時の１つの尾根線間での集落範囲は約30,000㎡であり，遺構の重複の様子がこの範囲内全域に続くとすれば全住居址数少なくとも300軒をこえるような大集落を形成していたものと考えられる。いずれにしても本調査区は下山西遺跡のほぼ中心部に相当する最も住居址密度の高い地区であったと考えられる。

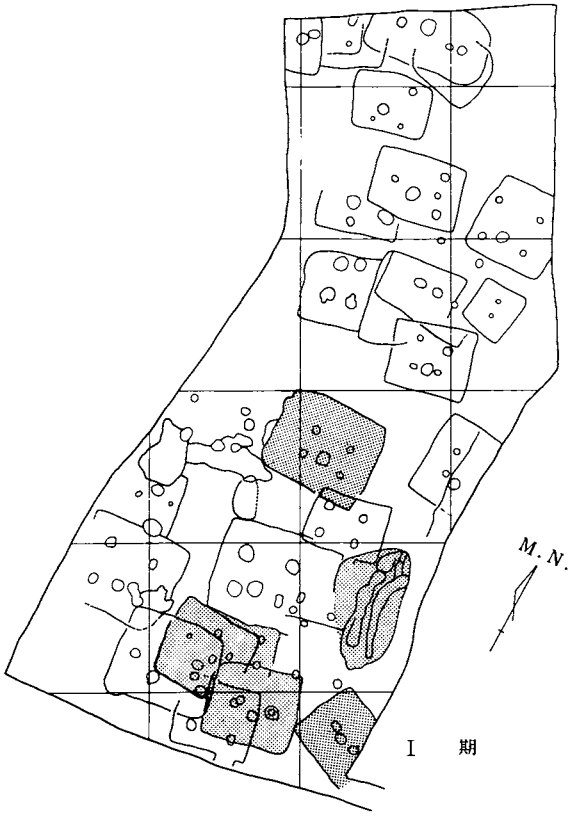
参考文献

１．後藤　宗俊　1985「菅生台地の集落跡」(『えとのす　29号　豊の考古学』)
２．清水宗昭編　1980『大野原の遺跡』大野町教育委員会
３．関　　晴彦　1977「住居址の構造」(『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』)
４．都出比呂志　「集落・生産」(『三世紀の九州と近畿』)
５．宮本長二郎　「住居と倉庫」(『弥生文化の研究　7　弥生集落』)

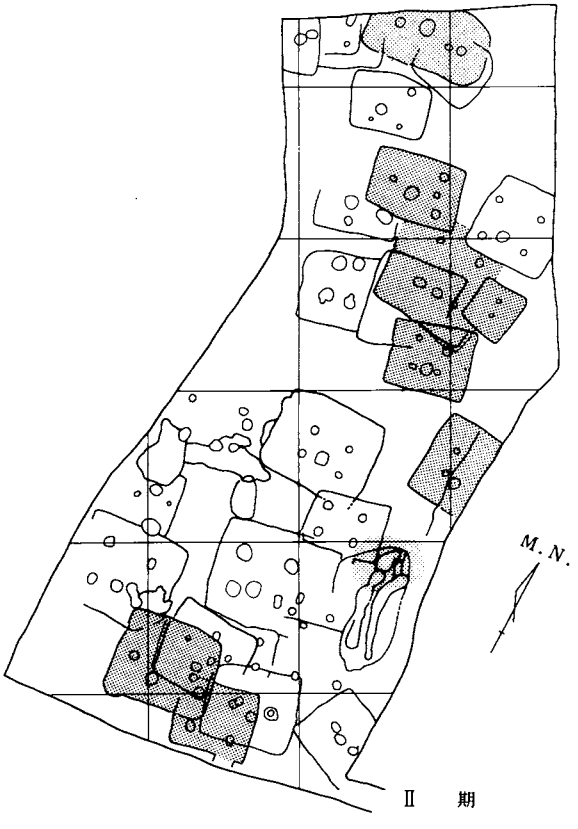


下山西遺跡
遺構重復関係





I　期



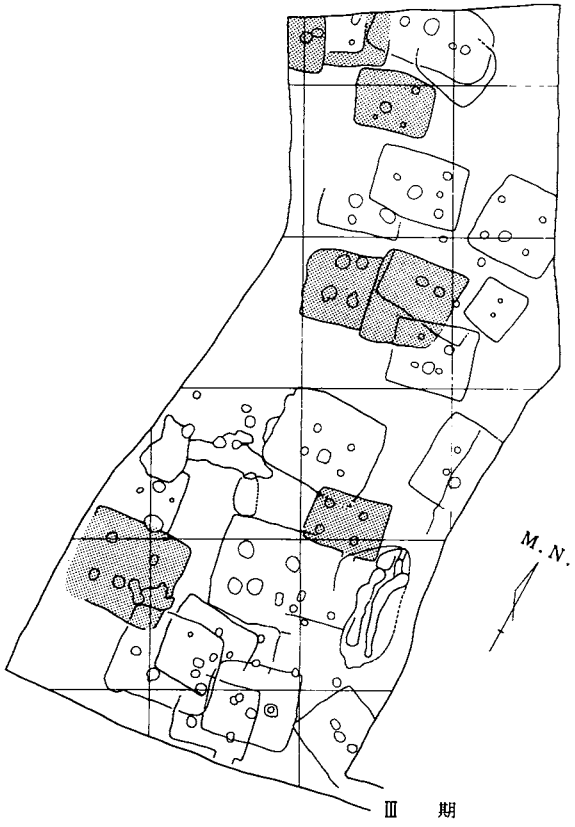
II　期

	小時	
弥生時代	後期～終末期	I
		II
古墳時代		III
不		
古墳時代	(中期)	V

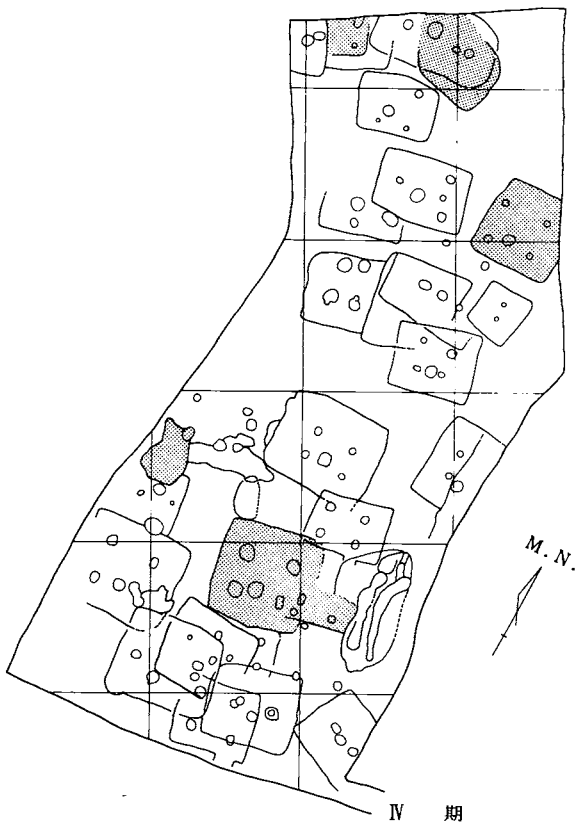
第194図　下山

期	住　　居　　址	土　　壙	溝	柵列・ピット	比　　率
	• 1 号住　　• 17号住 • 27号住　　• 30号住 • 28号住 • 29号住　　6	1 号土壙	5 ～ 7 号溝 1 号溝		17.6%
	• 4 号住　• 11号住　• 16号住　• 26号住 • 8 号住　• 25号住 • 9 号住　• 13号住　• 34号住 10				29.4%
	• 2 号住　• 14号住　• 18号住 • 3 号住　• 17号住　• 23号住 • 6 号住 • 15号住　　9	（3 号土壙？ 4 号土壙？			26.5%
	• 7 号住　　• 31号住 • 24号住 • 32号住 • 5 号住　　5		4 号溝？		14.7%
明	• 10号住　• 22号住 • 12号住 • 19号住　• 33号住 5	2 号土壙	3 号溝		
	• 21号住 1			1 ～ 3 号柵列 黒色埋土 ピット	

第13表　下山西遺跡遺構編年表



Ⅲ　期



Ⅳ　期

西遺跡住居址変遷図

第6節　遺跡の年代

下山西遺跡の調査結果については，第2章で記した通りである。遺構がどのように編年出来るかは，第3章・5節で述べた。即ち，検出した竪穴・土壙・溝はⅠ～Ⅴ期の相対編年が設定できる。

ここでは，出土土器の編年と併せて，遺跡の年代について述べ，周辺遺跡との関係について論じてみたい。遺跡出土の最古の遺物は，第175図（817～819）に図示した弥生土器である。中九州の中期～後期初頭に位置付けられる黒髪式甕の破片である。しかしこれに伴う遺構は検出することが出来なかった。遺構として最も早く出現するのは，下山西第Ⅰ期の遺構群で，下山西第Ⅰ期の土器を伴う。5節で論じたように，この期を出現期としてⅣ期まで，間断無く遺構が形成され，とくにⅡ・Ⅲ期は遺構形成のピークをなし50パーセントがこの期に属する。すなわち，下山西遺跡の最盛期とすることが出来よう。土器編年からみると，弥生後期後半～終末期といえる。古墳時代と見られる遺構は6基の竪穴と柵列があるが，下山西Ⅳ期とⅤ期の2期にわかれる。両期は連続せず，Ⅳ期はむしろ弥生時代と考えたⅢ期の延長上にある。したがって，下山西遺跡の遺構群を時間的な継続性からみるとⅠ～Ⅳ期とⅤ期の2群に分けることが出来，前者が遺跡の主体を成す事は言うまでもない。石棺の年代については，下山西Ⅲ期に伴うものと考える。

このような，弥生時代後半から始まり，終末期まで続く集落のありかたは，中九州に多く見られる集落の存在様式である。調査が実施された西弥護免遺跡（大津町）・陣内遺跡（阿蘇町）・諏訪原遺跡（菊水町）などは全てこのような遺跡の継続様式を示す。日本列島の3世紀の歴史的状況を反映していると思われるが，この問題は別個に論じねばならない。

以上を要約するならば，下山西遺跡は弥生時代後期後半の時期を中心とした集落遺跡であるということができよう。

第４章　付　論

１．下山西遺跡出土のガラス製勾玉の化学成分と鉛同位体比

山崎　一雄

２．下山西遺跡発掘出土石棺内のベンガラ(赤色顔料)分析報告

堀　一夫

３．下山西遺跡出土の弥生時代鉄器と明神山鉱石の金属学的調査

大澤　正己

４．下山西遺跡25号住居址出土木炭について

大迫　靖雄

５．阿蘇鉱山出土の木器

乙益　重隆

1．下山西遺跡出土のガラス製勾玉の化学成分と鉛同位体比

山崎一雄

下山西遺跡出土のガラス製勾玉について化学分析ならびに鉛同位体比の測定を行った結果を報告する。勾玉の形状その他については別項に記載されているから，ここでは触れない。

分析試料

送附された試料は白色のガラス風化物と緑色のガラス破片の混合物であったから，顕微鏡下でガラス破片のみを分離した。このガラス破片はきわめて微量で約0.3ミリグラムしかないため，全成分の分析を行うことが困難で，主要な成分のみを原子吸光分析，炎光分析および誘導結合プラズマを光源とする発光分光分析法によって分析した。[1)]

化学分析に用いた残りの試料は室蘭工業大学室住正世教授の研究室へ送り，含有されている鉛の同位体比の測定を依頼した。

化学分析値

化学分析に使用することができたのは僅か0.234ミリグラムであった。分析結果を表1に示したが，バリウムを含む特殊な鉛ガラスであり，須玖岡本，宇木汲田，立岩などの遺跡で出土した管玉などに成分が類似している。[2) 3)]

表1．下山西遺跡出土ガラス勾玉などの化学分析値

成分＼試料	(1) 下山西 勾玉	(2) 汲田 管玉	(3) 須玖 管玉	(4) 立岩 塞杆	(5) 璧 (長沙出土)	(6) 璧 (中国出土)
	%	%	%	%	%	%
二酸化珪素 SiO_2	-	38.9	38	37	36	36
一酸化鉛 PbO	38.0	43.5	38.5	40.8	46.1	48.5
酸化バリウム BaO	11.1	7.59	14	16	14	13
酸化アルミニウム Al_2O_3	-	0.56	0.35	0.52	0.36	0.13
酸化鉄 Fe_2O_3	-	0.30	0.29	0.14	0.13	0.07
酸化カルシウム CaO	-	2.83	1.1	0.50	1.6	0.01
酸化マグネシウム MgO	-	0.95	0.15	0.20	0.16	0.08
酸化銅 CuO	0.81	0.42	0.78	0.76	0.88	0.84
酸化ナトリウム Na_2O	3.91	4.68	3.90	2.65	1.65	1.96
酸化カリウム K_2O	0.091	0.21	0.19	0.50	0.26	0.17

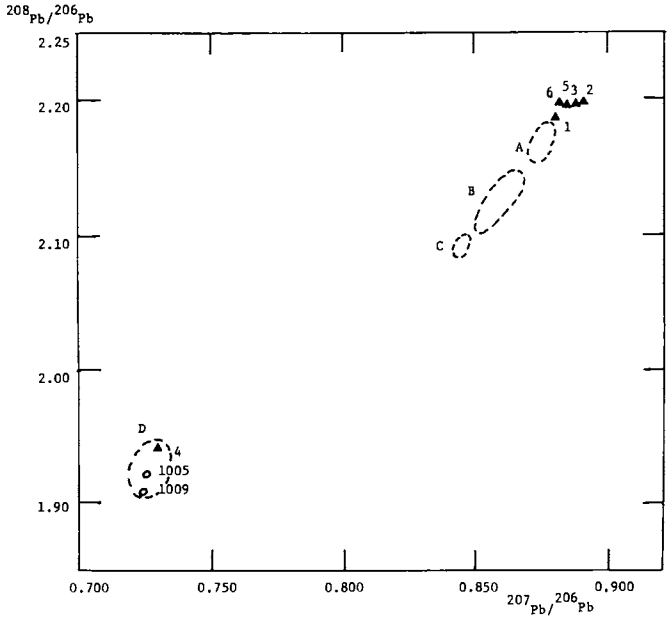
鉛同位体比

鉛には質量数204，206，207，208の4種の安定同位体があり，世界各地の鉛鉱はその生成した地質年代などにより，この同位体比がわずかながら異る。したがって質量分析計を用いて考古遺物中の鉛の同位体組成を精密に測定し，それを産地既知の鉛鉱石の同位体組成と比較すれば，遺物の産地を推定する手がかりが得られる。これが米国のブリルが1965年に開発した方法であって，筆者はブリルと共同でこの方法を日本および中国のガラスに応用して，須玖岡本，宇木汲田，立岩などで出土したガラスについて成果を得た。[3)]

下山西出土のガラス勾玉など表1のガラスの同位体比の測定結果を表2に示す。表2のうち，試料2，4，5，6は米国ワシントンの標準局で測定された値であるが，[3)] 試料1（下山西）と4（立岩）は室蘭で測定された値である。[4)] 室蘭では米国標準局の標準試料SRM-981を繰り返し，測定し，結果を規格化している。

表2　下山西遺跡出土ガラス勾玉などの鉛同位体比

試　　料	207／206	208／206	206／204
1．下山西勾玉	0.8824	2.181	17.62
2．汲田管玉	0.8898	2.1939	17.42
3．須玖管玉	0.8881	2.1933	17.45
4．立岩塞杆	0.7301	1.944	22.17
5．璧（長沙出土）	0.8846	2.1930	17.55
6．璧（中国出土）	0.8840	2.1939	17.57



図中の右上のA，B，Cは前漢鏡，後漢式鏡，日本産方鉛鉱の鉛同位体比の概略の範囲を示す。左下のDは小さな同位体比を示すガラスの範囲で，立岩出土の塞杆状ガラス(4)のほか，コーニングガラス博物館の璧など（1005と1009文献3参照）が含まれている。図中の数字1—6は表1の番号に対応する。

図1．下山西遺跡出土の勾玉などの鉛同位体化

表2と図1から明かなように，立岩出土の塞杆状のガラスを除いて，他の4点（表2の2，3，5，6）のガラスの鉛同位体比はきわめて近く，同じ地域の鉛鉱石を用いたと考えられる。表2の1，すなわち下山西の勾玉は上記の4点とは少し異なる同位体比を示すが，やはり同じ地域の鉛鉱石と見ることができるであろう。この勾玉の原料が中国産の鉛鉱であることは，中国出土の璧との同位体比の類似から推定される。

考　察

福岡県春日市須玖岡本は弥生時代の遺跡として有名であるが，ここから出土する管玉がバリウムを含む特殊な鉛ガラスであることを筆者が見出したのは昭和35年であった。その後立岩，宇木汲田などの遺跡からも同様な成分のガラスが出土すること，またこれが中国戦国時代の璧に近い成分を有することを見出した。[5]そのことは表1から明らかである。

中国の漢時代よりも古い玉類にバリウムを含む鉛ガラスがあることは1934年英国のセリグマンらによって発見されたが，[6]その後この種のガラスの報告はなく，筆者の報告がこれに続く最初のものであった。

表1の化学分析値，表2の鉛同位体比から見て，須玖などで出土した玉が中国の璧と同一のガラスであることは確実であり，下山西の勾玉も同種のガラスである。しかも勾玉という形状であるから，日本で製せられたものと考えられ，輸入された素材または璧などを融解して再加工したものと考えられる。すなわち弥生時代の九州と中国との間にガラスの交易があったものと考えざるを得ない。

従来報告された須玖岡本，立岩，宇木汲田などの遺跡は比較的海岸に近い地域にあったが，今回の下山西遺跡はそれらよりも海から遠い地域にあり，このようにバリウムを含む特殊な中国産の鉛ガラスの発見される場所が拡大された意義は重要である。

図1より明かなように，バリウムを含む鉛ガラスの同位体比は図の左下隅の領域と右上の前漢鏡よりも大きな値を示す領域とに二分されている。前者，同位体比の小さな領域に入るのは立岩出土の塞杆状ガラスのほか，コーニングガラス博物館所蔵の璧などがあり，後者には本報告の下山西の勾玉のほか，須玖，汲田の管玉などが入る。ブリルらの報告[7]によれば後者の領域に入るガラスはなお相当数のものが知られており，何れもバリウムを含んでいる。

このように中国戦国時代のバリウムを含む鉛ガラスが高低二種の同位体比を示すことは興味があり，その産地についても種々研究が進められているが，中国全土の鉛鉱の精密な同位体比が十分に知られていない現状では，未だその確定は困難である。

下山西遺跡出土の勾玉の化学分析は名古屋工業大学飯田忠三教授の研究室で行われた。援助を与えられた同教授，小島功助教授，内田哲男博士に感謝する。鉛同位体比の測定は室蘭工業大学室住正世教授の研究室で行われた。同教授，中村精次技官，大学院学生川原伸一郎氏に感

謝する。

註と文献

1) 微量分析法の詳細は，飯田忠三，ぶんせき，1983年，531参照。

2) 立岩は「立岩遺蹟」附篇1（昭和52）河出書房新社，汲田については「末盧国」322頁（昭和57）六興出版参照。須玖管玉および中国璧2種は梅原末治博士より供与された。梅原末治，史林，43，1（昭和35）参照。

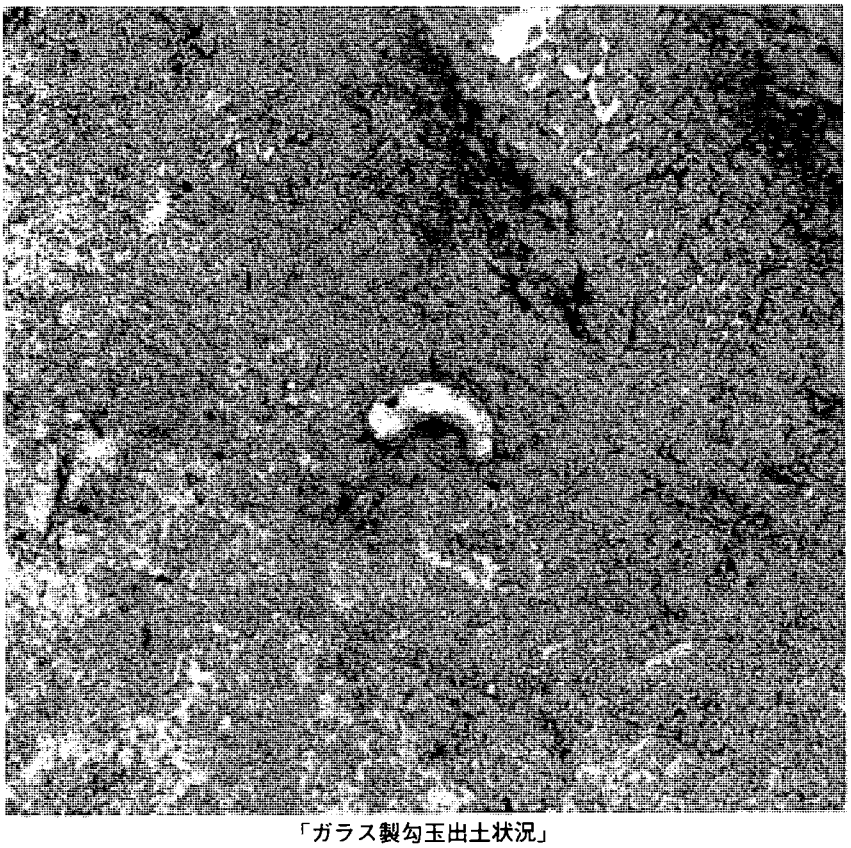
3) R. H. Brill，山崎一雄，I. L. Barnes，K. J. R. Rosman，M. Diaz，Ars Orientalis，11，87(1979)

4) 表2の立岩出土のガラスの同位体比は，最初風化物について測定した値が一定値を与えないため，後にガラス実質について1984年に再測定を行った新しい値である。したがって文献3に引用されている値は古い数字である。

5) 注2の「末盧国」参照。この中の立岩塞杆状ガラスの同位体比は古い値である。

6) C. G. Seligmanら，Nature，133，982(1934)。

7) ブリルら，国際ガラス討論会発表講演，北京，1984年;「中国古玻璃研究」，10(1984)中国建築工業出版社。



「ガラス製勾玉出土状況」

2．下山西遺跡発掘出土石棺内のベンガラ(赤色顔料)分析報告

堀　　一　夫

Ⅰ．緒　言

今回の調査により出土した石棺は4基であるが，その内ベンガラとおぼしき赤色顔料の採取されたものは，2号，3号，4号の三基である。

いずれも石棺内床土として採取されており，昭和58年5月27日及び31日に採取されている。採取された試料は粘土状の含水物質であり，若干赤色濃度の差は認められるが，ベンガラと判断されるものである。

しかしながら通常赤色系顔料として考えられるものについて考察してみると次のごとくである。

Ⅰ－a　朱について

通常朱と称されているものは，赤色硫化第二水銀のことで，天然には辰砂として産出されるものである。

分子式はHgSで示され，土状のものは粘土，酸化鉄，有機物などの不純物を含む。

六方晶系に属し，通常菱形六面体または厚卓状，結晶性の鉱衣，粒状，塊状またときに土状の被覆物がある。

ダイアモンド光沢を有するが，暗色のものは金属光沢，粉状のものは艶がない。

深紅色，しばしば褐赤，鉛灰色に変わる。条痕は深赤色である。

Ⅰ－b　鉛丹について

鉛丹または光明丹ともいわれているが，分子式はPb_3O_4，四三酸化鉛である。このものは市販品の朱と称する粗悪品に安価にするために混ぜられていることがある。通常一酸化鉛PbOを450℃附近で長く熱して得られる赤色の粉末で，正方晶系に属する。

Ⅰ－c　弁柄について

鉄には通常三種類の酸化物が存在するが，弁柄と称されるものの主成分は第二酸化鉄とよばれるもので，分子式はFe_2O_3である。

＊熊本大学工学部教授（金属工学教室）

これは安価な赤色顔料としてよく用いられるほか，ガラスなどの研磨剤としても用いられる。鉱物としては赤鉄鉱であり，現代製鉄業の主要鉱石でもある。

以上簡単に解説した三種のものが，通常赤色顔料として用いられているものであり，就中弁柄は最も広く人類が使用してきた赤色系顔料として古くから知られている。

今回採取された三種の試料も，弁柄として認識されており，その確認を求められたものである。

上記三種類の赤色系顔料の主成分をなすものは，朱については水銀，鉛丹については鉛，弁柄については鉄である。従ってこれら三種のイオンの存否を確認すれば，供試材料を同定出来ることとなる。

Ⅱ　蛍光X線分析結果

結果を表示すると第1表のごとくである。

	10P.P.M.程度	1P.P.M.程度	Pb.Hgの存在
2号石棺床土	Sr	Zn. Mn. Rb. Ti	検出不能
3号石棺床土	Sr	Zn. Mn	検出不能
4号石棺床土	Sr	Mn	検出不能

(第1表　蛍光X線分析結果)

以上のごとく，すべての試料において極めて微量（1～10P.P.M.）程度のSrとMnが検出されているが，これは混在する粘土質鉱物の成分中に含まれるものと考えられる。2号石棺の床土には，きわめて微量ながらRb及びTiの存在が認められ，Mnの量も他の石棺にくらべて多いことが認められた。

3号石棺の床土のMn量は，他のものに比べて少ないと考えられる。又4号石棺床土にはZn，Tiがほとんど検出されなかった。

しかしいずれの試料からもHg及びPbの検出は不能であり，したがってこれらの試料はいずれも朱でもなければ，鉛丹でもなく，弁柄であることは明らかである。

赤色濃度は夫々若干異なり，3号石棺のものが最も濃く，次いで4号石棺，2号石棺の順でうすくなっている。これは弁柄の主成分である酸化鉄の含有量に左右されるものと考えられるので，次に酸化第一鉄及び酸化第二鉄の定量化学分析を行った。

Ⅲ　定量化学分析結果

分析結果を第2表に示す。

	Fe^{2+}	FexO	Fe^{3+}	Fe_2O_3	全鉄分	全酸化鉄
2号石棺	1.17	1.51	22.50	30.71	23.67	32.22
3号石棺	2.15	2.77	36.89	52.75	39.04	55.52
4号石棺	0.92	1.18	33.51	47.91	34.43	49.09

（第2表　定量化学分析結果）

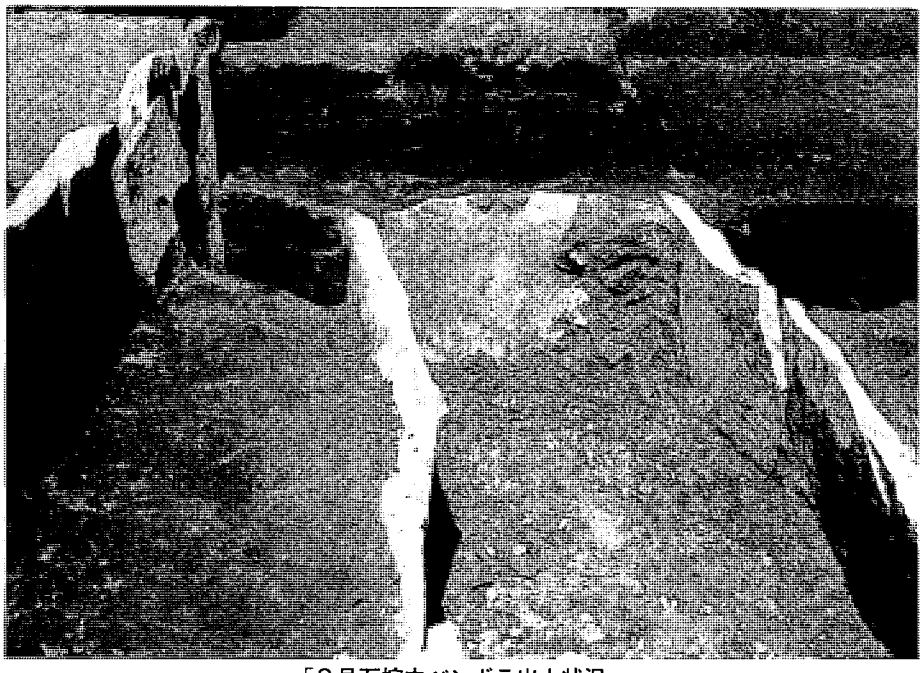
これらの結果から，上述したごとく各試料の赤色濃度が，含有する酸化第二鉄の濃度に比例して3号，4号，2号石棺床土の順になっていることが認められた。

Ⅳ 結　言

以上の結果から供試材料はいずれもFe_2O_3の分子式で示される酸化第二鉄を主成分とする粘土状物質であり，通称弁柄といわれるものと認められる。

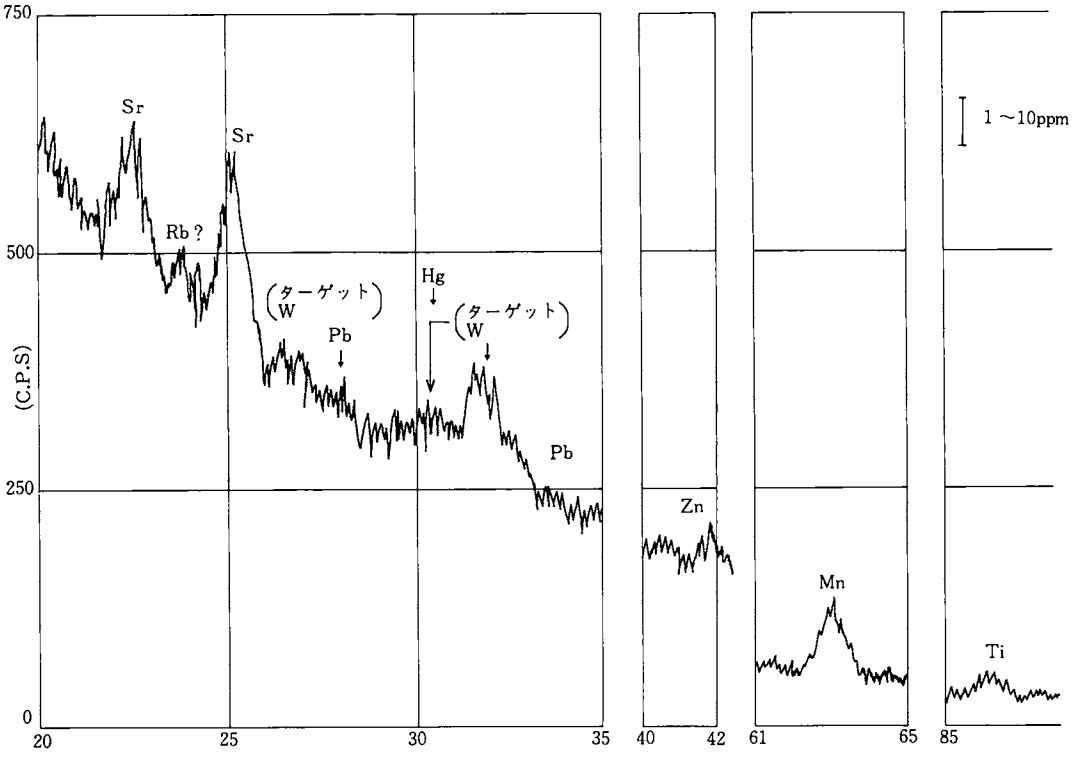
Ⅴ 資　料

資料として蛍光X線分析チャート3枚と，X線マイクロアナライザーによるHg，Pb，Feの定性分析チャート3枚を示しておく。

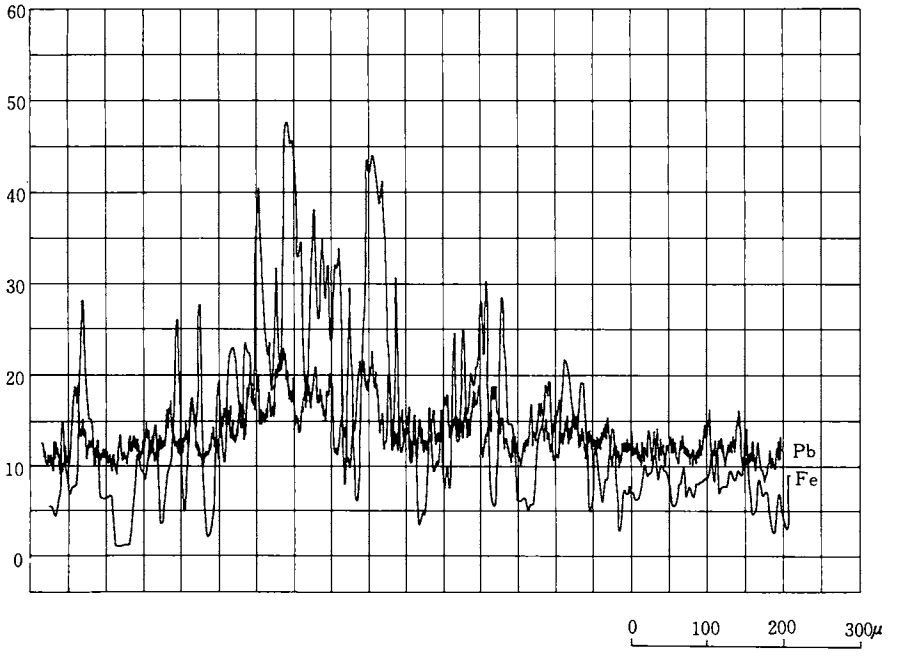


「2号石棺内ベンガラ出土状況」

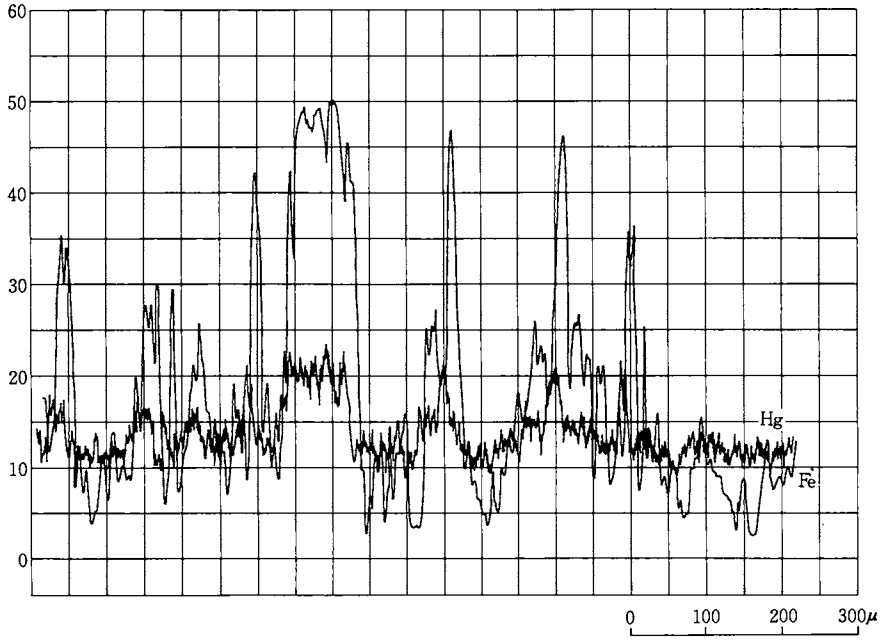
第１図　２号石棺螢光Ｘ線分析結果



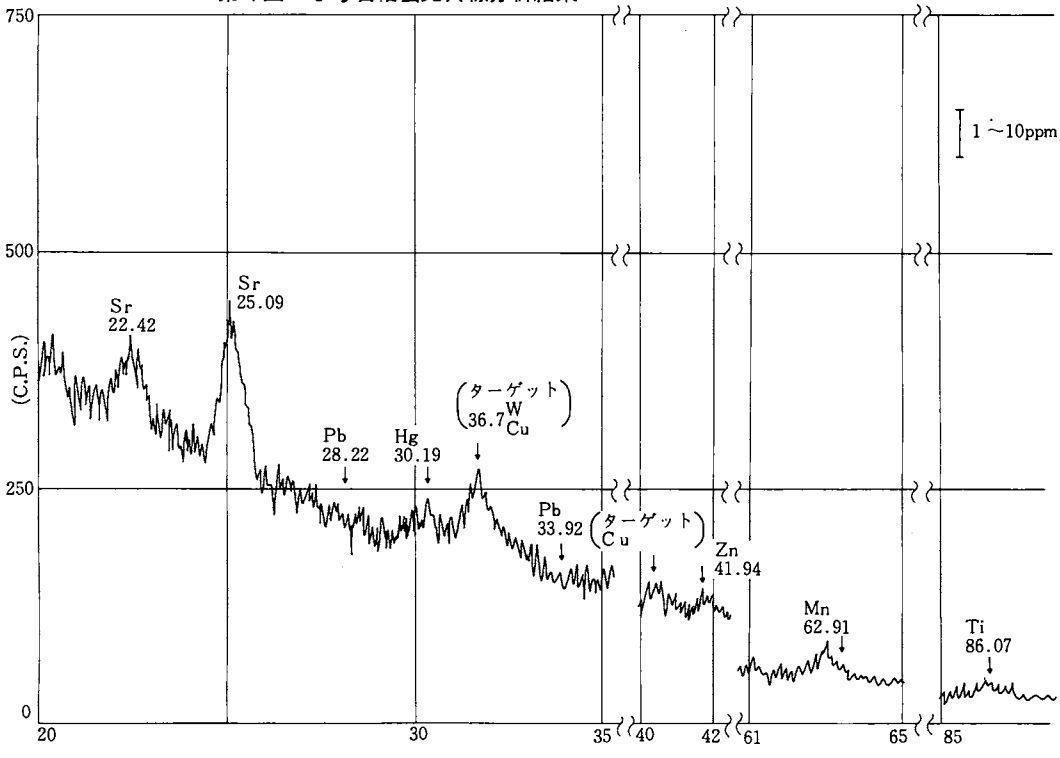
第２図　２号石棺Ｘ線マイクロアナライザー定性分析結果



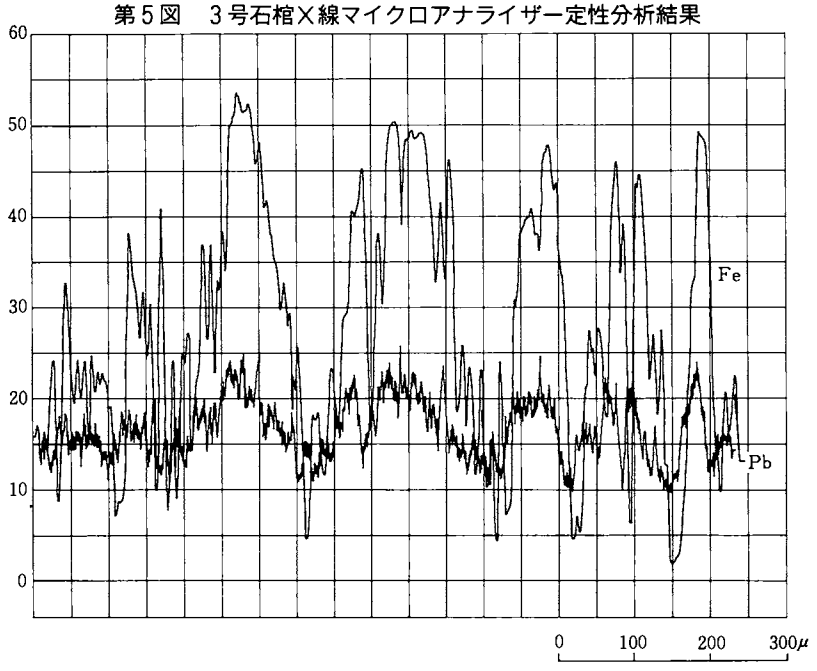
第3図　2号石棺X線マイクロアナライザー定性分析結果



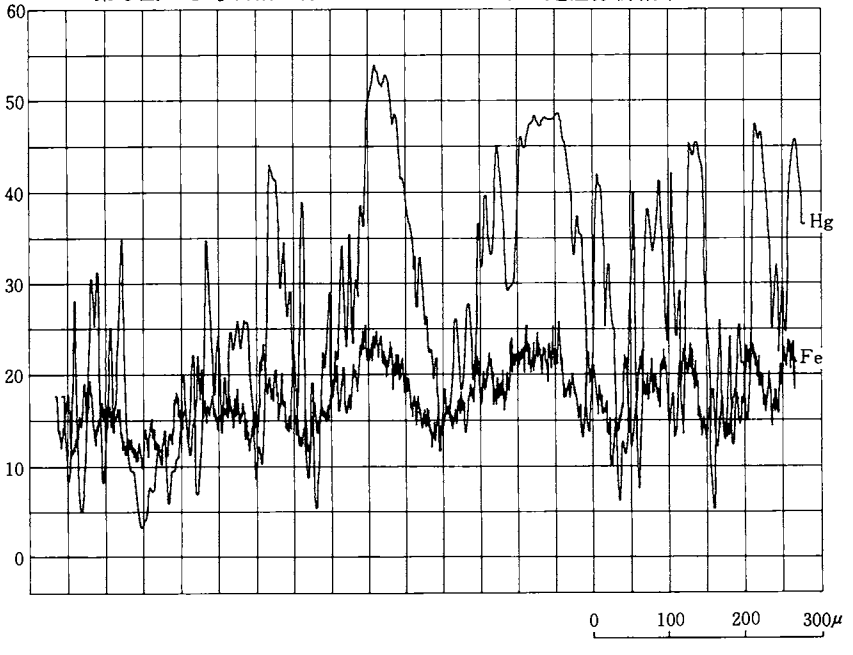
第4図　3号石棺螢光X線分析結果



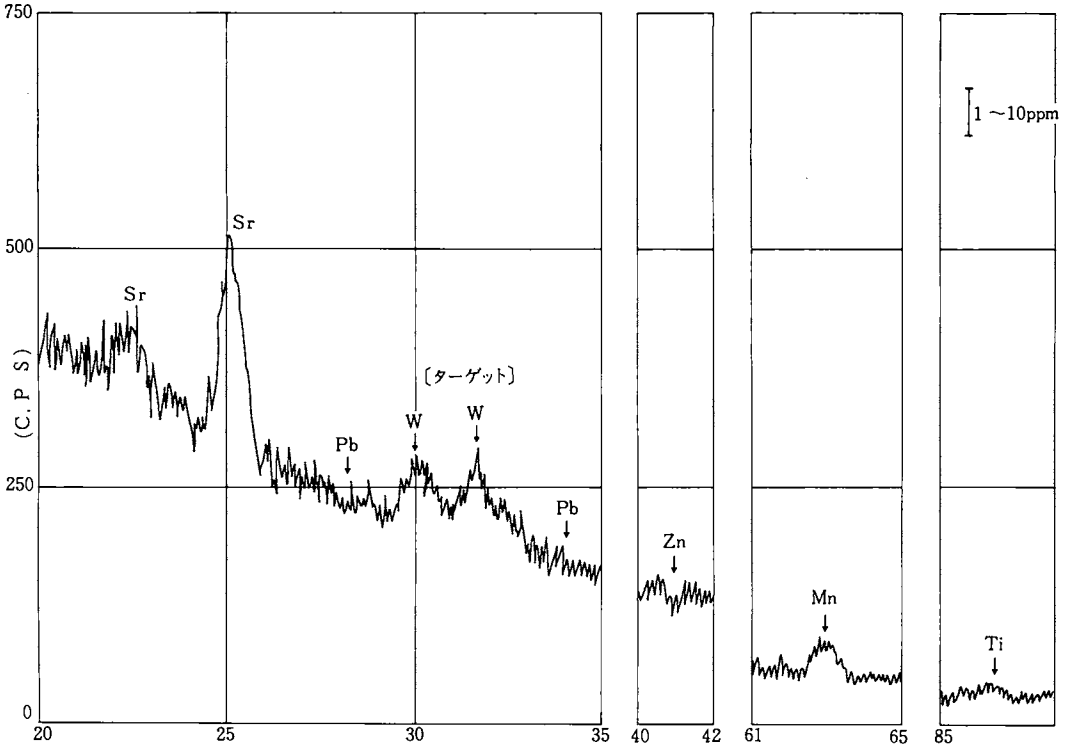
第５図　３号石棺Ｘ線マイクロアナライザー定性分析結果



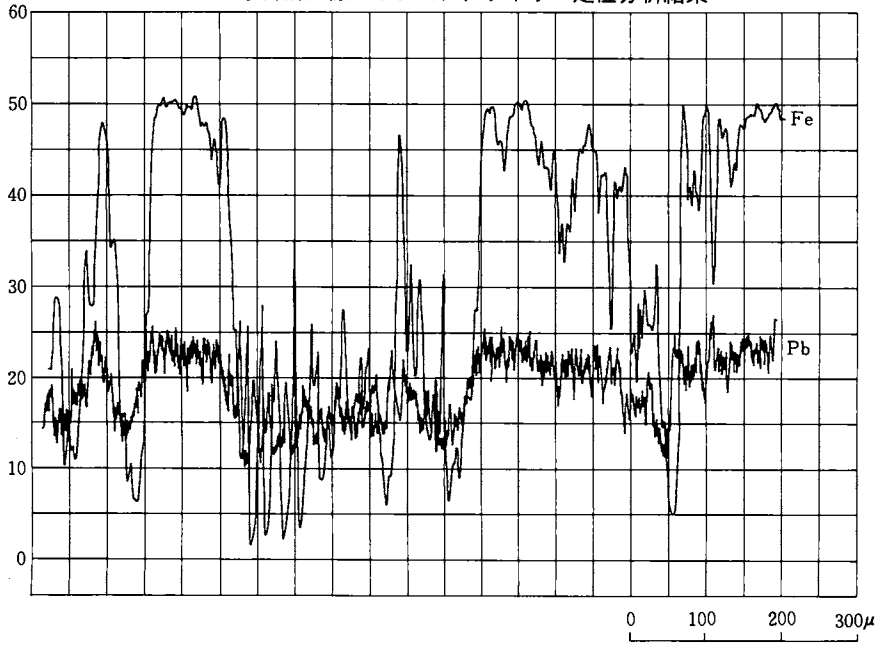
第６図　３号石棺Ｘ線マイクロアナライザー定性分析結果



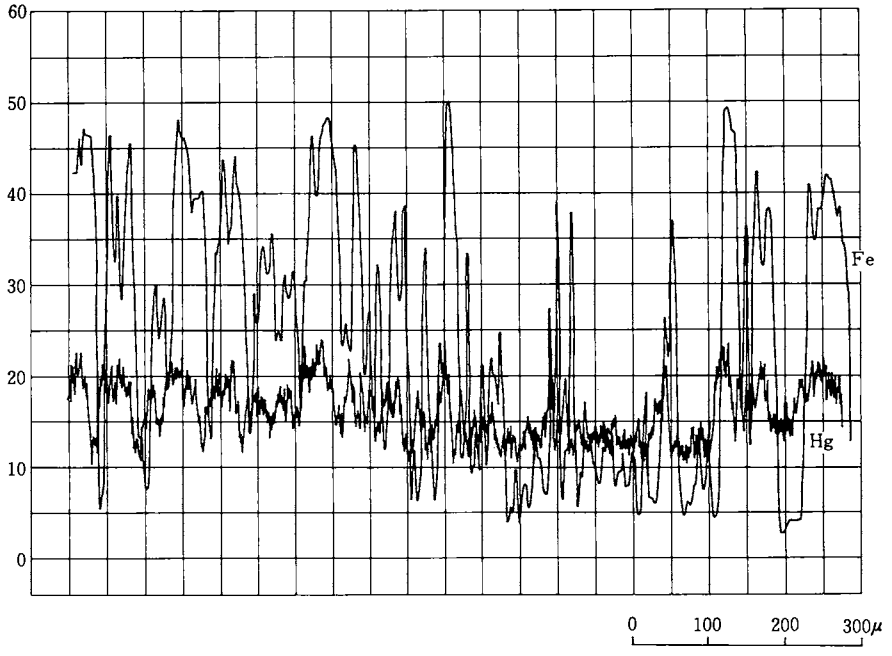
第7図　4号石棺螢光X線分析結果

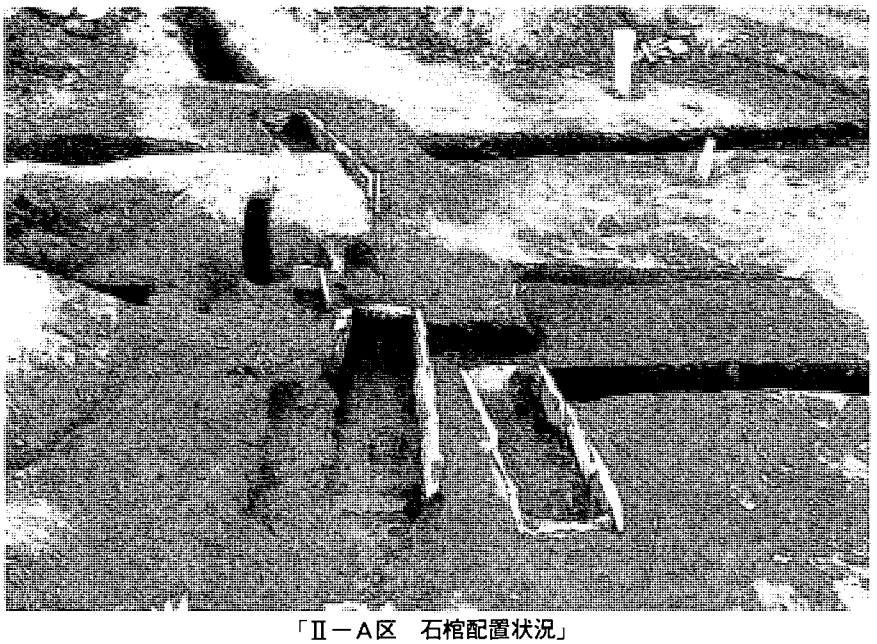


第8図　4号石棺X線マイクロアナライザー定性分析結果



第9図　4号石棺X線マイクロアナライザー定性分析結果





「Ⅱ－A区　石棺配置状況」

3．下山西遺跡出土の弥生時代鉄器と明神山鉱石の金属学的調査

大　澤　正　己

昭和61年11月2日

概　要

下山西遺跡出土の弥生時代後期中頃に属する鉄器片（器種不明）と，明神山鉱山の鉱石を調査して次の事が明らかになった。

(1) 鉄器は鍛造品である。(2) 素材原料は鉱石系である。(3) 素地産地は，大陸側の可能性が強く，鍛冶加工は国内と考えられる。(4) 明神山産出の鉄鉱石は褐鉄鉱であった。該品を原料とした国内鉄製錬を検討したが，弥生時代の鉄製錬を実証するまでは至らなかった。

1．いきさつ

下山西遺跡は，熊本県阿蘇郡阿蘇町下山西に所在する。弥生時代の後期中頃より終末期にかけての集落址である。

この遺跡からは33軒の住居跡が検出されており，出土遺物は豊富で総数163点に及ぶ鉄製品をはじめとして砥石56点を含み，かつ，ガラス製勾玉や，小形仿製鏡らの宝器まで出土しており，遺跡の特異な性格を示す。鉄製品の内訳は，鉄鏃44，鉇27，手鎌11，刀子5，鉄鎌2，鉄斧，鍛造鉄刃，のみ各1，形態不明鉄器68となっている。

この様な出土遺物から当遺跡の立地条件と生活基盤を考える時，寒冷地ゆえに低生育の稲作よりも，阿蘇谷の核となって他地域との交易に大きなウエイトがかかったことが想定される。交易品は当地産出のベンガラや鉄器であったろうか。[1]弥生時代の鉄製品は希少価値があり，産地同定も難しい問題である。

この度，下山西遺跡出土鉄器と，下山西遺跡と指呼の間にある明神山鉱山の鉱石の調査依頼を，熊本県教育委員会より要請されたので，形態不明鉄器の1点を供試材としてEPMA（Electron Probe Micro Annlyzer）調査を行うと共に，明神山鉱石の分析報告と併せて，弥生時代の鉄生産の問題に触れてみた。

2．調査方法

2－1．供試材

調査試料の種類と出土位置をTable.1に示す。なお，鉄器片は手鎌と同一出土である。

Table. 1　供試材の履歴及び調査項目

符　号	遺　跡	試　料	大　き　さ		推定年代	出土位置	調　査　項　目		
			サイズ(mm)	重量			顕微鏡組織	EPMA	化学組成
2E-831	下山西	鉄器片	20×18×5		弥生時代後期中頃	S 1－24 層位No55	○	○	—
2E-831-1	明神山	褐鉄鉱	60×30×30	135g	現　代	表面採取	○	○	○

2－2　調査項目

(1)　肉眼観察

(2)　顕微鏡組織

鉄器片および鉱石は樹脂に埋込み，エメリー研磨紙の＃150，＃320，＃600，＃1,000で研磨し，この後はダイヤモンド仕上げとして顕微鏡試料を作製した。この試料のマクロ組織から鍛造組織のチエックと，代表的な非金属介在物を選び出した。

(3)　X線マイクロアナライザー調査

鉄器片中の非金属介在物（鉄の製造過程で金属鉄と分離しきれなかったスラグや耐火物の混り物）と，鉱石の組成を調査するために使用した。

X線マイクロアナライザー（Electron Probe Micro Analyzer 以下EPMAと略記）系分析装置の原理は，真空中で試料面に電子線を照射し，発生する特性X線を分光後にとらえて画像化し，定性的な測定結果を得る分析法である。

(4)　化学組成：鉱石は十分に洗滌した後，中核部を次の方法で分析を行った。

重クロム酸使用の重量法……酸化第1鉄(FeO)。二酸化珪素(SiO_2)。赤外吸収法……炭素(C)，硫黄(S)。原子吸光法……全鉄分(Total Fe)，酸化アルミニウム(Al_2O_3)，酸化カルシウム(CaO)，酸化マグネシウム(MgO)，二酸化チタン(TiO_2)，酸化クロム(Cr_2O_3)，バナジウム(V)，銅(Cu)。中和滴定法……五酸化燐(P_2O_5)。

3．調査結果

3－1．下山西遺跡出土鉄器片(2E-831)

肉眼観察：形態不明の鉄器片で，黒褐色の錆を発している。弱く磁性を有する。

顕微鏡組織：Photo. 1の4枚の組織写真で示す。金属鉄は酸化を受けている。ABは鍛伸方向の研磨面，CDが鍛造方向の直角面の研磨組織である。C以外は黒錆部で土砂による組織の汚染はみられない。ABは，わずかながら鍛造時の加工痕が認められる。また，鉄中の異物である非金属介在物も少なく，比較的に清浄な鉄といえる。金属鉄が残留しないため，炭素含有

量や熱処理についての詳しい情報を得ることが出来なかった。

EPMA調査：Photo. 2 および3 に，鉄中に含有された非金属介在物の分析結果を示す。非金属介在物は，鉄鋼の製造過程で鉄と分離できなかった異物であり，鉄の履歴を究明する重要な手がかりを提供してくれる人工鉱物である。この非金属介在物中にチタン(Ti)やジルコニウム(Zr)らが検出されれば，製鉄原料は砂鉄であるが，それらがないとなると鉱石となる。

Photo. 2 に示す，やや角ばった灰黒色の非金属介在物を，エネルギー分散分析にかけると，検出される元素は，アルミ(Al)，珪素(Si)，カルシウム(Ca)，鉄(Fe)らである。同様に走査X線像で白色輝点の集中度を目安に含有元素の存在を示している。非金属介在物は，非晶質珪酸塩のAl_2O_3－SiO_2－CaO系の酸化物とわかる。この分析結果からは砂鉄系成分が検出されてなく，鉱石系の製鉄原料であった可能性が高いと推定される。

同じくPhoto. 3 にも鉄器片中他個所に含有される非金属介在物の分析を行っている。こちらの二種の非金属介在物は珪素(Si)分の多いもので二酸化珪素(SiO_2)主体であった。

下山西遺跡出土鉄器の非金属介在物には，砂鉄系含有成分は存在しなくて，鉱石系で構成されていると推定される。

3－2．明神山鉄鉱石(2E-831-1)

肉眼観察：赤褐色を呈する塊である。磁性は認められない。

顕微鏡組織：Photo. 1 のE. F. に示す。白色部が鉄分であり，黒色部が夾雑鉱物である。

EPMA調査：Photo. 4 に示す。二次電子像(SE)で示す個所を分析すると，検出される元素は，鉄(Fe)，カルシウム(Ca)，珪素(Si)である。走査X線像が示す様に，SEの白色部に鉄(Fe)の白色輝点が集中し，淡灰色にカルシウム(Ca)，黒色部周辺に珪素(Si)が検出される。カルシウム分(Ca)の比較的多い鉱石である事が判る。

化学組成：Table. 2 に示す。明神山鉱石は，全鉄分(Total Fe)が55.8%あり，このうち，酸化第1鉄(FeO)が0.43%で低値であり，そのほとんどが酸化第2鉄(Fe_2O_3)で79.3%を含む。全般的に夾雑鉱物は少なく，造滓成分(SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO)は17.7%，鉄材質を劣化させる硫黄(S)0.175%，五酸化燐(P_2O_5)も0.34%である。該品は自媒剤（夾雑物を溶融し易い鉄滓として鉄と容易に分離させる役割）として効く酸化カルシウム(CaO)が3.19%と高目が特徴的である。

参考までに製鉄関連遺跡から出土した鉄鉱石の分析結果をTable. 2 に示している。他遺跡出土の鉱石は磁鉄鉱で磁性を有し，酸化第1鉄(FeO)が15%以上含有されている。（沖縄具志原遺跡出土鉱石は褐鉄鉱で製鉄との関係は審かでない。）

以上の分析結果から該品は褐鉄鉱に分類される。褐鉄鉱は$2Fe_2O_3 \cdot 3H_2O$と鉱物組成が示すように結晶水を10～15%含んでいて，古代製鉄でどの程度使用されたか不鮮明である。

また，砂鉄と鉱石の成分比較をする上で指標となるのが二酸化チタン（TiO_2）とバナシウム（V）である。例えば熊本県の菊池川採取砂鉄で二酸化チタン（TiO_2）9.65%，バナジウム（V）0.25%であり，明神山鉱石の二酸化チタン（TiO_2）0.007%，バナジウム（V）Nilと歴然とした差異が認められる。

下山西遺跡からは，製鉄炉の痕跡もなく，かつ鉄滓出土もなかった。まだ明神山鉱山周辺の踏査調査も残っているであろうが弥生時代の鉄製錬を実証するまでに至っていない。鉄製錬には還元剤としての木炭が必要である。弥生時代の炭窯の存在をどう考えるかも問題点として残る。

4．考　察

4－1．下山西遺跡出土鉄器と他遺跡出土の弥生時代の鉄器について

列島内の製錬開始の問題は，まだ十分なる解答が得られていない。鉄器の使用は縄文時代晩期まで遡ることが確認されつつあり，続いて弥生時代になると鉄器製作の鍛冶加工がなされた事は衆知の通りである。次に鉄生産の第1段階の鉱石や砂鉄を木炭でもって還元する製錬（Smelting）によると，製鉄遺構が6世紀以前は未確認で，ⓘ弥生時代説，ⓘⓘ5世紀代説，ⓘⓘⓘ6C後半代説と意見が分かれてくる。

この問題解決には，鉄中の非金属介在物を調査して，製鉄原料が砂鉄か鉱石かを明らかにして産地を同定することと，列島内で出土した鉄滓の分析結果より製錬を裏付けることも一方法かと考える。

Table. 3には，西日本で出土した弥生時代と古墳時代前半に属する鉄器中の非金属介在物の調査結果を示している。すべてが金属鉄ではなくて錆片の調査結果も含まれており，信頼度は完全とはいい難いが，一つの傾向は表われていると云える。すなわち，下山西遺跡出土鉄器（No.28）をはじめとして，他の鉄器もいずれもチタン（Ti）やジルコニウム（Zr）が認められないところから砂鉄系は否定され，鉱石系の鉄素材といえる。

現在，列島内での鉄製錬遺構のうち，最も年代の遡るものは広島県庄原市所存の戸ノ丸山遺跡が6世紀初[2]の砂鉄製錬炉であり，鉱石製錬炉は滋賀県伊香郡所在の古橋遺跡でこちらは6世紀末に比定されている。[3] これらの状況からみて，Table. 3の鉄器らは鉄素材を大陸側に依存した可能性が非常に強いと考えざるをえない。なお参考までに熊本県寺尾遺跡出土品の鉄中の非金属介在物は砂鉄系でジルコニウム（Zr）が検出されているのでPhoto. 5に示しておく。

次にTable. 4には，弥生時代鉄滓の分析結果を記載した。熊本県は，諏訪原，西弥護免，下前原と3ケ所が挙げられる。これらの鉄滓の鉱物組成は，鉄素材の再加熱であるので酸化第1鉄（FeO）と鍛冶炉壁の珪酸分の反応物であるヴスタイト（Wüstite:FeO）＋フェアライト（Fayalite

:$2FeO \cdot SiO_2$)で構成され，化学組成は全鉄分(Total Fe)が46～59%と高目で，二酸化チタン(TiO_2)0.46%以下，造滓成分($SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO$) 24～36%と低目から鍛冶滓に分類されて，製錬滓を裏付けるデータは得られていない。

筆者はこれらのデータに立脚し，かつ北九州市小倉南区所在の潤崎遺跡祭祀ピット出土の5世紀後半代の製錬滓の存在,[4]並びに製鉄原料の還元剤となる木炭の窯を須恵器窯と同系窯業技術と考えるところから，製錬開始時期をⅱの5世紀代説に求めるものである。

下山西遺跡出土鉄器素材は，鉱石を原料とした大陸側からの搬入品と考える。鉄器は，いずれも小形品であるところから国内鍛冶の産物と推定した。弥生時代の後期以降になると，鍛冶滓は西日本の広範囲域で出土している。

5．まとめ

弥生時代後期中葉の下山西遺跡出土鉄器と明神山鉱山の褐鉄鉱を調査して次の事が判明した。

〈1〉 下山西遺跡出土鉄器の製鉄原料は，鉄中の非金属介在物が，$SiO_2-Al_2O_3-CaO$系の非晶質珪酸塩で構成され，これにチタン(Ti)やジルコニウム(Zr)が含まれていないので鉱石系と推定される。

〈2〉 該品は鍛造品で，非金属介在物の量も比較的少なく清浄な鉄であり，製錬操業も安定しているので大陸産の可能性が強い。

〈3〉 下山西遺跡出土の163点の鉄器らは，鉄鏃，鉋，手鎌，刀子，鉄斧，鍛造鉄刃，のみといった小形品が多く，国内鍛冶製品と考えられる。(箱式石棺出土の鉄剣材質が注目される)。

〈4〉 明神山鉱山の鉱石は，褐鉄鉱で鉄分は55.8%と比較的高く，夾雑鉱物や材質劣化をまねく硫黄(S)，五酸化燐(P_2O_5)も低く自媒剤となる酸化カルシウム(CaO)も含有した品位の良好なものであった。

〈5〉 褐鉄鉱は結晶水を含んでおり，国内製錬炉では未検出鉱石である。(溶融はしやすい)。また，周辺遺跡で鉱石製錬滓が出土してなく，現在のところ還元剤の木炭の供給と合せて弥生時代の鉄製錬の操業は否定的にならざるをえない。弥生時代の鉄製錬は，今後の発掘調査に期待せざるえない状況下である。

注

① 高谷和生「熊本県下山西遺跡」『日本考古学年報36』日本考古学協会　1983年度版。

② 松井和幸「広島県庄原市戸の丸山製鉄遺跡の発掘調査」『昭和61年度たたら研究会大会資料』たたら研究会　1986. 11. 8。C^{14}年代は1,500±60B. P. と1,400±55B. P. とでている。

③ 大澤正己「古橋遺跡出土の鉄滓・小鉄塊・粘土(黄色土)らの金属学的調査」滋賀県教育委員会　丸

山竜平氏へ原稿提出，1985．8．15。

④ 大澤正己「潤崎遺跡祭祀土壙出土鉄滓の金属学的調査」『潤崎遺跡』（北九州市埋蔵文化財調査報告書第49集）北九州市教育文化事業団，埋蔵文化財調査室　1986年。

追記

最近の情報として次のことが明らかになった。砂鉄を原料とする鉄中の非金属介在物は，多くの場合Ti，Zrを含有するが，なかには砂鉄系であっても硫化物系介在物にはTiを含有しない形態がある。注意を要する問題である。

大澤正己「出雲崎町番場遺跡出土鉄滓，炉材付着鉱物及び内越遺跡出土鉄滓，小鉄塊の金属学的調査」『番場遺跡』新潟県教育委員会　1987。

「下山西遺跡出土の鉄製品」

Table.2　各遺跡出土の鉄鉱石と砂鉄の化学組成

符　号	遺跡名	県別	種　類	遺　構	推定年代	全鉄分 (Total Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe_2O_3)	二酸化珪素 (SiO_2)	酸化アルミニウム (Al_2O_3)
2E-831-1	明神山	熊本	褐鉄鉱	鉱山跡	現　代	55.8	0.43	79.3	4.64	9.79
2D-841	具志原	沖縄	赤鉄鉱	貝　塚	貝塚時代後期	65.6	0.43	93.3	2.76	0.94
G-90	渡名喜島	〃	磁鉄鉱	表面採取	現　代	63.55	16.11	69.72	5.38	2.38
D-829	狐　塚	岡山	〃	住居跡	6C末～7C初	59.8	19.1	64.1	5.14	0.28
Z-91	野路小野山	滋賀	〃	A-3 SD-2底部	7C末～8C前半	69.93	21.65	70.60	0.25	1.06
8M-812	平　津	〃	〃	試掘溝	平安・鎌倉	67.7	25.43	68.5	2.70	0.71
	菊池川	熊本	砂　鉄	川砂鉄	現　代	56.92	30.43	47.37	2.46	4.12

Table.2の注

1．大澤正己「下山西遺跡出土の弥生時代鉄器と明神山鉱石の金属学的調査」『下山西遺跡』（熊本
2．大澤正己「沖縄・牧港貝塚・渡口洞穴遺跡採取砂鉄・鉄滓及び具志原貝塚出土赤鉄鉱の金属学的
3．大澤正己「渡名喜島遺跡発見の鉄滓について」『渡名喜島の遺跡』Ⅰ沖縄県渡名喜島村教育委員
4．大澤正己「狐塚出土の鉄滓と鉄塊について」『狐塚遺跡』（津山市埋蔵文化財発掘調査報告第2
5．大澤正己「野路小野山遺跡出土の製鉄関係遺物調査」『野路小野山遺跡発掘調査概報』滋賀県教
6．大澤正己「古墳出土鉄滓からみた古代製鉄」『日本製鉄史論集』たたら研究会編　1983。

酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO_2)	酸化クロム (Cr_2O_3)	硫黄 (S)	五酸化燐 (P_2O_5)	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	造滓成分	注
3.19	0.058	0.059	0.007	0.018	0.175	0.34	0.71	Nil	0.002	17,679	1
0.84	0.39	0.085	0.018	Nil	0.032	0.22	0.22	0.010	Nil	4.93	2
0.78	0.24	0.27	0.29	0.005	0.531	1.59	0.17	0.010	0.004	8.78	3
5.39	0.075	1.45	0.032	0.015	⟨0.001	2.05	0.03	Nil	0.005	10.885	4
Trace	0.32	0.18	0.68	0.31	0.010	0.048	0.28	0.02	0.03	1.63	5
1.54	0.31	0.17	0.046	Nil	0.019	0.12	0.07	Nil	0.007	5.26	〃
0.77	3.65	0.72	9.65	0.05	—	0.269	0.10	0.25	0.002	11.00	6

県文化財調査報告第88集)　熊本県教育委員会　1987。
調査」『牧港貝塚・真久原遺跡』(沖縄県文化財調査報告書第65集)　沖縄県教育委員会　1985。
会　1979.3。
集) 津山市教育委員会　1984。
育委員会，草津市教育委員会　1984。

Table. 3　弥生時代・古墳時代前期の鉄器中非金属介在物からみた製鉄原料

No.	遺跡名	出土地		鉄器名	製鉄原料	非金属介在物からの検出元素	製鋼法	推定年代	注
		県	所在地						
1	水走	大阪	東大阪市中新開今米	ノミ状鉄器	鉱石系	Fe, Mn, Ca		弥生中期	1
2	鬼虎川	〃	〃　弥生町	ノミ状鉄器	〃	Fe, Ca, P, Mn, S	鋳鉄脱炭鋼	〃	2
3	〃	〃	〃　〃	鉄鏃	〃	〃	〃	〃	〃
4	北神ニュータウン	兵庫	神戸市	袋状鉄斧	〃	Na, Al, Si, K, Fe, Mn		弥生Ⅳ様式前半	3
5	ビシャコ谷	岡山	津山市下高倉	無袋鉄斧	〃	Na, Al, Si, K, Ca, Fe		弥生中期	4
6	月の輪古墳	〃	久米町柵原町	小刀子	〃	Fe, Ca, Mg, K, Al, P		5C前半	5
7	下稗田	福岡	行橋市大字下稗田	鍛造(板状)鉄斧	〃	Al, Si, K, Fe		弥生前期末～中期中葉	6
8	〃	〃	〃	鋳造鉄斧	〃	Si, Fe		〃	〃
9	〃	〃	〃	〃	磁鉄鉱	Fe, Cu, Al, Si, S		〃	〃
10	〃	〃	〃	鍛造(板状)鉄斧	鉱石系	Na, Al, Si, Fe, Cl		弥生後期中葉	〃
11	〃	〃	〃	鋳造鉄斧	磁鉄鉱	Mg, Al, Si, K, Ca, Ti, (微量), Fe		弥生後期終末	〃
12	三沢栗原	〃	小郡市三沢字栗原	無茎鉄鏃	鉱石系	Si, Ca, Fe		弥生後期末	7
13	〃	〃	〃	袋状鉄斧(鍛造)	〃	Na, Al, Si, K, Fe		〃	〃
14	〃	〃	〃	手鎌(鍛造)	〃	Na, Al, Si, Fe		古墳時代初頭	〃
15	〃	〃	〃	〃	〃	Al, Si, K, Fe		〃	〃
16	樋渡	〃	福岡市西区飯盛	鉄剣(鍛造)	〃	Na, Al, Si, K, Ca, Fe(Fayalite)	直接製鋼法	弥生中期後半	8
17	飯盛	〃	〃	素環頭大刀	〃	Na, Mg, Al, Si, Ca, Cr, Fe		〃	9
18	長行	〃	北九州市小倉南区	袋状鉄斧(鍛造・鋳造不明)	〃	Al, Si, Fe, Mn		弥生前期～中期 (縄文晩期?)	10
19	黒ケ畑	〃	北九州市八幡西区鳴水	袋状鉄斧(鍛造)	〃	Al, Si, K, Fe		弥生中期後半～末葉	11
20	高島	〃	北九州市小倉南区	〃 (鋳造?)	〃	Na, Al, Si, K, Ca, Fe		弥生終末期	12
21	大板井	〃	小郡市大板井	鎌	〃			弥生中期中葉	13
22	門田	〃	春日市上白水門田辻田	鉄戈	〃	Ca, K, Al, Mn, Ti, Si, Fe		弥生中期末	14
23	曲り田	〃	糸島郡二丈町石崎	鉄片	〃	K, Cl, Si, Na, Al, Si		縄文晩期	15
24	安永田	佐賀	鳥栖市柚比町	袋状鉄斧(鍛造)	〃	介在物ほとんど存在せず		弥生中期末	16
25	〃	〃	〃	鉇(鍛造)	〃	Si, P, S, Ca, Fe		〃	〃
26	〃	〃	〃	袋状鉄斧(鍛造)	〃	Si, Fe		〃	〃
27	〃	〃	〃	板状鉄片(鍛造)	〃	Na, Mg, Al, Si, K, Fe		〃	〃
28	下山西	熊本	阿蘇郡阿蘇町乙姫	不明鉄片(鍛造)	〃	Si, Fe, Al, Ca		弥生後期中葉	17
29	富の原	長崎	大村市富の原常盤	鉄戈(鍛造)	〃	Fe, Mn, Ca, Mg, K, Al, Si		弥生時代中期～後期	18
30	〃	〃	〃	〃	〃	Fe, Mn, Ca, Mg, K, Al, Si		〃	〃
31	今福	〃	南高来郡北有馬町	袋状鉄斧(鍛造)	〃	Al, Si, Ca, Fe		弥生後期	19
32	王子	鹿児島	鹿屋市王子町	鉇(鍛造)	〃	Si, Fe, Ti (微量)		弥生中期後半～後期初頭	20

Table. 3の注

1．大澤正己「水走遺跡出土のノミ状鉄器の金属学的調査」『水走遺跡』大阪府教育委員会　1987。
2．(イ)　芋本隆裕・松田順一郎『鬼虎川の金属器関係遺物〈第７次発掘調査報告２〉』東大阪市文化財協会　1982。
　(ロ)　大澤正己「鉄鏃と鑿状鉄器の冶金学的調査」同上所収。
　(ハ)　大澤正己「鬼虎川遺跡出土の鋳鉄脱炭鋼鉄器・鉄鏃と鑿状鉄器の調査」『福岡考古懇話会々報』第11号，1982。
3．神戸市教育委員会（小郡市教育委員会片岡宏二氏経由）
4．(イ)　行田裕美他『ビシャコ谷遺跡』（津山市埋蔵文化財調査報告書第16集）津山市教育委員会　1984。
　(ロ)　大澤正己「ビシャコ谷遺跡出土の鉄滓と鉄斧の調査」『ビシャコ谷遺跡』所収。
5．佐々木稔「月の輪古墳出土鉄器の化学組成再考」『考古学研究』126，考古学研究会　1985,9。
6．大澤正己「下稗田遺跡出土の弥生時代鉄器に対する金属学的調査」『下稗田遺跡』（行橋市文化財調査報告書第17集）行橋市教育委員会　1985。
7．大澤正己「三沢栗原遺跡出土鉄器の調査」『三沢栗原遺跡』Ⅲ（小郡市文化財調査報告書第23集）小郡市教育委員会　1985。
8．福岡市教育委員会飯盛３次調査　樋渡古墳下カメ棺（５号）出土。未報告。
9．　〃　　飯盛４次調査　第１号幹線道路２区，K－67号　下甕(西)出土。未報告。
10．宇野慎敏・山口信義『長行遺跡』（北九州市埋蔵文化財調査報告書第20集）北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室1983。大澤正己「鉄斧」『長行遺跡』所収。
11．宇野慎敏他『黒ケ畑遺跡』（北九州市埋蔵文化財調査報告書第18集）北九州市教育文化事業団埋蔵文化財事業室1982。鉄斧分析調査結果は未発表。
12．(イ)　小田富士雄他「高島遺跡」『古文化談叢』第３集　九州古文化研究会　1976。
　(ロ)　大澤正己「考古遺物に対する金属学的調査手法について」『埋蔵文化財研究会第16回研究集会発表要旨』1984。
13．片岡宏二『大板井遺跡』Ⅰ（小郡市文化財調査報告書第11集）小郡市教育委員会　1981。佐々木稔氏分析調査，
14．(イ)　井上裕弘・小池史哲他『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告書』第９集　福岡県教育委員会　1978。
　(ロ)　大澤正己「門田遺跡出土鉄戈の分析調査」14－(イ)所収。
　(ハ)　大澤正己「門田遺跡の鉄器について」『福岡考古懇話会々報』第９号　1978。
　(ニ)　佐々木稔他「古代日本における製鉄の起源と発展」『季刊考古学』第８号　1984。
　(ホ)　佐々木稔・村田朋美・伊藤薫「出土鉄片の金属学的調査」Ⅱ『石崎曲り田遺跡』Ⅲ　福岡県教育委員会　1985。
15．(イ)　橋口達也他『石崎曲り田遺跡』Ⅱ（今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第９集）福岡県教育委員会　1984。
　(ロ)　佐々木稔・村田朋美・伊藤薫「出土鉄片の金属学的調査」同上所収。
　(ハ)　佐々木稔・村田朋美・伊藤薫「出土鉄片の金属学的調査(Ⅱ)」『石崎曲り田遺跡』Ⅲ（今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第11集）福岡県教育委員会1985。
　鉄片中の介在物からはざくろ石の類の鉱物しか検出されなかった。再調査の予定。
16．(イ)　藤瀬禎博他『安永田遺跡』（鳥栖市文化財調査報告書第25集）鳥栖市教育委員会　1985。
　(ロ)　大澤正己「安永田遺跡出土の鉄器と鉄滓の金属学的調査」同上所収。
17．高谷和生「下山西遺跡概要」1983.9.2 遺構S1-24出土層位55。大澤正己「下山西遺跡出土の弥生時代鉄器と明神山鉱石の金属学的調査」『下山西遺跡』（熊本県埋蔵文化財調査報告第88集）熊本県教育委員会　1987。
18．佐々木稔・村田朋美・伊藤薫「富の原常盤遺跡出土鉄戈錆片の金属学的解析結果」『富の原遺跡群研究調査概報』Ⅳ　大村市教育委員会　1985。
19．正林護・宮崎貴夫・町田利幸『今福遺跡』Ⅰ（長崎県文化財調査報告書第68集）長崎県教育委員会 1984。C10区竪穴住居跡出土，宮崎貴夫氏より試料の提供を受ける。
20．(イ)　諏訪昭千代他『王子遺跡』（鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書第36集）鹿児島県教育委員会　1985。
　(ロ)　大澤正己「王子遺跡出土弥生中期後半～後期初頭の鉄滓と鉇の調査」『王子遺跡』所収。

Table.4　鍛冶滓・製錬滓及び銅製錬滓の化学組成　—鍛冶滓は弥生時代のものを中心に—

遺跡名	滓分類	推定年代	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe_2O_3)	二酸化けい素 (SiO_2)	酸化アルミニウム (Al_2O_3)	酸化カシ (Ca(
扇谷（京都府）	鍛錬鍛冶滓	弥生前期末～中期初頭	51.72	—	57.48	10.06	20.05	4.02	0.9
王子（鹿児島）	〃	弥生中期末～後期前半	48.2	—	50.0	13.27	21.22	8.24	4.2
金比羅祀（長崎）	〃	弥生中期	62.1	—	47.4	36.1	10.42	1.98	1.0
諏訪原（熊本）	〃	弥生後期～古墳初頭	51.71	0.11	48.84	19.50	16.30	5.82	1.0
西弥護免（熊本）	〃	弥生終末期	45.8	—	52.1	7.30	21.4	10.01	2.8
下前原（熊本）	〃	弥生後期	58.63	—	—	—	12.13	9.86	1.0
辻田（福岡）	〃	弥生終末期	55.88	0.13	48.94	25.32	13.76	5.22	2.3
押入西（岡山）	砂鉄製錬滓	弥生中期後半？	42.3	—	41.4	14.48	20.76	5.16	0.1
小原下（長崎）	〃	縄文晩期？	11.85	—	5.33	11.02	37.76	21.68	6.1
豊町A（福井）	〃	〃　？	34.08	0.81	14.88	31.14	25.10	7.52	1.0
嵐口鞴（熊本）	〃	不明	34.97	Trace	36.07	9.91	32.88	4.27	0.0
八代鉄山（熊本）	〃	近世	28.54	0.32	14.94	23.75	15.79	7.45	1.2
狐塚（岡山）	鉱石製錬滓	6世紀末～7世紀初	38.0	—	45.1	4.19	30.1	5.64	2.4
徳力第2（福岡）	銅製錬滓	10世紀前半	25.2	—	24.0	9.36	43.90	5.55	8.9

註

1．清永欣吾『扇谷遺跡出土品の調査』日立金属株式会社安来工場冶金研究所　1983．11．29。

2．大澤正己「王子遺跡出土弥生時代中期末～後期初頭の鉄滓と鉇の金属学的調査」『王子遺跡』（鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書　第32集）1984。

3．古田正隆『北岡金比羅祀遺跡調査報告』（南有馬町文化財調査報告第1集）南有馬町教育委員会　1981。出土鉄滓は古田氏より提供を受ける。未発表。

4．(イ)　緒方勉「諏訪原遺跡発掘調査概報」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査概報』熊本県九州縦貫自動車道関係文化財調査団　1971。

(ロ)　大澤正己「曲野・寺尾遺跡の鉄滓調査」『曲野遺跡』1（熊本県文化財調査報告書　第61集）1983。分析データのみ記載。後日正式報告予定。

5．瀬丸敬二他『西弥護免遺跡調査概報』西弥護免遺跡調査団　1980。分析データのみ4—(ロ)に記載。

6．湊秀雄・佐々木稔「タタラ製鉄鉱滓の鉱物組成と製錬条件について」『たたら研究』14　1968。

7．大澤正己「製鉄関係遺物の分析」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第7巻下巻　福岡県教育委員会　1978。

ル ム))	酸化マグネシウム (MgO)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO_2)	酸化クロム (Cr_2O_3)	硫黄 (S)	五酸化燐 (P_2O_5)	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	造滓成分	造滓成分 / Total Fe	TiO_2 / Total Fe	註
7	0.15	0.10	0.61	—	0.021	0.54	0.20	0.017	—	25.19	0.487	0.012	1
1	1.01	0.080	0.32	0.006	0.052	0.20	0.13	0.009	0.002	34.68	0.720	0.007	2
1	0.35	0.090	1.21	0.015	0.024	0.47	0.25	0.024	Nil	13.75	0.222	0.020	3
7	0.68	0.11	0.46	0.018	0.035	0.265	0.119	0.020	0.016	23.87	0.462	0.009	4
5	1.41	0.10	0.43	0.012	0.031	0.68	0.09	0.011	0.003	35.67	0.779	0.009	5
3	1.99	—	Trace	—	—	—	—	—	—	25.01	0.467	—	6
3	0.88	0.16	1.18	0.03	0.096	0.265	0.26	0.06	0.007	22.24	0.398	0.021	7
3	1.66	4.00	9.81	0.018	0.059	0.023	0.33	0.13	Nil	27.76	0.656	0.232	8
7	4.23	1.39	11.50	—	0.034	0.197	0.05	—	—	69.84	5.894	0.996	9
6	3.07	0.46	11.34	—	Trace	Trace	—	1.36	Trace	36.75	1.078	0.333	10
7	4.02	0.56	9.43	0.085	0.011	0.197	0.28	0.240	Trace	41.24	1.179	0.270	11
1	5.80	1.34	29.41	0.030	0.055	0.154	0.085	0.490	0.010	30.25	1.060	1.030	12
3	2.82	0.75	0.34	—	0.029	0.37	0.13	0.009	Nil	41.02	1.080	0.009	13
0	1.23	0.47	0.18	0.015	0.010	0.19	0.06	0.007	0.097	59.98	2.364	0.007	14

8．大澤正己「押入西遺跡出土鉄滓及び鉄塊の金属学的調査」『押入西遺跡』（津山市文化財調査報告　第14集）津山市教育委員会　1984。

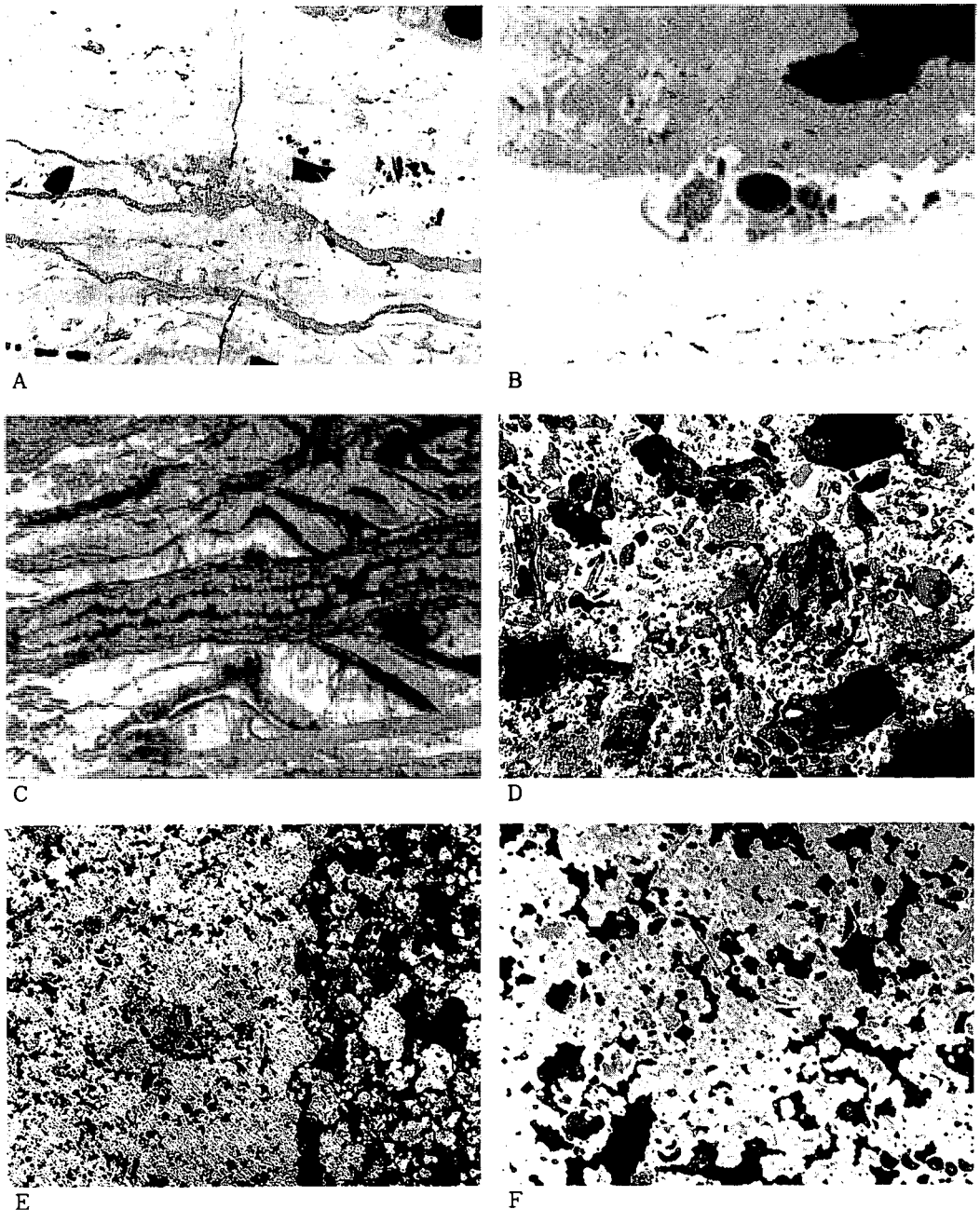
9．古田正隆『小原下遺跡報告』（第一次発掘調査）長崎県立国見高等学校　1967。出土鉄滓は大澤が分析・検鏡を手がけた。未発表(コメント)。

10．吉岡金市「北陸古代製鉄史に関する調査研究」『金沢経済大学開発研究所　昭和47年研究報告73－３。1973.3。

11～12．松本健郎『生産遺跡基本調査報告書１』（熊本県文化財調査報告　第38集）熊本県教育委員会　1979。分析データは４－(ロ)に記載。

13．大澤正己「狐塚出土の鉄滓と鉄塊について」『狐塚遺跡』（津山市埋蔵文化財発掘調査報告　第２集）津山市教育委員会　1984。

14．大澤正己「徳力遺跡第２地点出土の銅製錬滓・鉄滓の金属学的調査」『徳力遺跡第二地点』（北九州市埋蔵文化財調査報告書　第30集）北九州市教育文化事業団　1984。



A.B：2E-831　下山西鉄器片鍛造方向研磨　×290
C.D：　〃　　〃　　鍛造直角方向研磨　×290
E.F：2E-831-1　明神山褐鉄鉱　E：×72,　F：×290

Photo.1　下山西鉄器片および明神山鉱石の顕微鏡組織

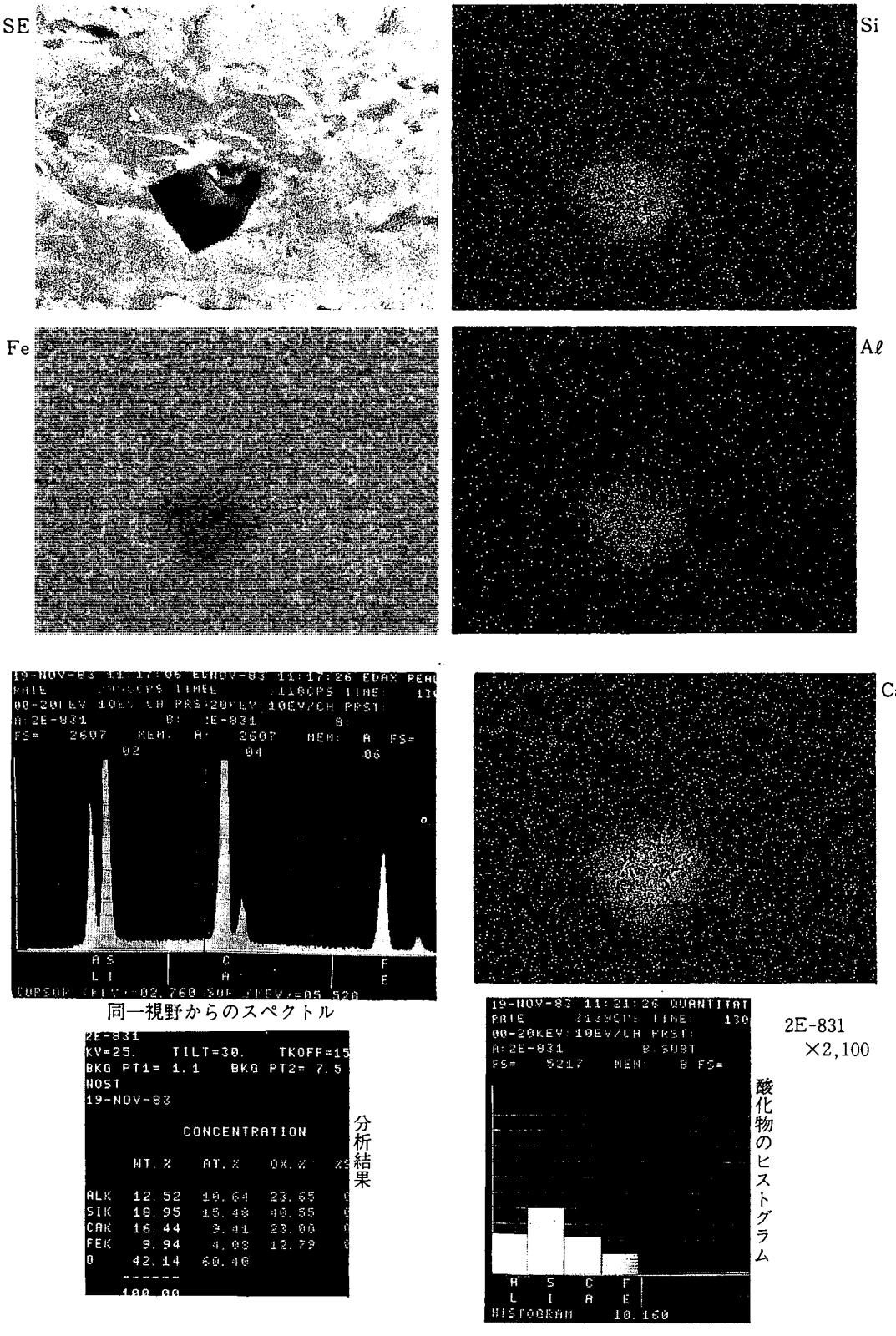


Photo.2　下山西遺跡出土鉄片中非金属介在物の走査X線像及びエネルギー分散分析

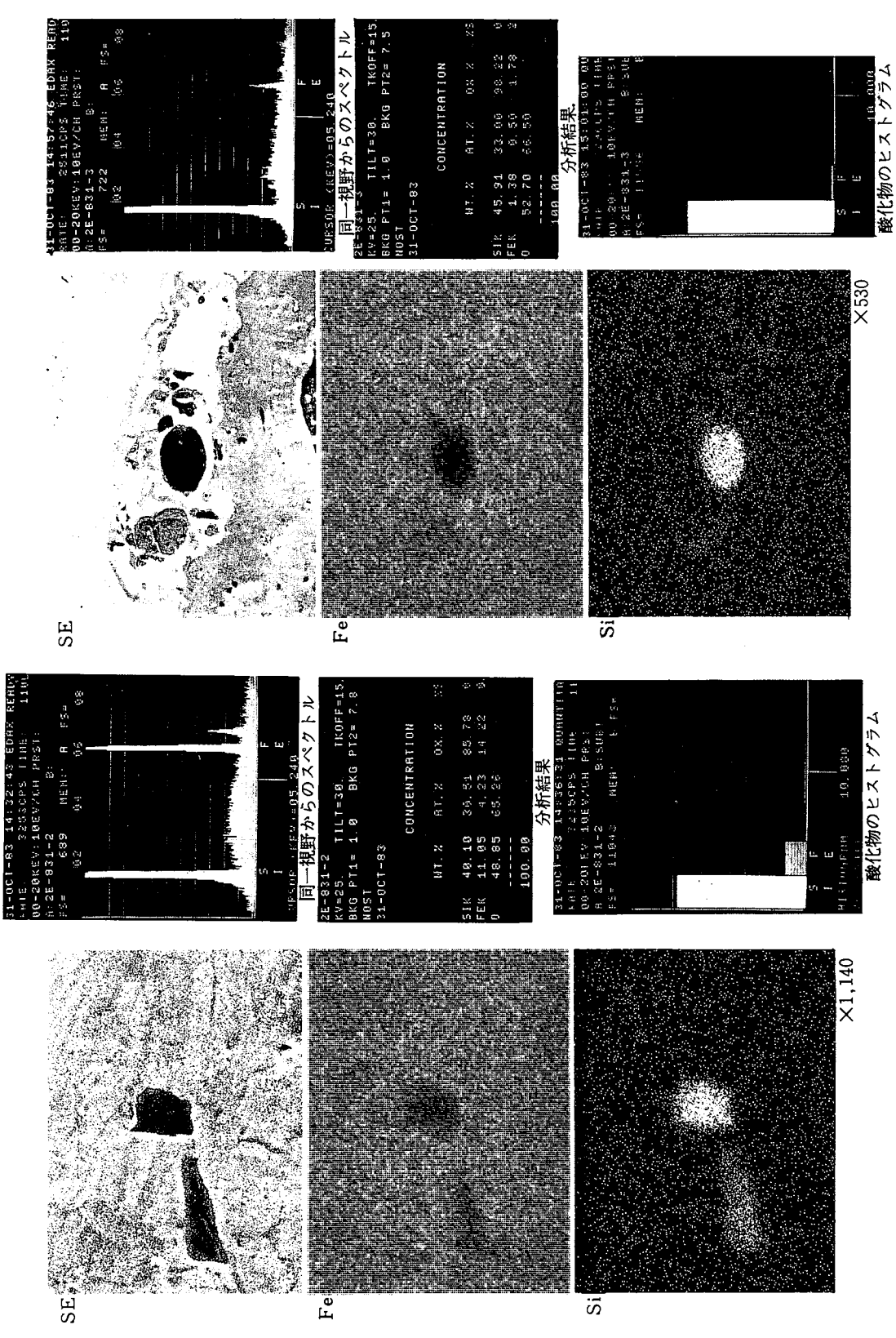
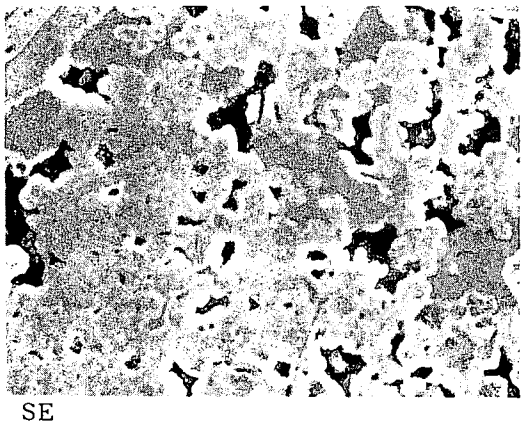
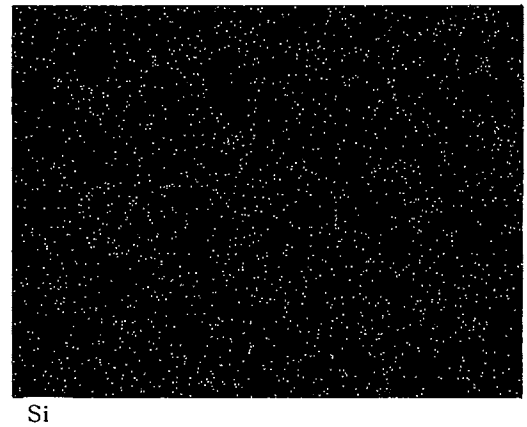


Photo.3　下山西遺跡出土鉄片中非金属介在物の走査X線像とエネルギー分散分析

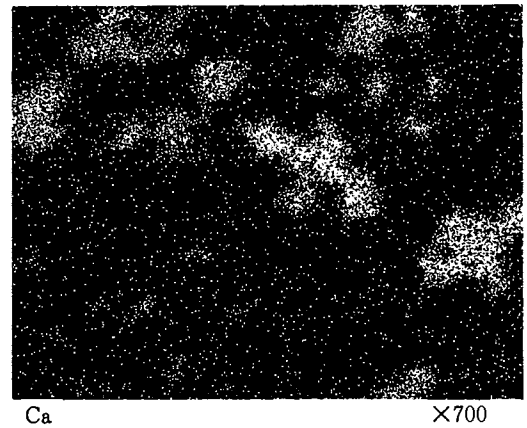


SE

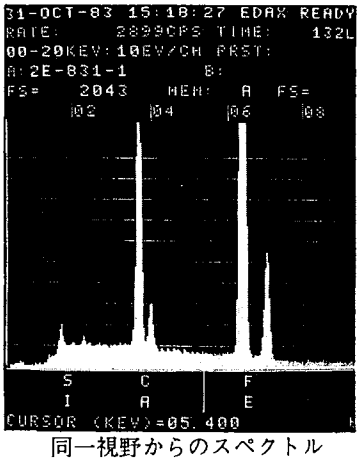


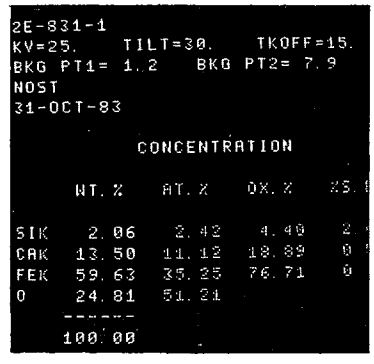
Si

Fe

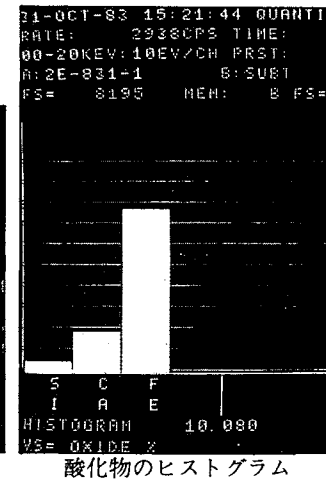


Ca　　×700





同一視野からのスペクトル



酸化物のヒストグラム

(倍率1000倍のエリアでエネルギー分散分析実施)

Photo.4　明神山鉱石(2E-831-1)の走査X線像とエネルギー分散分析結果

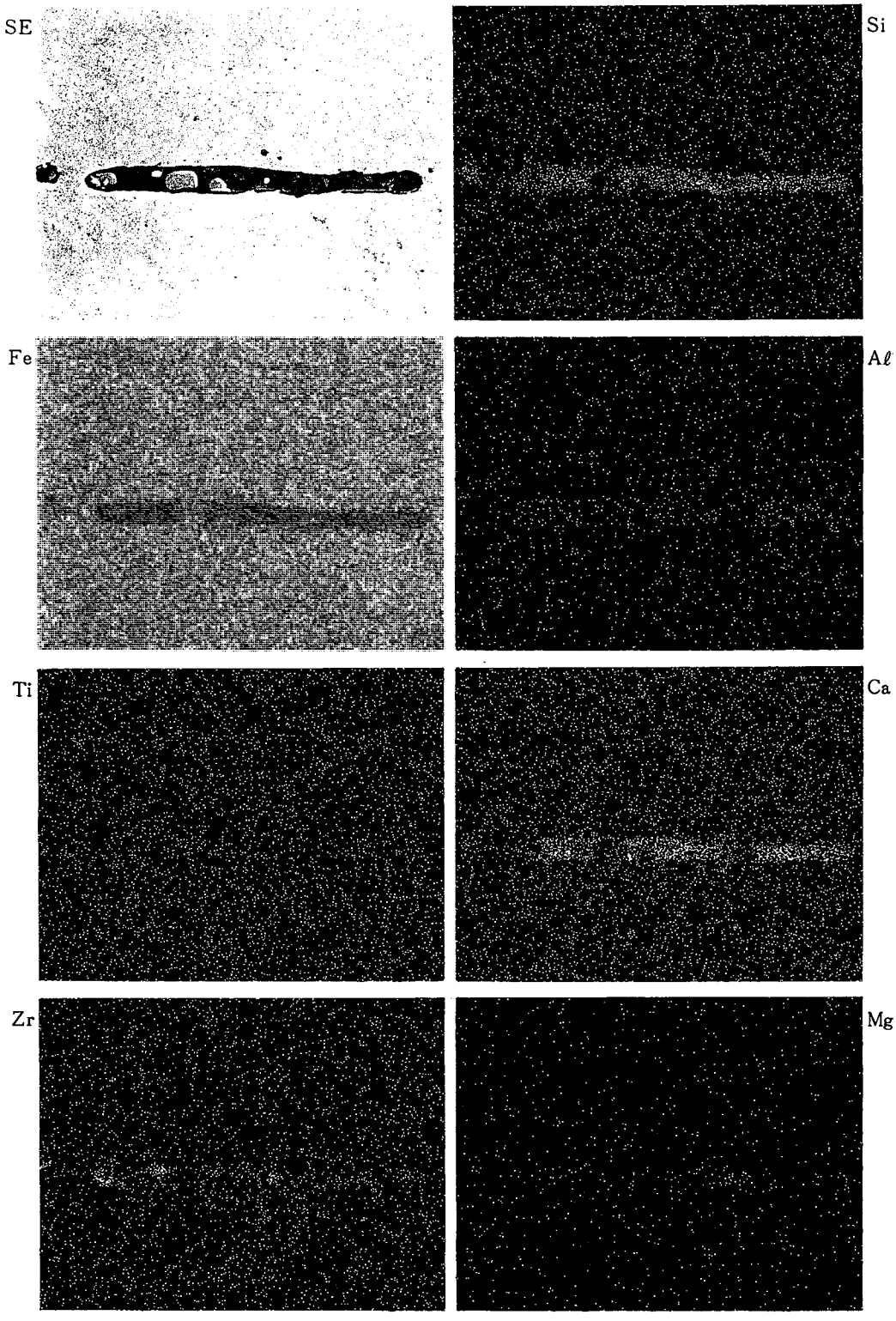


Photo.5（その1）寺尾遺跡(熊本)出土含鉄鉄滓金属鉄中の非金属介在物の走査X線像
×650

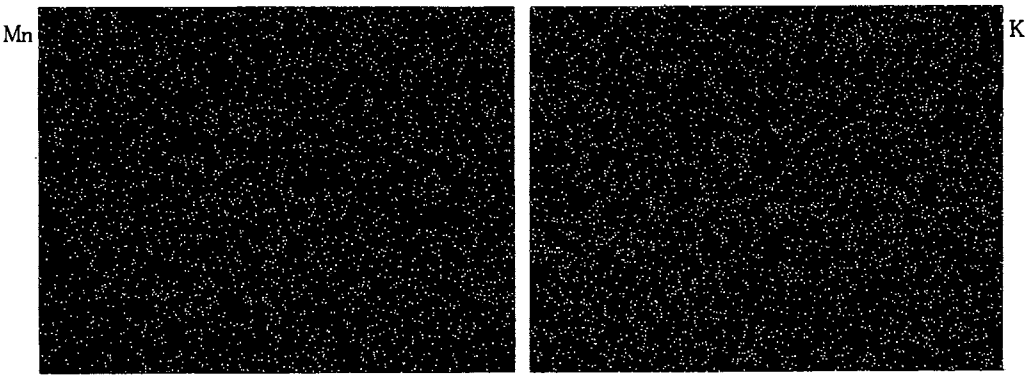
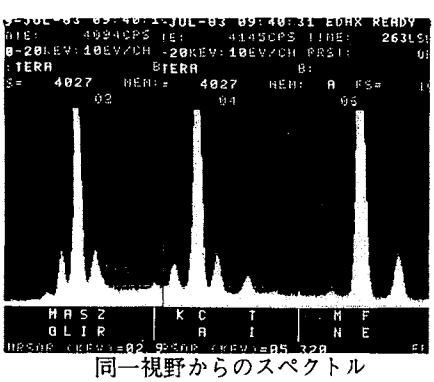
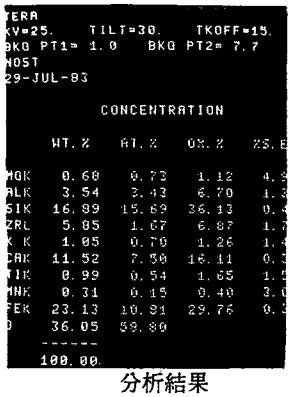
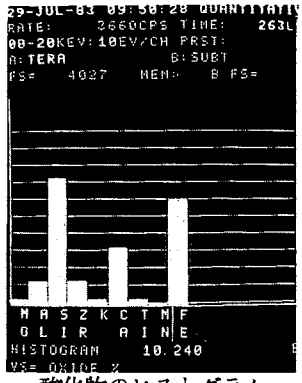


Photo.5 の続き
Photo.5の続き


同一視野からのスペクトル



分析結果



酸化物のヒストグラム

Photo.5 (その2) 寺尾遺跡(熊本県)出土含鉄鉄滓金属鉄中の非金属介在物のエネルギー分散分析結果

4．下山西遺跡25号住居址出土木炭について

熊本大学教育学部 **大 迫 靖 雄**

木炭の出土状況

25号住居址からは多量の木炭が出土した。木炭の出土状態は第119図に示す通りである。また，出土した木炭の寸法，保存状態等については表１に示した。ただ，本表に記録された寸法は，使用されていた状態での実寸法とは対応しない。なぜなら，例えば資料No.41（以後資料は略する）は長さ172cmで非常に長い木材であったことを示している。しかしながら，厚さはわずかに２cmである。これは内部の木質部がほとんど存在せず，ほとんど樹皮部だけが出土している。これは半焼の状態で埋没した木材（丸太？）のうち，残存していた木質部が埋没後に腐朽してしまったこと示している。

以上，一つの例を示したが，他の木炭についても同様なことが考えられる。したがって，本表に示した寸法が，焼失する以前，建築に使用されていたときの実寸法とどの程度対応するかは定かでない。

次に出土木炭の位置的な状況について検討する。第119図および表1を参照すると，寸法が大きく，柱と思われる木材は住居址の外周部に多くが存在し，各々が住居址の中心部に向って埋没されている。これらから推定すると本住居址はなんらかの理由で住居が焼失し，そのままの状態（消火の為に土を被せることも含む）で埋められたと思われる。したがって，出土した木炭はほぼすべてが住居建築のために使用された木材で，その用途は柱または桟として使用されたものと思われる。No.17の上に，これらの小丸太にほぼ直交して茅の炭化したものが存在しており，本住居，とくに屋根と思われる部分に茅が使用されていたことを示している。

さらに詳細に木炭の位置的な状況を見ると，本住居址の場合，木炭の残存は周辺部に多く，中心部に少ない。特に炉跡の周辺は焼土が多く見られ，残存木炭も少ないことが明らかである。また，住居址の周辺部でも南西の隅と東側に出土木炭の量は少ない。この点については，南西部隅には覚乱部があり，なんらかの形で木炭が紛失した可能性がある。これに対して，東側については特別な理由は考えにくい。

全体的に寸法が大きく，また樹皮を残した木炭（第119図に示してある）が多いことから，木炭として残存したものは完全に焼失しない火災の比較的初期の段階で埋められ，その中で木炭化した可能性が大きい。これに対して，炉周辺の出土木炭が少ないのは，この附近の木材は完全に焼失したものがかなりの量あったため木炭として残らなかったことも考えられる。さらに，

南東の隅の木炭 (No.49～55) は出土した木炭の中でも老化が著しい。これは，他の部分と比較して，木炭化が不完全で，木質部がある程度残っていた結果，その木質部が腐朽することによって老化が進んだことが推定される。これらのことを考え合わすと，出土木炭の量が少ない東側では火災の際，完全に燃焼したか，あるいはほとんど燃焼しなかったかのいずれかであると思われる。

北側の木炭の残存状態，またはNo.17の上に残っていた茅の一部等の残存状態から，本遺跡の場合，火災が発生した時点で，木材が不完全燃焼の状態のままで周囲から土が被せられた結果，木材が土中で木炭化したことが考えられる。さらに，樹皮を附着した木炭が北側に多く存在するが，これらの木部は非常に老化が進んでいる。これは樹皮が燃焼した時点で土が被せられた結果，木部の木炭化が進まず，木質部が残った結果，その部分が腐朽したことが推定できる。

以上のような考えは，前述したNo.41にもあてはめることができる。このNo.41はかなり直径の大きなものであったと思われる。しかしながら，出土したものは，ほとんど樹皮のみで，しかも保存状態はかなり悪い。ただ，出土した樹皮の幅27cm，長さ172cmであることから，他の出土木炭と比較するとかなり大きな寸法を示している。また，No.41のすぐそばに柱跡 Pit 2 があることから，No.41はこの柱であったとも考えられる。ただ，これと対となっている Pit 1 の周辺には，No.41と対応するほど大きな寸法の木炭は存在していない。しかしながら，No.57，58はかなり大きなもので，しかもNo.41とほぼ並行していることから，これに対応するものとも考えられる。いずれにしても，大径木は燃焼しにくいため，木質部が多く残り，消失する可能性が強い。

次に，出入口があった西南部附近の木炭は老化の著しいものが多い (No.31，37～40)。このうち，No.40は径も大きく，柱であったことが考えられる。しかしながら，残存している長さは短かい。これはNo.41と同様に炭化しない木質部が多く，その部分が腐朽したことが考えられる。

使用された樹種

本調査のため収集した木炭は表1に示された計61種である。この中には種々の樹種が含まれている。老化がはげしいことと，木炭の中には詳細な部分が欠落していて鑑定不可能なものもあった。しかしながら，樹種全体についてみると，かなり明白ないくつかの特徴がある。

まず，収集された木炭はすべて広葉樹であった。また，収集された木炭の大部分が環孔材であった。

阿蘇地方の遺跡から住居址が出土した例は多い。その中には，柱の出土例もいくつか報告されている。この場合もほとんどが広葉樹で，環孔材のうちコナラまたはクヌギが使用されている例が多い。また，南郷谷の方ではクリが出土した例もある。本遺跡から出土した木炭の場合も，巨視的観察からすでに明白な環孔が見出されるものが多い。そのうち，圧倒的に多い樹種

は2種に分けられる。

その一つの樹種について，例としてNo.7の顕微鏡写真を写真No.7—(a)～(c)に示す。本写真の木口面(Photo. No.7—(a))は下部が髄側，上部が樹皮側を示している。本木口面には明らかな孔圏部が見られ，環孔材であることを示している。孔圏内の大道管（この場合，平均接線径は約200μmを示す）の周囲には周囲仮道管が見られる。また，写真の下部にはチロースを有する大道管も見られる。さらに，孔圏外では道管の径は急激に減少して，その小道管は放射方向に並んでいることを示している。放射組織は木口面と板目面（Photo. No.7—(c)）に広放射組織が観察される。また，広放射組織以外の放射組織は単列放射組織であることを示している。

以上のような特徴から，本樹種はコナラ亜属（Lepidobalanus Endlicher）に属する樹種（クヌギ，アベマキ）と鑑定される。さらに，樹皮のコルク層の状態等から，本樹種はクヌギ（Quercus acutissima Carruth.）と鑑定される。

他のもう一つの樹種について，例としてNo.40の顕微鏡写真を写真(No.40—(a)～(c))に示す。本写真の木口面(Photo. No.40—(a))は2年輪を含むもので，上部が樹皮側，下部が髄側を示している。本試料も明らかな孔圏部を有し，環孔材であることを示している。孔圏部の大道管は年輪に沿って1～2列に並んでいる。　また，大道管（この場合，平均接線径は約120μmである）の形状は円形もしくは楕円形でおおむね単独である。さらに，大道管の周囲に周囲仮道管が鞘状に存在している。孔圏外の道管は，径が急激に減少し，樹皮側に向かって火炎状に存在している。放射組織はおおむね単列放射組織であるが，時として広放射組織(板目板—Photo. No.40—(c)右側に存在する)が出現する。また，柾目面(Photo. No.40—(b))に現われる放射組織はほとんど平伏組織からなる同性放射組織を示している。

以上のような特徴から，本樹種はコナラ節（sect. Prinus Loudon syn. Diversipilosae Dentatae）に属する樹種（カシワ，ミズナラ，コナラ，ナラガシワ）と鑑定される。さらに本遺跡の状況を考慮するとコナラ（Quercus serrata Thunb.）と鑑定される。

本調査の対象とした試料61個のうち，50個が上記2樹種のいずれかであった。（ただし，外観より判断できるものが多いので，すべてを顕微鏡で顕眼したわけではない。）

上記以外の樹種として，環孔材2例（No.21, 44）がある。これは同樹種なので，例としてNo.44の顕微鏡写真を写真3—(a)～(c)に示す。

まず，本写真の木口面(Photo. No.44—(a))は4年輪界を含む部分を示している。上部が樹皮側，下部が髄側を示している。本試料の場合，大道管が年輪界にほぼ1列に並んで孔圏部を形成した環孔材であることを示している。この大道管はほぼ楕円形で単独であるが，時には複合している。孔圏外の小道管は多数集まって接線状あるいは斜線状の集団管孔を形成している。柾目面(Photo. No.44—(b))から道管は単せん孔であることが見られる。放射組織は数列のものが全体的にほぼ平等に走っていることが木口面と板目面(Photo. No.44—(c))に示されている。さらに，柾目

面と板目面において，放射組織の上，下端に結晶を含んだものが見られる。これらの特徴から，本樹種はニレ科（Ulmaceae）に属していることが鑑定できる。さらに，大道管の状況，小道管の配列，結晶の存在等から，本樹種はケヤキ（Zelkova serrata (Thunb) Makino）と鑑定される。

この他，5個の散孔材（No.24, 55, 57, 58, 60）が存在していた。ただ，これらはおおむね小径木で，しかも老化がはげしいため，詳細な部分の組織観察が不可能であったので，種の鑑定はできなかった。このうち顕微鏡観察を行ったNo.32, 57, 60の顕微鏡写真の一部をPhoto. 1, 2に記載する。

なお，樹皮のみが残存したNo.41については，前述したように老化が激しく，しかも木部がほとんど残存しないため，樹種の特定は困難であるが，樹皮の特徴がクヌギに類似していたので，クヌギとした。

以上のような使用樹種を考えてみると，本住居の場合，ある程度樹種を選択して使用したことが考えられる。また，従来の木材の使用を考えてみると，使用する樹種と森林植生との間にある程度関係があると考えられる。この点について，鈴木の調査によると阿蘇地方の植生の中にコナラ，クヌギ等が含まれている。また，熊本県の植物誌によるとクヌギ，コナラはこれらの地方に多く存在することが示されている。ただ，鈴木の調査ではこれらの樹種が特に多く存在したことは述べていない。

前述した本遺跡とあまり離れていない陣内遺跡において，筆者が調査した結果でも，大きな柱はコナラが主として使用されていた。このことを考えると，ある程度通直で，大径木となる樹種で採集が容易であったのはこれらの木材であったことが推定できる。

なお，資料に示されている61個体の樹種，老化程度等については，表1に示した。

木材の使用状況

ここで調査した木炭資料には加工痕はほとんど認められなかった。なお，本遺跡からは多くのヤリガンナ（鉋：27点）が出土している。このヤリガンナを住居の建築用に使用したとするなら，収集した丸太について，なんらかの表面加工が施されたものと思われる。しかしながら，本調査の対象とした木炭61個の資料表面にそのような加工痕は認められなかった。ただ，本調査で出土した木炭は表面が焼けたものであり，この出土木炭に加工痕がないということで表面加工がなされていなかったと断定はできない。

しかしながら，表1や第119図（本図中に樹皮の残っていたものが示されている。この他にも部分的に樹皮が附着したものもあった）でも示されるように，多くの出土木炭に樹皮の附着したものが出土している。さらに，No.41のように樹皮のみが残っているものもあった。これらのことを考えると，本住居に使用された木材は丸太のまま使用され，樹皮をはぎとるなどの表面加

工はなされなかったことが推定される。勿論これだけの木材を使用するためには伐倒もしなければならない。したがって，そのための工具は使用されたことは当然であろう。

木炭の木口面を観察すると，柱等に使用されたと思われるものの年輪は大きい。また，髄からの年輪数も少ないものが多い。これらのことから，大径木というより幼齢木が多く使用されたと思われる。これらの理由は推定にしかすぎないが，住居用木材の寸法がある程度定まっていたことや加工の容易さ，材料収集の容易さなどが考えられる。

終りに

一戸の住居用として，多量の木炭が出土したことや樹種がかなり揃っていたことなどから，若干の推定を行った。しかしながら，資料の数の多さや日時の余裕がなかったので，全部の資料について一個体ずつ詳細に検討するには至らなかった。さらに検討すべき点があると考えている。機会があったら，推定部分の解明を行ってみたい。

参考文献

○高谷和生：「熊本県下山西遺跡」，日本考古学年報，36，296(1983年度版)
○鈴木時夫：「阿蘇火山地方の潜在森林植生」，Japanese Jour. Ecology，25，1(1975)
○大迫靖雄：「阿蘇陣内遺跡から出土した柱根と森林植生」，えとのす，22，53(1983)
○熊本記念植物採集会：「熊本縣植物誌」，長崎書店，1969

第1表　25号住居址出土炭化木材計測及び観察表

資料採集番号	全長 (cm)	幅長 (cm)	厚 (cm)	直径 (R)	斜角 (度)	備　考	
1	11	7	2		2		クヌギ
2	93		1.5	5	12		クヌギ　年輪幅大
3	60			8	8		コナラ
4	27			6	2		コナラ？　小径木，老化はげし
5	58			8	10	バークあり	クヌギ　年輪中心部大，外小
6	48			6	18	バークあり	老化はげしく，完全に燃焼しているため，鑑定不可能。
7	74			20以上	15	バークあり	クヌギ　年輪幅大(約3mm)　老化はげし
8	15				0		クヌギ　小径木，老化はげし
9	80		2.5	20以上	10		クヌギ　年輪大
10	50		2		10		クヌギ　年輪大
11	90	8	3		12		クヌギ　年輪小
12	50	10	3	15以上	18		コナラ？　老化大
13	45			6	10		環孔材　老化はげしく，曲がりあり，鑑定不可能。
14	30			10	−8		クヌギ
15	103	8	2		18		クヌギ　小径木又は枝，年輪小。
16	60			25以上	14	バークあり	コナラ　老化大，広放射組織の部分で分裂
17	15			4.5	8		クヌギ　小径木，年輪大，茅かかる
18	38	5	2.5	20以上	4		クヌギ
19	40			10	45	バークあり	クヌギ　年輪大(約3mm)，幼齢木 採集時期推定できる(5，6月頃)
20	110	7	2		2		クヌギ？　老化はげし
21	23			10	10		ケヤキ
22	20	10	2		16		クヌギ
23	130			10以上	12	バークあり	クヌギ
24				6			散孔材，小径木
25				6			クヌギ
26	100	9	1.5		14		クヌギ
27	42	6	5		14		コナラ？
28	45	10	1.5		10		コナラ？
29	60	10	6				クヌギ　年輪幅大(約3mm)
30	54	12	4				クヌギ　年輪，内大(2mm)，外小(1mm)

資料採集番号	全長 (cm)	幅長 (cm)	厚 (cm)	直径 (R)	斜角 (度)	備考	
31	98	7	2		16		コナラ　老化はげし
32	80	6	1		4		散孔材　老化大
33	88	8	3		10		コナラ　髄近く年輪きわめて大(5mm)
34	25			13	20		コナラ
35	60	8	1.5		2		コナラ　老化はげし
36	40	9	3		22		コナラ
37	30	9	2		6		コナラ　老化はげし
38	60	9	1.5		6		コナラ　老化はげし
39	55	10	3		8		コナラ　老化はげし
40	30			22	12		コナラ　老化はげし
41	172	27	2				樹皮のみ　クヌギ？
42	30	9	2			バークあり	土がほとんど,木部ほとんどなし,鑑定不可能。
43	45	10	2.5		12		クヌギ　小径木
44	32	4	2				ケヤキ
45	20			6			コナラ？
46	32			8			コナラ
47	20	7	3				コナラ　年輪大
48	25			12	58	バークあり	コナラ
49	148	8	3		4		コナラ？　老化はげし
50	25	7.5	1		10		老化はげし，外周わずかに残るのみ，鑑定不可能。
51	30	9	2.5				コナラ　年輪幅(約2mm)
52	25	10	2				コナラ？　老化はげし，小径木。
53	115	7	1.5		6	バークあり	クヌギ　老化はげし，残存部小。
54	23	7.5	5		8		コナラ　年輪大(約5mm)
55	35	11	1		12		散孔材　老化はげし
56	76	9	1		22		コナラ？　小径木，老化はげし。
57	96	20	2				散孔材　老化はげしく，ほとんど土。
58	113	16	2.5				散孔材
59	98	9	0.8				クヌギ　老化はげし
60	60	10	5				散孔材
61	50	12	4				クヌギ

No 7 -(a)　木口面

No 7 -(b)　柾目面

No 7 -(c)　板目面

No32-(a)　木口面

No32-(b)　柾目面

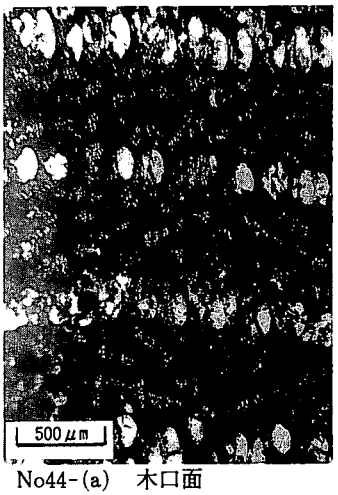
No32-(c)　板目面.

No40-(a)　木口面

No40-(b)　柾目面

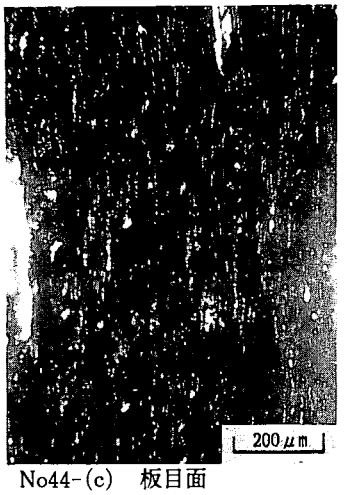
No40-(c)　板目面

Photo.1　下山西遺跡第25号住居址出土木炭 顕微鏡写真(その1)

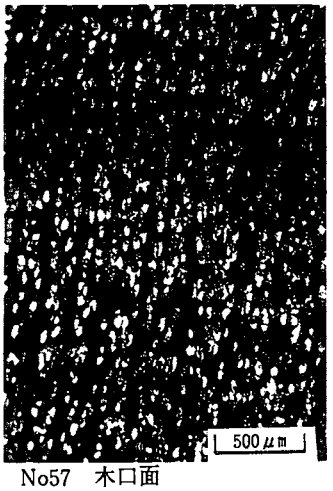


No44-(a)　木口面

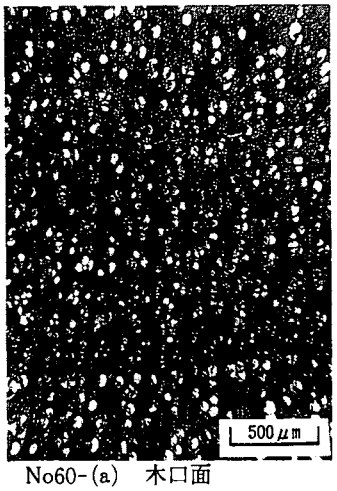
No44-(b)　柾目面



No44-(c)　板目面



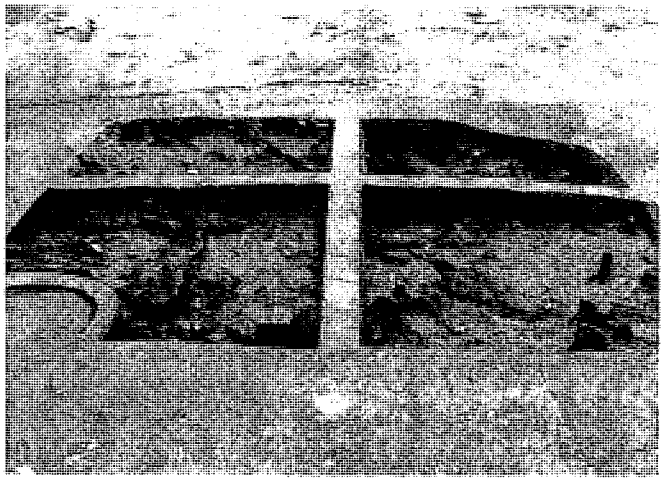
No57　木口面



No60-(a)　木口面

No60-(b)　板目面

Photo.2　下山西遺跡第25号住居址出土木炭 顕微鏡写真(その2)



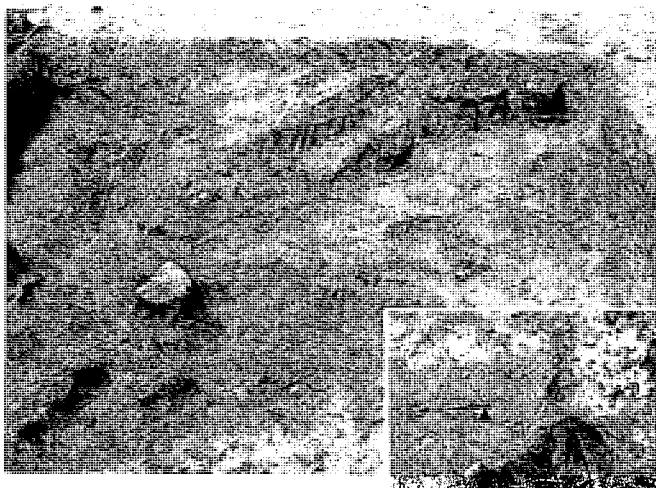


Photo.3　25号住居址

1．出土状況
2．焼失状況
3．A区出土状況
4．焼失状況
5．焼失状況

5．阿蘇鉱山出土の木器

乙 益 重 隆

発見の動機

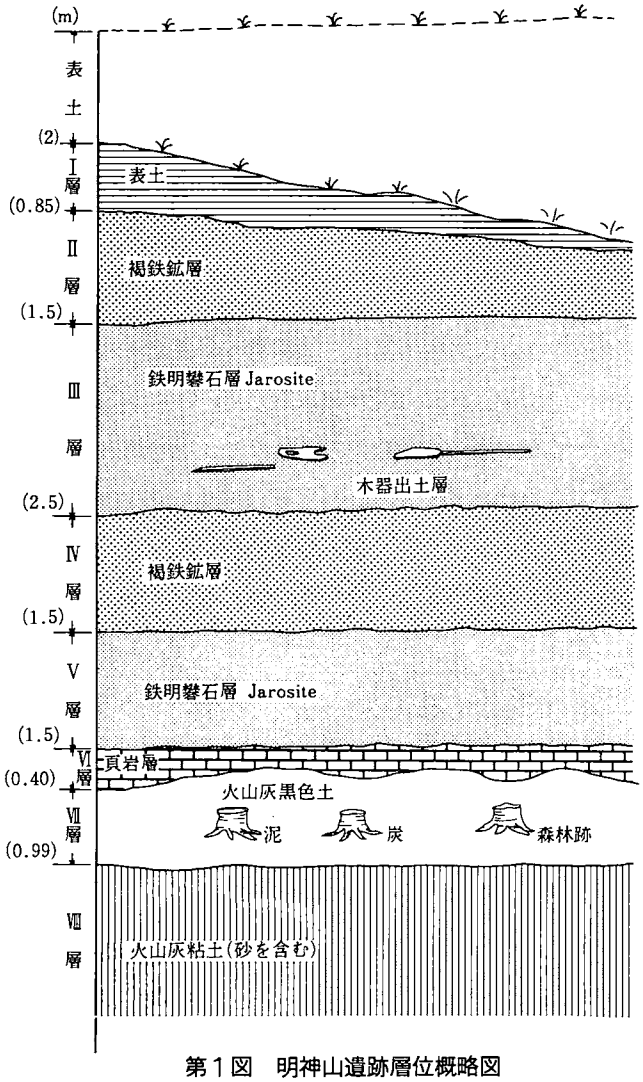
本遺跡は熊本県阿蘇郡黒川村大字乙姫小字明神山の三井鉱山三池鉱業所阿蘇鉱山内にある。元来この鉱山は褐鉄鉱の鉱山として大正7，8年頃発見されたもので，戦時中は三井鉱山三池鉱業所の有力な採掘場の一つであったが，終戦後は全く衰微し，最近では遂に鉱山閉鎖の止むない事情に至っている。しかるに昭和23年中頃本鉱山から鉄明礬石（Jarosite）とよばれる特殊な有用鉱物が含まれていることが確認せられ，そのため再び採掘作業が始められた。鉄明礬石というのはカリ肥料の原料になるもので，従来は殆んど知られて居らず僅かにジャバ島より採掘されるものが工業化されているに過ぎなかった。たまたま商工省地下資源調査所ではこれが出土地の全国的な調査を行った結果，日本では本鉱山の他長野県，群馬県その他北海道にも発見されるに至った。本鉱山は商工省地下資源調査所技師，現東京大学教授片山信夫氏によって発見され，昭和24年2月より試掘を行っているが，カリ分7パーセントを含み未だ工業化されるまでに至っていない。

かような事情から本鉱山はにわかに活気づき，3月上旬頃鉱山の中央部地点の表土下約4米の深所に木製品らしいものが出土し，採鉱主任東田勇氏によって注意されたのが今回調査の動機となった。たまたま帰省して居られた鉱山長の令息土山公也氏（大津高校教諭）はその重要性を認め，早速現地の見取図を副えて筆者に通報されたので，去る昭和24年4月28，29日の両日に亘り現地踏査の機を得たわけである。

本遺跡の調査には坂本経堯・中島秀雄氏に色々と御助力をいただいた。鉱山長土山賢次氏には地質・岩石・鉱物の面から有力な助言を賜わり，又社員の方々には何かと便宜をいただいた。ここに厚く謝意を表する次第である。

遺跡の概要

本遺跡は阿蘇連峯よりゆるやかな扇状地が北に向って走った突端（扇状地涯）と，外輪山の内壁にそって流れる黒川にはさまれた沖積平野の中央に位し，明神山と称する小高い丘を形成している。（水田面より約4米）丘は全体が褐鉄鉱及び鉄明礬石を含んだ粘土より成り，その鉱脈は明神山を中心に東西約8キロに及ぶと云われる。附近一帯の水田はいわゆる湿沢地で年中湿潤状態を呈し，米の収穫に支障を来している。附近一帯は往時阿蘇カルデラ内の火口原



第1図　明神山遺跡層位概略図

湖が点在していたらしく，今でも明神山の北方約300米にイセドガ池と称する小池が残っている。遺跡に通じる道は豊肥線内牧駅より西北に約3キロ，鉱山専用の道路が設けられている。

明神山は元来一連の丘陵をなしていたのであるが，鉱山採掘の結果現在三つの小丘が出来ている。鉱山ではこれを便宜上北に向って右より一本松山，中央を宝山，左方を茶ほし山と名づけている。一本松山の位置は三角標高480.3米があり，割合目立った独立樹一本松が立っている。

地層の状態は中央部宝山地点に完好な断面が認められる。しかし地点によっては著しく異る所もあり殊に一本松山一帯の地層は乱脈を極め，各所にそれぞれ時期を異にして湧出したらしい湧水口が認められ，本鉱山の成因を有力に物語っている。

今，宝山地点の地層について述べれば次の通りである。

層位の概要　（第Ⅰ層）現在の表土は既に採掘のため2米程除去されていて，目下85糎位の鉄分を多量に含んだ粘土におおわれている。（第Ⅱ層）はその下約1.5米の褐鉄鉱層となり，（第Ⅲ層）はその下2.5米程度の鉄明礬石層があり，木器を含むのはこの層である。鉄明礬石はクリーム色の粘土で乾燥すればクリーム色の美しい粉になり，独特な臭気をもっている。一般にこの層に含まれている有機質のものは保存状態が良く，掘り出されたものは原形を保っているが，褐鉄鉱層のものは腐蝕が甚だしく，原形をとどめるものは少ない。しかし褐鉄鉱層中にはしばしば芦類や雑草が化石化して含まれているのは興味深い。（第Ⅳ層）はその下更に1.5米の褐鉄鉱層が認められ，（第Ⅴ層）はその下1.5米の鉄明礬石層があり，（第Ⅵ層）は約40糎の火山灰から成る頁岩質の硬い土壌から成っている。（第Ⅶ層）は真黒に近い泥炭層から

成り（深さ１米）中に森林の跡を物語る木の株や木の葉が堆積していて往時の植物景観を良く示している。特にその品種にはスギが多く，他にカシ等が認められた。更にその他のものについては専門家の鑑定をあおぎたい。これ等の植物が我が国に生育するようになったのは比較的新しく，この数千年内のことと云われている点から考えても，本鉱山の成立年代が短期間のうちに出来上ったことが判断される。殊に現在宝山北方の凹地にはおびただしい木の株が散乱している。更にその下層にあたる(第Ⅷ層)は火山灰質の粘土層から成り，割合に硬く砂を含んでいる。この層は余程深くつづくと思われるが，現在の採掘過程ではそれ以下の層を検知するまでに至っていない。(第１図参照)

遺物の概要

本遺跡出土の遺物は殆んど全部が木製品又は木切れの類であって，年代的位置を示すべき土器その他の残欠については極力注意したにもかかわらず何等出土しなかった。殊に前に述べた各層は何れも自然層であって，人間生活の痕跡を考うべき条件は全く認められず，むしろこれ等の遺物は何かの理由で放棄されたと見るのが至当であろう。

第１例（第５図上段）

この木器は茶ほし山地点の鉄明礬石層(ジエロサイト)（第Ⅲ層）の現地表下約４・50米に発見されたもので当時舟に用いるかいと判断され，又新聞紙上にもかいとして報道されたのであるが，おそらくは農具の一種として扱った方が至当と考えられる。その理由としては同様の例が千葉県君津郡清川村菅生からも出土して居る。(長さ95.5糎，現存幅4.4糎）身幅の割合に薄手につくられ，かいとして使用するには繊弱である関係上，古典に見える木鋤と推定するのが至当であろう。尚，直接的関係を考えるわけには行かないが，ニュージーランドのマオリ族が約１世紀前迄使用していた鋤も同様な類でこの木器の用途を考える上に於て興味深いものがある。用材は正目の良く通った堅木を使用している。

第２例（第３図）

本品は明らかに木鍬と断ずべく用材はカシである。現地表下４・30米(第Ⅲ層)より出土し長さ38.3糎，最大幅16.6糎，厚さ2.3糎を有する。形態上から云えば従来の考古学上発見されたものや，土俗学上の傳世資料にも数少ない新例に属する。特に異例とも云うべき点は刃先が二股に分れていて股鍬の型をなしている点であろう。股鍬は既に奈良県の唐古からも出土して居り，年代はやや降るが，最近有名になった静岡市登呂遺跡からも出土し，その起源の古いことが推察される。前者の木鋤と共にこのような農具は泥土の中をかきまぜるためのもので，水田耕作に使用されたと考えられる。柄のつけ方はやや直角に近い鈍角を以て取付けたものであろう。

第３例（第２図参照）

おそらく木鋤の鋤先の破片であろう。材はカシを用いている。

第4例（第4図右参照）

カシ材の丸木のままを一端を鋭く削り突がらせている。現存全長93糎，直径5.2糎，現在山間部の農村で使用している担い棒等と考え合わせて興味深い。球磨郡地方ではこれをヤンモコ（おそらく山負子であらう）と称し，農用運搬器具として盛んに使用されている。

第5例

用途はわからないが，全長1・59米，直径6糎を存し，両端は鋭利な刃物で切断している。用材はカシの皮つきのままを使用している。以上の木製品は何れも旧表土下約6・50米の頗る

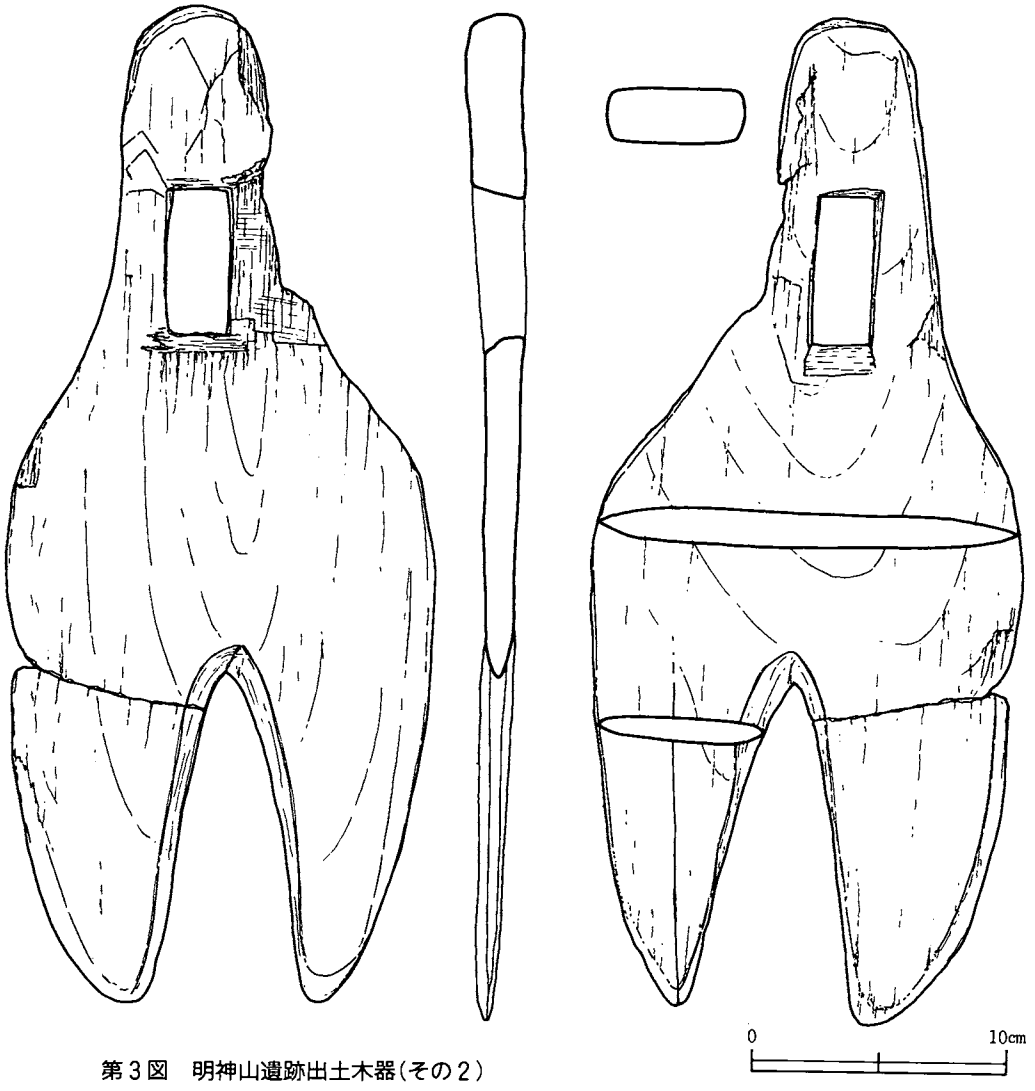
0　10cm

第2図　明神山遺跡出土木器（その1）

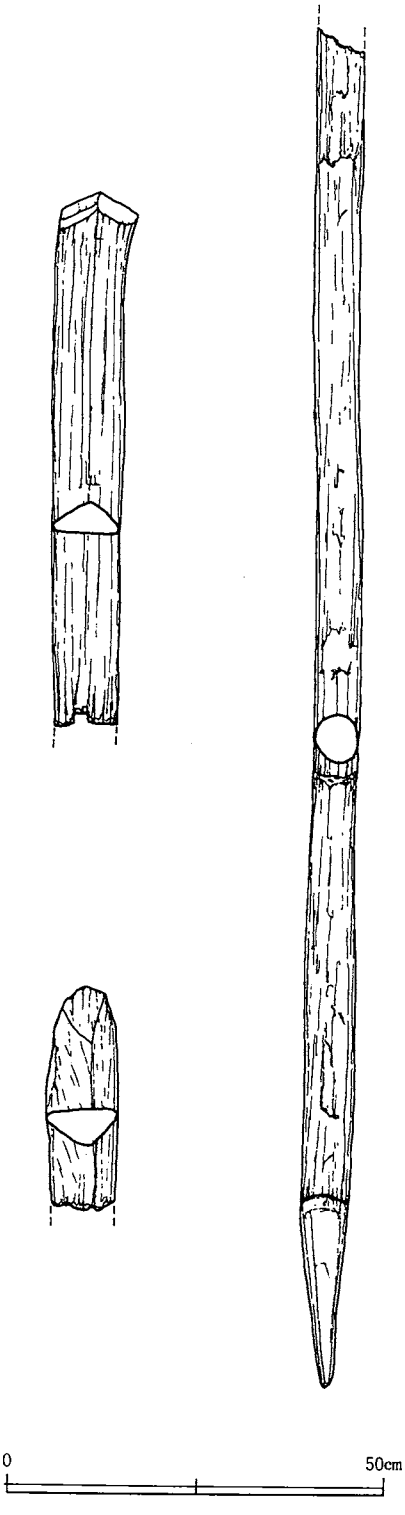
深所のジエロサイトの層内に発見され，人間生活の形跡は何等認められなかった。

結　論

以上の調査結果に基き本遺跡の成因，及びこれが文化史上の年代的位置を考えてみたい。しかし遺跡自体に自然の地層は認められるものの，生活層が存在しない以上，本鉱山の成因から検討しなければならない。そのためにはどうしても地質，岩石，土壌，地形学等の自然科学面の援助に待つ外致し方なく，筆者の浅薄なる知識を以てしては斯学の良心的な在り方をけがすのみで，到底結論には到達し得ないのであるが，一応調査員としての責務を果す意味において憶説を述べてみたい。本鉱山の成立する以前，少くとも数千年前に於ける此の地方は阿蘇火山のカルデラ内に点在する火口原湖であったものと推定される。当時のベースと考えられる火山灰粘土層は鉱山の東側採掘場にも見えているが，大体鍋底状を呈していたものと判断される。そ



第３図　明神山遺跡出土木器（その２）



第4図　明神山遺跡出土木器（その3）

の基盤には各所に亀裂面があり，そこから地下の有用鉱物である鉄分やカリ分を多量に含んだ熱泉を噴出したものらしく，今日鉱山の各所に噴出孔と地層の盛り上りが認められる。その最も好例は一本松山採鉱場へ通ずる途中の地層断面である。ここに於てはジエロサイトや褐鉄鉱，泥炭等が湧出に応じて噴水状に層を作り見事な縞状をなしている。しかもそれ等の間には芦や草木の炭化したもの，化石化したもの，高師小僧等が含まれていて，各々の層が度々地表面にさらされたことを物語っている。しかもそれ等の地層は粘土が主成分である関係上沈澱堆積したものは硬化し，次第に盛り上って明神山が形成されるに至ったのであろう。その一方附近の湿沢地帯は東西に向ってゆるやかな傾斜をなしているので絶えず水蝕をかうむり，遂に硬化した地塊となり明神山だけが取り残されて残丘を形成したものであろう。かように考えると此等地層の各部には人類の棲息した条件は何等考えられず，現在木器以外に遺物の発見されないのも納得出来るようである。特に鉱山長土山賢次氏の御説明によれば温泉熱度が極度に高いものを噴出する時にジエロサイトが構成され，熱度の低い時には褐鉄鉱が形成される由で，間欠的な温泉の噴出が此の場合にも想像される。従って此等の木器は他からの流れ込みと判断するのが最も至当であろう。もし強いて想像が許されるならば，恐らく往古，現地の程遠からぬ所に人が棲んでいて熱湯を利用するか，採集するためにやって来た者が木器を取落すかまたは置忘れたとでも考えた方が至当であろう。特に木器は泥土をかき上げたり孔を拡張したりするにふさわしく，各層の間には植物の生育が認められるので，全く人の近づけない状態でもなかったらしい。

最後に此等の木器の年代的位置であるが，他に文化遺物を伴出していないので積極的なことは云えないが，大体に於て古墳時代から歴史時代の或頃迄のものと云

うのが無難ではなかろうか。殊に第1例の木鋤が，千葉県菅生出土のものと同類である点，出土地層が非常に深所である点等からして，私は大体古墳時代の後期頃に想定したい。しかしこれは何度も述べるようにはっきりした根拠があってのものではないことをお断りして置きたい。何れにしても世に考えられているような鉱山なるものは，その性質によっては非常に新しい年代に短期間に構成されるものであることを知る時，今更ながら認識を新たにせざるを得ないものがある。

（追記）（第5図下段右下）

本遺跡の解明について今の所唯一の手がかりになりそうなのは滑石製甑であろう。本品は他の木器類よりもおくれて，去る昭和25年7月頃一本松山より出土した。土山公也氏の言によれば地表下約80糎位の褐鉄鉱層に包含されていたもので，他に何等伴出物は認められなかったといわれる。前にも述べた通り同地点一帯は地層が混乱していて，宝山地点とは6～70米もはなれて居り，更に茶ほし山とは百米以上もはなれていて，果して前者の木器を考える上の傍証資料とはなり得ないかも知れないが，今は一応考慮に入れることにした。器形は深鉢形を呈し，一見石鍋と考えられないこともないが，胴部及び底部近くの一帯に小孔が不規則にあけられていて，むしろ甑と見る方が適当であろう。全体の約三分の一を保ち口縁部にそって長方形の把手を彫り出している。滑石は緻密なものをくりぬいてつくり，表面に若干煤を帯びている。復元直径26糎，高さ約18糎，底部は全体の割合に薄くなっていて恐らく丸く中空になるのであろう。

以上の外宝山及び茶ほし山からは自然木片と思われるものが若干出土しているが特に目ぼしいものは見当らなかった。

其の他の参考となるべき事項

附近の遺跡

此の附近一帯は度々の阿蘇火山活動によって火山灰土が厚く堆積していて遺物の散布地をさがすのに容易ならざるものがある。しかし幸いにも明神山の南方約700米，永水村字永草松山では蛇紋岩磨製石斧が出土している。形式上から判断して恐らく縄文式文化に伴うものと判断される。現地を踏査したものの一片の土器も発見し得なかった。更にそのつづきの台地の突端黒川村乙姫，小字名不明に土師器片の分布地域を発見した。破片より推定して奈良時代より平安初期頃のものと思われた。その他外輪山の山麓には縄文式や弥生式土器の出土地が分布することを坂本調査員より承ったが日程の都合上踏査し得なかった。

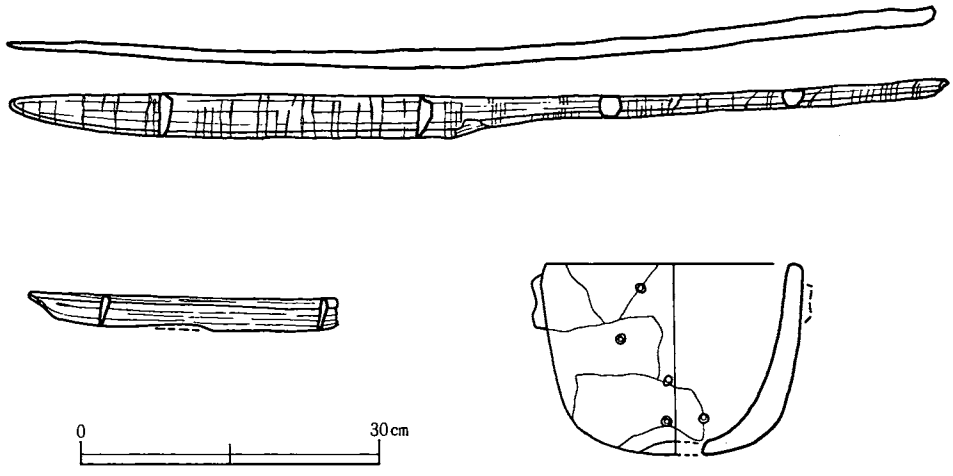
附近の傳説

1．明神山は阿蘇大明神の第12柱目の乙姫様が毎日茶を乾された所だそうで，附近にはその神社もあると云う。

2．イセドが池はイセド（伊勢どのであろう）という女性が何の理由かわからないが飛び込ん

で死んだ所と云われ，今は草が繁っていて足首迄位の水溜りになっている。　　以上

昭和24年5月1日付の出張報告書より。



第5図　鋤，刀状木器，滑石製甑（その4）

第6図　明神山遺跡の現況

시모야마니시 (下山西) 유적 발굴조사 개요

1. 위치 와 현황

시모야마니시유적은 구마모토현 아소군 아소정 오토히메 (熊本県阿蘇郡阿蘇町乙姫) 에 있다. 아소화산 (阿蘇火山) 의 북쪽에 위치하고 아소칼데라 (Aso Caldera) 를 향한 구릉선단에 있다. 표고는 약 490m 이다.

유적동쪽에는 수량이 풍부한 작은 시내가 흐르고 옛날부터 중요한 생활용수로서 사용해왔다. 또한 유적 가까운 곳에는 철광이 많이 매장되고 근년까지 채굴되어왔다.

2. 조사 의 경과

아소 (阿蘇) 지방의 1960년부터 수전의 도지구획 정리와 수적토양 개량을 목적으로 구마모토현은 대규모의 포장정비사업을 수행하고있다.

1972년 공사구내로 부터 석관 (石棺) 가 발견되고 발굴조사가 실시되되었다 (제1차조사) . 더우기 근접한 남쪽의 공사예정지에서도 많은토기가 출토되었다. 그리고 이지역이 야요이시대 (彌生時代) 의 취락유적이라는 것이 판명되었디. 1983년 5월부터 석관과 취락의 조사가 실시되어 (제2차 조사) , 1983년12월에 조사를 완료 하였다.

3. 검출유구

A구 이지역은 150m 취락지구부터는 북동쪽에 위치하고있다. 그곳에 있는 석관묘 (石棺墓) 4기 (基) 가 조사되었다. 1호부터 3호까지는 아주 가까이 접해있고 4호만이 2m정도 떨어져있다. 1호장축 (長軸) 의 방향은 남북으로 향해있고 그바께의 3기 (基) 는 모두 동서쪽으로 향한 장축를 가지고 있다. 1호는 작은 석관으로 전장0. 8m, 폭0. 37m 이디. 조사이전에 대부분은 파괴되어 있었다. 2 3호는 같은 구모로

전장1．72m 1．89m, 폭0．48 0．6m이다. 석관측의 벽에는 3 4개의 대형의 평석 (平石) 이 사용되었다. 석관밑에는 평석이 깔아져있다. 매장인골 (埋葬人骨) 은 별로 남겨져있지않아서 머리위치만 간신히 알수있고 연령 (年齡) . 성별 (性別) 등은 알수없다. 부장품 (副葬品) 으로서는 철검 (鐵劍) 1개씩이 출토되었다. 더우기 석관 내부로부터는 다량의철단 (鐵丹. Bengala) 이 출토되었고 그 총량 (總量) 은 솔로 105Kg에 달한다. 돌널무덤 축조순서는 배치상황 (配置狀況) 부터 보면 3호 2호 1호로 되어있다. 4호는 알수가 없다.

A구 이 지구는 1800m 를 조사하였다. 움집터 33채, 도랑7, 구덩이 4기를 검출하였다. 이것들은 모두 야요이시대 (彌生時代) 후기 종말기의 유구들이다. 움집터33개를 평면형 (平面形) 부터 보면, 1정방형이 16채, 직사각형12채, 불명 (不明) 이 5채가 있다. 규모는 여러가지가 있지만 최대규모는 7．3mx6m, 최소규모는3．4m이고, 영균치는 6x5m정도가된다. 움집터의 깊이는 1．2m를 넘는 곳르 있다. 움집터의 기둥구멍은 2개, 또는 4개의 형태를 하고 있다. 움집터들은 그 배치상황부터 4군 (群) 으로 분류할수있다.

4． 출토유물

토기 많은 토기들이 출토되었다. 이것들은 모두 야여이시대 (彌生時代) 후기 내지 종말기의 것으로 보여진다. 예를들면 단지 (壺) 는 큐우슈 (九州) 동쪽지방에 있는 앙콕시식 (安国寺式) , 남쪽지방에 있는 멘다식 (免田式) 중큐우슈 (中九州) 에 많은 노베타식 (野辺田式) 들이 3양식 (style) 으로 되어있다. 한 돌널무덤 안에는 그 3양식 토기들이 동시에 보여진다. 1호 돌넘널무덤에서 출토된 멘다식 (免田式) 토기는 무지개무늬가 그려져 있는 큰 단지 (壺) 이다. 이것은 돌널무덤이 묻히는 최종단계 생기는 움푹팬땅에 놓여져있었다. 토기아래에서는 목탄 (木炭)

이 확인되었다. 이것은 제사에 사용한 토기라고 생각되어진다.

철제품과 석제품　　철제품은 모두 １６３개에 달하고 있다. 그 내용은 살촉 (鏃) ４３개, 창대패 (鉋) １８개, 작은낫 (手鎌) １１개, 손칼 (刀子) ５개, 낫2개, 칼1개, 끌1개이고 형태 불명의 철제품이 ６８개이다.

이유적의 철제품은 네개의 특징을 가지고 있다.

1. 살촉은 철제품중 약 반수를 차지하고 있다.

2. 철제품의 종류가 \ 많다.

3. 철제품들의 대부분이 움집터부터 출토 되었다.

4. 움집터 마다 철제품 소유량의 차이 가 있다.

석제품　　석제품은 모두 １７４개가 출토되었다. 내역은 숫돌 (砥石) ４６개, 돌촉 (磨製石鏃) ２５개, 돌칼 (石刀) ２９개, 돌망치 (磨石) ２８개이다.

곱은옥　　１４호철제품으로부터 출토됬다. 길이 ２．４ｃｍ이다. 동체는 원형을 나타내고 있다. 머리부터 길구멍 까기 줄이 새겨져있다 실구멍은 사용되기 전태 그태로 이. 모양은 후쿠오카현 (福岡県) 미쿠모 (三雲) 유직과 유사하지만, 미쿠모 곱은옥에는 줄이 없다. 재질 (材質) 은 산화비륨 (Ｂａｒｉｕｍ) 이 들어있는 납유리이고 후쿠오카현 스쿠오카모토 (須玖岡本) 유적으로부터 출토된 대롱옥 과 근사한 것을 알수 있다.

거울　　３２호　　철제품으로부터 출토하였디. 작은 거울로 연고문대 (連弧文帶) 가 있는 것이며, 지격 (面経) 은 ６．３ｃｍ에 달한다. 이것은 일본에서 만든 방제경 (仿製鏡) 이디.

5. 끝맺음

시모야마니시 (下山西) 의 유적 조사는 큐우슈 지방의 야여이시대 (彌生時代) 연구에 크게 이바지 하였디. 그곳은 표고 (標高) 약 ４９０ｍ

의 한냉지의 아소지방내에 있다. 일반적으로 아소지방 같은 고냉지에서 벼의 수확량이 증대되고 생활이 안전되었던것은 근세 (近世) 에 와서라고 생각되어 왔다. 또한 평야의 야여이문화와 비교해서 산지의 문화는 후진적이라고 생각되어왔었다. 그러나 1983년 실제 조사하여 보았을때 취락의 규모와 출도 유물들은 평야에 있는 야여이유적보다 그 질이 떨어지지않았다. 철제품과 곱은옥 그리고 거울들은 어떤 유적에도 보여질 수 없는 유물들이었다. 이 유적은 중큐우슈의 거점 취락이라고 생각할수 있다. 이 취락이 번영된 배경에는 가까이서 철단 (鐵丹) 생산 활동은 할 수 있기 때문이라고 보여진다.

이러한 시모야마니시 (下山西) 의 유적은 산지 야여이시대 (彌生時代) 의 생활을 이하하는데 중요한 유적이 될 것이다.

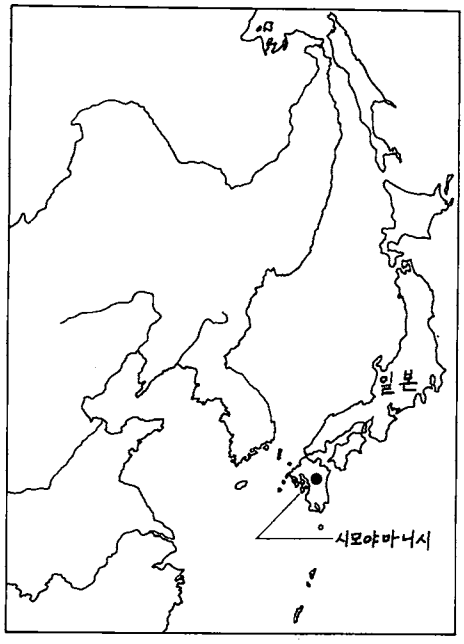


図　　版

図版 1

1．カルデラを望む
2．Ⅳ・Ⅴ－C～E区検出状況
3．Ⅳ・Ⅴ－C～E区全景(発掘前)
4．発掘完了写真(空撮)北側から

1．石棺配置状況
　　トレンチ配置
2．石棺配置状況
　　トレンチ配置
3．免田式土器出土状況

図版 3

1号石棺

1．土壙切り込み

2．石棺清掃

2号石棺

3．床面清掃，頭蓋骨出土状況

4．床面清掃，頭蓋骨出土状況

5．遺物出土状況

2号石棺

1．敷石出土状況

3号石棺

2．蓋石被覆状態

3．蓋石除去直後

4．蓋石粘土を除去した状態

5．内部状況

6．土壙切り込み

図版 5

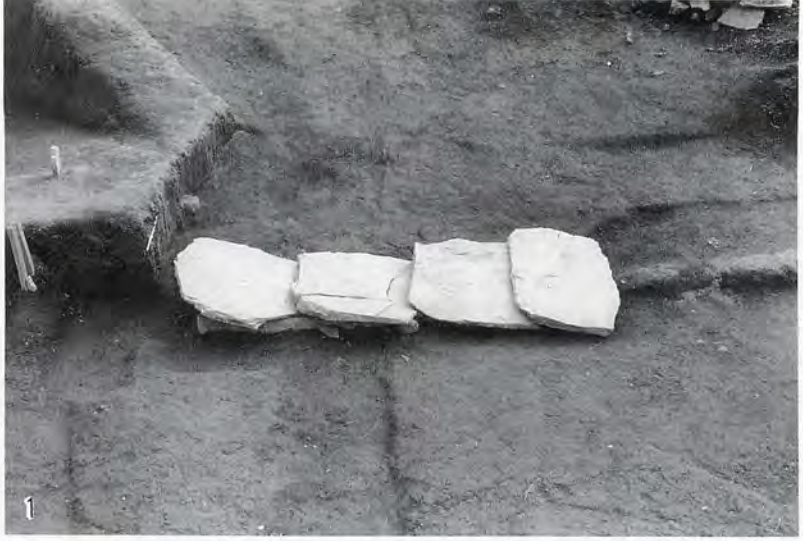
3 号石棺　1．蓋石を除いた状態
3．蓋石粘土を除去した状況

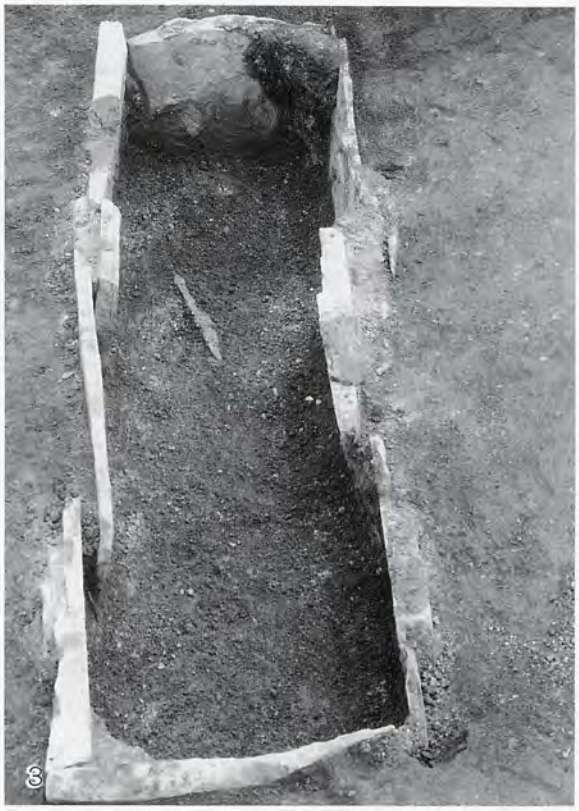
2 号石棺　2．敷石出土状況
4．遺物出土状況

3号石棺　1．土壙切り込み
3．2号・3号石棺 切り合い状態

2号石棺　2．土壙切り込み
4．内部出土状況

図版 7





4 号石棺

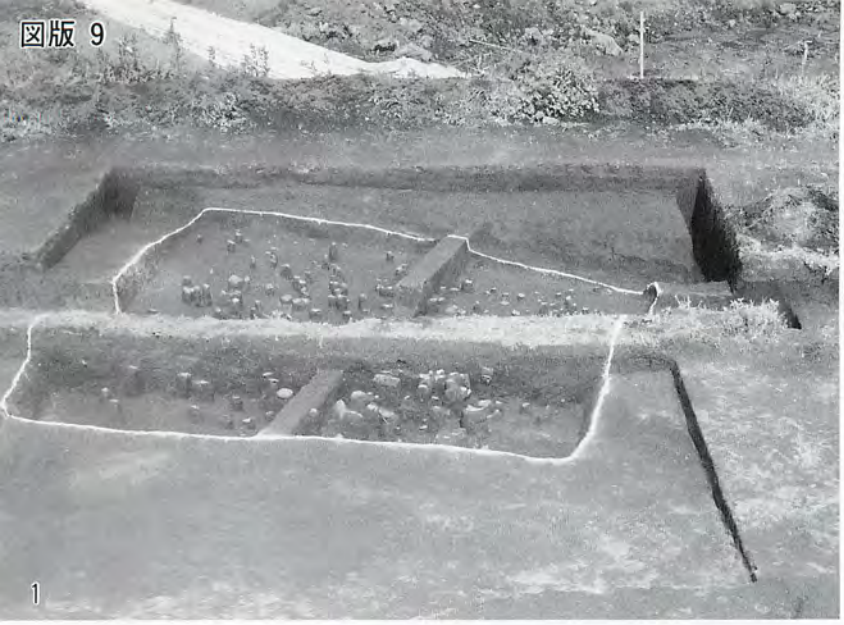
1．復元状況

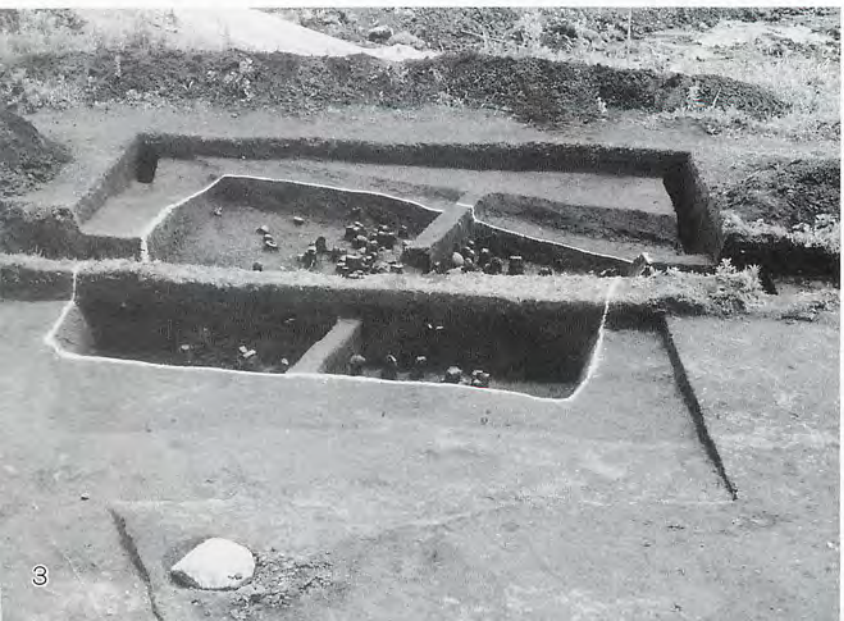
2．敷石状況

3．蓋石を除去した状態

4．遺物出土状況

3号石棺
1．白色粘土目どめ状態
4号石棺
2．壁上面・布痕付着状況
3．ベンガラ塗布状況





1 号住居址

1．出土状況

2．風景

3．検出状況

1 号住居址
1．検出状況
2．仕上げ
3．免田式土器下層炭化物

1号住居址

1．遺物出土状況

2．最下層土器(石鏃)

3．遺物出土状況

1

2

1．2号･3号･4号･5号住居址
5号住居址
2．A区出土状況
3．A区出土状況
4．A区出土状況

3

4

1

2

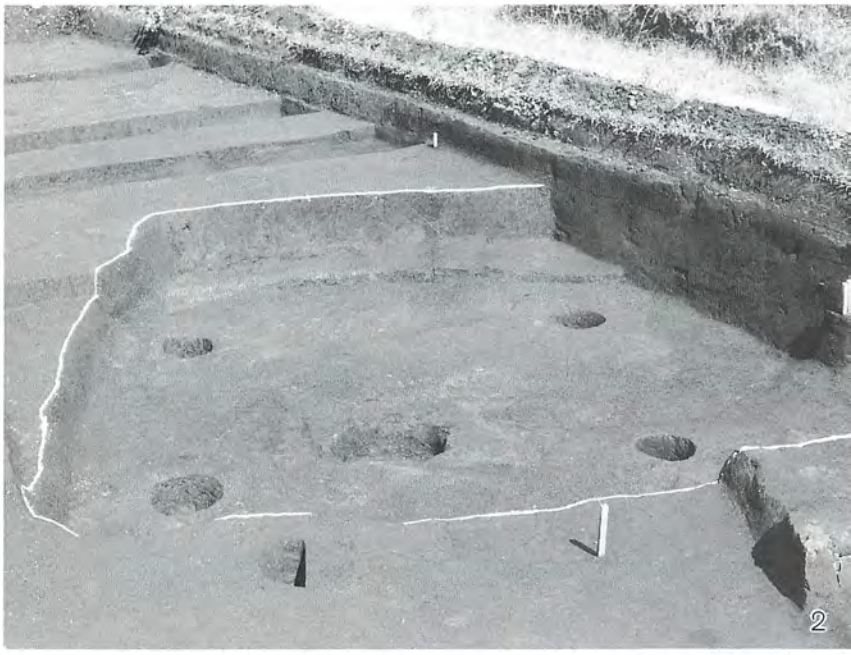
3

6 号住居址

1．仕上げ

2．出土状況

3．炉付近土器出土状況



7 号住居址

1．出土状況

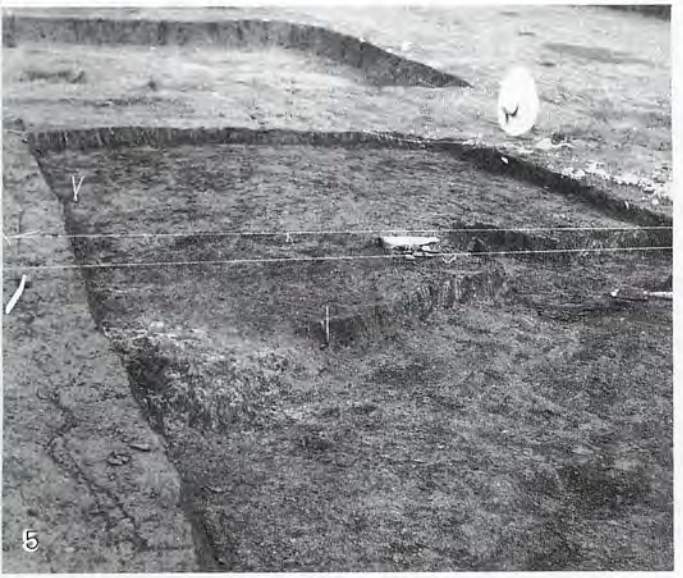
2．仕上げ

3．遺物出土状況

1．6号･9号住居址(完掘)
9号住居址
2．仕上げ
3．PIT. 1　半截
4．PIT. 2　半截

11号住居址
1．東西断面
2．仕上げ
13号住居址
3．出土状況

図版 17



14号·15号·16号住居址

1．切り合い関係

2．重複地区仕上げ

14号住居址

3．ガラス製勾玉出土状況

4．勾玉出土状況(拡大)

5．勾玉出土状況

1

2

3

16号住居址

1．出土状況(第1回目)

2．仕上げ

3．炉半截

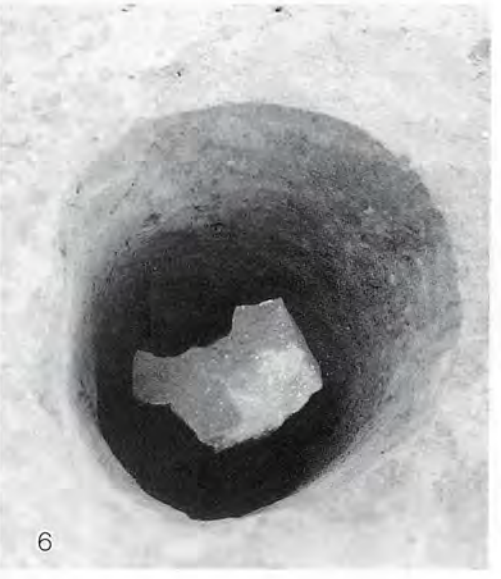
1

2

3

4

5


6

17号住居址

1．出土状況　　4．遺物出土状況
2．出土状況　　5．遺物出土状況
3．調査完了全体写真　6．PIT. 1（根石状況）

1

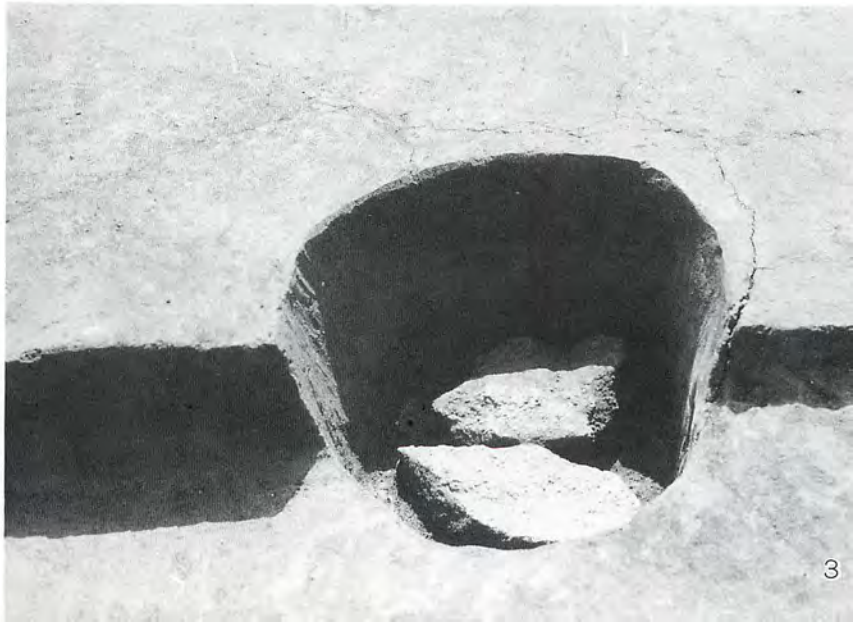
2

18号住居址

1．中央部出土状況

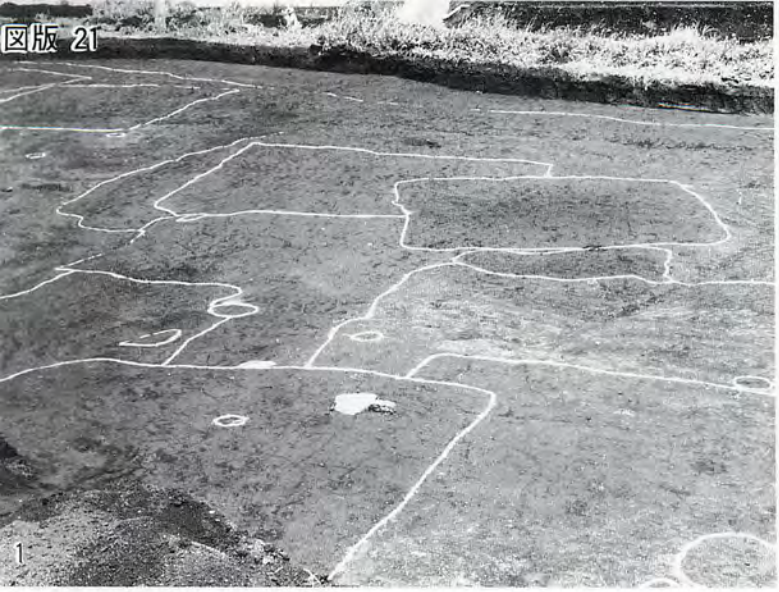
2．仕上げ

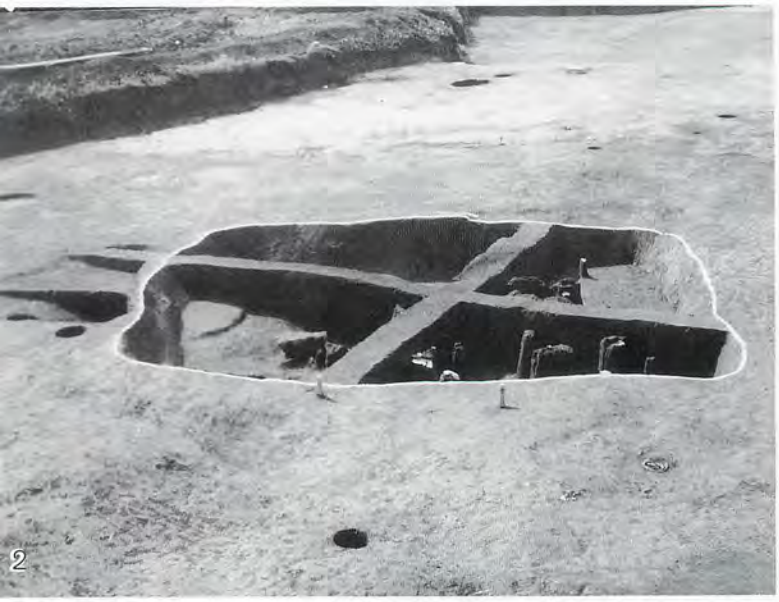
3．PIT. 1　仕上げ



3

図版 21


1


2

Ⅳ・Ⅴ－C～E区中央部

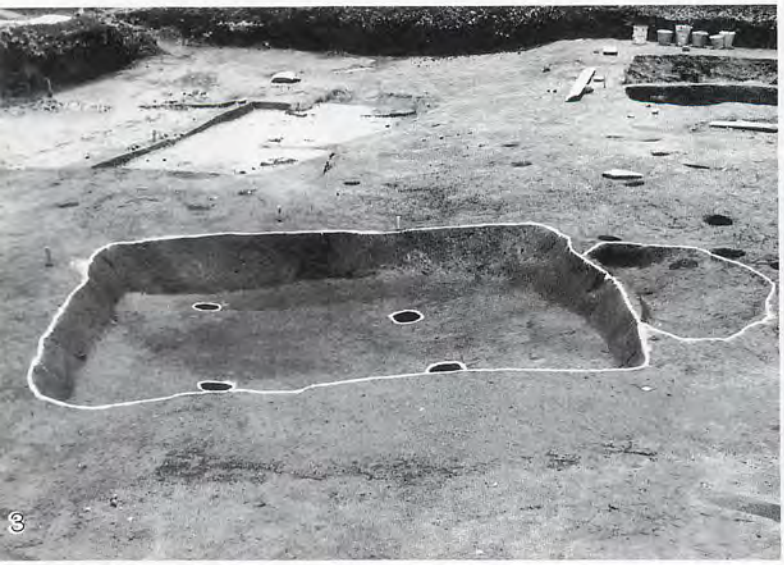
1．全景(発掘前)

20号住居址

2．出土状況

3．仕上げ

4．須恵器出土状況


3

4

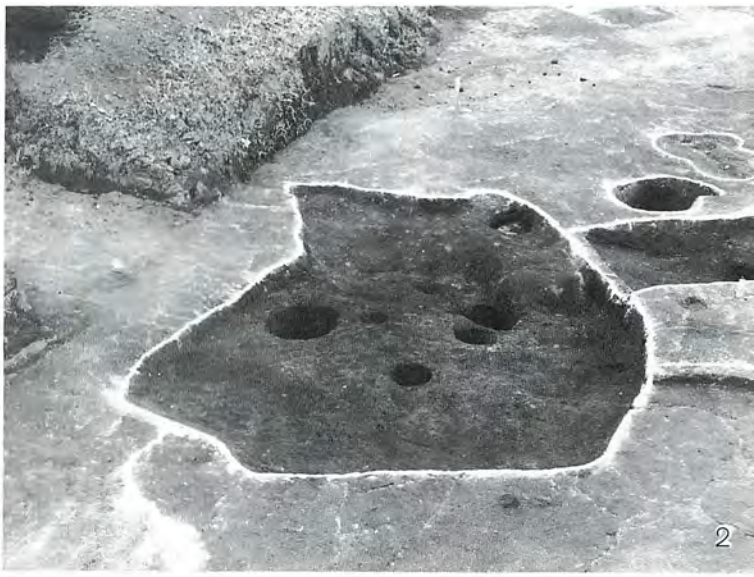
21号住居址

1．出土状況

2．完掘

3．遺物出土状況

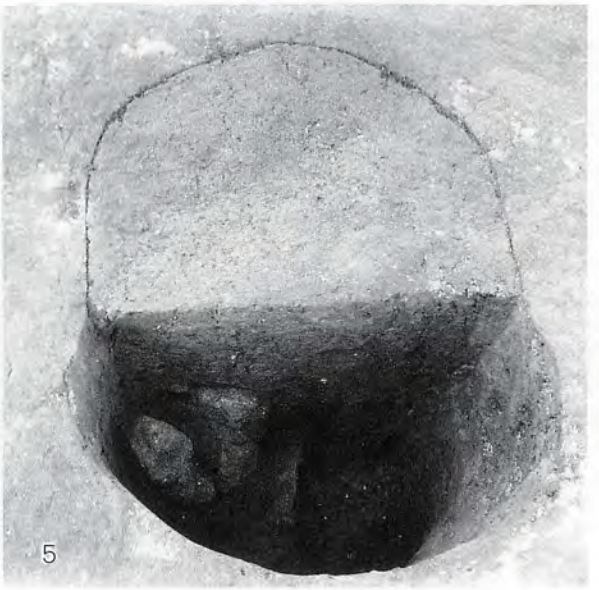
4．遺物拡大



図版 23

23号住居址

1．出土状況
2．仕上げ
3．管玉出土状況
4．PIT. 1　出土状況
5．PIT. 3 半截



24号住居址

1．出土状況
2．仕上げ
3．PIT．1 半截
4．遺物出土状況（鉄鏃）
5．遺物出土状況（手鎌）
6．遺物出土状況（甕）

図版 25

24号住居址

1．炉仕上げ
2．PIT．3　検出状況
3．遺物出土状況
4．PIT．4　検出状況
5．PIT．2　検出状況

25号住居址

1．出土状況

2．仕上げ

3．PIT. 2

4．PIT. 1

5．炭化材出土状況

4

1

5

2

3

6

26号住居址

1．検出状況　　4．PIT. 2　検出状況
2．仕上げ　　5．出土状況
3．出土状況　　6．出土状況

27号住居址

1．出土状況
2．仕上げ
3．No.59(壺)出土状況
4．PIT. 1 柱根状況
5．PIT. 1 検出状況

1

3

2

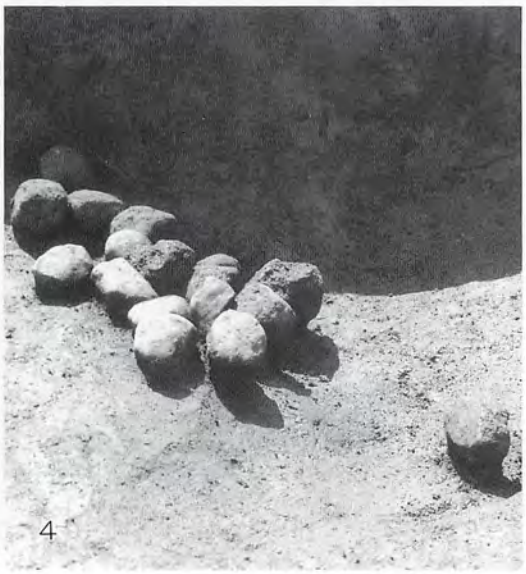
5

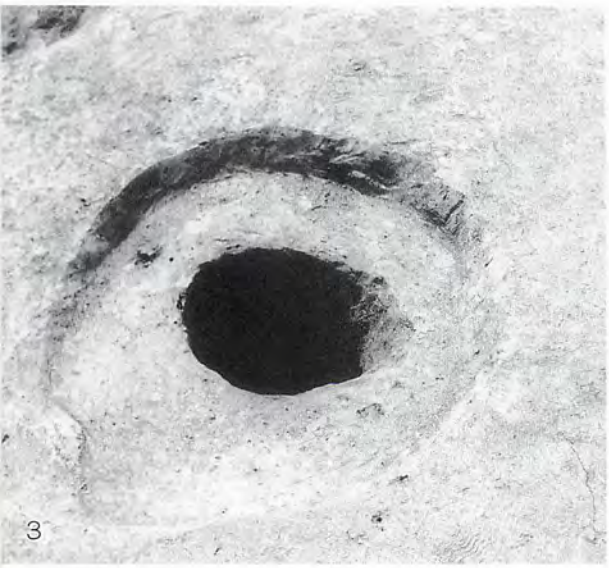
4

図版 29

28号住居址

1．出土状況
2．仕上げ
3．PIT. 1 仕上げ
4．貯蔵穴
5．PIT. 2 仕上げ





30号・35号住居址

1．30号･35号住居址 仕上げ

2．30号住居址 仕上げ

3．35号住居址 出土状況

4．30号住居址 出土状況

5．30号住居址 勾玉出土状況

1

2

3

4

5

6

32号住居址

1．出土状況　　4．鏡出土状況

2．出土状況　　5．鏡出土状況

3．鏡出土状況　　6．鏡出土状況

1．33号住居址 出土状況
2．35号住居址 検出状況
3．25号住居址内出土根石

1．10号住居址 検出状況
2．22号住居址 検出状況
3．4号土壙 検出状況

5号～7号溝
1．出土状況
2．出土状況
3．仕上げ

図版 35

1

2

②－ⓓ·ⓔ区

1．出土状況

2．仕上げ

3．青銅製品出土状況

4．青銅製品出土状況(拡大)

3

4

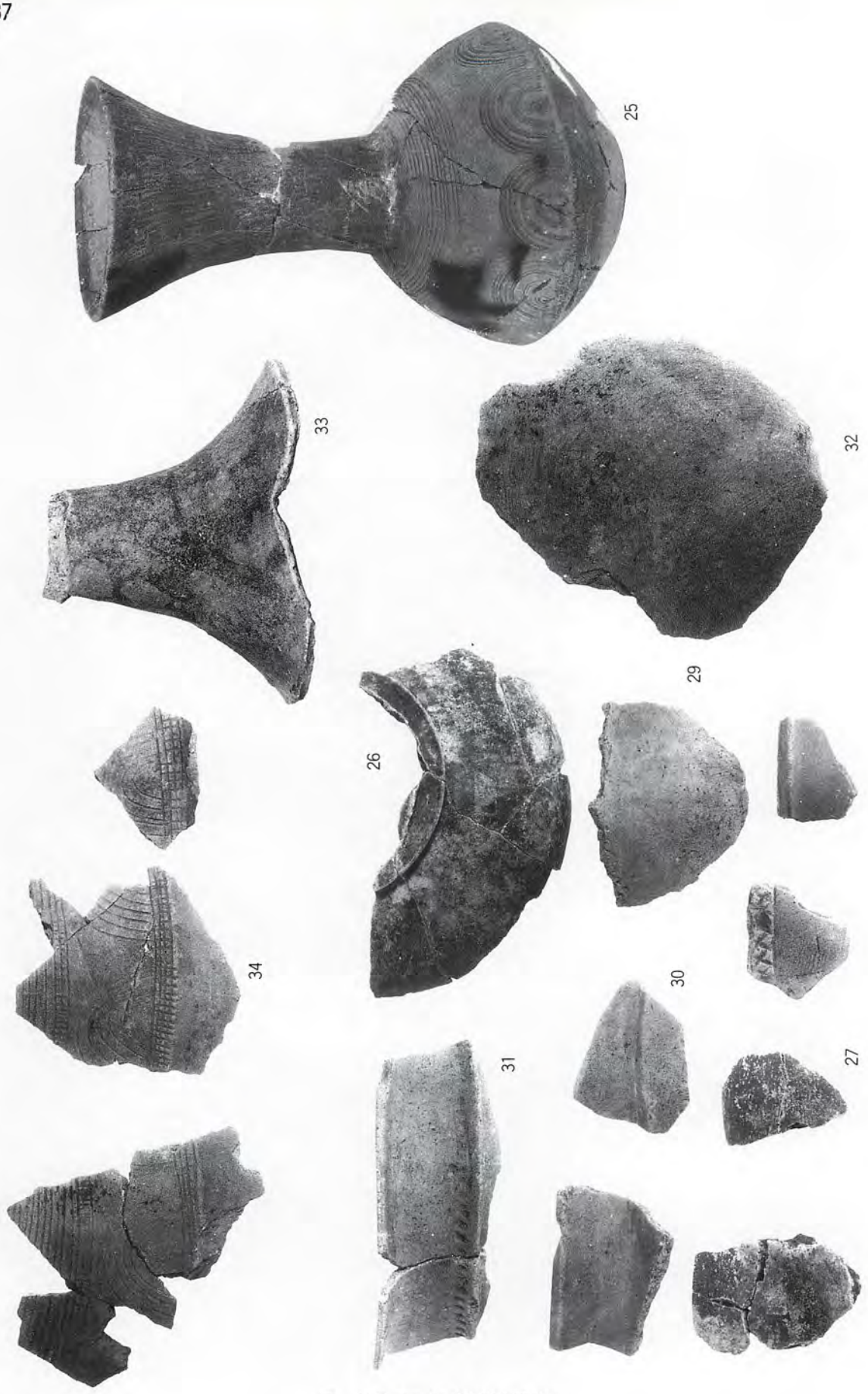
Ⅳ・Ⅴ－C～E区

1．調査完了全体図
（南側から）

2．調査完了全体図
（南側から）

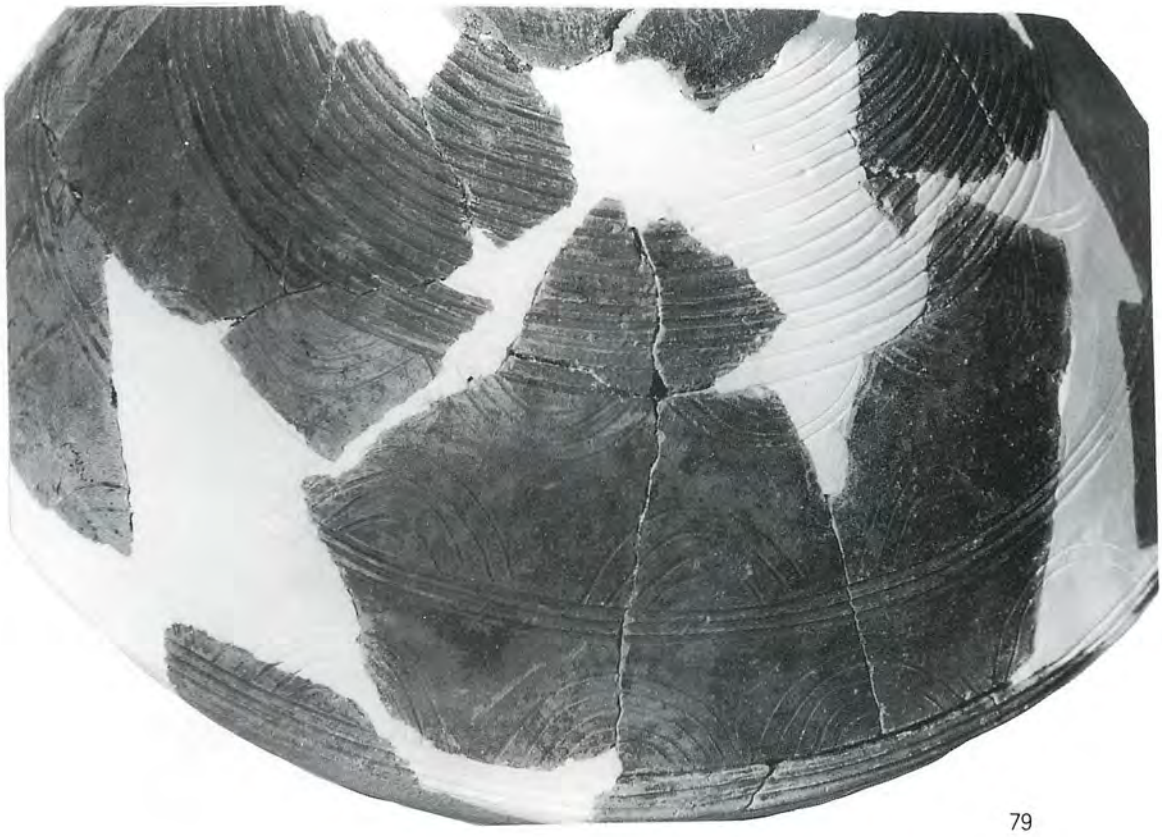
3．調査完了全体図
（西側から）

図版 37



Ⅱ－A区 トレンチ内出土遺物

25

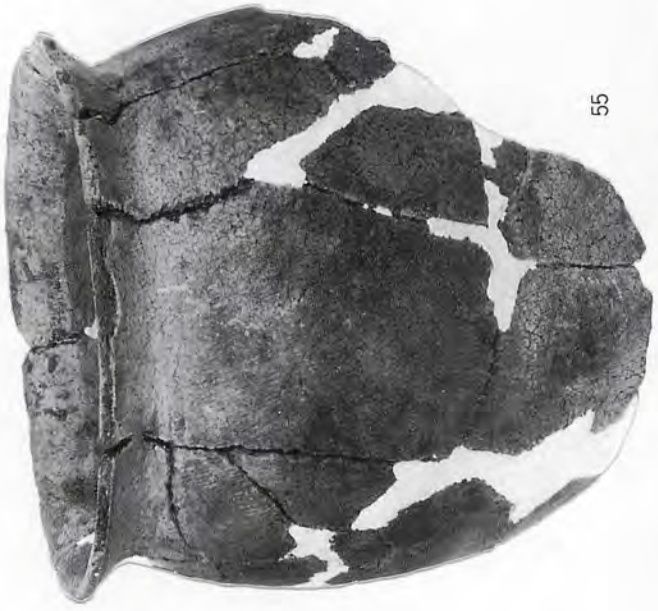


79

出土免田式土器拡大

63

48


55

46

45

1号住居址内出土遺物（その1）

1号住居址内出土遺物（その2）

110

103

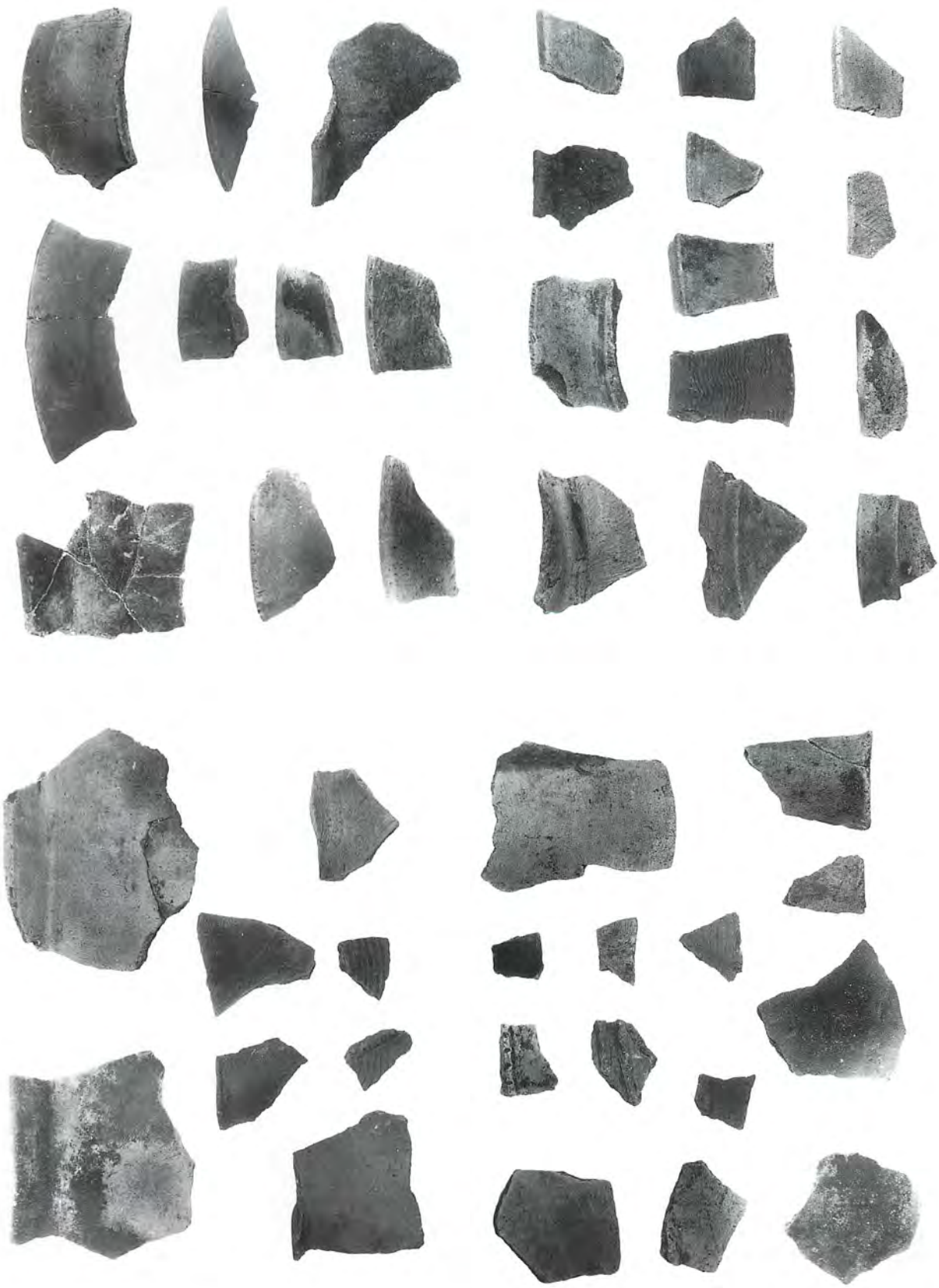
138

120

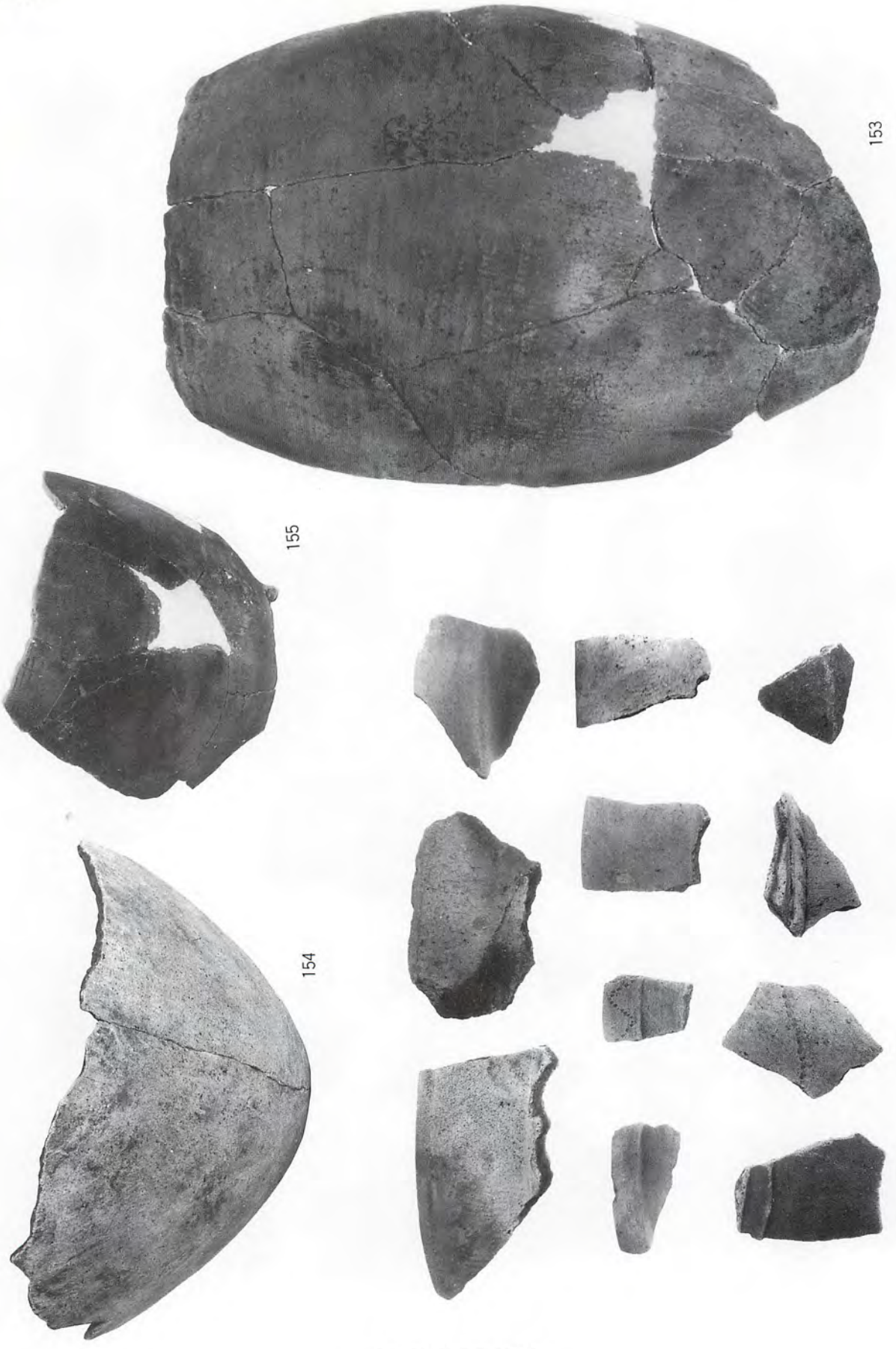
135

121

4号・5号住居址内出土遺物（その1）



4号・5号住居址内出土遺物（その2）



6号住居址内出土遺物

185

175

186

174

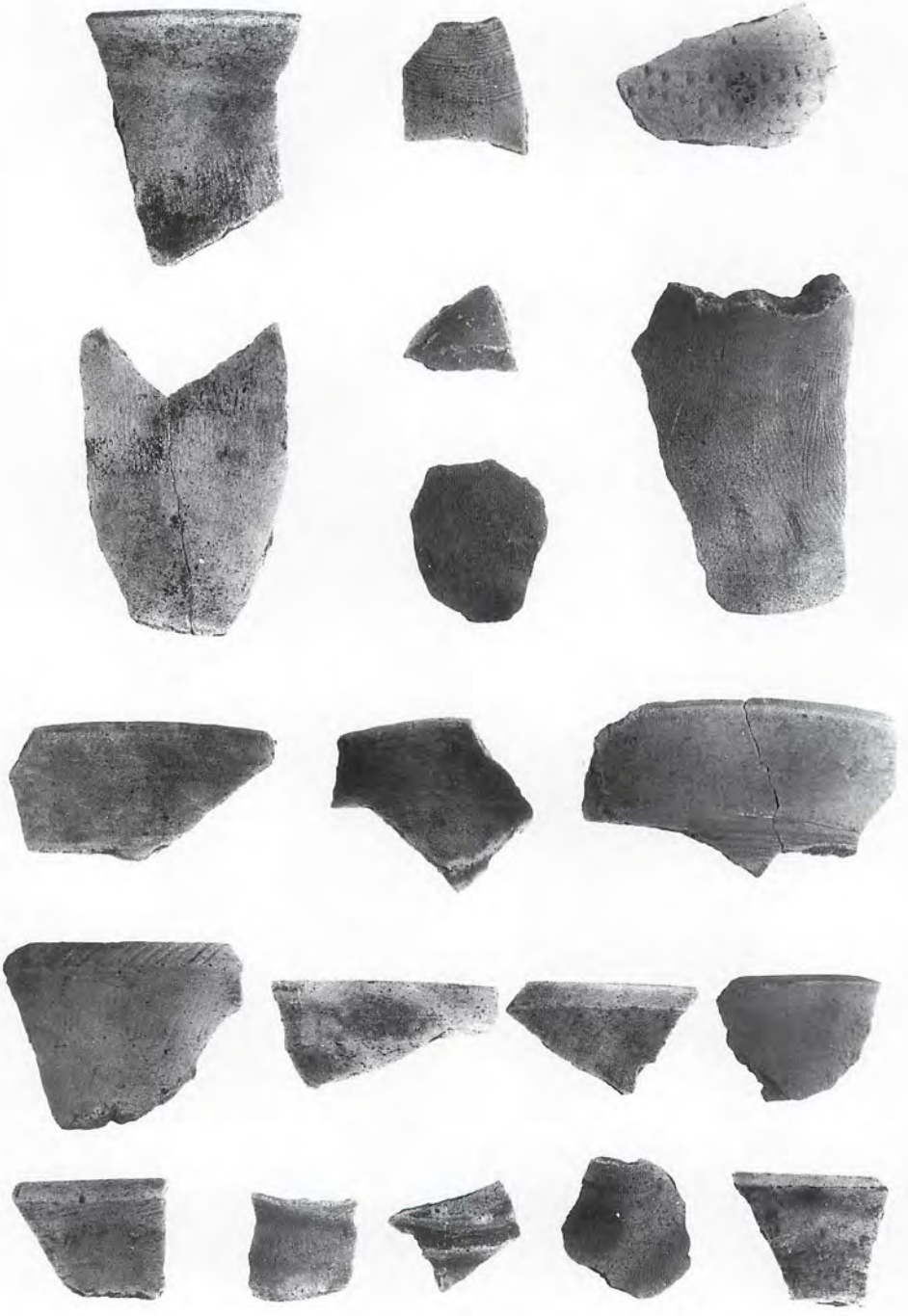
7号住居址内出土遺物

図版 45

194

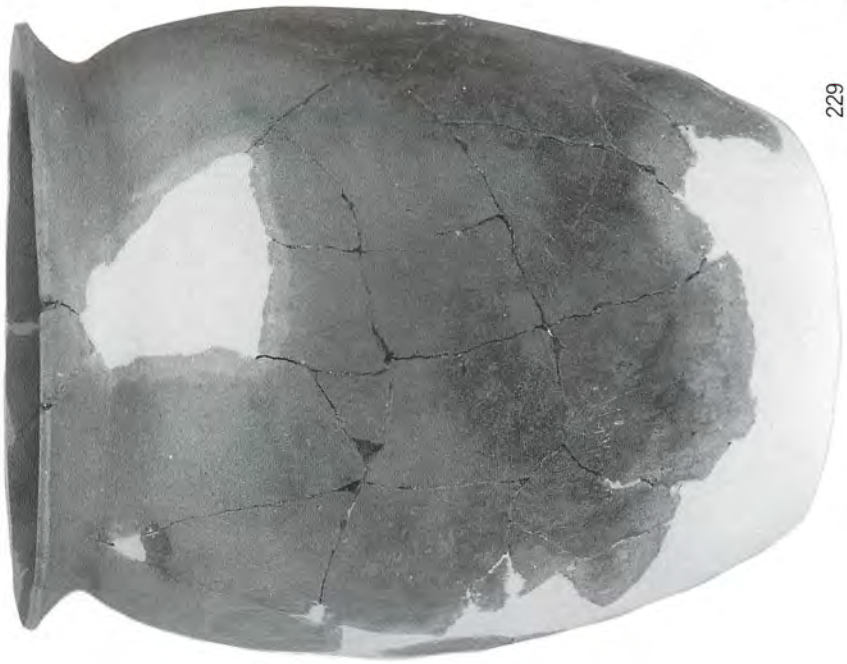
195

217



8号・9号住居址内出土遺物

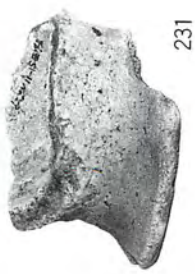
234



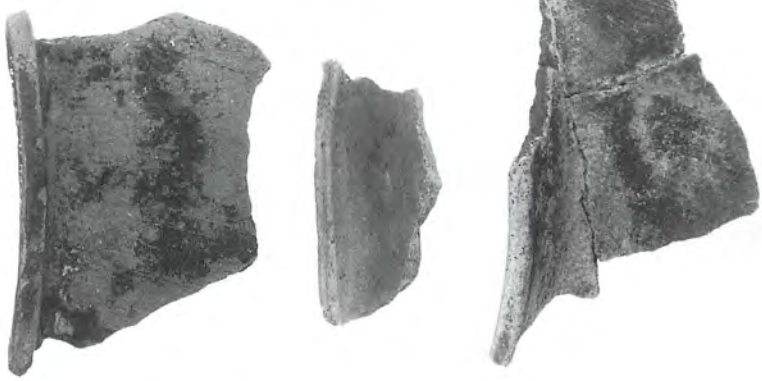
229

252

251



231



11号住居址内出土遺物

289

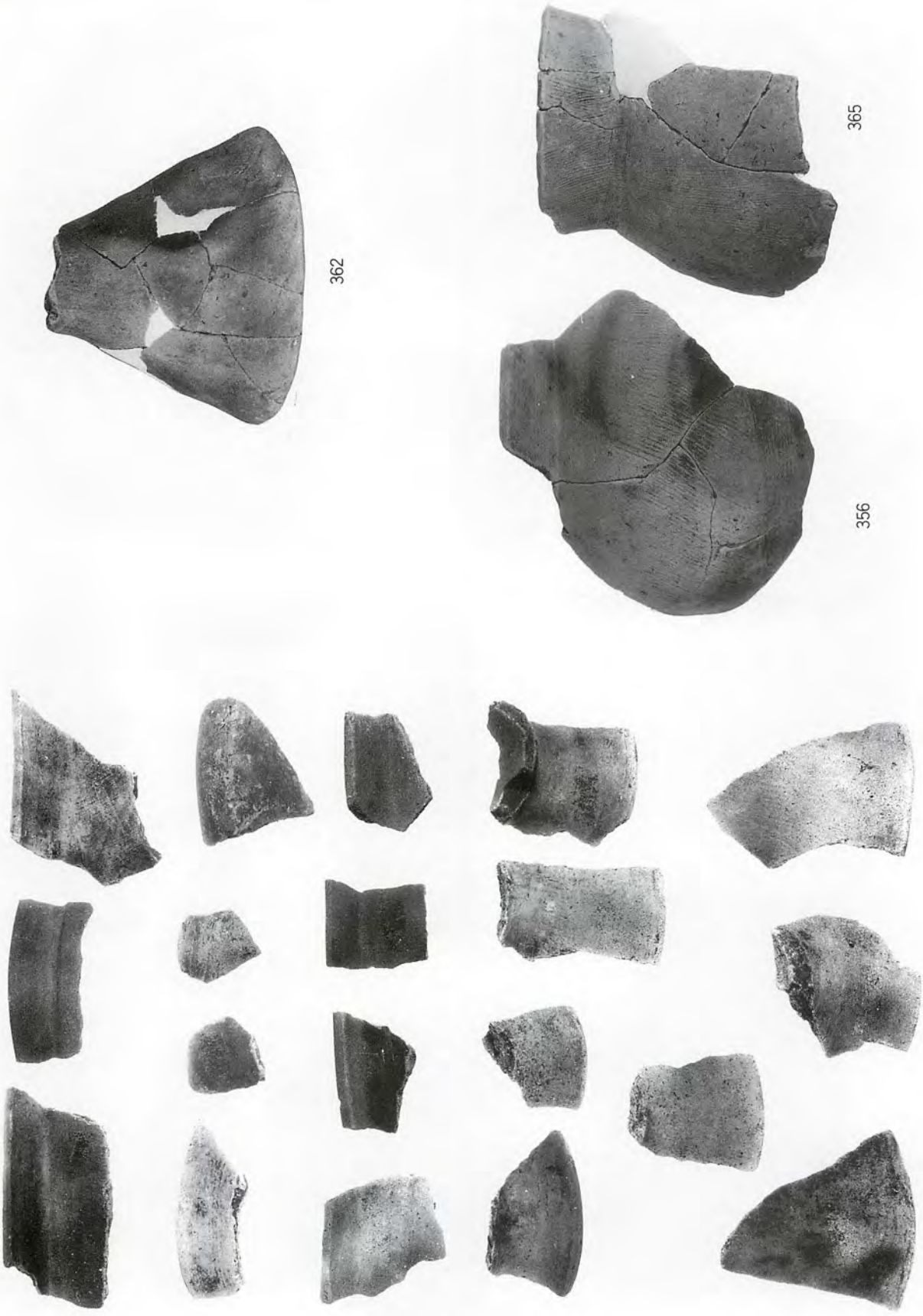
283

286

288

14号住居址内出土遺物

17号住居址内出土遺物



18号住居址内出土遺物

386

387

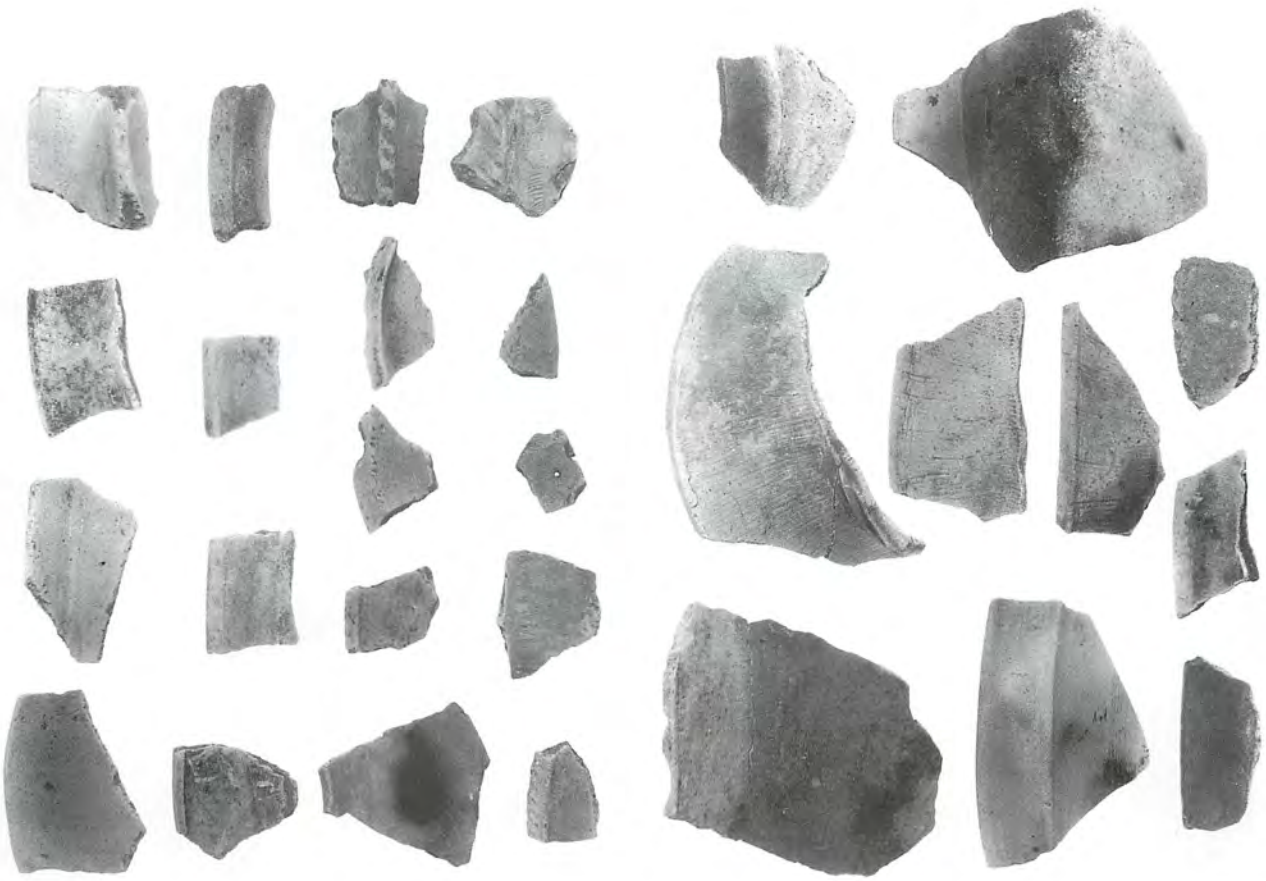
381

21号住居址内出土遺物

23号住居址内出土遺物

440

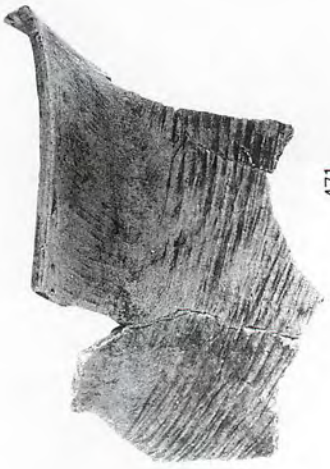
429



24号住居址内出土遺物

486

474

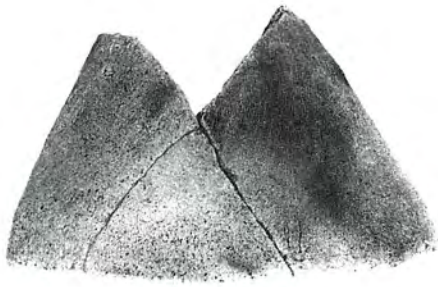


471

25号住居址内出土遺物

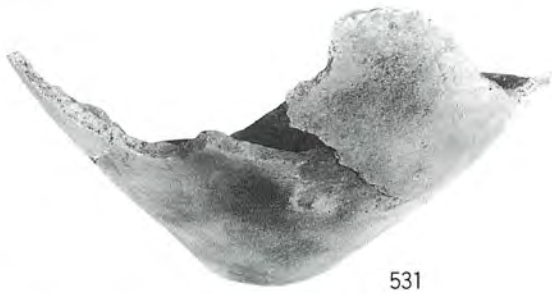
501

514



513

529

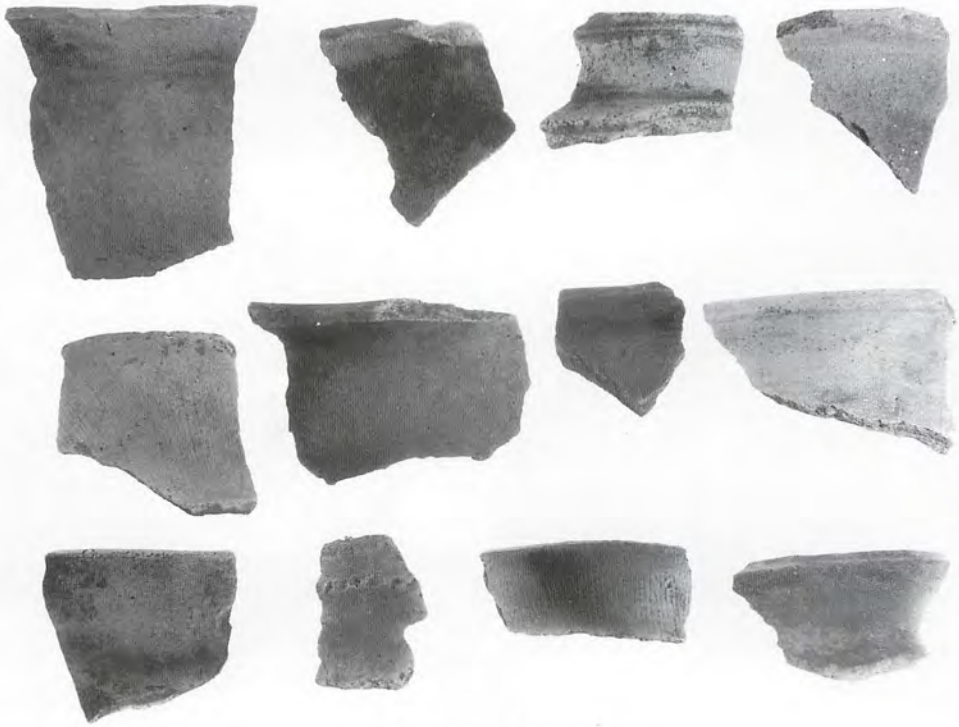


531

26号住居址内出土遺物（その１）

532

533



26号住居址内出土遺物（その2）

26号住居址内出土遺物（その3）

543

545

555

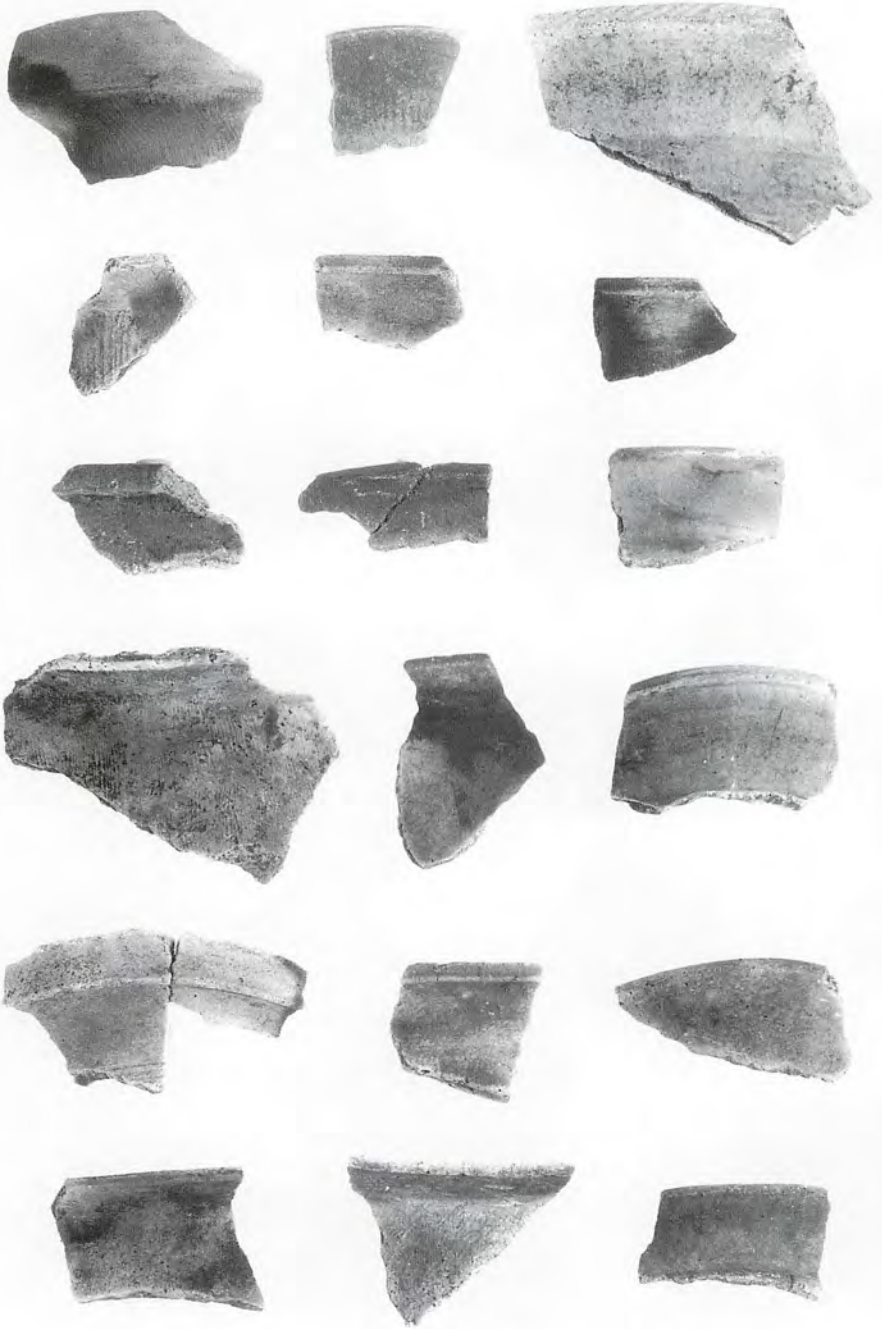
552

563

27号住居址内出土遺物

28号住居址内出土遺物（その１）

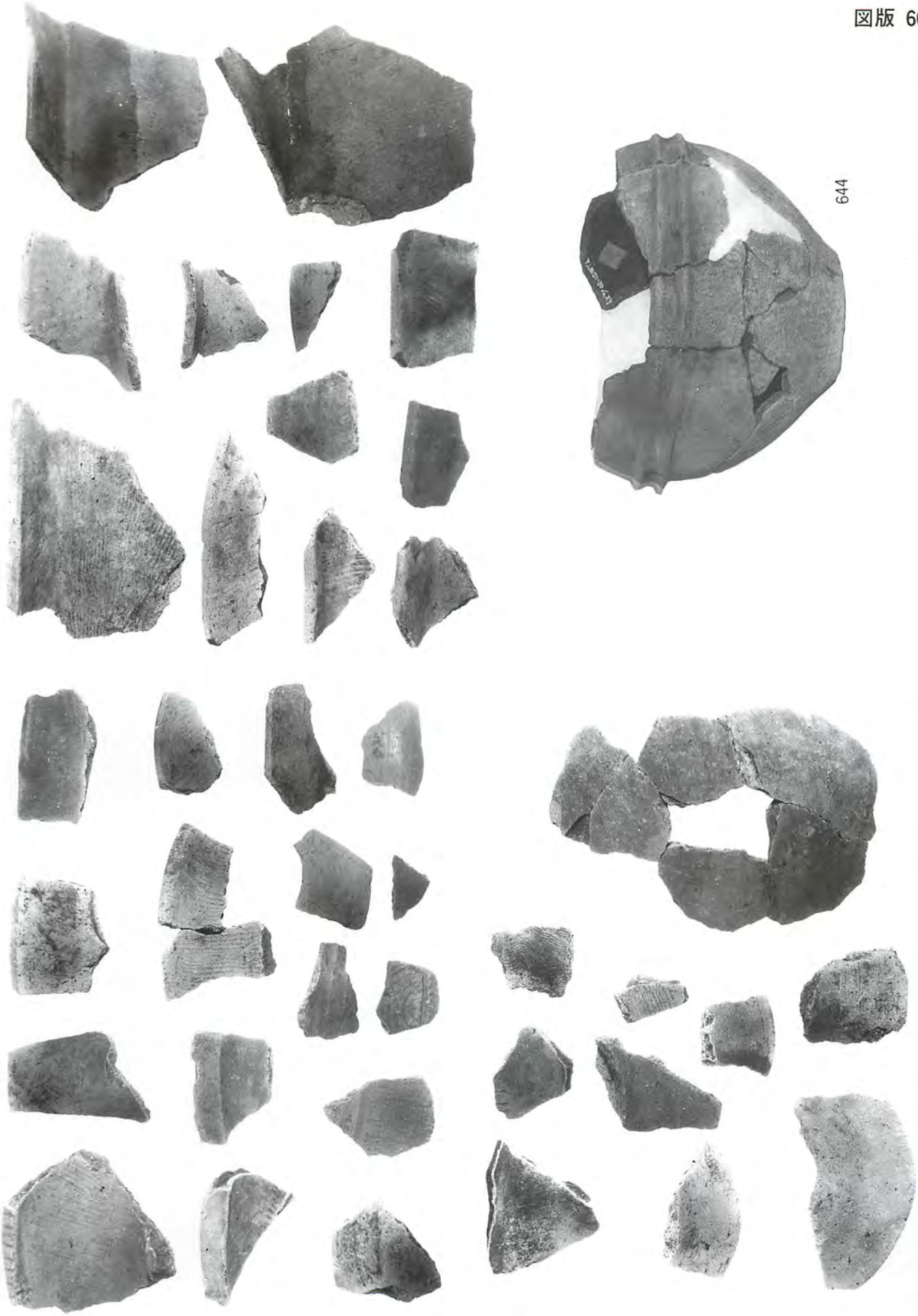
581



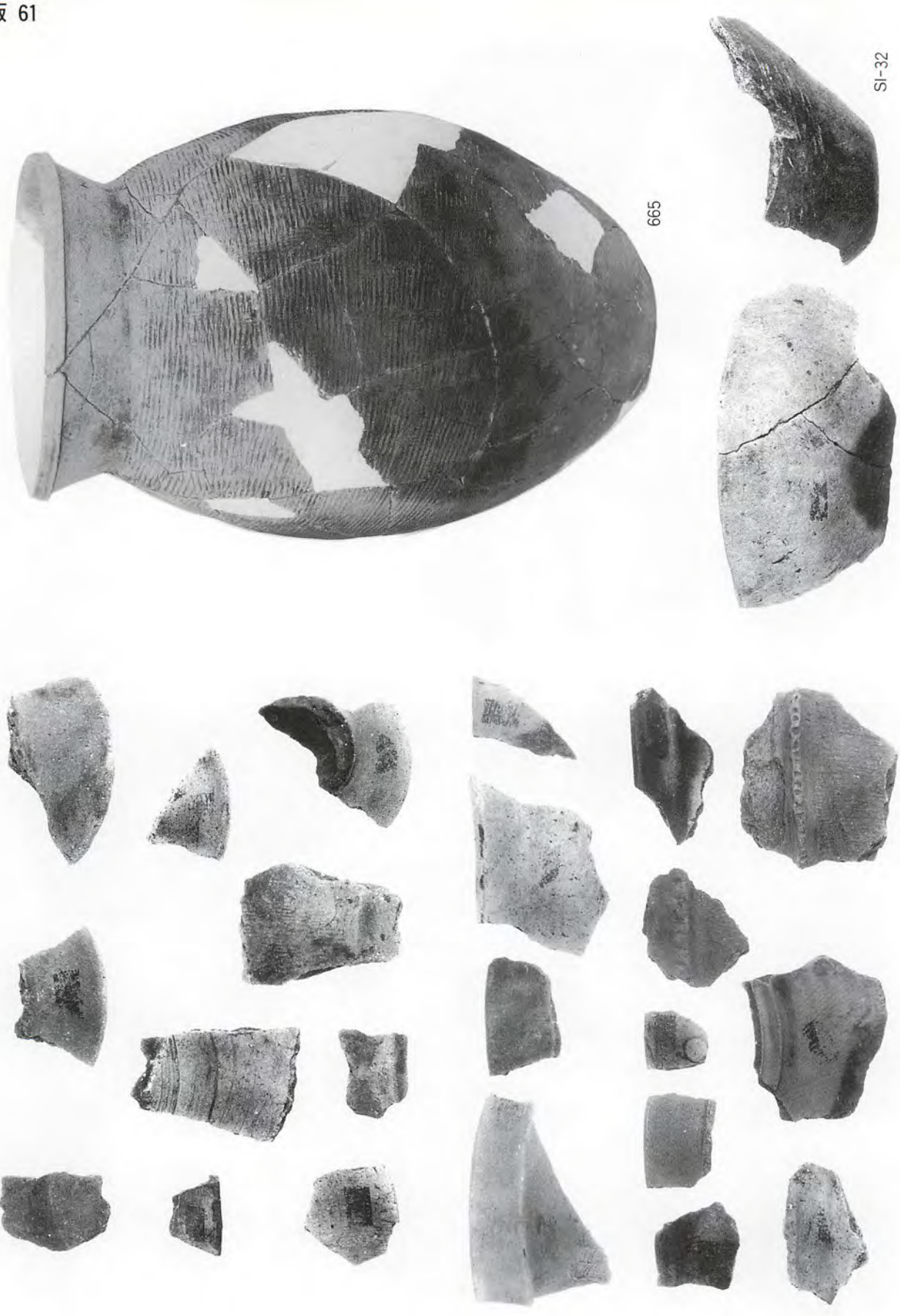
587

584

28号住居址内出土遺物（その2）



29号・30号住居址内出土遺物



32号住居址内出土遺物

676

363

376

SI-35

689

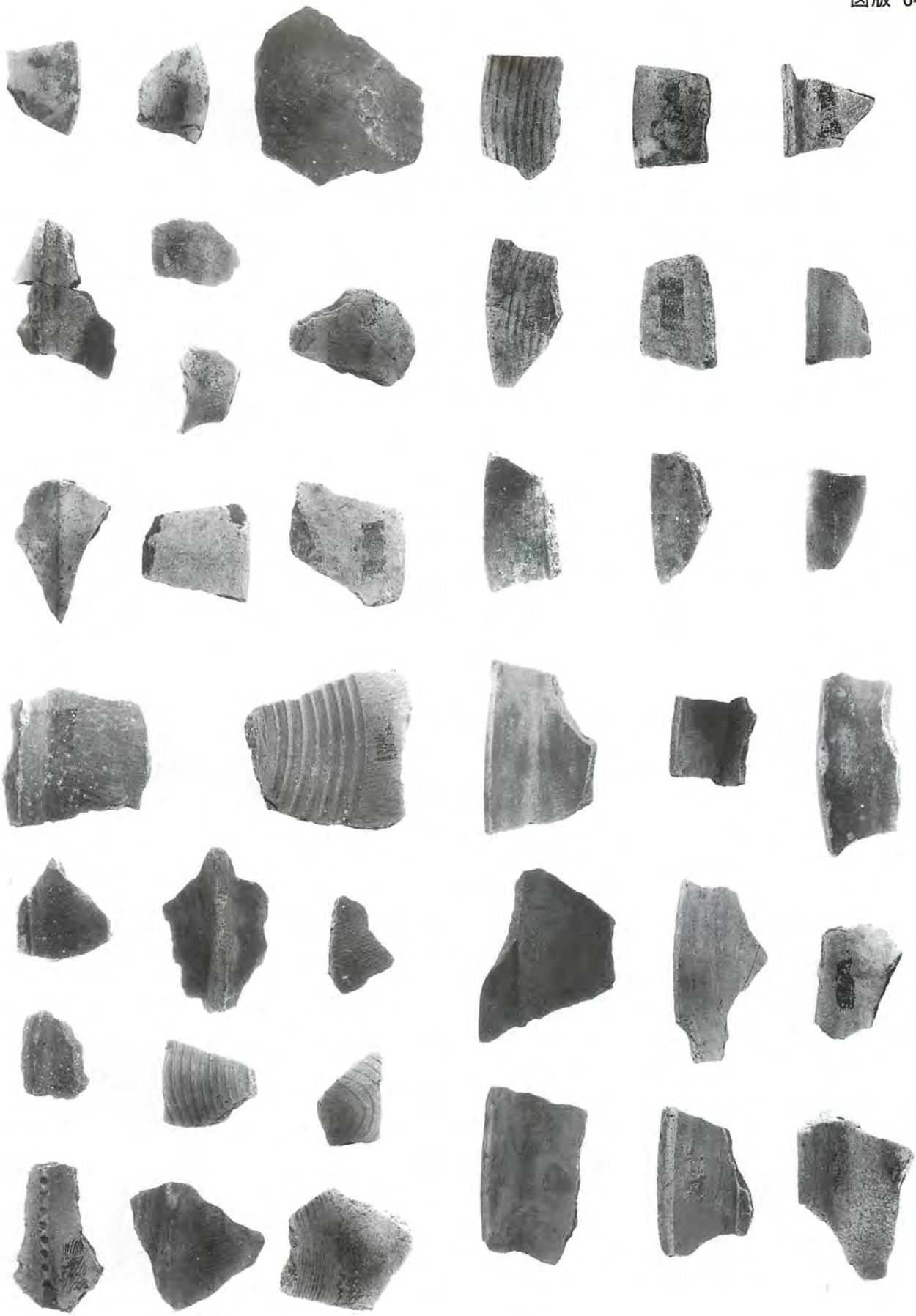
357

SI-35

34号住居址内出土遺物

図版 63

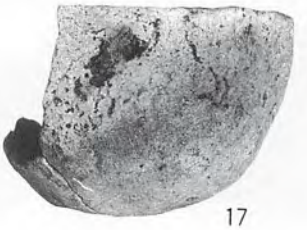
7号溝内出土遺物（その1）



7号溝内出土遺物（その2）

825

822



17

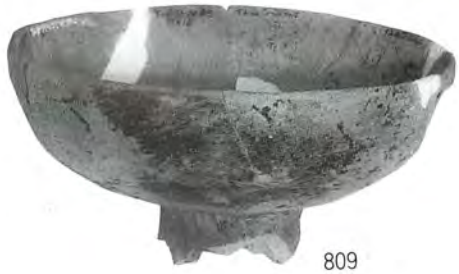
18

799

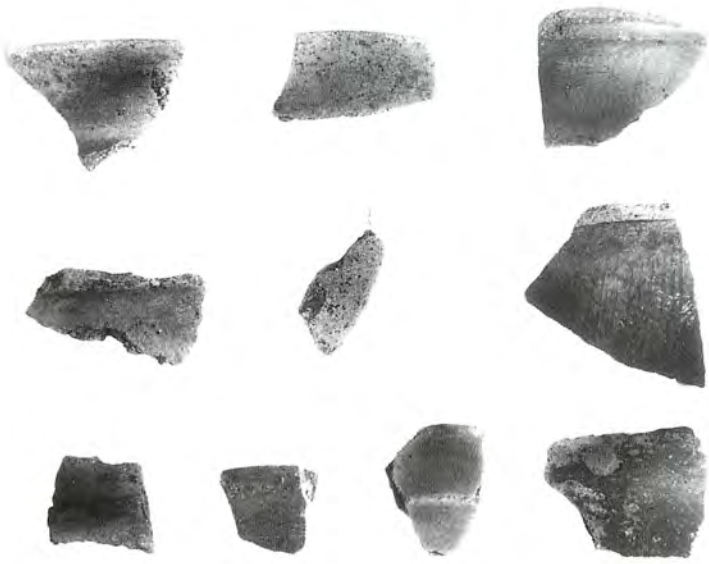
表採・試掘トレンチ②－ⓓ・ⓔ区，Ⅱ・Ⅲ－Ｂ区内出土遺物

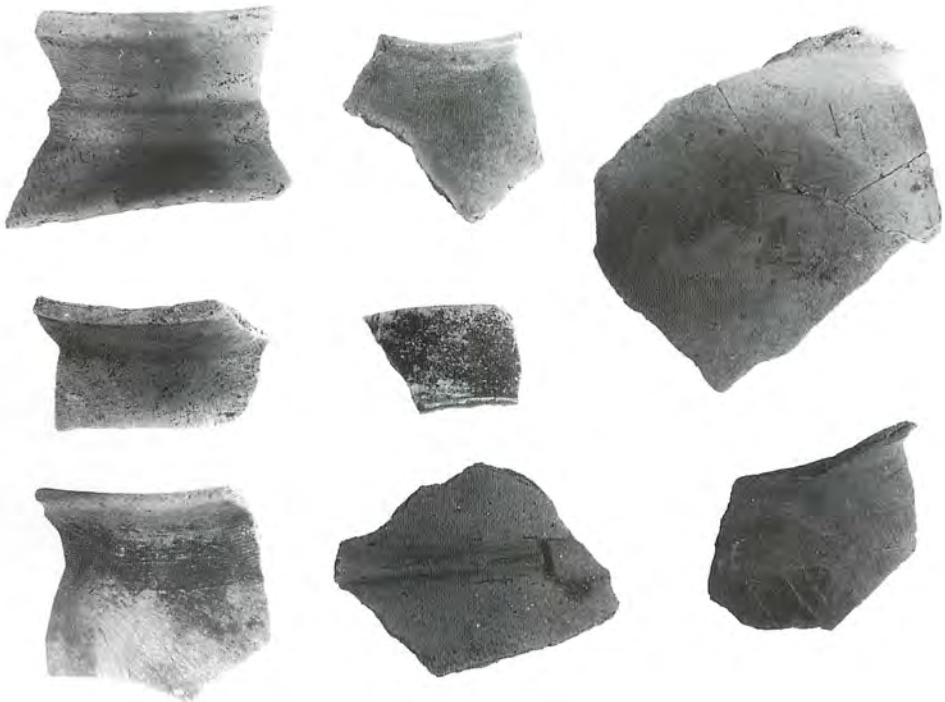
806

807



809





20号住居址内出土遺物

図版 67

535

792

703

593

202

199

188

166

449

420

418

448

592

534

450

307

451

149

341

344

595

189

201

460

出土鉄製品（その１）

302

170

462

461

248

537

661

306

455

456

452

454

391

662

594

490

702

753

112

417

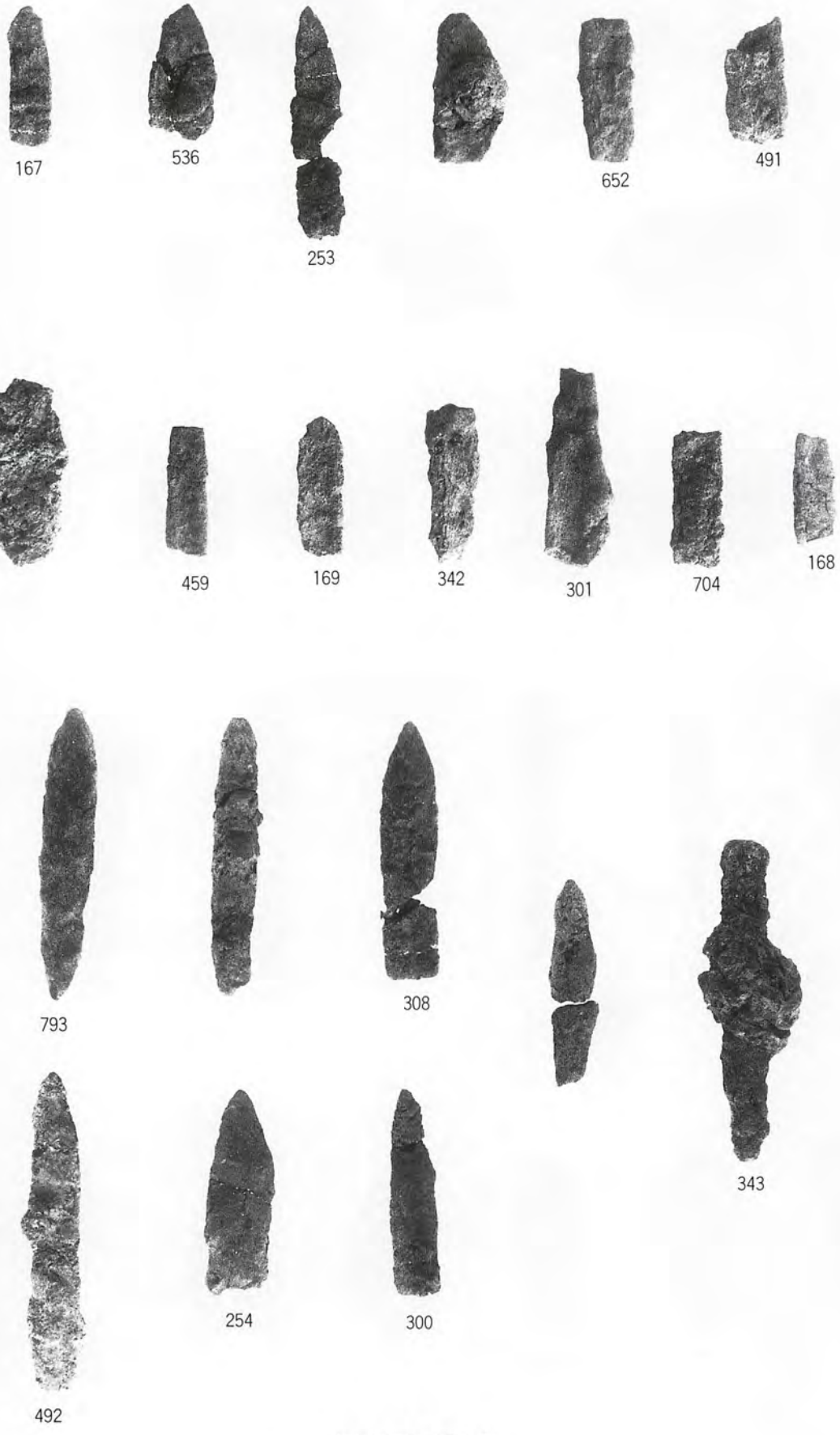
416

111

198

出土鉄製品（その2）

図版 69



出土鉄製品（その3）

457

200

453

458

390

425

426

424

出土鉄製品（その4）

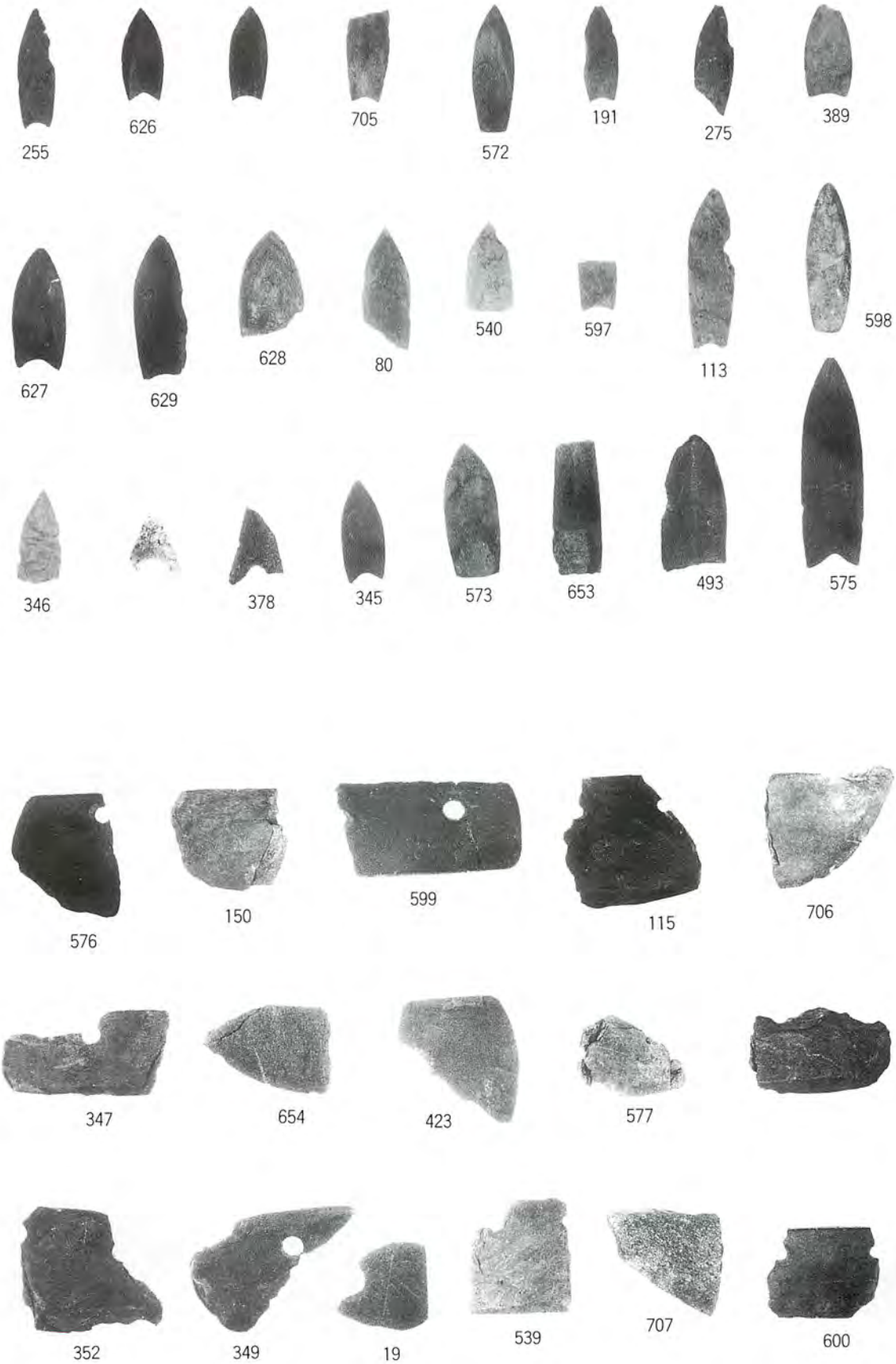
22

24

23

22

出土鉄製品（その5）


255
626
705
572
191
275
389
627
629
628
80
540
597
113
598
346
378
345
573
653
493
575
576
150
599
115
706
347
654
423
577
352
349
19
539
707
600

出土石製品（その１）

図版 73

596

463

309

203

205

348

605

351

602

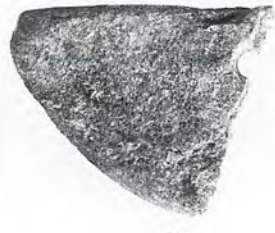
276

257

630

601

750


465

出土石製品（その2）

81

464

353

752

814

760

751

354

794

304

92

494

603

258

118

421

497

816

795

出土石製品（その3）

図版 75

256

379

796

※496

261

220

262

※171

606

※重複

467

151

204

207

708

出土石製品（その4）

119

496

538

114

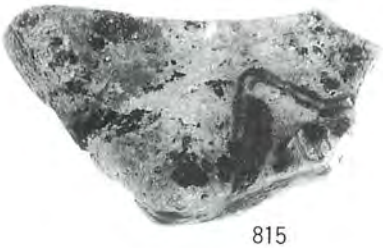
21

259

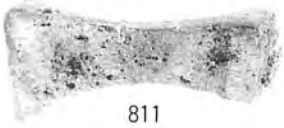
171

709

303


815

422


811

20

604

206

495

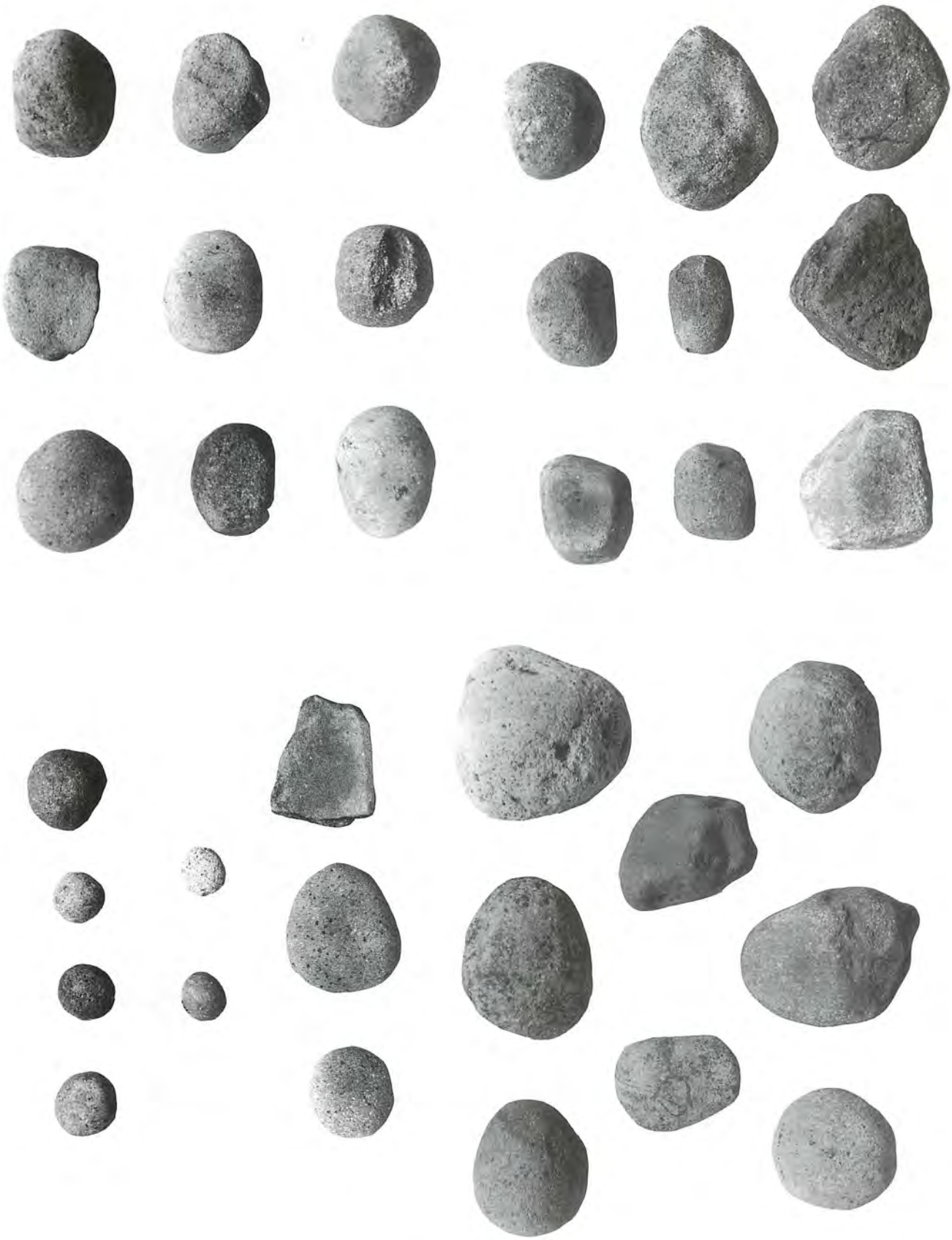
219

466

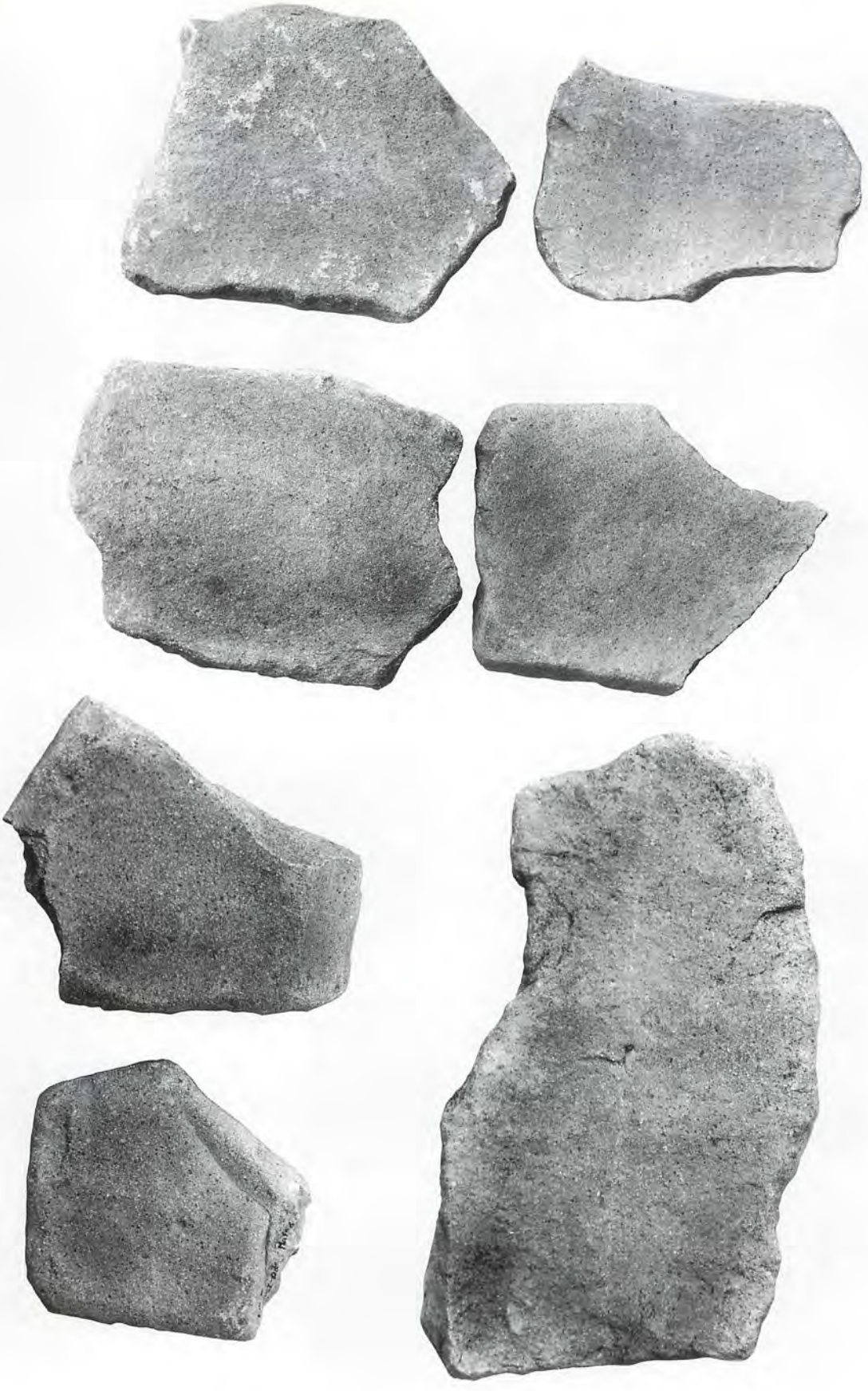
出土石製品（その５）

図版 77

出土石製品（その6）



出土石製品（その7）



出土石製品（その8）

出土鏡・玉類

付　編

城ヶ辻古墳群発掘調査

――熊本県玉名市寺田字城ヶ辻所在の遺跡――

例　　言

1．本付編は，熊本県教育委員会が建設省九州地方建設局熊本工事事務所の委託を受けて実施した，城ヶ辻古墳群の試掘調査の報告である。

2．本書は一般国道208号玉名バイパス建設事業に関連して，昭和54年度実施した試掘調査の一部分である。

3．本書の執筆は次の通りである。

序章		高谷和生
第1章		高谷和生
第2章		高谷和生
第3章	1，2節	高谷和生
	3節	堀　一夫
第4章		高谷和生

なお堀　一夫調査員からは「朱壺内出土の赤色顔料の分析」の玉稿をいただき，本書第3章第3節に収録させていただいた。

4．本書に使用した図の作成は高谷が行ない，製図は瀬丸延子が担当した。なお整理にあたっては前田志磨江，中村絹子の協力を得た。なお掲載写真は白石　厳によるものである。

5．本書の編集は調査員協議のうえ，高谷が担当した。

本　文　目　次

序　章 …… 1

第１節　調査に至る経過及び調査の概要 …… 1

第２節　調査日誌抄 …… 1

第３節　調査の組織 …… 2

第１章　遺跡をとりまく環境 …… 3

第１節　遺跡の地理的環境 …… 3

第２節　遺跡の歴史的環境 …… 3

第２章　調査結果 …… 6

第１節　遺構 …… 6

第２節　遺物 …… 12

第３節　玉名市城ヶ辻古墳出土の土師器内検出の鉱物質の鑑定報告 …… 15

第３章　総　括 …… 18

付表　熊本県内出土「朱壺」一覧 …… 21

挿　図　目　次

第１図　城ヶ辻古墳群周辺主要遺跡図(高谷・中村作成) …… 4

第２図　城ヶ辻古墳群測量図(高谷測量・瀬丸整図) …… 7

第３図　試掘トレンチ(１号，５号，６号，７号)断面及び平面実測図(高谷実測,瀬丸整図) 8

第４図　試掘トレンチ(３号，４号，９号～11号)及び２号墳盗掘坑断面実測図
(杉村・高谷実測，瀬丸整図) …… 9

第５図　１号土壙実測図(高谷実測，瀬丸整図) …… 11

第６図　１号トレンチ内出土遺物実測図(高谷実測，瀬丸整図) …… 12

第７図　５号トレンチ，１号土壙内出土遺物実測図(高谷実測，瀬丸整図) …… 13

第８図　Ｘ線マイクロアナライザー定性分析結果 …… 17

第９図　定性化学分析結果 …… 17

第10図　定性化学分析結果 …… 17

第11図　城ヶ辻２号墳墳丘測量図(高谷測量，瀬丸整図) …… 19

表　目　次

第１表　周辺主要遺跡一覧表 …… 5

第２表　熊本県内出土「朱壺」一覧 …… 21

図　版　目　次

図版１

１．城ヶ辻１号墳石棺復元（玉名高校）

２．城ヶ辻１号墳石棺復元（玉名高校）

３．城ヶ辻古墳群対岸より鉄塔下

４．城ヶ辻２号墳（北側より）

図版２

２号墳

１．５号トレンチ西側を見る（墳丘より）

２．１号トレンチ西側を見る（墳丘より）

５号トレンチ

３．集石

４．棺材か

図版３

５号トレンチ

１．朱壺

２．朱壺をとった後の土壙

３．甕のかぶさった状態

４．高坏脚部

図版４

３号トレンチ

１．北側をみる

２．中央部凹部

３．２号墳盗掘坑

４．３号墳７号トレンチ東側をみる（墳丘より）

図版５

１．３号墳（西側より）

２．４号墳（北側より）

３．５号墳（北側より）

図版６　試掘トレンチ内出土遺物

序　　章

第１節．調査経過及び調査の概要

建設省九州地方建設局熊本工事事務所では国道208号線の交通緩和等を目的とし，当地区に玉名バイパスの建設を予定した。昭和54年当概地区内の埋蔵文化財の有無について，県文化課へ調査の依頼がなされた。これを受け県文化課では昭和54年３月29日に路線予定地内の踏査を行ない，14箇所の遺跡を確認した。その中でも大塚古墳については，古墳北側周溝部がルート内に位置すること。また城ヶ辻古墳群では，２号墳の墳丘西半分がカットされる可能性が強いため，計画の変更等により両古墳を避ける必要が生じた。県文化課では昭和54年７月～10月まで，路線変更を行なうための予備資料として２遺跡の試掘調査を実施した。

第２節．調査日誌抄

城ヶ辻古墳群の調査を中心としてその調査日誌抄を記す。

昭和54年７月16日　調査のための資材を現地へ搬入する。

７月17～20日　下草刈を行ない，城ヶ辻古墳群の周辺地形の測量を行なう。

７月21～30日　第１，第２トレンチを２号墳西側に設定する。第２トレンチからは土師，須恵器が数点出土し，一部集石を伴ない周溝が確認された。

７月31～８月10日　第３～第７トレンチと順次西側に設定して周溝のつながりを確認する。第５トレンチでは良好な状態で周溝が検出され，上端幅7.5m，深さ1.2m を測る。なおこの箇所からは，土師器の半截甕を土壙にかぶせる形で検出され，土壙内より所謂「朱壺」が発見された。２号墳周溝は西側に一部まれなものの，全トレンチからは検出されていない。

８月11～20日　各トレンチの実測作業及び平板測量の補足作業を行なう。なお３号墳西側に第８トレンチを設定するが，３号墳の周溝は確認されない。

８月21～28日　トレンチ埋めもどし作業。

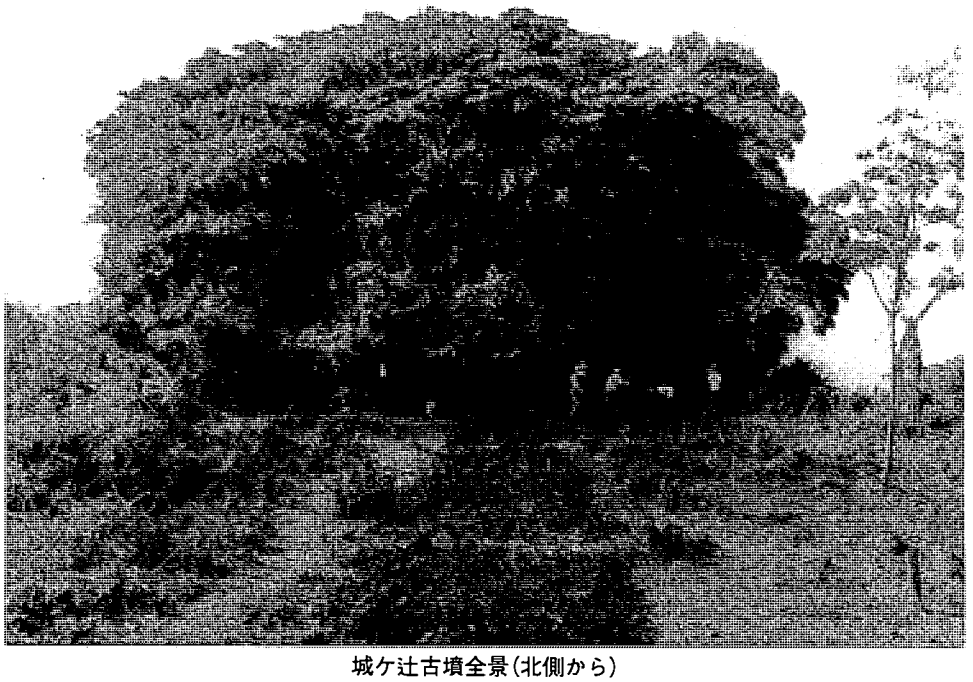
９月27～10月９日　約１ヵ月間大塚古墳の周溝部調査を実施後，城ケ辻古墳群の発掘を再開する。２号墳の主体部に３本のトレンチを入れ，内部主体の有無を確認する。また盗掘坑を清掃し，墳丘盛土の状況等を見る。なお西側部分からは石棺等の内部主体は確認できなかった。

10月10～12日　各トレンチの埋めもどし作業及び資材の撤収作業を行ない，現地での調査を完了した。

第３節．調査の組織

調査組織

調査主体	熊本県教育委員会
調査責任者	岩崎　辰喜（昭和54年度文化課長）
	丸木　保賢（現文化課長）
調査総括	隈　　昭志（昭和54年度文化課調査係長・現文化課課長補佐）
調査員	杉村　彰一（昭和54年度文化課技師）
	高谷　和生（昭和54年度文化課技師・現文化財保護主事）
調査事務局	田辺　守弘（昭和54年度課長補佐）
	村上　孝司（昭和54年度管理係長）
	大塚　正信（昭和54年度管理係長・主幹）
	矢野みゆき（昭和54年度主事）
	林田　敏嗣（現課長補佐）
	森　　貴文（現参事）
	谷　喜美子（現参事）
遺物整理	上野　辰男（主幹）



城ケ辻古墳全景（北側から）

第１章　遺跡をとりまく環境

第１節．遺跡の地理的環境

位置

城ヶ辻古墳群は熊本県玉名市寺田字城ヶ辻（くまもとけんたまなしてらだあざしろがつじ）に所在する。玉名市は県北の大河菊池川の下流域に発達した街で，現在では城北の産業・文化・交通の中心地として栄えている。市は旧高瀬を中心として発達する一方，各集落は県北有数の穀倉地帯である玉名平野を囲む形で，無数に点在している。寺田の集落は寺田台地の平坦面に位置するものの，分村は台地の下段面にもあり遺跡に隣接する樋ケ元には，数棟が小集落を形成している。

立地及び周辺の地形

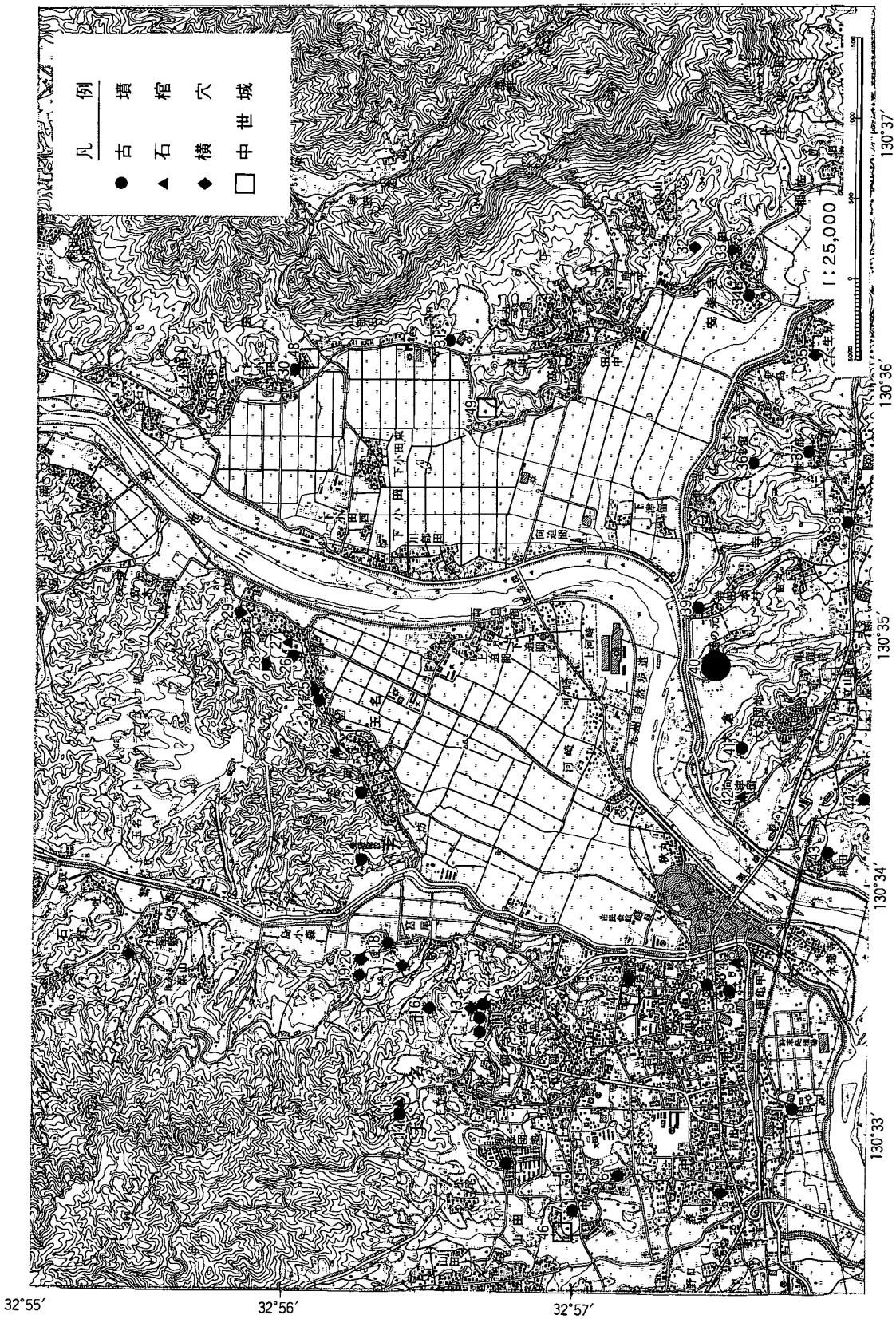
国道208号線は寺田台地の中央部を東西方向に走り，市街地を抜け荒尾方面へと至る。台地は北側へ向かって緩やかに傾斜しつつ，八ツ手状に舌状の丘陵がいたる所に延びる。台地は菊池川に達する直前で急激に落ち，水田面との落差は約30ｍにも達する。遺跡の位置する帯状形の丘陵は北西方向に主軸を呈し，その標高は33～37ｍである。南東側の鞍部を除く三方を菊池川流域の水田に囲まれ，北端部は絶壁となる。丘陵地は古墳が一列に並ぶ平坦面と，雑木林，杉林からなる階段状のテラス面とに分かれる。近年までテラス面は畑として利用されていた箇所もあったが，現在は休耕田となっている。

地質

古墳の構築されている台地は，洪積世に形成された金峰山の北側の最先端部であり，花崗岩風化帯をその基盤としている。丘陵の一部には凝灰岩を基盤とするところもある。金峰山には安山岩の自然露頭もあり，石棺の割石材の入手も可能である。

第２節．遺跡の歴史的環境

遺跡をとりまく歴史的環境は多岐にわたる。第１図及び第１表に周辺の主要遺跡を記載する。



第１図　城ヶ辻古墳群周辺主要遺跡図

第１表　周辺主要遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	種別	備考
1	だいの島古墳	玉名(通称だいの島)	古墳	玉名駅南,台地南突端,箱式石棺,いま消滅
2	田島地下式横穴	玉名・田島	地下式横穴	２期並列，出土物なし
3	稲荷山古墳	繁根木・馬場	古墳(方円)	八幡宮裏,前方後円の封土,朝顔形埴輪
4	繁根木古墳	〃　〃	箱式石棺	八幡宮東・大正初期方格規矩文鏡を出す
5	伝左山古墳	〃　北	古墳(円)	国道208号沿線径37mの円墳出土品多量
6	馬場鉄冑出土地	中尾・馬場	古墳	馬場量宅地内より出土，眉庇付，火災で消失
7	高岡古墳	山田・高頭	古墳	高台上，封土を失う，墓地内に大石材堆積
8	岩崎古墳	岩崎・池田	古墳	菅原神社神体とする，箱式石棺か
9	糠峯古墳	山田・糠峯	古墳	独立小山南斜面箱式石棺，祠とする
10	大塚古墳	立願寺・大塚	古墳	大円墳保存良好
11	小塚古墳	〃　〃	古墳	〃
12	冷水塚古墳	富尾・冷水	古墳(円)	冷水台頂上船形石棺をもつ,現在なし
13	冷水横穴群	〃　〃	横穴	冷水台地の北17基が不明
14	蛇が谷古墳(A)	立願寺・蛇が谷	船形石棺	封土中に船形石棺現在なし,鉄器出土
15	〃　(B)			
16	富尾いたび横穴群	富尾・居桧(いたび)	横穴	13基崖下に北面する
17	富尾原横穴群(A)	富尾・原(はる)	横穴	富尾天満南西16基,装飾のあるもの6基
18	〃　(B)	〃　〃	横穴	10数基
19	富尾浦谷横穴群(B)	富尾・浦谷	横穴	富尾天満宮東裾に10数基,完形が多い
20	浦谷横穴群(A)	〃・辻	横穴	富尾天満宮北谷２基
21	西原古墳参考地	玉名・西原	古墳？	玉名山西端部,だ円状の封土
22	大坊古墳	玉名・出口	古墳	横穴２室，三角連続彩色あり
23	岡箱式石棺群	玉名・上原	箱式石棺群	妙修寺の墓地内３基，２基保存
24	永安寺西古墳	玉名(通称永安寺)	古墳	横穴単式，円文線刻
25	永安寺東古墳	〃	古墳	横穴複式,円,三角舟,馬を描く
26	馬出古墳	玉名・馬出	古墳(円)	横穴式墳,船形石棺,箱式石棺
27	小路古墳	玉名・小路	箱式石棺	27mの山上にあった。現在他へ復元
28	絵下経塚古墳	玉名・絵下	古墳	玉名大神宮裏山にあり,封土,周溝あり
29	元玉名横穴群	玉名・実極田	横穴	風化，２基
30	徳丸古墳群	上小田・下徳丸 榎町	古墳(方円)	前方後円形３基,並列,舟形石棺
31	山下古墳	玉名・山下	古墳(方円)	古式前方後円墳,前後各１,船形棺
32	浦方染山横穴群	安楽寺・(通称浦方)	横穴	梅林小学校裏手谷合い４基,風化する
33	蓑田横穴群	〃・蓑田	横穴	稲佐への県道東入り,数基
34	隨月古墳	〃・隨月	古墳	
35	田崎横穴群	田崎・楢山	横穴	国道208号線沿い，３基と造りかけ1基
36	上津留古墳	津留・小部田	古墳(円)	高台北端に位置,径25mの封土遺存
37	世間部塚古墳	寺田・世間部	古墳	「塚さん」という，山伏塚か
38	ナカント塚古墳	寺田・吉丸	古墳	部落西南畑中,封土あり,内部不明
39	寺田古墳群	寺田・宇土	古墳	舌状台地北端,封土遺存,内部不明
40	**城ケ辻古墳群**	寺田・城ケ辻	古墳(円)	群中の主墳,完形遺存,内部不明
41	飯塚古墳	向津留・飯塚	古墳(円)	円墳,保存度よい
42	松林寺山古墳	向津留・下	船形石棺	大型船形石棺露出,棺蓋不明
43	桃田古墳	大倉・桃田原	古墳	部落南墓地伝箱式石棺出土
44	高田古墳	大倉・高田	古墳	台地頂上,円墳,内部不明,円墳の周辺箱式石棺出土
45	古城(こうじょう)横穴群	石貫・古城	横穴	
46	高岡城跡	山田・高頭	城跡	跡地吉村宅,標石建つ(私設)
47	岩崎城跡	岩崎・池田	城跡	部落中菅原神社社地,土壇,周溝あり
48	上小田城跡	上小田下・徳丸 榎町	城跡	中世丘城,古墳改造の形跡
49	下村城跡	下・高城	城跡	本丸跡に薬師堂五輪群あり

第２章　調査結果

第１節．遺　構

今回の調査では試掘トレンチを墳丘上に内部主体確認のため３本，周辺部には古墳の周溝を確認するため10本設定した。道路予定区から壁の法面が墳丘へと一部かかるため，西側に集中して試掘を行なった。

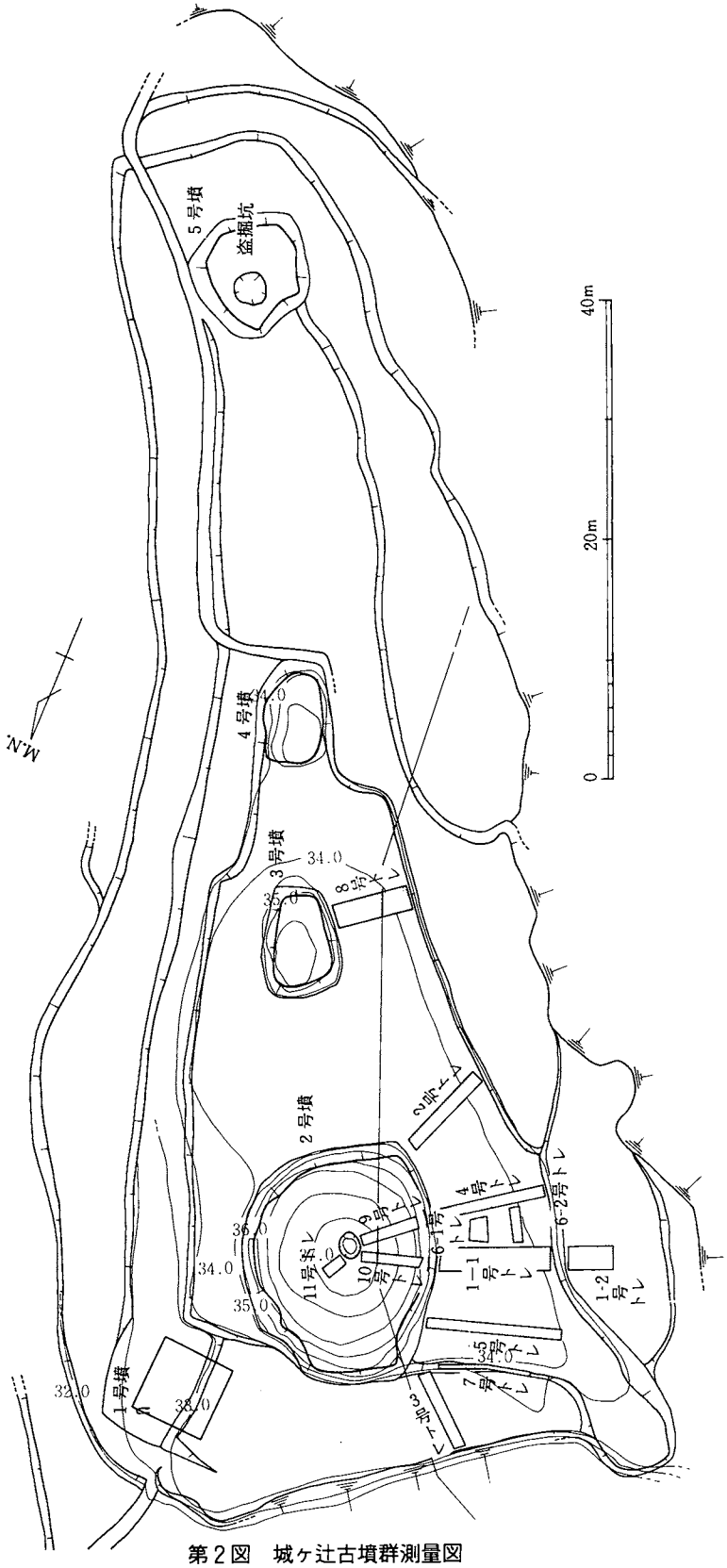
１号トレンチ（第３図）　２号墳西側に２×9.5m，２×４ｍのトレンチを設定する。上段のトレンチからは２号墳周溝が確認される。下端幅3.0m，上端幅は墳丘側の立ち上がりは判明するものの，反対側が植林のため確認できないが6.4mを超えるものと思われる。確認面より周溝底までの深さは最大1.2mを測る。周溝内は３～６層までの埋土で，４層内より少量のカーボンが検出される。須恵器片が６層中より出土。中世時期と考えられる，須恵器は２層中より出土となる。

２号トレンチ　２号墳南西側に１×８ｍのトレンチを設定する。深さ60cmで地山に達する。出土遺物はなく，周溝は検出されない。

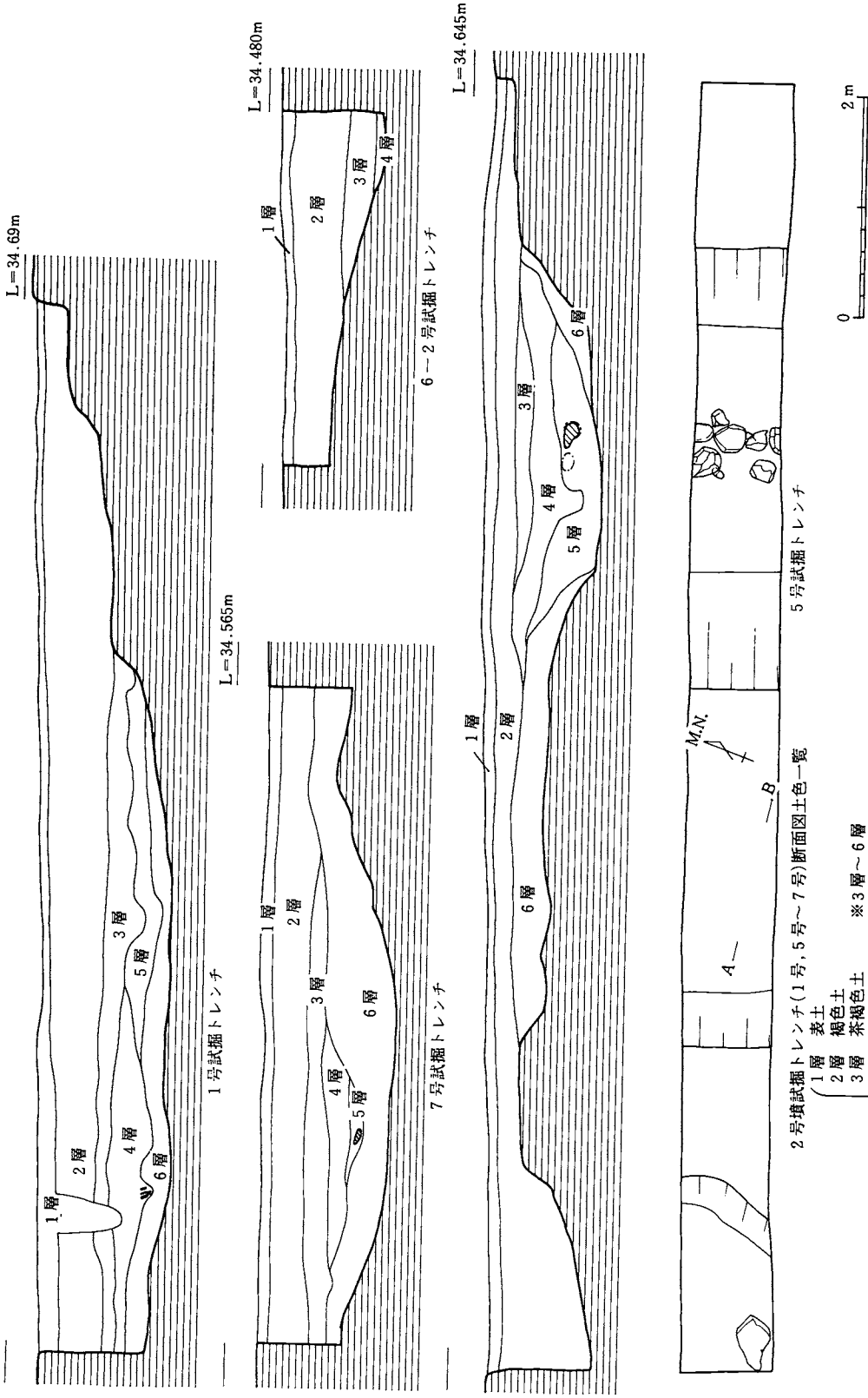
３号トレンチ（第４図）　２号墳北西側に1×7.6mのトレンチを設定する。深さ30～60cmで地山に達するものの，中央部に溝遺構が確認される。１・２層は各トレンチと埋土は共通であるが，３層は茶色で，周溝内の上部の埋土に近似する。溝遺構は上端幅50cm，下端幅35cm，深さ20cmを測り，埋土内より少量の赤色顔料がブロックで出土した。なお遺物類の共伴がないため時期は不明。この一筆は西側箇所よりも約80cmの落差を有するため，人工的な削平により周溝は消失したものと考えられる。

４号トレンチ（第４図）　１号・２号の間に１×９ｍのトレンチを設定。約50cmで地山に達し，周溝は検出されない。土師器甕破片が出土するが，これは遺構に伴なったものではない。

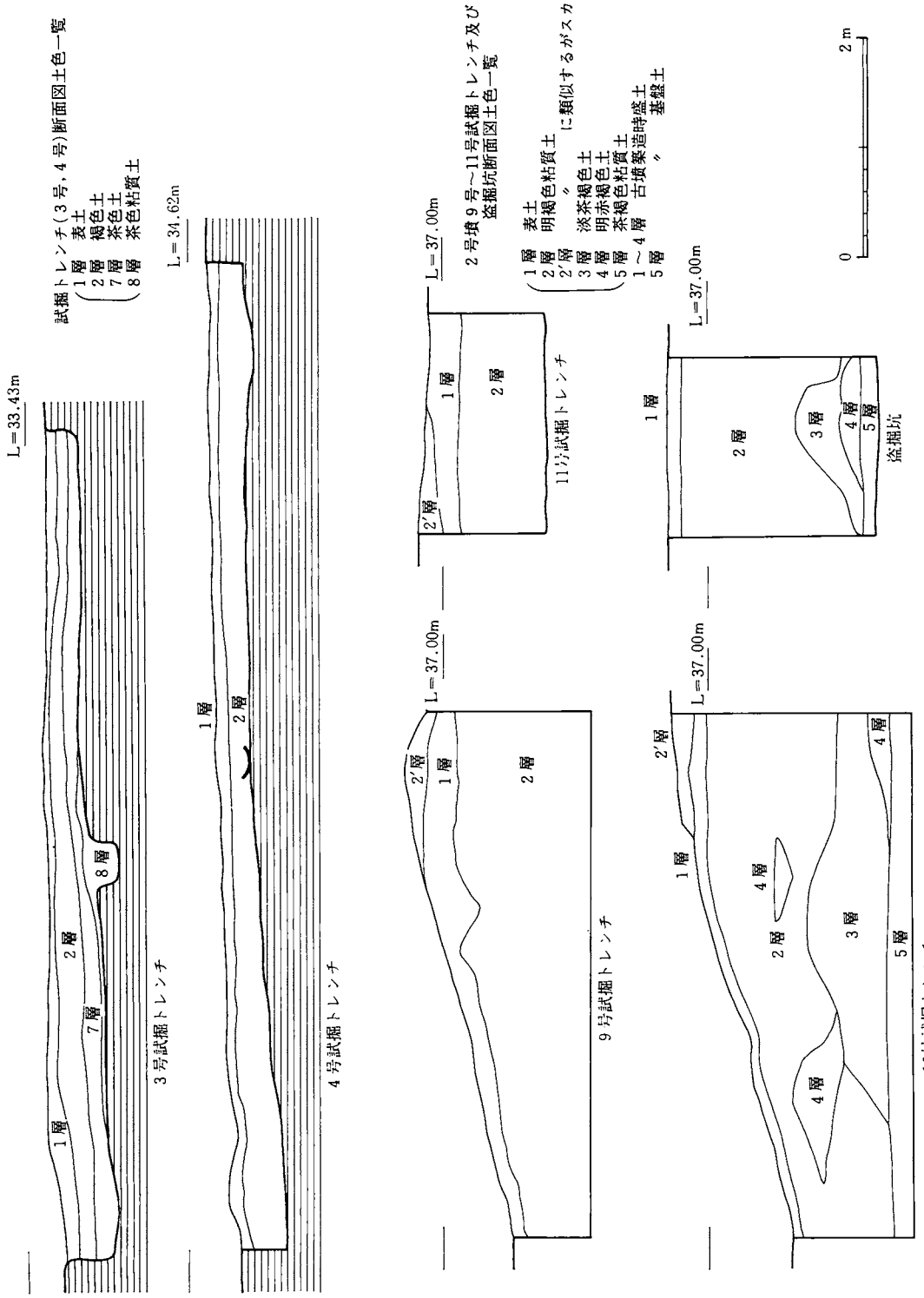
５号トレンチ（第３図）　１号トレンチの北側に１×12mのトレンチを設定。２号墳の周溝を良好な状態で確認。周溝の形状は，墳丘側はストレートに立ち上がるが，外縁方向は２段に分かれてゆるやかに延びる。周溝の規模は上端幅7.5m，下端幅2.3m，深さ1.2mを測る。５層内から安山岩製の集石が検出されるが，これらは周溝底よりやや浮いた状況である。なお試掘坑最西端の深部より安山岩の切石（45×30cm）が，凝灰岩の小破片とともに出土する。これは２層中であり，後世の攪乱により落としこまれたものと思われる。棺材の一部とも考えられるが出所は不明である。また周溝内より土師器高坏脚部が出土し，隣接して所謂朱壺を埋納する１号土壙が検出される。



第2図　城ヶ辻古墳群測量図



第3図　試掘トレンチ(1号，5号，6号，7号)断面及び平面実測図



第4図　試掘トレンチ（3号，4号，9号～11号）及び2号墳盗掘坑断面実測図

６号トレンチ（第３図）　１号・４号トレンチの間に不定の規格で設定した。ここでは１号トレンチで確認された周溝が，この箇所まで延びるか否かを確認した。６－２トレンチで周溝の立ち上がりを検出した。出土遺物はなし。

７号トレンチ（第３図）　５号トレンチで確認された周溝が北側にどのような状況で延びるのかを知るため，落差のある土手面にそって設定された。遺物の出土はなかったが周溝が一部確認された。墳丘側は植林のためトレンチをこれ以上延長できなかったが，ほぼこの傾斜角で墳丘へと立ち上がると考えられる。一方外縁方向では植林のため周溝上場端は確認できなかったが，隣接する５号トレンチの形状から見て，平坦面を形成後，ゆるやかに立ち上がるものと思われる。出土遺物はなし。

８号トレンチ　３号墳の周溝想定位置がルート内に位置している為に，墳丘西側に2×6.5mのトレンチを設定。掘削30cmで花崗岩の地山に達する。３号墳に周溝は現存しない。

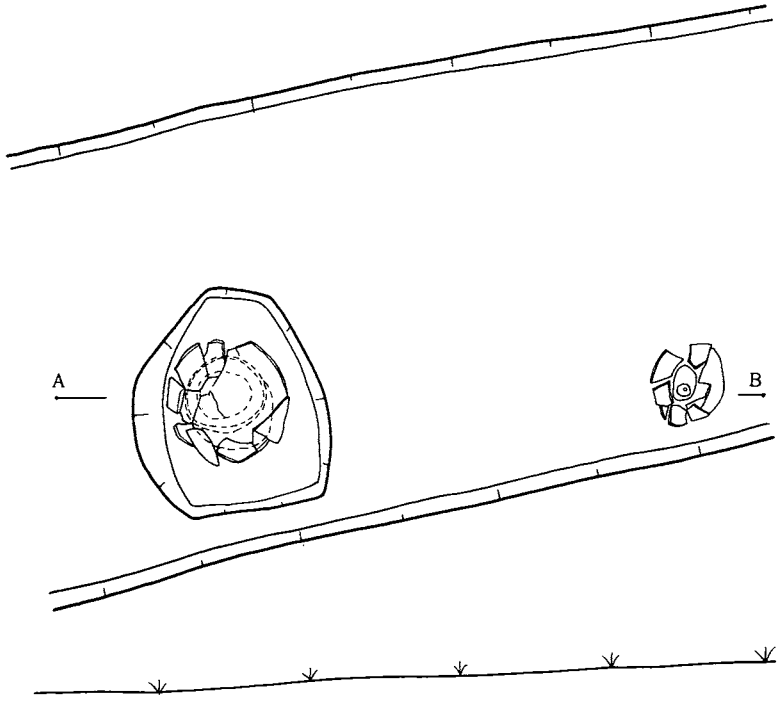
９号トレンチ（第４図）　２号墳の墳丘に内部主体が存在するのか否か，確認のため９号～11号までの試掘トレンチを設定する。内部主体は確認されず，1.7m掘り下げても地山には達しない。１層の上部には盗掘時の排土と思われる２層に類似の土が一部覆う。

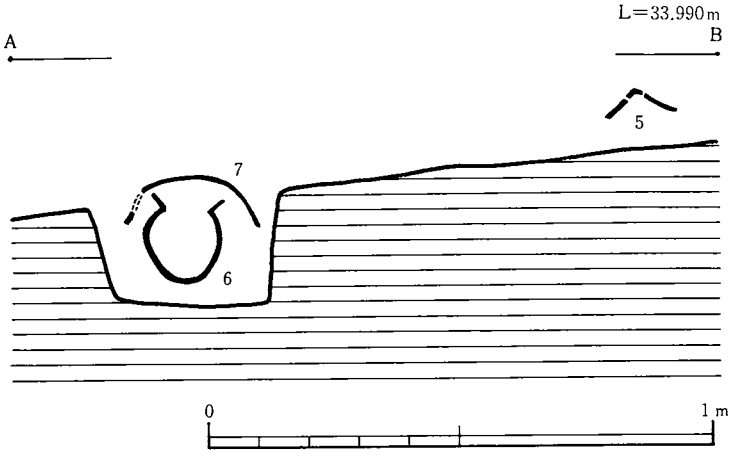
10号トレンチ（第４図）　この試掘坑からは内部主体は検出されなかった。最大２ｍ掘り下げにより，古墳の築造時の基盤土に達する。２号墳は明褐色粘質土と淡茶褐色土を中心としての盛り土であることが判明する。

11号トレンチ（第４図）　墳丘北東側に１×２ｍの小型のトレンチを設定する。内部主体は検出されず，1.1m掘り下げるが，地山には達しない。

盗掘坑（第４図）　２号墳の墳丘の中央部には直径２ｍ程度のほぼ円形の盗掘坑が１基見られる。ここではこの盗掘坑を再度基底面まで清掃し，内部主体の有無等について検討した。現況より1.8m掘り下げ，古墳の築造基盤土に至る。坑内には，棺材の破片等全く見られず，坑の規模，断面等の状況から見て，古墳の内部主体には到達していないと判断する。

１号土壙（第５図）　５号トレンチ内周溝底部に掘り込まれる。径45cmの不整形の土壙で深さは約20cmである。土壙の埋土は周溝内６層と酷似する。土壙内には完形の所謂朱壺（第７図６）が埋納されており多量のベンガラが口縁部まで充満していた。壺の上部には半截した甕（第７図７）が口をふさぐ形で被せている。隣接して出土する高坏（第７図５）も意図的な穿孔が有ることから，１号土壙との関連性も考えられる。





第5図　1号土壙実測図

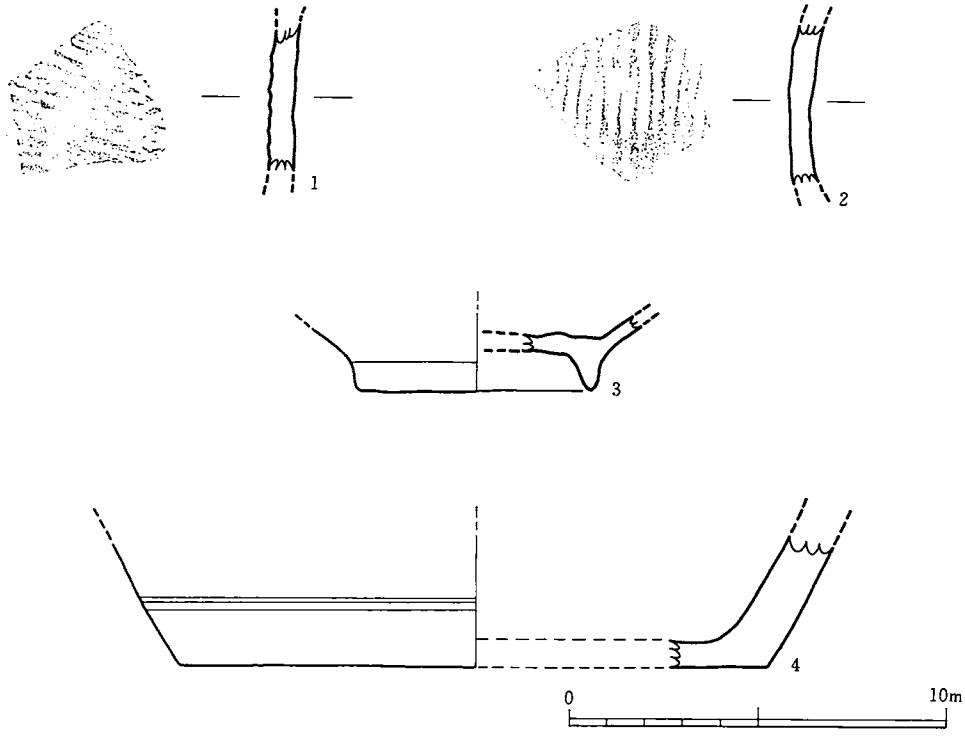
第２節．遺　物

１号トレンチ内遺物（第６図）

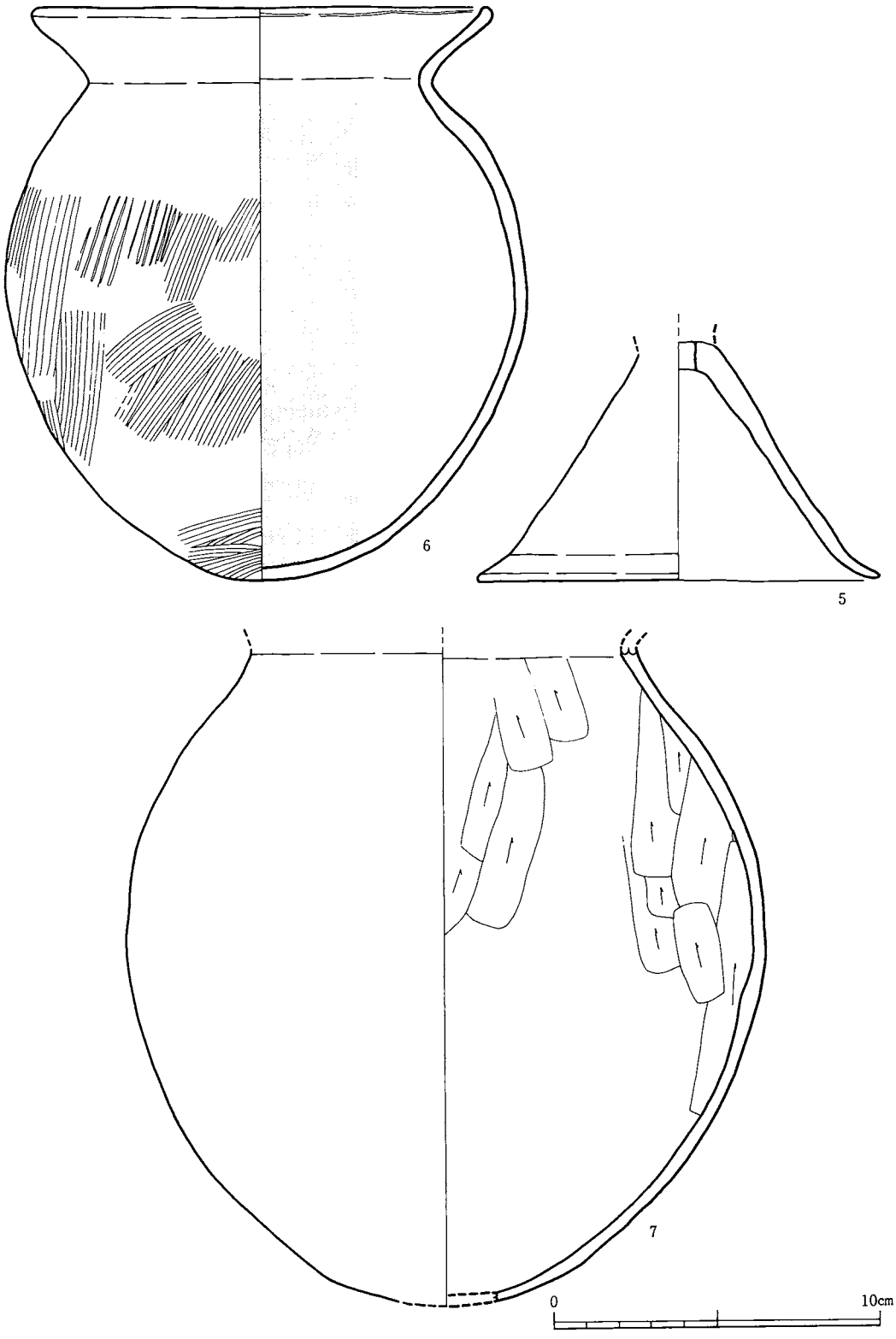
1は須恵器の破片である。表面は平行の叩き目を，裏面は青海波状文が見られるが，すれて文様が不鮮明である。**2**は須恵器壺の破片である。表面は大型の平行叩き目を，裏面は回転水びき整形で仕上げを行なう。１・２ともに周溝内６層（最下層）よりの出土である。**3**は須恵器高台付の坏である。焼成が不良で赤褐色を呈し，磨耗のため調整が不明である。**4**は須恵質土器・壺底部片である。表面はヨコ方向の細い条線を残すナデ調整であり，裏面はヨコ方向ナデ調整を施すものの，ヘラの粗い痕跡が見られる。なお底部内側には指圧が残る。３・４ともに２層内出土である。

４号トレンチ内遺物

土師器甕の破片である。破片は長方向26cm，短方向19cmを測るが，径が不足のため復元は不可。外面は一部ヨコ方向にナデ調整を，内面はヘラ削りを施し，その単位は12mmである。焼成は良であるが，全体に磨耗しており，図化できなかった。なおこの遺物は遺構にともなうものではない。



第６図　１号トレンチ内出土遺物実測図



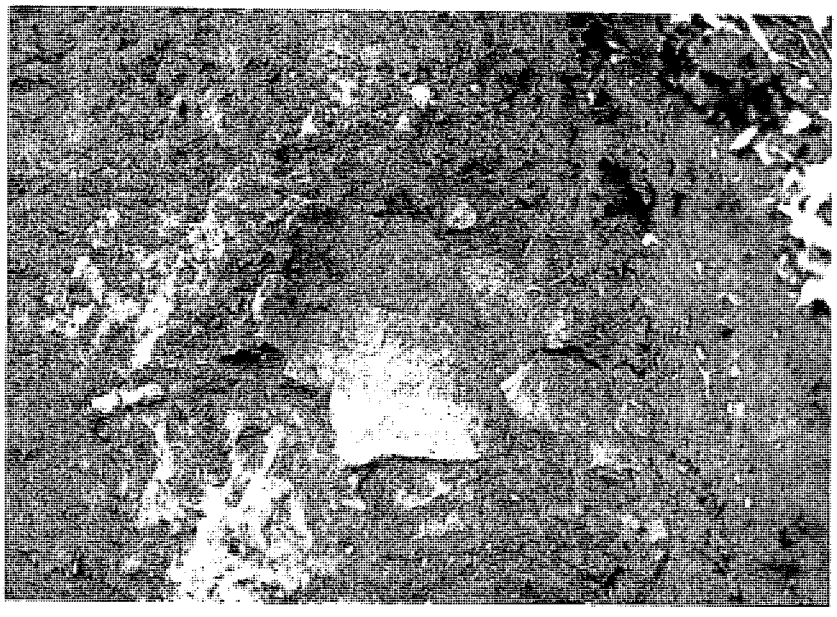
第7図　5号トレンチ、1号土壙内出土遺物実測図

5号トレンチ内遺物（第7図）

5は土師器の高坏の脚部片である。最大径12.5cm，残存高7.4cmを測る。坏部は欠損し，取り付け部は接合のための刻み目を有する。なお中央部は焼成後に穿孔が外面から内面に向かってなされる。1mm内外の石英粒を含む胎土で，焼成は良好。表面は磨耗のため調整の観察は不能。周溝内の出土で1号土壙に接するため，祭祀的に使用されたとも考えられる。

1号土壙内遺物（第7図）

6は完形の土師器の壺である。口縁部径14.4cm，胴部最大径15.8cm，器高17.6cmで胴部が卵形となる。外面は口縁部が回転ヨコナデ調整であり，胴部は上方から下方に向かって刷毛目調整を施す。刷毛目の幅は9～14mmで，底部に至るまで丁寧に重ねる。内面は顔料付着のため観察不能。なお壺には泥とともに口縁部ぎりぎりまで赤色顔料が入り，朱色であった。色調は内底部のものほど，顔料の沈澱のためか朱色が強く，現在でも壺内面は強い朱色である。なお外面には全く顔料の付着は見られない。**7**は土師器の甕片で，胴部縦方向½の残存である。口縁部は欠損し，底部については穿孔の有無は不明である。外面は磨耗のため観察は不能であるが，内面は下方から上方に向かってヘラ削りが施され，単位は1.0～1.6mmである。胎土には4mm大の石英粒を含み，焼成は良である。なお内外面とも赤色顔料の塗布は見られない。



4号トレンチ内遺物出土状況

第３節．玉名市城ケ辻古墳出土の土師器内検出の鉱物質の鑑定報告

Ⅰ．緒　言

発掘された土師器内より採取された試料は粘土状の含水物質であり，提供された試料は土師器の底部より採取された赤色の濃厚な粘土状物質と，上部より採取された赤色の稀薄な粘土状物質の二種であり，考古学的所見として朱と思われるとのことであった。

しかしながら通常赤色系顔料として考えられるものについて考察してみると次のごとくである。

Ⅰ－a　朱について

通常朱と称せられているものは赤色硫化第二水銀のことで，天然には辰砂として産出されるものである。

分子式はHgSで示され，土状のものは粘土，酸化鉄，有機物などの不純物を含む。

六方晶系に属し通常菱形六面体または厚卓状，結晶性の鉱衣，粒状，塊状またときに土状の被覆物がある。

ダイアモンド光沢を有するが，暗色のものは金属光沢，粉状のものは艶がない。

深紅色，しばしば褐赤，鉛灰色に変わる。条痕は深赤色である。

Ⅰ－b　鉛丹について

鉛丹または光明丹ともいわれているが，分子式はPb_3O_4，四三酸化鉛である。このものは市販品の朱と称する粗悪品に安価にするために混ぜられていることがある。通常一酸化鉛PbOを450℃附近で長く熱して得られる赤色の粉末で，正方晶系に属する。

Ⅰ－c　弁柄について

鉄には通常三種類の酸化物が存在するが，弁柄と称されるものの主成分は第二酸化鉄とよばれるもので，分子式はFe_2O_3である。

これは安価な赤色顔料としてよく用いられるほか，ガラスなどの研磨剤としても用いられる。鉱物としては赤鉄鉱であり，現代製鉄業の主要鉱石でもある。

以上簡単に解説した三種が，通常赤色系顔料として用いられているものであり，就中弁柄は最も広く人類が使用してきた赤色系顔料である。

今回提供された二種の試料をみると土師器の中に貯蔵された長年月の間に赤色成分が底部に沈澱したものと考えられる。

Ⅱ．定性化学分析結果

上記のごとく三種類の赤色系顔料の主成分をなすものは，水銀，鉛，鉄であるところから，これら三種のイオンの存在を確認すれば供試材料の鑑定が出来ることとなる。

Ⅱ－a　鉛イオンの検出について

100mgの試料を含む溶液を小ビーカーにとり，硫酸を加えると鉛が存在する場合には硫化鉛，$PbSO_4$の白色沈澱を生ずる。

しかしながら本試料の場合は何等の沈澱もみられず，したがって鉛の存在は認められなかった。

Ⅱ－b　水銀イオンの検出について

水銀は沃素との直接作用により赤色沃化水銀の沈澱を生ずることが知られている。

100mgの試料を含む溶液を小ビーカーにとり，沃化カリ溶液を加えたが何等の変化もなく，したがって水銀の存在は認められなかった。

Ⅱ－c　鉄イオンの検出について

鉄イオンが存在すればフェロシアン化カリウムの作用により伯林青の青色沈澱を生ずることが知られている。この反応はきわめて鋭敏で極微量でも検出される。

100mgの試料を含む溶液を小ビーカーにとり，フェロシアン化カリウムを加えると見事な青色沈澱を生じ，明らかに鉄イオンが多量に存在することを確認した。

以上の定性化学分析の結果から明らかになったことは供試材料には，鉛も，水銀も含まれておらず，したがって当初予想されたごとき朱でもなく，又鉛丹でもなく，最も普遍的な弁柄であるということである。

Ⅲ．X線マイクロアナライザー分析結果

次に本学工学研究機器センターに設置するX線マイクロアナライザーによる線分析を行った。

使用機器：島津EMX－SM型

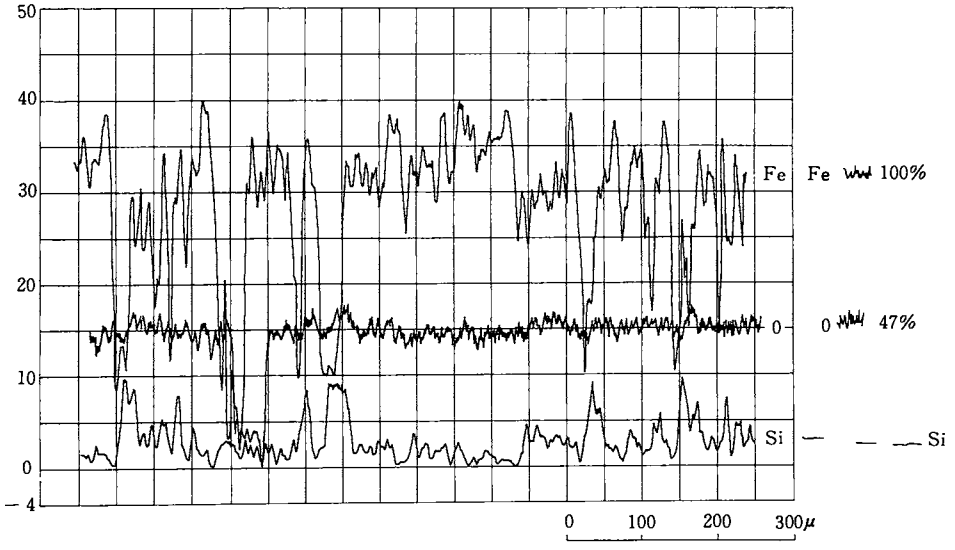
結果は次の二枚のチャートに示すごとく，水銀も鉛も検出することは出来ず，鉄が多量に存在することが明らかとなった。

参考のために酸素と硅素の分析も行ったが，粘土成分であるため当然検出されている。

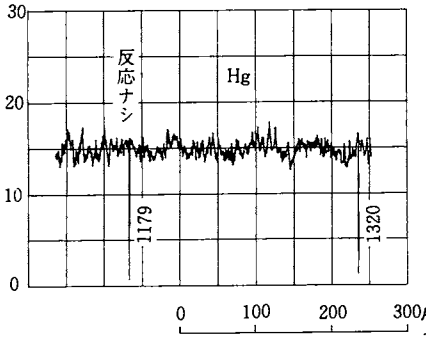
Ⅳ．結　言

以上の結果から供試材料はFe_2O_3の分子式で示される酸化第二鉄を主成分とする粘土状物質であり，通称弁柄といわれるものの原料物質であると認められる。

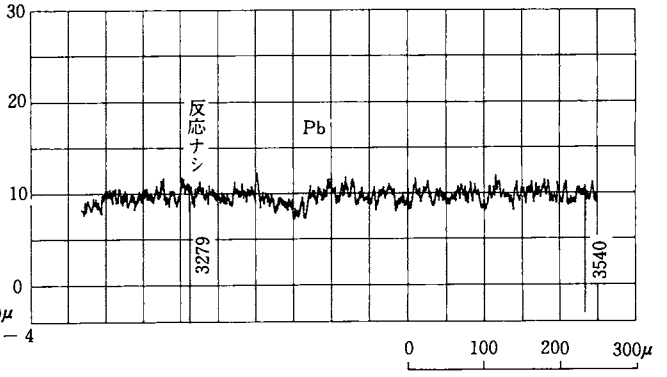
以　上



第8.図　X線マイクロアナライザー定性分析結果



第９図　定性化学分析結果



第10図　定性化学分析結果

第3章　総　　括

以上前章までで城ケ辻古墳群についての調査内容を記述してきた。この章では遺跡の内容，性格などについてまとめてみたい。

1号墳について

城ケ辻古墳群の1号墳については，昭和46年に九州電力の高圧送電線鉄塔の建設の際，北東隅の鉄柱が石棺を破損し発見された。石棺(註1)は安山岩の板石を利用した組み合わせ式箱式石棺であり，その規模は全長1.7m，幅60cmを保つ。内部からは人骨が良好な状態で検出され，鉄製刀子が出土したと言われている。詳細は報告がなされていない為に不明であるが，小規模な墳丘があったと言われている。いずれにしても，本古墳群の一角を成すものであり，内部主体が判明する貴重な資料である。

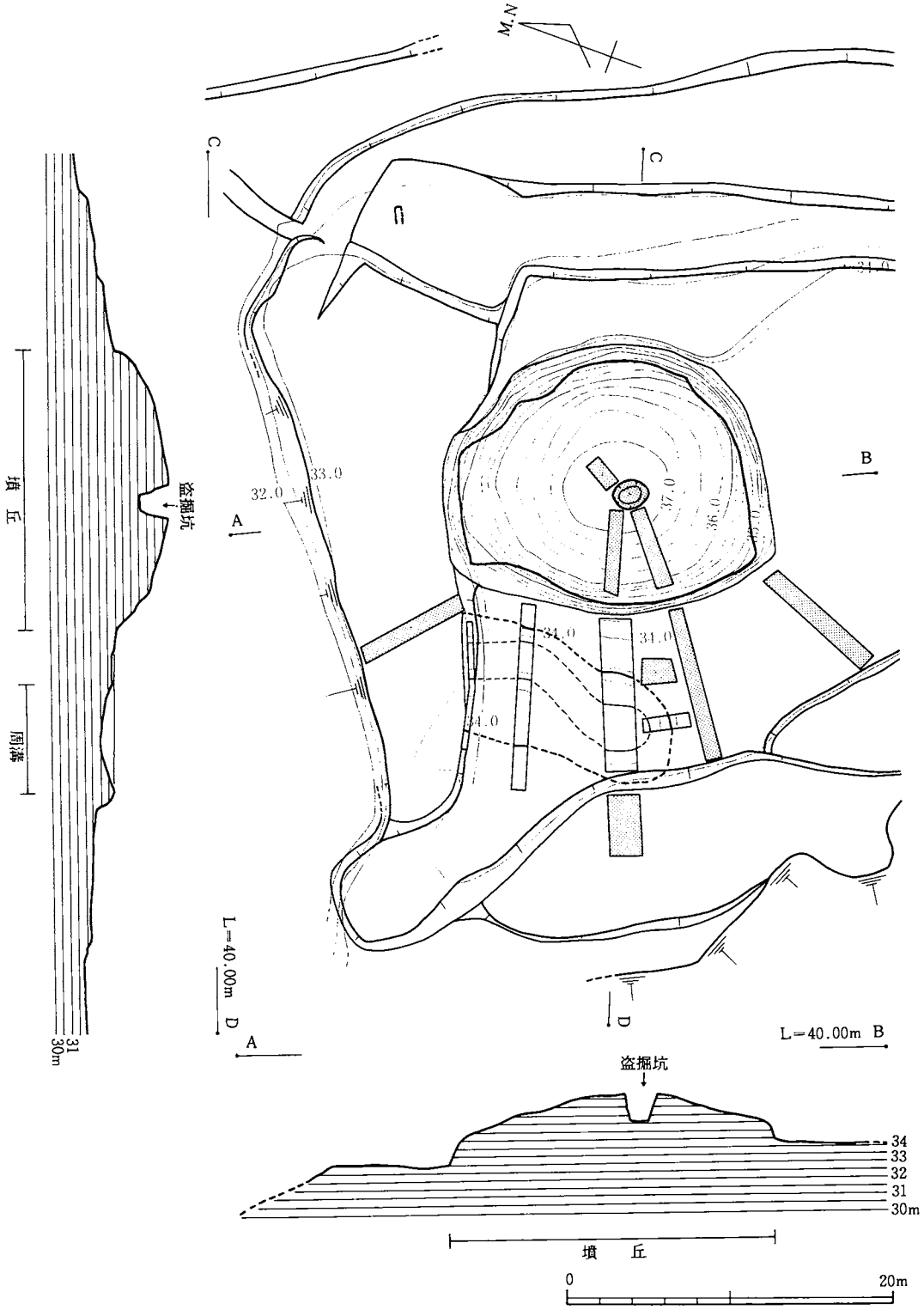
2号墳について

2号墳の周溝は，墳丘西側に確認された。5号トレンチ内が最も良好な状態であり，上端幅7.5m，下端幅2.3m，深さ1.2mを測る。周溝は北側方向へ延びて7号トレンチまでは確認されるものの，墳丘北側の一筆については，削平により旧地表面が消失しており，一部3号トレンチ内に近似の埋土を残すのみである。一方周溝の南側は，6－2トレンチで既に立ち上がり，4号トレンチには達せずここで完結する。1号トレンチ内では，周溝は外縁方向側へと広がり，一部段落ちまで達するものと思われる。墳丘東側についても同様の形状で周溝は残存すると思われるが，全体的に削平を受けている為，状況は不明である。本古墳群中最大の規模をもつ2号墳では，周溝の形状は丘陵の突端側の北側及び西側で確認された。

古墳の規模は次のように計測される。墳丘の規模は南北方向20m，東西方向17.5mを測る。形状は南北方向にやや長い長楕円形で，墳丘裾部ならびに墳丘頂部はかなり手が加えられているが，ほぼ円墳であると想定される。西側部分では周溝部まで含めた古墳の半径規模は，想定中心地点から，周溝外縁上端まで19m弱を測る。

古墳の構築は丘陵の尾根線を利用して行なわれたと思われる。この丘陵の地山は花崗岩風化土であり，2号～5号墳を南北一列に結ぶ線が標高的には最も高いラインであると考えられる。10号トレンチの埋土状況で見られる様に，地山の基盤土はほぼ水平を保っており，その上に4層の埋土を重ねて盛り土を行なったものと思われる。

2号墳の時期は1号土壙内出土の壺（第7図6）を時代判定の資料としたい。土壙の埋土は



第11図　城ヶ辻２号墳墳丘測量図

周溝最下層（6層）の埋土と酷似し，しかも隣接出土の高坏の状況等が時代判定の材料である。壺外面の刷毛目，口縁のつまみあげる手法，胴部が卵形をなす事などから，北部町葉山塚古墳よりも古い要素を持つものと考え，城南町くぬぎ塚平行期の5世紀前半時期と考えられる。なお他の古墳については，時期は不明である。

中世城について

寺田地区のこの丘陵には「城ケ辻」という字名が残されている。熊本県下の中世城跡の調査(註2)では，伝承等はないが古墳墳頂部の人工的な加工・立地・周辺部の地形，特に南東側鞍部の土橋状遺構などから中世城，砦等の類が存在した可能性は十分あるとしている。今回の調査では，部分的な試掘トレンチによる調査であった為，城跡の遺構等は検出されていない。しかしながら1号トレンチ内の2層中よりの須恵質土器の出土や，最西端部の急激な落ち込み等からして，この時期に何らかの遺構のあった可能性は高いと言えよう。さらにはより積極的条件を満たす為に，縄張り図の作製等を行なう必要があるであろう。

所謂朱壺について

熊本県内において「赤色顔料を保存容器内に納めた」例は筆者の知るかぎり別表第2表の通りである。全国的に見ても，施朱が最も盛んであったと思われる古墳時代においては，資料的には古いが10例と非常に少ない(註3)。また10例中には高坏坏部内に赤色顔料が充たされていた例があるが，高坏を朱の容器とは考えられても，狭義の朱壺とはいいがたい。器形的に見ても，甕，壺等の運搬，保存に適したものを，朱壺と呼ぶべきであろう。

昭和50年の集計では，古墳時代で内部主体以外からの朱壺の出土例は2例である。1例は神原古墳（島根県）の石室外側埋納壙からの土師器壺の出土である。もう1例はアリ山古墳（大阪府）の遺物埋納施設からの土師器壺（水銀朱）の出土であるが，これらはいずれも墳丘内からである。熊本県内では別表にある様に，浦大間1号方形周溝墓出土例が最も状況的に似るが，埋納遺構は持たない。

いずれにしても周溝内に埋納遺構を持ち，かつ祭祀的な用途かと思われる状況からして，本例は非常に特異な例であろう。今後類似資料の増加をまって，さらに内容的に深めていきたい。

註1　昭和46年，玉名高校考古学部の緊急調査で発見された。当時の関係図面の所在がつかめないため，写真のみの掲載とする。なお石棺は現在，玉名高校の南側敷地の一角に移転し復元がなされている。

註2　大田幸博編『熊本県の中世城跡一熊本県文化財調査報告　第30集』熊本県教育委員会　1978。

註3　市毛　勲『朱の考古学』雄山閣　昭和51年。

第2表　熊本県内出土「朱壺」一覧

番号	遺跡・遺構名	所在地	出土遺物	出土状況	共伴遺物	その他（参考文献・保管先・顔料）
1	浦大間古墳群 1号方形周溝墓　周溝内	鹿本郡鹿央町 千田浦大間	• 土師器・壺 • 5世紀 時期	• もともとは木栓等がつけられたものか。 • 倒立（口縁を下に）して出土・朱が半分つまる。 • 1号周溝の南西隅より，ほぼ周溝底直上より単独。	• 単独出土 （付近に石棺の棺材あり）	• 平岡勝昭・江本直調査『埋蔵文化財研究会第　回研究集会資料集』 • 熊本県教育委員会　蔵 • 顔料未分析
2	花岡山 箱式石棺群 3号石棺	熊本市横手町 二丁目	• 土師器・壺 • 5世紀	• 石棺付近より石栓（安山岩）を施して出土	• 壺内より勾玉2，ガラス玉22，赤色ガラス玉，碧玉，菅玉各1が出土。	• 乙益重隆調査『熊本市西山地区文化財調査報告書』熊本市教育委員会　昭和44年 • 熊本市立博物館　蔵 • 顔料未分析
3	遺跡名　不明	菊池郡内 出土か	• 土師器・小型壺 • 5世紀 前半	不　明	不　明	• 坂本経堯採集調査不明 • 泗水町歴史民俗資料館　蔵 • 顔料未分析
4	郷原石棺	鹿本郡鹿央町 岩原字郷原	• 土師器・甕 • 布留　時期	• 圃場整備の削平のため詳細不明であるが石棺頭部付近の包含層内よりの出土 （特殊な遺構はなし）	• なし 単独	• 中村幸史郎調査未報告 • 山鹿市歴史博物館　蔵 • 顔料未分析
5	西岡台遺跡 SD−01	宇土市神馬町 西岡台	• 土師器・甕 • 布留　時期	• 古墳時代のV字溝から大量の土師器と一緒に出土する。	• 土師器類	• 宇土市教育委員会　蔵 • 顔料未分析
6	境目西原遺跡	宇土市境目町	• 土師器・壺 • 布留　時期	不　明	不　明	• 宇土高校社会部調査未報告 • 宇土高校　蔵 • 顔料未分析

この出土地名表を作製するにあたり，次の方々の協力を得ました。記して謝意を表したいと思います。　（順不同，敬称略）

平岡　勝昭　　江本　　直　　島津　義昭
中村幸史郎　　富田　紘一　　村井　真輝
木﨑　康弘　　隈　　昭志　　田添　夏喜
高木　恭二　　西　健一郎　　桑原　憲彰

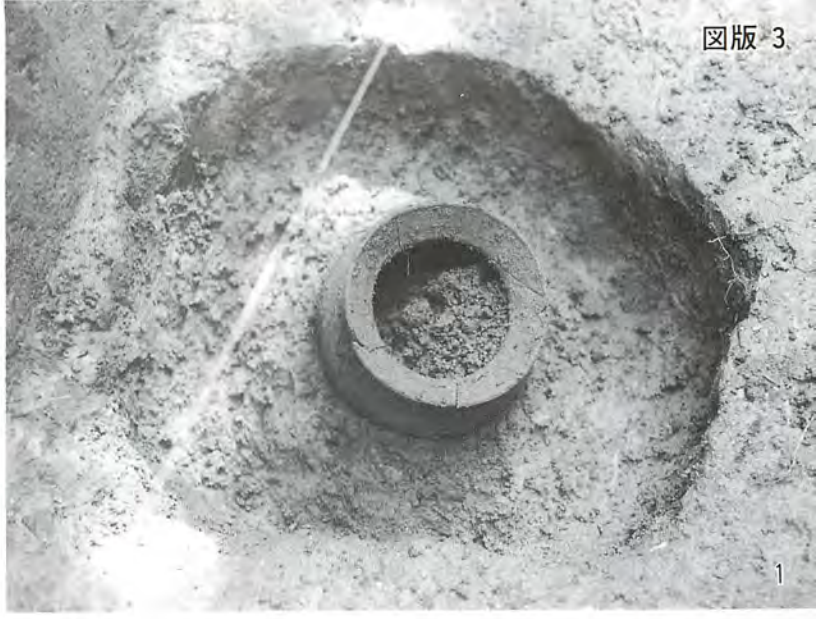
以　上

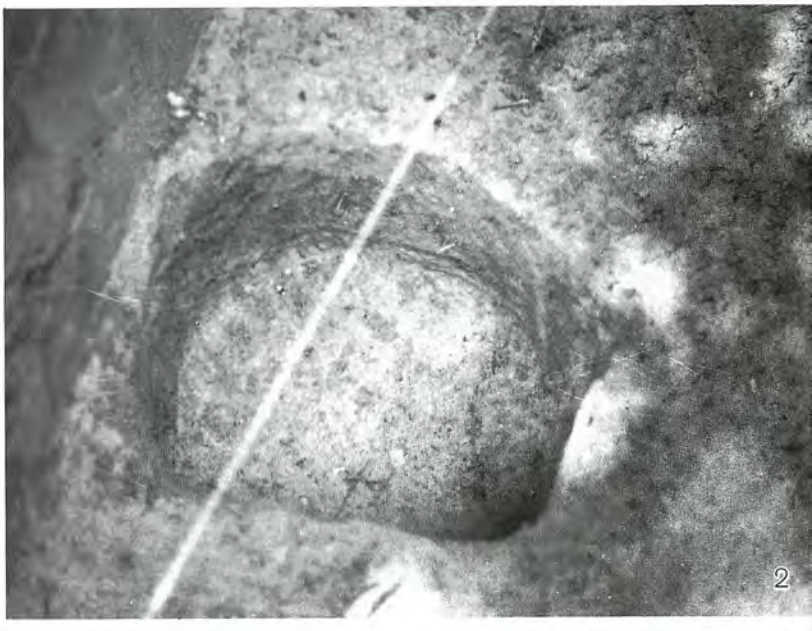
図　　版

１．城ヶ辻１号墳石棺復元(玉名高)
２．　　〃　　〃
３．城ヶ辻古墳群
　　対岸より鉄塔下
４．城ヶ辻２号墳
　　(北側より)

図版 2

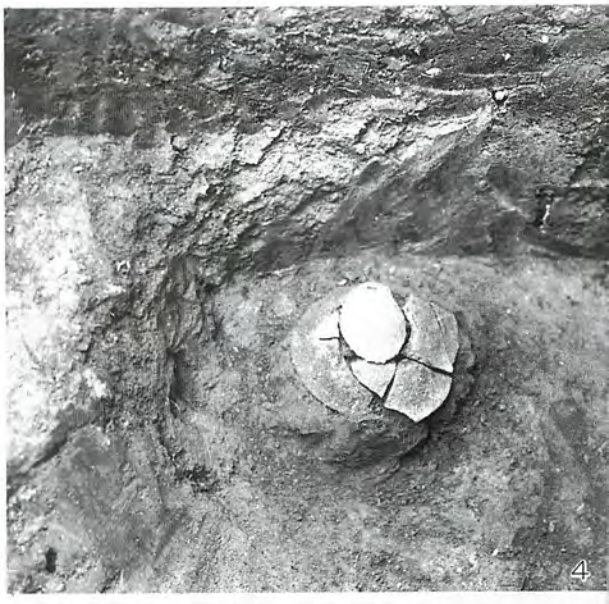
2号墳
1．5号トレンチ西側を見る
（墳丘より）
2．1号トレンチ西側を見る
（墳丘より）
5号トレンチ
3．集石
4．棺材か


1

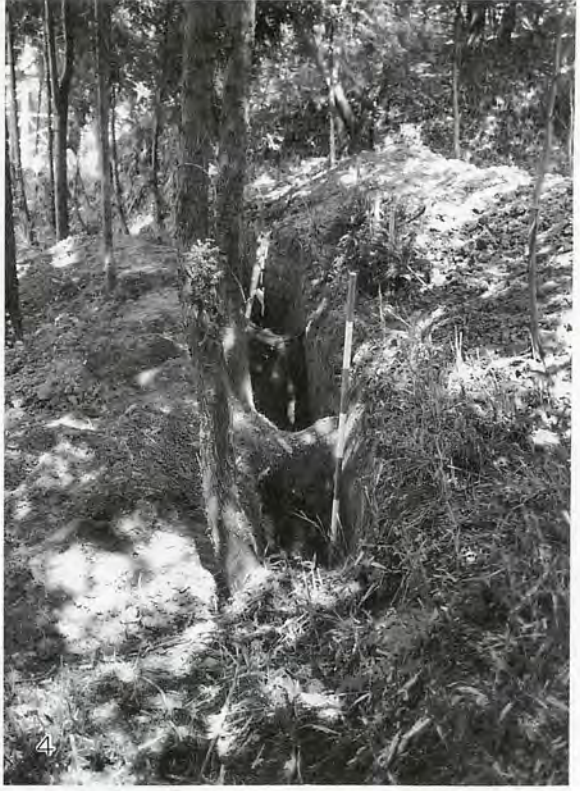

2

5号トレンチ
1．朱壺
2．朱壺をとった後土壙
3．甕のかぶさった状態
4．高坏脚部

3


4

図版 4



3号トレンチ

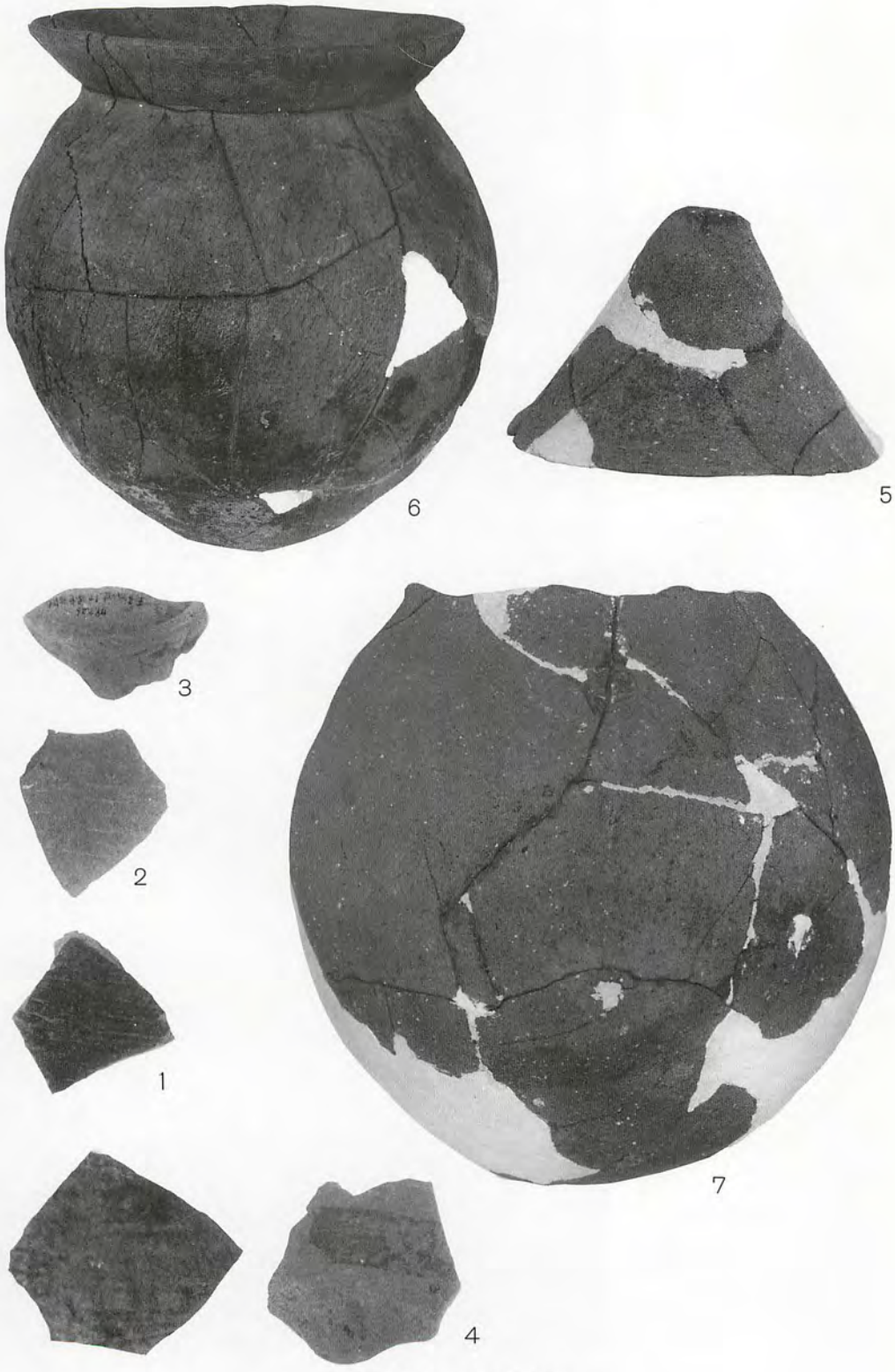
1．北側をみる

2．中央部凹部

3．2号墳　盗掘坑

4．3号墳7トレンチ東側をみる
（墳丘より）

1．3号墳(西側より)
2．4号墳(北側より)
3．5号墳(北側より)



各試掘トレンチ内出土遺物

熊本県文化財調査報告　第88集

下 山 西 遺 跡

昭和62年３月31日

編集　熊 本 県 教 育 委 員 会
〒862 熊本市水前寺６丁目18番１号

印刷　熊 本 県 印 刷 セ ン タ ー
〒860 熊 本 市 清 水 町 高 平 1255

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 88 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：下山西遺跡
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日